

ソロアート・オフライン

I love ?

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

妹の比企谷小町のお陰で大人気VRMMORPG《ソードアート・オンライン》を手に入れられた比企谷八幡はゲームクリアの為今日もアインクラッドを駆ける――

「はあ……働きたくねえ……」

こんなキャラじゃない！ってなるかもしれませんが宜しくお願ひします。

## 目次

今更ながら、こんな設定。	1
ぼーなすとらつく！ 例えば、こんな比企谷八幡の日常。	7
ともあれ、比企谷八幡は平塚静に頭が上がらない。	7
第？章 Extra Quest	
貧乏人は、常に空腹と闘っているのである。	13
何故か、比企谷八幡は東北地方にいる。	19
こうして、彼ら彼女らの聖剣取得の祝いの会が始まる。	42
つまるどころ、彼には運がない。	47
彼のバレンタインは世間一般的にはまちがっていないが彼的にはまちがっている。	55
こうして、彼と彼女の家族は形成された。	71
第1章 Alone road	
こうして、比企谷八幡は仮想世界に旅立つ。	77
信じられずとも、デスゲームは始まる。	85
初めて、比企谷八幡は決意を固める。	90
準備万端に、比企谷八幡は装備を整える。	96
生き残るために、二人はクエストを始める。	101
迷宮区で、比企谷八幡は流れ星を見る。	108
怯えながらも、二人でパンを食べる。	114
会議は始まり、されど邪魔が入る。	120
125 パーティーを組むのは、比企谷八幡にとって最大の試練である。	
いつだって、気づいた時には時すでに遅し。	130

まもなく、ボスとの決戦が始まる。 | 136  
十二月四日に、ボスとプレイヤー達は決戦を始める。 | 142  
ボス戦で、ボッチ三人が奮戦する。 | 149  
やり方を変え、されど比企谷八幡は一人で背負う。 | 155  
世の中には、そう旨い話はないのである。 | 163  
ウルバスにて、比企谷八幡は再び出会う。 | 170  
余計なことに、比企谷八幡は口を滑らせる。 | 177  
汚い手で、比企谷八幡は狩りに臨む。 | 183  
阿修羅には、比企谷八幡のステルスも通用しない。 | 190  
武器は砕け散り、比企谷八幡は覚悟を試す。 | 197  
尾行は、比企谷八幡の十八番である。 | 205  
気づいたことをキリトは話し、三人は議論を交わす。 | 211  
彼らは、崖の上から高みの見物をする。 | 219  
やはり比企谷八幡にとって、アスナは畏怖の対象である。 | 228  
ささやかながら、彼らは二層開通のパーティーをする。 | 234  
空き家にて、彼らは鍛冶屋を監視する。 | 242  
ようやく、比企谷八幡は強化詐欺のトリックに気づく。 | 247  
僅かながら、比企谷八幡は鍛冶屋に報復する。 | 251  
詐欺を暴かれ、鍛冶屋は全てを話す。 | 256  
不本意ながら、比企谷八幡は不名誉な称号を頂戴する。 | 261  
ガラにもなく、比企谷八幡は指揮をする。 | 268  
絶望的に、今までのボスは前座だったことを知る。 | 276  
新たな援軍とともに、彼らは真のボスに挑む。 | 282  
ボス戦は終わり、されど安堵の空気は訪れず。 | 289  
どんなことも、自分への因果応報である。 | 296

下層に降り立ち、比企谷八幡は黒猫達と出会う。

304

その選択によって黒猫団は散り、三人だけが生き残る。

309

モミの木の下で、キリトはサチの思いを知る。

315

三十五層の森にて、比企谷八幡は少女と出会う。

323

三十五層主街区で、二人は赤髪の槍使いに会う。

328

自分の部屋なのに、比企谷八幡は困り果てる。

333

四十七層は、比企谷八幡にとって一番来たくない場所である。

339

このようにして、比企谷八幡はオレンジギルドと相対する。

345

五十層ダンジョンで、危うく比企谷八幡はトレインされかける。

354

五十層主街区アルゲードは、まるで迷路の様な街である。

360

仕事が終わったと思っても、まだまだ仕事は終わらない。

366

こうして比企谷八幡は穴に落ち、フィリアはレッドプレイヤーと  
会合する。

372

落とし穴に落ちて辿り着いた部屋で、比企谷八幡は偽物の自分と戦  
う。

378

レッドプレイヤーと戦ったのも束の間、比企谷八幡は黒い天使とエ  
ンカウントする。

384

納得いかないやり方にキリトは抗議し、比企谷八幡は二人を仲裁す  
る。

392

デュエルの後に、比企谷八幡は攻略の鬼の胸の内を知る。

397

なにもしていないのに、比企谷八幡は性犯罪者扱いされる。

403

真面目な空気から一転、比企谷八幡はこれは間違っていると思っ  
ている。

やはりキリトが聞き込みをするのは、なかなか辛いものがある。

416

いつか、比企谷八幡にも愛せる人がきつと見つかる。

422

武器の鑑定を雑貨屋に頼み、彼らは僅かな手がかりを得る。

428

黒鉄宮の生命の碑は、比企谷八幡にとって感慨深い場所である。

433

二層の再現のように、彼らは議論を重ねる。

440

女子の何気ない行動が男子にトラウマを植え付けると、比企谷八幡  
は今でも思っている。

445

何回目になるか判らない理不尽が、比企谷八幡を襲う。

450

自分が少し変わったことを、比企谷八幡は少し自覚する。

459

やはり底が知れない人物は、比企谷八幡の警戒の対象である。

464

アルゲードの店の食べ物は、大体珍味である。

469

やはり比企谷八幡の無駄な思考は長すぎる。

475

愚かしいと解つていても、比企谷八幡は期待せずにはいられない。

480

やはりリア充は、いつまで経つても比企谷八幡の敵である。

485

半年の歳月を経て、彼ら彼女らは再びの会合を果たす。

490

なすすべもなく、また新たな犠牲者が目の前で生まれる。

495

予期せず、比企谷八幡は殺人者達と二度目の会合を果たす。

時間稼ぎの後に、比企谷八幡は説明を始める。

満を持して、比企谷八幡はかく語りき。

僅かな、しかし確かな矛盾を比企谷八幡は見つける。

誰でも、人は生命と意思を受け継ぎ歩いていくのである。

何故だか、比企谷八幡は会いたくない人物と会ったこともない人物とエンカウトする。

とにかく、人は白熱すると時がいつの間にか過ぎていくように感じる。

いつまでも、比企谷八幡は考え続ける。

謎なことに、比企谷八幡の周りの人間は比企谷八幡のあらぬ噂を流している。

やはり少年の夢は、人の夢と書いて儚いと読むものである。

555 何度も見たことがある扉を、比企谷八幡は開ける。

こうして比企谷八幡はボスを倒し、新たな力を手にする。

きつと、誰しもが大小様々な心の傷を抱えている。

人は馴れないことが多くあり、もちろん比企谷八幡も例外ではない。

とにかく言葉の定義は曖昧で、比企谷八幡でもよくは解らない。

593 比企谷八幡が思う材木座義輝は、妄想のなかでもやっぱりウザい。

606 新たな出会いによって繋がりは増え、同時にトラウマも増える。

昨日の敵は寒さ、今日の敵は暑さという状況に、とある鍛冶屋は苦  
悩している。 | 612

最弱を自称する比企谷八幡でも、油断や慢心は少なくともある。

620

パーティーというものの重さを、比企谷八幡は改めて認識する。

626

かくして、彼と彼女はようやくボスを倒す。 | 631

彼ら彼女らの時間は今この時だけ交錯し、いずれ離れゆく。

637

徐々にその時は迫り、剣と戦闘の世界に不穏な空気が流れる。

648

いつものことながら、比企谷八幡はあらぬ噂を流されている。

653

打算と計算をし、比企谷八幡は会議に臨む。 | 660

極限の状況下で比企谷八幡は黒く染まっていく。 | 667

言いたいことを一言に纏めれば、それは言った人の個性が出るもの  
である。 | 672

人生とは選択の連続であり、大抵が悪い方に転がる。 | 678

取り敢えず、比企谷八幡は考えを先送りにする。 | 684

正反対に、彼は関係を断ち、彼女は関係を紡ごうとする。 | 690

どうにも、三人揃えば無駄な話が多すぎる。 | 698

比企谷八幡にとっての恐怖対象は鬼であり、その本拠地は完全なる  
アウェイである。 | 705

だから、比企谷八幡は。 | 712

比企谷八幡にも、度重なる理不尽を嫌に思う気持ちは人並み以下だ



が確かにある。

おぼろげに、比企谷八幡は彼女らの道を察する。

人を信じることは、比企谷八幡にとってなによりも困難なことである。

未だ彼は自分自身の心に気づかず、まちがい続ける。

彼が求めるものは、未だ彼自身にもわからない。

謂わば、これは彼と彼女らの今昔独白。

それでも、比企谷八幡の基本原理は変わらない。

その部屋に、彼の姿はもうない。

二年の時を経て、ようやく彼は彼女たちのことを少し理解する。

773

いつまでも比企谷八幡は女の子に逆らえない。

これから、彼の最強への挑戦が始まる。

今、比企谷八幡が戦う理由とは。

人と人の見方には、どこか必ず相違がある。

きつと彼と彼女は、今この時もう一度始まる。

自らの心も分からぬまま、彼は厄介事を背負う。

騒がしく戦いは始まり、そして敗れる。

きつと、正反対に見えるものの根底は相似している。

然るに、彼女のことを彼は知らない。

彼がしたことはきつとどこかにつながっている。

久しく会った者すら、胸中を悟る。

ようやく彼の選択は意味を持つ。

ようやく、彼は自分の役割を見つける。

火花は散り、彼も塵となる。

やはり彼の嫌な予感によく当たる。

今更ながら、こんな設定。

比企谷八幡（エイト）

・主人公（基本キリトポジ）

・見た目はゲテモノだが、深く関わればいいやつ。捻くれているところさえも良く思えるようになったら生粋の八幡好きです。

・SAO↓ALO↓GO↓UWと、使用武器は片手剣に一貫されている。理由は自分の速度を殺すことなく、そこそこの威力を出せるから。他の武器も使えないことはないが、両手剣や斧など重量武器を使うことはない。

・妹のためにバイク免許を取るほどのシスコン。

・SAOで、与えられたユニークスキルは消滅剣。装備武器に不可視属性を付与する。要は見えなくする。それなら透明剣とか不可視剣とかって名前でも良くないかと思われるかもしれませんが、消滅剣にした理由は一応あります。

・二つ名はビーター、犠牲、無剣など。一番馴染まれているのは無剣。

・自分の信念を曲げることや人の気持ち理解することができずに、キリトやアスナと気まづくなることもしばしば。

桐ヶ谷??（キリト）

・ヒロイン

・見た目は黒髪ロング。美（微）乳。

・人見知りだが、親しくなった人とは並みに話せる。

・使用武器は八幡と同じく片手剣だが、八幡と違ってパワー重視だったのが二刀流スキルを得て、バ火力になった。二刀流スキルを得てからは八幡とのデュエル勝率は七割勝ち（手数と火力で押し切れるから）。

・SAOで与えられたユニークスキルは二刀流。前述の通りバ火力。

・二つ名は黒の剣士、黒ずくめなど。由来は言わずもがな常に全身真っ黒な装備のため。

・八幡に好意を抱いた理由がペネントの件だと思った読者の方々、違います。間違っただけではないですが、原作アスナのように長い時間をかけて好意が芽生えていきました。

・あ、あと女体化してます。

結城明日奈（アスナ）

・ヒロイン

・見た目は亜麻色の長髪に巨乳と美乳の狭間。

・良いとこの温室育ちゆえのマニユアルに頼りがちな思考があったが、エイトをはじめとするメンバーと接するうちに改善傾向にあるが、先天の気真面目さは美点でも欠点でもある。

・使用武器は細剣。理由はSAO初期に現実離れた武器を使うことを嫌ったから。それから使っているうちに愛着がわき、性に合っていることもあり好き好んで使っている。

・与えられたユニークスキルはないが、磨き上げられたプレイヤースキルからなる剣速は誰もが一番と認めるほど圧倒的であり、弱点部分を的確に突いていく正確さも他の追随を許さない。

・二つ名は攻略の鬼、閃光。

・八幡に好意を抱いた理由は一層攻略後の言葉によるものだが、好意を自覚し始めたのは攻略の鬼が鳴りを潜め始めた辺りから。

・惚れた人に尽くす人そう（作者の感想です）

綾野珪子（シリカ）

・ヒロイン

・言わずもがなロリ。無論貧乳。

・タイムしたフェザードラを現実世界のペットと同じ名前であるピナと名付け、溺愛している。精神的に打たれ弱い点はあるが、芯はしっかりがある。

・使用武器は短剣。理由は体格的に小さい武器が扱いやすかったか

ら。

・攻略組にはレベル、技術ともに及ばないが八幡とダンジョンを攻略することもしばしばあるので、そこそこ強い。敏捷寄りのステータス。

・惚れた理由は原作と大体同じ。

・あ、原作と同じでモア出番組になりそうです。

篠崎里香（リズベット）

・ヒロイン

・見た目は仮想世界ではピンク色の髪、現実世界では茶髪。美乳。

・女子にしては勝気な性格で、積極性もある。戦闘では真っ向からの戦いを好む。

・使用武器は戦鎚。理由は一番鍛冶師っぽい武器だから。

・レベル的には中層プレイヤーの上位だが、技術は拙い。前述の性格も技術が拙い理由の一つ。

・惚れた理由は原作と大体同じ。

・一応八幡の専属鍛冶師です。

竹宮琴音（フィリア）

・ヒロイン

・見た目は茶髪。胸はアスナと同程度。

・性格的には初めて会った相手にはややキツイ（ただの人見知りである）が、慣れると柔和。

・使用武器は短剣の中でもソードブレイカーと呼ばれる代物。理由はなんかトレジャーハンターっぽいから。スキル構成もそっち方面に振られている。

・弱い攻略組くらいには強く、技術もソロでトレジャーハントしていた相応にある。真っ向勝負よりかは奇襲や搦め手が好きであり、戦闘スタイルが八幡に似ているため、そのことについて話し合うこともある。

・惚れた理由は本編を参照。

・キャラを出しすぎて中々出番がないキャラの一人。

### 枳殻虹架（レイン）

・ヒロイン  
・仮想世界では赤髪、現実世界では灰色に近い色の髪。全体的にスレンダー。

・性格は温厚かつおおらか。

・使用武器は片手剣。理由は特にない。

・レベルこそ攻略組には及ばないが、技術はトッププレイヤー並み。

スキル構成はゴリゴリの戦闘系。

・まだ完全には惚れていない。

・キャラを出しすぎて中々出番がないキャラその二。

### ユイ

・原作とほぼ同じ。

### 壺井遼太郎（クライン）

・風林火山のリーダー。悪友ポジ。以上。

### アンドリユー・ギルバード・ミルズ（エギル）

・奥さん持ちのリア充。斧使いの筋肉。以上。

### 桐ヶ谷直葉（リーファ）

・ヒロイン（予定）

・キリトの従姉妹。

・見た目は現実世界では黒髪パツツン、仮想世界では金髪。巨乳（迫真）

・性格は活発。空を飛ぶことがとても好き。

・幼い頃から磨いてきた剣の腕は随一。だが、熱くなりやすい性格ゆえに八幡やキリトとのデュエルは負け越している。

・原作遵守しているつもり作者にとつて、最も扱いにくくなるこ

とが予想されるキャラ。ALO編でどうやって惚れさせるか全く思いついていませぬ。

朝田詩乃（シノン）

・ヒロイン

・見た目は現実世界では黒髪、仮想世界では水色。美乳。

・性格はキツイところが多いが、それは脆い面を見せるところを嫌うためでもある（要はクーデレ）。

・遠距離武器を持たせれば恐るべき命中率を叩き出す。反対に近距離戦は得意とは言えないが、ボス相手に単体で2分弱くらいは持ちこたえられるため、苦手でもない。慣れの問題。

・前述の通りクーデレなため、他ヒロインのようにデレデレになることは稀。そのレア度は雪ノ下雪乃のデレ並み。

紺野木綿季（ユウキ）

・ヒロイン

・髪は紫がかった黒。仮想世界と現実世界では髪の長さだけが違う。微乳。

・強い。とにかく強い。剣を2本使っていない八幡とキリトでは九割がた勝てない。

・八幡と同じくスピード型の剣士ではあるが、圧倒的な戦闘センスでキリト並みの火力を叩き出す。特にオリジナルソードスキルであるマザーズ・ロザリオは、単一でスキルコネクトに匹敵する威力がある。アスナは扱いきれていない模様。

・性格は朗らかかつ明るい。これは病気で死を覚悟した時に躊躇するのが勿体無いと考え、積極的に人と関わろうとしているためである。

・現在は病気は根治していないものの、月一度の通院で無菌室にいらなくても大丈夫までには快復した。身寄りがない彼女は現在八幡宅に在住。

アリス・ツィベルク（アリス・シンセシス・サーテイ）

・ヒロイン

・金髪の長髪。美乳。

・整合騎士でも3本の指に入る強さ。心意がない純粹な剣技だけで言ったら八幡やキリトより一枚上手。身体は女性らしく細かいが、剣の一振りを完全に受け止めることは八幡には出来ない。戦闘になると重量のある鎧の重さを感じさせない機敏な動きをする。

・性格は合理的で冷静だったが、人の心に触れるうちに変わっていく。

・使用武器は金木犀の剣。圧倒的なスタッツを誇る。

・アンダーワールドでの戦いを終えた後は現実世界の八幡宅に居候（なんでリアルワールドにいるのかや、戸籍の問題などは本編で書きます）。アンダーワールドでの2年間に加え、現実世界でも八幡と一つ屋根の下なので他ヒロインの嫉妬を買うこともしばしば。



ぼーなすとらつく！ 例えば、こんな比企谷八幡の日常。

ともあれ、比企谷八幡は平塚静に頭が上がらない。

夏休みの平和な昼下がり。独り暮らしのアパートにスマホの着信音が鳴り響く。スマホ画面を見ると、平塚先生から電話が来たことが窺える。

『比企谷。ちよつと総武高に來い。可能なら高校の制服でな』

「……はこ？」

……唐突すぎる。

突然の召集命令だが、俺は基本平塚先生に逆らえないのだ。高校時代は暴力的な意味だったが、今は恩義的な意味で。

S A O 事件から帰ってきて、一年の遅れは消せなかったものの、平塚先生の懇願がなかったら大学に行くまで、四年も遅れていたのだ。その恩は大きい。結婚申し込まれたら O K しちゃうまでである。誰か、本当に早く貰ったげて！

まあ、夏休み中だし、久しぶりに愛しの千葉に行くのも吝かじゃないし、久しぶりに千葉県のラーメン食いたいし、それはいいのだ。まあラーメン店くらい東京にもあるけど。

「……なんでお前らまで呼ばれてんの？」

「反応遅くないッ!？」

「こつちが聞きたいくらいなのだけれど……」

俺と同じ総武高の制服に身を包んだ雪ノ下と由比ヶ浜が、俺と同じ

く放置されている。いや、来た理由が俺と同じか知らんけど。

「お、三人揃ってるな」

俺がこの生徒だった頃に比べ、平塚先生は若干よれよれになった白衣以外特に変わりはない。バツカーノ！ してきちやっただろうか。平塚先生酔っ払ったら本当に馬鹿騒ぎしそうで怖い。

「先生、これは……」

「ん？ ああ、説明はちゃんとするさ。付いて来るといい」

雪ノ下の問いをバツサリ切り、バサツと白衣を翻し、さっさと歩いていってしまう。ちなみに韻踏んでます。

「ひ、ヒツキー？ なんで胸押さえてるの？」

「……気にすんな」

ちよつと白いものが翻ると、閃光トラウマの突きを思い出しちやうだけだから気にしないで……。あれマジでレーザー。

「何をやっているのかしら、この男は……」

「うっせ。そもそもお前は押さえる胸もね……」

久しぶりに会うからか、言い返しのさじ加減が判らん。が、今は失言だと断定できる。フツ、比企谷八幡はクールに去るぜ。

「待ちなさい」

たった五文字の言葉に俺は震え上がり足を止める。……何？ お前威光のギフトでも持つてんの？

二年前より背が数センチ高くなった俺を睨む。はちまんのぼうぎよりよくがさがった！

「そもそも胸というのは体の部位を指すものであり比べるものではないの言ってしまうば脂肪なのよ使うときといつたら授乳するときくらいなのだけれど私には関係ないしそもそも大きければいいというものでもないでしょう肩凝りの原因になったり服のサイズが合わなくなったり一概にいいとは言えないのよだから……ケホツケホツ」

「……はあ。ほれ、水やる」

「……結構よ。自分のがあるもの」

捲し立てて喋りまくったせいで噎せた雪ノ下に親切に水をやろうかと思ったのに断られ、制服に合わせてなのか、学校指定のバッグか

ら水色の水筒が出てくる。なんかなんでも入ってそうで怖いな。なんとかしてよ、ユキえもくん！

「それにしても、ヒツキーマジでキモい！ 女の子に胸の話するとか……」

「おいキモいとか言うのマジやめろ。最近耐性ないから泣いちゃうだろーが」

「うんうん、仲良きことは美しきかな。だが時間がないから早くいこうぞ」

カツカツと音を鳴らし、体育館方面に歩いていく平塚先生。……これは、ろくなことがないな。俺の予サイドエフェクト感がそう言ってる。

「ここで待っていてくれたまえ」

「はあ……」

体育館の隅っこのパイプ椅子に座らされ、マジで現状がわからんなにこれ、学校見学ツアー？ 一応俺達卒業生ですよ？

「……なあ、なんで呼ばれたのかお前ら知ってる？ しかも制服で」

「あたしはなんも知らないよ。ただ来てくれっつて平塚先生に電話されただけだし。ゆきのんは？」

「私も詳しい話は聞いていないわ。まあ、付いていけば分かると言っているのだし、ここは大人しく付いていきましよう」

「俺が言うのもなんだが、お前らよく来たな」

台所のゴキブリホイホイに掛かっちゃうゴキブリ並みにチョロい。いや、ゴキブリチョロいか知らんけど。家で見たことないし。マイエンジェル小町の掃除をなめちやいかんぜよ！

「私はこう見えて負けず嫌いな。依頼をすべて消化しないで奉仕部

としての活動を終えるなんて、私自身が許さないわ」

……見たまんま負けず嫌いだ、お前は。もうその鋭い目からしてにらめっこじゃ負けません！ って言ってるようなものだから。恐怖で笑わせるタイプな。

「いや、負けず嫌いとは今回の件を受けんの、なんか関係あんの？」

「あ、それあたしも聞きたい」

俺だけが訊いたら「は？ 自分で考えたら？ (ツンデレではない)」みたいな顔してたのに、由比ヶ浜が同意したとたんに「仕方ないわね……べ、別にあんたのためじゃないんだからねッ！ (ツンデレ)」の顔をした。二年経った今でも、ゆるゆりは健在です。

「由比ヶ浜さんは知らなくて当然でしょうけど、比企谷くん。あなた取り柄は記憶力だけなのでしよう？ 仮にも奉仕部に入るきつかけにもなった依頼なのだけれど」

「なんだ雪ノ下、今日は今までで一番優しいな。お前が俺の長所を出すなんて。それともなに、その長所ですらお前に及ばないという超高度な皮肉？」

「いいえ、あなたのメンタルを挽き肉にするための皮肉よ」

「怖えよお前。これ以上俺の精神ズタズタにしてどうすんの？ お前使徒かよ」

俺二号機乗ってないよ？ A.T. フィールドは常に全開だけど。こいつの場合後光で俺を浄化しそう。しかし嘗めてはいけない。俺の眼の汚れは水垢並みに取れにくいのだ。

「何を言ってるのかしらあなたは……」

「ちよ、ゆきのん！ 話ずれてるずれてる！」

俺と雪ノ下のお互いノーコンの言葉のキャッチボールを由比ヶ浜が巧く軌道修正する。なんなら星の軌道も変えられちゃうレベル。

「……ああ、なぜ負けず嫌いとのことにいる件が関係あるのか、という話だったわね」

「そうそう」

由比ヶ浜がヘッドバンキングばりに頭をブンブン振る。そんな頭振ったら脳味噌シエイクされんぞ。

「そうね……。まずその男はふざけた作文を書いて、平塚先生に強制入部されたのよ」

「おい待て。断じて俺はふざけてない。俺の考えが独特すぎて理解されなかっただけだ。言うなれば俺は信長だぞ、信長」

「あなたが信長と共通していることと言えば、裏切られることだけでしよう？」

「クツ、なにも言い返せねえ……」

「ちよ、二人とも、またずれてるって！ 話がヒツキーが入部した理由しかまだ話されてないよ!?!」

「あら、話を逸らすのが上手いわね、逸らし谷くん？」

「なにそのなんでも物事を曲解して認識しそうな名前。あながち間違いないだけに否定できなかったんだけど」

ちなみに過去形なのが味噌だ。今はもう勘違いはしない。ぼっち三原則は今でも胸に刻まれている。

「さて、続きを話すと……」

華麗にスルーされた。まあこいついつかの体育祭でも空気投げしてたしな。さすがは無視ノ下さんだ。

「簡単に言ってしまうえば、入部する際に先生にこの男の調きよ……人格矯正を依頼されたのよ」

今調教って言った？ 今調教って言った？ え、あの部屋は動物園かなにかなの？ それとも水族館？ 水族館は魚の調教はしないよ？ 多分。

「ほええく……。でもその依頼って達成したの？」

「あら、愚問ね、由比ヶ浜さん。そのためにわざわざここまで来たのよ？ 比企谷くんを調きよ……矯正するために」

……いや、もう言い直さなくていいけどね？ ……待て、それだと俺が嗜虐されるのを好むドMみたいだな……。

というか、超ポジティブに考えたら「俺のためにわざわざ来てくれるなんて……感激ッ！」って捉えられるけど、まあ当然、純粋に依頼完遂しないと気が済まんだけだろうな。……こいつ完璧主義者だし。

「……依頼と言えば、俺がいない間に他になんかあったのか？」

「あ、あく……まあ、色々？」

「超曖昧な上になんで疑問系？ いや、別に教えたくないなら無理する必要もないけど」

「いや、そういう訳じゃない、けど……」

「まあ色々であったのよ、色々、ね……」

「お、おう……」

なんか逆に気になるんだけど……。まあ哀愁漂う雰囲気を感じる限り、この話題は避けよう。ちゃんと空気を読める俺、超紳士。

……なんか今日、超言い過ぎじゃね？ そのうち窒素操れそう。

そんなアホな思考は、数秒後停止する。

「え？ え？ え？ どういうこと？」

俺が聞きたい。……なんで、夏休みなのに……総武高の全校生徒が体育館に入ってくるのん？

## 第?章 Extra Quest

貧乏人は、常に空腹と闘っているのである。

男子会。

その言葉を聞き、どんなものだと考えるだろうか？ 飲み会？ 淫語が入り乱れる汚らわしい会？ 男がくんずほぐれつしている会とか思った奴は腐女子です、気を付けましょう。男子（物理的に）もそう思った女子（精神的に）も。いや、俺も男子会の定義なんか知らないけどね？

さて、なぜそんなことを言ったのかと言うと……

「おい、エイトよお。おめえさん、彼女はいねえのか？」

「クライン、少し飲みすぎじゃないか？」

……まあ、こういうことだ。

2026年2月8日日曜日午後十時。昼間は喫茶店、夜は酒場のダイシーカフェにて、俺史、人生初の男子会である。

もちろん今年で二十二歳の俺も飲酒は可能だが、俺は酒にめっぼう弱い上に酒癖も悪い。酒癖が悪いと言ってもいわゆる酒乱ではなく、女と見たらすぐに口説きに行ってしまうらしい。マジチャライなもの……。俺は神にーさまじやないんだよ。拘置場送りになるエンディングが見えた！ 人生バッドエンドだ！

あれは確か、エクスキャリバーを獲った辺りのことだ。成人式をS A O事件のせいで迎えられなかったため、初めて飲んだ酒（ただのビール）で見事に泥酔。へべれけ状態の俺を面白がってビデオカメラでエギルが撮影した映像には……

「お、おい、エイト。急に頭を抱えてどうしたんだ？」

「……いや、別に。永久保存版の黒歴史撮影されて、この先どうやって生きてこつかなー、って思ったただけだ」

しかもこのハゲ、俺の口説き文句だけ音声で切り取ってキリト達に配布しやがった。これで俺の社会的尊厳はこいつらに握られてることになる。やめろよ。ネットにアップとかしたら、俺と声が似てるG

OSOCKの久〇とか俺〇語の剛〇とかの声優さんが迷惑被るでしょうが。やめてよお、江口〇也さんのことをエロタクとか言うのやめたげてよお！

「あー、もうだめだ……」

酩酊状態のクラインがダウンしかけている。明日は二日酔い決定だな。

MAXコーヒー（つぽいもの）を啜りながら、結局男子会ってなんなんだ？ と男子会の定義を考える。

「おい、エイトよお。おめえさんも飲めよほらほら」

「いや、いい。これ以上黒歴史ができればマジで仮想世界に生きちやう自信がある」

絡み酒だ。上司にやられると対応に困るウザい行動トップスリーだな（個人的に）。……まあ、上司なんかいないが。

助けるハゲ！ と心中で悪態を吐き、助けを求める……とは言えないほど（多分）鋭い睨みをする。

その負の念（腐の念ではない、決して）が通じたのかは判らないが、話題転換の質問をしてきた。

「そういえばエイト。お前さん、GGOで確か……《スクワッド・ジャム》とか言うのに出たそうだが、どうだったんだ？」

「しようだぞ、きやわいきよひゃんはいたのか？」

もう呂律回ってねえじゃねえか。寝ろよ、クライン。そして起きたら二日酔いで悶絶しろよ。

「……ひたすら弾丸斬ってたな。バレット・ラインが全身に照準された時は、マジ本当に本気で真剣に死ぬかと思った……」

「んな話はいいいから、女子はいたのか教えてくれよう！」

呂律戻ってんじゃねえかよ。ガンゲイル・オンラインみたいなガンゲーは、そもそも女子が少ないって知らないのか、コイツ？

「あのな、ガンゲーはそもそも女子は少ないんだよ……まあ、いたけど」

「いたのかよ……」

おい、禿頭ハゲ。その頭を抱えて「しようがない奴だ……」みたい



な顔をやめろ。俺なんもしてねーよ。

「おおっ！ マジで？ リアルの情報ないの？」

あるわけねえだろ……なんかちっちゃいことに喜んでる節があったから、リアルでは身長がでかくてコンプレックスなのかなー、って思ってたくらいだ。

「……にしても、よく女子とパーティーなんか組んだな。知り合いだったのか？」

「いや。朝田の知り合い……ってほどでもないか。まあ、めんどいから朝田の知り合いってことにするとだな、朝田の知り合いの知り合いがスクワッド・ジヤムに参加しようとしてたらしいから、俺も入れてもらっただけだ」

いやー、さすが氷の狙撃者、人脈が広いな。なんて言ったら皮肉に聞こえたのか、ヘカート向けられたけど……。アンチ・マテリアル・ライフルを人に向けんなよ、上半身と下半身がサヨナラしちゃうだろ。

「どーせそのシノンの知り合いってのも女なんだろう？ このリア充が！」

「……クライン、相当酔ってるな？ 確かに知り合いは女だったが、俺はリア充じゃないし……」

「……どうした？」

歯切れ悪く言葉を切った俺を訝しく思ったのか、エギルが訊ねてくる。

「ああ……その知り合いのプレイヤー名は確か『ピトフーイ』って言うんだが、そいつ、多分SAO<sup>サブバイパー</sup>生還者……そうでなくてもSAOに何らかの関わりがあったはずだと思う」

「……なに？」

「……マジかよ……」

驚いた顔をするエギルとクラインだが、さすがにそれだからどうこうするなんてことはしないだろうし、する権利もない。その女が《<sup>殺</sup>ラフィン・<sup>ギ</sup>コフィン<sup>ド</sup>》所属じゃなかったら、な。

リアルでもピトフーイと知り合いらしいエム曰く、殺すと決めたら

リアルでもゲームでも関係なく殺す、らしい。そんなことをする奴はラフィン・コフィンくらいしか俺は会ったことがない。まあ、だからと言って決めつけるのは早期過ぎるだろうが、心に留めておくくらいはした方がいいだろう。

「ま、確証はないし、だからどうこうって訳でもないがな。……それよ、これからまた連日ダイブするから、また顔出せなくなるわ」

「おいおい。その女の子とまたパーティー組むつもりじゃねえだろうな」

ガツチリヘッドロックをされて首が絞まるが、衰えた筋肉じゃ抜け出せない。酸素の供給が途絶え、息がががが……

「クライン、そろそろ止めてやれ。エイトの顔が本格的に青くなってきてる」

首が解放され、酸素が全身に行き渡る……仮想世界と同じノリで首絞めんじゃねえよ、死んじやうところだったろうが。

「しっかしエイトも有名になったな。SAOでは《英雄の無剣エイト》、ALOでは絶剣と並ぶ《無剣》、GGOでは第三回Bobと第一回SJ優勝者とはよお」

「……全部たまたま名付けられただけだけどな。SAOでは致し方なくだし、ALOではあのバカが吹聴したようなもんだし、GGOはやっぱりBobはバイトで仕方なくだし、SJはやらなきや餓死してただろうしな……」

そしてPK返しをするためにまた連日フルダイブしなくちやならんのか……いや、でもさ？ 小町の声で頼まれたら断れないだろ？

「お、おう。お前さんも大変なんだな。でもいいのか？ ここで飲食して」

「ああ、クラインの奢りだからな」

「ええ！ 俺そんなこと言ってるぞーぞー！」

「昨日」

「えっ？ ……あっ」

そう。昨日……つまり七日に俺達は賭けをしてデュエルをした。賭けの内容は『負けた方が勝った方に飯を奢る』、というものだった。

結果は俺の圧勝。脳筋スキル構成のクラインは魔法……つまり遠距離攻撃方法を持たないため、速度が速いか追尾型の投射型遠距離魔法をバンバン射ったら敢えなく撃沈。俺は魔法と剣技の割合が五対五の謂わば魔剣士のため、よく言えば万能型だ。オールラウンダー

「い、いや、おりやあだな、あくまでALOの中での話として提案したのであってだな……」

「それをちゃんと伝えなかったお前が悪い。というわけでエギル、金の心配はない」

さて、どうせならいつもは高くて手が出せないもの……タンパク質だな。

「んじゃエギル。俺ステー……」それだけはやめてくれええええつ  
！」

一応他の客がいることも忘れて叫んだクラインバカは酒場店主のエギルに沈められ、横でカウンターにうつ伏せになって寝て……いや、気絶している。

「……それにしても、厄介事の種を持つてくるな……まあ、今は気にする必要はないんだろ？」

「ああ、まあな。むしろ大変なのは明日からの連日フルダイブだな……」

ああ、また銃弾を斬らなきゃいけないのかよ。キ○ジ君とかにやらせとけよ……バレット・ラインが照準されんの下手な絶叫マシンよりも怖いんだけど。

「はは、まあお前が助けた少女のためだからな。精々頑張ってこい」  
野太い声で言うと、俺よりも一回りくらいデカイ拳を突き出してく

る。

「……別になんもしてないけど、精々頑張らせてもらいますよ」

そして俺も拳を突き出し、エギルの武骨なグーにグーを当て、そのまま上着を羽織り、マフラーを着用し、店を出る。

……とは言っても、生活ギリギリだから、現実こっちに戻ってきたときの空腹感がマジ辛い。結論から言っちゃうと、親父、もう少し仕送りを増やして……

何故か、比企谷八幡は東北地方にいる。

東北地方。

青森、岩手、秋田、宮城、福島、山形の六県からなる地方で、日本では北海道に次ぐ寒さを誇る地方である。別名奥羽地方とも。

冬至も過ぎ去り、新春明けましておめでとうも済ませた後のある日、俺は東北を訪れていた。

「さ、さみい……」

「……当たり前でしょ。なんでそんな軽装備なのよ」

独り言のつもりで言ったのだが、刺々しい反応が返ってくる。や、俺千葉県民か東京都民だったことしかねえし……。

「っーか、なんでお前の帰郷に俺まで着いてこなきやいかんだ、朝田」

「むっ、それは悪いけど、祖父母に帰郷する理由を訊かれたときにうっかり口を滑らせてあんたのことを話したら、連れてきてっせがまれたんだから……」

「……なんでや……」

朝田のじっちゃんとかぼっちゃん、なんで俺まで呼んだんや……。や、それで着いてきちゃう俺も俺かもしれないが、せめてもうちよい説明があってもよかつたんじゃないやねーんですかね？ 朝田さん。

「さ、いいから行くわよ」

くいくいと袖を引かれ、半ば無理矢理に引つ張られる。ちよ、やめて！ 引つ張られてできた隙間から風が入ってきて寒いから！

ウイーンガツシャツン、ウイーンガツシャツンと電車で揺られること一時間数十分。……いや、ウイーンガツシャツン、ウイーンガツシャツンはモバイルスーツだな。まあ、何はともあれ木造建築のやや大きめな一軒家に着く。ここが朝田の生家なのだろう。

見ると、深呼吸をして真つ白な息を吐いている朝田がいた。無理もないのかもしれない。朝田の人生を大きく変えたあの事件から数年が経ったとはいえ、未だその傷跡は完全には癒えていない。

朝田はPTSD<sup>トラウマ</sup>を発症し、朝田の母親は幼児退行。それを見て、朝田の祖父母はなにを思ったのだろうか。俺には推し量ることのできないくらいの苦労と苦しみがあったはずなのだ。

目を開いて、決心したように古びた旧式のインターホンを押す。意外にも押すときは結構あっさりだったが、押した後息荒すぎだろ……。こっちまで緊張しちゃうからやめて！ ただでさえ人見知りなのよ！

「……過呼吸になんぞ」「うっ、うっさいわね！ 久しぶりなんだから緊張するに決まってるでしょ！」

いや、そうだけどね？ 俺は初めてお前の祖父母に会うのであつて、君が余裕を持ってくれないとどうしようもないんだよ。ていう

か、本当になぜ俺まで？

「はー……い」

……若干の言い争いの時、  
会ファーストコンタクト合。最悪や……。

「取り敢えず、上がったらどう？ 詩乃ちゃん」

「え、あ……うん」

早速気まぎれな雰囲気を出す朝田の背中を軽くどつき、段差がある玄関から家のなかに入るように催促する。だが、地面に根でも下ろしたかのように動かない。

違うだろ？ このお祖母さんはお前に対して気まぎれな気持ちは確かにあるが、お前に嫌悪感を抱いてない。むしろ歓迎している。なら、言うことは一つのはずだ。

「……違うだろ。お前は家に帰ってきたんじゃないのか」

「え、あ……でも……」

普段は気が強いくせに、肝心なときは小心者だな、こいつ。さすがに俺が先に入るわけにもいくまい。いや、入ってはいけけないのだ、こいつが最初に言葉をかけ、帰らなくてはならない。言うべきことはわかっているはずなのだ。

玄関の扉を開けたままで寒いはずなのに、嫌な顔せずにごにこ笑っている朝田の祖母もその言葉を待っている。

「そ、その……た、ただいま」

「——おかえりなさい、詩乃ちゃん」

日常的に出てくる何てことないモノ。それを聞いた瞬間、朝田は……朝田の頬を伝った一粒の滴は、俺の見間違いだな。

「朝田葉です、よろしく」

「あ、はあ、よろしくお願いします……」

さすがに六十を越えた人に勘違いすることはないが、それでも純粹な笑顔を向けられることに抵抗というより違和感を感じてしまう。

それにしても、『詩』乃に『葉』か……。もしかしたら朝田家は文系一家なのかもしれない。理系だったら早くも心が折れていただろう。いや、朝田家が文系一家か知らんが。

ペたペたとたいして長くもない木造の廊下を歩きながら下らないことを考える。無愛想すぎる返事にも温厚で優しげな笑顔を崩さず、むしろ人付き合いが得意ではないと察したのか、あれ以降は話しかけてこない。これが年の功という奴なのだろうか。

東京や千葉の都会ではあまり見ない——というか、俺はキリトの家以外で見たことのない——正面からみたら漢字の目みたいな形になっているスライドドアを開け、居間に葉さんが入っていく。俺たちも続く。

円卓の炬燵に俺がよく見るものより遥かにでかいストーブ、その他はテレビ、炊飯器、冷蔵庫など関東でもよく見るものばかりだ。まあ、一般住宅なのだから当たり前なのだが。

そして円卓の向こう側に、とても朝田の祖父とは思えないほど若々



しい老翁が座していた。

どっかの亀の仙人や食の魔王、獣人種ワイルドのおっさんのように筋骨隆々としてゐるわけではない。むしろ細身だが、しっかりとした筋肉がついている。

そしてなにより——目が鋭い。

立ち尽くしている俺に気を遣ってか、栞さんが老人と称するには若く見えすぎる男性の紹介をする。

「ああ、彼の名前は朝田誠で、退職する前は警察官をしていたのよ」

あ、はちまんなつとく！　なんで会ったばかりで苦手意識があんのかなーって思ってたら警察の方でしたか！　警察に目のせいで補導された過去が……。

「……まあ、座ってくれ……」

荘厳な声にはなんの強制力もないというのに、気づいたら言葉に従って座ってしまう。言霊の存在を本当に信じてしまいそうだ……。

取り敢えず、着席。

「……さて……」

今から裁かれるような雰囲気を感じ、早速逃げ出したい。何回でも心の中で言うよ？　俺なんでここに居んの？

「……君が詩乃とお付き合っている、比企谷八幡くんかい？」

時が止まった。それはもうザ・ワールド並みに。いや待て、そういう意味で言ったんじゃないのかもしれない。すぐにそういう風に捉えるのはモテない男子の悪い癖だ。

「あの……それは親交があるか、ということですよ」

「いや？　男女関係にあるのか、ということだが？」

絶句である。そーっと朝田を見遣れば朝田もこちらを向いている。フツ、と溜め息を吐いて誠さんに向き直ると、何が気に入らなかつたのか朝田の肘打ちがあらにヒットした。痛い！　なんか知らんがごめんなさい！

「い、いや、あのですね、俺……僕と朝田さんはそういう関係ではないのですが……」

「……何？　……栞、どういうことだ？」

「あら？　詩乃ちゃんとたまに電話したら、比企谷くんのことを嬉しそうに話してたから……」

「私が話してるのは、こいつだけじゃなく友達のことでしょうが……」  
あら、どこかで見たようなポーズ……うん、気持ち悪いな。ちよつとスーパーマーケットで特売品を見つけたおばちゃんをイメージするもんじやないぜ……。あれだ、雪ノ下が額に手をやるときに似てるな。さすが氷の女王と氷の狙撃手だ。

「まあまあ、いずれそういう関係になるかもしれないでしょ？」

「いや、ないと思います」

「……ないわよ」

「……間があつたな」

誠さんに特に意識したわけではない間があつたことを指摘されたのが恥ずかしかつたのか、違うのに勘違いされたのに怒つたのか朝田は顔を赤らめた。

「ふむ……、済まなかつたね比企谷君。こちらの勘違いで遙々東北まで来てもらつてしまつて」

「……いや、いいつすよ。東北のラーメン旨かつたですし」

「ああ、確かにあれは美味しかつたけど眼鏡が曇るのよね……」

「でも詩乃ちゃん今眼鏡掛けてないわよ？」

「邪魔だから取つたのよ」

あらそう、と軽めに言う栞さんとは反対に、俺は気分が重かつた。二人が俺を朝田の恋人だと勘違いして呼んだのは解つた。が、実際には俺は恋人などではない。つまり、この家に於いて俺は部外者だ。

はてさて、呼んだのは向こうとはいえ、俺はこのまま居ていいものなのか。さすがに東北まで来て、目的を数十分で果たしたから東京にとんぼ返りはしたくない。というか、そうなつたら新幹線代を払つて欲しい。……言わないけど。

「……比企谷君。いや、八幡君と呼んでもいいかな？」

「え、あ、はい。好きに呼んでもらつて結構です」

「そうか。八幡君、まず此方の勘違いで遙々東北まで来てもらつてすまない。どうか、謝罪させて欲しい」

そう言い、座ったまま深々と頭を下げる。……いやー、謝ってはほしかったけど謝られたら謝られたでちよつとなんかもつとこつちが心苦しくなるんですけど……。実際大学生なんて暇だしな。

「……いや、別に平気です。どうせやることなくゲームやってただけだと思うんで」

「ホントよね」

茶々を入れんな。いや、確かについて先日までエクスキヤリバー、ゲットだぜ！とか思ってたけれども。これで俺が金髪で風王結界使えたら完璧だな、アホ毛も生えとるし。いや、冗談だけだな。そもそも性別違うし。

「……そうか。お詫びに、と言っては物足りないが、どうか寛いでくれ」

「あー……はい」

懇意にしてくれるのは有り難いが、寛げるわけない。いつものアパートなら今頃テレビ見てるかラノベ読んでるかゲームしてるか寝ているのだが、つつい居住まいを正してしまう。

「時に八幡君。君は武道を嗜んでいるかね？」

「いや……」

「いかにぞ、日本男児たるもの何かしらやってない」と

いや、誰かと戦う予定はありませんし、警察官や自衛隊になる予定もないです。提督にはなってるけど。いやー、普通のネットゲも捨てたもんじゃない。

「……剣ならスゴいわよ。十メートルからの対戦車用狙撃銃の弾をぶった斬るくらいだから」

「あらあら、アンチマテリアル・スナイパーライフルって何かしら？」

「あー……別名、対戦車用狙撃銃と言って、その名の通り戦車を撃破するためのものです」

俺も銃にそこまで詳しいわけではない。中二時代に調べたのは、こういうリアル系な武器ではなくファンタジー系が多かった。だから説明にすらなっていない説明を言ってしまったのだが、葉さんは柔和に微笑む。

「そんなものを斬れるなんて八幡君はすごいわねえ」

……ゲームの中だけですからね？ リアルでは斬れませんよ？  
天然系、恐ろしいでエ……。ていうか朝田、ゲームの中だけってことを補足しろ。誠さんが訝しげに見てるだろーが。

「あの一、そういうゲームがあるんです。仮想世界に入って戦うやつで……」

「ああ、聞いたことがあるわ。VRなんちゃらよね？」

俺は首肯する。

たかだかゲームの話だろ？ と言われたらそれまでだが、あながち馬鹿にもできないのだ。なぜなら、自衛隊ですら仮想現実世界での訓練が検討されているのだから。

やはり時代が違うので受け入れられないのか、重々しい沈黙を保っていた誠さんが顔をあげる。

「……八幡君、唐突な頼みで申し訳ないが、私と試合ってくれないか？」

何回かキリトの家でも桐ヶ谷やキリトと剣道（ルールなし）をしたことはある。だが、礼儀を重んじ心を大事にするであろう誠さんと武道をやっているのか、いささか疑問だった。

「あの……俺、剣道の礼儀とか所作とかルールとか知らないんですけど……」

「む、そうか……。いや、手前が君の剣の腕を見たいだけだからルールは気にしなくていい」

あ、それはありがたいですけど、それは最早剣道と言うんですかね？

「はあ……まあ、それならなんとか」

「そうか……。栞、始めてくれ」

「はあ〜い」

よお〜い、始めっ！ と少々間の抜けた声で試合が始まる。さて、どう試合を進めたものか。

ゲームとは違い、これはあくまで俺の『剣の腕』を見るための戦い。竹刀を振るつてのミスディレクションで注意を引き付け、掌底を腹に叩き込むなど、体術との複合技は出来ない。当然だが投剣も出来ない。

……。

……。

……。

……えー、俺の戦い方全否定じゃないですかー？

誠さんは剣道で言う中段の構えで静止している。どうやら俺の出方を見るらしい。

どないしよか……。

取り敢えず、いつもの構えをとる。

竹刀が床と平行になるように右手で握って前に突きだし、左手はパーの形で右手とは反対に後ろに位置させる。足は両手に倣う。

キリトと俺の構えは似ているが、あいつは地面すれすれに剣を構えるのに対し、俺は肩の高さまで上げて地面と平行に構える。まあ、凄いです。しかもこの構え、後ろにある左手に投擲武器を持って相手が前にある剣に注目している不意を突いて先手をとる構えなのだ。

遅蒔きながらこの構えに意味がないことに気づき、普通に構えることにした。

とんとん、と軽く足踏みをして体の調子確かめる。ほう、悪くない……。

某人類最強の兵長風に心中で呟き、一步一步ゆったりと近づいてい

く。

開幕の号砲は、俺の水平斬りだった。

危なげなく捌かれ、正中線を狙って頭上から襲いかかってきた竹刀を両手で握った竹刀で受け止める。重い。とても還暦を迎えている人の力ではない。

「ほお……」

一旦距離を取って仕切り直す。

この人、基本に超忠実だ。一つの事を追求し、極める。正に武人。

「……ッ！」

無言の気合いの声とともに手加減手心情け容赦なしに全力で竹刀を振るい、誠さんに痛烈な一撃を喰らわさんとする。

またしても、弾かれた。

そうか。俺の戦闘スタイルが限定されているだけじゃない。当然ながら、俺にはゲーム内のようなバカげた身体能力は持っていないのだから、剣速や敏捷が鈍るのは当然なのだ。

再度、俺の正中線を狙った竹刀が接近。さっきの再現のようにまた受け止める。

——が。

「グ、ギッ」

思わず変な声が口の間隙から漏れ出た。

今回は受け止めるのではなく、刃(といっても竹刀だからないが)に滑らせ、打撃を逸らす。

「ほう……。……八幡君、君の剣は我流の域を越えているよ。しかし、それは剣道ではない。実戦的過ぎる」

初めて好戦的な色が誠さんの瞳に混じる。

え、ちよつと？ 好戦的なのは仮想組(仮想世界がファーストコンタクトだった奴らの略称)だけで十二分なんです……。

「……ま、嫌でも剣技を研鑽しないとイケなかったからですね」

「……そうか。君の剣に込められるものが重いわけが少し理解できたような気がするよ」

会話が途切れ、俺達はまた各々の構えに入る。俺は剣を上段に構

え、ソードスキルで言う《ソニック・リープ》のモーションで、誠さんは変わらず剣道中段構えだ。

疾駆。

さすがに仮想世界内と同じ速度というわけにはいかないが、それでもかなりの剣速のはずだ。それを難なく誠さんはいなし、続く連撃は素早く体を翻して避けた。

反撃の喉元への突きは体の向きを九十度変えながらのステップで、すんでのところで躲す。その回転を活かし、竹刀を左手に持ち替えがら空きの胴を捉えんと思いつき振った。

「くっ……！」

アインクラッドで最高の反射神経を持つキリトに勝るとも劣らぬ反応速度で突きのために重心が前にあつたのにも関わらず、無理な体勢でバックステップして俺の一撃を避ける。

だが、体勢を崩したのは逃さない。よろめいている誠さんに追撃の一打を食らわせるべく、間合いを詰めて追撃。籠手をかすったが、有効打だとは認められないはずだ。事実、審判役の榎さんはノーリアクションである。

「ゼアッ！」

「甘いッ！」

今度は誠さんが跪いたまま竹刀を振り抜こうとし、先程と立場が真逆で俺は無理矢理体を後ろに傾ける。が、勢いがすごすぎてそのまま後転してしまった。

「いつ……てえええええッ！」

面やら籠手やら胴台やら着けていたせいで変なところに装着品がぶつかり、ちようりたい。メデイック、メデイイイイイック!! 戸塚アアアア!!

「す、すまない八幡君。大丈夫か？」

「……あ、ああ、大丈夫です。でもちよつとどつかぶつきたみたいで、まあまあ痛いです」

「それ大丈夫じゃないわね。ほら、胴着脱ぎなさい」

やだ、朝田さんここで脱げって言うの!?! そんなこと出来るわけな

いでしょ!?! ……や、まあ、もちろん全裸になれとかいう意味じゃないだろうけど。

「あら、詩乃ちゃん大胆ね。私も殿方に人の眼があるところで脱げなんて言えなかったわ」

「なっ……そ、そういう意味じゃないわよ!」

ふあ、極楽じゃあ。

冷えた体が温まる感覚というのは堪らなく気持ちがいい。景色が良い温泉だったら最高だが、まあそこまで高望みするのもどうだという話だ。

アパートの風呂では伸ばしきれない足をデローンと脱力させ、酷使した筋肉を慰労させる。ふええ、気持ち良いよお……。

「……満足してくれたようで何よりだ」

「あー、はい。スーパ―銭湯来たのはあんまりないんですけど、結構気持ちいいもんですね……」

雪道歩いて十数分のスーパ―銭湯で、朝田一家十俺で入浴中だ。もちろん混浴などではない。

暫し無言の時間が流れるなか、他の客が一人もない浴室にポツリと声が響く。

「……詩乃は、よく笑い、よく泣き、よく怒る、感情豊かな子だった」

「……そう、みたいですね」

「ああ。だが、あの事件の後、あのこの笑顔を見ることはめっきり減って……いつからか、あの子は何かに追われるように、強く、強くなるうとしていた。多分、母親を……文あやを守ろうとしたんだろうな……」

「……」

「そして、詩乃は東京の高校に進学してしまった……会話といったら



週に一度の電話でだけ。本当に事務的なことしか話さなかった」

湯船から立ち上る湯気を追い、誠さんは上を見上げる。俺もつられて上を向くが、湯気は最後には見えなくなり、消えていく。

「……でも、詩乃は変わったよ。多分、君と詩乃の友達によって。私たちと話すようになったし……何より、笑うようになった」

僅かな微笑みを携え、彼は何を考えているのだろうか。祖父どころか人の親になったこともない俺には解りかねる。だが、それはきっと、親愛とか愛情とか、単純な言葉一つでは形容しがたい複雑で、雑然としたものなのだろう。

「……八幡君」

「……何すか？」

「君は……一体何者だい？」

鋭い眼。疑問を解明する刑事そのものの眼だ。

「……《ソードアート・オンライン》。約四千人もの命を奪った、過去最悪の悪魔のデスゲーム。俺は、その生き残り……俗に《S A O 生還者》と呼ばれている者です」

「《ソードアート・オンライン》……。なら、君は……」

「……ええ、人を殺しました。一人や二人じゃない。二十人近くも……だからですかね、生まれも育ちも境遇も……何もかもが違う俺があいつのことを唯一解つたのは……胸の内にある《罪の意識》」

二十人。そんな人数を殺せば現実じゃ凶悪殺人犯だ。警察官である誠さんには許容しがたいことだろう。

「罪つて、法律を、社会のルールを犯すこと……なんですよね、きっと。でも、なら……俺は害悪で、死ぬべき存在だったんですかね？」

虚空を見つめ呟いた言葉は、誠さんというより自分自身に向けたものだ。と無意識ながらに理解していた。

正当防衛。大義名分。

そんなものは社会からの攻撃を遮るものであって、自分自身からの攻撃は遮れないどころか二倍にも三倍にも膨れ上がらせる。いっそのこと、社会的罰を与えられた方が楽になるくらいに。

正当防衛だろうと大義名分があらうと、人殺しは人殺し。

でも、それならどうすればよかったのだろうか。  
やらねば死んでいた。殺らねば殺されていた。

ただ、死にたくなかった。何かを守りたかった。

自分の命であったり、大切な人の命であったり、誇りであったり、意思であったりもするのだろうか。

それが俺とあいつで唯一共通していることだ。

「……守りたいものがあつたから、詩乃も……恐らく君も、人を殺した。ただ……納得はできない」

そりやそうだ。いくら理由付けしたって人殺しなんて度し難いに決まっている。

別に受け入れてもらいたいわけでもないから反論はしない。だが、言い訳くらいはさせてもらおう。

「……それは強い人の理論です。何もかもすべて守ることなんて不可能です。小を殺して大を生かす。誰かが必ず嫌な役をやらなきゃいけない」

「……確かにそうかもしれない。だが警察官われわれは限られた中の最善を探すのが仕事なんだよ」

「……複数の選択肢があるだけ僥倖ですよ。一つのルートしか取れないよりは」

「そうか……」

また浴室に静寂が訪れる。

ポチャンと何処からか垂れてきた水滴が水面にぶつかった水音がよく響く。

お湯に浸かる心地よさが空気のせいかな半減しているような気がする。

「……八幡君、詩乃を頼むよ」

「……え？」

あまりにも唐突で、文脈も脈絡もない突然の頼みに思わず呆けた顔をしてしまう。口から魂が抜け出てるんじゃないのと思うくらいだ。

「友人としてでも知人としてでも何でもいい、ただ詩乃の傍にいて、詩乃を一人にしないで欲しいんだ」

「……俺は、まだ誠さんとあつて一日も経つてませんよ？　しかも人殺しときた。そんなことを任せられる要素0じゃないすか？」

言うのと、どこか寂しいような悲しいような悔しいような笑みを湛え、ゆっくりと話す。

「……私には、私たちには詩乃の気持ちを理解することはできない。私も職業柄、人の死には一般人よりは近いと自負しているが平和な日本だ、人を殺したことなどない。だから……私は詩乃の苦しみや悲しみを理解できない」

悲痛な声だった。

人殺しをしたことがない、だから朝田の気持ちが解らない。

前者は警察官である自分の理念に反するが、後者は家族である自分の理念に反する。

難儀なものだ。

人生には必ず選択がある。

受験であつたり、就職であつたり、その他にも色々だ。

選択とは、他の取りうるルートを切り捨て一つの道に進むことだ。

だから、複数の道を選ぶことはできないし、すべてのものを守ることもできない。

そんなことは解っている。

でも、それでも、それは……

「……まちがってます」

「……何？」

予想外の返事だったのだろう。眼を丸くしている。

それでもつらつらと追い討ちをかけるように喋る。

「……多分ですけど、アイツが一番今欲しいのは家族の愛情ですよ。家族つてのは、無条件で愛情を注いでいい、傍にいていい存在……だと、俺は、思うん、ですけど……」

年上に偉そうに語るなんて初めての経験のため、なんか自信なくなってきた。いやほら、よく言うじゃん。亀の甲より年の功って。

数十秒ほどキョトンとし、言葉の意味を反芻しているのか虚空を見つめている。

数秒ほどで眼を瞑り、何かを考えているような表情を浮かべる。やがて眼を開くと、ゆっくりと緩慢な動きで俺の眼をしっかりと見て、言った。

「……八幡君」

「……はい」

「確かにそうかもしれない。……だけど、一つ言わせてもらおうよ。――君は、やっぱり詩乃の気持ちをよく解っていると私は思う」

× × ×

髪をしつかり乾かしていたからか、大して湯冷めすることもなく帰宅……いや帰宅だと語弊があるな。まあ帰ってきた。

夕食はパツパツと済ませ、今はのんびり寛ぎタイムである（俺以外）。

その時スマホが鳴る。

「はいもしもし」

『ちよつとあんたシノンの実家に転がり込んでるってホント!?!』

……耳が痛え。スマホ画面を見れば『篠崎』と表示されている。

「……おい、それだとダメ男が彼女の家に転がり込んでいるみたいだに聞こえるからやめろ。……ま、朝田の実家にいるのは事実だけど」

『アンタ何やってんのよ!! 非常識すぎるでしょ!?!』

「お前の大声も相当非常識だぞ。つーか、文句なら朝田に言え」

「は!?!」

いきなり話を振られて驚いた朝田が素っ頓狂な声を出す。これはかなりのレアボイスだ。

「……で、要件は何だよ」

『何も無いわよ! フンツ!』

「……何だよアイツ」

勝手に電話かけてきて勝手に怒って勝手に切りやがった。フリーダム過ぎるだろ。その自由をぜひ調査兵団の皆様にも少し分けてあげて欲しい。

「リズから?」

「ああ」

ま、放つときゃいいか。怒りは持続性がない感情だし、一日経てばいつもの調子に戻っているだろう。篠崎の扱いは基本放置でなんともかなる。

ポケットにスマホをしまうと、視線が注がれる……あの、何?

「……何だよ」

「別に大したことじゃないけど、あんたのアドレス帳って女子の割合が高そうだと思っただけ」

何をそんなバカな。そんなことがあるわけないだろ、俺は葉山じゃねーんだよ。葉山のアドレス帳女子の割合が高いか知らんが。

あー、つと……朝田、綾野、エギル、川崎大志、桐ヶ谷妹、キリト、小町、クライン、材木座、篠崎、父、戸塚、母、平塚先生、由比ヶ浜、結城、雪ノ下……。

家族を抜いたら、女子十対男子四……あ、戸塚は男だったから、女子九対男子五か。若干女子寄りだが、そんなに偏っているわけでもなかろう。……平塚先生を女子と言っているのかは甚だ疑問だが……。やめよう、東北地方にいるからか寒気がしてきた。

それにしても眠い。慣れない新幹線で慣れない土地まで来て、慣れない家にいるから精神的な疲労が大きいのもかもしれない。

「……すいませんが、俺、もう休ませてもらっていいですか?」

「十時半か……少し早いが八幡君も慣れない場所で疲れただろう。もう寝ようか」

誠さんの提案に眼鏡の奥の瞳が少し眠たげな朝田は賛同し、まだ元気そうな栞さんも反対はしない。

歯を磨き、寝室に連れていかれる。十二畳の和室は引き戸で半分には覆れるようになっていて、布団が二組ずつ敷いてある。

「それじゃ、寝ましようか」

言うのと、モゾモゾと隣合いの布団に潜り込んでいく誠さんと栞さんを見て、何の反応もできなかった。

眼に入るのは、六畳ずつに仕切られた向こうの部屋に敷いてある二

組の布団と、顔を赤く染めた朝田だけだ。

……いやまあ、いつも一緒に寝てる夫婦が客人のためにわざわざ離れて寝るのもめんどくさいが、もうちよつとこう、……配慮は？

「あー……、俺、廊下で寝るわ」

「……風邪引くわよ。……いいわよ、隣で寝るくらい」

なら赤面するのやめてね？ 恥ずかしいから。

俺は尚もしつこく食い下がる。

「いや……、しかしだなあ」

「それとも、何？ 私が寝ている間に何かするの？」

「いや全然まったくそんな気は微塵もないけど」

一時の性欲を満たすためにこれからの人生をふいにしたくない。

超究極な安パイ思考（略して地球）を……嘗めるなよ？

がすつと脛を蹴られて痛いんだけど。

「ならいいじゃない」

「いや、そうじゃなくて倫理的な問題がだな……」

「じゃあ、ここで寝る？」

すでに誠さんと栞さんが床に就いている今俺たちがいる部屋を指さす。……無理、夫婦間に割ってはいるとかどんだけ無礼なんだよ。

「朝田がここで寝ればいいんじゃないか？」

また脛蹴られてちよつとイラツ☆としたが特になにもしない。大人げないし逆らうと怖いし。

「……私もまだちよつと気まずいし……」

まあ、和解したとはいえ一日で一緒に寝れるほど朝田はフレンドリーな性格ではないだろう。

しかしそうなると困った。

廊下はさすがに冷えて眠れない。リビングだと誠さんたちが早く起きた場合邪魔になる。同理由で他の部屋も却下。二部屋ある寝室のうち一部屋はもう二人が寝ている。……詰んだ。

「はあ……」

仕方ないので最大限布団を離し——と言っても六畳なのであまり変わらないが——、振り向いて朝田に訊ねる。

「……お前、どつちがいい?」

さして違いもないが、一応質問しておく。

「窓側」

即答された。……もしかして違いあんの? いや、ないよね? 一つの好みなだけだよね? まあどうでもいいけど。

「じゃ、寝るか……」

疲れて布団に気だるげに入るところが親父そっくりらしい(小町談)と言われてちよつとシヨック受けたので、出来るだけしつかりと入っていく。中は栞さんが何かの機械で温めてくれていたのかぬつくぬくだ。

女子が隣の布団で寝ている状況下で寝れるかと思っていたのに反して眠気がすぐに襲ってきたので、それに逆らわずに身を任せているとすぐに寝落ちした。

× × ×

「……エイト、寝たの?」

自分の声以外は祖父と祖母、そして隣で眠る男の規則正しい呼吸音だけが響いている。

隣の布団からはみ出ている手をおずおずと触り、人差し指と中指だけを立てて脈を確かめる。

これが詩乃は好きだった。相手が生きていると実感できるのだ。無論胸に耳を当てて心音を聴く方がより感じられるのだろうが、そんな少女漫画チックなことは詩乃にはハードルが高すぎた。

本人と同じく、気だるげに脈打っているのが感じられるのがおかしくて、少しだけ頬をつり上げる。

さらに八幡の右手首をしつかりと左手で繋ぐ。

眼を閉じて、子守唄を聞いている子供のようにならかな笑顔を浮かべる詩乃の顔は、普段の大人びた顔ではなくて年相応の可愛らしい顔だった。

外に出して寒いはずの左手は何故か温かで、その心地よさに身を委

ねていると詩乃もまた眠りに就いた。

× × ×

翌日の朝。俺が初めに見たものは朝田だった。

朝田だけに朝チユンか、朝チユンなのか!? ……なわけあるか。

淡く薄いライトグリーンの寝巻きとリボンで髪を結わえていないのを見るに、どうやらこいつも今起きたばっかなのだろう。眼福であります。

身を起こそうと両手を布団につけると、右手首がビリビリする。輪ゴムで長時間血管を圧迫していたかのような感覚だ。

「……なあ、何か手首がビリビリするんだが何でか知らんか？」

「し、知らないわよそんなこと……」

なぜそこで顔を背けるのかはわからんが、大した問題じゃないので無視する。

俺の着替えが置いてある部屋に行き、バッグを漁って適当にズボンとシャツ、上着を取り出してパツパツと着替える。

寝室のドアをノックし——誠さんたちが寝た方には引き戸、俺たちが寝た方にはドアがそれぞれある——、入っ正しいかと訊ねるともう少し待つてと言われる。一分かそこらで入室許可が出たので、扉を押して入る。

布団の片付け方はわからんが、誠さんたちの布団に倣って掛け布団、敷布団に分けてそれぞれ半分に畳んで重ねて置いておく。……そういや、今何時だ？

「……ねみい」

冬休み……それも怠惰な正月の後に早起きはキツイ。それは朝田も同意なのか、いつもの半分くらいしか開いていない眼を何度も瞬かせていた。

ダルい体に鞭打って、いつも以上に重い足取りでリビングに向かう。朝田も続いた。

「……おはようございます」



「……おはよう」

「ああ、おはよう」

「あら、起きたの？ おはよう」

眠たげな俺たちとは対照的に、二人はもう完全に意識が覚醒しているようだった。やだ、この人たちすごい……。

昨日と同じ席順で朝食を摂った後、真っ先に口を開く。

「あの……俺、昼前にはもう帰るつもりです。昨日確認したら新幹線もあつたんで……」

「もう帰るのかい？」

「まあ……、はい」

今日は朝田は母親に会いに行くらしい。俺がそこまでするのは違う。ここから先は家族の問題というやつだ。

「そ……、じゃあ、またA.L.Oあっちで」

「ああ」

まったりタイムで中座し、さしてない荷物を整理する。忘れ物がなかチエックしたり、いつの間にやら着信したメールに返信したりしていたらあつという間に昼前だった。

「……んじゃ、色々お世話になりました」

「やめてくれ。お世話になったのはこっちだよ」

「そうよ。よかつたらまた遊びに来てね」

「……じゃあね」

三者三様の挨拶をし、雪が深々と降る外へと出る。最後にお辞儀をもう一度してから最寄り駅までの雪道を歩く。

× × ×

罪を犯した者は罰せられるべきである。ただ他人から罰せられるのではない。自分の手で罰するべきである。

それでも犯した罪は、あるいは罪悪感消えない、消してはいけない。

なぜなら、人の死に何も感じなくなったものはもはや人間ではな

い、化け物だ。

かつて俺にもそんな時があったのだろう。

この雪のように罪は積もり重なり、いずれは自らも殺してしまう。しかし何とか贖罪しようとするれば、きつといつかは溶かしてくれる。

だけど、また新たな罪は何度でも生まれるのだろう。

辛かったら逃げてでもいいだろう。だが背けてはダメなのだ。

背けたら、見えなくなってしまう。わからなくなってしまう。化け物になってしまう。

必要なのは自覚なのだ。罪を犯したという自覚。認識。識別。そのことを、我々は努々忘れてはならない。

× × ×

新幹線内で昨日銭湯でアドレスを交換した誠さんからメールが届いた。画像付きメールか……しかも二枚。

一枚目。

……見た瞬間死にたくなった。

寝ている二人の男女。

女性の左手が男性の右手首をがちり掴んでいる。ともすれば、仲良く見えるような写真だ。

二枚目。

「……………」

後ろは殺風景な白銀の雪景色が広がっている。だが問題はそこではない。

還暦を迎えたであろう老男女に高校生くらいの女の子一人が写っている写真。日常の一枚を切り取っただけにも感じる写真。

笑うことに慣れていないような笑顔、柔和で優しいな笑み、困ったようなくすぐったいようなそんな笑顔。各々が心からの笑みを携えていた。

なんてことない写真だ。

でもそれは、お互いが勇気を出して一步踏み込んだ、尊ぶべき結果

を表しているものだ。それは賛嘆されて然るべきものなのだろう。  
ほんの一言だけ打ったメールを、俺は送信した――。

こうして、彼ら彼女らの聖剣取得の祝いの会が始まる。

2025年12月28日。

ALOユーザーの唯一にして最強の武器である《エクスカリバー》取得祝い兼忘年会は、東京都の御徒町にあるエギル経営の《ダイシー・カフェ》にて行われることになった。

俺の愛娘であるユイのために仮想世界で打ち上げをやろうと考えなくもなかったのだが、翌日二十九日に結城が実家に帰るため、気を効かせたユイが「リアルで！」と提案したのだ。まったくよくできた娘である。どこぞの馬の骨には絶対やらん。

天気予報は東京にしては珍しく、夕方から雪だそうなたためバイクではなく、電車やバスで来た。所要時間は四十分ほどだ。

ハードケースを運び、相変わらず怪しげな店に入ると、店の中にいたのは忙しそうに料理を作っている店主と、激近の文京区湯島のアパートに住んでいる朝田だけだった。

「おっす」

「こんにちは……って、つい数時間前まで一緒にいたのに言うのも変な感じね」

少し苦笑混じりにそう言うと、座ったら？ と自分が座っている席の右横をポンポン叩く。

ありがたく一つ席を空け、朝田の右横に座る。

「……なんで一個席空けて座るのよ」

「いや、この方がいいかと……」

だってあなた高圧的なんですもん。仮想世界ほどではないですけど、とは言えずに、曖昧な感じで返答する。

それが気に食わなかったのか朝田は一つ席を詰めてきたので、俺も一つ席を右に移動する。

するとまた詰めてきた……俺も一つ席を……ま……お……何回繰り返すの？

「あの……なんでそんな詰めてくるんですか？」

「……別にどこに座ってもいいでしょ」

「ごもつともで、と諦め、ハードケースからパソコンとカメラ四つを出す。

そのままカウンターテーブルにパソコンをセッティングし、カメラはそれぞれ店の天井に付けておく。

「……何してるの？」

「あ？ あれだ、愛娘の眼をちよつとセッティングしてるだけだ」

「……何言ってるの？」

「いや、俺も詳しくは知らんから、キリトに訊いてくれ」

ぶつちやけ文系男子である俺は、こんな理数系っぽいことは理解できません。数式理解するより古典を理解する方が簡単だ。

一先ず作業を終え、喉が渴いたので忙殺されている店主にジンジャーエールを注文したが、ふざけんな！ と言われてしまった。何て店だ。Twitterで店主の愛想最悪って載せてやろうか。……Twitterやってないけど。

「そう言えばエイト。あんた眼鏡かけないの？」

「おい、それは俺の眼が腐っていると揶揄しているのか」

それを言うならこつちにだって言い分はある。

体を左に向け、椅子の背もたれの後ろに左腕をやりながら反論した。

「それを言うならお前だって眼悪くないのに眼鏡してるじゃねえか」

原則として、仮想世界でも現実と大きな変化……具体例を挙げるなら、性別や身長が違っていると馴染むまで少し時間がかかる。ALOでなら空中戦闘がすぐにできるようにならないのと同じことだ。

まあ、今回の件の場合は視力があまりに急激に変化すると若干酔うくらいだ。

俺の問いにどう答えたものか……みたいな感じの顔をしている朝田を見ると、あれ、チョイスミスった？ みたいに不安が煽られるからやめてほしい。

「別に深い意味はないけど……そうだ。エイト、あんたこの眼鏡かけ

てみなさいよ」

眼鏡を外し、俺に装着しようとするため、少し上体を反らして逃げる。もう余分なパーツはアホ毛と濁った眼で十分だ。

「往生際が悪いわね……」

呆れたように溜め息を吐く朝田だったが、やがて何かを閃いたように顔にいたずらっ子のような笑みを浮かべた。

「《エクスキャリバー》」

「グッ！」

それを言われると辛い。実際朝田……いや、シノンの射撃技術がなければ、最強の聖剣は大穴にロストしかねないところだったのだ。

「わかりました……」

なんやかんやで女性陣には頭が上がらないことから、やはり女は強しと改めて認識し、受け取った眼鏡をかける。

どうせ似合ってなくて、着けた時の顔を見たら爆笑されるんだろうなあ……と、かなり鬱になりながら顔を上げる。が、予想とは違い称賛する言葉だった。

「……い、意外に似合うわね……少し驚いたわ……」

「あ、そうなの？ 少し見てみたい気もするわ」

さすが小町曰く目以外は整ってる顔だ。俺も鏡なんかあつたら観賞してみたい。

だが生憎鏡はないので、自分が眼鏡をかけたらどうなるかの妄想で我慢しておく。大分美化されたのは仕方ない……はずだ。

「まあ、貸してくれてサンキュー……なのか？」

「ん、まあわたしも普段見られないものが見れたし」

眼鏡を朝田に差し出し、受け皿のようにして出してきた右手に置く。

と、その時。店の入り口を開けたら鳴るベルが、来店者——と言っても今日は貸し切りだが——の存在を告げる。

次に来店してきたのは、桐ヶ谷姉妹だった。埼玉県川越市と言うと県が違うこともあって、東京都民としては辺境の地のように感じるが、実際には電車を使えば一時間くらいで行けるらしい。

「こんにちは、エイト（君）」

キリトの静かな声に、桐ヶ谷妹の元気はつらつな声を聞き、適当におう、と返しておく。

忘年会は俺、キリト、桐ヶ谷妹、篠崎、シリカ、朝田、クライン、結城の八人＋ダイシー・カフェ店主のエイグルでやるため、約半分がもう集合している。

「……じゃあキリト。早速頼む」

「うん、任せて」

予め起動しておいたノートパソコンの前の席を譲り、キリトに座るように促す。

先ほど設置したカメラは前にキリトに説明をしてもらったところ、市販のマイク内蔵ウェブカメラを、大容量バッテリー駆動及び無線接続できるように改造したものらしい。

俺もある程度ならキリトの説明を聞いたことやユイのために勉強したことによって理解できるし、こういった作業的なのも頑張ればできるが、やはり一応師匠にあたるキリトの方が理解も深い。故に俺はこういったことを任せているのだ。

そこそこ高スペックな俺のパソコンを弄り、恐らくカメラの動作確認をしているのである。キリトは、最後に川越にある自宅の俺も何度か見たことのあるハイスペック据え置き機に接続。小型ヘッドセットを装着してユイに語りかける。

「どう？ ユイちゃん」

『……見えます。ちゃんと見えるし、聞こえます！』

モニターからユイの可愛らしい声が響く。

「うん、OK。ゆっくり移動してみて」

『ハイ！』

キリトの指示と同時に弾けるような返事をし、それとともに一番近くのカメラレンズがジジ……と動き始める。

これも完全にキリトからの受け売りだが、今ユイは擬似3D化された空間で飛び回っているような感覚らしい。いまいち実感が沸かないが、俺達で言う仮想空間にフルダイブするようなものだろうか。

「……なるほど、つまりあのカメラとマイクは、ユイちゃんの端末……感覚器ってことね」

文学少女な雰囲気醸し出す朝田の適切な表現に対し、キリトではなく桐ヶ谷妹が頷く。

「ええ。お姉ちゃん、学校でメカ……メカトニ……」

「メカトロニクス」

キリトの訂正。メカトロニクスとは和製英語で、意は機械工学と電気工学を合わせた造語だ。意味は多分日本でしか通じないだろう。

「それニクス・コースつての選択してて、これ授業の課題で作ってるんですけど、完全ユイちゃんとエイ……「うわああああ！ スグー！」キヤアアアア！」

疾風迅雷。電光石火。正に今のキリトの動きに相応しい四字熟語だ。

仮想世界でも見たことのない俊敏な動きで妹に飛びかかり、首を絞める人よろしく口を思いつきり塞ぐ。

ああなつたらもう止められないため、マイヘッドセットを装着して、ユイからの注文や要望、改善してほしいところなどを聞いた後にしばし談笑に興じる。

朝田がどうかこうにか場を納めたときに、丁度残りの面子が揃う。所狭しと二つのテーブルをくつつけた卓上に並べられた。最後に店名物の見事なスペアリブが置かれ、全員で功労者に拍手喝采。ノンアルコールと本物のシャンペンがグラスに注がれる。

誰かが乾杯の合図を思っただら誰もしないため回りを見渡したら、皆一様に俺を見てくる。……え？ 俺がやらなきやダメなの？

「え、えー。《聖剣エクスキャリバー》とついでに《雷鎚ミヨルニル》の二つの伝説級武器ゲットと、クラインの淡く儂い幻想がぶち殺されたことを祝し、乾杯！」

事情を知らないエギルを除き全員が唱和した。その一秒後、クラインの「つて、オイ！」というツツコミの後に、全員の笑声が重なった。



つまるところ、彼には運がない。

この店名物のスペアリブを頬張っていると、それを作った巖つい店主がある提案をしてくる。

「ふむ……粗方料理も片付いてきたし、ゲームでもするか」

「……なにすんだ？」

バーの店主と言うと、なんかカジノにいるディーラーみたいなイメージが湧くのは俺だけだろうか。多分服装が似てるだけだろうけど。

俺の問いかけに答えたのは、ゲームしようぜ！ と提案したエ

ギルではなくクラインだった。

「おいおい、エイトよオ決まってるだろ？ 合コン、友達の集ま

り、打ち上げ何でもござれの定番中のド定番ゲーム……王様ゲームだ！」

「ほら、たまに店を貸し切ってレクをやる社会人もいるからな、道具も既にあるぞ」

ずっと縦長のペン立てにさされた割り箸を差し出し、若干ドヤ顔な店主殿。なんかウザい。つか社会人はレクじゃなくて宴会だろ？

まあ、これだけの人数の予定が合うことなどなかなかあるまい。たまにならこういうのも悪くはないだろう。……女性陣は既にやる気なようだしな。

× × ×

「……さて、始める前に確認しときたいが王様ゲームのルールを知らない奴はいるか？」

エギルの確認に手を挙げた者は一人だけいた。朝田である。

「へー、朝田さんって博識そうなのに意外だね」

「私は……遊びの本とかは読まなかったから……」

「そうだよなあ、図書室は真面目に読書するところだもんなあ……というわけでエギル、説明頼むわ」

「応よ……と言っても、ルールは簡単だぞ。まず人数分の棒……まあ割り箸とかを用意して、1本に王様だと判るように印を、それ以外には数字を書いてクジみたいに順に引いていく。で、全員で王様だーれだと唱和して、一斉に引いたクジを見る。王様を引いた奴が当たりだ」

「王様を引いたらどうなるんですか？」

「王様を引いた奴は何番が何々をすると命令して、命令された奴はそれを必ず実行しなきゃならん。命令する人を複数人選んでもいいだろうが……まあこの人数なら二人までじゃねえの？」

エギルの説明を引き継いで、俺がざつくばらんに説明する。今までの説明で大体理解できたのか、軽く頷いていた。

「んじゃ、始めるぞ」

× × ×

「ま、朝田はルールわからんみたいだし、一回目はお試し感覚でやってみるか」

「それじゃあ行くぞ……『王様だーれだ』」

「あ、私だ。……えーと……」

一発目の命令というのは今後の命令内容を左右する。ゆえに一回目は楽しめて且つハードルが低めなものなのだと言った。さて、そんな中で桐ヶ谷妹が下した命令はその条件に合っていると見えるだろう。

「じゃあ三番の人が自分が一番得意なソードスキルの動きを技名を叫びながら再現する、で」

いつもやっているが改めてやると恥ずかしい内容だ。さて、三番は……俺じゃねえか。

「俺だわ」

ぬ

俺が一番得意なソードスキルか……。何だろうな。

軽く悩んだ末にヴォーパルストライクをやることにする。右手に

剣を持っていると想定し、剣を肩に担ぐような動きから一変、走りながら一気に突き出す。

「ヴォーパルストライク」

……技名言うのすごい恥ずかしいんだけど。かめはめ波を撃とうと必死に練習してた小学生時代を思い起こしちやっただじゃねーか。許すまじ、桐ヶ谷妹。

「プッ……」

「ブハッ……クツ、エイトよオ、遊びだからそんな真面目こいてやらなくてもいいんだぞ。……逆におもしれエけどな」

「クツ……」

殺せえ！　　いつそ一思いに殺ってくれえ！　　誰だよ案外

難易度が低いとか思った奴！　　俺だから誰も責められねえじゃねえか！

くそ……俺の俺なりの泥沼王様ゲームを見せてやる……。

×　×　×

『王様だーれだ！』

「お、俺か」

二回目の王様はアンドリユー・ギルバート・ミルズ二世だった。……結構それっぽい名前だな。ハチマン・ヒキガヤ二世とかパツとしないし普通にダサイ。

王様の棒を手で弄びながら俺たちを一瞥し、丁度全員見た辺りで命令を決めたのか開口する。顔が多少、いやかなりニヤけていた。

「1番が7番と10秒間ハグする、で」

……え、は？

あ、2番だ、危ねえ……。

「1番と7番誰だ？」

「あ、私だ」

「私は……あ、7番だったよ」

俺の次に当たったのは白黒コンビと結城とキリト。略して結城

リト。……おおう、だからこの二人はトラブルに巻き込まれやすいのね……。

「何というか……」

「……面白みと新鮮味に欠ける組み合わせよね」

「ひどい！」

実際見慣れた光景だからか、誰も反論はしない。君たち、いつも百合百合してまったくけしからん。いいぞもつとやれ。

なんだかんだで全員それなりに楽しみながら、王様ゲームは第三試合に突入していった。

× × ×

『王様だーれだ！』

「うおっしやー！ 俺だあー！」

騒がしく王様だと主張したのはバンダナ侍ことクラインだった。その時、この店にいるやつはみんな思っただろう。「ああ、来ちゃったか……。」と。だって全員そんな顔してるし。

「いいのか、そんな態度で？ 今は俺が王様なんだぞ？」

「むしろこうなるのが分かりきってるから全員そんな顔してるんだと思うんだけど……」

▼ようしやないどくぜつ が くらいん をおそう！

▼くらいん は たおれた！

▼あさだ は かくめいをたっせいした！

「ま、普段の行いを悔い改めるんだな」

「そりやねえぜ、エギルよお……」

「で、命令はなんなんだ？」

「もう知らん……一番と五番が一分間見つめ合うで」

ヤケクソ気味に言った割には具体的な命令だなおい。しかも五番の俺含まれてるじゃないですかヤダー。俺と同時に手を挙げたのは朝田だった。どうやらあいつが一番らしい。朝田……お前がナンバーワンだ……。

「さて……」

「やりましょうか……」

「す、すごい。二人とも険しい顔をしてる、本気だよ、明日奈……」  
「……ただ見つめ合うのに緊張してるだけじゃない？」

あつちでの剣さばき並みに正確である。そう、コミュ障とは人と目を合わせるような構造をしていない。知り合いが居てもなんとなく話しかけられなかったり、通学路では気づかないふりをして通り過ぎるような人種である。

そしてそれは朝田とて例外ではないだろう(コミュ障なのか知らんけど)。

「はあ!? そんなわけないでしょ、こいつの顔なんて一時間でも見られるわよー!」

「は? バツカアスナお前、ききき緊張なんてしてねーし? 1分じゃ足りないくらいだし?」

「お? じゃあ王様権限でもっと時間を増やして……」

「クラインは黙ってろ(てー!)」

「特に理由のない照れ隠しがクラインを襲う……」

キリト。理由はある。そいつがクラインだからだ。

「おい朝田、いいのか? おれの腐眼に一分も見つめられたら石化するぞ? 俺の騎乗スキルはA+とか言っちゃうぞ?」

「は? 意味わかんないこと言ってるんで早くやりましょう」

「何お前やる気満々じゃん。熱?」

「熱だったら今頃家で寝てるわよ。……そうだエイト、負けた方が勝った方の言うことを何でも聞くって罰ゲームつけましょう、こうでもしなきゃあんた適当にやるでしょ?」

最近朝田の勘が鋭すぎてヤバい。いやだって遊びを本気でやるの? 楽しむもんじゃないの?

「いやまあ構わんが……罰ゲームは事前申告な。後で違う請求したら無効」

「いいわよ。じゃあ私は……そうね、一日私の買い物に付き合いなさい」

「絶対重いもの持たされるやつだろそれ……じゃあ俺はGGOでお前が本気で一日狩りをした稼ぎを丸々もらう、で」

要求を口にした途端、周りからクスダ……と非難の声が上がる。俺だって休日の時間賭けにのせてるんだから許せよ。時は金なりって言うし、対等だろうが。

「大丈夫、それで構わないわ。……どうせ私が勝つし」

「大した自信だな？ GGOで初めて会ったときくらいは私が倒すとか散々言っておいて結局爆破オチだったのに……」

「それ関係ないでしょ！」

フハハ、許せ朝田よ。こうして軽口を叩いておかないと気恥ずかさで目をそらしたくなってきたやうからな！

「俺が出したはずの命令だけど……なんかこう、俺のオリジナルソードスキルの実験台にしたい」

「同意」

なんでだよ。俺死んじゃうだろうが。

「お前ら酷くない？ 俺訓練所の力カシと違って意思あるんだ……あつ」

文句を言うためにクライン達の方へ向く……向いてしまった。それは即ち朝田との勝負の敗北を表していた。

ギ、ギ、ギと油の切れた機械のようなぎこちない動作で顔を再び朝田へ向ける。……初めて見る完膚なきまでのドヤ顔である。 U Z E E E！

「じゃあ買物の付き合い、よろしくね♪」

女の子と二人きりで出かけることに理想を持っていないと言えば嘘になるが、それにしたつてもうちよい恥じらいとか照れが感じられるものだと思っていた。それがいざその状況になってみると、いるのは普段あまり笑わないくせに満面の笑みを浮かべているドライ女子がいるだけだ。雪ノ下だつてもうちよいギャップ萌えあつたぞ。

しかし俺は敗者である。勝てば官軍負ければ賊軍、死人に口なし。敗者は黙って勝者に従うのみである。

「まあ勝負は勝負だしな……」

貴重ないつかの休日が一日潰れることを俺は渋々承認したのであった。というか自爆だから文句の言いようがねえ……。

× × ×

王様ゲームも終わり(俺は一度もなれなかった)、出された料理や飲み物もあらかた片付いたところで解散の流れになる。桐ヶ谷姉妹は比較的遠いところに住んでいるため先に帰り、クラインは会社から電話がかかってきたため外に出てそのまま帰ると言っていた。俺もそろそろ帰ろうとしていたところで声をかけられる。

「ハチ君は運が悪いねえ」

くすくすはどこか楽しそうに結城は笑う。嫌味は感じなかったため、俺も冗談交じりに返した。

「当たり前だろ、人生においても貧乏くじを引いて来たんだからゲーム程度で引くのなんか余裕すぎるわ。自分の才能が怖い」

ほんと怖い。なんで一回も引けないのかを疑いもしないくらい自分の運がないことがわかってるのが。比企谷王政にしたら二トピアになっちゃうのを割り箸が察知していたのを疑うレベル。

「ハチくんは悪運が強いからねえ」

言葉を弾ませながらサラツとひどいことを言ってくる閃光様。まったくもってその通りなので特に言い返すこともせず、そうだなと短く返す。

「……今日はありがとう」

と、ここで身支度を終えて初めて結城の顔を見た。表情は声音の通り明るく、心からの笑顔である。しかしながら特に結城に対して何かした覚えがないのだが……。

「……何がだ？」

礼を言われることをした覚えが全くない。今日なんてただただ騒いでいただけだ。

「こうやって仮想世界で出会った私達がリアルでも会って、一緒に楽しむ……それって、縁を繋いでくれたハチくんのおかげなんだよ？」

私、こういうの前はあんまりしたことなかったから楽しかったの。だから、ありがとう」

「……そうか？」

「そうだよ」

そうなのか。きっと結城が言うならそうなのだろう。そう思うくらいに楽しそうに笑い、明るい表情を見せる結城を見るのがどうも気恥ずかしく、そっと目を逸らす。

「また、皆で遊ぼうね」

皆って誰だよなんて数年前の俺なら答えていただろう。だが、思ったよりすんなりとその言葉は出てきた。

「……そうだな。また、なんかやろうぜ」



彼のバレンタインは世間一般的にはまちがっていないが彼的にはまちがっている。

バレンタイン。

それは、一年で一番リア充と非リア充が明確に分かれる日である。リア充にとってはミルクチョコレートのように甘く、非リア充にとってはビターチョコレートのように苦い日だ。

無駄にそわそわしてもブサメンはチョコレートを買えないし、いつも通りにしていてもイケメンはチョコレートを買える。……ケツ。

と、話がずれてしまったが俺にとってバレンタインとはコマチョコが貰える日だ。むしろそれ以外の何物でもない。

ただ、東京と千葉と、物理的距離が遠いので今年は貰えるのかお兄ちゃんは心配です……いや、何なら千葉まで行くけどね？

× × ×

「お兄さん！ 今日バレンタインだからチョコあげる！ はいッ！」

「お、おお……う？」

今季一番の寒波が関東を襲った二月十四日。あまりにも唐突に、血の繋がっていない家族からチョコレートをもらった。in小町ボイス。

「一応手作りだけど、僕あんま料理得意な訳じゃないから簡単なのは勘弁してね？」

「いや、普通に旨いぞ。その……ありがとな」

「うん！」

言うなり両腕をバツと広げて静止する紺野。なんだそのポーズ、崇め奉ればいいの？

神社に行ったときのように拍手を打ち、絶剣ユウキ様ははーと適当に崇めておく。すると、なぜか唇を尖らせた。

「……何だよ」

「……そこはハグだよ」

やだわ、いくら家族とはいえ恥ずかしいわ。

興味なさげな視線を紺野に送っていると、どうやらなりふり構わないことにしたのか思いつきり抱きつかれる。

「えへへへへ〜」

ええい、こら離せ。小町にだって小六以来こんなことされたことないんだぞ。まあ、これまで人の体温を碌に感じられていなかったのだから、これくらいは容赦しよう。

「おい、そんな密着すると服についてる菌が……」

「ふふふふ。ふへ、ふへへ……」

段々笑いが怪しくなっていく。ふへへって、完全にDQNのそれである。しかもナンパ中の。

「おい、治ってきたとはいえお前エイズなんだから、気を付けろよ」

「うん！ でもあと十分だけ……」

こいつの生い立ち+小町ボイスの効果で、十分どころかその三倍の体勢のままだった。……腰が痛いです。

× × ×

そうだ、千葉に行こう。

小町からチョコレートを買うために千葉まで行こうとする俺マジメロスとか思っつて、その旨のメールを送ったのだが、『来ないで』と返信されてしまった。

もうダメだ、おしまいだあ……。

自称宇宙最強の戦闘民族である野菜人の王子のようなことをぶつぶつ言いながら、普段はアリスと紺野が使っているパイプベッドでふて寝しようとする。

「お、お兄さん！ 元気出して？ ほら、まだ皆からチョコレート貰えるかもよ？」

「……俺はチョコレートが欲しいんじゃないで、『小町からの』チョコ

レートが欲しいんだよ」

だ、だめだ、これはさすがにカバーできないよ……と紺野が内心思っていることも露知らず、再度瞑目する。いいもんいいもん、紺野（小町の声のやつ）からはチョコレート貰ったもん。

……冷静になると、思考も普段女子が使っている布団に潜り込んでいる現状もアウトな気がしてきた。仕方なく布団から出る。

テレビを点けてもバレンタインデー特集的なのはつかやっついて鬱になる。同理由でネットサーフィンもする気にならない。紺野も退屈そうにしている。

「ねえねえ、さっきスマホが鳴ってたよ？」

「あ？ 見てみるわ」

紺野用のゲームが何個かインストールされているスマホちゃんを弄くり、メールを見る。いつもはLINEの『仮想組』というグループで連絡が来ることが多いのだが、今日は普通のメールだ。それも複数。

『エイト、私の家に来て！』（キリト）

『ハチ君、私の家に来て！』（結城）

『エイトさん、私の家に来てください！』×2（桐ヶ谷妹&綾野）

『エイト、ちよつと私んち来て』（篠崎）

『エイト、ちよつと私の家に来なさい』（朝田）

『エイト、ちよつと私の家に来てくれないかな？』（竹宮）

『エイト君、ちよつと私の家に来てくれないかな？』（枳殻）

……俺にどうしろと？

何でこんなブッキングさせてくんだよ。俺は某ラーメンの具材の名前の忍者みたいに影分身できないからね？

「誰からだったの？」

「……いいか？ 俺は何も見っていない。お前もスマホから何の着信音も聞いていない。いいな？」

「？」

小首を傾げているということは理解できていない。これでいいのだ。ボンボンバカボンバカボンボン。

『すいません、パパ……』

俺が安堵しているとき、愛娘からの謝罪の言葉が聞こえてきた。何だい？ ユイの謝罪なら何でも赦しちゃうよ！

『さっきのメール全部に、「わかった。今から行くわ」って返信しちゃったんです……』

なん、だと……。

× × ×

『パパ！ 焦ると事故してしまいますよ！』

お、おう。そうだな……。

愛娘の鈴の音のように澄んだ声を聴き、バイクのスピードを緩める。何故だ、何故休みにこんな目に……。

『パパ、そこを左折です！』

慌てて左折し、一軒目……アスナの家までバイクを走らせる。予想だが、今日は今までで一番バイクを走らせる日になるだろう。

……何か高級住宅街に迷い込んだんじゃないけど、こっちであつてんの？ バイクが完全に場違い何ですけど……。

俺の心情に同期するようにブルル……とバイクが弱々しい音を出す。ナビゲーターユイを疑うわけではないが、知り合いがこんな高級住宅街に住んでいるなんて実感が無いのだから仕方がない。

スマホに表示された住所を頼りに進む。

「で、でけえ……」

さすがは大企業レクトの元CEO結城彰三氏の自宅というべきか、もう家というか屋敷と言うべき建物が鎮座していた。やだ、ぼくもおうちかえる……。

『ダメですよ、パパ』

俺の考案を見透かしていたとしか思えないタイミングでユイが諭してくる。ダメだよなあ、バックレたらアスナ↓阿修羅になっちゃう。

インターホンに指を近づけ、あと一センチというところで止まる。

やっぱやだなあ……。ええい、ままよ。

ピンポンと普段聞いているより高貴な感じがする音が外と恐らく室内にも鳴り響く。誰かが出るまでのこの感じ、どうにかならんもんかね……。変な汗が出てきちゃうだろーが。

『はい。どちら様でしようか』

「ひゃ、はの、ぼきゅひきぎややはちまんと言いましゆ。結城……アスナしゃんに来るようにひわれたんでしゆが……」

知らない年上の女性——声音から推測——の声が聞こえ、最近で一番キョドってしまった。

『ああ、アスナお嬢様の……かしこまりました。少々お待ちください』  
……使用人に名前パスされるとか、結城が結城家で俺をどんな風に言っているのか気になるが、時間がない俺にとっては些事なので置いておこう。

使用人（佐田明代さんと言うらしい）に案内され、屋敷内を歩く。  
……無言が辛い。

「え、えく、他の家族はいらっしゃるんでしyouか」

「いえ、旦那様と奥様はお仕事でいらっしゃいません。浩一郎様……

アスナお嬢様のお兄様は御勉強だそうで、学校に行っております」

「は、はあ……」

会話が途切れる。

まあ無理して話すこともないという思考に至ったとき、使用人（というよりホームヘルパー）さんが話しかけてくる。

「……比企谷様は、一途な女性をどう思われますか？」

「は？ いや、男なら憧れるもんじやないですか？ ……少なくとも尻軽の人よりはいいと思いますけど……」

「そうですか。……ここがお嬢様のお部屋です。では、私はこれで……」

……んあ？ 何で結城の部屋まで通されてんの？ 普通、リビングとか客間に通されるんじゃないの？

もう一度佐田さん呼び出すのも申し訳ないし、何よりこの家の造りがわからん。つまり、俺に出来るのは結城の部屋の扉をノックする

こと一択だけなのだ。

『は〜い、どうぞ〜』

部屋主の許可を得たので扉を引く。あまりにも滑らかに、音もなく扉が開いたのに経済格差を感じます……。

「あ、ハチ君!」

「おう……、わざわざメールで招集するなんて、何か用か?」

言うのと、結城はちっちゃい紙袋からラッピングされている小さな箱を出した。そのままやや頬を上気させ、笑顔で「はい」と箱を差し出してくる。

「……何、これ」

誕生日は今と真逆だし、祝い事があつたわけでもない。つい受け取ってしまったが、これを貰う謂れがない。

「返すわ」

「え……いらなかった、かな」

「? いや、お前から贈り物をされるようなこと、最近なんかあつたか?」

それにしても美少女の涙目というのは罪悪感を煽るな。何も悪いことしてないのに責め立てられてるような気がする。

「え、えっと……今日は何月何日だっけ?」

「二月十四日だけど……」

「だよね! 日にち間違えたのかと思った……」

日にち? ……あ、これまさかチョコレート? ヤッベー、今まで貰ったことなかったから何なのかと思つたわ……。

「これまさかチョコレートか?」

「普通気づくでしょ! そうだよチョコレートだよーだ」

小さな子供が拗ねたように唇を尖らせ、そっぽを向いてしまう。やだこの子可愛い……じゃなくてだな、いや、どうしよう。こいつこうなると長いんだよな……。

どうすればいいのか解らないので貰ったチョコレートを一口。

「ちよ、ちよつとハチ君、何でおもむろにチョコ食べ始めてるの?」

「え、いや特に意味はないけど。……っーか、お前相変わらず料理う

めえな。甘さがちょうどいいわ」

「く、口に合ったならよかったけど……」

気恥ずかしげに長髪をもてあそび、口を緩ませる。結城の機嫌も直ったことなので、次、行きますか……。

× × ×

バイクを走らせ着いたのは、これまた立派な日本家屋。都市部の埼玉県の住宅街にある家とは思えない和の造りだ。

「ユイ……パパを励ましてくれない？ 心が折れそう……」

『フアイトです、パパ！』

よっしやー！ ヤツテヤルゼエエエー！

勢いよくインターホンを押し、心なしかけたたましい音を響かせる。ユイの応援の前ではそれすらも凱歌に聴こえた。

「はーいー」

元気で活発な声が聞こえた時に現実を見る。ユイの激励（持続時間1ターンの。効果意気高揚）が切れてしまった。何回でも言おう。おうちかえりたい。

「あつ、エイトさん！ お姉ちゃーん、エイトさんが来たよー！」

勇者スグハは【張っている声】で俺の鼓膜を攻撃し、仲間を呼んだ！ ……あれ？ 仲間を呼ぶのはモンスターだよな？ 確かにあの立派なダブルマウンテンはモンスター級だが……やめよう、つい視線がつかれそうになる。

駒王学園の変態三人組のうちの一人でもないのにバストスカウターが発動しそうになつたぜ……。

「エイト、いらっしやいー」

私服まで真っ黒なキリトが二階から降りてきて家内に招かれる。

「それにしても、メールからちよつと遅かったね？」

「あ、ああ、ちよつと準備してたらな……」

「そっかー」と言いながらぱたぱたと冷蔵庫から麦茶を取り出し、ガラスのコップに注いで俺の前に持ってきてくれる。

それを一口で飲み干し、結城の時と同じように聞いた。

「……それで、自宅招集させるなんて初めてだが、何か用か？」

「あ、うん。ほらスグ、あれ出して」

「はい」

キリトが指示を出すともたもや冷蔵庫からラッピングされている小さな箱×2を取り出す。あれ、なんかデジヤヴ……リーディングシュタイナー持っていないのになあ……。

「はいエイト、バレンタインチョコ」

「わ、私も頑張って作ったから、食べてみてください」

「お、お、おう……」

チョコ四個か……中々ヘビーだな……。

「ど、どう？」

「……ん、旨いぞ」

「よ、よかった〜」

俺が感想を述べた途端顔を見合わせ互いに喜ぶ桐ヶ谷姉妹。どうにかして抜け出さねば……と思っていたときスマホが鳴る。乗るしかない、このチャンスに。

「……すまん、急用ができたからもう行くわ」

「あ、はい！ また来てくださいね！」

「バイバイ、エイト！」

つ、次は……枳殻のところにするか。

胃が……。

× × ×

俺はヴァレンシュタインは好きだが、バレンタインはむしろ嫌いな方だ。今日バレンタインを嫌いな方ではなく、嫌いだと断言できるようになりそうだ。

それはそうと、何故だろう、俺が住んでいるところと似ているからか、枳殻の家は先の二軒よりも落ち着けた。

「……で、用って何？」



世界がループしているかのように同じ台詞を繰り返す。

「う、うん……その、今日はバレンタインだから、チョコ作ってみたから食べてほしくて……はい！」

仮想世界の彼女の髪色と同色に顔を染め、俯いて両腕とチョコレートが入った箱を差し出した姿勢のまま固まる。

「……おう、サンキューな……」

半ばやけくそ気味にトリュフを口に放り込む。枳殻はあまり料理は得意ではないとのことだったが、普通に旨い。

旨いんだけど……血糖値が心配だ。

「……そういや、アイカツの方はどうだ？」

「アハハ、まだ全然ダメだよ……」

自嘲と羞恥が混じった笑みを浮かべた顔の頬を掻きながら言った。やはりアイドルというのは狭き門なのだろう。世の中にはやたら人数が多いアイドルユニットが増えたが、彼女たちもたゆまぬ努力をしているのはずなのだ。

しかし、枳殻の言葉にはまだ続きがあった。

「——でも、諦めない。だって私はお姉ちゃんだから。妹に負けてられないから」

強い意志に気圧され、思わず微笑を浮かべてしまう。

「……そうか。ま、頑張れ」

× × ×

……チョコレートの食い過ぎで若干気持ち悪くなってきた。

そんなことを思いながらデユラハン号（嘘）をブンブン唸らせる。

次は朝田の家だ。

何回か行ったことはあるのでユイのナビゲーション無しでスイスイ進んでいく。画面内のユイはややご不満顔だ。

明日仮想世界行って目一杯甘やかそうと決意をし、少しだけスピードを上げる。

手頃な場所にバイクを停めておき、朝田の部屋の俺のアパートと

同じ型の旧式インターホンを押す。

『はい、どちら様ですか?』

「……俺だ」

『……どちら様でしょうか』

「じゃあな」

はい、四軒目終了。次々。

バイクのキーをくるくる弄びながら元来た道にターンバックする。いや、朝田さんには感謝感謝。

「待ちなさいよ」

手首をガツチリ掴まれ、前に進めなくなる。……どんな力してんの? 人類七大不思議だな。

「……どちら様でしょうか」

「あんた、ホンット嫌な性格してるわね」

お前も結構イイ性格してるけどな。

まあこういう隠さず素直に面と向かって言ってくるのは悪くない。むしろ好ましいと言えよう。

「……で、用は?」

この一日でずいぶん熟達したと思う『尋ねスキル』を発動させ、用件を訊く。や、これまでの流れで言えば用は解るが、違ってたら恥ずかしいからな。

「今日はバレンタインだから……はい、チョコレート」

「義理堅いな……」

何か周りのやつらがこう、義理堅いとホワイトデーに俺も返さなきゃ! って気持ちになるから不思議だ。

チラチラと俺を見てくる朝田。俺はこの反応を知っている。これはあれだ、食って味の感想を述べよというやつだ。この一日で学んだ。

包装紙を剥ぎ取ってチョコを一口。思わず顔をしかめる。

「え、あ、不味かった?」

「いや……てつきり普通の甘いチョコレートだと思ってたから、虚を突かれて驚いたただけだ」

まさかビターチョコレートだとは……。

塩を砂糖だと思って舐めたら凄く不味く感じるのと一緒だ。

最後の一欠片まで余すことなく食べると口中が兎に角苦い。ブラックコーヒーを飲んだときのような苦味が舌を襲う。

「まあ、旨かった。その、だな……サンキューな」

これも一日で何回も言っているはずなのに、どうしてももつつかえつつかえになつてしまう。

「どういたしました……で？」

「はっ。」

「どうせ他の人からも呼ばれてるんでしょ、早く行ったら？」

「お、おぉ……」

察しがいいですね、シノン姐さん。

事情を察してくれているシノン姐さんに今年一番の感謝を注ぎつつ、俺はバイクに跨がった。

× × ×

次は……どうしようか。

残りは竹宮、綾野、篠崎だが……篠崎が最後でいいや。

今走っている道から程近い竹宮の家に向かう道にハンドルを切る。ちなみに途中でガソリンを補給したため、俺の今月の小遣いは消し飛んだ。

ユイによるとこの辺らしいので道にバイクを停める。さつさと行って戻らねば、罰金をすることになり俺の来月の小遣いもアリスによって抹消されるだろう。

『はい、竹宮です……あつ、エイト！』

『よう。それで用件はなんだ二十文字以内に述べてくれ』

『な、なんでそんなに焦ってるの？』

『……すまん、ちよつと急ぎの用事があるから早口になった』

『そつか……じゃあ、ちよつと待ってて』

そう言つてインターホンは切られた。

平凡な一軒家の前にただずむ見慣れぬ男(眼が腐っている)を見て、通報する人がいないか冷や汗を掻きながら待つ。冷や汗を掻いていることがより一層の不審感を出していることには気づけなかった。

「お待たせ〜」

ALLOとは違う薄茶色のショートヘアを揺らし、部屋着であろう服に上着だけを羽織った格好でひよこひよこ歩いてくる。

茶髪、か……。そういやユーヅオも茶髪……。というよりかは亜麻色の髪をしていたな。

今は亡きアンダーワールドの人界最大の反逆者にして整合騎士長ベルクーリをも下した剣士を想起する。

……。まあ、後日新生アンダーワールドにある墓にでも行くとしよう。

「エイトオ？」

「あ、すまん。で、何だ？」

「ほら、チョコレートチョコレート。ホワイトデーにお返しよろしくね？」

汚い。さすが竹宮(トレジャーハンター)汚い。さりげなくホワイトデーのお返しを要求、確約するなんて……。魔性である。

また目の前でイト&セイをさせられ、僕の胃袋はカフェインで荒んでいます……。

× × ×

「……あ、あと二軒……」

フルマラソン完走直前のランナーってこんな気持ちなのかしら……。なんかサライが聞こえてきた……。うん？

「……ちよつとユイちゃん？ 何で俺のスマホに入ってるサライ流してんの？ 二十四時間走れって揶揄してんの？」

『……構ってくれないパパが悪いんです』

……。危ない危ない、危うくハンドルを切り損ねて危険な目に遭うところだった。

我が娘ながら、こう、何……父性を煽ってくるのが堪らないでござる。親父、小町に甘すぎてキモいとか思つてすまねえ……。

俺から親父に謝るといふ、マジで十年に一度ほどの超レアなことをしている、ユイがめつきり話さなくなつてしまった。

「ユイ、解つてくれ。パパもな？ 二人を養うのに必死なんだ……」

我が家の家計状況を一言で言うならば、俺が働くくらいにヤバイ。ユウキはまだ未成年だからできるだけ遊ばせてやりたいし、アリスはこつちの一般教養を身に付けたとはいえ、働けるほどではない。

『……わかりました。でも、今度一日だけずっと一緒にいてくださいね？』

「わかった」

……自分が着々と社畜への道を歩んでいるような気がしてならないが、働きたくねえなあ……。

ぼんやりと考えていたら、目的地を通りすぎてしまっていた。

綾野を呼ぶボタンを押そうとしたところで、思考が巡らされた。

……確か、綾野の親父つて、ルポライターだか作家だか家にいる仕事じゃなかったけ……。

あと一センチから十センチまで遠ざかり、また一センチまで近づく。見えない壁があるかのようにここから近づけなかった。

クツ、まさか、結果……？

そんなわけあるか。

自分でボケ、自分でツツコんだ結果、当たってしまったんです、手が呼び鈴に……。

『はい、綾野です』

綾野！ 僕は信じていたよ、君が出てくるのを！ ……チョコレトって食い過ぎると思考回路に異常を来す効でもあったっけ……。

「あー、比企谷八幡です」

自分でも「あれ、これただの自己紹介じゃね？」と思うほどの返答でもメールの件で俺が来たことを察したのか、さして疑いを持つことなく家から出てきた。

年上目線で言うと、この子が悪い男に騙されないか心配です。

しののんイチオシの横のユサユサが可愛らしく揺れ、さながら……いや、やめておこう。これを考えてしまうと桐ヶ谷妹を直視できなくなる。

さて、高校生にしてロリィ……な少女の右手にはピンクであしらわれた箱が。……うーん、嫌な予感。

「お母さんと一緒に作ったチョコレートです！ 食べてください」  
「よし、まかせろ」

包装紙を丁寧に剥ぎ、露になったチョコレートを一口。

さすがに一人暮らししている朝田や料理が得意な結城には見劣りならぬ味劣りするものの、中々に旨い。

「ど、どうでしょうか？ い、一応今までで一番うまくできたの何ですか……」

「……ん、旨いぞ。ま、料理つてのは反復が大事だからな。アリスのやつも料理は下手くそだったけど、今じゃ俺よりうまいからな……」

「……へー、そうですか」  
「そうなんでせうよ。……あの、その白眼視やめてくれない？ アドバイスしただけなんだけどな……」

× × ×

ガーナ、ガーナがあ……、カカオがあ……、明治があ……、カフェインがあ……、チョコレートがあ……。

今ならチョコレートに関するものすべてを憎めそう。

いや、チョコレートを貰えたのは俺も男だから嬉しいんだけどね？ 何個も何個も食うのは無理だ。死んでしまう。

だが、次で最後。次で最後なのだ……。  
「……でかすぎんだろ」

直径俺の掌分ある真円のチョコレートが最後の試練だ。もうちよつとしたチョコレートケーキ並のでかさである。

「ふっふっふ、ホワイトデー、よろしくね♪」

やべえ、竹宮と同じこと言ってるのに凄いいラツとするぞ☆

俺はもう悟りを開いたね。このチョコの中には今年一個もチョコを貰えなかった男たちの怨念が詰まっているのだ。食わねば。

……それはそうと、明日食べさせてくれるという選択肢は何でないの？

「……普通だ」

「コメントが微妙すぎるでしょ！」

「ウン、ウマイヨ、ユウキノヨリジユウバイクライウマイヨ」

「あんたねえ……」

こめかみをピクピクさせる篠崎にも構わず、無心で、まるでお経を唱えるときの気持ちで食べ進めていく。血糖値、大丈夫かしら……。

× × ×

「終わった……」

俺はやった。ひとつ残らずチョコレートを駆逐したのだ。

意気揚々とバイクを自宅に向け、走る。道すがら鼻血が少し垂れてきたが些事だ。

鼻歌を口ずさみながらアパート賃貸者用の駐車場に愛二輪車を停め、階段を上る。

廊下の一番奥の自室である201号室の鍵は紺野がいるから空いているはずだ。アリスが帰宅しているかは判らないが。

「たでーまー」

「あ、お帰り〜。アリス、お兄さんが帰ったよ」

「わかった、わかったから押さないで……」

相変わらず仲睦まじいですね。……あ。

見つけた。見つけてしまった。ギリギリ崖っぷちな俺の胃を千尋の谷に突き落とすものを。

「そ、その……ですね。今日は女性が男性に思いを伝え、チョコレートを渡す日だと聞いたので——」

——斯くして

「——チョコレートを、食べてみて?」

——死刑宣告は下された。

首を少し傾げ、上目遣いになっていることも、長い絹のような金髪が垂れ、若干うなじが見えていることにも気づかず——

「ぐふっ」

——俺は限界を迎えた。

視界が暗転する。

バレンタインという日は、リア充と非リア充が明確に分かれる日である。

俺はそう思っているし、事実そうだ。

元々が聖ウァレンティヌスの命日だというのに、それに託つけて祝ったり騒いだりするのはまちがっている。

それでも普段は出せない勇氣、想いを伝える切っ掛けになり、誰かを幸せにすることもあるのだろう。

だから、バレンタインという風習は続いているし、終わらない。

人の命日だけど、誰かが勇氣を出して想いを伝えられるように願って、ハッピーバレンタイン……。

……俺がアリスのチョコレートを食べるのが嫌だから気絶したと勘違いしたアリスを慰めるのに一時間かかったのはまた別の話……。



こうして、彼と彼女の家族は形成された。

妹。

四音一文字のこの言葉の定義は実に曖昧である。いや、単純に見えて深いと言うべきか。

単に血のつながりがある年下の女の子を妹と呼ぶなら、弟の配偶者や再婚した親の相手方の娘を妹とは呼べないのだろうか？ 否、そうではないはずだ。そこに確かな絆があるならばたとえ血が繋がっていなくても家族と呼んでいいはずなのだ。

まあ家族の在り方は家庭によって様々だろう。各々がそう思える形ならそれでいい。

さて、ここではまだ家族になる前の俺と彼女についての話をしよう。

× × ×

一日目。

退院数日後……つまりあいつが初めて俺の家に来た時、自称幸薄いクール系男子だと思っっている俺ですら面白いと思うほどガチガチだった。お邪魔しますと言った時にミサトさんよろしくあの名ゼリフを言えたことは密かな喜びである。

退院手続きやらなんやで疲れていた俺は飯を食ったらすぐに眠りに落ちた。朝起きた時に俺の布団とあいつの布団が目一杯離されていたのを見て、まあ当然だなと思ったことは今でもよく覚えている。

二日目。

二日目はリハビリの成果の確認と家周辺の施設の把握のために軽い散歩に出かけることになった。必死に松葉杖をつきながら歩いていく姿はまだ自分が二十代にも関わらず若さを感じた。薬とマスクの効果か、はたまた出来なかったことができるようになった喜びか、満面の笑みを道行く人々に振りまいていた。

三日目。

あいつの生活費と医療費を稼ぐためにバイトを掛け持ちすることを考え始めるが、病人である未成年を家に一人にするのは忍びない。なら内職かと考えたところでGGOなら金を稼げることに思い至る。早速朝田に改めてGGOについて色々訊いた。

四日目。

久々のGGOで早速死にかけた。どうやらB○Bの優勝者というのほかなり目立つらしい。しかしお陰で一万円分稼げた。日給一万円なら俺の年齢にしては充分だろう。

五日目。

あいつに学校に行きたいのかを訊いた。あからさまに遠慮していたが、恐らく行きたいのだろう。表向きは仮想世界に長く囚われていた人の救済措置のためにあるあの学校なら入れるかもしれない。

六日目。

校長先生をはじめ、学校のお偉いさん方にあいつの話の打診してみた。当然難色を示されたが、菊岡というパイプを使って何とか来年度から高校一年生として通わせてもらおうことにしてもらった。この話をあいつにしたら、驚きと喜びが混ざった顔をしていた。まあ、久々の学校生活に幸多きことを願うくらいはしよう。

寝る時の布団の位置が心なしか近くなった気がせんでもない。

八日目。

昨日は一昨日の件で疲れていたのか、ほぼ日記と化しつつあるあいつの体調変化を記すためのこのノートに何の記載もしていない。昨日は寝てたことしか覚えてない。反省しとこう。

くくくく

二十三日目。

あいつにGGOで金稼いでいることがばれた。凄い申し訳なさそうな顔をされた。年下の女子の申し訳なさそうな顔って罪悪感を煽ってくるから苦手である。これも兄の宿命か……。

二十四日目。

あいつが凄い引つ付いてくるようになった。ブラコン？

× × ×

一日目。

退院から数日後。ボクはお兄さんの家でこれから過ごすことになる。自分で決めたことだから不満はない。ただやっぱり男性と同じ部屋で過ごすのは落ち着かないだろう。だけど家に入る時のやり取りで少し緊張が解れた。ボクが「お邪魔します」と言ったら、お兄さんは「……ここはもうお前の家でもあるんだから言う言葉が違うだろう」と言ってくれた。お兄さんは見た目は怖いし、かなりぶつきらばうだけど、根は優しい。……でもさすがに布団は目一杯離したけど。

二日目。

今日はボクのリハビリ成果の確認と家の周辺の施設の把握のために近場で散歩をした。マスクをしていたこともあつてかなり息苦しかったけど、何より自分の足で歩けるというのが嬉しくてたまらなかった。道行く人々に挨拶をしたら、笑顔で返してくれる人、戸惑いながらも返事をしてくれる人、無視をする人など様々な人がいた。改めて人に触れる実感が感じられた。

三日目。

お兄さんは用があるとかで出て行った。夕飯までに帰って来て、急いで夕飯（カレー）を作ってくれた。お兄さんは自分の料理の腕前を小学六年生レベルだと言っていたけど、ボクにとってはお兄さんの料理はごちそうだ。お兄さんの料理は心を温かくしてくれる。……ボクも、料理のレパートリーを増やしたほうがいいのかなあ……。

四日目。

お兄さんがどこかの仮想世界にダイブしちゃってすごく暇だった。仕方なくお兄さんが実家から持ってきた本を読むことにした。『蜘蛛の糸』。お釈迦様が生前一つだけ善行をした地獄の住人カンダタに極楽から蜘蛛の糸を垂らす話だ。この話を読んで、お兄さんが言ったことを思い出す。『生前善業を一つだけしかしてないカンダタが極楽へ行けるかもしれないなら、これまでの人生で苦しんだ奴が幸せになっても悪行ではないだろ。ソースは蜘蛛の糸』。誰を指して言った

のかはすぐに分かった。だからこそ、嬉しくてたまらなかった。

五日目。

お兄さんに学校に行きたいか、と問われた。

行きたい。ボクだって人並みに友達を作って、勉強したり、行事と一緒にやったり、それに……恋だってしてみたい。だけど、ボクのそんな願望を叶えるよりも、これ以上お兄さんに……家族に迷惑を掛けたくなかった。

六日目。

お兄さんがスーツを着て出かけて行った。大学生がスーツを着るイメージが全く湧かないけど、実際着てるんだからたまには着るのかもしれない。帰って来たお兄さんはとても疲れた顔をしていた。

お兄さんが風呂に入っている時に、お兄さんが出かけた時にはなかった袋を見る。それは高校の資料だった。

ボクが本当は学校に行きたいと思っていたことを見透かしていたのだ。恥ずかしい。でも嬉しい。そんな気持ちを声にはできなかったけど、少しでもお兄さんに伝えたくて、今日は少し布団を近づけて寝た。

七日目。

一応義務教育とは言え、小中学校にロクに行っていないボクの入学を認めさせるためによりほど疲れたのかお兄さんはグツスリ寝ていた。その顔を見るとボクまで眠くなったり顔が緩んだりする。今日は一日中お昼寝をした。

八日目。

お兄さんが昨日ずっと寝てて、家事をしなかったことについて謝ってきたけど、むしろ家事はボクに任せて欲しいから無問題だった。お兄さんはボクのために色々してくれている。ならボクもお兄さんに出来る限りの事をしたと思う。

くくくく

二十三日目。

お兄さんが家で何をしていたかが分かった。GGOというゲームらしい。そのゲームは日本で唯一プロがあるゲームで、平たく言え

ば、現実世界のお金を稼げるゲームらしい。お兄さんはボクの治療費、二人分の食費、ボクの入学のための貯金などのためにこのゲームをしていたらしい。……すごく、申し訳なかった。そう思ったことを見透かされたのか、「未成年は養われるのが仕事だ」と迷言を言ってくれた。……胸が痛い。

二十四日目。

胸が痛い。お兄さんと話すと、お兄さんに触れると、お兄さんを見ると胸が痛くなる。でもそんな痛みなんか関係ないかのようにお兄さんと話したくなる。お兄さんに触れたくなる。お兄さんを見たくなる。

これが■■■■■■■■■■ (文字が塗りつぶされている)

× × ×

「……カレールーよし、人参、じゃがいも、玉ねぎ、肉……買い忘れないよな?」

「今日はカレー?」

「そうだが……嫌か?」

「ううん! ボクお兄さんのカレー好きだよ」

「もうお前の方が美味しいと思うけどな……」

しかしながら自分が作る料理が好きだと言ってもらえて悪い気はしない。マイバッグに今夜の材料を詰めて、ここからかなり距離のある自宅へと足を向ける。だが安さには代えられない。

「お兄さん、手、出して?」

「……ほらよ」

これにももう慣れてきた。一緒に出かけたなら帰りに手を繋ぐ。それがもう暗黙の了解になっていた。未だ恥ずかしさは抜けきらないが、それでも今まで人に触れることさえ叶わなかったこいつにとって何か特別な意味を持つのだろう。俺もこいつは女子というか妹と認識するようになってきたのも手を繋ぐことのできる要因だろう。

きつく、固く結んだ手もいずれは解ける時が来る。それは家族だろ

うと友人だろうと等しく同じだ。なればこそ、今この時、この一瞬を無二のものだと大切にするのが重要なのだろう。

こんな取り留めのない日常すらもいつかは終わる。この世に無終などないのだから、大切な今を積み重ね、未来へと進んで行こう。

× × ×

五十七日目。

今日は久々にお兄さんのカレーを食べた。味は普通だけれど、心を満たしてくれる。

カレーだけに限らず、何気ないことでもボクの心を満たしてくれるお兄さんが、ボクは好きなんだ。

## 第1章 Alone crad

こうして、比企谷八幡は仮想世界に旅立つ。

十一月六日月曜日。

千葉の自宅のベットにヘルメットのようなものをかぶって寝ている青年がいた。

青年の名前は比企谷八幡。学校ではもはやボツチを極めている程の筋金入りのボツチだ。

ヘルメットのようなものの名前は《ナーヴギア》。

八幡はマイエンジェルと知っている妹の比企谷小町が福引きで当たったナーヴギアSAO同梱版を受験生だからという理由で譲り受けたのである。

(さすがマイエンジェル小町だぜ)

そして今日いよいよ多くのゲーマーを虜にした《Sword・Ar  
t・Online》の正式サービス開始日なのだ。

一時まで

五…

四…

三…

二…

一…

零!

さあ、準備は整った。

後は完全（フル）ダイブする魔法の言葉を口にするだけだ。

「リンク・チュート!」

……緊張しすぎた…。

ダイブした後にカラフルな円柱みたいなものが飛んでくる場所を通り過ぎ、《Welcome to Sword Art Online!》という文字が浮かび上がって、予め作っておいたアバターの姿に。青い光に包まれ次に目を開けた瞬間……

街が広がっていた。

それは比喻でも何でもなく、文字通りに広がっていた。

これまでのゲームまでとは格が違う……いや、比べることすらおこがましかった。

(これが…SAO)

とはいえ何時までも呆けてはいられない。

早速武器屋に行こうとしたら、

(ヤベエ、今の感動で武器屋の場所忘れちゃった)

仕方なく、誰かに教えて貰おうと思うと迷いなく路地裏に入っていく人影を見つけ、恐らくβテスターだろうな、とあたりをつけて話しかけようとした。

「す、すいませえ」その迷いない走り、お前さんβテスターだろ!」……(誰だよ、人が折角話しかけようとしたところに)

振り替えると赤色のバンダナで髪を逆立てているイケメンがいた。因みにβテスターの方は、青い髪をした勇者みたいな格好だ。

八幡はリアルの髪型を少し伸ばした感じだ。眼は腐っている。八幡曰く、「眼が腐っていない俺とか違和感がありすぎる」らしい。



βテストターの男(?)が

「う、うん。そうだけど何か用?」

?何か変だな。まあいいか。

「おうーもしβテストターなら序盤のレクチャーを頼みたくてな!」

バンダナの奴うるさいしコミュ力高いな。

「わかった。いいよ。じゃあ武器屋行こう」

あ、あれ?俺は?くっ、頼むならここしかない!

「あ、あの僕もいいでしゅか?」

噛んだあああ!やつちまった...とか思ってたら二人とも驚いてた。

「すっげえ!いつからいたんだ?」

「たしかにすごいね。隠蔽あげてるの?」

あ、あのそんなに驚かれると...

「えーっと、まずお前が声をかけるまえにいた。俺もレクチャー頼もうと思っただけ。あと隠蔽って何だ?」

「あ、君もビギナー?わかった。レクチャーさせてもらうね。わ...俺はキリト。よろしく」

「お前さんもか!俺はクライン!よろしくな!」

「あ、ああ。俺はエイトだ」

あのあと武器屋で武器を買った俺達は、草原にきていた。武器はキリトが片手直剣、クラインが曲刀、俺も片手直剣だ。

「フッ!、つとこんなもんかな」

俺は片手剣基本スキル《スラント》でフレンジーボアを倒した。

「グツジョブ。エイト上手いな」

「こんなもん説明書読めば誰でも出来る」

「クツソオ！俺も説明書読んどきや良かった！」

おい、言ってる間に突進されて来てるぞ。あ、そのままクラインの股間に痛そうだな。

ん？キリトが平然としてる男として思う所はないのか？それとも…ま、言う必要はないか。

「クライン、ゲームに痛覚はないぞ」

「あ、そうだった」

ないんだ…。まあ当然か。

「まだ倒せないのか？」

「だってよう、エイト！あいつ、動くし」

当たり前だろ…。

「あはは、動くのは当たり前だよ。大事なのはモーションだ。後は勝手にシステムが当ててくれるよ」

クラインが「モーション、モーション」と呟いている。そろそろ助け船を出すか。

「居合いの溜めがモーションで斬るのはシステムみたいな感じか？」

「成る程！キリトOKだ！」

キリトが剣で防いでいたフレンジーボアをクラインの方へ蹴ると、フレンジーボアはクラインの方へ突進した。

「フーツ、フーツ」

クラインは深呼吸をして腰を落とし、曲刀を構え、ソードスキルを発動しようとする。そして、フレンジーボアがクラインに当たる瞬間

「りゃあっ！」

クラインがソードスキルを放った。

そのソードスキル《リーバー》は見事にフレンジーボアにヒットし、フレンジーボアのHPを全損させた。

「うおっしやあああ！」

ガッツポーズするクラインにキリトは剣を鞘に収めて近づき、

「スライムレベルの初勝利おめでとう」

「おう！って、は？スライムレベル？俺はてつきり中ボス位かと…」

何言ってるんだこいつは。どんなクソゲーだ。

「そんな訳ねえだろ…」

と口をついたらまた二人に驚かれた。……泣いていい？

「し、しっかし本当にスゲーな！完全ダイブ技術は！俺はこの時代に生まれてよかったぜ！」

「大袈裟だなあ」

苦笑しながら言うキリトもそうは見えない。きっと生粋のゲーマーなのだろう。

「まあ、そうだな」

俺もこの技術は凄いと思うので素直に答えた。

「我ながら運がいいよな！SAOが買えてナーヴギアまで揃えたかいがあつたぜ！」

「じゃあクラインはこのゲームが初めてのナーヴギア用ソフトなの？…か？」

「ああ、寧ろSAO買えたからナーヴギアも揃えたって感じかな」  
「でも運ならキリトの方が単純計算で十倍いいぞ」

「ホントだよなこの幸せ者！」

クラインがバンツ！とキリトの背中を叩く。しかもちよつと意味違くないか。

キリトは「そうかなあ」という言葉と共に苦笑する。

「さて、勘を掴むためにまだ狩るのか？」

と俺が言うと

「つたりめえよ！…といたいところなんだが一回落ちて飯食わねえとなんだよな。五時半にピザの宅配頼んでっから」

用意周到だな…。キリトも同じことを思ったのか

「用意周到だな…」

と言っていた。

そこで思い出したかのよ

うにクラインが

「あ、俺飯食った後他のゲームで知り合いだった奴らと《はじまりの街》で落ち合う約束してっからお前らもどうだ？紹介すっからフレン

ド登録でもどうだ？いつでもメールできるし」

「断る」

いや、無理にきまつてるだろ。ボツチには難易度高過ぎです。

「そ、そうか。キリトはどうだ？」

「わた…俺もいいよ」

ほほう…キリトも弱ボツチとみた。

「そうか…いや、無理にや言わねえよ。紹介する機会もあるだろうしな」

そんな機会無いに越したことはない。

「ほんじゃ、俺一回落ちるわ。ありがとうなキリト、色々レクチャー。エイトも楽しかったぜ！」

そういつて手を差し出してくるクライン。………何これ？

「握手だよ、握手」

ああ、握手か。やっぱこいつコミュ力高いな。キリト、俺の順番でクラインの右手を握る。そして、俺達は手を離れた。

———思えばこの時から異変は起きてきたのだろう。

手を離れたクラインが右手の人差し指と中指を下に振る。《メインメニュー・ウィンドウ》を呼び出す動作だった気がする。俺は手頃な岩でアイテムの整理をしようとしたとき、

「あれっ」

というクラインの声が聞こえた。

「どうしたんだ？」

と声をかけると、

「いや…ログアウトボタンがねえんだよ」

無い？そんな訳無い。メインメニュー・ウィンドウを開いて確認するとログアウトボタンが………無い？

「な？無いだろ？」

「うん、無いね」

「ああ、確かに無い」

———おかしい。ログアウトボタンが無いなんて致命的なバグなはずだ。それなのに運営から何の連絡が無いなんて……。

「ま、サービス初日だかな、今頃GMコールが殺到して運営は半泣きだろうな」

「余裕かましてるけど良いの？ピザ」

俺のアンチョビピッツアとジンジャーエールがーとクラインが嘆いている間に俺はキリトに聞いた。

「なあ、キリト。他にログアウトする方法ってなかったか？」

「えっ？うーん、確かなかった…と思う」

その言葉にクラインが反論する。

「んなバカな！ぜってえなんかあるって！」

クラインが戻れ！ログアウト！脱出！とか言ってアホやっている間に俺はさらにキリトに聞く。

「じゃあログアウトするにはバグが直るのを待つか、リアルでナーヴギアを外してもらえないかってことか？」

「うん。そうなるな」

ようやく落ち着いたのかクラインが息をきらしながら言ってきた。

……ってどんだけ叫んだんだ？

「でも、オレ、一人暮らしだぜ。おめえらは？」

「わ…俺は母親と妹と三人暮らし…エイトは？」

話をふられたので答える。

「両親と妹と四人暮らしだ」

クラインがものすごい勢いで食い付いてくる。

「おおっ！キリトとエイトの妹っていく」「お前に俺の妹はやらん！」

「…」

「…」

あれ？スルーされた？

「…それはそうと、この状況で余裕だな。お前…言っとくけど妹はゲーム嫌いだし、俺らみたいな人種とは接点皆無だぞ…そんなことより、おかしいと思わない？この状況」

「ああ、思う」

「当然だろ？バグなんだってんだから」

まあ、そりゃそう思うだろうけどそういうことじゃ無い。

「ただのバグじゃない、《ログアウト不能》なんてゲーム運営に関わる大問題だし、お前のピザみたいに現実での金銭的損害をした奴だっているだろう」

「……………冷めたピッツアなんてネバラない納豆以下だぜ……………」

キリトの言葉に俺は続ける。

「この状況なら、運営は何であれ一度プレイヤーを強制ログアウトさせるのが当然の措置だ……………しかも俺達がバグに気付いてから十五分は経っているのに、切断どころか運営のアナウンスすらないのは奇妙すぎる」

「む、言われてみりやそうだな」

言うときラインは手で顎の髭をジヨリジヨリして眼を鋭くした。

……………普段からその顔してれば良いのにと思ったのは内緒だ。

「SAOの開発運営元の《アーガス》といやあ、ユーザー重視で名前を売ってきたゲーム会社だろ？その信用があつから、初めてリリースするネットゲでもあんな争奪戦になったのに初日にこんなでけえポカやつちや意味ねえぜ」

「ああ、そうだな」

「うん、そうだね」

言いながら俺はフィールドを見渡す。

リアルでは見ることができないような夕暮れの空と草原。

遙か彼方にある二層に続く迷宮区。

そんな仮想空間だけど確かにここにある景色が、何処からか聞こえてきた鐘の音と共に、

変わった。

信じられずとも、デスゲームは始まる。

青い光に包まれた俺達（後にキリトに聞いたら《転移》らしい）は眩しさのあまり目を閉じた。

そして、次に目を開けたらそこは草原ではなかった……え？どこ、ここ？うつすら見覚えがあるような……。

「……ゲーム開始地点のはじまりの街じゃねえか？」

解説ありがとう、クライン君。

しかし……何で俺達は集められた？

ざっと辺りを見回すと数千……いや、一万人近くいる。

ふええ、人が多いよお……。

プレイヤー達は最初は黙ってキョロキョロしていたがやがて、ざわざわ、ざわざわという声がどこかしこから聞こえてきた。

「どうなっているの？」

「これでログアウトできるのか？」

「早くしてくれよ」

しかし、何も起こらないので遂にプレイヤー達の不満が爆発した。

「ふざけんなー！」

「早くGM出てこいー！」

などとプレイヤーが叫んでいる中、誰かが言った。

「あつ………上を見ろー！」

その声につられるように上を見る俺達。

そこには、【Warning】、そして【System Announcement】と読めた。

他のプレイヤーが運営か、と安心する中、俺は考えていた。

（おかしい……さつきも言った通りこの場合さつきとプレイヤーをログアウトさせ、後日謝罪、というのが妥当だが……まあ、これから説明があるだろ）

と思い、上を見た。

しかし次に起きた現象はプレイヤー全員の期待を裏切るものだった。

空を埋め尽くすパターンを中心から、まるで血の様な赤い雫が高い粘度を持った液体の様に滴り、しかし落下することなく空中でその形状を変えた。

出現したのは、20メートルになろうかという、フード付きの巨大な真紅のローブを来た巨人……いや、顔が無いからローブだけなのかもしれない。

横でキリトが

「βテストの時の……」

とか呟いていることから βテストの時に見た事があるのだろう。そんなことはどうでもいい。

他のプレイヤー……いや、ビギナーは何なのかすら分からないのだろう。βスターも何故赤ローブが出てきたのか分からないようだ。

「あれ、GM?」

という声がそこかしこから聞こえてきた。

そんな声を抑えるかのように赤ローブは腕を動かし、声を発した。

『プレイヤーの諸君、私の世界へようこそ』

何? 《私の世界》だと? GMなら納得するが今更それを宣言してどうしようというんだ?

思わず二人と顔を合わせると赤ローブは更に続けた。

『私の名前は茅場晶彦。今やこの世界をコントロールできる唯一の間だ』

「なっ——」

思わず息を呑んだ。他のプレイヤーも同様だ。

茅場晶彦——知ってる、いや、知らないはずがない。

数年前まで数多くある弱小ゲーム会社だった《アーガス》が最大手まで呼ばれるようになった最大の要因にして、天才量子物理学者。

しかもこのSAOの開発ディレクターにして、ナーヴギアの基礎設計者でもあるのだ。

だが…彼は裏方に徹し、メディアへの露出を極力避け、ゲームマスターの役回りなどやったことがないはずだ。そんな奴が何故——



そんな様子を気にしてないかのように赤ローブ——茅場晶彦は続ける。

『プレイヤー諸君はすでにメインメニューにあるログアウトボタンが消滅していることに気付いてきえると思う。しかしゲームの不具合ではない。繰り返し。これはゲームの不具合ではなく、《ソードアート・オンライン》本来の仕様である』

「し、仕様……だと」

クラインが戦慄したように繰り返す。しかし、気にしている余裕は俺にもない。

『諸君は今後、この城の頂を極めるまで、自発的にログアウトすることはできない』

この城、城という単語は説明書にも1つしか書いてなかった。

——アインクラッド、この鋼鉄でできた城を最上層である百層までクリアしろと言っているのだろう。

明確な目的があることで少し冷静になれた俺は茅場の言葉に耳を傾ける。

『……また、外部の人間の手による、ナーヴギアの停止あるいは解除も有り得ない。もしそれが試みられた場合——』

わずかな間。それがどれだけの人を不安にさせただろうか。

『——ナーヴギアの信号素子が発する高出力マイクロウェーブが、諸君の脳を破壊し、生命活動を停止させる』

——思考が停止した。

ようやく思考を開始した脳で把握したのは1つの言葉。

——死

死ぬということだった。

認めたくない。信じたくない。そんな気持ちは同じなのかクラインが声が聞こえた。

「はは……何言ってるんだアイツ、おかしいんじゃないのか。んなことできるわけねえ、ナーヴギアは……ただのゲーム機じゃねえか。脳を破壊するなんて……んな真似ができるわけねえだろ。そうだとキリト！エイト！」

後半はもうほとんど掠れていた。

茅場の言ったことは原理的には電子レンジだ。

感情では認めたくないが、理屈では理解している  
——可能だと。

クラインの問いにキリトが答える。

「……………原理的には、有り得なくもないけど……………でも…ハツタリに決まってる」

希望的観測なキリトの言葉。

違う。有り得なくもないんじゃない、可能なんだ。

「いや……………ハツタリなんかじゃない。たとえばケーブルを引っこ抜こうと内部電源がある。それにアイツは日本一の天才だ。アイツ以上にナーヴギアを理解している奴はいない」

「じ、じゃあどうするんだよ！瞬間停電でもあつたら！」

そんなクラインの疑問ともただの叫びともとれる声が聞こえたのか茅場晶彦は言う。

『より具体的には、十分間の外部電源切断、二時間のネットワーク回線切断、ナーヴギア本体のロック解除または分解または破壊の試み——以上のいずれかの条件によって脳破壊シークエンスが実行される。この条件は、すでに外部世界では当局およびマスコミを通して告知されている。ちなみに現時点で、プレイヤーの家族友人等が警告を無視してナーヴギアの強制除装を試みた例が少なからずあり、その結果』  
機械のように淡々と事を述べる茅場はそこで一回言葉を切り、

『——残念ながら、すでに二百十三名のプレイヤーが、アインクラッド及び現実世界からも永久退場している』

残酷な事実をそう述べた。

二百十三人——言葉で聞くと少なく感じるが現実でそんな人を殺したら、まず間違いなく死刑だろう。

そんな風に信じられずにいたらクラインが

「信じねえ……………信じねえぞオレは」

「ただの脅しだろ。できるわけねえそんなこと。くだらねえことぐだぐだ言っただけで、とつとどだしやがれってんだ。いつまでもこんな

イベントに付き合ってられるほどヒマじゃねえんだ。そうだよ……イベントだろ全部。オープニングの演出なんだから。そうだから」

オープニングの演出だったらこんな趣味が悪い事はない。しかし、オープニングじゃない分だけ余計たちが悪い。

しかし、そんな望みを踏みにじるかの様に茅場は実務的に言った。

『諸君が、向こう側に置いてきた肉体の心配をする必要はない。現在、あらゆるテレビ、ラジオ、ネットメディアはこの状況を、多数の死者が出ていることも含め、繰り返し報道している。諸君のナーヴギアが強引に除装される危険はすでに低くなっていると云っていいだろう。今後、諸君の現実の体は、ナーヴギアを装着したまま二時間の回線切断猶予時間のうちに病院その他の施設へと搬送され、厳重な介護態勢のもとにおかれるはずだ。諸君には、安心して……ゲーム攻略に励んでほしい』

「な……」

茅場からのゲーム攻略をしろという言葉に遂にキリトが吼えた。

「ふざけないで！ゲームを攻略しろ!?!ログアウト不能の状態で呑気に遊べって言うの!?!」

キリトは一度言葉を切って、

「こんなのもうゲームでも何でもない!」

と言った。

そして、その声が届いたかのように、茅場晶彦は告げた。

『しかし、充分に留意してもらいたい。諸君にとって、《ソードアート・オンライン》は、すでにただのゲームではない。もう一つの現実と言うべき存在だ。……今後、ゲームにおいて、あらゆる蘇生手段は機能しない。ヒットポイントがゼロになった瞬間、諸君のアバターは消滅し、同時に』

それは、現実の終わりと共に、

『諸君らの脳は、ナーヴギアによって破壊される』

———デスクゲームの開始を告げたのだった。

初めて、比企谷八幡は決意を固める。

茅場の台詞に俺は自分のヒットポイントを見た。

261 / 261…。

これが俺の命の残量。

もし0になったら…いや、よそう。

しかし、そんな宣告を受けて、いったいどれだけのプレイヤーが攻略に参加するのだろうか。

いや、そもそも気付いているのか？俺達はアインクラッドを極めなければいけないことを。

しかし、そんな俺の懸念は茅場によってはらされた。

『諸君がこのゲームから解放される条件は、たった一つ。先に述べたとおり、アインクラッド最上部、第百層まで辿り着き、そこで待つ最終ボスを倒してゲームをクリアすればよい。その瞬間、生き残ったプレイヤー全員が安全にログアウトされることを保証しよう』

しん、と沈黙がおりた。

俺達がこの城——アインクラッドを極めなければいけないことによく気付いたのだろう。

しかし…

「クリア…第百層だとお!？」

突然クラインが声を張り上げ、茅場を指差す。

「で、できるわきやねえだろうが!!ベータじゃろくに上れなかったって聞いたぞ!!」

…そう、βテストの一ヶ月では第六層までしかクリアされなかったようだ。

人数にして今の約十分の一だが、そもそもデスゲームとなった今、クリアするのにいったい何カ月…いや、何年かかるか。

ざわめきはあるものの恐怖や絶望といった声は聞き取れない。

おそらく、未だにこの状況が《過剰なオープニング演出》なのか《本当の危機》なのか判断がつかないのだろう。

…無理もない。今まで死の危険とは無縁の生活をしていたのに、

いきなり自分の命を賭けたゲームをしなければいけないなんて、俺みたいな悲観主義者くらいしか信じられないだろう。

その時、赤ローブは僅かに裾を揺らし、感情をなくしたかのような声で告げた。

『それでは、最後に、諸君にとつてこの世界が唯一の現実であるという証拠を見せよう。証拠のアイテムストレージに、私からのプレゼントを用意してある。確認してくれ給え』

それを聞いてプレイヤー達は、一斉に右手を下に振った。俺もそれに倣う。

メインメニューから、アイテム欄のタブを開くとそれはあった。

《手鏡》。それがアイテムの名前だ。

若干警戒しながら、アイテムをオブジェクト化して持つが、特に何も起こらない。

思わずキリト達の方を向くと、キリト達のアバターが光った。

少し遅れて俺の視界も白に染まる。

光が収まり、もう一度手鏡を見ると……俺がいた。一度視線を外し、たつぷり数秒おいてもう一度手鏡を見ると……腐った目、ピヨコンと立ってるアホ毛、ちよいちよい跳ねてる髪の毛……間違いない、俺だ。

キリトとクラインはどうなっているのだろうか。

二人の方を向くと、赤いバンダナをした男……クラインだろう、は逆立った赤い髪に変わりはなかったが切れ長だった目は、ギョロリとしており、むさ苦しい無精ひげが生えている。

クラインはまだいいだろう。問題は——キリトだ。

艶やかな黒いロングストレートな髪に慎ましいが確かにある胸、身長も180cm位から160cm前半位になっていた。

そう、キリトは……

「キ、キリト……おめえ……」

「女だったのか……?」

女だったのだ。

「うん……騙しててごめん」

しかし、そんなことはどうでもいい、ネカマ、ネナベなんてよくあることだ。

「じ、じゃあ……そこにいるのがエイトか？」

「ああ……」

「で、でもどうやって……？」

「た、多分ナーヴギアは顔をすっぽり覆ってるから顔の精細な所まで把握できるんだよ……」

とキリトが答える。

「で、でもよ身長とか……体格はどうなんだよ」

恐らくだがその問いには心当たりがある。

「多分キャリブレーションだろうな、やらなかったか？体をあちこち触るの」

そう言ったあと、キリトの顔は赤かった。自分で自分の胸に触ったりするのが恥ずかしかったのだろう。

「あ、ああ……そういうことか……」

「恐らくだが、あいつはさつきここは『現実』だと言った。このアバターとヒットポイントは両方本物の体だと強制的に認識させるために現実の姿にしたんだろう。」

「でも……でもよお、エイト」

「なんでだ!?そもそもなんでこんなことを!？」

叫ぶクライイン。そう言いたくなるのも無理はない。

「落ち着け、どうせ、直ぐに教えてくれるだろう」

そう、ここまで説明して、目的を説明しないなんて有り得ない。俺の中には妙な確信があった。

そして茅場は俺の期待を裏切ることなく言った。

『諸君は今、なぜ、と思っっているだろう。なぜ私は——SAO及びナーヴギア開発者の茅場晶彦はこんなことをしたのか？これは大規模なテロなのか？あるいは身代金目的の誘拐事件なのか？』と』

……聞き間違いかもしれないが初めて茅場の声に感情が混じったように聞こえた。

『私の目的は、そのどちらでもない。それどころか、今の私は、すでに一切の目的も、理由も持たない。なぜなら……この状況こそが、私にとっての最終目的だからだ。この世界を創り出し、観賞するためにのみ私はナーヴギアを、SAOを造った。そして今、全ては達成せしめられた』

ほんの短い間において、無機質さを取り戻した声が響いた。

『……以上で《ソードアート・オンライン》正式サービスのチュートリアルを終了する。プレイヤー諸君の——健闘を祈る』

そういつて赤ローブは頭、胸、腕、足と順番に赤い血の色をした水面に沈んでいき、最後に波紋を残して——消えた。

俺は一つの決意をした。

プレイヤーの全員がしているであろう決意を。

——絶対に、生きて帰る。

俺がその決意をした瞬間、ようやくプレイヤー達が反応を示した。

「嘘だろ……なんだよこれ、嘘だろ！」

「ふざけるなよ！出せ！ここから出せよ！」

「こんなの困る！このあと約束があるのよ！」

「嫌ああ！帰して！帰してよおおお！」

阿鼻叫喚、まさに地獄絵図。

他のプレイヤーに比べてだが冷静だった俺はこの場から立ち去ろうと——

「エイト！クライン！ちょっと来て！」

「ぐえっ」

……できなかつた。

「私は今から次の村に向かうからエイト達もこない？」

「あいつの言葉が全部本当なら、この世界で生き残っていくためには、

自分を強化しなきゃいけないの。知ってると思うけどMMORPGはプレイヤー間でのリソースの奪い合い。システムが供給する経験値、お金、アイテムを、より多く獲得した人だけが強くなれるの。この《はじまりの街》周辺のフィールドは、同じことを考える人に狩り尽くされて枯渇すると思う。だから今すぐにでも次の村を拠点にしたほうがいい。私は次の村までの危険な道を全部知ってるから、レベル1の今でも安全に辿りつける」

長い言葉を言って疲れたのだろう、キリトは息を整えている。

クラインは顔を歪めて、

「でも……でもよ。前に言ったら。おりや、他のゲームでダチだった奴らと一緒に徹夜で並んでソフト買ったんだ。そいつらもうログインして、さっきの広場にいるはずだ。置いて……いけねえ」  
今度はキリトが顔を歪めた。いくらキリトでも複数人はキツイの  
だろう。

俺は驚愕していた。人は自らの命の危険のとき程本性が出るものだ。

このクラインという男は根っからのお人好しなのだろう。

「そう……エ、エイトは？」

「いや……俺もい」

と断ろうとした瞬間、俺は気付いた。……キリトの瞳が僅かに潤んでいるのに。

クラインが小声で

「頼む、付いて行ってやってくれ」

と俺に言ってくる。

俺は、

「……わかった、付いていく」

と答えた。

「そっか……じゃあここでお別れだな」

とクラインが言って、振り向いて行こうとした時に、

「キリト！おめえ可愛い顔してるじゃねえか、結構好みだぜ俺！

エイト！腐った目はリアルでもなんだな、ちよつとは治そうと努力



しろよ！」

「クラインもその野武士面の方が百倍似合ってるよ！」

「うるせえ！俺の目はデフォだ！ほっとけ野武士面！」

……そんな軽口を叩きながら俺達は別れたのだった。

はじまりの街の北西の門を抜けた俺達は、草原を駆けていた。

目の前には一匹の狼。

狼を俺のソードスキルで倒す。

「あああああああ!!」

やる。

俺は生き残る。

このゲームをクリアして、現実に戻る。

さつきもした決意を胸に俺達は草原を駆けていった。

準備万端に、比企谷八幡は装備を整える。

俺とキリトは、なんとか次の村である《ホルンカ》に日付が変わる前についた。

「や、やっと着いた…」

「ああ、そうだな…」

俺も表面上は疲れてないように見えるが、ぶっ通しで走って疲れた。

勿論、肉体的な疲れはないが、ずっと脳が走れという命令をしていたので疲れたのだろう。

周りを見ると誰も居ないことから俺達が一番乗りのようだ。

「もう時間も遅いし、宿屋に行つて寝ないか？」

ぶっっちゃけ超眠いし、ダルい。

人生で一番走ったんじゃないだろうか。

……仮想空間だけど。

「うん、賛成」

キリトも賛成したことだし、さっさと行こう。

「おう、んじや案内よろしく」

「りよーかい」

キリトに連れられて来た宿屋は一泊80コル…安いのか高いのかよく分からん。

「んじや、明日は昼頃でいいよな？」

「うん、そのくらいでOK」

そんなことを言いつつ部屋に入る。…ちなみに部屋は勿論別だ。

今日…いや、もう昨日か。この村に来るまでに手に入れたアイテムの整理をする。

今日キリトに聞いて要らないものは売って装備にする予定だ。

「ふう…」

茅場のデスゲーム宣言から一日。

やはりここまで来れたのは、キリトの力が大きいだろう。…状況が安定したら何かお返しするべきだろう。施しを受ける気はないからな。

そんなことを考えながら俺は眠りについた。

俺が起きたのは、朝、いや昼かもしれない。メインメニューを開いて確認する。

(十一時二十三分か…)

なんとも中途半端な時間である。

(装備とアイテム揃えに行くか…)

などと思いながら重い腰をベッドから上げた。

あのあと、要らないものを売って防具と回復アイテムを揃えた。

武器はキリト曰く、一層最強の片手剣が手に入るクエストがこの村で受けられるらしい。

ちなみに今の俺の格好は、ほぼ黒の暗い緑のインナーに、鈍い銀色の胸当てに左手だけ手甲を着けて、更にそのうえに灰色のフード付きローブみたいなのを着ている。

…凄く恥ずかしい。

しかもβテスターがちらほら見えてきたのも原因の一つだ。

時計を見ると十二時十七分、そろそろいい時間だろ。

俺は、宿屋に戻った。

「おーい、キリト?」

…反応がない。

「まだ寝てるのか? 起きろ!」

さつきよりも強く扉を叩く、すると、

『わっ、ごめんエイト! ちょっと待って!』

と言われて待つことにした。ブーツとして、待つこと数分…

「お待たせ、エイト」

「ああ、ほんとにな」

キリトが、俺の格好が変わっているのに気付いて聞いてくる。

「あれ? 装備変わってる、買ったの?」

「ああ、まあな」

一目見て買ったとわかるとは…まあ、他に選択肢なかったしな。

「あ、あの、じゃあ私の装備買うの付き合ってくれない?」

ちよつと不安そうに聞いてくるキリト。

…オーケイ、ステイ、クール、そういう意味じゃない。

「いいけど、金は出さないからな、ほとんど使ったし」

あらかじめ牽制しておく。

ふっ、これで余程凶々しい奴じゃなかったら金を要求できない。

ソースは俺。

中学で初めて遊びに誘われたと思ったら財布代わりにされた…。

また、遊びに誘われたから

「いいけど、もう奢らない」

って言ったら誘われなくなった。何それ、超理不尽。

しかし、キリトはそんなこと考えてなかったのか、怒ったように

「出さなくていいから!! 行こー!」

強制連行された。  
拒否権ないのかよ…

「ここだよー」

キリトに連れられて来た武器屋は見覚えがあった…というか俺の  
防具を買ったところだった。

マジかよ…。すごい偶然だな…

「うーん、どうしようかな…」

キリトが悩むことしばし…俺？俺はずっとブーツとしてたよ？

「決めた！これにする！」

そう言っつてキリトが選んだのは茶色の革のハーフコートだ。

…どうでもいいけど、キリトって普段おとなしいのに、こういう  
時ハイテンションだよな。

「エイト、決まったよ」

「お、おう」

俺必要だった？とか考えながら答えた。

「んじや、いよいよ一層最強の片手剣とかいうのを獲りに行くのか？」

「うん、そうだね、そうしょっか」

「で、どこ行けばいいんだ？」

「クエストを受けられる場所は村の更に奥なんだ」

「げっ…めんどくせえ…」

更に奥って…この村どれだけ広いの？

「しょうがないでしょ…ほら、行く？」

クエストを受けた俺達。

クエストの内容を要約すると、

とある村人の娘が重病にかかっている。

その病気を治すには西の森の捕食植物型モンスターがドロップする《リトルペネントの胚珠》が必要。

とってきてくれたら先祖伝来の長剣をくれる。

…という訳で、装備とアイテムを整えて、西の森へいざしゅっぱっ！

…俺がやるとキモいな、もうやらないようにしよう……

生き残るために、二人はクエストを始める。

俺達は一層最強の片手剣である《アニールブレード》(キリトから聞いた)を獲りに《ホルンカ》から見て西の森に来ていた。

「で…捕食植物型モンスターって言うけど何を狩ればいいんだ？」

まあ、《リトルペネントの胚珠》とあるから、そのリトルペネントを狩れば良いと思ってるが一応聞いておく。

「うん、リトルペネントっていうMobを倒せばいいんだけど…」  
やっぱりか。

だけど何か含みがある言い方だ。

キリトは「でも…」と続ける。

「胚珠をドロップする花付きのポップ率が1%…ううん、正式版になってからはもつと低いかも…」

…マジか。1%って単純に考えたら百匹に一匹じゃねえか。

「で、でも普通のリトルペネントを倒せば出現率が上がるよ！」

その言葉で少しだけモチベーションを立て直す。

「はあ…正直めんどくせえがリトルペネントを狩りまくればいいんだな？」

まあ、デスゲームとなった今の状況で自分の強化を怠るなんて選択肢はない。

…本当に渋々俺はリトルペネントを狩り始めた。

「はあ…いい加減飽きてきた」

そうぼやきながら俺はリトルペネントを《ソニック・リーブ》で倒すと、リトルペネントは断末魔を叫びながらポリゴンになった。

「未だに花付きが出ないとか確率おかしいだろ…」

そう、俺達はリトルペネントを百体以上倒しているが、花付きは出ていない。

お陰様で俺はレベル3、キリトは俺とクラインにレクチャーしていたからか2になっている。

「あはは……でもやっぱ確率が下方修正されているのかもね」

冗談じゃない。一体あと何匹狩ればいいと思うんだ。

「こんなことなら二手に別れた方が効率的なんじゃないか？」

ほんの冗談のつもりだったが

「そうだね……充分対処できてるし、二手に別れる？」

俺もムチのようになると、たまに来る溶解液を避けて弱点の蔦を攻撃するという繰り返しに、知らずイライラしていたのか了承してしま

う。

「ああ、わかった。三時間後にホルンカでいいか？胚珠を手に入れたら、先に戻っててくれ」

「うん、わかった」

で、今二時間半。

俺は三匹の普通のリトルペネントと戦闘していた。

右下、左、上と同時にツルがくる。右下は軽く跳んで、左は右にステップ、上は右手の剣でぶった切った。

ツルを切られたペネントが怯んでいる隙に、範囲は狭いが、範囲攻撃である《スラント》で二匹をポリゴンに変える。



ようやくペネントが怯みから回復した時には既に目の前に立ち、

「ちよつとは学習しろよ？・AI」

そう言つて縦に振つた剣は、既にレッドゾーンだったペネントのヒットポイントを削りきつた。

と、その時、

パアアアアン！

と、初めて聞く音なのに妙に嫌な音が聞こえた。

キリトside

(どうしてこんなことに…)

私はいま大量のリトルペネントに囲まれていた。

数時間前にエイトと別れてから一時間半後に《コペル》というプレイヤーから一緒に《森の秘薬》クエストをやらうと言われ、承諾した。

一時間で百五十匹以上狩つたのに、まだ花付きがでないと思つていた矢先だった。

花付きが出たのだ、それも、三体。

ただし、実付きも一緒に。

実付きの実を割つてしまうとたちまちリトルペネントが集まつてきて、囲まれてしまうのだ。

コペルが実付きの担当、私が花付きを速攻で倒すことにした。

だけど、私が花付きを倒してコペルのところに行つた瞬間――

コペルは実を爆発させた。

「え…？？」

何で？何で実を爆発させたの？

しかし、考える間もなく、リトルペネントの大群が押し寄せて来た。コペルは隠蔽スキルで逃げようとしたのだろう。

だけど、隠蔽スキルは視覚がないリトルペネントには効果がない。五匹程倒したところでコペルはSAOからも、現実からも永久退場した。

あれから三十分。

エイトはもうホルンカに帰ってしまっただろうか。

武器も限界が近い。

そして次にペネントを倒した時、遂に武器が限界を迎えて、ポリゴンになる。

目の前には大量のペネント。

待つのは——死。

「嫌あああああ！」

side out

「あああああ……」

聞こえた。

あれから俺は嫌な予感がし、隠蔽スキルと索敵スキルを入れ替えて、キリトを捜していた。

(いた……い！)

およそ三十近くの敵に囲まれている。

俺は片手剣突進系スキル《ソニック・リーブ》を発動させ、三匹程倒してキリトのところへ行く。

キリトは泣いていたが、俺には泣き止ませる手段がないので、自分の頭をガシガシ掻いて、

「あんまり俺を働かせないでくれよ……キリト」

慰めにもならない台詞を言った。

さて、キリトが泣き止んだとはいえ、事態は好転していない。

取り敢えず、予備に買っておいた初期武器をキリトに渡す。

「流石にこの数は一人じゃキツイから、その……手伝ってくれ」

まさか家族以外で初めて頼った人が会って二日かそこらの人だとはな……

キリトはくすりと笑って、

「わかった、エイトもよろしくね？」

「できることならよろしくされたくない……がそうも言ってもらえないんだよなあ……」

「そこは『任された』って言うところじゃない？」

「バツカ、お前、それ言うとか死亡フラグっぽいじゃねえか」

とそこまで言ったところで敵も痺れを切らしたのか襲い掛かってくる。

それを両断しつつ、俺は言う、

「実付きを倒してきてくれ。また実を割ったりしたらいたちごっこだ」

とキリトから聞いた知識が混じったことを言う。

「わかった……でも大丈夫？」

「なるべく早くしてくれ。ボツチが多数の視線に晒されるのはかなりキツイ」

「そつちなんだ……っていうかりトルペメントには目ないけどね……それじゃ、頑張って」

言った瞬間キリトは駆け出した。

さて、ボツチは意外に高性能ってところ、見せてやりますか。

………働きたくないけど。

まず俺は、極振りに行っている敏捷度にものをいわせて、全てのペネントに攻撃を当て、ヘイトを集める。

……さて、ここからがキツイ。

無数にあるかのようなツルの攻撃を回避し、いなし、受け止める。

…盾を装備しておけばよかったと思う今日この頃。

なんて、アホなことを考えている間にも攻撃はくる。

剣の耐久も考えて、回避優先にするも完全には避けられず、少しずつだが、ヒットポイントが減っていく。

それでも負けじと、範囲攻撃である《ソニック・リーブ》や《スラント》を中心に戦いを組み立てる。

俺のヒットポイントがレッドゾーンになろうかというときに――

「スイッチー！」

という声が聞こえて、半ば反射的に全力で後ろに下がる。

光るライトエフェクトを纏わせた片手剣を持つキリトは《バーチカル・アーク》で最後の敵を倒した。

「死ぬかと思った……」

俺はそう言ってポーシオンをがぶ飲みする。

「あはは……ごめんね」

「でも……ありがとう」

そう言つて、キリトが初めて見せた心からの笑顔は、黒い髪と夜の暗さと月の光が合わさって、どこか幻想的で……

――不覚にも、可愛いと思ってしまった。

「別に助けたわけじゃなくて、経験値が多く手に入りそうだったから戦っただけだ」

キリトはクス、と笑って、

「エイトって結構捻くれものだよね」

「うっせ」

——そんな会話をしながら、俺達は帰途についた。

クエスト達成報告の時、キリトは泣いていた。  
改めて現実が、家族が恋しくなったのだろう。  
俺も、柄にもなく思った。

——ああ、本当に、今日は、

「月が…キレイだな……」

そう言っただ俺は、人知れず……泣いた。

迷宮区で、比企谷八幡は流れ星を見る。

俺は流れ星を見たことがあったか？

そんな疑問がふと頭を横切った。

そんな俺が初めて見た（かもしれない）流れ星は美しく、速かった。周りは草原でも、星が満天の夜空でもなく、薄暗い、じめじめしているようにも感じる迷宮で、流れ星を作り、光の軌跡を描いているプレイヤーがMobを倒す姿を俺は見ていた……。

デスクゲーム宣言から一ヶ月、死者、約二千人、クリアされた層、未だにゼロ――

俺、比企谷八幡の朝は遅い。

アニールブレードを手に入れてから、次の目的がお互いに違った俺とキリトは、パーティーを解散した。

俺は、ソロでも倒せるボスはあるか？と聞いたところ一体だけいる、とのことだった。

結果からいうと、弱点が弱すぎて、他が少し硬い位だったので問題なく倒せた。

恐らくボスのチュートリアルみたいな敵だったのだろう。

ちなみにアイテムは、足防具で店で売っているのより少し防御が高く、敏捷が+2というまあ、妥当なものだった。

今日は攻略しようと思っっているので、装備、アイテムをちゃんと確認する。――問題なし。

――行くか。

昨日は十九階に通じる階段を見つけて引きあげたので、今日は十九階の探索だ。

——少しの間、歩いていると戦闘音が聞こえてきたので隠蔽スキルを使い、十字路の分かれ道の先をそつと見る。

プレイヤーの武器は細剣だ。《細剣使い（フェンサー）》か。

フェンサーは、レベル6亜人型モンスター《ルインコボルド・トルーパー》が振ってくる手斧を避ける。

一、二、三回連続して紙一重で避けきったフェンサーは、体勢を大きく崩した《ルインコボルド・トルーパー》に細剣の初期ソードスキル《リニア》を放つ。

攻撃は剣を胸の前にもつていき、捻りを加えながら突く、というシンプルなものだが、速度が凄まじい。

それこそ流星と見間違う程に。

そのあとの戦いは、もはやパターン化したコボルドの斧を三連続で避けて、《リニア》を叩き込む、という作業だった。

最後に、明らかにオーバーキルな《リニア》をコボルドに叩き込んで、コボルドはポリゴンに変わった。

しかし、ヒットポイントは最大でも、SAOの戦いは精神を削る。フェンサーはそのまま迷宮区の壁に背中を預け、ずるずると座り込み、荒い呼吸をしている。

一方、俺は声を掛けるか悩んでいた。

あのフェンサーの剣技は凄まじい。恐らく、ゲームクリアに欠かせない存在になるだろう。

五秒程考えてから、俺はフェンサーに声を掛けることにした。

「……さっきには、オーバーキル過ぎるじよ」

くつ、またつまらぬことで囁んでしまった。

しかし、フェンサーは無視しているのか、肩を小さく動かしただけで無反応だったが、やがて頭を傾けた。

……言葉の意味がわからなかったのだろうか？

…《リニア》の完成度からβテスターだと思ったが、危なっかしい戦い方がいい、よく使われているオーバーキルを知らないことからビギナーだと推測。

取り敢えずオーバーキルの意味を覚えておく。

「……オーバーキルつてのは、モンスターの残りHPに対して、与えるダメージが過剰なことだ」

今の説明でわかったのかフェンサーは言ってくる

「過剰で、何か、問題あるの？」

——マジか。

その声から、俺はキリト以外に見たことがない、SAOでは珍しい女性プレイヤーだということに気付いた。



の敵に囲まれた時に危険だし、ソードスキルは集中力を使う。帰り道を考えたらずんば連発しないほうがいい」

「帰り道？」

「ああ、近くの街までは三十分は掛かるし、疲れきっていると、ミスも増える。見たところお前はソロだし、ミスは命取りだ」

同じビギナーからレクチャーされて、怒って刺してこないだろうな……と内心冷や汗を流しているとき、ようやくレイピア使いが反応した。

「……それなら、問題ないわ。わたし、帰らないから」

「は……？」

何を言っているんだ？

デスゲームになっている状況を理解しているのか？

「……ポーションとか、武器とか、睡眠は……どうしているんだ？」

細剣使いは、肩を上下させ、

「……薬は攻撃に当たらなければいいし、武器は同じのを五本買った……睡眠は近くの安全地帯でとってる……」

安全地帯、というのはモンスターが出現しない部屋のことだ。

「……いったい何日、こんなこと続けてるんだ？」

「三日……か四日。……もう、いい？そろそろこのへんの怪物が復活してるから、わたし、行くわ」

……このまま行かせて死なれるのも後味が悪い。一応、忠告しておく。

「……そんな戦い方をしていたら、死ぬぞ？」

俺がそう言ったら、レイピア使いは、冷たい瞳で俺を見つめて

「……どうせ、みんな死ぬのよ」

……その言葉は、十一月で肌寒い迷宮区の気温を更に下げた気がした。

「たった一ヶ月で、二千人も死んだわ。でもまだ、最初のフロアすら突破されていない。このゲームはクリア不可能なのよ。どこでどんなふうに死のうと、早いかな……遅いかなだけの、違い……」

そこまで言って、レイピア使いは糸が切れた人形のようにパタリ、

と倒れた。

……どうしよう、コイツ。

レイピア使い side

『仮想空間で、失神で倒れる原理とは、どんなものなんだろう』

そう思いながら、床に倒れる瞬間、意識が暗転した。

失神は、貧血や低血圧、過換気など、原因は様々だが……いや、そんなことはどうでもいい。自分は死ぬのだから。

さつきまで話していた目が腐った男はいたが、見ず知らずの私を助ける訳ない。

迷宮区の化け物に私は殺されるのだろう。

——と。

そこまで思ったところで気付く。私は硬い石畳ではなく、柔らかい、フワフワしたものの上に寝ていることを。

そこで目を覚ます。

「……は……？」

目を覚ました場所は、迷宮区……ではなく、薔薇に囲まれている、見知らぬフィールドだった。

何故こんなところに……

という疑問は、後ろを見たら解決した。

後ろにいた紺色の影——迷宮区で話していた目の腐った男がいた。

その男に私——結城明日奈は、一言こう言った。

「余計な……ことを」

side out

「余計な……ことを」

えく、起きていきなり罵倒されたんだけど…

「余計な…」

もう一回言われる前に、言葉を遮っておく。

「あく、悪かったよ。でも俺が助けたのはあんたのマップデータだ」

ふっ、完璧だ。合理性で返せば何も言えまい。

「……なら、持っていけば」

そう言つて、女フェンサーはマップデータを俺に渡して、迷宮区に戻ろうと……つてオイオイ、さっき倒れたばかりだろ。

何？死に急ぎ野郎なの？あ、でも女だから野郎じゃないか。

八幡うっかり、テヘペロ。

そんなことやってる間にも女フェンサーは、迷宮区に向かうので、慌てて止める。

「待てよ、フェンサーさん」

そう言つと女フェンサーは振り向く。

「このゲームがクリア不可能かどうか……自分で確かめてみたらどうだ？」

その言葉に興味を持ったのか聞いてくる。

「……どういうこと？」

「今日の夕方、迷宮区最寄りの《トールバーナ》で、一回目の《第一層フロアボス攻略会議》が開かれる……らしい」

怯えながらも、二人でパンを食べる。

《ソードアート・オンライン》の舞台である鋼鉄の城——浮遊城アインクラッドは先細りの構造であるため、一層が一番広い。

一層最大の街である《はじまりの街》は直径1kmある。もちろん、はじまりの街程じゃないが、至るところに中小規模の村や町がある。

そんななかでも最大の——といっても二百m程の——  
街が迷宮区最寄りの《トールバーナ》という町だ。

俺とフェンサーは連れだって……とも言えない空気の中歩いていった。

「…」

「…」

歩いて行くと、やがて【INNER AREA】という文字が見えた。どうやら【圏内】に入ったようだ。

「はあ…」

あまりモンスターと戦闘していないから、恐らくこのフェンサーといる空気に疲れたのだろう。

言うこと言って、さっさと休もう……と思った俺は、《会議》の時間と場所を伝えることにした。

「……会議は町の中央広場で、午後四時かららしい」

言うことは言ったので、さっさと帰ろうとした。

「妙な女だよナ」

「うおっ！」

び、びっくりした：

……索敵スキル上げようかな……

ちなみに、レイピア使いはもう居なかった。

声の主は更に続ける。

「……すぐにでも死にそうなのに、死なナイ、どう見てもネットゲ素人なのに、技は恐ろしく切れる。何者なのかネ」

……技が恐ろしく切れるのは、現実でもやっていたからじゃないかと勝手に推測している。

「…知ってるのか？あのフェンサーのこと」

俺がそう言うとき声の主——通称《鼠》のアルゴは、

「安くしとくヨ、五百コル」

ニンマリ笑って、言った。

「いや、そこまでして欲しくないし、興味もない」

そこで俺は一呼吸置き、

「で、何のようだ？アルゴ」

「いや、特に用はないヨ、強いて言うならハッチがキー坊以外の人と一緒ににいたからだナ」

……毎回思うのが、何でキリトは女なのに『坊』なんだろう、ということだった。

……あ？俺のアダ名？何回言っても直さないから諦めたよ、バカヤロー。

「そうか、じゃ」

……正直言っただ俺はコイツが苦手だ。できるだけ関わりたくない。

「まあ、待てヨ」

「ぐえっ」

……また襟掴まれた。そろそろ襟ない装備に変えようかな……

いや、ホント、マジで。

「……で、話は何だ？」

若干イライラして言うど、

「キー坊のアニールブレード+6を高値で買い取りたいプレイヤーがいるんだが……」

……俺には関係がない話だった。

「わかった、つまり俺には関係ない話だから帰っていいってことだな？」

「違うヨ！少しは話を聞けヨ……」

仕方ないので俺は座り直す。

「はあ……ようやく話ができるヨ……」

ならさっさと話して貰いたい。

「キー坊のアニールブレード+6を二万九千八百コルで買い取りたいんだそーダ」

……少し驚いた。が、すぐに言い返す。

「……そんなところじゃないのか？自分の命を預ける武器な訳だし……」

「アア、でも、もしそれでもダメならもつと上げてでもいいらしい」

……それは少しおかしい。そこまで上げてても損なだけだ。

「……というか良いのか？そんな情報言つて」

「アア、これはオレっちからの依頼だ、そのプレイヤーの真意を調べて欲しい、キー坊はお得意様だしナ、それに情報料金は報酬から引かせてもらおう」

そう言つて提示された金額は十分なものだった。

「……わかった、受ける。……で買いたたいって言ってる奴の名前は？」

「依頼者は会議に出るから、終わったら話すヨ……」

「わかった、んじゃ」

そう言つて俺はNPCレストランを出た。

「げっ」

俺こと比企谷八幡はNPCレストランで飯を食っていないことを思いだし、いつものベストプレイスで遅い昼飯を食おうとして――  
――先客がいた。というか、さっき別れた(?) フェンサーだった。

フェンサーは俺の声でこちらを見るが、またパンを食べて、

「……何をしてるの?」

……冷たい、超冷たい。具体的に言うと雪ノ下くらい。

「いつ、いえ!いつもしよこで飯を食っているので!失礼しました!」

…噛んだのは仕方ないだろう……だって怖いんだもん!

「……別に、座って食べれば……」

「は、はいっ!恐縮でしゅ!」

…だからこええよ、フェンサーさん……

フェンサーのお許しも出たことなので、最大限距離をとり、パンとクリームをオブリジェクト化させる。

パンにクリームを塗って、食べていると視線を感じた……正確には瓶に、だが。

「あ、あの…良かったらどうじよ、ここで食べさせてくれたお礼とでも…」

いいながら瓶を差し出す。

フェンサーは最初は戸惑っていたが、蓋をタップしてクリームを使用する。

その時瓶がポリゴンへと変わるが、気にしない。

フェンサーは、クリームをパンに塗って噛んだ、瞬間――。

すごい勢いでパンを頬張る。それこそサイヤ人かよ、と思うくらい。

全部食べてから俺の存在を思い出したのか、少しハツとしながらお札を言ってくる。

「……ご馳走さま」

「お、おう……」

そこまで気に入ったなら、手に入れる方法を教えようかと思つて口を開く。

「さ、さっきのクリームは前の村の《逆襲の雌牛》ってクエストで手に入れられるからやってみたら……「いい」……」

俺の親切を一蹴して、フェンサーは続ける。

「……美味しいもの食べに来たわけじゃないから」

その割にはすごい勢いでパン食べてましたね、と思いつつ、聞いてみる。

「じゃあ、何しにここに来たんだ？」

フェンサーは少し間をおいて、

「わたしが……わたしでいるため。最初の街の宿屋に閉じこもって、ゆっくり腐っていくくらいなら、最後の瞬間まで自分のままでいたい。たとえ怪物に負けて死んでも、このゲーム……この世界には負けたくない。どうしても」

その言葉に俺は強さと危うさを感じた……同時に初めてこのフェンサーに好感を持った。

コイツは最後まで自分を貫き通せる強さを持っている。その点は俺と同じだから……

だから、俺はこう答えた。

「……そうか……じゃあこの戦いで証明したらどうだ？……お前はこ



世界になんか負けやしない……って」

：俺と彼女が似ている、と思っってしまったからだろうか、俺らしくもない言葉が出てくる。

ふと時計を見ると、もう午後四時、会議が始まる時間だ。

フェンサーは立ち上がり、

「……行きましょう。あなたが誘った会議なんだから」

そう言っただけで広場の方へ歩いて行く。

俺も立ち上がり、広場へ向かって行った。

いよいよ、初めての

——会議が始まる。

会議は始まり、されど邪魔が入る。

広場にいたプレイヤーの数は、四十五人だ。

ボス戦は6×8の四十八人がセオリーらしいが、三人足りない。

……ていうか俺、よくソロでフィールドボス倒せたな…

今更ながら冷や汗をかきながら、人数が少ないことに溜め息をつきそうになるが……いや、よく集まった方か。

フェンサーも

「……こんなに、たくさん……」

「まあ、そうだな……」

命を懸けたデスゲームにしては、よく集まったほうだろう。だが……

「けど、全員が全員、死ぬかもしれないってことを覚悟しているわけじゃないだろうな……」

「……どういふこと？」

まあ、普通はそう思うだろう。

「……自分が死ぬわけがないと思っている奴、まだ一層だから楽勝、とか思っている奴がいないとは言い切れないだろ？」

言うとなフェンサーは首を上下させる。

俺は更に続ける。

「それにあいつらは最前線から落とされるのが怖いんだ」

フェンサーはよくわからなかったのか首を傾げる。

「……要はトッププレイヤーでいたいのために会議に来てる、って認識でいい」

くそう、この空気ですの疲れるでござる……

「……それって、学年十位から落ちたくないとか、偏差値七十キープしたいとか、そういうのと同じモチベーション？」

……数学学年最下位だった俺にはよくわからん例えだった。

……いや、だって数学なんて将来使わないじゃん……

「……わからんけど、そうなんじゃねーの？」

俺がそういうとなフェンサーはふ、ふ、という声が聞こえた。

……笑っているのか？この仏頂面のフェンサーが？迷宮区から助けても、感謝の言葉の一言もなかった礼儀のれの字もないようなコイツが？

と、内心失礼なことを考えていたとき、パン、パンという音が聞こえてきた。

「はいー！それじゃ、五分遅れだけどそろそろ始めさせてもらいます！みんな、もうちよつと前に……そこ、あと三歩こつち来ようか！」俺はみんなに含まれてないからこのままでもいいかなー、と思っただら

「はいーそこ、早く動いてー！」

と言われたので移動する。

ちなみにフェンサーはもう居なかった。

……アイツ、隠蔽スキル上げてんじゃねえの？

声をかけてきた片手剣使いは、広場中央にある噴水の縁に助走なしで飛び乗る。

……アイツ、敏捷、筋力共に高いな…

さすが一層ボスを倒そうと思っっている奴だ、と思っただら、集まっているプレイヤーの一部が小さくざわめいた。

……ああ、そういうことか。

片手剣使いの容姿は、文句なしのイケメンで、髪は青かった。

髪染めアイテムでもあるのだろうか、店でも見かけず、ドロップもしなかったため、レアドロップかクエストの報酬だと推測。

その男は、リア充感溢れる笑顔で、

「今日は、オレの呼びかけに応じてくれてありがとう！知っている人もいると思うけど、改めて自己紹介しとくな！オレは《ディアベル》、職業は気持ち的に《ナイト》やってます！」

……その自己紹介からリア充と断定、俺の目はすごい勢いでもっと腐っているだろう。

……密かにディアベルのことを心の中でリア充（笑）と呼ぶことにする。

「さて、こうして最前線で活動してる、言わばトッププレイヤーのみん

なに集まってもらった理由は、もう言わずもなだと思うけど……」  
リア充(笑)の演説の続きで密かな決意を一旦止めて、話に集中する。

「……今日、オレ達のパーティーが、あの塔の最上階へ続く階段を発見した。つまり、明日か、遅くとも明後日には、ついに辿り着くつてことだ。第一層の……ボス部屋に！」

やっぱり、パーティーの方が攻略が早いのだろうか。

……まあ、ソロのプレイスタイルを変える気はないが。

「二ヶ月。ここまで、一ヶ月もかかったけど……それでも、オレたちは、示さなきやならない。ボスを倒し、第二層に到達して、このデスクゲームそのものもいつかきつとクリアできるんだってことを、はじめの街で待つてるみんなに伝えなきやならない。それが、今この場所にいるオレたちトッププレイヤーの義務なんだ！そうだろ、みんな！」

……そんな義務捨ててしまいたい。

と思っただが、フェンサーの方をチラリと見て、

(アイツには散々偉そうなこと言ったしなあ……)

俺はいつだって独りでやってきたため、責任も全て自分の物だと考えている。

せめて、アイツにはその義務を果たしてやる、と思っっていたら、

「ちよお待ってんか、ナイトはん」

そう言っただけで乱入してきたのは……何かモヤットボールみたいな頭をしたやつだった。

「そん前に、こいつだけは言わしてもらわんと、仲間ごっこはでけへんな」

その言葉にリア充(笑)……いや、真面目そうな空気なので直そう……で、ディアベルは顔色一つ変えずに

「こいつっていうのは何かな？まあ何にせよ、意見は大歓迎さ。でも、発言するならいちおう名乗ってもらいたいな」

「……………フン」

モヤットボールは盛大に鼻を鳴らし、不機嫌そうに階段を降りてく

る。

「わいは《キバオウ》ってもんや」

モヤットボールはキバオウと言うらしい。

「こん中に、五人か十人、ワビ入れなあかん奴らがおるはずや」

「詫び？誰にだい？」

キバオウは憎々しげにいい放つ。

「はっ、決まっとるやろ。今までに死んでいった二千人に、や。奴らが何もかんも独り占めしたから、一ヶ月で二千人も死んでしもたんや！せやろが!!」

その言葉を聞いた途端、約四十人の聴衆が黙った。

「——キバオウさん。君の言う《奴ら》とはつまり……元ベータテストターの人たちのこと、かな？」

今初めて険しい顔をしたディアベルが確認する。

「決まっとるやろ」

……どうやら聞くに耐えない話のようだ。

「ベータ上がりどもは、「なあ、ディアベル。俺、帰っていいか？」ってゴラア！まだワイが話しとるやろ！」

ウルセエな……大体言うこと分かるんだよ……

「大体言いたいことが分かるんだよ……」

「じゃあ、言うてみい！」

邪魔されて随分ご立腹ですね……キバオウさん……

「ベータテストターは最初、ビギナーを見捨てた。その間に自分たちだけ強くなった。二千人が死んだのは、ベータテストターのせいだ、だからアイテムやらコルやら損害・賠償しろ……だろ？」

するとキバオウは面食らったのか、

「あ、ああ……せや」

よし、認めたな？

「まず一つ、ビギナーを見捨てた、これはお前が逆の立場で考える。約九千人にもものコーチができるかどうか」

「二つ、自分たちだけが強くなった、強くなるにはいい狩場やクエスト……要は情報だ。それは入手する機会はビギナーにもあった。貰わな

「かったか？道具屋の攻略本」

「で、三つ、アイテムやらコルを賠償しろ……これが一番馬鹿だ。そんなことしたら、ベータテスターが戦力にならない。お前はさつき、ベータテスターはこのなかに五人、十人いる、といった。さあ、ここで問題です。三十数人のビギナーで、ボスが倒せるでしょうか」

「はあ……疲れた……わざわざその考えはまちがっていると教えてやったんだから感謝して欲しいくらいだ……」

俺は席に戻る。

ディアベルが仕切り直すように、

「みんな、それぞれに思うところはあるだろうけど、今だけはこの一層を突破するために力を合わせて欲しい。どうしても元テスターとは一緒に戦えない、つて人は、残念だけど抜けてくれて構わないよ。ボス戦では、チームワークが何より大事だからさ」

キバオウはこちらを睨んでいたが、無視しているとやがて席に戻った。

——こうして、一回目の会議は終わった。

パーティーを組むのは、比企谷八幡にとって最大の試練である。

一回目の会議は、実務的な議論は交わされなかったものの、モチベーションを上げるのには役立ったらしい。

すごい勢いで迷宮区の二十階は攻略され、十二月三日の土曜日に、ついにボス部屋前の巨大な二枚扉を（ディアベルのパーティーが）発見した。

俺も攻略していたため（もちろんソロで）、レベルが十二になった。ボスの名前は《イルファング・ザ・コボルドロード》、取り巻きは《ルインコボルド・センチネル》だ。

ボスの特徴は、一本体力ゲージが減るごとに、センチネルが三匹ポップして、最後の一本になると、武器をタルワールに変える――

――と書いてある《鼠》の攻略本曰く、「情報はSAOベータテスト時のものです。現行版では変更されている可能性があります」とのことだった。

「まあ、また随分攻めこんだな……」

《鼠》は基本、《誰ともしれないβテスター》から情報を買って取っている《というスタンスを保っている。

……俺？俺はキリトと《鼠》がホルンカで話していた時点で気付いてましたが？

……ポツチの観察眼なめんな。

攻略本を読み終わった約四十人は、どう反応すべきかをリーダーに求めるかのように、リア充（笑）を見た。

「――みんな、今は、この情報に感謝しよう！」

ざわざわ、と聴衆がざわめいた。元βテスターとの対立ではなく、融和を選んだのだ。

しかし、リーダーの決めたことには文句はないのか、誰も反論を出さないためリア充（笑）は続ける。

「出所はともかく、このガイドのお陰で、二、三日はかかるはずだった

偵察戦を省略できるんだ。正直、すっげー有り難いってオレは思ってる。だって、一番死人が出る可能性があるのが偵察戦だったからさ」  
よっ、ナイト様！とちやかすような声が色々な所から聞こえてくる。

しかし、ディアベルのリーダーシップは確かにすごいと素直に思う……リア充だから爆発して欲しいとは思うけどな……だが、だからこそディアベルが死んだとき、このレイドは大丈夫か、という懸念もある。

そんなことを思っているときに、リア充（笑）は俺にとって最大の試練になることを言う。

「——それじゃ、早速だけど、これから実際の攻略会議を始めたいと思う！何はともあれ、レイドの形を作らないと役割分担もできないからね。みんな、まずは仲間や近くにいる人と、パーティーを組んでみてくれ！」

………なん、だと………？

体育の授業を思い出すが、当然いつもペアを組んでいる、ぎ、ぎ……財津？はここにはいない。

もうソロの遊撃手でいっかーと思い、リア充（笑）に言いに行こうとしたところで声をかけられる。

「おーい、エイトー！」

……無視だ、無視。きつと違うエイト君だろう。

「エイトってばー！」

……まあ、わかってましたけどね？同じプレイヤーネームの奴がいなくてことくらい。

「……おう、久し振りだな……キリト」

「うん、久し振りだね、エイト」

そう言うてはにかんでくるキリト。可愛い。

……じゃなくて、

「……で、何のようだ？俺リア……ディアベルにソロで遊撃やっていか聞くところなんだけど……」

「いや……私もアブレちゃったからエイトとパーティー組もうと思っ



て……ダメだった?」

「こら、目を潤ませるな。可愛いだろうが。中学までの俺だったら危うく惚れて撃沈するレベル。」

「わ、わかった……」

「とうか、何でアブれたのん? キリト程の容姿だったら真つ先に頼まれそうだが……」

「うん、よろしく。じゃあ、他にもアブれた人は……」

「……見つけてしまった。アブれた奴。とうか、フェンサーだった。」

「……おい、キリト。あそこにもいるぞ」

「そう言っつてさりげなく誘う役割を押し付ける。」

「……だつて、あのふえんさーこわいんだもん！」

「と、心の中で幼児退行しているとキリトがフェンサーを誘つていた。」

「え、えーと、あなたもアブれたの?」

「アブれてない。周りがみんな仲間同士みたいだったから遠慮しただけ」

「うんうん、分かるぞフェンサーさん。」

「俺も」

「アブれたの?」

「つて聞かれたら」

「い、いや、周りが仲良さそうだから遠慮しただけ……」

「つて答えると思うからな。」

「……とうか聞かれたことすらなかった。」

「な、なら私達と組まない? レイドは八パーティーまでだから、そうしないといれなくなるし……」

「するとフェンサーは、」

「……そつちから申請するなら受けてあげないでもないわ」

「……うわー、可愛くねー。とうか雪ノ下みたいだなコイツ……」

「キリトはパーティー申請をフェンサーに出して、フェンサーはそれを了承した。」

するとやや左側にもう一本HPゲージが追加され、レイピア使いの名前が判明した。

「Asuna」。それが流星のような「リニア」を繰り出すフェンサーの名前だった。

騎士ディアベルの実務能力は中々のものだった。

彼は、出来上がった6×7パーティーを検分して、それぞれを最適な形にした結果、壁（タンク）部隊が二つ。攻撃（アタッカー）部隊が三つ。支援（サポート）部隊が二つだ。

で、ボッチ（俺）とボッチ（キリト）とボッチ（フェンサー）の部隊の役割というと…

「君たちは、取り巻きコボルドの潰し残しが出ないように、E隊のサポートをお願いしていいかな」

……まあ、露払いだ。

フェンサーが不機嫌な空気を出しているため

「了解だ。潰し残しを倒せばいいんだな？」

「ああ、頼んだよ」

……SAOには歯がキラツとするオプションでもついているのか……？

「……その役割ってボスに一回も攻撃できないじゃない」

「まあ、いいじゃねーか。楽しさせてくれるって言ってるんだから」

……まあ、邪魔だから引っ込んでろ、って意味の方が強いと思うが…

「それにしようがないよ。スイッチでPOTローテするにも三人じゃ時間がないし…」

「……スイッチ？ポット……？」

……マジか、知らないのかよ……

「お前……本当にリニアーだけ頼りに迷宮区行ったのかよ……」

事情を知らないキリトは、頭に？を浮かべているが俺は続ける。

「……まあ、後で全部詳しく説明する……キリトが」

「私なんだ……」

いや、だってお前の方が詳しいじゃん……

その後の第二回攻略会議は、各隊のリーダーの短い挨拶と（俺達の隊のリーダーはキリト）、ボス戦でドロップをした金とアイテムの分配を確認して終了した。

元βテスターに敵意を燃やすキバオウに、キリトが若干涙目になっていた。

ちなみにドロップ品の分配は、コルは全員で均等に、アイテムはドロップした人のも（変にギスギスしないため）という非常にシンプルなものだった。

最後にリア充（笑）の

「頑張ろうぜー」

「オーー」

という掛け声で（俺はしてない）解散、約四十人のプレイヤー達は散り散りになった。

——こうして第二回目のボス攻略会議は終わった。

いつだって、気づいた時には時すでに遅し。

突然だが、今俺はとある農家の二階にいる。

いや、まあ、連れていってくれと言ったのは俺なんだが……  
……どうしてこうなった……

「……で、説明って、どこでするの」

会議が終わった後、フェンサーがそう言ってきたので

「知らん。教えるのはキリトだからキリトに聞け」

俺は帰ろうかなーと思ったところで

「えっ、本当に私がやるの?」

とキリトが言ったので

「ああ、んじやな」

一応別れの挨拶をして帰ろうとして

「ちよ、ちよつと待って!」

「ぐえっ」

……ちよつと襟引つ張られ過ぎじゃないですかね……俺……

キリトは顔を寄せて……って近い近い近い!

「お、お願いついてきて。初対面だから辛い……」

……いや、俺も別に知り合いじゃないんだけど……

「いや、別に俺の知り合いじゃないんだが……」

と、そこまで言ったところで《鼠》の依頼を思い出す。

「……キリト、今日お前の拠点に《鼠》……アルゴは来るか?」

「え?う、うん。来るけど……」

よし、ならキリトの拠点で教えれば楽だ。

「すまん、キリトの拠点で教えていいか？」

俺がそう聞くとフェンサーは僅かに頷く。

「よし、キリト、お前の拠点でいいか？俺も《鼠》に用があるから」

「え？うん、いいけど……私もお風呂入りたかったし……」

……何でコイツ異性の前でそういうこと言うの？

やめてよお！つい想像しちゃうからやめてよおおおお！

その時、リニアーに勝るとも劣らない速さでキリトの肩をガツチリ掴み、迫力ある声でフェンサーが

「……なんですって？」

というのが経緯だ。

ちなみにフェンサーは風呂に入っており、(しないけど)俺が覗こうものなら「リニアー」で串刺しにされる覚悟をしなければいけない。

(割と本気で)

で、俺はアルゴの攻略本を読んでいるのだが……

「……なあキリト、俺帰っていいか？もう《鼠》への用明日でいいから……」

キリトは速攻で

「絶対やめてー！」

お、おう……初対面の奴と二人きりになるのは辛いだろうが、俺だって女子と二人きりの状態は辛い……

てつきり、フェンサーは風呂に入らず、パーティーの戦術教えてい

る時に《鼠》参上、先にフェンサーに戦術を教えてから、依頼の話を  
して終わったら帰る……というパーフェクトプランだったのだが  
……前提条件から崩れた。

そろそろ本気で辛いので止められても帰ろうと決意したとき、部屋  
の扉がノックされた。

キリトが扉を開けて応答する。

「はい、こんばんは、アルゴ」

「アア、こんばんハ、キー坊……あれ？ハッチじゃないカ。キー坊がハッ  
チを連れ込んでいるなんテ、オネーサンは驚いたヨ」

……何言ってるんだ、コイツ……

俺が呆れていると

「なつ、そんなことしてないよ！記事に書くとかやめてよね！」

……おや？俺はてつきり

「そういう冗談本当にやめてくれる？……」

とか無表情で冷たく言われるのを覚悟していたんだが……

「ニヤハハ、冗談はここまでにしテ、本題に入らせてもらおうヨ」

ようやくか……

これが俺が《鼠》が苦手な理由だ。ペースが掴めない……まるで雪ノ  
下さんみたいな感じが俺はどうにも苦手だ。

「キー坊の剣を買いいたいって話……今日中なら、三万九千八百コル出  
すそーダ」

「……………ヤ……………」

キリトが叫びそうになっている。俺も驚いて、ミルクのカップを落  
としそうになる。

「おい《鼠》、それ詐欺だと思われてもおかしくないくらい上手すぎる  
話だぞ」

……まあ、そんな大金を払う奴の真意を確かめるのが依頼内容なん  
だがな……

「……アルゴ、クライアントの名前に千五百コル出すから、それ以上積  
み返すか、確認してみて」

「……わかつタ」

……ん？俺に依頼者の名前を教えるって言ってたから、キリトにもただで教えるのかと……

さすが《鼠》、守銭奴だ。スクルージ並みの。あれはあれ、それはそれか。

「……教えて構わないそーダ」

何が何やらといった顔で、キリトは《鼠》に千五百コルをオブジェクト化して渡す。

「……で、アルゴ、クライアントの名前は？」

「……二人共、もう知ってるハズだヨ、昨日の会議で大暴れしかけたカラ」

そうやって《鼠》は俺の方を見てくる。

——まさか。

「……まさか、キバオウ、か？」

そう言うと《鼠》は頷く。

反ベータテスターのキバオウが元ベータテスターのキリトの剣を欲しがっている……？

考えすぎか、それとも……

「あれ？そういえば何でエイトも聞いているの？」

その声で一旦思考を停止させ、疑問に答える。

「ん、ああ……《鼠》に依頼されて、そのクライアント……キバオウの真意を確かめることをしてんだ」

「アア、オレっちも気になったからナ。ハッチに依頼したんだ」

キリトは納得したのか頷いている。

「……さて、今回も、剣の取引は不成立ってことでいいんだナ？」

「うん……」

まあ、それが賢明だろう。明日ボス戦なのに、強い武器を手放すなんて自殺行為だ。

「そんじゃ、オレっちはこれで失礼するヨ。後は二人で仲良くやるんだネ……」

「うん……ってそんなことしないよ！」

……いい加減頭痛がしてきた……

「ニヤハハ！ま、その攻略本、役立ててくれよナ」

「うん……」

「つと、帰る前に、悪いけど隣の部屋借りるヨ。夜装備に着替えたいカラ」

「うん……」

俺もキリトも考え事をしていたからだろうか……

少し考えたらわかったはずなのだ——隣の部屋が風呂場のことくらい。

——さて、《鼠》の奴何て言った？隣の部屋？それって……

そーつと風呂場の方を見て、次にまたそーつとキリトの方を見る。その視線に気づいたキリトが、

「な、何？エイト」

と問うてくるが内心冷や汗ダラダラしながら、

「な、なあキリト。」

「な、何？」

俺の真剣な空気に気圧されたのか、若干淀みながら聞き返してくるキリト。

しかし、そんなことを気にしている余裕は俺にはない。

「ね、《鼠》の奴『隣の部屋』って言ってたけど……まさか、風呂場じゃ……」

「あつ」

ようやく俺の言わんとすることがわかったのかキリトは間の抜けた声を発する。

しかし、気づいた時には時すでに遅し。

風呂場から

「わああ!？」

「きやあああああー!」

という声が聞こえた。

それと同時に飛び出してくるプレイヤーを見て——

俺は、逃走もとい離脱を開始した。

——ヤバイ、あれはヤバイ。



捕まったら殺される、と錯覚するような凄まじい殺気の中走る。

窓まであと一メートルというところで、俺から——いや、俺の体からドゴツ！と体からは鳴ってはいけない音がした。

そこからの記憶はないが、最後にみたのは肌色のものだった、とだけ言っておこう。

まもなく、ボスとの決戦が始まる。

十二月四日、日曜日、午前十時。

あと、三時間で《ソードアート・オンライン》正式サービス開始から丁度四週間だ。

あのときの自分はこんなことになるなんて、思ってもいなかったなあとか、小町どうしているかなあとか、小町に彼氏でもできてたらゾンビのように起き上がって、ソイツぶん殴ろうとか、少し感傷的になっていた。

……さて、そろそろ現実逃避をやめよう。

「あ、あの」

「……何？」

「い、いえー何でもありませんー！」

というのがさつきからの光景だ。

……昨日のことを謝ろうとするのだが、昨日のことを思い出したら腐った牛乳一樽分飲ませるといふ脅し＋フェンサーの怖さから、謝れずにいる。

キリトは後ろで苦笑い……何とかしてえ、キリエもくん！

こんなことで今日のボス戦大丈夫か……と思っていたとき、決して友好的とは言えない声が聞こえた。

「ええか、今日はずっと後ろに引っ込んだれよ。ジブンらは、わいのパーティーのサポ役なんやからな」

「……………」

……昨日、人の武器を買い取ろうとした奴のセリフとは思えねーな、と思っていた。

「大人しく、わいらが狩り漏らした雑魚コボルドの相手だけしとれや」

はあ……メンドクサイな……コイツ……

「わかった、わかった。俺たちの仕事がある『前提』で話しているようなので、せいぜい頑張らせていただきますよ」

俺の言葉にモヤットボールは一瞬怒った顔を見せたが、唾を吐き捨てて戻っていった。

「あはは……エイトって結構酷いよね……」

「まあな、命が懸かったこのゲームで、敵を『雑魚』なんて言う奴を認める気にならん」

そう言いながら、俺はモヤットボールの背中を見る。

「……ん？」

……装備が変わってない？

あの男がキリトのアニールブレードを買おうとしたのはボス戦で使うためだろう。そのために四万コルなんて馬鹿げた金額を提示した。

——なら、その金はどこに消えた？

俺は会議のときのアイツの装備と今の装備を比べるが——  
変わってない。

何でだ？

時間がなかった？——いや、丸一日以上あった筈だ。

目標の装備に金額が足りなかった？——いや、一層最強のアニールブレードが買えるんだ……そんな訳ない。

なら——人の金だった？

もしそうなら、買い取ろうと思った奴は別にいることになる。

……駄目だ、今の情報じゃこれくらいしか分かん。

……装備で思い出したが、フエンサーの装備は《アイアン・レイピア》から、俺が偶然ドロップしていた《ウインドフルーレ+4》になっていた。

片手剣使いの俺には無用の長物だったのでやった。

俺の思考はこのレイドのリーダーの声によって止められる。

「みんな、いきなりだけど——ありがとう！ たった今、全パーティー十四人が、一人も欠けず集まった！」

おおっと歓声上がるが……俺は？

「今だから言うけど、オレ、実は一人でも欠けたら今日は作戦を中止しようって思ってた！ でも……そんな心配、みんなへの侮辱だったな！ オレ、すげー嬉しいよ……こんな、最高のレイドが組めて……。まあ、人数は上限にちよつと足りないけどさ！」

そうですね、一人減らしちゃいますしね。

……まあ、いいんだけどさ、慣れてるし。

しかし、いささか盛り上げ過ぎじゃないだろうか。

タンク役のB隊リーダーである、エギルさん？だっけ、も険しい顔をしている。

ディアベルが最後のメに入るように右手で剣の柄を握って、

「みんな……もう、オレから言うことはたった一つだ！」

剣を抜いて、空に向け、

「……勝とうぜ！」

短く言い放った。

……俺にはその時のプレイヤー達の雄叫びが、どうしても一ヶ月前の悲鳴にしか聞こえなかった……

トールバーナから迷宮区までの道程は、気が緩みすぎじゃないか？  
というくらい緊張感がなかった。

「リア充どもの旅行かよ……」

思わず悪態をついてしまう。

「……ねえ、こういうMMOゲーム？って他のもこんな感じなの？」

フエンサーが聞いてくる。

俺達のパーティーは一番後ろにいる。

「……わからん、俺は他のMMOゲームでもボッチプレイヤーだったからな！」

ドヤ顔をしてそういうと二人から少し引かれたため言い直す。

「……というか、そういうのはキリトの方が詳しいんじゃないか？」

「え、私？私は……やっぱりVRゲームじゃないから、キーボードやらマウスやら動かしてて、チャットなんかできなかったよ？」

「ほら、結局チャットできないんだから、ボツチプレイと変わらねーじゃねーか」

「それは違うと思う」

……二人から否定された。

「……本物はどうかしら」

唐突にそんなことを聞いてくるフェンサー。

「本物って？」

キリトが聞くと

「だから……こういうファンタジー世界がほんとにあったとして……そこを冒険する剣士とか魔法使いとかの一団が、恐ろしい怪物の親玉を倒しに行くとして。道中彼らは、どんな話をするのか……それとも押し黙って歩くのか。そういう話」

「なんだ、簡単じゃねえか」

フェンサーは驚いたのかゆつくりとこちらを向く。

「……え？」

「答えは待てばいい、だ」

「……どういうこと？」

まあ、今の説明だけじゃ分からないだろう。

「この一層を攻略して、これから先も攻略していけばこんな非日常が日常になるってことだ」

更に俺は続ける。

「そもそも会話なんて無理にする物じゃないんだよ。無理してすると失敗するからな。ソースは俺」

「ふふ、ふ」

フェンサーは何故か笑っている。キリトも同様だ。

「最後のがなければカッコよかったのに……」

キリトがそう言い、フェンサーは

「……………強いよね。わたしには、とても無理だわ。この世界で何年も生き続けるのは……今日の戦闘で死ぬことよりずっと怖く思える

から」

「……なーに言っただか。コイツは。」

「バツカ、お前。俺が強いなんて負けることに関してだけだぞ」

キリトも続ける。

「上の層には、もっとういお風呂があるって言っても？」

「……………ほ、ほんとに？」

俺はその言葉で昨日の光景を思い出してしまい、飲んでいた水を吹き出してしまう。

するとフェンサーが冷たい声音で

「昨日のこと……………思い出したわね。腐った牛乳一樽、ホントに飲ませるからね」

え、ちよ、マジっすか？

キリトヘルプ！助けて！元々お前のせいだろおおお！

午前十一時、迷宮区到達。

午後十二時半、迷宮区最上階踏破。

ここまで来るのに死人がいなかったことにそつと胸を撫で下ろす。

三回程ヒヤツとしたが、ディアベルの指揮でなんとか事なきをえた。

「……………よし、改めて俺達の担当の《ルインコボルド・センチネル》のおさらいをしておくぞ」

「弱点は喉元一点だから、フェンサーの【リニア】で倒す。キリトと俺は、基本パリング、そしてフォローだ」

言うのと二人は頷いた。

丁度その時にディアベルは剣を掲げて、左手を扉の中央に当てて――

「――行くぞー！」

短く叫んで、思い切り開けた。  
——俺達のボス戦が始まる——

十二月四日に、ボスとプレイヤー達は決戦を始める。

——広い。

俺がボス部屋に抱いた感想はまずそれだ。

ボス部屋は長方形の形をしていて、幅二十メートル、奥行き百メートルだ。

暗い部屋に松明が付き、次々に奥へと点灯していく。

うつすらデカイ影が見えるから、恐らくあれが一層最強のモンスターでありボスでもある、《イルファング・ザ・コボルドロード》だろう。

俺が《イルファング・ザ・コボルドロード》の影（多分）を見てみると、ディアベルが銀色の剣を降り下ろし、四十五人ものプレイヤーがボス部屋に雪崩れ込む。

まず、ヒーターシールドを掲げる戦槌使い率いるA隊、その左後方に斧戦士のエギルさん率いるB隊が追う。右にはディアベル率いるC隊と、両手剣使いがリーダーのD隊。更にその後ろを、キバオウ率いる遊撃用E隊と、長柄武器のF隊、G隊の三パーティーが並走する。俺達ボツチパーティーは一番しんがりだ。

先頭のA隊と玉座の距離が二十メートルを切ると、今まで動かなかった影が跳躍して、空中で一回転、地響きと共に着地、高らかに吼える。

「グルルラアアアアアッ!!」

獣人の王、《イルファング・ザ・コボルドロード》はその姿を露にした。

——と同時に右手に持つ骨斧でA隊リーダーに振りかざした。

A隊リーダーはヒーターシールドでそれを防ぐと、ギイイイイン！という音と火花を散らす。

その音が開戦のゴングかのように《ルインコボルド・センチネル》が壁の高いところにくっつかある穴から降りてきた。

キバオウ率いるE隊とそのサポ役であるG隊がタゲをとる。

こうして、十二月四日午後十二時四十分、アインクラッド初めての



ボス戦が開始した。

俺達は担当である《センチネル》の相手をしている。いるのだが

……

「……これ、俺必要？」

キリトとフェンサーの二人で無双している。

いや、働かなくて良いのはいいんだけど……

「スイツチー！」

「ええー！」

うわあ……喉元を寸分違わず刺してるよ……

弱点をつくのはいいことだが、思わず喉元を押さえてしまう。

しかし……あのフェンサーも最初より……なんだろうな、余裕？  
があるな。

《センチネル》を倒したキリトとフェンサーが戻ってくる。

「おう、お疲れ」

「……あなたも戦いなさいよ」

「そうだよ、エイト」

いや、だって俺必要ないじゃん……

まあ、言ってもキリトはともかく、このフェンサーは納得しないだろうし、素直に答えておくか……

「わーったよ、次ポップしたらちゃんと戦うよ」

そう言っておいて、ボスの方を見る。

たった今、一本目が削れたようで、ディアベルが二本目！と叫んでいる。

その時に三匹の《センチネル》が飛び降り、フェンサーが走っていく。

フェンサーが

「スイッチー！」

と叫んだのですかさず交代、《スラント》で切るがやはりあまり効かない。

「チツ」

軽く舌打ち。

元々が敏捷極振りなので、あまり効かない。

それでも《センチネル》のヘイト値を上げるには充分だったのか、手に持った斧槍（ハルバート）を振りかざしてくる。

これはアインクラッドに入ってから気づいたが、どうやら俺はボツチで培った観察眼のお陰か動体視力がいいらしい。

《センチネル》の攻撃を回避し続け、一発で倒せる時を狙う。

（——今だ！）

《センチネル》がハルバートを縦に振り、体が前のめりになったとき、ハルバートを右にステップで回避、鎧の隙間から見えそうなじを《ホリゾンタル》で切り裂き、首を落とす。

気分は進○の巨人。

倒し終わって、二人が微妙に引いていた。

「うわあ……」

「えげつないわね……」

いいだろ別に……というか喉元突く奴に言われたくない。

コボルド王十衛兵VSプレイヤー（王に立ち向かっているから革命

家?) 四十五人の戦いは、プレイヤーに有利に進んでいった。

ディアベル達C隊が、一本目のHPバーを削り、D隊が二本目を、現在はF、G隊がメインで三本目のバーを半減させていた。

先程も思ったが、キリトとアスナ——二人の奮戦が目覚ましい。

アイツらは、今後の攻略に欠かせない存在になるだろう。

と考えていたとき、キリトにモヤットボールが話しかけていた。

……《鼠》の依頼もあるし、聞いて(盗み聞きじゃないよ!) おくか……

「アテが外れたやろ。ええ気味や」

「……え?」

キリトは意味が分からないといった様子で聞き返す。

「へたな芝居すなや。こっちはもう知つとんのか、ジブンがこのボス攻略部隊に潜り込んだ動機つちゆう奴をな」

キリトはなおも分からないようだ。俺も分からん。何を言ってるんだ? アイツは。

「動機……? ボスを倒すこと以外何があるの?」

「何や、開き直りかい。まさにそれを狙うとつたんやろが!!」

……ああ、なるほど。そういうことか……

俺は自分の足防具——《グレーウルフズ・レッグアーマー》に目を向ける。

「わいは知つとんのか。ちゃんとか聞かされとんのかで……あんたが昔、汚い立ち回りでボスのLAを取りまくったことをな!」

「えっ……!」

そう。LA——Last Attackは、他のゲームでもある、ボスに最後の攻撃を当てた人が、何らかの特典を得ることだ。

しかし——ベータテスターを憎むコイツが元テスターな訳ないし、誰からベータ時代のキリトのプレイスタイルを聞いたんだ?

恐らくは四万コルの出元からだろうが……

だが何故、キリトのアニールブレードを買い取ろうとしたのかは今の話でわかった。

——キリトのLAボーナス入手の阻止だろう。

「き、キバオウ。あなたにその話をした人は、どうやってそのことを知ったの?」

恐らくベータテスターか、ベータテスターの誰かから聞いたかだが……

「決まっとするやろ。えろう大金積んで、《鼠》からベータ時代のネタを買ったつちゆうとったわ。攻略部隊に紛れ込むハイエナを割り出すためにな」

よし、決まった。そいつは元ベータテスターだ。

《鼠》は、ベータ時代のネタは売らないし、元テスターじゃないなら、そんな嘘を吐く必要もない。

俺の考えがそこまで至ったところで、ボスの方から「おおっしや!」という声が聞こえたので、そちらを見ると、バーが四段目に突入していた。

「ウグルウオオオオオ!!」

《コボルドロード》が吼えると、最後の《センチネル》が出現してきた。

「……雑魚コボ、もう一匹くれたるわ。あんじようLA取りや」

そう皮肉を残して、モヤットボールはパーティーメンバーのところへ戻っていった。

キリトはフエンサーと合流して、何やら話していたが、不意にボスの方を見る。俺もつられて見る。

ボスは、骨斧と盾を捨て、もう一度吼え、異様に長いタルワールを取り出す。情報通りだ。

俺はさっきのモヤットボールの話を交えて考えたいので、《センチネル》を二人に任せようとした。

「……なあ、二人共。少し考えたいことがあるから、《センチネル》を任せていいか?」

「……わかった」

「うん」

よし、頼まれてくれたので、任せよう。

まず、キリトの剣を買おうとしたのは、キリトにLAボーナスを取られるのを警戒したため。

買おうとしたのは、ベータテスター。

そのベータテスターは、ビギナーを装っている。

何故ビギナーを装った？

元テスターは非難されるからか？……もしくは、バレると不味い立場だからか？

そこまで考えたところで、全てが繋がった気がした。

まさか——

俺はボスの方——いや、青い髪をなびかせ、銀色の剣で戦っている騎士を見た。

——あんたが全部仕組んだのか？ディアベル。

無論答えはなかった。

突如感じる違和感。

なんだ？なにかが情報と違う気がする。

タルワールというのは曲刀だが、ボスが持っているのはあまりにまっすぐで、しっかり錬成されている業物だ。

——違う、あれは曲刀じゃない。

俺は中二病時代に無駄に調べた武器を脳内検索する。

そうして思い当たったのが、日本人なら時代劇で見たことがあるう代物。

——そう、刀だ。

キリトも気づいたのか叫ぶ。

「ダメー！全力で後ろに跳んでーっ！」

叫びむなしく、その声は届かない。

まるで竜巻のようなソードスキルは、C隊を襲った。

マジかよ……HP半分以上持ってかれてるぞ……

あんな攻撃を軽装な自分が喰らったらと思うと冷や汗が出る。

攻撃を喰らったC隊は、スタンしているが、誰も動けなかった。

硬直が解けた《コボルドロード》の追撃がくるのをみて、エギルさん達が助けようとするが、もう遅い。

地面すれすれの軌道でプレイヤーを斬り上げる。

——狙われたのは、ディアベルだ。

釣られている魚のように上空に打ち上げられるディアベル。だが、さほどダメージはない。

だが、その瞬間《コボルドロード》の野太刀が再度ライトエフェクトに包まれる。

上、下の連撃。さらに一拍おいての突き。

その全てのダメージエフェクトがクリティカルヒットであることを示していた。

ディアベルのアバターは、ほとんど突き刺さる形で少し離れたキリト達の所に落ちる。

急いでキリトは、《センチネル》の斧槍をシステム外スキル《武器破壊》をして、アスナが喉元を突き刺す。

俺もディアベルの所へと駆け寄るが、既にディアベルはその体をプレイヤーの『死』を表す、ポリゴンへと変えていた。

それでも、最期にディアベルがキリトに託した「ボスを倒してくれ」という願いが俺の耳に残っていた。

ボス戦で、ボツチ三人が奮戦する。

レイドリーダーディアベルの死は、レイドのプレイヤー達を震撼させるには充分過ぎたようだ。

武器を握り、目を見開き、誰も動こうとしない。

俺は『撤退』か『戦闘続行』かを考えていた。

普通なら、レイドリーダーの死、ボスの事前情報の違いの二つで即撤退だが、当然リスクもある。

さっきの範囲攻撃で十人、いや、下手するとそれ以上がディアベルの二の舞だ。

そんなことになったら、『ソードアート・オンライン』はクリア不可能だという認識になってしまうだろう。

二つの音が俺の意識を戦場に戻す。

一つは、動き出した『コボルドロード』の攻撃による金属音と悲鳴。

もう一つは、隣で膝をついているキバオウの声だ。

「……………何で……………何でや……………。ディアベルはん、リーダーのあんたが、何で最初に……………」

……………ボスのL Aボーナスを取ろうとしたからだ。

そう告げるのは簡単だ。一言いえばいい。

しかし、キバオウは知らないだろう。ディアベルがベータテスターだということ。を。

自分がキリトのアニールブレードを買い取る仲介者をした見返りとして、ベータテスターを糾弾する機会を与えてもらった。

恐らく、俺に邪魔をされたから、予定通りボス攻略が進んでいたら、反省会みたいな時に、また糾弾するつもりだったのだろう。

つまり、キバオウはディアベルがベータテスターだとは微塵も思わなかったのだろう。

反ベータテスターの代表者だと信じ、期待していた。

……………そして、キバオウは知らないが、その期待は裏切られている。

……………裏切られ続けた俺はわかる。

……………いつだって勝手に期待して、勝手に裏切られたと思ひ込んで、

勝手に失望した。

……いつだったか、雪ノ下雪乃は嘘を吐かないと思い込んだ俺自身に失望した。

……だからだろうか、コイツを見ていると、昔の俺を見ている様でイライラする。

戦線は総崩れ。なら、俺のやるべきことは、戦線を持ち直させることだ。

「へたつてる場合か！このグズ共!!」

「な、なんやと?」

意外なところから声があがったからか、キバオウは呆けた声を出す。

「呆けたアホ共は消えろ！邪魔だ!!」

俺は更に声を張り上げる。

「死にたいなら勝手にやれ！俺は——」

一拍おいて、悪どい笑顔で言い放つ。恐らくベータテスターだと思われるであろう一言を。

「——ボスのL A取りに行くぞ」

ディアベルが最期に遺した言葉は、『撤退』ではなく、『死戦』だ。

ボスの方へ走って行こうとした時、キリトとアスナが俺の左右に立つ。

「……わたしも行く。パーティーだから」

「初見じゃカタナスキルの相手は辛いでしょ?手伝うよ」

正直、ソロで戦うには、キツイどころの敵ではないので助かる。

「……別にいいが、見返りは何もやらんぞ?」

今度こそ広場の奥に走り出す。

奥のプレイヤーは、平均HPが半分を切っており、ディアベルが率いていたC隊に至っては、二割を切っている奴もいた。

ボスと戦うには、パニックを鎮めなくてはいけないが、ソロプレイヤーである俺には当然無理だ。

その時、左隣を走るアスナが邪魔だと言わんばかりにローブを引き剥がす。



麻栗色の髪が松明の炎を反射して、キラキラと光る。まるでその髪から粒子が出ていて、ボス部屋を照らしているかのようだ。

長い髪をなびかせて走るアスナは、まさに『流星』だ。恐慌状態のプレイヤー達もその美貌に目を奪われ、押し黙っている。

一瞬訪れた静寂を逃さず、キリトが叫ぶ。

「全員、出口方向に十歩下がって！ボスを囲まなければ、範囲攻撃は来ないから!!」

その言葉にようやく正常に戻ったプレイヤー達は行動を開始、キリトのいう通りにする。

さて、そんなことをしている間に、敏捷が一番高い俺が、そろそろボスのところに着く。

ボスの方を見ると、野太刀から左手を離し、左の腰だめに構えようとしている。明らかにソードスキルの前兆だ。

——落ち着け、俺にはあのスキルの情報はない。なら、動きを見て避けるしかない。

ボスの構えた野太刀が緑色に光る。

剣速は速い、が避けられない程じゃない！

俺はそのソードスキルの軌道を読んで回避、更にボスに《バーチカル》を叩き込む。

僅かに体勢を崩し、隙を見せるボスにアスナの《リニア》が炸裂、更に追撃でキリトの《スラント》をボスは喰らう。

隙を作るにはパリングが確実だが、俺では次にくるソードスキルが分からない上、筋力値が足りずにダメージを喰らってしまう。

だから俺は、その役割をキリトに任せることにした。

「キリト！ボスのソードスキルのパリング頼む！俺とアスナで攻撃する！」

「うん！」

まだまだ気は抜けないが、一先ずこれが最善だ。

キリトがベータ時代の知識を活かして攻撃を弾き、俺とアスナが攻

撃する。

しかし、集中力は無限に続くものではない。

十五、六回攻撃を弾いたところで、キリトが失敗する。

「あっ……」

——まずい、完璧に相殺できていない時もあったため、キリトのHPバーは、グリーンとイエローの境くらいだ。

あんなHPで攻撃を喰らったら………死ぬ。

だから、俺の取るべき行動は決まっていた。

ボスの野太刀とキリトの間に割り込む。

体が上空に打ち上げられ、ディアベルを殺したソードスキルのライトエフェクトが見える。

一発目——上段の突きは、無理矢理体をひねって回避。

二発目——下段の突きは、《ホリゾンタル》で相殺。

三発目——一拍溜めての突きを防ぐ手段は、俺には、もう、ない。

——死。

それがもう間近にある。

このまま刺されてHPバーは全損、死ぬんだろうなと思ったが、そうはならなかった。

「ぬ……おやおおっ！」

野太い声が聞こえたかと思うと、ボスが体勢を崩し、三発目の攻撃は繰り出されなかった。

野太い声の正体はエギルさんだった。

……どうやら助けられたらしい。

「あんたがPOT飲み終えるまで、俺達が支える。ダメージディラーにいつまでも壁をやられちや、立場ないからな」

「……うっす、ありがとうございます」

そう言いつつ、POTを取り出して、イエローゾーンにまでなったHPを回復させた。

俺は視線で「無事だ」と伝えようと、二人——特にキリトは安堵の表情を浮かべる。

「キリト、タンク役の人達に指示してきてくれ」

キリトは二つ返事で引き受けてくれ、ボスの方へ向かう。

俺は——死に恐怖していた。

クツソ……手が震える。怖い、死にたくない。

ポーシヨンによる時間経過回復を待ちながら、死の恐怖を押さえつけていた。

ようやく手の震えが収まってきて、ボスの方を見ると、C隊のプレイヤーのHPを半分以上削った範囲攻撃の予備動作に入っていた。

キリトがそうはさせまいと跳躍、右手の剣が黄緑色の光を纏っている。

「届……けエー……ッ！」

剣が光のアーチを描きながら、《コボルドロード》の左腰に当たる。クリティカルヒットを表す、特有のライトエフェクトが辺りに拡がる。

《コボルドロード》は、竜巻を生み出すことなく床に叩きつけられる。「ぐるうっ！」

そんなボスの威厳もない声を発し、《コボルドロード》は手足をバタバタさせる。

——あれは確か転倒（タンプル）状態——

「全員、最大攻撃!! 困んでもいいよ！」

その声に一齐にソードスキルを叩き込むプレイヤー達。

勿論、HPが回復した俺も一齐攻撃に参加する。

しかし——

(削り切れない……っ！)

キリトもそれを察したのか

「削り切れない……っ！アスナ！最後の《リニア》一緒にお願い!!」

最後に削り切ろうとするキリトが《バーチカル・アーク》、アスナが

《リニア》を発動。

しかし、僅か一ドット残る。

「キリト！アスナ！逃げる!!」

しかし、二人は技後硬直のため動けない。が、ボスは容赦しない。

(——まずい！)

俺はアニールブレードを逆手に持ち、刃の先端をボスに向ける。

そして――

「行けええええええー！」

俺は三つ目のスキルスロットに入れておいた《投剣》スキル――《シングルシュート》を発動。

アニールブレードは真っ直ぐボスに飛んでいき、ボスの人間でいう心臓の位置に突き刺さり、ボスのHPを削り切る。と同時に、役目を終えたと言わんばかりに、丈夫さを強化していなかった俺のアニールブレードは、ポリゴンとなって消えていった。

俺の視界には、【You got Last Attack!!】というシステムメッセージが写っていた。

やり方を変え、されど比企谷八幡は一人で背負う。

ようやくボスが倒され、後方にいたセンチネルも霧散する。

松明の炎が更に明るみを増し、ボス部屋を照らす。

——本当に、やった、のか？

思わず辺りを見回す。

どこにもボスはもういない。

——終わった、のか……

ようやく安堵の息を吐く。

「お疲れ様」

「……………」

キ、キリトさん？何故に怒ったような顔をしているのですか？

「何で……あんな無茶したの？」

あんな無茶……キリトを無理矢理攻撃範囲から退かしたとか？

「い、いや……攻撃を防ぐ自信があったもので……」

キリトは泣きそうな顔で言ってくる。

「もう、あんな無茶しちゃダメだよ？」

ここで断ったら、キリトは恐らく泣いてしまうだろう。

年下の女の子を泣かしてしまうのは、妹を持つお兄ちゃんとして

も、男としても駄目だろう。

それに、ボツチの俺には泣き止ませる方法がない。

かといって、絶対にしないとは言いい切れない。

効率が良いのなら、俺はさっきのようなことを、またするだろう。

俺だって命は惜しい、死にたくない、生き残りたい。

だから、ここで俺がすべき返答は、

「ぜ、善処します……」

その時、新たなシステムメツセージが視界に流れた。経験値。取得

コル。そして、取得アイテム。

そのシステムメツセージが現れて、少しした時に、わっ!!と歓声がする。

両手を突き上げて叫ぶ者。仲間（笑）と抱き合う者。滅茶苦茶な踊

りを披露する者など様々だ。

そんな中、こちらに歩いて来る人影——エギルさんだ。

「……見事な指揮だった」

「あ、ありがとうございます！」

エギルさんは、そしてと続ける。

「それ以上に見事な剣技だった。コングラチュレーション、この勝利はあんた達のものだ」

「……どうやらわざわざ褒めに来てくれたらしい。

助けられた礼もしていないのでしておく。

「い、いえ、エギルちゃんも見事な剣技でしちゃ、助けてもらって、ありがとうございましちゃ」

くっ!!また噛んだ!!ただでさえ初対面なのに、歳上の人だと噛むに決まってるだろ！

エギルさんは気にしていないかのように、エギルでいいと言いながら右手を拳で差し出してくる。

これ以上掛ける言葉が見つからないので、

「……わかりました」

とだけ言って、せめて拳を当てようと思った時——

「——なんでだよ！」

それは悲しんでいるような、怒っているような、責めているような、そんな声音だった。

「——なんでディアベルさんを見殺しにしたんだ!!」

C隊の……つまり今は亡きディアベルのパーティーだった軽鎧のシミター使いが叫んでいた。

果たしてそれは、俺に向けてかキリトに向けてか、はたまたこの場のベータテスター全員に向けてか。

「……見殺し……」

キリトがぼやく。本当に意味が分からないのだろう。

「そうだろ!!だって……だってアンタは、アンタらは、ボスの使う技を知ってたじゃないか!!アンタらが最初からあの情報を伝えれば、ディアベルさんは死なずに済んだんだ!!」

まるで伝言ゲームのようにレイドメンバーに伝わり、ざわめく。

「そういえばそうだよな……」

「なんで……？ 攻略本にも書いてなかったのに……」

……何を言ってるんだ？ コイツらは。

「ちよつと待ってー。エイトは……」

俺はキリトを手で制する。

……さて、どうするか。

ここでヘイトを俺に向けるのは簡単だし、得意だ。

しかし、それをしても相模の件とは訳が違う。

奉仕部の依頼でもなければ、誰も得をしない。

彼らは、自分の責任を誰かに背負わせたいだけだ。

ならば、俺がここで取るべき行動は――

「馬鹿なことを言ってくれるな、役たたず共が」

しん、とボス部屋が静まりかえる。

「や、役たたずだと!？」

さつき叫んでいたシミター使いが言い返してくる。

「違うのか？ ディアベルが死んでからろくに戦えず、レイドを壊滅寸

前まで追い込んだ張本人達だろ？」

それは事実だと認めているのかぐつ、と押し黙る。

「そもそもだ、情報本には書いてあっただろ？ 【情報はベータ時代のも

のです】ってよ」

正論を言われたり、凶星を突かれたら人は大体怒るものだ。

アイツらも知らない内に、ヘイトは俺に向けられている。

「それでも情報がなかったのは事実、だが情報不足はベータテスター

達だけのせいじゃない、お前達ビギナーのせいでもある」

もはや何も言えないが、俺に憎悪の視線だけは向けてくる。

「そもそも、お前らが役たたずでいた間、戦線を支えたのは誰だ？ お前

達が嫌う俺達ベータテスターだろうが」

実際は俺は違うけどな……と心の中で付け足す。

さあ、いよいよだ。

「それをディアベルが死んだのは俺達ベータテスターのせい？ 冗談言

うな、お前達が『役たたず』だったせいだろうか」

その言葉に今にも斬りかかって来そうなプレイヤー達、だが、ギリギリのところでは抑えている。

……よし、これでいい。少なくとも感情論で納得していないが、理屈では理解しているのだろう。

ベータテスターへの憎しみは、少しは収まり、代わりに俺にぶつけてくるだろう。

「分かったら、さっさとはいまりの街でも行って伝えてきたらどうだ？ 『一層は突破されました』とでも」

その言葉にパーティーごとに解散していく。

……ふう、あんなに喋ったから疲れた。

しかし、作戦は上手くいった。

——ディアベルが死んだのは全員のせいだ。

この『全員同じ』というのが人を妥協させ、安心させる。

ならば、その事実を伝えてやればいい。

何故ディアベルは死んだ？

——情報がなかったからだ。

何故情報不足になった？

——攻略本を過信し、収集を怠ったからだ。

ならば、それは誰のせいだ？

——情報収集を怠ったプレイヤー全員のせいだ。

つまり、ディアベルの死⇨全プレイヤーのせいという等式が成り

立っているだろう。

さて、問題を解消したがどうするか。

アニールブレイドよりは劣るが、武器はあるにはある。

——と、その前に

「キリト、今からアイテム送るからOK押してくれ」

「えっ？ うん……」

俺はボスのLAボーナスの《コート・オブ・ミッドナイト》をキリトに渡し、ウィンドウを閉じる。

——これでデスゲーム開始の最初の時の借りは返したからな。



心の中でそう思いつつ、俺は二層に続く階段を登った。

……後ろからキリトの悲鳴に似た驚きの声が聞こえたのは幻聴だ  
と思いたい……

「で、何しに来たんだ？お前」

今、俺の目の前には、フードを取った細剣使い——アスナがいた。

アスナは二層の眺望に小さな声で「きれい」と呟いてから俺に向き直る。

「エギルさんと、キバオウから伝言がある」

うわあ……あまり聞きたくないな……

「そうか、ご苦労さん。じゃ」

そう言っただけで逃げようと思ったのだが……

「ぐえっ」

……何回俺は襟掴まれるんだよ……それも女子に。

「まずエギルさんからは『また二層のボス攻略も一緒にやろう』って。キバオウは……」

あれ？案外まともだ。まあ、『ボス攻略来なかつたらどうなるかわかってんだろ？あ、ああん？』という意味だろうか。

キバオウ……キバオウ？誰だソイツ？あつ、あのモヤットボールのことか。

「……今日は助けてもらってたけど、やっぱり納得出来ん。わいは、わいのやり方でクリアを目指す」だって」

……うん、再現しようとしたのは嬉しいんだけど……

「言つとくけど全く似てないからな、関西弁」

すると恥ずかしかったのか、顔を赤くしながら言ってくる。

「う、うるさいわね……んんっ！あと……これは、わたしからの伝言」

伝言っていうか、直接言ってますよね……

「あなた、戦闘中にわたしの名前呼んだでしょ」

あー、あの時は余裕なかったからなー、やっぱりキモかったかなー。

「悪かったよ……名前で呼んだりして……次からはちゃんとフェンサーさんって言う「違う」よ……」

なんだ？名前呼ぶのやめろってことじゃないの？

あとは……これはないと思うけど

「何？読み方が違った？」

すると怪訝な顔をするフェンサー……いや、アスナ。

……何で心の中でフェンサーさんって言ったこと分かって睨んでくるのん？

「……そうじゃなくて、何で名前教えてないし、あなたのも教わってないのどこで知ったの？」

なんだ……そんなことならキリトに聞けよ、めんどくさ……いえ！

アスナさんに教えることが出来るなんて、光栄の極みであります!!

……だから何で思っていること分かるのん？

「もしかなくてもパーティー組むのは初めてだよな……」

迷宮区に三日以上籠ってる奴がパーティー組んでた訳ないか……

「左側に自分のじゃないHPバーがあるだろ？その下に何かないか？」

「え……」

眩き、顔ごと動かさそうとするので、言っておく。

「顔ごと動かしたら意味ないぞー」

言った瞬間顔をピタツと止める。ダルマさんが転んだかよ。

「き……り……と？それがあなたの名前？」

何？俺は名前すらも影薄いの？

「違う。他にないか？」

「ない、けど……」

あつ、そういえばパーティー脱退してたの忘れてた。八幡うっかり、テヘペロ。

「……そういえば俺、パーティー脱退してたわ……」

「……それを早く言いなさいよ……」

ジト目で睨んでくるアスナ。いや、だって名前聞かれたことないし……

「……で、あなたの名前は何なの？」

「……エイトだ」

……自分で自分のキャラクターネーム言うの凄く恥ずかしいんだけど……

「……ほんとはね、エイト、あなたにお礼を言うために追いかけてきたの」

お礼？なんだ？

「なんだ？迷宮区のことか？それともパンか？」

あえて風呂のことを出さない。だってまだしにたくないもん！

「そうね……いろいろ。いろんなことのお礼。わたし……この世界で、初めて目指したいもの、追いかけてみたいものを見つけたの」

「……そうか、そりや良かったな」

……コイツは、もうあまり無茶はしないだろう。そんな確信があった。

「わたし、頑張る、頑張って生き残って、強くなる。目指す場所に行けるように」

「ああ……お前は強くなれるよ」

コイツは自分の居場所を見つければ強くなる。そのことは（他称）ひねくれ者の俺にだって分かる。

「じゃあ……またね、エイト」

そう言っただけで扉の方に歩いて行くアスナ。

……これだけは今言わなくてはいけない気がした。

「アスナ、この世界……《ソードアート・オンライン》はクリア不可能

じゃない、だろ？」

小さく、しかし確実に頷いたアスナは、今度こそ戻って行った。

「……行くか……」

あらかじめ《鼠》から買っておいた、近くの街の場所に行こうとした時、《鼠》から、フレンド登録しておけば（俺はさせられた）出来るメールが届いた。

【依頼はできたか？ハッチ】

ボス攻略が終わったともう知っているのか……と《鼠》の情報網に少し恐怖しながら読み進めると、

【多大な迷惑をかけたみたいだシ、特別報酬で情報をなんでもひとつタダで売るヨ】

ほう、《鼠》にしては気前が良すぎて怪しいが、試すだけならタダだ。

【依頼は出来た。特別報酬だがおヒゲの理由を教えてください】

恐らく俺は、ボス攻略の時より悪どい顔をして、無理矢理フレンドにされたことの意趣返しメールを返信していただろう。

世の中には、そう旨い話はないのである。

二層主街区《ウルバス》についた俺。

転移門を有効化（アクティベート）をした瞬間、俺は逃げた。

というのも、ベータテスターへの憎しみを俺に向けさせたまでは良かったのだから、いささか向けさせ過ぎた様である。

俺は『ベータテスターを庇った悪者』、『俺自身がベータテスター』などと呼ばれているという《鼠》情報だ。

一つ目は、ボス部屋でやったことから。

二つ目は、恐らくボスのカタナスキル（仮称）に対処できたから。

だが、最もメジャーなのは……

——『ビーター』

俺がベータテスターである（と思っている）ことから『ベータ』、他にもいたであろうベータテスターが対処出来なかったソードスキルを対処したことから、上層の多くの情報を独り占めしている（と思っている）ことから『チーター』、二つを合わせて『ビーター』らしい。……良く考えたものだ。

しかし、俺はそんな悪口慣れているので問題ない。むしろ、マシンな呼び名だと思っている。

……まあ、そんな訳で俺は逃走中という訳だ。

あらかじめ探しておいた隠れ場所である教会みたいな建物の三階にいる。

歓声がうるせえ……

若干うんざりしていると、聞き覚えがある、とまで言わなくても聞いたことがある声が聞こえた。

……なにやってんだ、アイツは。

俺は索敵スキルはたまにしかスキルスロットに入れなかったため、《追跡》は使えない。

そのため、声が聞こえてくる方向に走っていく。

……べ、別に気になったわけじゃないんだからねっ!!

ようやく追いついた場所は、軽く偵察したときに、強そうなデカイ牛がいたところだった。

今のレベルでは俺も行きたくない………まあ、めんどくさいところにはどこにも行きたくないが。

……まあ、それは置いといて、《鼠》と二人の男性プレイヤーが言い争っている。

「……んども言ってるダロ！この情報だけは、幾ら積まれても売らないんだ！」

いつもより刺々しい《鼠》の声。

ふっ、甘いな。雪ノ下レベルだったら「ストーカーするなんて人として恥ずかしくないの？黒鉄宮に送ってあげましょうか？」くらいは言うぞ？それでもアイツにしたら甘いくらいだ。

「情報を独占する気はない。しかし公開するする気もない。それでは、値段の吊り上げを狙ってるとしか思えないでござるぞ！」

——ござる？うわあ……材木座みたいなタイプか？それとも、ゲーム内だと役割演じちやうタイプか？

俺は隠蔽スキルを発動させ、言い争っている場所が真下に見える場所へ四つん這いで進む。

「値段の問題じゃないヨ！オイラは情報を買った挙げ句に恨まれるのはゴメンだって言ってるんだ!!」

売ったら恨まれる情報？少し興味が出てきた。

俺は更に話（というか言い争い）に集中する。

「なぜ拙者たちが貴様を恨むのだ!?金は言い値で払うし感謝もすると

言っているでござる!!この層に隠された——《エクストラスキル》獲得クエストの情報を売ってくれればな!!」

……エクストラスキル?直訳だと特別な技とかそんな感じか?

まあ、なにせよ取っておいて損はなさそうな響きの名前だ。

「今日という今日は、絶対に引き下がらないでござる!」

「あのエクストラスキルは、拙者たちが完成するために絶対必要なのでござる!」

「わっかんない奴らだナ!——なんと言われようとあの情報は売らないでゴザ……じゃない、売らないんだヨ!!」

おい……口調感染ってきてるぞ《鼠》……

はあ……そろそろ行くか?特別報酬のことも聞きたいし……

「よつと」

五メートル程の高さを飛び降り、衝撃に備える。

着地した瞬間砂ぼこりが舞う。受け身が上手くいったか、HPバーを見て確かめる——減ってない、どうやら上手くいったらしい。

「——何者でござる!?!」

「他藩の透波か!?!」

アンタら楽しそうですね……と内心呆れつつ、男達の装備を確認する。

一言でいうなら《忍者》だ。

「あんたら、ここは引け」

なんとかなだめようとするが、

「うるさいでござる!そこを退くでござるよ!」

はあ……めんどくせ。

「そうか……アンタらが引いてくれるなら、エクストラスキル《手裏剣術》が取得できるかもしれないクエストを受けられるかもしれない場所を教えてやろうと思っただけにな」

勿論嘘っぱちだ。相手を引かせればいいだけだからな。

コイツらは忍者に憧れてでもいるのだろう。じやなきやあんな格好しない。ソースは中二の時の俺と材木座。

「何っ!!」

声をハモらせて聞いてくる忍者×2。ウゼエ……

「ああ、確か《ウルバス》のどこかで受けられるとか聞いたな……」

言うやいなや一目散に《ウルバス》へと走っていく忍者×2。

ふっ、ミッシヨンコンプリート。

と心の中で、一人でかっこつけていると、急に背中に柔らかい感触。

「かっこつけすぎだよ、ハッチ」

後ろから《鼠》の声、つまり、この柔らかい物体は……

理解するまで数十秒。その間も《鼠》が何か言ってるが、耳に……

いや、頭に入ってるこない。

ふええ……柔らかいよお……

「い、いいから放せ!!俺はお前のヒゲの理由を聞きに来たんだ!」

いや、ほんとに止めて下さい。勘違いしそうになるからあ!!

そんな俺の心の叫びが通じたのか、《鼠》は離れる。

「……いいヨ、教えてあげル。でもちよつと待って、ペイントを取る力

ラ……」

ん、んん?何でペイントを取るんだ?

……何か見てはいけない物を見てしまいそうだからやめておこう

……

「や、やっぱり教えてもらおう情報変更して下さい!さつきアイツらが言ってた《エクストラスキル》とかいうのについてで!」

すると《鼠》は少し迷った顔をするが答える。

「なんでも教えるって言ったからには、約束は守るヨ。でも、ハッチも

一つ約束シロ。どんな結果になっても、オイラを恨まない、つてナ!

……そんなヤバいことなのか?

「あいよ、システム様に誓って決して恨みませくん」

少々ふざけて言ったが、それでも《鼠》は満足したように頷く。

そして頷くのをやめたら「ついてきな」と言っ歩いていくので、大人しくついていく。

野を越え、山を越え、なんてことはなかったが、かなり遠かった。

それこそ、何回内心帰ろっかなーと思っただのか分からないくらい。

……三十分くらいの道のりだったが……



着いた所は、周囲をぐるりと囲まれた場所だった。

小屋がポツン…と建っている。

《鼠》は躊躇せず入って行くのだが……

「……何してんだ？キリト」

後ろにちよこちよこ見える黒い影。

恐らく——というか百パーキリトだろう。

「い、いや……アルゴとエイトが話してる内容が聞こえちゃって……」

そう言っつて少しシユン、とするキリト。

くっ！リアルジョブお兄ちゃんが、年下の女の子にそんな顔をさせるわけにはいかん！

「い、いや…別に怒ってる訳じゃないから、取り敢えずその顔やめてくれ」

可愛いから、と心の中で付け足す。

……俺史上、小町と戸塚に並ぶ可愛さだ。

「取り敢えず中入ろーぜ」

「うん！」

で、中入ったら筋骨隆々のオツサンがいて、その頭上にクエスト開始点である証の！マークが付いている。

「あれ？キー坊もクエスト受けて来たの力？」

「う、うん。そうなんだ、アハハ……」

「フウン、ま、いい力。で、アイツが、エクストラスキル《体術》をくれるNPCだよ。オイラの提供する情報はここまで。クエを受けるかどうかは自分達で決めナヨ」

「た、体術？」

俺はおろか、キリトまで聞き返す。

「《体術》は、武器なしの素手で攻撃するためのスキル……だとオイラは推測してる。武器を落としたり、耐久限界で壊れた時とかには有効だろうナ」

おお……

武器（アニールブレード）が壊れた経験がある俺には、かなり魅力的に見えた。

それに、忍者×2がこだわってた理由も分かったが、わざわざ言う必要は無いだろう。

俺達が、座禅のオッサンの前に立つと、オッサンが話しかけてくる。

「入門希望者か？」

「……そうだ」

「修業の道は長く険しいぞ？」

「え、ならいいで「望むところですよ！」」

ちよ、キリトさん？何故に被せてくるんですか？

その時、オッサンの頭上の！が？に変わった。クエストが始まった証だ。

オッサン改め師匠が連れてきたのは外——巨大な岩の前だった。

——まさかとは思うけど……

「汝らの修業はたった一つ。両の拳のみで、この岩を割るのだ。為し遂げれば、汝らに我が技の全てを授けよう」

嫌な予想が見事的中してしまった……

「こ、これを両の拳だけで……？」

さすがにキリトも戦慄している。

——よし、諦めよう。

クエストをキャンセルしようと師匠改めクソジジイに向き直る。

「あの」この岩を割るまで、山を下りることは許さん。汝らには、その証を立ててもらおうぞ」

そう言ってクソジジイが取り出したのは——筆。

ま、まさか、《鼠》のヒゲの理由って——

そこまで考えたところで、ツボに突っ込んだ筆が、凄まじい早さで俺とキリトの頬に当たる。

……この野郎。

思わず《鼠》を睨む。

「いやー、得したナ、ハッチ！結果的に、《エクストラスキル》と《ヒゲの理由》が知れたんだからナ！」

……殴りたい、その笑顔……

「あ、あのさ……私達の見え目って、どうなってるの？」

「そーだナ、ひと言で表現すると……《キリエもん》に《ハチえもん》だナ」

そこで限界が来たのか手足をジタバタさせて転げ回り、「にやハハハ！にやーハハハハハハ！！」と大爆笑し続けた。いつまでも、ずっと。

……俺達は苦心の末、三日で岩を割れた。

……《鼠》のタダの情報程高いものはないと思いつつ三日だったのは、言うまでもないだろう。

ウルバスにて、比企谷八幡は再び出会う。

「ふ……ふざっ、ふざけんなよ!!」

道行く途中、半ば裏返った声で絶叫する男の声が聞こえて、俺は足を止める。

スススと真横に移動し、壁に背を付け、前方の様子をうかがう。騒ぎの発生源を見る。

「も、戻せ!!元に戻せよ!!プラス4だったんだぞ……そ、そこまで戻せよッ!!」

どうやら、プレイヤー同士の争いのようだ。

実際は《圈内》である、アインクラッド第二層主街区《ウルバス》で隠れる必要はないが、トッププレイヤーに俺は嫌悪されているため、隠れている。

二〇二二年十二月八日木曜日、デスゲームSAOが開始されてから三十二日目。

第一層のボスモンスター《イルファンク・ザ・コボルドロード》が倒されてから早くも四日が経っている。

事前情報にないカタナスキル（キリトから聞いた）によって、デイアベルが死に、ベータ時代に手に入れていた情報（と思っている）を駆使して、挙げ句ラストアタック・ボーナスをかつさらった『ビーター』。

幸いアバターの容姿を知っているのは四十人前後なため、石を投げられたりはしていない。

まあ、念には念ということで、ファンタジーな世界のSAOでは違和感ありまくりのフード付きパーカーを着ている。

ふざけんなよ!!という言葉が自分に向けられていないことを確認して、声が出た方に歩く。

「どっ、ど、どうしてくれんだよ!!プロパティむちゃくちゃ下がってるじゃねーかよ!!」

装備から最前線近くで戦っているプレイヤーだと推測。

金属性の防具と三本ツノのヘルメットも目を引くが、それより目を

引くのが、右手に持っている剥き出しの片手剣だ。

圏内は誰かを傷つけることができないが、さすがに少々物騒だ。「なんだよ四連続失敗って！プラスゼロになるとか有り得ねーだろ、これならNPCにやらせたほうがマシじゃねーか！責任とれよクソ鍛冶屋!!」

で、そのクソ鍛冶屋らしい男性プレイヤーは、困り顔でじつと立っているだけだった。

広場の一角に《ベンダーズ・カーペット》という決して安い訳じゃない(らしい)アイテムを広げている。

なんでもキリト曰く、簡易的なプレイヤーショップができるアイテムなんだとか……

と聞いた知識を思い出している時によく三本ツノの男が怒っている理由が分かった。

SAOに限らずネットゲームの恐ろしいところだ。

基本的にネットゲームでは、武器の強化成功率はどんなに上げても百%にはならない。

……まあ、三本ツノ氏は運がなかった、としか言えない。

鬼畜な確率のレアアイテムを手に入れられてラッキー！みたいなのと同じだ。

……そんなアイテムもあるんだろうなあ……

若干ゲンナリしつつ、事の成り行きを見る。

べ、別に暇なわけじゃないんだからねツ！

「……何なの、この騒ぎ」

「うわっ！」

び、びっくりした……

……次のスキルスロットで索敵取ろうかな……

というか、フード被ってるのに何で分かるのん？

いや、きつと俺に話しかけてきたわけじゃないんだ。無視無視。

「……ねえってば」

声から女性のようだ。おのれリア充、爆発しろ。

「ぐっ！」

右の鳩尾に衝撃。

そちらを見ると四日前までパーティーを組んでいた細剣使い……アスナが肘うちをした体制でいた。

……どうやら本当に俺に話しかけていたらしい。

いや、だってしようがないじゃん！ボツチが話しかけられるなんてめったにないし!!

「……なんだよ」

「だ・か・ら！あの騒ぎは何って聞いているの！」

お、おう……アスナさん、怖いっす。

「どうやらあの三本ツノが剣の強化お願いしたらしいが……何でお前俺だって分かるの？一応変装のつもりなんだが……」

めんどくさいし、もうバレてるので素直に認める。

「だってフードなんて被っているのなんて、顔を見られたらまずい人だけでしょ？」

さいですか……お前もローブ被っているけどな……

「……話すなら人目がつかない所に行かないと話さないぞ」

そう言うのアスナは裏路地にスタスタと歩いて行く。

……いや、一言下さい。

裏路地に来た、来たんだが……

何も喋らないなら帰っていいですか？それとも俺から話せてか、あん？

「あー、その、久し振りでせうね、アスナしゃん」

空気が重い……噛んでしまったのは仕方ないだろう。

「こんにちは、エイト君。でもさんはいららないよ」

……コイツは何故かさん付けすると「面倒だからいらぬ」と答えるのだから女心はよく分からぬ。というか、よくじゃなく全く分からぬ。

……ここはさっさと説明して、即退散が吉だな。

「あの三本ツノが鍛冶屋に武器強化を頼んで、四回連続失敗してプラスゼロになったんで頭に血が上ったらしい。……そういうわけで、じゃ」

顔隠している二人が裏路地にいるなんて怪しすぎる。俺はクールに去るぜ。

「ちよつと待って」

——瞬間、俺は襟を押さえる。

フツ、人は成長する生き物なのだよ、ワトソン君。

……まあ、ソロ（一人）だからワトソン（パートナー）なんていないが。

だが、案の定襟を掴もうとしたのまではいいのだが、手で防いだので……言わなくても分かるな？

気まずい雰囲気の流れたが、仕切り直すように咳払いしてからアスナが言う。

「……失敗の可能性があることは頼むほうも承知してるはずでしょ。あの鍛冶屋さん、お店に武器の種類ごとの強化成功率一覧貼り出してるじゃない。しかも、失敗した時は強化用素材アイテムぶんの実費だけで手数料は取らないって話よ」

「そりゃ……良心的だな」

失敗しても大丈夫なようにそうしてるんだろう？と思った俺は、自分でも性格が良いとは思わない。

「……まあ、ギャンブル感覚でやってたら熱くなって、もう一回、もう一回やってやったらゼロになった、って感じか？」

俺は違うが。専業主夫（志望）たる者、無駄遣いはだめだからな。

「ふうん、そんなものなの？」

「まあ、単なる一般論だが」

実際博打で身を滅ぼす奴なんて腐る程いるだろう。カ〇ジみたい

な。

「……まあ、わたしも可哀想だと思わなくもないけど、でも何もあんなに興奮しなくても……また素材ぶんのお金貯めて、再挑戦すればいいじゃないの」

おお……コイツから可哀想なんて言葉がでるとは……はい、ごめんなさい。謝りますからその目をやめてください。

「い、いや……そういうわけにもいかんのですよ……」  
「どういうこと?」

俺はアニールブレードより1ランクくらい下のスチールブレード+3を指差す。

「あの三本ツノ氏の武器はアニールブレードだ。きっとあのキツイクエストをクリアしたんだろうなあ……」

今は亡きアニールブレードを思い、目が腐っていつてる(だろう)。「んんっ!話を続けるとだな、更に頑張って+4にしたんだろうな。で、+5から成功率が下がるからあの鍛冶屋に頼んだ。そしたら見事に0になったんだろうな」

ふう……本来こうした説明はキリトの役なんだが……ぶつちやけめんどくさい。

「……でも、0からはもう下がりようがないんだから、また+5を目指せば……」

それは不可能なのだ。……それがSAOの武器強化システムの厄介なところだ。

アスナも気づいたのか、フードの奥の目を見開く。

「そうか……《強化試行上限数》ね。アニールブレードの試行上限数は、確か……」

「八回。つまり、成功失敗共に四回ずつで三本ツノのアニールブレードはもう強化できない」

このシステムの厄介なところは強化『成功』上限数ではなくて、強化『試行』上限数なところだ。

例えば、アニールブレードの場合は、強化で+8になったらもう強化できないのではなくて、強化を八回試したらもう強化できないの



だ。

……更にめんどくさいのが所用者の努力で成功率を上げられるところだ。

だから、あの三本ツノ氏の非は、一回失敗した時に冷静にならなかったことだろう。せめて一回でやめれば+0にはならなかっただろうに……

「……………なるほどね。それはまあ……………確かに、荒れる気持ちは解るわ。ほんの少し」

「おお……………最初の頃は武器を何とも思ってたのにツ！」

……………また肘うちされた……………

痛みはないが不快感が襲う。

そんなこんなしていると、鍛冶屋と三本ツノとその仲間たち(笑)で話が進んでいる。

「……………ほら、大丈夫だってリユフィオール。また明日からアニブレのクエ手伝ってやるから」

「一週間頑張りや取れるんだからさ、今度こそ+8にしようぜ」

うわあ……………今は一週間もかかんのかよ。

今この瞬間、もう一度アニールブレードを取りに行くという選択肢は消えた。

その言葉でようやく三本ツノ氏(長いのでそのままだけで、覚えてない訳じゃないよ!)は落ち着いたのかとぼとぼと広場から歩き去ろうとしている。

その背中にここまで黙っていた鍛冶屋がようやく口を開く。

「あの……………、ほんとに、すいませんでした。次は、ほんとに、ほんとに頑張りますんで……………あ、もう、ウチに依頼するのはお嫌かもですけど……………」

さつきまでとは違い、元気がない声で三本ツノ氏が答える。

「……………アンタのせいじゃねーよ。……………色々言いまくって、悪かったな」

「いえ……………それも、僕の仕事の内ですから……………」

言いながらペコペコ頭を下げる鍛冶屋は、まだ十代だった。

うわー、あれが仕事なら一生働きたくないでござるー。

などと考えながらやりとりを眺めていると、鍛冶屋は一步踏み出して深々と頭を下げ、言った。

「あの、こんなことじゃお詫びにはならないと思うんですが……その、ウチの不手際で＋０エンドしちゃったアニールブレード、もしよかつたらですけど、八千コルで買い取らせてもらえないかと……」

ざわ…と周りがざわめく。

アニールブレードのエンド品は、せいぜい四千コルだ。

旨い話には裏があると思っっている俺は鍛冶屋を疑いのまなざしで見っていたが、俺は何をするわけではなかった。

やがて三人は、顔を見合わせ、頷いた。

余計なことに、比企谷八幡は口を滑らせる。

三人が去ってから俺はベンチに腰掛け鍛冶屋の方を向いていた。その隣にはアスナ……何故だ。

本来なら、背中にあるスチールブレード+3を強化しようとしたのだ。

俺はマロメの村で腕のいい鍛冶屋がいる、と小耳に挟んだ（盗み聞きじゃないよ！たまたま聞こえただけだよ！）ので、わざわざウルバスまで来たのだ。

それをさっきの騒動のせいで水を差されたのだ。

別に、気にせず「強化お願いしまーす」と言えばいいのだが、まさかプレイヤーとは……

おまけに先刻聞いた話が更にプレッシャーだ。七割成功で+4から0とは……

もし俺のスチールブレード+3が0にでもなったりしたら……うん、損害賠償を求めるな。

さて、そろそろ聞かか。

「……で？何でお前居んの？」

「何でって、あなたもあの鍛冶屋さんに強化頼みに来たんじゃないの？」

えー、何コイツ怖い。何で分かるの？八幡検定何級？

「……何でお前分かるんだ？エスパァーなの？」

そう言ったら、はあ、とため息を吐かれた。何故だ。

「そんなわけないでしょ……」昨日の夜にマロメで会った時、東の岩山エリアで、あなたと一緒に《レッド・スポデット・ビートル》狩りに行ってくつて……キリトちゃんが

キリトかよ……というかキリトにちゃん付けて違和感ありまくりだな。

いや、容姿とか性格が問題じゃなくて、名前が。

あとなんかキリトとかアスナとのエンカウント率高いんだよなあ

……

「お、おお……勉強してんだな」

「何？その反応」

「おお……いちいち反応が怖いなコイツ……」

「ひ、ひや、最初に比べると随分M M O R P Gのきよと分かっちゃえつるなちよ思いまちて」

「……………」

「い、いや本当に情報は大事だからね？ホント、マジで。」

俺の心のアドバイス（言い訳）が通じたのか、特に何も言っ来なかつた。

「最近、いろいろ勉強してるから」

俺はそうか、とだけ呟く。

……さて、ついつい忘れがちだが、俺は『ビーター』と呼ばれている（勝手に）のに対し、相手は二人しかいない、最前線女性プレイヤーの片割れだ。あまり一緒にいるのはよろしくない。

「んじゃ、俺用があるか「嘘吐かない」ら……」

だから何で分かるのん？プライバシーの侵害だ！

「ねえ、何で元ビータースターじゃないって言わないの？」

一瞬だけ自分の体が止まったのが、自分でも分かつた。

このまま帰ろうとしても、帰してくれないだろう。

「はあ……別に大層な理由じゃねーよ」

「それでもいいから教えて」

その声は有無を言わさない迫力があつた。

……はあ、まあ教えてもいいか。

「はあ、まず一つ、ビータースターの中で区別をつけることだ」

「区別？」

「そうだ、ビギナーはビータースターを憎んでる……少なくともいい感情を持ってないのは一層で分かつたろ？」

少しだけローブが上下に動いた。

……まあ、ビータースターだと隠していたけど、上手くやっていた例外はいた……が、ディアベルはもういない。

「だが、そこにビーターという悪のビータースターが現れたことで、

ベータテスターの中でも明確に区別を付けさせた。これが一つ」

そう、人間のグループやカーストのように分けることで、悪と善のベータテスターは関わることはなくなるだろう。

「その二、区別した善のベータテスターを被害者にする事」  
「被害者？」

まあ、これだけじゃわからんわな。

「ビギナーは、ベータテスター全体を憎んでいたが、実際はビーターが悪いと思ひ直した。少なくとも、ベータテスター全員が悪いわけじゃないと思つた。ここまでは理解できるか？」

今度はローブが大きく上下に動いた。

俺は更に説明を続ける。

「つまり、何の罪もない者達を嫌い、迫害し、遠ざけた。だから、何かしらの罪悪感ができるはずなんだ」

ここまでは理解できたらしい。……頭の回転が早くて助かる。

「つまり、だ。自分達はビーターという加害者に傷つけられた被害者だ、という仲間意識ができる」

「ビギナーは、ビーターに見捨てられ、ベータテスターは、ビーターと同じにされ、迫害を受けた、が具体例だな」

これは約二ヶ月前の文化祭でも使った手段だ。

「人を最も団結させるのは、共通の敵だ。ビーターという敵ができたビギナーとベータテスターは、協力するだろうな、めでたしめでたし」  
「待って」

立ち上がり、今度こそ帰ろうとしたら手を掴まれた。

「質問の答えになつてない。わたしは、何でベータテスターじゃないって否定しないのかを聞いた」

「誰かがやらなきゃいけない立場であり、俺が適任だからだ」

そう、実際こんな役割幾度となくやってきた。

文化祭もそうだし、中学時代の時は、やってもいないことを押し付けられて怒られたことなんてザラだ。

俺は、きつと、この役割から変われないし、変わる気もない。

カースト最下位のボッチは、身の丈に合った生活をしてればいいの

だ。かなり楽だし。ボツチって。

「んじや、そういうわけで、あまり俺に関わらない方がいいぞ」

何度目になるだろうかと思って、ベンチから腰を浮かす。

「……元テスターへの恨みや妬みを全部一人で背負おうだなんて、無茶すぎるのかっこつけすぎだと思っけど……」

無茶してないし、かっこつけてもいない。と心の中で弁明していると、アスナは更に続けた。

「それはあなたが決めた選択なんだからわたしは何も言わないわ。でも、それならわたしの選択も尊重してよね。他人に何を思われようと、わたしにはどうでもいいこと。あなたの友……仲間と思われのが嫌なら、最初から声掛けたりしないわ」

……なるほど、そう切り返してくるか。

仲間、という単語について、否定しようとしたが、今のコイツの目には何の嘘、偽り、虚偽、欺瞞がないのでやめた。

……肯定もしないが。

「別にお前の選択に口挟む権利なんかないから構わんが……」

さて、ここで何か裏があると思うのが俺だ。

……俺と関わってもメリットがないことを提示してやろう。

「別に俺に関わったからって何もメリットないぞ？金とアイテムはやらんし、情報だつてキリトとか《鼠》のほうが持つてる」

ふっ、言っつてやったぜ。

……我ながら卑屈だ。

「別にメリットなんて求めてないわよ……」

……あきれ声で言われてしまった。

あるえー？おかしいなあ？仲間とか言う奴は何かしらメリットを求めてるもんだと……

「メリットなんか求めてないし、それはもういいからあともう一つ教えて」

「……なんだよ」

なんかコイツと話してるの長くね？とか思っつて聞いている。

「あなたが武器強化躊躇ってる理由。実は、わたしも今日、あの鍛冶屋

さんにこの剣の強化お願いしようと思っただけだよ

「……そうなのか」

妙な偶然だ。やっぱりコイツも小耳に挟んで（盗み聞きして）ここにきたのか？

「……それ、確か+4だったか？」

その言葉にこくりと頷いた。

「……強化素材は持ち込みか？何個ある？」

「えーと……『プランク・オブ・スチール』が四個と、『ニードル・オブ・ウインドワisp』が十二個」

「へえ、頑張ったんだな。……けど……」

俺はアニールブレード基準だが、そのアイテム量の成功率を何秒もかけて暗算した。

……やっぱり数学なんて必要ねえ……

「それでも八割くらいじゃないか？」

「賭けるなら十分な数字じゃないの？」

「まあ、そうなんだが……さっきの見てからじゃなあ……」

ぶつちやけ、成功率操作してんじゃねーの？と思うくらい見事な失敗だったな、あれは。

鍛冶屋の方をチラリと見る。アスナも一瞥してから軽く肩をすくめた。

「コインの表が出る確率は、一回目の結果にかかわらず常に五十パーセントよ。さっきの人が何回失敗しても、わたしやあなたの強化試行には無関係でしょ？」

たくましいっすね……アスナさん……

まあ、決めるのは剣の持ち主だし、口を挟めるわけじゃない。が、アドバイスクらいはしてやろう。

「……失敗させたくないなら、もっと素材を集めたほうがいいぞ」  
見たところ、完璧を追及しそうなタイプだしな、お前」

「ふうん」

な、なんだ、この底冷えする声はっ！

「あ、あの、アスナ……さん？」

「そこまで言うなら手伝ってくれるのよね？わたし、妥協は嫌いだし」  
ま、まさか、声に出た……のか……？

「エイト君？手伝ってく・れ・る・の・よ・ね？」

「い、イエス、ママ!!」

「ちなみに、ウインドワスの針のドロップ率は八パーセントですか  
ら」

な、何？

「……………え？」

「そうと決まったら、さっさと狩場に行きましょう。二人なら、暗くなる前に百匹は狩れるわね」

「……………え？」

何？百匹？どこのブラック企業？

呆ける俺をよそに、アスナは更に言う。

「わたしとコンビ狩りしに行くなら、フード取ってね？腐った目が隠  
しきれてなくて、かえって怪しいから」

こんな時に、某ツンツン頭の気持ちかわかる。

「…不幸だ……」



汚い手で、比企谷八幡は狩りに臨む。

俺達は、アスナのウインドフルーレの強化素材を取りに来ていた……三人で。さて、三人目は誰でしょう！

「エへへ、そういえば二日振りだね、エイト」

「ああ…そうだな」

はい、俺、アスナ、そしてキリトの三人でした。正解者はいたかな？

一人脳内クイズをやっていたら、どうやら目的地に着いたらしい。というか、なんでキリトいるんだっけ……

あの失言の後、(無理矢理)狩りに付き合うことになった俺は、多大な犠牲を払い、なんとか機嫌をとることができた。

その一幕がこれだ。

「あの……アスナさん？僕、目的地知らないんですが……」

「西の方」

答えになつてねえ…

俺の精神的HPバーは、ゴリゴリと削れていつてる。

「あ、あの……そろそろ許して頂けないでしょうか……さっきのは失言でした……」

俺は、上司に頭を下げる社畜よろしく頭を下げ続ける。

「ふーん、本当に反省してる？」

な、なんだ……この小学生の時に、先生に怒られた時のような感覚は……

「は、はい……反省してます」

「じゃあ、わたしのお願い、何でも一つだけ聞いてね」

……断ったら刺されるな……

「は、はい……わかりました」

……そのお願いが、約二年後だとは俺も思わなかった……

で、そんなこんなで、どうにか機嫌を取り、西……正確には、南西へと歩いていったのだが……

……何か知らんが、モンスターに囲まれているプレイヤー——キリトがいた。

「何で居んの？アイツ……」

最近エンカウント率高すぎでしょーとか思いながら加勢に入る。

あれくらいの敵なら、キリト一人で全滅できるだろうが、SAOでは億が一でも、HPを全損させる危険をできるだけ避けなくてはならない。

「ヤアアアア!!」

アスナのリニアアが巨大牛の頭に突き刺さる。

……一層ボスの時に、俺に引いてたくせに、アイツの方がえげつなくないか？

とか考えながら、俺は突進してくる牛と突進系スキルを使って、真正面からぶつかる。

現実では考えられない光景だが、いかに俺が敏捷極振りだといっても、相手は通常攻撃、俺はソードスキルを使っているので、ノックアウトしたのは牛だ。

「スイツチ」

淡々とそう言うと、スイッチしたキリトが、バーチカル・アークで最後の牛を倒す。

「何やってたんだ……お前」

普通あんなに敵集めるか？五匹以上いたぞ？

「い、いやあ……攻撃が単調で、突進避け続けたら……何か他の牛に当たって……」

……そんなことあるのか？まあ、プレイヤーのフレンドリーファイアがあるから、あるの……か？

「そりゃ……ある意味凄いな」

「それよりも!!」

お、おおう。結構すごいと思うけどな……

「何で二人が一緒にいるの？」

笑顔が怖いっす。

「あー、むりや……」

アスナの睨みがきたので言い直す。

「い、いや、アスナの武器強化素材を取りに……」

「ふうくん。ならわたしも付き合うよ？」

……これは正直ありがたい。空気が重くて息ができない。……まあ、

あ、する必要ないけど。

それに戦力は多い方がいいからな。……楽できるからとかじゃないよ？ホントだよ？

というのが経緯だ。

「それにしても……何でファンタジー世界でパーカーなのよ。怪しすぎるでしょ」

「……あー、そうだな…確かに自分でも思ったが、あれしかなかったんだよ。どこで売ってた？そういうフード」

「これは《はじまりの街》の西市場にあるNPCの……」

「ここで俺は、また自らの失言に気づく。」

「……つて、同じの被るのやめてよね！それじゃまるでペアル……じゃなくて、固定パーティーみたいに見られるじゃない！顔隠すなら麻袋でも被ればー！」

「しねえよ……そんなこと……」

そんなことしたら社会的に俺が死ぬるよ……

具体的には、

「えー、何であの人と同じの着てんの？」

「ほんとだー、何あれストーカー？警察呼んだほうがよくなーい？」とかだ。

何でたまたま同じ服着てただけで、ストーカー扱いされて警察に補導されなきゃならないんだよ……

また自分で余計なこと（過去のトラウマ）を思い出して、気分がどんよりしたので、この世界の俺の癒し（キリト）に話しかける。

「……なあ、女子って全員あんな過剰反応なのか？」

「……エイトが女心を分からなすぎるだけだと思うよ」

……そりや分からだろ。俺男だし。

こんな美少女と関わることもなかったし」

……雪ノ下は性格悪いから除外、由比ヶ浜はアホの子だから除外な。

「ビショウジヨ、ビショウジヨかあ……エへへ」

「ど、どうしたんだ？」

「何でもなーい」

……そして冒頭に戻るのである。

「じゃあ、アスナはともかく、エイトは知らないと思うから説明するね？」

「ああ……頼む」

アスナさん全然説明してくれないんですもんねー。

「といっても、説明することは、ワスプの針に刺されると二、三秒スタンするから、見かけたら即フオロー、いいね？」

「わかった」

「了解」

これからすぐに狩りに行くのかと思ったが、アスナの言葉には続きがあつた。

「南に移動しすぎると《ジャグド・ワーム》を引っかけるから、それも注意ね」

「二り、了解……」

キリトエ、情報忘れんなよ……

俺達が狩っている《ウインドワсп》は、端的に言えばデカイ蜂だ。蜂ならば当然針があるわけで——うん、めっちゃ怖い。

攻撃を見極めているときに決まった法則性があるのに気づいた。

ホバリングして急降下したときに、蜂の体が真っ直ぐだったら噛みつき、曲がったら針攻撃だ。

今回は針攻撃だ。《ウインドワсп》の針が淡い黄色い光に包まれる。

タイミングを合わせてバックジャンプ。

デイレイに陥った蜂に、現状最強技、《バーチカル・アーク》を叩き込む。

——相手の体力、残り約五割。

すかさず《スラント》、《レイジスパイク》と叩き込み、最後に《シングルシユート》。

この間一分。

チラリと周りを見ると、キリトが《体術》スキルを使っている、アスナが《リニア》で敵を倒し、「——二十二！」と言っていた。

アスナは少し変わった。いや、元に戻ったのかもしれない。——S A Oに入る前のアスナに。

アイツには才能が、実力が、強さがある。

アイツは将来、攻略プレイヤーの先頭に立てるだろう。

キリトは……性格上難しそうだが、実力は恐らくアスナ以上になるだろう。

で、何で俺達がバラバラに、本気で《ウインドワisp》を狩っているのかというと、アスナの提案だ。

要は、「晩御飯は奢るけど、それとは別に、五十匹狩るのが一番遅かった人がデザート奢らない？」だ。

……ウルバスのNPCレストランには、メチャクチャ美味しいショートケーキがあるのだが、高い。

故に————将来有望な二人にも、俺は負けるわけにはいかないのだ。俺の財布のために。

一時間後には、高笑いする俺、俺をジト目で見るアスナ、ジ〇ーに

なっているキリトがいた。

方法はこうだ。

俺、あと一撃で死ぬ《ウインドワisp》を《シングルシュート》で横取りする。

これだけだ。

——ちなみに、反則扱いされて奢るのは俺になってしまった。

——何故だ……ルールないのに反則って……解せぬ。

阿修羅には、比企谷八幡のステルスも通用しない。

午後七時。

そろそろ狩りしに行ったプレイヤー達が帰って来る頃だろうか。

M M O R P G は、夜からが本領発揮する頃なのだが、やはり小学生の頃の習慣がまだ身に付いているのか、暗くなったら帰らなきゃ!!みたいな感じになる。

……決して、夜にダンジョンにいたところをグールに間違われたとかじゃないよ? ホントだよ? ハチマン、ウソツカナイ。

「……なあ、アスナ」

名前を呼ばれた細剣使いは、目だけで「何よ?」と言ってるのがわかったので、続きを話す。

「ウルバスって、この時間帯いつもこうなのか?」

騒がしいし、うるさいし、やかましいし……あつ、全部ほとんど同じ意味でした。

「ここ最近、ウルバスもマロメもだいたいこんな感じだと思うけど。きみ、昼間だけじゃくて夜もどこかに引きこも……隠れてたの?」

おい、今引きこもってたの? って言いかけた。何? お前俺の本名知ってんの?

「い、いや少し用があつて……」

キリトは事情を知っているから苦い顔だ。

「まあ……隠れていたかと言われたら隠れてた……のか?」

「気にしすぎじゃない? さつきからあなたに絡む人なんかいないじゃない」

いや、ただ生還の喜びとか、夕飯の楽しみから気づかないだけだと思いが……

ちなみに俺は、さつきから逃げる機会を窺っている。

このまま着いていたら俺の財布のHPが0になっちゃうからね!!

「まあ……そうなんだがな……とところで、さつきの話だが……やっぱり理由もなく、こんなにうるさ……賑やかなのか?」



「理由もないってわけじゃないと思うけど」

あ、あるんですか。

理由もなくはしゃぐリア充ばっかだと思ったわー。

「……っていうか、その理由の七割くらいは君でしょ？」

「あー、まあそうだね」

「はっ」

七割が俺？……全然思い浮かばないな。

「……どういうことだ？」

言いながら俺は後退していく。

「別に、謎かけでも何でもないわよ。一層に閉じ込められていたときは——」

更に早く後退。隠蔽スキルを発動。後ろを向いて走り出す。

「——この光景は存在……ってあら？」

今さらアスナが気づくが、もう遅い。

ハツハツハ。ステルスヒツキー（隠蔽スキル）は、仮想空間でも健在のようだな。

「どこ行くの？エ・イ・ト？」

ゾクツとした。

や、ヤバイ……この殺気は、一層の時のアスナと同等……だと……？

と、俺が内心でバトル漫画風に戦慄していると、殺気の放出源——キリトがいた。

「うわああああ!!」

に、逃げねば！敏捷力を全力にして走ろうとしたが、僅かにキリトの手のほうが早い。

「ぐっえっ！」

襟を掴まれ、体の背骨が曲がってはいけない方向に曲がりそうになる。

「エイト？逃げちゃダメ・だ・よ？」

「そんなショートケーキ食いたいのかよ……」

ぶっっちゃけ執念が凄い。そんな食いたいなら、自分で食べよお！俺

の財布をいじめないでよお！

「えっ？……ち、違うよ!! エイトのバカ！」

「グッ」

キリトが襟を掴んだまま歩くので、再び後ろに引かれる。

呼吸は必要ないが、気道を圧迫されるのは気分が悪い。

「わ、わかった、わかったし、もう逃げないから……手を離してくれ」

「……本当に逃げない？」

「あ、ああ。逃げない」

そういうとやつと離してくれた。

「ブーッ」

思わず深呼吸。

「あなた……逃げるなんていい度胸ね？」

……修羅その二が現れた!!

ハチマンはどうする？

戦う

道具

逃げる

土下座

「すんませんっした!」

ハチマンは、土下座を選択した!!

少し引かれた!

「……あなた……プライドないの？」

ふっ、愚問だな。

「そりや命のきけ……んんっ! 謝るときに捨てられないプライドなんて持ってない」

危ない危ない。これ以上怒らせたら財布が空になりかねん。

「はあ……まあいいわ、行きましよう」

「……お前よくこんな所知ってたな」

俺は《鼠》から情報を買ったのだが……

「アルゴさんから情報買ったのよ。ウルバスで、人があんまり来ないNPCレストランはないかって」

へえ……意外だ。一層であんなことになったのに……んっ！いかんいかん、煩惱退散煩惱退散。

「……まさかと思うけど……」

全力で首を振り否定する。

い、いや、一層のことなんて思い出してませんよ？

「ま、まあ、付き合いには気を付けろよ」

アイツ恐ろしい程情報持つてるからな。

と、そこでNPCのウェイターがケーキを運んできた——デカイ。

ウエディングケーキかよと思うくらいデカイ。

「そ、それじゃあどうぞ……」

「うん、じゃあ、頂きます」

こんなデカイケーキ、一体いくらするのか……というか、俺が払う必要なくね？無理矢理参加させられた（キリトの涙目＋上目遣いであつさり陥落）だけだし……

気分が駄々落ちちなのがわかったのか、二人が話しかけてくる。

「冗談だよ。エイトも食べたら？」

「冗談よ。さすがにわたしもそこまで鬼じゃないわ。あなたも食べていいわよ」

「あ、ああ……どうも」

……食べたショートケーキは、とっても美味しかったです。まる。

「……おいしかった……」

「うん、そうだねえ……」

店を出た二人の第一声だ。まあ気持ちはわかる。実際美味かった。「へいへい、それはよーござんした」

この顔を見れたならまあ、奢った甲斐があったと思ってしまう。

……やっぱり俺、年下に甘過ぎだろ。さすがリアルジョブお兄ちゃん!!

ちなみにあのショートケーキには、《幸運》バフがついてたらしく、活用する方法を考えている。

「……残念だけど、今さらフィールド行って狩るには足りないね」

そう、この《幸運》バフは、十五分しか続かないのだ。

「そうだね……でも、もったいないね」

運の要素で、今必要なこと……

「あっ」

……今さらながら、狩りの目的を思い出したのである。

で、只今ウルバス東広場。

あの男性鍛冶屋に、アスナのウインドフルーレ+4を強化を頼みに来たのだ。

俺は帰ろうとしたのだが、アスナの「あなたの分のバフも加算され

るかもしれないでしょ？」というお言葉で来た。

正直、ねえよ……と思ったが、誰かの命を預ける武器——それも、自分も強化素材を集めた武器なので、本当にしようがなくなっていくてきたのである。

だか、正直胸くそ悪い。

二、三組のカップルがいるため、ずっと「リア充爆発しろ」と呟いてたら、キリトに怖いと言われたため中止する。

おとなしくアスナの武器強化の成り行きを見ているのである。

「こんばんは」

「こ、こんばんは。いらつしやいませ」

顔からも見た通り、恐らく十代——俺と歳もそう変わらないだろう。

看板には、《Nezha's Smith Shop》と書いてあることから、恐らくあの鍛冶屋の名前は、ナタク……おつといかん、中二病時代の読みが……ネズハだろう。

「お、お買い物ですか？それともメンテですか？」

……？なぜ強化は言わないんだ？

まあ、いい忘れてただけかと思ひ直し、もう一度向きなおす。

「武器の強化をお願いします。ウインドフルーレ+4を+5に、種類はアキュラシー、強化素材は持ち込みで」

おお……

俺は、ネトゲ初心者（だろう）のアスナが強化内容を淀みなく言えたことに、父親のように感心する。

しかし、ネズハ（多分）は、眉を困ったように下げる。

「は、はい……素材の数は、どれくらい……？」

「上限までです。鋼鉄板が四個と、ウインドワスプの針が二十個」

うん、まあ、これなら成功率は九十五パーセントくらいだろう。

頭で大まかに計算していると、ネズハは更に困り顔になっていたが、依頼を断るはずもなく、依頼を了承した。

「解りました、それでは素材と武器をお預かりします」

そこまで見て、あとは完成するのを待つだけか。と思つてボンヤ

りしていると、不意に右手に柔らかい感触。

「あ、あのくアスナさん？何ゆえ僕の指を摘まんでいるの？」

女子の手って柔らかいなくという、自分でもアホか。と思う感想と、手が汗ばんでないよな……という不安と、後ろからの殺気の恐怖に耐えていた。

返ってきた答えは、

「……こうしていれば、あなたのバフも加算されるかもしれないでしょ」

という、これまた、んなアホな。と思う答えだった。

やがて、八回、九回、十回とハンマーがウインドフルーレを叩いたときに、ウインドフルーレは一際強く輝き——その輝きに耐えられなかったかのように粉々になった。

武器は砕け散り、比企谷八幡は覚悟を試す。

キラキラと光る硝子の破片は、アスナの相棒——ウィンドフルールの破壊を示していた。

「……は？」

アスナはもちろん、俺、キリト、ネズハまでもが驚いていた。

——強化をして、武器が壊れるだと？

武器が壊れる条件は、俺のアニールブレードがそうだったように、耐久値が無くなるくらいしか俺は知らない。

アスナはおろか、キリトが驚いているところを見ると、可能性は三つ。

ベータ時代からの変更点か、単に俺達が強化で武器が壊れたことがないか、——或いは故意か。

ここまで考えて、最初に起動したのは、鍛冶屋ネズハだった。

「す……すみません！すみません！手数料は全額お返ししますので……本当にすみませんでした……！」

ネズハは謝罪を連発するが、当事者のアスナが動かないので、代わりに俺が応える。

「あー、その、その前に説明してくれないか？……強化で武器が壊れるなんてこと、あるのか？」

その言葉にそろそろ顔を上げるネズハ。

その顔は申し訳なさそうな顔だが、ここで俺が「もういい」などと言ったら……考えたくないな。

それはそうと、この『武器消滅』（仮称）が、ベータからの変更点なら俺に違いは判らない。

キリトにチラリと目配りする。

キリトは理解したかのように一度頷くと、ネズハに聞く。

「あ、あのー、私、ベータテスト出身なんだけど……こんな武器強化失敗ペナルティあったっけ？」

この言葉から、キリトがベータテスターだということがバレてしまいうが、その時に糾弾されるようなことがあれば、悪のベータテスター

(とされている)たる『ビーター』の俺がキリトを利用した、とても言えば、少なくともキリトへの糾弾はなくなるだろう。

しかし、そんな心配は杞憂だったようで、ネズハはキリトの質問に答える。

「あの……正式サービスで、四つ目のペナルティが追加された……のかもしれない。ウチも、前に一度だけ……同じことがあったんです。だから、確率は、すごく低いんでしようけど……」

正式サービスで追加された、出る確率が低い、四つ目の武器強化失敗ペナルティ？

……そりやまた、いろいろてんこ盛りのペナルティだ。

是非ともそのもう一人のプレイヤーを教えてほしいな。

「……なあ、その四つ目のペナルティが起きた、もう一人のプレイヤーを教えてくれないか？」

するとネズハは、一瞬驚いた顔をしたが、すぐに困り顔になった。

「す、すみません……」

「……そうか」

まあ、元々知ってたらなー、くらいの気持ちで聞いたから期待はしてなかったが……

「あ、あの……本当に、何とお詫びすればいいのか……。——同じ武器をお返しします。と言いたいのですが……あいにく《ウインドフルーレ》は在庫がなくて……。せめて……ランクは下がっちゃうんですけど、《アイアンレイピア》をお持ちになりますか……？」

これには俺ではなく、未だに俯いている、灰色のローブを被ったレイピア使いが答えるべきだが……

「……いや、いい。こっちがなんとかする」

実際に見たが、《アイアンレイピア》は、俺が武器を選んだ——といても、初期装備の片手剣のままにしたが——一層のNPCのショップにあった。二層で使うには心許ない。

最低でも、俺が使うスチールブレードくらいのランクはないと、最前線で戦うにはキツイだろう。

実際、俺もスチールブレードでは若干キツイ。



それに、武器強化失敗のリスクは鍛冶屋ではなく、依頼者が負うべきものなのだ。

あんなに荒れていた、三本ヅノだって最終的には、自分（達）でも一度アニールブレードを取りに行くと言っていたのだ。

若干キナ臭いが……非はこちらにあるだろう。

しかし、それでもネズハは賠償しようとする。

「あの……それでは、せめて手数料の返金を……」

だが、今度は俺ではなく、キリトが押しとどめる。

「いいや、大丈夫ですよ！ 一生懸命ハンマーを振ってくれたわけですし……」

何の気なしに言った言葉なのだろうが、ネズハはビクツと首を縮める。

身を縮こませ、絞り出すように言う。

「……すみません……いー」

何回も聞いた謝罪の言葉だが、より一層悲痛な言葉だった。

その言葉を聞いてしまえば、こちらは何も言えない。もとより非はこちらにあるのだから。

とりあえず場所を移動しようとした。

その時初めて、摘まんでいるだけだった細剣使いの右手が俺の左手を握っていることに気づいたが、今回はアホな感想も、不安も、殺気もなかった。

ウルバス東広場を北に歩く。この辺りにはNPCショップやレストランが少ないからか、プレイヤーの姿は見えない。

というか、見られたらヤバイ。

意気消沈している女性プレイヤーの手を引いて、目が腐った男性プレイヤーが宿屋しか辺りにない通りを歩いている……。

……思春期の男子中高生なら分かるだろう。

ちなみにキリトは、

「……私が居ても、意味ないと思うから、エイトがいてあげて」  
だそうだ。

あと、なんか大事な用ができたらしい。

つまり、二人きりだ。

幸いにも、この空気のお陰で手を繋いでいることには緊張しないが、この重い空気に緊張している。

……こんな空気嫌なのは、小学生のときにクラスの奴らに謝罪コールされたとき以来だ。

重い空気の中歩いていると、ベンチがあつた。

おお……幸運バフは切れているが、幸運はまだ続いていた……

今だけは、ベンチが救いの女神に見えた。

ここは、コミュニケーションスカンストのスキル熟練度と、目には見えないMPを使って言うべきだ。

「あ、あの～アスナさん？とりあえずベンチに座りませんか？」

この誘いの意図を察してくれたのか、細剣使いは体の向きを変え、音もなく腰を下ろす。手が握られたままなので、俺もその隣に座ったかと思うと、アスナは握っていた手を離し、離れた手は力なくベンチの上に置かれる。

再び重い空気になるが、一層のとき、あんな大人数のなかで発言して、上方修正されているコミュニケーションスキルで話しかけてやる  
!!

と内心大博打を打つ気持ちで、俯いているレイピア使いに話しかける。

「あ、あの、ウインドフルーレは壊れたけど……あれよりいい武器ならもっとあるはずだぞ？」

一層で入手できる武器と二層で入手できる武器なら、当然二層の武器のほうが強いだろう。

……それがRPGというものだ。

「……………でも」

そのか細く、小さい声でアスナは続ける。

「でも、あの剣は……わたし、あの剣だけは……」

ふと、アスナの方を見るとキラキラと光る雫がアスナの顔から何滴か落ちていた。

……最後に女子の涙を見たのは、小町が家出した時だった。

相模は自業自得だから例外だ。泣かせたのは俺だが、悪いとも思っていない。

俺は、アスナがなぜ泣いているのか、理解できなかった。いや、理解はしているが、コイツが涙を流している理由が信じられないのだろう。

……やはり俺は、何度自分を戒めても治らないのだろう。

俺は勝手にアスナのことを剣に思い入れがないタイプだと理解した気でいたのだ。実際は真逆だったというのに。

昔はそういうタイプだったのかもしれないが、今は違うらしい。

一体何がコイツをここまで変えたのかは知らないが、今ここでアスナは涙を流していることは事実なのだ。ならば、俺が口を出すには充分だ。

「……………けど、一つ聞くぞ？お前は、これからも最前線で戦い続けるのか？」

そう問うと首を動かし首肯する。

「……………なら、遅かれ早かれ武器は替えなきゃならないんだ。……………それはRPGの宿命なんだ」

今までのゲームだったら、武器に愛着なんて湧かないかもしれないが、VRMMORPG——それもSAOだと特に違う。

……ここはもう一つの現実……いや、異世界と言った方が的確か。俺達は、ラノベによくある異世界転生ものの主人公達のようなものだ。武器は自分にとっては命を預けた相棒なのだろう。

けれど、人は皆、法律という規律で守られているが、ここにはそれがない。

システムによって守られてはいるが、攻略するには役に立たない。  
——ならば、何が自分を守る？簡単だ、それは自分自身だ。

レベル、装備、プレイヤースキルなどが例に挙げられる。

長くなったが、要は装備も自分を守るものの一つ。攻略する以上は替えなくてはならないのだ。

「わたし……そんなの、嫌」

コイツからの明確な拒絶。俺とは違い、かなり剣に思い入れがあるようだ。ならば、意思を試そう。

「……なら、選べ。剣を替えて最前線で戦い続けるか、剣を替えずに最前線から居なくなるか」

どちらもコイツにとっては大事なことだろう。だが、もし選べないとか言ったら、俺は一生コイツを最前線に出さない気でいた。

意志が中途半端な奴が最前線で攻略なんてしたら、確実に死ぬからだ。

「……わたしは……それなら上に行きたくない。だって可哀想じゃない。一緒に頑張つて……戦つて、生き延びて……それなのに、すぐに捨てられるなんて……」

「……」

なら、俺が教えてやろう。今の俺の質問は無意味であることと、アスナは最前線にいたまま、捨てなくてもいい方法を。

「そうか……ま、そんな必要ないんだがな」

「え？」

鳩が豆鉄砲を喰らったような声を出すアスナ。

「お前が捨てなくても済む手段は二つある。当然、デメリットもあるが」

未だに呆けているアスナをよそに、俺は説明を続けた。

「二つ目は、スペックが足りなくなった剣をインゴットに戻して、それを素材に新しい剣を造る。二つ目は、古い剣をストレージに保存したままにしておくことだ」

「……デメリットは？」

いつもの調子が戻ってきたらしく、少しふてぶてしい声で言うてく

る。

「二つ目は、レア武器がドロップしたときに覚悟を試される。……まあ、それもインゴットにすればいいが、金がかかるしな……で、二つ目は、単純にアイテムストレージが圧迫される」

「な……早く言いなさいよ!!」

教えてあげたのに怒られるとは……

「い、いや悪かったよ……もしお前が選ばないとか言ったら最前線では戦わせないつもりだったからな……」

後半の真剣な声音で、単純に意地悪をしたわけではないとわかったのか、それ以上文句は言ってこなかった。

「ねえ……それなら、あなたはどっちにするの?」

どっち、ねえ……

「……分からん。一緒に戦い続けたいなら一つ目を選ぶし、お守りとしておきたいなら二つ目を選ぶな。俺はまだ、武器に思い入れを持ったことはないからな……」

「……そう」

そんなどっち付かずの言葉でも満足したのか、アスナは僅かに微笑んだ。

……その笑顔を見て、改めてアスナは美少女だと、俺は素直に認めた。

しかし、剣は粉々に壊れてしまったのだ。……さっきの方法は使えない。

「……せめて、粉々になった剣が、素材になればよかったのにな」

これは同情でもなんでもなく、俺の本心から出た言葉だ。

剣を思っただけ涙を流した相手に対し、何も思わない程感情は薄くない……と自分では思っている。

「……ありがと」

「は……?」

何かお礼を言われることをしたか考えて、分からなかったので、アスナに聞こうと思ったが、そんな暇なくアスナがベンチから立ち上がる。

「ずいぶん遅くなっちゃった。そろそろ宿に戻りましょう。——明日、新しい剣を買いに行くの、手伝ってくれる?」

「え……」

えー? メンドクサーイという言葉呑み込み、俺は返答する。

………ノーと強く言えない俺は働くべきではないと、改めて思いました。

「わ、わかった……明日、だな?」

(普段はない) スケジュールが埋まって、ゲンナリしつつ、俺もベンチから立ち上がる。

「んじやな」

もう解散とアスナが言ったので、一応別れの挨拶をして帰ろうとした。

「違うでしょ?」

はて、何か間違えただろうか。別れの挨拶なんて、滅多にしないからなあ……

「また明日、ね」

「あ、ああ。また明日、な」

前にしたことがあるような挨拶を交わし、今度こそ俺達は別れた。

……さて、やるべきことをやるか。

尾行は、比企谷八幡の十八番である。

只今、ウルバス東広場にて隠蔽スキル発動中であります。  
と、誰に言っているか分からない報告を心の中でしつつ、右を向く。  
だから、何で一日に何回もキリトとエンカウントするの？

アスナと別れた後、俺は再びウルバス東広場に来ていた。

あの鍛冶屋は若干キナ臭いため、念のため調べることにしたのだ。  
そしたら……なんか、《コート・オブ・ミッドナイト》を着て、木に  
もたれ掛かつてるキリトがいた。

何やってんだ？アイツは。あつ、まさか大事な用ってこれか？

「……………おい」

「うわあっ!!」

いや……驚き過ぎでしょ。腐った目が原因でグールにでも見えた  
のか？あん？

「いや……………驚き過ぎだろ、お前」

「えっ?……………なんだ……………エイトか……………」

なんだとはなんだ。

目的は恐らく俺と同じだろうが、少し意地が悪い聞き方をしてや  
る。

「で、何してんの？隠蔽スキルを使って男を尾行するのはいいが、程々  
にしとけよ?」

ちなみに、隠蔽スキルを使うと、《隠れ率》(ハイド・レート)とい  
う数値が出てくる。装備や後ろの光景、自分の身振りなどで細かく変  
わるのだが、俺はなぜか、いつも八十五パーセントは超える。

まあ、話が逸れたが、隠蔽スキルを使って人を見ているのは、尾行するときくらいなのだ。

「ち、違うよ!!いい、いや、そうなんだけど……うーっ」

おっと、少し弄りすぎた。少しフォローをしておこう。

「悪かったよ……お前もアイツを尾行しに来たんだろ?」

「そうだよ……うーっ、エイトの意地悪……」

こら、頬を膨らませるんじゃないやありません。可愛いから。小町と戸塚ですら見たことないんだぞ。

「そういえば、も、ってエイトもなの?」

「ああ」

そんなことを話していたら、八時になった。と同時に、ネズハが店仕舞いを始めた。

火を落とし、インゴットを革袋に片付け、ハンマーその他道具を箱に仕舞う。次に看板を畳み、カーペットの上に横たえ、武器類も並べて、カーペットの隅をタップしたかと思うと、カーペットがクルクルと巻かれ、最終的には、一本の筒みたいになった。

——おお、便利だな、あれ。

しかし、カーペット自体をストレッチには収納できないのか、右肩に担ぐと疲れているのか、ふうっ、と息を吐いていた。

とぼとぼといった様子で、ネズハは広場の南ゲートへと歩いて行く。

俺達もそれに伴い南ゲート方面へと、隠蔽スキルを使い歩いて行く。

俺がネズハを尾行しているのは、アスナを泣かせたからとかではなく、単純に怪しいからだ。

そもそも、俺がわざわざマロメからウルバスまで戻ったのは、『腕のいい鍛冶屋がいる』と聞いたからわざわざウルバスに来たのだ。

腕のいい、と言われるからには決して成功率は、低くないはずだが、三本ツノのときにあまりにも出来なすぎじゃないだろうか。

ならば、特定の条件下において、必ず失敗するのではないか、と思いたい尾行しているのだ。



まあ、失敗させてどうするんだ、とかは全く推測できないが、それも兼ねての尾行という訳だ。

街道を七、八分ほど歩いただろうか。正直メンドクサイが、俺の武器も失敗させられたら困るため、尾行を続ける。

「はあ……飽きてきた。ダルい」

脳内で、ファイト、ファイト、ハ・チ・マ・ン。と自分自身を応援しつつ、周りを見てみると、ほぼ外壁近くまで来ていたらしい。

とぼとぼと歩くネズハは、ある建物の前で足を止めた。

【BAR】と書いてあることから、恐らく宿酒場だろうが、ネズハの様子が少ない。子が少しおかしい。

普通、仕事を終えて家（この場合は拠点）に帰るときは、もつとウキウキとした感じで帰るものじゃないだろうか。ソースは親父。

ネズハは、帰るのを躊躇うかのように、十数秒経ってからようやくドアを開けた。

——さて、ここからがよりメンドクサイ。

「……………なあ、キリト。確か閉まったドアの向こうの話を聞くには《聞き耳》スキルがなきゃいけないんだよな？」

「う、うん……そうだけど……」

俺とキリトは、《聞き耳》スキルをとっていないため——というか、こんな序盤でとっている奴なんかいないだろう——ドアを開けて聞くしかない。

じわり、じわりと焦れたい程ゆっくりとドアを開き、十五度ほど開けたくらいで声が聞こえてきた。

「——グーつと行けよネズオ、グーつと！どうせこっちの酒はいくら飲んでも酔わねーんだからさ！」

台詞とは逆に、かなりできあがっている男の音がする。他にもガヤガヤとうるさいくらいの音が聞こえる中、小さい声だが、ネズハの「う……うん」という声が聞こえた。

ぶつちやけ、学生の飲み会みたいな感じでマジうざい。

ちよつとウンザリしたが、俺は一瞬だけドアの隙間から中を覗き見る。一パーティーの人数だった。別に不思議なことではないが、何か

が少し引っ掛かった。

キリトは俺の後ろで他のプレイヤーが来ないか見張っている。

「……んで、ネズオ、今日の商売はどうだったん？」

「あ……う、うん。作成武器が十二個売れて……修理と、強化の依頼もそこそこ」

「おー、新記録じゃん！」

「またインゴット集め行かねーとなー」

別の男二人が言い、拍手の音がした。

ここまで何ら不自然なことはない。あるとすれば、ネズハが無理矢理合わせてる感じがするが、俺の知ったこっちゃない。

リア充的会話を聞いて疲れてきたのでキリトとバトンタッチすることにした。

「キリト、代わってくれ。疲れた」

「え？う、うん」

よし、頼まれてくれたので俺は見張りもといブーツとすることにした。

会話を聞く役を交代してから数分、或いは十数分経ったときに、キリトに「まだ終わらないのか？」と聞こうとしたときに、キリトは静かにドアを閉めて、俺の襟首を掴み、俺を盾にするかのように街路樹に張り付いた。

図にすると、

木

キリト

俺

ドア

みたいな感じだ。

耳元で、

「隠蔽スキル使って!!早く!」

と小言で言われてこしよばゆかったが、大人しく発動。と同時に、酒場のドアが弾かれるように開いた。

出てきたのは酔っていた男だった……と冷静に解説しているが、キリトの両腕が俺の腰をガツチリホールド。胸が胸が胸が胸が胸が……

お、落ち着け、俺。煩惱退散煩惱退散煩惱退散……

頭でお経のように唱えながら、男の方を見ると、こちらを見ていた。マズイ。このままでは隠れ率が下がって見つかってしまう。

「キ、キリト。木の裏側にゆっくり行くぞ」

指示を出して、俺のうなじの辺りに、僅かに頭を上下に振った感触があつたので、左回りに徐々に徐々に木を回っていき、裏についたとき再び、ボタンという音が聞こえた。

「ふう………」

バレなかった。さすが俺、まじステルス。と自画自賛していると、背中感触がまだなくなっていないのに気づく。

「キ、キリト……もう大丈夫だから、離してくれ……」

「えっ?……わああっ!ゴ、ゴメン!」

ホールドしていた両腕を離し、ようやく開放される。

さて、特に収穫なかったがどうするか……

キリトも何やら考えている。と思つたら、急に声を上げる。

「あっ………」

?何か気付いたのか?

何に気付いたのか聞こうと口を開こうとするが、キリトの方が早かった。

「まだ、間に合うはずっ………」

そう言つてキリトは走り出した——俺の襟を掴んで。

あれから数分走った俺達は、(道案内させられて)アスナがいる宿屋に  
来ていた。

「エイト！アスナの部屋は何号室!？」

「わ、わからん……」

言うとキリトは中に入って行く。どうやらしらみつぶしらしい。

で、アスナが居るのは二〇七号室だと判明。キリトがノックして声  
を掛ける。

「アスナ!?!急いでるから、もう開けるね!」

「えっ?ちよ、まつ……」

キリトがドアを開けた先に居たのは——

見てない、俺は見てない。上はノースリーブ、シャツ、下は同色の  
短パンみたいなものしか履いてないアスナなんて見てない。

そんなバツチリ見てしまったのを証明する心の声が聞こえたかの  
ように、アスナは「キヤアアアアア!」という金切り声を響かせ——

——再び俺の体からドゴツ!という音がし、背中に衝撃。

——一層のときも、今も、俺、悪くなくね?と思いつつながら、俺  
の意識は暗転した。

気づいたことをキリトは話し、三人は議論を交わす。

目を覚まし、瞳を開けると――辺り一面暗かった。  
は？何これ？遂に目が腐りきって見えなくなったの？

体を起こすと、光が射し込んできた。

……まぶしい。

発光源は、部屋にある灯りのようだ。

「うわあああああ！」

「キヤアアアアア！」

「うわあああああ!!？」

上から、キリト、アスナ、俺だ。

な、なんだ？なにが起こったんだ？

落ちて着いて周りを見回すと……は？

「なんだ……これ？」

周りにあったのは、鎧、武器、衣服、下着、って！

「キヤアアアアア！」

「は？」

悲鳴がした方を見ると、顔が真っ赤なアスナがビンタの構えで……

「ぶっ！」

痛みはないが、不快な衝撃が俺を襲う。

……とりあえず、説明して下さい……

「で、あの後一体なにが起こったんだ？」

あの後、気絶した（させられた）俺は、なにが起きたかまっつった  
くわからん。

「う、うん。まずエイトが気絶した後に、アスナに《コンプリートリイ・オール・アイテム・オブジェクトイズ》コマンドを押してもらったんだけど……多分、部屋の中に入れておいたエイトが埋まっちゃって……」

「ああ……だから起きたときに、周りが暗かったのか……」

「ああ……だからあんなにアイテムだら……」

背筋が凍った。

コイツ（アスナ）の前で下手なこと言うのやめよう……。

「OK。そこまでは理解した。けど、なんでそんなことをしたんだ？」

「それは……」

説明をしないで、アイテムの山を漁るキリト。

……見た方が早い、という意味だろうか？

ちなみに俺は目を逸らしている。俺、マジ紳士。

「あ、あった」

そう言っただけキリトが取り出したのは、壊れたはずのアスナのウインドフルーレ+4だった。

「で、なんで壊れたはずのウインドフルーレがあるんだ？」

ウインドフルーレが見つかったカオスな空気から約三分後。多くのアイテムが床に散らばっていたが、今はキレイにストレージに収納されていた。

「うん、でも長くなるよっ……」

……長くなるというなら、今この部屋を借りているアスナの了承が必要だ。

「……別にいいわよ。あなたも無関係ってわけじゃないし」

とのことだったので、宿屋一階で買えるハーブ入りワインとナッツ（らしきもの）を買い（買わされ）、二階に戻る。

「んじゃ、そろそろ教えてくれないか？なんで壊れたウインドフルーレがストレージにあったのか」

俺が会話の口火を切るように告げると、キリトが説明を始める。

「うん、じゃあ、エイトはさつき『なんで壊れたウインドフルーレがストレージに入っているのか』って聞いたよね？」

「ああ、聞いた」

「そこが、この仕掛け……というかトリックっていうか……まあ、仮称するなら《強化詐欺》のキモなんだよね……」

強化詐欺……か。武器強化でどうやって詐欺をするのかが分からないが、説明してくれるだろう。

「口で説明するより、見せた方が早いと思うよ」

そう言うときリトは、自分のメインメニュー・ウインドウを開いて、可視化にして俺達の方に向けてくる。キリトはある一点を指差し言う。

「ほら、ここ。私の装備フィギュアの右手セルには、《アニールブレイド+6》があるでしょ？」

ちゃんと確認して俺達は頷く。

……それにしても、アニールブレイドかあ……

俺のアニールブレイドは、耐久限界で壊れてしまったため、少々羨ましく見える。

ちよつとブルーな気分になっていると、キリトが背中から剣を鞘ごと外して、足許にゴトリと落とした。

すると、数秒後に、キリトの装備フィギュアの右手セルに表示されるアイコンが灰色になっていた。

俺も数度だが見たことがある。これは確か――

「これが、《装備武器の落下（ドロップ）状態》。戦闘中に手を滑らせ（ファンブルし）たり、Mobの武器落とし（デイスアーム）属性攻撃とか喰らうとこうなるね」

「……………ええ。慣れていないと、かなり焦るわね」

武器を落とす状態に慣れる程武器を落とすのも問題だがな。と、心の中でだけ、突っ込みをいれる。

「落ち着いて次の攻撃を避けてから拾えばいいんだけど、最初は焦るよねえ……。最初のデイスアーム使いの《スワンプロボルド・トラップ》でも、かなりの犠牲者が出たらしいし……」

「アルゴさんが攻略本で、警告してくれたのにね……。わたし、アイツと戦うときは、お守りがわりに、少し離れたところにあらかじめ予備のレイピア落としておいたわ」

「おお……今じゃ絶対にやらない方法だなッ！」

視線だけで、さっきのことを言ったら刺す、と言っているのがわかった。

俺がジエスチャーで、絶対言いません！と伝えると、やっと視線の矛を収めてくれた。

「？えっと、脱線しちゃったけど、このまま放っておくと、《放置（リーブ）状態》になって耐久値が減少しちゃうんだけど……エイト、これ持ってみて？」

「ああ」

スチールブレードより重いこの重量、馴染みがある手触り……：久し振りだな。

「うん、ありがとうエイト。メインメニューを見てみて？」

メインメニューを見ると、さっきまで薄くアニールブレードとあったのが、空欄になっていた。

「これが、戦闘中なら《武器奪われ（スナッチアーム）状態》ってやつだね。ソロで喰らうとヤバイよ。《クイックチェンジ》を取っておいの方がいいよ」

へえ……一応取っておこう……

俺が《クイックチェンジ》を取る決意をしている間にも、キリトの説明は続く。

「今は敵に奪われたんじゃないなくて、仲間に渡したから、《武器手渡し（ハンドオーバー）状態》っていうけど……まあ、とにかく、武器を拾われたり、誰かに手渡しすると、装備フィギュアの武器セルは空欄にな



るんだ……鍛冶屋に渡したときみたいだ」

俺みたいな奴を『仲間』なんて呼ぶな、と思いつつも……なるほど、ようやく話が見えてきた。

「つまり……ずっと相手に自分の武器を渡していると、所有権みたいなものが委託してしまうのか？」

俺が言った通りなら、なるほど、《強化詐欺》、ぴったりの名前かもしれない。

「うん。より具体的には、自分が装備していない武器は五分、装備している武器は、一時間経つか、同じ手に次の武器が装備されたときに委託しちゃうんだ……」

一時間。長い時間だが、無くなったと思っている自分の武器を、わざわざ確かめたりしないだろう。

「……じゃあ、さっきあなたが言った《クイックチェンジ》では、違う手に装備した方がいいのね」

「え？うん、そうなるかな……」

……  
そうなのか……俺も左手でソードスキルを出せるようにしとこう

と、また新たな決意をしていると、アスナが文句を言っていた。

「それにしても、全部のアイテムをオブジェクトさせる必要あったの？」

「あはは……まあ、さっきのコマンドは、《最終的救済手段》だからしょうがないよ……そんなホイホイできたら、アイテムなんか奪われないし……」

どこことなく哀愁が漂う声音でキリトが言うと、アスナがさらっと要約する。

「ふーん、便利な分だけ、それなりにめんどくさいのね」

まあ、最終的っていうくらいなら、めんどくさいのも当然だろう。

「それにしても、剣が戻ってきたロジックについては理解したわ」

妙に慣れたような仕草でハーブワインを飲んで、一息ついてから続きを話す。

「でも、これで半分でしょ？だってわたし、確かに見たもの。鍛冶屋さ

んに渡したウインドフルーレが粉々に砕けるのを」

これは当然の疑問だ。砕けたはずのウインドフルーレが、アイテムストレージに入っていたのだから、不思議に思うだろう。

「うん、そっちのロジックはまだ完全には解らないけど、恐らく、ネズハに渡してから消滅するまでにすり替えられたんだと思うよ。彼は、アインクラッド初の鍛冶屋にして、初の《強化詐欺師》だったんだよ……」

「でも、すり替えるといっても簡単じゃないだろう？ 今までのゲームならともかく……」

今までのゲームなら、武器を鍛冶屋に渡した時点で、プレイヤーの預かり知らぬところだが、ことVRMMOではそうはいかない。強化途中の錬成しているところもずっと視界に入り続けるのだ。

「うん……私もそう思ったけど、少なくとも、私の眼から、剣が離れた瞬間があるんだ……強化素材を炉に入れるときに……長くても、三秒くらいだったんだけどね……」

「あ……！ そういえばわたしも、炉から出る青い光が出てキレイだから、眼を離していたかも……！ 」

そーいえば、俺、あのとき何してたっけ？ 確か……ポーツとしてたな。

「あの数秒間だけは、マジックのミスディレクションみたいに注意が逸れていた……」

「わたしたちの眼が炉に移ってる数秒間に、武器をすり替えたの？ ウインドウも開かずには？」

「……けど、そこでやってなきや、どこですり替えられたんだ、って話

になるぞ」

どう考えても、あそこですり替えたとか考えられないのだ。

「……まあ、アスナが完全オブジェクト化したことから、詐欺がバレた  
と思つて、しばらくはやらないうらな……」

「そうね……見たところ、そんなイケイケな人にも見えなかつたし  
……それに……」

「うん……詐欺する人にも見えなかつたしね……」

人を見た目で判断するのはよくないが……態度といい、失敗したと  
きの悲痛な声から、俺も同感だった。

「ま、何にせよ、最前線に出て情報収集、だな」

「うん、そうだね」

「ええ、マロメで聞いた話では、フィールドボスの攻略戦も行われるら  
しいしね」

少し驚いた。一層のペースに比べたら、遥かに早い。

「……攻略隊のリーダーは？」

「ええと、キバオウさんと、あと一人……リンドさんつて人」

キ、キバオウは確か……ああ、あのモヤットボールか。リンド？は  
聞いたことないな。

「リンドさんは……一層のときに、ディアベルさんのパーティーで、シ  
ミター使いの人よ」

……ああ、あの『なんでディアベルさんを見殺しにしたんだ!!』つ  
て言っていた人か。

「いま、あの人、髪を青く染めて、銀色の鎧を着て……ディアベルさん  
の意志を継いでいるみたい」

「……そうか……」

俺は、今は亡き青い騎士の姿を一瞬思い浮かべる。

「……そういえば、アスナは、フィールドボス攻略に出るの？」

キリトの声で、意識を戻す。

「偵察には加わったんだけど……ただのデツカイ牛って感じで、統制  
さえ執れてれば、人数必要なさそうだったし……。——それに、ラス  
トアタック・ボーナスとかの扱いとかでちよつと頭ごなしな言い方さ

れて、『なら本選には参加しない』って言っちゃった」

統制が、とれるのか……？あの二人がリーダーで。

「ま、まあ、アスナの言う通り、フィールドボスは大したことないよ。むしろフロアボスが問題で……」

「……そうなの？」

「うん……単純計算で、『イルフアング・ザ・コボルドロード』より強いし、攻撃力はそこまでだけど、特殊攻撃が厄介なんだよね……まあ、迷宮区のMobで、対処方法練習できるけど……」

「なら、鍛冶屋さんの件はおいといて、明日はその練習に当てましよう」

アスナの提案に、キリトが首を縦に振り頷く。

「おう、頑張ってこい」

「何言ってるの？あなたも来るのよ？」

げ、絶対嫌だ。

「断固ことわ……」

腕をクイッククイックと引かれる。

そつちを見ると、上目使いのキリトがいた。

「エイトも一緒に来ようよお」

くっ、可愛い……だと!?

「わ、わかった……」

やっぱりキリトに甘すぎだろ……俺。

「じゃあ、明日の朝、七時に南門に集合ね。遅れたら、またケーキ奢らせるからね」

その言葉が合図だったかのように、各々解散。俺とキリトは、帰路についた。

彼らは、崖の上から高みの見物をする。

翌朝。

「ふわああああああ」

自分でも長いと思う欠伸をたつぷり数秒して、ウインドウを開く。

——六時五十三分。

は？えーつと、約束の時間は何時だったっけ？

確か……七時だったな。

そこまで考えたところで、寝ぼけていた脳が覚醒する。

——ヤバイヤバイ、ヤバイよ。

装備を整える間もなく、宿屋を飛び出す。

別に知らない奴との約束なら（知らない奴とそもそも約束しないけど）すつぽかしてもいいが、お互い最前線で戦う身だ。会うこともあるだろう。必要以上に険悪になる必要もない。

それに、なにより——またケーキを奢らせれたら、俺の財布のHPは全損、最悪飯無しになるかもしれない。宿代は前払いしておいたのが唯一の救いか——

こんなときのために、こんなステ振りにしたわけではないが、グツ  
ジョブ、俺。

誰かに追われているわけではないが、気分はルオン・ザ・サード。  
前方に何やら黒い人が……ていうかキリトだった。

「エ、エイトも寝坊したの？」

「ああ。ヤバイ急がなきや財布が……」

キリトには悪いが、俺は財布が惜しいのだ。より一層速度を上げる。

「悪いがキリト、俺は先に行くぞ。このままじゃ間に合わない」

「えっ、ちよつとエイト！置いてかないでええええっ!!」

くっ、許せ、キリト。

そんな悲痛な叫びを背にひたすら走る。

幸い、時間が早いためか、極少数のNPC（障害物）しかない。

——このペースなら、ギリギリ間に合うっ……!!

南門が見えたっ！時刻は……五十九分！

「セーラーフツ！」

靴から摩擦で火花が出るんじゃないかと思うくらいの急停止をかける。

柄にもなく大声を出したのは仕方ないだろう。なんせこちとら飯が懸かっていたのだから。

「……時間ギリギリね」

判定はどうやらギリギリセーフのようだ。助かった……

それから約三十秒後、キリトが到着した。

「……全員揃ったわね。なら行くわよ」

……ん？あれ？キリトにはペナルティはないんですか？俺だけ？何それ、超理不尽。いや、キリトにペナルティ課して欲しいわけでもないけど……

さて、ちゃんと装備を着込み、俺達は迷宮区に向かっているのだが……キリトが（怖くないけど）怒っているのだ（むしろ可愛い）。

「あの、キリトさん？置いていったのは謝りますから許してくれないでしょうか？」

「……」

MU☆SHI☆だど……

「キリトさん？いや、ホントにすみマセンでした」

声音に真剣味を混ぜて、ちゃんと謝罪をすると、

「……いいよ、許してあげるけど……」

あれ？なんかデジャヴ。……まさか、キリトまで『俺に何でも一回命令権』を求めないだろうな……

俺がそんな考えをしていたときに、キリトが口を開こうとしていて、思わず喉をならし、唾を飲み込む。

「……じゃあ、フレ登録、しよっ？」

なん、だと……？

戸塚のアドレス交換以来の衝撃が俺を襲う。

何？フレンド登録？フレンドって友達（笑）の？あの都合のいい金づるとか荷物持ちの？掃除当番を押し付けてくる、あの？

過去の友達ワードに関するトラウマが再生されるが、もはや気にも留めない。

つ、遂に俺の（無理矢理させられた）《鼠》と、（お互いの生存確認のためにした）クラインシかないフレンドリストにキリトの名前がっ！

実にこの間の思考時間は、0.1秒。過去最速である。

「……そんなんでいいのか？」

なんとという謙虚さ。どっかのフェンサーにも見習って貰いたいものである。

「う、うんっ！いいから早く早く!!」

「お、おう」

二回しか使ったことがないので、若干おぼつかない手つきで、キリトにフレンド登録認証を送る。

ピツと鳴った電子音と共に、俺のフレンドリストに《Kirito》の文字が追加される。

「……何やってるのよ、あなた達」

その声で、正気に戻る。

……顔、にやけてなかったよな……？

そんな心配をしていると、どうやら着いたようだ。

迷宮区への関門的役割を担っている名前付き（ネームド）Mob——  
——二層においては、唯一のフィールドボスが居る場所に。

「……ちようど始まるみたいだな」

眼下では、ちようど攻略部隊（仮称）と二層フィールドボス——《ブルバス・バウ》が戦い始めようとしているところだ。

《ブルバス・バウ》の手前でじわじわと距離を詰めていく攻略部隊。人数は6×2+リザーブ3人の計十五人。

コボルド王の時と比べたら、人数は少ないが、充分倒せるだろう。現に俺の足防具、《グレーウルフズ・レッグアーマー》をドロップするMob——《グレーウルフズ・リーダー》は、俺がソロで倒したのだから。

……まあ、ちゃんとパーティー同士で統制・連携が出来れば、の話だが。

「ん……う？」

おかしくないか？あれ。

アスナも同じことを思ったのか、囁くように声を漏らす。

「あのパーティー、どっちがタンクでどっちがアタッカーなのかしら」「うん……見たところ似たような構成だけど……」

「……アイツら協力する気ないんじゃないの？」

だってアイツら、パーティーで明確に色分けしてるしな……

右のパーティーの胴衣がロイヤルブルーに、左のパーティーはモスグリーンに統一している。……人間関係もあれだけ分かりやすくしてくれたらなあ……

ちなみに余談だが、紺色と灰色は、アインクラッドで一番人気がないらしい。(《鼠》調べ)

今アイツらがやっているように、俺は紺色のジャケット(っぽい防具)に灰色のインナーを着ているため、灰色と紺色の服を着てると、『ビーター』の仲間扱いされるためだ。

思いつきり逸れた思考を二人の会話で戻す。

「……彼ら、攻略部隊を役割分担で再編成したわけじゃなかったのね」  
「そうなのだ。役割で分担したのではなく、端に「仲のいい人達で組みましよう」状態だ。」

……いや、なんで学校行事の時は教師はああ言うんだらうな？

「右の青いパーティーは全員リンドさんの……つまり元ディアベルさんの仲間ね。そして、左の緑のパーティーはキバオウさんの仲間ね」  
「うわあ……ウマが合わなそうだな……お互いにディアベルの意志



を受け継いでいる!!と思つての同族嫌悪か？

……実際にはアイツらじゃなくて、キリトが受け継いでいると言つた方が的確だけどな……

俺は一人で考えているとき、二人はあのパーティーについての討論的なものをしていているときに、攻略部隊が、遂にボスの反応圏内に入つたらしい。

「ブルモオオオオオー!!」

フロアボスだった《コボルド王》には及ばないが、確かに威厳のある咆哮は、仮想の空気をビリビリと震わせる。

同時に《ブルバス・バウ》は、四本ものツノを振り立てると、俺が戦つた牛よりも速いスピードで攻略部隊に突進していく。

ボスとレイド部隊の距離は、およそ百五十メートルはあるが、部隊にとつては短すぎると思う距離だろう。

ようやく各パーティーのリーダー二人が指示を始めた。内容までは聞き取れなかったが、指示を聞いて双方の重装備戦士が前に立つて、同時に盾を掲げて「ウオオオオオツ!!」と吼える。

あれは確か……派生スキルの《威嚇》(ハウル)といつて、Mobの憎悪値(ヘイト)を上げるのだが……

「お、おいおい……両方でタゲ取つてどうするんだよ……」

ブルはどちらに突進するかを迷うように、首を振つたが、最終的には青パーティーに決めたようで突進していく。

ハウルを使ったプレイヤーと、その隣に盾持ちがもう一人並び、低く身構える。

二秒後――。

ズガアアアアン！という大音響。ここで防御力が足りなければ吹っ飛ばされるが、さすがは攻略部隊というべきか、十メートル程押されたが、しつかりと持ちこたえた。牛を押し返し、リンド隊の四人がソードスキルを側面から叩き込む。

随分と危なっかしい戦い方だが、なんとかなるだろう。

「ヒヤヒヤさせるわね……。――でも、なんとかなりそう……かしら」

「まあ……元々パーティーだけで倒せるボスだしねえ……」

「でもこれ、レイド組んでる意味あるのか？俺でもソロで一層のフィールドボス倒せたぞ？」

「それはエイト（君）だけだよ（だと思っただよ）」

いや、キリトさん？あなたから聞いたボスですよ？まさか、本当にソロで行くとは思わなかったのか？

改めて、よく死ななかつたな、俺……。

自分がかかなり危険なことをしていたと知り、恐怖で少し震えたが、落ち着いたところで、リザーブ役の三人のプレイヤーを見る。

——アイツらは。

「なあ……キリト、あのリザーブ役のプレイヤー……」

「え……」

あの三人は、鍛冶屋ネズハの仲間（らしき奴ら）だ。……一応、名前を聞か、《強化詐欺》に関わっているかも知れないな。

「……なあ、アスナ。あのリザーブ役の三人の名前分かるか？特に、あの真ん中のバシネット被った奴」

「ば、ばし……う？それって、赤ちゃん用ベッドのことじゃないの？」  
いや、知らんがな。というかコイツ、頭いいな。……一層の時、偏差値七十とか、学年十位とか言ってたけど、まさか、な……。あり得ない話じゃないだけに、余計怖い。何？アスナってそんなに頭よかつたの？何でゲーマーが多い《ソードアート・オンライン》にいるの？  
——じゃなくて。

最近脳内で話題が逸れること多いなと思うが、今はどうでもいい。

「違う……で、見たことあんの？アイツらのこと」

「あるわよ」

あつさり肯定。そこにキリトが食いついてくる。

「い、いつ？どこで？あの人誰？」

「昨日の午前中、場所はまさにあそこ、名前は……オ、オルランドさんだったかしら？」

「今度は騎士（ナイト）ならぬ聖騎士（パラディン）様かよ……」

何？職業ナイトとか、名前がパラディンとか、意味解らん。

これはあれだな。現実世界に戻っても、ベッドの上でウワアアアア!!とか叫んじやうやつだな。ソースは俺。

思わず三年前の自分を思い出していると、意味が理解できなかったらしいアスナが聞いてくる。

「どういふこと?」

ん、ああ……主に思春期男子が調べることが多いものは解らないか……。でも、ネトゲとかスマホアプリやってる奴って、自分でも知らずに神話に出てくる神とかの名前を覚えてるんだけどな……。天照大御神とかオーデインとか。

閑話休題。

「オルランドっていうのは、フランク王国のシャルルマーニュに仕えたっていうナイトだ。聖剣デュランダルを持った無敵の英雄だ」

聖剣デュランダルは割とメジャーな方だろう。エクスカリバーには劣るだろうが。

そんな中二知識の脳内展開を止める。ぼくがかんがえた最強の聖剣大会になつてしまいそうなので、キリトに続いて質問する。

「じゃあ……他の奴の名前は知ってるか?」

「あの両手剣使いがベオウルフさん、反対側の痩せた槍使いがクフリーンさん……だったと思うけど……」

「うわあ……全員英雄の名前じゃねえか……」

ある意味凄いな……

巨大な鉄の盾を使ったり、チャリオット使ったりするの?

「あの人たち、もうギルド名先に決めてるみたい。確か、《レジェンド・ブレイブス》って言った」

《レジェンド・ブレイブス》——伝説の勇者達、ねえ……。

ここまできたら、メンバー全員英雄の名前だと思っていいたいだろう。つまり、《N e z h a》の読み方はネズハではなく、恐らくナタク——まあ、だからなんだって話だが、気には留めておこう。

それに、英雄と同じキャラクターネームといつても、《若気の至り》とは断定出来ない。事実、オルランド達は、最前線一步手前に立っているのだから。

「……あの人たち、昨日の朝に前線攻略プレイヤーがマロメの村で偵察前の打ち合わせしてるところに乗り込んできて、一緒にやりたいって言ったのよ」

「それはまた、随分大胆な行動だね……」

キリトも弱ボツチだからか、俺と同じことを思ったらしい。

「リンドさんがステータスを確認したら、レベルとスキル熟練度は平均より落ちるけど、装備がかなりしっかりと強化されてるみたいで……リザーブ役なら大丈夫ってことになったの」

……装備がしっかりとしているのは、恐らく鍛冶屋ネズハ……いや、ナタクの《強化詐欺》のお陰だろう。

そんなとき、《ブルバス・バウ》が吼えた。

「ブルルオモオオオオオオウ!!」

そんな大音量の声の発生源の盆地に目を向ける。

——オイオイ。

青パーティーと緑パーティーのどちらがタゲを取っているのか解らず、防御体制ができていないタンクが転倒する。

重装備のプレイヤーは、防御力が高いが、起き上がるのが遅い。

「アタッカーはダッシュ回避してー!」

そんなキリトの叫びが聞こえたかのように、リンドキバオウ含む軽装備戦士が左右に散る。

しかし、僅かに間に合わず——。

ようやく重装備戦士が立ち上がった時には、《ブルバス・バウ》が重装備戦士の間を通り過ぎ、その四本のツノで先にいた剣士二人に引つ掛ける。そのまま頭を直角九十度に振り上げる。

「……ッ!!」

思わず息を詰める。空中にいる間か地面に衝突した瞬間に、攻撃を喰らった二人が硝子の欠片になって消えると思ったからだ。

しかし、さすがは最前線プレイヤーというべきか、最悪の事態にはならなかったが、精神力までは鍛えられてないため足許がふらついている。

そこでリンドが、何やら指示を出していて、二人が後退する。恐ら

くPOTローテだろう。

それと同時に、リザーブ役の三人の内二人が入れ替わるように前線に出た。

オルランドとベオウルフだ。二人は数メートル走ったところで、一度躊躇うように止まったが、やがてこちらにも聞こえる雄叫びを上げてボスへと走っていく。

その時、オルランドがラウンドシールドで隠れていた左腰から片手直剣を抜き放つ。

抜き放った剣は準レア武器——アニールブレードだった。オルランドはボスに向かって果敢に駆けて行った。

——彼らの戦いは、まだまだこれからだ!!後愛読、ありがとうございます!  
いました!

やはり比企谷八幡にとって、アスナは畏怖の対象である。

「まだまだこれからだ!!と売れない漫画の最終回みたいなのを(脳内で)言ったが、実際にはあれから約二十五分後くらいに《ブルバス・バウ》は、体を硝子の欠片に変えて、四散した。

随分危なっかしい戦いだったが、死者は0。……かなりのスローペースな攻略速度だか、死者がいないのでまあいい方だろう。S A Oでの大原則は、『死なないこと』だ。

そういう意味では、ギルド——いや、確かギルドが結成できるのは三層からだったか?——チーム《レジエンド・ブレイブス》は十分な働きをしたと言えるのだが……いかんせん装備が《強化詐欺》で盗ったものだろうから、素直に褒められたことではないが……。

「……ヒヤヒヤさせるわね……でも、まあ、良かったわ。無事に終わって」

「心配だったなら、素直に攻略部隊に入れてくれてくれて頼めば……」

途中で言葉を止める。……な、なんでそこで睨む?このツンデレ……はい、ごめんなさい。謝りますからその読心術と睨み付けるをやめてください。これ以上防御力が下がったら、僕死んじやいます。

俺が心の中で頼んでも、しつかりと睨み付けてくる。

——コイツあれだわ。ツンデレじゃなくて、ツンドラだわ。ギャルゲーだったら(俺にとって)攻略不可能なキャラだわ。……まあ、雪ノ下姉妹みたいな感じだな。攻略不可能!!の権化だよ、あれは。神にーさまでも落とせないよ。神にーさまが、「この僕……落とす神にもエンディングが見えない……だど……?」とか言っつてキャラ崩壊起きちゃうレベル。

「まあまあ……落ち着いてよ、アスナ」

キリトの宥めるような言葉で、やっと防御力を下げる行動(睨み付ける)をやめてくれた。

そのまま不機嫌そうに石の方へ歩き、不機嫌そうに座り、不機嫌そ

うに鼻を鳴らし、不機嫌そうな声で言ってくる。……不機嫌そうって言い過ぎじゃね？どんだけ俺にとって不機嫌そうに見えるんだよ……

「で？二人は、どうしてあの勇者さん達が気になるの？」

「はっ？」

意表を突いた質問に変な声が出てしまう。

正直に答えたら、コイツ《レジエンド・ブレイブス》壊滅させそうだしなあ……

俺が内心平静に、外面は目を泳がせながら必死に言い訳を考えていると、キリトがあっさりとゲロる。

「鍛冶屋ネズハは、《レジエンド・ブレイブス》の一員なんだ……」

え、ちよ、キリトさん？俺が必死に言い訳考えてたのにあっさり言っちゃいますか？アスナの目力に負けたんですか？……まあ、俺も怖いけど。ぶっちゃけ逃げたい。

「えっ……！それって……じゃあ……」

こちらを見て、問うような視線で見ってくる。……さすがに無関係だと言っても信じてもらえないだろうし（まあ無関係ではないのだが）……説明するか。

「ナタ……いや、ネズハがしている《強化詐欺》は、集団……つまり、リーダーであるオルランドの指示でやっている可能性が高い。……《ネズハのスマッシュアップ》がウルバスにできたのは、正確にはいつだ？」

「ええと……二層が開通した、その日だったと思うけど……」

早ッ！一体いつから《強化詐欺》を画策していたんだ？

「そ、そうか……じゃあ、一日に一、二本でもアニールブレード級の武器を搾取したら、かなりの儲けだな……」

「えっ？じゃあつまり……」

キリトが察したようだ。……見た目からして中学生に見えるが、察しがいいな。

「ああ……さつきアスナが言ったように、アイツらは装備の強化でステータスの差を埋めてるって言ったが、武器スキルは戦わなきゃ上が

らないが、装備の強化は……」

「……お金があれば、いくらでもできる。そういうことね」

おお……俺達はとんでもない阿修羅（アスナ）を誕生させてしまったようだ……。……そういえば、阿修羅とアスナってなんか語感似てるな。

そんなことを考えていたら、アスナがウインドフルーレを握って……っておいおい。

「ま、待ってアスナ!! 気持ちは解るけど、まだ何の証拠もないんだよ」「だからって、このまま……」

「せめて、《強化詐欺》のトリックを見破らないと名誉毀損扱いされるぞ。GMがいないからこそ、大勢の人間に嫌われる必要はないし、お前らも『ビーター』扱いされるぞ」

……なんならパーティーを組んでる時点でまずいからなあ……二層を攻略できたらソロに戻るか。

ソロになる決意をしていると、アスナが俺をビシッ! と指を指す。人を指さしちやいけません!!

「それこそ今更な気遣いよ、これから一緒にダンジョンに入ろうっていうのに。——でも、言わんとすることは了解したわ。確かに証拠どころか仕組みも不明じゃ、ただの言いがかりね……」

ふう……説得成功か……。けど、いくつか誤解があるな。

「気遣いなんてしてないし、ダンジョンに入るのはお前が無理矢理……んんっ! じゃなくて、二層が攻略されたら俺、ソロに戻るから」「えっ?」

えっ? そこで驚く?

「いや……それより、最低でも《強化詐欺》のトリックを暴かないといけないことは解ったろ?」

「……ええ、そうね」

……そう言っているアスナの目には、蒼い焔が宿っているようで怖かったです。……お前は青焔魔（サタン）か。



俺達が岩山を降りたのは、補給とメンテのために6×2+3人がいなくなつた後だった。

迷宮区を目指し、ほぼ垂直な崖と崖の間の曲がりくねつた道を歩く。

坂道くトンネルく草っ原く一本橋にく凸凹砂利道くって、そういうば、全部歩いたな……。蜘蛛の巣はまだくぐつたことないけど。

心の中で、となりのト○口の歌を歌っていたら、迷宮区のシルエツトが見えてきた。……なんか突起物があるけど。

「あれ、何?」

恐らく『あれ』の指示語は、俺が思ったのと同じ、突起物について指しているのだろう。

「牛のツノだよ」

一言だった。え?あんなばかでかい牛のMobがいるの?

「う、牛?」

「近くまで行くと、あそこにでつかい牛のレリーフがあるよ。二層のメインテーマだし」

なんだ、Mobじゃないのか……。よかつた……。……層ごとにメインテーマがあるんだ……。覚えておこう。

「……わたし、さっきのデカイので牛はもう打ち止めだと思つたわ……」

……牛がいっぱいいると聞いて、牧場を思い描いてしまうのはしょうがないと思う。

「あはは、二層のモーモー天国はこれからだよ」

キリトの言葉は、その通りと言ったらその通りだし、違うと言ったら違った。

「嫌っ……来ないで……近づかないで……!!」

その言葉は俺に向けられている——のではなく、のっしのっしと歩いて来るものに向けられている。

「来ないでって……言ってるでしょ!!」

怒りが混じった声でそう言うと、少女は前方へと駆ける。歩いて来たものも迎撃するように両手斧を振りかざす——が、それより早く少女の右手——正確には、右手の剣だが——が雷を纏ったように黄色く光る。

その剣が叩き込まれて、僅かに両手斧の剣速が鈍る。普通ならここで回避がセオリーだが、怒りをぶつけるように今度は二連撃を襲撃者の剥き出しの胸板に叩き込むと、襲撃者は体をグラリと揺らし、断末魔を上げる。

「ブ……モオオオオオ!!」

徐々に筋肉質な体が発光するようにボンヤリと光り、やがて体を硝子へと変え一際光が強くなりそのまま爆散した。

……俺、実況の才能あるんじゃないか？

他の奴らに聞こえたら、『自意識過剰だ』と言われそうだが、思うのは自由だろ。……なぜかアスナに読心されるが。

で、襲撃者を倒した少女——固有名詞で言うとアスナは、はあはあ息を切らし、ようやく落ち着くと、こちらを睨み一言言った。

「……牛じゃないでしょ、こんなのー!」

……知らんがな。

さつきまでアスナが戦っていた《レッサートーラス・ストライカー》は、牛は牛だが、半人半牛——いや、八割人だな。

しかし、これだけでは怒らないだろう。なんでアスナが怒っているのかと言うと——

「あいつ、その……着てないじゃないの、ほとんど！腰んどこにちよつと布巻いてるだけなんて、セクハラもいいところだわ。ハラスメントコードで黒鉄宮送りにしてやりたいくらいよ」

とのことだった。

まあ、男の俺はそこまでではないが、お嬢様（だろう）のアスナには耐え難かったようだ。キリトもベータテスト時には、恥ずかしくて動けなかったらしい。

ちなみに、さつきみたいなのは《ミノタウロス》ではなく、《トーラス》と呼ぶのが適切らしい。初めて知った。

とはいえ、今回は攻略目的ではなく、ボスの攻撃の対処のために迷宮区にきているので、戦闘は必至だ。

敏捷極振りの俺は回避が防御の主体のため、もう対処はできるが、アスナがまだ完璧とは言い難いため、更に次のブロックへと向かうべく、俺達は部屋の出口へと歩いた。

約一時間後。俺達はアイテムでストレージを一杯にして、幸い誰もすれ違わずに迷宮区を後にするのだった。

……一時間間に四体のトールラス族と戦ったが、女性剣士×2が無双していて、「俺、いらなくね？」とデジャヴったのは余談だろう。

ささやかながら、彼らは二層開通のパーティーをす  
る。

迷宮区の攻略（というより、ボスの攻撃対処）を終えた俺達は、ボ  
ス攻略の拠点となるだろう《タラン》の方向に歩いている。

空白がない迷宮区一、二階のマップは、キリトが《鼠》に無償提供  
するらしい。俺は金を取ろうかと思ったが、キリトが無償でというた  
めやむなく了承した。

……まあ、そのマップが載っている攻略本は俺達は五百コルで買わ  
なくてはいけないのだが、その金で攻略本を増刷して、ミドルプレイ  
ヤーに無料配布するらしいので、文句は言えないが……

「今日は、十二月九日……向こう側ではもう冬かしら……」

ああ、もうそんな季節か……あのリア充どもがうるさい季節ね。春  
は新しい友達（笑）ができてうるさく、夏は夏休みという長期休暇が  
あるからうるさく、秋は友情（笑）を深める体育祭やら文化祭があつ  
てうるさく、冬はクリスマスとかバレンタインやらがあつてうるさい  
な。……リア充って一年中うるさくね？

……そのくせ俺みたいなのボッチは根暗だの、卑屈だの、独りだの  
……あれ？後半、俺に特定されてね？

「前にネットの記事か何かで見たけど、アインクラッドって層によつ  
ては季節が再現されるらしいよ」

「……嬉しいような、嬉しくないような話ね。あ、でも……」

あー、季節があるのか……確かにリア充どもがうるさいから、あま  
り嬉しくはねーな。

キリトが首を傾げてアスナを見ていた……アインクラッドってカ  
メラないの？凄く写真撮りたい。

「別に、たいしたことじゃなくけど、クリスマスまでに攻略したいつた  
ら、雪が見れるかなって」

これは首を傾げたキリトへの回答だろう。ここで「アスナさん、ロ  
マンチストですね」なんて言ったりしない、睨み付けられるから。

「そうだねえ……クリスマスかあ……クリスマスまでには二層を攻略したいねえ……」

「なによ、志低いわね。あと一週間……いや、五日で二層は突破したいわね」

……そういえば、本当にアスナは俺の思考を読んでいるのか？無意識に顔に出てたのかないよな……実験してみるか。

えーと、んじゃあ……俺に言われたらキモく感じる言葉ランキング（相手の反応から調べた）第一位！！アスナさん、凄く可愛いです！！……どうだ!?

ちなみに、この言葉を言われた女子は例外なく引いた。……正直心の中とはいえ、こんなことを言うのは恥ずかしい（というよりキモい）が、俺の心のプライバシーが保たれているかの実験なのだから、やむを得ない。

俺がアスナの反応を見てみると、急にアスナが早足で歩き始めた。フツ、証明終了。引かれるといった反応ではなかったため、アスナは思考を読めない。……どうやら俺の心のプライバシーは守られていたようだ……

俺が心の中で安堵の息を吐いていると、HPがギリギリ減らない強さでキリトが足を踏んできた。……え？俺が何かしましたか？

「フンッ」

怒ったようにキリトも早足で歩いて行くため、俺も早足で二つの背中を追いかけるのだった。

……俺、何かした？

あれから約二十分程極力戦闘を避けて歩いていたら、ようやくマロ

メの村に着いた。中ボスが討伐されているからか、プレイヤーもちらほらいるため、違和感ありまくりのフード付きパーカーを再び着ている。アスナもフード付きローブを、キリトは新しく買ったらしいアスナとペアルックの黒のローブを着ている。

……とはいえ、顔を隠している理由は正反対なのだが。というか怪しいな、顔を隠した三人組なんて。

「あー、その、俺《鼠》に用があるから……」

「ちようどいいわ。わたしもアルゴさんに用があったし」

「私も付き添うよ？アルゴにマツピンググデータ渡したいし」

そのキリトの言葉に頷くアスナ。……俺としては、一層の件があるのでアルゴとアスナと一緒にいるところに居合わせたくないのだが、自分から言った以上やっぱいいわとも言えない……失敗したな。

仕方なく待ち合わせ場所である酒場に行こうと思ったとき、何日か前に聴いた、カン、カンというリズムミカルな音が聴こえた。

発生源は——恐らく、タランの東広場。

「——!!」

二人は顔を同時に見合わせて、全力ダツシユはさすがに自粛しているが、かなりの早足で東広場へと歩いて行っている。

……無視して酒場に行っていないかな？俺。いやいや、待て、俺。ショートケーキのことを思い出せ。プロのボツチは同じ失敗はしない。

俺、逃走↓阿修羅×2降臨……うん、逃げないのが賢明だな。

そう結論付けた俺は、さつきと同じように黒と赤のローブを追うのだった。

結論から言おう。阿修羅（のなりかけ）が二人から一人になっただけでした。

ウルバスからは警戒してか移動をしたものの、未だ《強化詐欺》を続けていることに怒りの炎をたぎらせる阿修羅（アスナ）さん。

俺が何気なく「さすがに攻略部隊は狙わないだろうな」と言ったら更に激おこポンポン丸。どうにか（キリトが）宥めたが、なぜか話題は攻略部隊のことに。

ちなみにキ、キ……なんだっけ？は、アスナ曰く、自分でチームらしきものを組んだらしい。恐らくそれが『ワイのやり方』だろう。……どうでもいいが。

連想ゲームの如く、今度は攻略しているプレイヤーの名前は？という話題になり、《最前線攻略プレイヤー》や、《前線組》やら《攻略集団》だの《トッププレイヤー》だの……うん、多いな。で、キリトが《鼠》は《フロントランナー》と呼んでたことを思いだし、ようやく《鼠》に会いにいくという用事を（二人が）思い出したのだった……アスナが怒ったときは、阿修羅さんと（心の中で）呼ぶことを決めたのは……どうでもいいな。

「ふう〜ん」と《鼠》。

「違うぞ」と俺。

ちなみに、詳しく言うと、

「ふう〜ん、『ビーター』（笑）が美女二人を無理矢理パーティーにしてるとはナ〜」

「違うぞ。無理矢理されたのはこっちだ」

となる。……まあ、《鼠》のは予想だが。

で、その《鼠》はなぜかジョッキを持ってこちらを見てくる……何  
？中身をぶっかけるタイミングでも見計らってるの？

キリトもアスナも同じように見てくる。

……なんか見たことある光景だな……なんだったか……

俺が脳内検索していると、見事にヒットしたものがある……それっ  
きり誘われなくなった打ち上げ……

つまり、これは……

「え、えー……それでは二層開通おめでとう……か、乾杯……」

「かんぱーイ!!」

「乾杯!」

「……乾杯」

……どうやら当たってたようだ……というか、このために集合場所  
酒場にしやがったのか？《鼠》の奴……

当の本人である《鼠》は、「ぶっはア〜!!」とかいういかにも親父臭  
い声を出していた……お前はミサトさんか。

社畜みたいに「イツキ、イツキ」とも言っていないのに一気飲みをし  
た《鼠》は、空になったジョッキを机に戻すとお代わりを注文してか  
ら口を開いた。

「ゲート開通から五日で迷宮区到達、カ。随分早かったナ」

「まあ、そうだね。一層で時間がかかった分、レベルが十を越えている  
人も多いだろうしね。二層のクリアレベルって本来なら7、8くらい  
でしょ?」

……その分二層でレベルが上がりにくいんだけどな……

SAOみたいなレベルがあるゲームで一番めんどくさいのは?と  
聞かれたら、大半の人は「レベリング」と答えるだろう。ちなみに俺  
はボス戦。作業ゲーは心を無にしてやればいいからな。

「まあ、数字の上ではナ……あくまでクリア可能ってだけの話だゾ」

……つまり、レベル8くらいのレイドでボスに挑めば、クリアはで  
きるが死者がでる、ということか……

「ふうん……ベータテストの時、二層のボスって何回挑戦したら倒せ  
たの?」



「えー、と、初挑戦からでは私が参加しただけでも十回以上壊滅（ワイプ）したかなあ……最初はレベル5とかで挑戦してたし……」

どんな無謀なチャレンジだよ……勝てない戦いは俺はしないぞ？

「でも、倒せたときのレベルは7を越えてたかなあ……」

「ふうん……。——今回の攻略だと、平均十はいくわよね？」

だからといって油断はできない。事実、安全マージンを充分にとつていたであろう一層ボス戦でも、死者が一名でたのだから。

「うん、十は越えるだろうね……。数値的ステータスだけ見れば充分安全圏だけど、フロアボスには常識が通用しないからね……」

そうなのだ。一層ボス、《イルフアング・ザ・コボルドロード》は、カタナスキルの三撃——いや、正確には四撃か——で俺と同レベルであったディアベルのHPを削り切ったのだ。あれが俺だったら——恐らく一撃で半分以上削られていただろう。

だからフロアボスにおいて、《安全圏》など存在しないのだ。特に俺にとつては。

黙り込んでいるキリトとアスナ（俺は一回しか喋ってない）の向かいで、すでに二杯目のジョッキの中身を七割飲み干した《鼠》が、追い打ちをかけるように言った。

「それに、このボスはレベルよりも装備の強化が大事だからナ」

「そうなんだよねえ……」

ボスが使ってくる（らしい）《ナミング・デトネーション》は、ダメージを主体としたものではないため、装備の強化で阻害（デバフ）耐性を上げる必要があるそうなのだが——

「あ……」

ここにきて思い浮かんだ仮説。ネズハは強化をしにくる攻略部隊をターゲットにして、《レジェンド・ブレイブス》が、もし鍛冶屋ネズハを見限るつもりなら、信用は度外視で攻略プレイヤーの武器を詐取して一躍攻略プレイヤーのトップに——

人は簡単に裏切るものであると、俺は自分の身を以て知っているため、この仮説は存外外れてはないだろう。

「アルゴ、これ迷宮区の一、二階のマップデータ」

キリトの声で、邪推とも、的を射てるとも言える考えをひとまず止める。

「いつも悪いナ、キー坊。前から言ってるケド、規定の情報料ならいつでも……」

「いや、いいよ!!マップデータがなくて死んじやう人がいるのは嫌だし……」

おお……天使がいる。小町よ……お兄ちゃんは、家での天使(小町)と学校での天使(戸塚)と仮想空間での天使(キリト)の三人の天使を見つけちゃったよ……

しかし、ただでやるのも癪だ。金は取らんが依頼は見返りは貰う。

「《鼠》、金は取らない代わりに一つ条件付きで依頼があるんだが」

「ふうん? オネーサンに言ってみナ?」

お前のほうが多分年下だろ……という突っ込みは抑え、さっさと内容を伝える。

「《レジエンド・ブレイブス》の情報が欲しい。条件は、誰にも俺が知りたがっていると言わないことだ」

正直ここまで俺が《強化詐欺》について調査する必要はないが、人の生死にも関わることもかもしれないので調査をしている。さすがに人が死んでもいいとは思わないしな。

《鼠》の辞書に《秘密厳守》という言葉はないどころか《金を払うなら何でも売ります》といった感じた。……元ベータテスターの情報や前にあつたエクストラスキルなどの時みたいな例外はあるが。

「ン、ン〜」と唸っていたが、やがて「ま、いつカ」と了承した。

……このあと余計な一言を付け加えなかつたら感謝の一つでもしていたが……

「でも、これは覚えておいてくれよナ。オネーサンが、商売のルールよりもハッチへの私情を優先させたつてことをナ」

瞬間——前方からメラツという擬音が聴こえたのは気のせいだな、うん。SAOにそんなサウンドエフェクトなかったしな、うん。「んデ、アーちゃんも何かオイラに依頼があるのか?」

どんなときでも平常運転なところは見習いますよ……ホントに

⋮

空き家にて、彼らは鍛冶屋を監視する。

——十分後。

俺達は酒場を出て、再びタランの東広場にいた。

鍛冶屋ネズハの監視の（詐欺のトリックを暴く）ためだ。

タランの村は、まるでくりぬかれたような地形をしている。ト○コの珍師範にくりぬかれた山みたいな感じだな。簡単に言えばクレターだ。だからこの村は、縦方向にもボリユームがある。

そのため俺達が今いる東広場にも多くの高い建物があるのだ。

この建物は、NPCショップでもプレイヤーハウスでもないただの空き家だ。

空き家なんて使い道がないような感じがするが、実際には色々ある。——例えば、今俺達がしている監視だったりだとか。

「なかなかいいアングルね」

そう呟いたのは、俺の右斜め前で椅子に腰かけているアスナだ。

「うん、そうだね。たぶんここがベストポイントだろうね」

それに返答するのは俺の左斜め前で椅子に腰かけているキリトだ。

俺は二人の一步下がったところに隠蔽スキルを発動させて立っている。……嫌な大和撫子だ。……大和撫子つて三步後ろだったっけ？

隠蔽スキルを発動させている理由は、窓際に立っているため、万が一にもネズハに気づかれないようにするためだ。

「飯、ここに置いとくからな」

引きこもりの人のお母さんみたいな台詞だが、状況としては、張り

込みをしている先輩刑事にあんパンと牛乳を買ってきた後輩刑事だろうか。

ちなみに買ってきたのは和訳すると《タラン饅頭》とかいう食べ物だ。味は知らん。適当に選んだだけだからな。

「これ……中身何？」

「知らん。二層のメインテーマに沿うなら牛肉じゃないか？」

自分で買ってきてきたんだが、絶対に自分からは食わない。得体のしない食べ物はないからな。ソースは由比ヶ浜のクッキー。

「……温かいうちに食べないのか？」

建前である。アスナよ、俺の健全な食生活のために毒味の実験台となってくれ……。

「……いただきます」

「いただきます」

キリトもどうやら食べるようだ。味はどうなのか……

そんな疑問は、二人の次に発した声が解答だった。

「うにああ!!」

あ、これは駄目だわ。阿修羅さん降臨確定だわ。いやー、やっぱ得体のしれない食べ物を食べたらいけないな。アツハツハ。……どうしよ、阿修羅さん。

「……中身、あつたかいカスタードクリーム……その中になんか酸っぱい果物が……」

「……」

何それ、イタズラ? いや、買ってきたのは俺だけだよ……

ひとまず毒ではないようだ(システムのな)。……そもそも圏内でバッドステータスにかかるのか知らないが。

キリトは涙目になりながら口元をハンカチみたいなもので拭いているのに対し、アスナはわなわなと体を震わせている。……何これ、天国と地獄?

「……もし、もしあなたがこの味だと知ってて、この食べ物を勧めたなら、わたし、自分を抑えられる自信がないわ……」

ここで冗談でも首を縦に振ったら、ウインドフルーレの餌食か、最

低でも拳の餌食を覚悟しなければならぬ。……最悪の場合、窓から落とされるかも。

「い、いや、違う。断じて違う」

首をブルンブルンと横に振る。そんなことをしている間にキリトが口を拭き終わったようで、アスナにもハンカチ（みたいなもの）を渡す。

上品な令嬢のように口元を拭くと、ものの数秒で綺麗になる。……この世界のハンカチは随分便利なようだ。

こちらをキツ！と睨んで一言、宣言するように言った。

「次に張り込みする時は、食事は自作するわ。二度ととんでもないもの食べさせられたくないし」

なら自分で買ってくれないか？なんてショートケーキの時もピーナッツとワインの時も今も俺が買わなくちやいけないんだよ……

「わあっ！アスナが作るの？楽しみだなあ」

「え……ええ」

……なんかこいつらを見てると奉仕部を思い出すな……

少し感傷的になりながら、タラン饅頭なるものを一口。うん、（冷めたら）普通に美味しいな。

温められていたのはイタズラみたいなもので、食べたら案外美味しいな。

アスナも冷めたタラン饅頭を食べて、少しは機嫌を直している——のはいいのだが、肝心の強化詐欺のトリックを見破るほうは芳しくない。

一時間位監視しているが、殆どがメンテの人ばかりで強化の人は二人しかいなかった。

それもミドルクラスの武器（俺のスチールブレードもだが）だからか、どちらも大成功。もはや詐欺などなかったのでは？と思うレベルだが、アスナが《鼠》から買った情報からそれはないと断定。アスナは

『武器強化の失敗ペナルティとして、《破壊》があるのか調べてほしい』

と聞いたところ、《鼠》は

『厳密な失敗ペナルティとしてなら、武器破壊はまず起きない。ただ、強化を試みて必ず結果が失敗になる場合はアル。それは、試行可能数が残っていない剣を、更に強化しようとした場合だ』

だそうだ。ちなみに情報代は酒場の勘定持ち。

つまり、だ。やはりアスナのウインドフルーレはどこかですり替えられていて、強化されたのは強化試行可能回数が0の——所謂エンド品だったって訳だ。

つまり、仮にエンド品が強化詐欺に使われているなら、三本ツノの時の異常に高額なエンド品の買い取りも説明がつく。あれは強化詐欺の仕込みだったのではないか？

「エイト（君）」

二人の声で意識を戻す。いつの間にか広場には人が少なくなっていた。その中に光沢が凄い金属防具と今はダークブルーに見える胴衣を身につけたプレイヤーがいた。間違いない、リンド隊のプレイヤーだ。

リンド隊のプレイヤーは、そのままネズハのところまで歩いて、片手剣を留め具から外した。

あの武器は確か——固有名詞は《スタウトブランド》……だったか？

キリトのアニールブレードに比べると、少しばかり短く、幅広だ。片手直剣のなかでもブロードソードと呼ばれるものだ。確か、武器のランクとしてはウインドフルーレと同等か、少し上——

「……すり替えの標的としては充分ね」

「……そうだね。ランクとしてはウインドフルーレと同等位だからね」

どうやら俺のうる覚えの知識は正しかったようだ。

さて、そうなるかあとはメンテか強化なのだが……

リンド隊のプレイヤーは、留め具から外した《スタウトブランド》を鞘ごとネズハに手渡した。

もしメンテなら、ネズハはすぐに剣を抜いて、アンビルの側面に取

り付けられている小型の回転式砥石に当てる。強化なら強化素材アイテムが入っているであろうカーペットに並べられている革袋に手を――

「強化だ！」

キリトが小さい声で叫んだ。アスナもこくりと頷き、囁いていた。

「左手よ、左手から眼を離さないで!!」

その言葉で窓際にぐつと顔を寄せる二人。おい、顔ぶつけるぞ。

心の中で忠告しつつ俺もネズハの左手に視線を集中させる。

左手に不審な動きは――なし。売り物の既製品に手をつける様子は――なし。左手でシステムウインドウを開く様子は――なし。

色々確認してみたが、特に不審な動きはなかった。

そうこうしてる間も右手は忙しなく動く。アスナの時と同じ動きをしている。違うことと言えば、今回は《重さ》強化の赤い光が発せられたことくらいだ。しかしそれもすぐに収束して待機状態へと移行――。

「……?」

今、ネズハの左手で何かが起きた気がした。だが、肝心なところを見逃したため、何が起こったのかはわからない。

今なおネズハの右手に握られている《スタウトブランド》は、全く同じに見えても恐らくエンド品にすり替えられているだろう。

携行炉から取り出した肉厚――いや、鉄厚幅広の剣は、赤い光で満たされている炉に置かれる。赤い光は全て剣に、今度は鉄床の上に。右手をスミスハンマーに持ちかえ、カアン、カアンと音を鳴らす。これが鍛冶と聞いて真っ先に思い浮かべる行為だろう。

それを五回、七回、九回、十回叩いたところで《スタウトブランド》はやはりと言うべきか、粉々になった。

ネズハの言葉を信じるなら、アインクラッド史上三人目（三人な訳がないが）の強化詐欺の被害者の誕生の瞬間であった。



ようやく、比企谷八幡は強化詐欺のトリックに気づく。

「……………どうする……………」

静けさが戻った広場を見て、これまた静まりかえった空き家でアスナが呟く。

省略されている目的語は、あの強化詐欺の被害者となった特にリアクションをとらないで去ったリンド隊のプレイヤーに、アスナと同じように武器を取り戻す方法を教え、詐欺の存在を明かすのか、ということだろう。

確かにあのリンド隊のプレイヤーは、何も悪くない。いや、運は悪かったな。

ともかく、もし教えたら必ずネズハを糾弾するだろう。そして、強化詐欺の存在は広まり今までの被害者によるネズハの処罰が決まるだろう。しかし、GMや法律、規則がないSAOで、『処罰とは何だ?』

コル? アイテム? それとも——命?

このインクラッドは民主主義がルールと言ってもいいだろう。

集団がネズハに死ねとでも言えば、もう歯止めは利かない。インクラッド史上初のPKになってしまう。

つまり、リンド隊のプレイヤーに明かす＝殺人になってしまう可能性があるのだ。

ならば教えないのが得策だろう。…………リンド隊のプレイヤーと親しい訳でもないしな。…………そもそも親しい奴いませんでした、テヘツ。

結局、教えないという結論になり、八時の鐘が鳴る。ネズハの店仕舞いの時間だ。

何日か前に尾行したように、店仕舞いの準備を進めるネズハ。その表情は、とてもレア武器を搾取した強化詐欺師には見えない。そんなネズハを見て、キリトが口を開いた。

「なんでネズハは……………《レジェンド・ブレイブス》は、強化詐欺をやる

うと思った……いや、実行に移せたのかな……？」

……確かに。犯罪でも計画するより実行の方が難しいしな。悪口だって面と向かって言えないから陰口になるんだろうしなあ……  
アスナには意味が解らなかつたのか、首を傾げている。

「……強化詐欺が《システム的に可能》でも、《実際に実行する》間にはデカイハードルがあるだろ？もしバレたらどんな報復があるか想像できないわけじゃないと思うしな」

逆に言えば、バレなきや報復はないということだ。完全犯罪は、トリックを見破られないことでも警察に捕まらないことでもないと思っ  
は思っている。なぜなら、犯罪自体がバレなきや犯罪は犯罪ではないからだ。

「想像……した上で、それでもハードルを蹴り倒したのかもね……」  
「え……？」

「論理的問題に眼をつぶれば、実際的なハードルって、バレた時に命の危険があるってことだけでしょ？」

「ああ、バレる前に誰にも止められない程に強くなったら——」  
「それって……」

現実の戦争、革命、争いと違ってSAOでは数が多くても勝てないことがあるだろう。

そして、もしそんな奴がこの世界のトップ、独裁者になったら——  
「……世界の支配者、ってこと？」

しん、と重い空気が下りる。この一件は『自分の剣をあゝ鍛冶屋に預けなければいい』などという軽い問題ではない。

勿論、『レジエンド・ブレイブス』がそんな大それたことを考えて強化詐欺をやっているのかは解らないが、可能性があるだけに無視できない。

「この一件、初めて大事だと思つたよ……」

「ああ、だからこそ早く強化詐欺のトリックを見破らなければいけないんだが……」

あと少しで解りそうなんだがなあ……

「……あのカーペット……」

「え……？」

「アイテムが腐らないだけじゃなくて、あんな機能もあつたのね」

視線を落とすと、鍛冶屋ネズハが何日か前にやったのと同じように《ベンダーズ・カーペット》の上に、武器やら強化素材やら……とにかく色々置いて、カーペットのポップアップメニューを操作して、カーペットに載せられた無数のアイテムが独立ストレージに収納されていくところだった。

「ねえ……。武器のすり替えに、あのカーペットの機能を利用したってことはないの？」

そうアスナは、俺達の中で一番情報を持っているキリトに尋ねる。

「いや……。多分無理だと思うよ？カーペットの収納機能は、今ネズハがやったみたいにメニューから発動させなきゃいけないし、上に載せてるアイテムは全部呑み込んでやうしね」

カーペットでのすり替えは不可能。オブジェクト化させたアイテムを手にかえるのは……。そもそもオブジェクト化させたアイテムと同じ武器がなかったため不可能。

なら、残る可能性は三つ。キリトですら知らないアイテムか、ベータテストからの新アイテムか、ネズハ自身のストレージを操作してすり替えたか。

……。恐らく一と二はないな。あの《鼠》からもそんなアイテムの話聞いたことがないな。

では、ネズハ自身のストレージを使ってすり替えたと仮定して……

「ッ!!」

……。まさか。

「二人とも、俺は今からあることをするから時間を計ってくれ」

そう言いながら、自分のウインドウを開き左手を垂らしたら手の位置にくるように移動させ、背中からスチールブレードを鞘ごと外し、左手を垂らす。椅子はないが、これで強化のために剣を預かったネズハとほぼ同じ体勢だ。

「ここで俺の意図を察した二人が返事をしてくる。」

「解った」

……いや、一人で充分ですよ？まあいいか。

「んじやいくぞ？三三、二二、一、零！」

自分でカウントを終えた瞬間、左手をウインドウに落とす。その瞬間にスチールブレードは粒子となり消滅、続いて文字列となったスチールブレードをすかさずタップしてオブジェクト化し、オブジェクト化した剣を左手で掴む。

「どうだ？！」

かなり早くできた自信があるのだがタイムは——

「現象としては似てる、けど……」

「ちよつと遅すぎる、かな。タイムも一秒以上かかってるし……」

「……そうか」

かなり早くできた自信があつたんだがなあ……

しかし、考え方としては……待て、最近何か会話しなかったか？武器を早く持ちかえる……というより、オブジェクト化する方法が……。——あつた。《クイックチェンジ》。しかし、あれは戦闘プ

レイヤー用Modだったはず——いや、待てよ？オルランド、ベオウルフ、クフリーン、そしてナタク。いずれも英雄の名前、まさに《レジェンド・ブレイブス》——伝説の勇者達だ。

ナタク、とは確か中国の物語に出てくる少年の神で、様々な武器を操るれつきとした英雄だ。少なくとも俺が知る限りでは鍛冶屋ではなかった。

ならば、こう考えれば説明はつく。ネズハ——いや、ナタクはオルランド達に鍛冶屋になれと言われたか、何らかの原因でならざるを得なかった。

つまり、戦闘用Modをとっていてもおかしくない。あくまで英雄の名前を使っているナタクが、戦闘をしていなかったわけがないという思い込みの仮定が合っていた場合、だが。

「……そうだったのか」

残念だ……謎が、全て解けてしまった（かもしれない）。

やはりじつちゃんの名にかけて、真実はいつも一つだな。

僅かながら、比企谷八幡は鍛冶屋に報復する。

十二月十一日、午後八時少し前――。

……ガツシヤガツシヤうるせえな……音源俺だけど。

俺は全身にプレートアーマーを着こみ、ネズハのスミスショップに向かっている。……別にダメージディーラーからタンクになったわけじゃないよ？

別にジヨブチェンジ（ジヨブじゃないけど）したわけではなく、変装だ……変装なのだが……筋力要求値ギリギリで凄く重い。

残念ながら謎が全て解けてしまった……いや、某赤○がやるのはいが、俺がやるとうござうだからやめよう……で、謎が解けた（かもしれない）日から既に二日経過している。

界王星で修業しているかのような体の重さを感じながらどうにかネズハの店に到着。今まさに閉店準備をしていたところだった。

「……すまないが、強化を頼みたい」

フルフェイスの装備を被っているためか、声も少し変わっている。

ネズハは店仕舞いをしようとしていた手をストップさせ、俺の方を向く。

俺はキリトから預かったアニールブレードを鞘ごと外し、ネズハに渡す。……俺みたいな奴にホイホイ武器を渡すキリトが将来誰かに騙されないか、僕は心配です。

俺がキリトにアニールブレードを借りた理由は、単純に俺のスチールブレードクラスでは強化詐欺の対象にならないのと、三本ヅノから搾取したため、エンド品のストックがあるだろうからだ。

「プロパティ、確認します」

「ああそうだ、これも頼む」

そう言つてオブジェクト化させたのは剣、剣、剣……

「こ、これら全部、ですか……？」

「ああ、頼む。強化するのは全部《鋭さ》、素材はアニールブレードだけ九十パーになるように、それ以外は三十パーで頼む」

「わ、分かりました……全部で、八千九百八十コルになります……」

俺がオブジェクト化したコルを渡し、剣——約五十本（全て初期装備）を懸命に叩き始める鍛冶屋ネズハ。その姿はマジ社畜。

俺はなーんにも悪いことはしていない。他の客はいないし、金だつてちゃんと払った。別に一度に依頼できる剣の本数も看板に書いてなかったしな。

カーン、カーン、カーンという音が広場に広がる。キリトの愛剣アニールブレード+6は粉々になったように見せるつもりだろう。

何回も何回も同じ作業をして、もはや涙目なネズハ、男の涙とか誰得だ。

「……まだできないのか？」

若干苛立ちを含めた（ような）声で急かす。

「は、はいっ!!ただいま!!」

じわじわ、じわじわと、まるで毒のように精神を少しずつ削り、追い詰める。効果はあったようで、カーン、カーン、カーンと叩く音のリズムが早くなる。

ネズハの気分は、補習を受けていて、まだ終わらないのか？と先生に言われているような気分だろう。

そしていよいよ、（キリトの）アニールブレード（今所有権は俺だが）の強化にネズハは取りかかった。

剣をカーペットの上の商品より数センチ上に吊り上げ、携行炉に強化素材をくべ、緑色の発光。

ミステイレクションとしては充分すぎるライトエフェクトだが、俺の視界にはちゃんとネズハの左手を捉えている。

その瞬間——。

ネズハの左手の人指し指がすつと伸び、カーペットに並ぶ剣と剣の間をタップする。

アニールブレードが一瞬明滅した。この瞬間にもうアニールブレードはエンド品とすり替えられている。鮮やかなトリックだ。

感嘆するような息をはー、と吐く。

作業は続き、《鋭さ》強化を示す緑色の光を剣が纏い、鉄床の上に載せられスミスハンマーで叩かれる。

三、七、十回と最後にカアアアアンと今までで一番辺りに響く金属音が鳴る。と、同時に叩かれていたアニールブレードが割れ、粉々になる。

「す………すみません！すみません！」

謝って頭を下げているときに武器スキルModである《クイックチェンジ》を発動、アニールブレード+6を手元に出現させる。

「そうか………仕方ない。なんせ最初から搾取するつもりだったんだからな………」

「え………？」

その言葉で顔を上げ、俺の左手に握られているアニールブレード+6を見て驚愕するネズハ。

俺は装備をプレートアーマーなどの重装備から普段の装備へと替える。

「はあ………」

フルフェイス装備がなくなり息苦しさがなくなる。うん、空気がおいしい。

「あ、あの………どなたですか？」

え？…つい数日前に会ったよね？隠蔽発動させてなかったよね？

スキルMod。Modとはmodifyの略で、各種スキル熟練度が一定の数値に達したときに取得できる《スキルの強化オプション》だ。

《クイックチェンジ》とは大体の片手武器のMod………らしい。

ちなみに俺は十五レベルのため、《片手直剣》、《隠蔽》、《投剣》、《軽業》の四つのスキルを取得している。次に新しいスキルが取得できるの

は十六レべらしいので、《索敵》スキルを取ろうと思っている。ソロに戻ることだしな。

と、閑話休題。

まあ俺はキリトから《クイックチェンジ》の話聞いたとき、熟練度百五十あたりで取得しようと思っていたのだが、今回の件で熟練度百で取らざるを得なかったわけだ。

ネズハの前に現れるのに二日掛かったのも、二層迷宮区で（なぜか二人と一緒に）トーラス族と戦ってスキル熟練度を上げていたためだ。……おかげでレベルも上がったが、マッピングも進みリンドとキ、キ……なんだつけ？まあその両隊がピリピリしているらしいが関係ないしな。

まあ、そんなこんなで《クイックチェンジ》を取得できたのでネズハの前に現れたってわけだ。

通常、武器を交換——というよりすり替えるには、一、ウインドウを開き、二、装備フィギュアの手のセルをタップ、三、表示されるオプションから《装備変更》を選び、四、更に表示されるストレージ窓から目的の武器を探しだし、五、選択してOKボタンを押す、というめんどくさい手順を踏まなければいけないのだが、《クイックチェンジ》を取れば僅か二手順。

一、ウインドウを開き、二、ショートカットを押す、だ。

これは俺が試しに使った体験があるのだが、その上、《クイックチェンジ》は、《アイコンを押した時どちらの手にどんな武器を装備するか》をこと細やかに設定できるのだ。例えば、装備対象を特定の武器に指定したり、素手に戻したり——直前に装備していたものと同種の武器をストレージ内から自動的に選択することも。

それこそがこの一件——ネズハが、いや、《レジェンド・ブレイブス》が行っている強化詐欺の最大の肝だ。

まず、強化依頼者から武器を受けとる、この時点で《武器手渡し（ハンドオーバー）状態》になる。勿論所有権は依頼者にあるが、その状態でも《クイックチェンジ》は使用可能だ。

次に、あらかじめカーペットの売り物の下に隠したメニューウイン



ドウのショートカットアイコンを押す。押した瞬間に預かった武器はネズハのストレージに収納され、代わりにエンド品の同じ武器が左手に握られる。

後は武器が碎けるだけだ。

現象としては、強いライトエフェクトが発せられている間にネズハの左手が僅かに明滅したように見えるだけで、知ってて見ていないと気づかないだろう。

万が一バレても、もう一度《クイックチェンジ》を使えばいいだけだ。

盗られかけている武器を取り戻すには、キリトが言っていたように全アイテムをオブジェクト化するコマンドを使うか、同じように《クイックチェンジ》を使うしかない。俺は後者を選んだ。

以上が、俺が思い付いた強化詐欺のトリックと俺が《クイックチェンジ》を取得した理由だ。

詐欺を暴かれ、鍛冶屋は全てを話す。

——ともあれ、存在を忘れていた奴に（そもそも記憶に入っていたのかすら怪しいが）強化詐欺のトリックを見破られ、愕然としているネズハだったが、やがてポツリと話しだす。

「……………謝って、許されることじゃないですよね」

その言葉に俺は答えない。俺は、たまたま強化詐欺の現場に居合わせたただけであり、被害者ではないのだから。

「……………せめて、騙し取った剣を皆さんにお返しできればいいんですが……………それも無理です。ほとんど全部、お金に換えてしまいましたから……………。僕にできることは……………あとはもう、これくらいしか……………！」

右手のスミスハンマーを落としたことすら気に留めず、走っていくが数メートル走ったところで足を止める——いや、止めざるを得なくなる。

なぜなら、アスナが怪盗よろしく二階からジャンプしてきたのだ。

……………おい、何とは言わんがヒラヒラの物がめくれて見えるぞ。

ちなみにキリトは普通に降りてきて、俺の右隣に立っている。

二階から飛び降りるといふ精神力が試される業を成功させた細剣使いは鍛冶屋に毅然といい放つ。

「あなた一人が死んでも、何も解決しないわ」

……………キツいな。事実だけど。もう少しオブラートに言ってやれよ……………。俺もそんな気遣いをしないが。

その声とフードから僅かに見える顔で気づいたのだろう。自分が強化詐欺で一時的にだが武器を盗んだ相手だと。

ネズハの顔がくしゃくしゃに歪む。絶望、恐怖、そして何より罪悪感を示している顔だった。

「……………もし、誰かが僕の詐欺に気付いたら……………その時は、死んで罪を償おうって、最初から決めてたんです」

「今のアインクラッドでは、自殺は詐欺より重い罪よ。強化詐欺は依頼人への裏切りだけど、自殺はクリアを目指すプレイヤー全員への裏

切りだもの」

うわあ……言っていることは正しいんだが……

「言ってることは正しいけど、キツイねえ……」

「……そうだな」

高みの——いや、横見の見物か？をしながら俺達は呟く。そんなに言ったら、言葉のトゲの先端恐怖症になっちゃうぞ。

その言葉と罪悪感に押し潰されているように身を縮こませ、弾けるようにネズハは顔を上げる。

「どうせ！どうせ僕みたいなノロマはいつか必ず死ぬんだ！モンスターに殺されるのも自殺するのも、早いか遅いかの違いなんだ！」

「デユフツ」

いかんいかん、つい気持ち悪い笑いが出てしまった。

その笑い声で、広場にいる俺以外の三人が俺に視線を向ける——もとい一人は睨む。

……アスナがギロリと睨んでいるのは気持ち悪い笑い声を上げたのが理由ではなく、思わず笑ったことに対してだと祈りたい……。

「い、いや……別にお前の言葉に笑った訳じゃないぞ？本当だ。ただ……そこにいる奴と全く同じことを言っていたからつい……」

アスナの方を見ながら言う。……そういえば、コイツが一層で考えを改めたのはなんでなんだ？未だにわからん。

「あともう一つ、それなら何で強化詐欺なんかやっているんだ？早いか遅いかの違いと思っっているなら、さっさと自殺をしてもおかしくないと思うが……」

「なんで……でしょうね、僕にも解りません」

……人とは案外自分のことが一番理解できていないのかもしれない。

「なら、俺が教えてやる……。まずお前は、なにかしらの理由でお前は戦闘ができなかった、もしくはできなくなった。しかしお前は《レジェンド・ブレイブス》にのけ者にされたくなかった、だから強化詐欺を始めた。だかやるうちに罪悪感が募り『やりたくない』と思うようになった。しかし、今更やめられない。やめたらのけ者にされてし

まうから……。のけ者にはされたくないが死ぬ覚悟もなかった。結果、ずっと強化詐欺を続けてきた。……違うか？」

こんなに喋ったのはいつぶりだ？ 疲れた……。リア充どもはいつもこれ以上話してんの？

リア充どもの会話のレパートリーの多さを気味悪くおもいながらネズハを見ると、驚いたような顔をしたあとに悲しげな顔をした。

「……そうですね。その通りだと思います。それに、僕も元々は戦闘をしていたんです。だけど、僕は……。最初の接続テストで、FNC判定だったんです……」

FNC。Full dive None Conforming（フルダイブ不適合）略してFNCだ。

脳と信号を直接やり取りするフルダイブマシンであるナーヴギアは、言うまでもなくデリケートな機械だ。本来使用者ごとに細かいチューニングをしなければならないが、俺を含めそんなことをできる人はいないだろう。

しかし、ナーヴギアには自動調整機能があるため、初回の長い接続テストとキャリブレーションを乗りきれば、次からは即ダイブができるのだ。

だが極稀に、初期接続テストで《不適合》の結果が出ることもある。具体的には、五感のどれかが完全に再現されなかったり、脳からの信号にタイムラグがあったりなどだ。

俺達は広場から移動した空き家でネズハの次の言葉を待つ。

「……………僕の場合は、聴・触・味・嗅の四つは正常に機能するんですが、肝心の視覚に異常が出てしまって……………」

……それは明らかに致命的な障害だ。戦うなら……いや、日常でも目が見えないならほとんどのことは出来なくなる。

なら、どうやって目が見えない状態で強化詐欺を行ったんだ？

「正確には、両眼視機能……つまり、オブジェクトとの遠近感が掴めないんです」

なるほど、それくらいならギリギリ武器をスミスハンマーで叩くくらいならできるだろう。

もつとも、戦闘はできないだろう。SAOにおいては魔法、弓、銃などの遠距離武器はない。せいぜい投剣しかないのだから。

……いや、他にもあったな。

「なあ……ネズハ、いやナタク」

「えっ？な、なんで……」

なんで解ったのか、という意味が含まれているのだろう。

ナタク、お前も男なら解るだろ？思春期男子がかかりやすい、あとになって黒歴史確定の時に調べたんだよ……。……なんで俺、自分のことを永久欠神なんて名乗っていたんだ……？

結論、若気の至りは恐ろしい……じゃなくて、

「……戦えるように、いや正確には《レジェンド・ブレイブス》の足手まといになりたくないか？」

そんなことができるのか、という眼差しで俺を見てくるが、首肯する。

「なら、取引だ。俺はお前に戦う術を教える。代わりにお前は強化詐欺の方法を教えた奴を教える」

ギブアンドテイクだ。俺は情報屋じゃないが、この話になタクが乗ってくることは解る。

余程悪どい笑みを浮かべていたのか、キリトとアスナが若干引いている。

俺の予想通りにナタクはポツリポツリと話し出す。

「……あなたの言う通り、最初は戦うことを選んでいました。遠距離攻撃なら僕も戦えると思って……」

「……それって《投剣》スキルのことだよね？でも……」

《投劍》スキルは、主武装で使うものではなく、補助、又は不意打ち用の意味合いが強い。一層の《イルファンク・ザ・コボルドロード》の時のような例は稀だ。

それはナタクも重々承知しているだろう。

「ええ……一層のはじまりの街で一番安い投げナイフを買ってスキル熟練度上げをしていたんですが……投げきつたら何もできないし、かといってその辺に落ちている石ころじゃ威力が低すぎて、熟練度が五十のところ諦めたんです……しかも、ブレイブスのみんなを付き合わせつちやつたから最前線集団に遅れちゃって……」

「で、強化詐欺をしてしまった理由と、その方法を教えた奴は？」

それが一番重要だ。

「……黒い雨合羽みたいなポンチョを着た男が教えてきました。最初は皆否定的だったんですけど、その人の洗脳のような笑いで……」

「……そのポンチョ男のことは？」

首を力なく横に振るナタク。……もう訊けることはない、か。

「わかった……じゃあこっちの番だが……その前に、レベルとスキルは？」

「え？えーっと、レベルは十で、スキルは《片手武器作製》と《所持容量拡張》……それに《投劍》です……」

二度と強化詐欺をさせない方法、それは――

「お前が鍛冶スキルを捨てるのなら……教えてやる」

――鍛冶をできないようにすることだ。

不本意ながら、比企谷八幡は不名誉な称号を頂戴する。

二〇二二年十二月十四日、水曜日。

一層ボス《イルフアング・ザ・コボルドロード》が倒されてから十日、このデスゲームが始まってからは三十八日目だ。

今日は二層ボス攻略をするのだが、またしてもあぶれたポッチ（俺）とポッチ（キリト）とポッチ（アスナ）の三人パーティーをひとまず組んでいる。

レイド全体の人数は四十七人。一層の時には四十五人だったのに比べて増えている。ディアベルの死で心が折れ、前線を去っていった奴がいるのに人数が増えたのは、《レジェンド・ブレイブス》の五人が加入したからだろう。

まずレイド隊のリーダーでもあるリンド率いる三パーティー十八人に、（三層のギルド結成クエストをクリアしたらギルドを作るらしい。名前は《ドラゴンナイト》……どうでもいい）キ……キなんちゃらが率いる三パーティー（これまたギルドを作るらしい。名前は《アインクラッド解放隊》で計三十六人。エギルさんとその仲間二人、俺達ポッチパーティーで四十二人。更に《レジェンド・ブレイブス》の五人を足して合計四十七人だ。

「あと一人いればフルレイドだったのにねえ……」

「そうね……。やっぱり間に合わなかったのかしら」

「……まあ、しょうがないんじゃないか？ 実際三日で割れたなんて、俺だって信じられなかったくらいだしな」

「うん……あれは辛かったねえ……」

思い出される二層に入ってから苦い思い出……具体的に言うなら、《ハチえもん》と《キリエもん》と呼ばれた日だ。……《鼠》のやろう……。

三日前、ナタク……いや、ネズハと呼んでくれと言われたからネズハでいいか。で、ネズハは俺の二人曰くゲスい笑顔と共に放たれた言

葉にこう返した。

『この世界で、剣士になれるなら、何もいりません』

そう言ったネズハは只今《体術》スキルの取得中だ。俺が渡した遠距離武器（かもしれない物）は、《投剣》スキルと《体術》スキルがないと扱えないのだ。

「……まあ何にせよ、武器が扱えるようになったらギルドに入れるようになるんじゃないか？……勿論ブレイブス以外の、ってことになるが」

「うん……あの武器結構強いしね」

「ええ……そうね」

チラリとブレイブスの方を見る。中ボスの時にいたバシネットを被っていて、アニールブレードを持っている片手剣使いがオルランド。小柄な両手剣使いがベオウルフで、痩せた両手槍使いがクフリーン。あとの二人は中ボス戦にはいなかった盾持ちハンマー使いがギルガメシユで、革装備のダガー使いがエンキドゥと言うらしい。

ギルガメシユは確か古代メソポタミア、シユメール初期王朝時代のウルク第1王朝の伝説的な王で、エンキドゥがギルガメシユの無二の親友……だったか？……どうでもいいか。

まあ、そんな英雄達を包む空気は、そんなに良くはない。というか悪い。

理由は恐らく、ネズハが何も告げずに姿を消したからだろう。

原因の一端は俺にあるのだが、教える義理もないしな。

「それはそうと二人とも、わたしたちは他人様のパーティーを気にしている状況でもないわよ」

「え？どうして？」

キリトオ……気付いてなかったのかよ……

「キリト、緑隊が三パーティー、青隊が三パーティー、エギルさんのパーティーで一パーティー、ブレイブスで一パーティーだ。3+3+1+1は解るか？」

「えっ？……それくらい解るよ！エイトの馬鹿！」

ダメーヅにならないギリギリの強さで胸をポカポカ叩いてくるキ



リト。……眼福です。

それはさておき、やはりレイドに入れないとボス戦はできない。

『ピーター』と蔑称されている俺はともかく、二人ならどこかに入れてもらえるだろう。

人数に空きがあるところは——ブレイブスとエギルさんの所か。

ブレイブス——は二人が嫌がるだろうから、頼むならエギルさんのパーティーだな。

と、そこまで考えたところで、まさに今話そうと思っていた人物の声が聞こえた。

「よう、久しぶりだな、お三方」

スキンヘッドの下で厳つい顔で笑みを浮かべながらこちらに歩いてくる。

「聞けばトリオを組んだらしいな。まずはおめでとうと言っておくれよ」

「トリオなん……「トリオなんて組んでないわ。あくまで一時的な協力態勢よ。こんにちは、エギルさん」……」

……て組んでない。俺は次の層からソロに戻るつもりだからな。と言おうとしたら遮られた……。アスナよ、いくら俺とトリオを組んでいるなんて思われるのが嫌でも、最後まで話は聞けよ……

「ああ、まあそんな感じです。……で、二人をエギルさんの……」「それはそうと、三人とも俺のパーティーに入らないか？丁度三人ずつだしな」……」

……提案は凄く有り難いんですけど、最後まで話を聞いてください……主に俺の。それとも俺には発言権が……学校ではなかったな。

「いや……でも二人はいいですけど、俺入れていいんですか？立場的に」

ボッチは他人に迷惑をかけないから存在が許されるので、俺にとっては重要なことだ。

だがエギルさんはやれやれといったジェスチャーをしながら口を開く。

「アンタのことを、ええと、ビーターだったか？そんな風に言つて非難している奴は極一部だ」

男子が横文字のちゃんとした発音に弱いのは性なのだろうか。《ビーター》がめっちゃかつこよく聴こえたわ。

「事実、オレたちの周りじゃアンタのことを違うニックネームで呼んでるしな」

「へえ、どんな？」

声がハモるキリトとアスナ。……そんなに気になるの？グールとかヒキガエルとかだったら暫く宿屋に引きこもろう……

「オレたちはアンタのことを《灰色》とか《女たらし》とか呼んでるな」  
「オイ、待て。確かに装備は全身灰色だが、後半はなんだ」

素の口調だがどうでもいい。俺は女たらしじゃない。端から見ればそうかもしれないが、むしろ真逆だ。

あと二人、嘔き出すな、笑うな。普通怒るか冷たい声音で拒否するところだろ。これならまだ『ビーター』の方がマシだ。

「エギルさん、オフアーありがとう。じゃあ、遠慮なくパーティーに入れてもらいます、ほら《女たらし》さんも」

いや、乗っかるなよ。別に二人ともたらされてないんだから否定しろよ。内輪乗りすんなよおオオオ!!

「ハッハッハ、そうか、承けてくれるか。なら三人にはアタッカーを頼むぜ」

なぜか俺にパーティー受諾申請を送ってきたのでOKボタンを押す。エギルさん……いや、エギル、許すまじ。

俺が不名誉なニックネームを頂戴したところで、二人のプレイヤーが前が出る。言わずもがなりンドと……誰だっけ、アイツ？確か……もういいや、モヤットボール（仮）で。

「……まさか今回もダブルリーダーなのかな……」

「でもシステム的には、レイドリーダーは一人だけのはずでしょ？」  
「それもそうだね」

そんな会話を二人がしている内にリンドが演説を始める。が、俺は興味がないので聞き流す。

途中、モヤットボールがリンドに茶々をいれたり、役割分担が言い渡されて、ブレイブスのメンバーが取り巻きの相手だけをしているというのに納得できないと言って、他のプレイヤー達が新参者のくせに……とか言っていたりしていた。俺達H隊は取り巻きMobの排除、またもや露払いらしい。

……聞き流した割にはちゃんと聞いてるな、俺ってえらい！

自画自賛がかなり虚しいので、会議に集中することにした。

ブレイブスの発言によってメンドイことになりそうだ……と思っただ予感的中した。

「事前情報では、ボスの取り巻きは一匹だけで、再湧出（リポップ）しない。H隊だけに任せていいか？」

……何イ？コイツちゃんと攻略本読んだのか？

キリトもアスナもエギルも同じことを思ったのか言い返している。

「一匹と言うが、雑魚ではなく中ボスクラスの取り巻きだとも事前情報にはあったがな。それに、数が増えていないという確証もない。ワンパーティーでは荷が重すぎるな」

さつきから言っている事前情報とは、もちろん《鼠》の攻略本二層編だ。

しかし、攻略本の表紙裏の但し書きにもある通り、一層と同じくベータテスト時代の情報だ。

事実、事前情報にないカタナススキルで騎士ディアベルの命は刈り取られた。今回も中ボスクラスの取り巻きである《ナト・ザ・カーネルトールラス》……通称ナト大佐のステータスの上方修正、もしくは数の増量、リポップする可能性など様々な例が考えられる。

しかしリンドはエギルの反駁にも軽く頷いただけだった。

「もちろん、一層のときと同じ過ちは繰り返さない。何か事前情報が違ったら即退却、対策を練り直す。取り巻きの排除もワンパーティーでは足りないならもう一隊回そう。それでいいか？」

そう言われればこちらは何も言えない。沈黙を肯定と受け取ったのか、リンドはメに入る。

「それじゃ、少し早いけど……」

その時、意外にも今までおとなしかつたモヤットボールが、一層で聞いたことがあるフリーズで声を遮る。

「ちよお待ってんか!」

「……何か、キバオウさん」

そうだキバオウだキバオウ。あまりにもどうでもいい奴だから忘れてたわー。

「さつきからリンドはんはこの攻略本に頼りつきりや。これを書いたのはボス部屋に入ったことのない情報屋やろ?ほんまにそれで充分って言えるんか?」

「充分とは言わないけど、無い物ねだりしてもしようがないだろ。それとも何かい、キバオウさんが一人で偵察戦に行ってきたらとてども?」

自分のペースを乱されて若干不機嫌なりンド。自己顕示欲、または支配欲が強いな、アイツ。

「だからや、わいが言いたいんは、この場所に少なくとも一人、自分の眼エでボスを見た奴がおるちゆうこつちや。ならそいつに話を聞かん手はないわ。せやろ?」

うわー、誰だろうなーそいつ。めんどくさそう。

「どうや、灰ビーターはん!ボス攻略にあたって、なんぞ一言喋ってくれへんか!」

えっ、俺?俺何にも知らんぞ。……仕方ない、適当にでっち上げるか。

「えー、俺にはこの攻略本以上の知識は特にない。強いて言うならこの攻略本を過信し過ぎるなつてことと、くだらない小競り合いをやめろつてことくらいだ」

その言葉がカチンときたのか、緑、青両隊が睨んでくるが気にしない。事実だし。

そんな空気の中、リンドが仕切り直すように言う。

「よし、じゃあそろそろ始めるぞー!」

体を反転させ、シミターをじゃっ!と抜き、ディアベルのように高々と掲げる。

「……第二層ボス、倒すぞ!!」

おおー!、とレイドメンバーが叫ぶ。(俺はやっていない)  
その声を聞いたリンドは左手を巨大な二枚扉に当てる。  
その姿は、ディアベルのそれととてもよく似ていた。

……リンドに死亡フラグたててないよな?俺。

ガラにもなく、比企谷八幡は指揮をする。

通常、RPGにおいては相手の攻撃の種類は、大きく二つに分けられる。

一つ目は、普通にHPを削るいわば《直接的攻撃》。

二つ目は、ダメージは喰らわないが、SAOにおいてはより大きい危険を招くこともある《間接的攻撃》……ポケオンで言うなら電磁波とか超音波だな。それはすなわち阻害効果（デバフ）だ。

SAOでは、茅場晶彦にも初心者への最低限の配慮はあったのか、一層の迷宮区に棲息するコボルド族は、ボスを含めデバフ攻撃を繰り返してこなかった。

《イルファング・ザ・コボルドロード》がディアベルに大ダメージを喰らわせた時に発生した行動遅延（ディレイ）もデバフの一種だが、あれは大ダメージを喰らえば発生するため、コボルドロード特有のデバフという訳でもない。

故に——俺達プレイヤーが初めて相対する本格的デバフ使いは、この二層迷宮区のトールラス族ということになる。

「来るよー！」

キリトの短い叫びと共にバックジャンプ。《ナト・ザ・カーネルトールラス》——通称ナト大佐の《ナミング・インパクト》を避ける。

「ヴウヴオオオオオオオー——ッ!!」

気合いを込めた（ような）雄叫びと共に、遙か上空で降り下ろされた雷を纏ったナト大佐のハンマーは、ボス部屋の青黒い石床を叩き、辺りに雷を放散させる。

もちろん攻撃範囲には誰もいない。どうやら全員回避に成功したようだ。

「全力攻撃一本!!」

今度は俺が叫ぶ。相手は技後硬直で動けず、こちらのパーティーメンバーのHPは全く減っていない。こんな好機を逃す気はない。

エギル以下二名の両手斧とキリトのアニールブレード、アスナのウインドフルーレと俺のスチールブレードがそれぞれのライトエフェクトに包まれ、ナト大佐のHPバーを着実に削っていく。この攻撃でナト大佐の三段あるHPゲージが一本、完全に削り取られた。

「……行けそうね!」

「うん!でもゲージが残り一本になったら気を付けてね。《ナミング》を連発してくるから!」

キリトのベータタテスター丸出しの言葉だが、幸いというべきかエギルは反ベータタテスターではない。キ、キ……そうだキバオウだ。とりンドも居ないしな。

「ゲージが残り一本になったら未知の攻撃をしてくる可能性があるから気を付けろよ!」

「オウ!」

このパーティーの基本指揮系統はキリト、忠告役というか士気を上げるのは俺みたいな感じになっている。……ガラじゃないが。

俺がパーティーを激励した時に、ナト大佐がデイレイから回復、と同時にソードスキルの冷却時間（クーリングタイム）が終了する。

ナト大佐のハンマーが横殴りに振られると思ったエギル達タンク部隊がガード、俺達がカウンターアタックの準備をする。

ボス戦が始まってから五分と少し。

ここまで、俺達H隊は順調に戦っていた。《ナミング》はもちろん、想定外の大ダメージを喰らった奴もいない。あるとすれば敵の大技をガードしても喰らったらダメージを受けるため、回復のためにタンクが二人になることが懸念だが、その時は一番敏捷が高い俺がタゲを取る形でなんとかなっている。

しかし、だ。いくら俺達が順調でも、メインの《 balan・ザ・ジエ





か三秒。

しかし——。たかが三秒。されど三秒。ボス戦においての三秒は長すぎる。

一秒、二秒、三秒……と数える瞬間、カランと乾いた音が鳴った。その音はスタンしているプレイヤーが片手用ショートスピアをファンブルした音だ。そのプレイヤーはスタンが解けた瞬間ショートスピアを拾おうとするが——

「バツ……」

思わず叫びそうになるがなんとか押し留める。代わりに俺がナト大佐の脇腹に《スラント》を叩き込んでいる時に、 balan 将軍がハンマーを振りかぶり——。

ズガアン！と、二発目の《デトネーション》。

迸った雷は、ショートスピアをやっと拾ったリンド隊メンバーをまたしても呑み込み、硬直させた。

さつきと違うのは、立ったまま硬直していたのに対し、今回はどうつと床に倒れ込んだことだ。アバターを包む緑のエフェクトは《麻痺（パラライズ）》を表している。

トーラス族の真の恐ろしさは、二撃目を喰らうと麻痺状態になることだ。

麻痺は最低でも十分続き、回復するには現時点ではPOTに頼るしかないのだが、麻痺中は利き手しか動かせないため、POTを飲むのも一苦労だ。もちろん自力で離脱などできない。

balan 将軍はめざとく麻痺したプレイヤーをタゲるが、他のパーティーメンバーがボスの前から引きずり出し、そのまま後方に移動させた。

その姿を視線で追っていると、既に麻痺しているプレイヤーが七、八人倒れていて、POTを飲もうと利き手を動かしていたり、効果で麻痺が切れるのを待っていたりしている。

そんな状況を見ていたエギルが呟く。

「本隊はジリ貧くさいな……」

「ああ……不味いな、これ以上麻痺者がいたら撤退が出来なくなつて、

何かイレギュラーが起きたら対処できなくなるぞ……」

生憎俺はもう少し時間が経てば対処できるようになると思う程樂觀的主義者ではない。いのちだいじにがモットーであり、ガンガンいこうぜーなどは以ての他だ。

「じゃあ、今のうちに一度仕切り直して、ナミング対策を徹底したほうがいいんじゃないかな？」

「わたしもそう思う。でも……ここから大声で叫んだら指揮系統を混乱させちゃうかもしれないし……」

「……直接言うしかない、か……」

ナト大佐の三回連続で降り下ろされるハンマーを避けながら俺達は会話をしている。……ついでに言うなら全員こつちを見ている。

え？俺？俺が行かなきゃ駄目なの？

「……俺が行かなきゃ駄目なのか？」

「いや、だって……」

「あなたが一番速いじゃない」

……事実だけに否定できない。

「……わかった」

はあ……とため息を吐きながら承諾する。

《シングルシュート》で投げナイフを二本投げ、ナト大佐の目に当てる。

ナト大佐の絶叫とうわあ……という声が聴こえたが気にしない。

小町を学校に送るため(だけ)に免許を取得して乗っているバイクで通学しているため、いいとこ百メートル十四秒だが、この世界だとももの九秒で走れる。

やはりと言うべきか、リンドは俺が現れたことに対していい顔はしない。むしろ険悪だ。

「……あんたには取り巻きの相手を頼んだはずだ。何しに……」

「これ以上麻痺する奴が増えると撤退ができなくなる。一旦引くべきだ」

そう言うと指揮官は、 balan 将軍——正確には balan 将軍の HP バーを見る。早くも約半分削られている。

「残り半分なんだぞ。ここで引く必要があるのか」

……だから嫌なんだこういうリーダー気取りたがる奴。自分が一番だと思つて他人の話を聞きやしない。

「あともう一人麻痺したら引く、それでどうや」

意外にもキバオウ？が話に入ってくる。……仕方ない、どちらかが妥協をしなければ話が終わりそうにない。

「……解つた」

そう言うと再び走ってきた道に戻る。はしれ、八幡！……距離百メートルくらいだけど。

戻ってくるやいなやキリトとアスナが聞いてくる。

「どうだった!？」

君たち仲いいですね……

「あと一人麻痺したら撤退に決まつた」

「そう……」

「じゃあ、早くナト大佐を倒してあっちに合流しないとね」

一瞬浮かない顔をしたアスナだったが、キリトの言葉に頷いて二人で走っていく。

俺も投げナイフを手に持ち、投擲の準備をする。

二人の剣と俺の投げナイフがライトエフェクトを纏い、二人の剣は両横腹に、俺の投げナイフは鼻にクリーンヒット。またもやH隊メンバーのうわあ……という声が聴こえた。

この攻撃で最後のHPバーに突入し、ナト大佐は痛覚があるかのようにならぶ。

「ウグルウアアアア!!」

叫びとともに、見たことがない攻撃モーションに入るが、キリトの指示もまた的確だ。

「突進来るよ！頭じゃなくて尻尾を見て！対角線上に来るから！」

その指示で回避するべき方向が解つたエギルは難なく避け、ナト大佐にソードスキルを叩き込む。彼が下がるやいなやボツチ×3は各々のソードスキルを発動する。

さしもの大佐と言えども立て続けの大ダメージに耐えきれず、頭の

周囲に黄色い光をチカチカさせる。あれはスタンしている証だ。

「チャンスだ！全員、全力攻撃二本！」

「オオウツ！」

赤、青、黄色と信号機みたいに色とりどりなライトエフェクトを纏わせた剣でナト大佐をボコる。

フルアタックを成功させ、後ろに下がるとナト大佐の体が紫色に染まっていく。あれは暴走（バーサーク）状態で、攻撃を繰り返す早さが一・五倍になる（らしい）。

その時、コロシアムの反対側でプレイヤー達が叫んでいたが、どうやら balan 將軍の HP バーが最後の一本が黄色くなったらしい。麻痺の奴も増えるどころか減っていて、五人になっている。

「良かった。今度はベータからの変更はなかったみたいね」

……本当にそうか？一層を変更して二層を変更しないなんてあるのか？あとアスナ、それフラグ。

「そうだね。……でも、コボルド王の時だって、ちゃんと見たらタルワールから野太刀に変わっているのに気づけたはずなのに……でも、あの balan 將軍はベータからどう見ても変わってないんだけど……」  
そこでキリトは言葉を切る。アスナの顔が僅かに翳っていたことに気づいたためだ。

「……どうしたの？」

「ううん……なんでもない。きつと考えすぎ……ただ、なんで一層は王（ロード）だったのに、二層が……」

アスナの言葉は轟音に掻き消される。音はスタジアムの中央から鳴っているが何も——いや、あった。

同心円状に敷き詰められた敷石が反時計回りに回り、どんどんせり上がっていく。

その上で、背景が歪んで何か巨大な影が見える。

——明らかに何かある。

影はステージに接地し、太い脚が露になる。下半身から順に姿を現し、腰にはチェーンメイル、上半身はやはり裸。

そして、何より目を引くのが頭の上で輝く王の証、英語で言えば c

rown……すなわち王冠。

漆塗りの黒ほど鮮やかではないどす黒い全身を大きく反らし、バラン將軍など比にならないくらいの大音量で吼える。ダメージは喰らわないであろう演出用の雷のエフェクトを迸らせ、第三の、そして最大のトールラス族はほぼ天井に接する位置に六本のHPバーがある。

HPバーの下に、突如現れたトールラス族の名前が明記されていた。

名前は——《アステリオス・ザ・トールラスキング》。

二層の真のボスは將軍以上の階級の名前を持っていた。

絶望的に、今までのボスは前座だったことを知る。

「な……にいい？」

《アステリオス・ザ・トールラスキング》——アステリオスは確か、ギリシア神話のパーシパエーの息子で星、雷光を意味する……いや、そんなことはどうでもいい。最優先事項はこれからどうするかだ。

もちろん撤退が吉だが、ボス部屋の真ん中に陣取っているアステリオス王がそれを許さない。俺達H隊はボス部屋の手前で戦闘をしていたため逃げられるが、本隊は奥で戦っていたため撤退するにはアステリオス王の攻撃範囲を通らなければいけないため、撤退はできない。俺達だけが逃げて生き延びても、僅か六人でボス攻略などできるはずもない。

ならば、今俺達がすべきことは——。

「H隊総員、速攻でナト大佐を倒すぞ！全力攻撃！」  
「オウツ！」

指示と共に俺は跳躍する。俺は《軽金属装備》スキルをホルンカマで取っていたが、今は取っていない。あの頃は軽金属装備スキル↓隠蔽スキル↓索敵スキル（一時的に）↓隠蔽スキルという風に変わっている。……おかげであの時新しく買った胸当てと籠手が無駄になったが。

まあ何が言いたいのかというのと、軽金属装備をしていないため高く跳躍できると言いたいのだ。

トールラス族は僅かな例外（分厚い金属鎧を着ている《トールラス・アイアンガード》など）を除き、大体は角の間の額に攻撃を当てるとディレイするのだ。

しかし、当然ノールスクという訳ではない（ノールスクならとつくに狙っている）。まず、ナト大佐でも額の位置は二メートルはあるため狙いにくい。そして、仮に当たっても必ずディレイさせることができるとは限らないからだ。

だが、第三のトールラス族が現れ、安全にのんびり対処していたらそれこそ危ない。多少のリスクは取るべきだ。

「お……おおおつ!!」

一層のキリトのようにナト大佐の額に剣を向け、突進系片手剣スキル《ソニツクリープ》を発動。見事に額にクリーンヒットし、ナト大佐をデイレイさせる。

着地と同時に色とりどりのライトエフェクトがナト大佐を覆う。

ソードスキルの嵐を耐えきったナト大佐は、ナミングのモーションに入る。普通ここは引くのがセオリーだが、今度はキリトが跳躍、ソードスキルを発動させる。

「ヤアアアッ!」

ナト大佐の雷を纏ったハンマーとキリトのライトエフェクトを纏ったアニールブレードが、がきゅいん!という衝撃音と火花を散らす。お互いの武器がノックバック、決定的な隙を生み出す。

「チャンスだ!!これで決めるぞ!」

未だ空中にいるキリトを除いた五人で、これをラストアタックにするべく猛攻を仕掛ける。

しかし——僅か数ドット残ってしまうのを確認したのと同時に、あらかじめ左手に握っておいた投げナイフを投げるモーションに入る。

違う武器系統ならソードスキルの硬直時間がなくせるのはウインドワспの時立証済み。左手でソードスキルを発動させる練習はしていたものの、成功率は百パーセントではないが、システムのモーションと認められたため投げナイフがライトエフェクトに包まれる。

もう何回も使った《シングルシユート》を発動させ投擲、その直後にキリトの左足もライトエフェクトに包まれる。あれは後方宙返り縦蹴り体術スキル《幻月》だ。

ナト大佐は爆散、はたして俺の投げナイフが着弾する方が早かったらしく、視界にラストアタックボナスが表示されるが、目も呉れずアステリオス王の方を見る。

幸い麻痺になっている五人はタゲられておらず、本隊もバラン将軍とアステリオス王に挟まれるという最悪の事態にはなっていないが、アステリオス王が本隊に合流したら同じことだ。

H隊メンバー全員に目配せをすると全員頷き返してくる。……考  
えはみな同じ、か。

「……よし、まず balan 將軍から倒す。俺が先行して デイレイ させる  
から、続いて 追い討ちしてくれ」

「うん！」

「わかった」

返事を聞いて俺は走り出す。助走距離は充分。速度は最速。あと  
は タイミング を合わせて 跳ぶ だけだ！

balan 將軍がこちらを向いた瞬間に二度目の跳躍。最高到達点で、  
また《ソニックリープ》を発動し、額に狙いを定める。

ナト大佐の二倍ほどの体軀だが、俺の全力ジャンプ＋身長＋腕の長  
さ＋剣の長さ＋《ソニックリープ》の物理法則を無視した飛距離でギ  
リギリ届いた。《投剣》スキルで狙えばいいと思うが、動き回る相手に  
そんなホイホイ当てられない。

見事に命中し、デイレイに陥る balan 將軍。仮想の重力に従い落ち  
ていく俺。俺の指示通りに 追い討ち を掛ける H隊メンバー。しかし、  
またも 数ドット 残る。

俺は balan 將軍の体にダメージを与えられない蹴りを放ち縦に一  
回転（というか宙返り）。一回転して体勢を立て直している間に投げ  
ナイフを右手に持ち 投擲体勢 をとる。《軽業》スキルを取っているか  
らこそできる芸当だ。

balan 將軍に放たれた俺の投げナイフは、余すことなく將軍の命を  
刈り取る。再びのラストアタック。だが気にしている暇はまだない。

アステリオス王の方を見ると、息を吸い込み真つ黒な膨らませた胸  
を反らし――。

見たことがない俺でも解る。あれは ブレス 攻撃だ。

俺はアステリオス王に背中を向けている二人に叫んだ。

「キリト！アスナー！避け――」

轟音。現実でも聞いたことがない雷鳴に俺の声は掻き消される。  
それでも二人は僅かに反応できたようで直撃は免れる。

ブレスの余波はバックステップして避けた俺の所まで届くが、さす



がにダメージもデバフもこの距離じゃ有効射程圏外らしい。

いや、そんなことはどうでもいい。アステリオス王の巨体はキリト達に迫っており、二人は麻痺で動けない。他にも十人以上が横たわっており、青、緑両隊のリーダーのリンドとキバオウも麻痺のため指示は無く、三十人以上のプレイヤー達はどうするべきかわからない様子だ。

はー、と息を吐き、覚悟を決める。

リーダーの指示は無く、他のプレイヤーは動けない、一層の時は二人がいたが今は麻痺のため動けない。……どんなクソゲーだ。

「エギル！二人を安全域まで運んでくれ！H隊は他のプレイヤーも運べ！」

「わ、わかった！……エイトはどうするんだ？」

言っている相手も、込められている感情も違うが、返す言葉は同じだ。

「決まってるだろ？俺は『ビーター』だ。ならやることは一つだ。俺は……ボスのラストアタックボーナスを獲りにいくんだよ」

猛然とアステリオス王に向かってダッシュする。走っている間に投げナイフを三本投げ、タゲをとる。バラン將軍より更に大きい相手に睨まれているのだから、どうしても萎縮してしまう。

「はっ……我ながらついてねえ……」

思わず嘲笑。巨木の幹のような腕から繰り出されるパンチは、破壊不能な迷宮区の床にヒビが入ると思うくらいの威力だ。……笑えない。

ジリジリ、ジリジリと攻撃を避けながら後退していき、二人と本隊から遠ざける。

二分くらいそうしていると、背中に固い感触、壁だ。

それを好機と見たかのようにアステリオス王は、俺を叩き潰しにかかる。

しかし俺は股下を通り回避。更に振り向き様に《スラント》をアステリオス王の左足の腱にお見舞いする。

「グウオオオオオアアアアアア！」

ボス部屋のプレイヤーを震撼させる雄叫びは、怒りを伴っているように聞こえた。が、こちらだって容赦はしない。

右足を俺を踏み潰すように下ろしてくるが、前にダツシユして回避。更に衝撃波がくると推測した俺は、アステリオス王の方に向き直し、三度目の跳躍。案の定同心円状に広がる衝撃波がきた。しかし空中にいたので問題はない。

さつきもやったように《ソニッククープ》で物理法則に逆らいそのまま右の太ももに突き刺さる。

だが、この策は失敗だった。

太ももに突き刺さるということは、地面から少し距離があるということ、地面に接地しないと次の行動に移れない。結果、アステリオス王は踵落としをするように足を振る。その足が俺にヒット、サッカーボールよろしく、グングン飛ばされていき体力もレッドゾーンになってようやく止まった。

俺が体を起こした時にはもうアステリオス王は俺の前において、その拳を――

――降り下ろせなかった。

カアーン！という金属と金属がぶつかる音が上からする。

「え……？」

立ち上がるのも忘れ、辺りを見回すと銀色の星屑のようなキラキラとしたものを発しているものが、まるでブーメランのように何処かへ戻っていく。

――あれは、ネズハに渡した――。

俺はボス部屋の入り口を見ていないが、オランダがネ……と言っていたことからネズハだと確定。そして今度はネズハ本人の声が聞こえてきた。

「僕がギリギリまでボスを引きつけます！その間に、皆さんは態勢を立て直して下さい！」

その言葉にやっと活動を再開するレイド隊メンバー。俺の努力が徒労に終わった気がするが、いつものことなので気にしない。

ポーションを飲み、ようやく麻痺が治った二人のところへ走ってい

る最中に、聞き慣れたという程ではないが、聞くことが多い声が聞こえてきた。

「ブレスを吐く直前、ボスの目が光るんだ」

という《鼠》の声が。

……やはり情報収集は大事ですね。急がば回れ、だけど回ってたらどっちにしろレベル的にも装備的にも置いてかれるからなあ……

二層ボス部屋で、どうでもいいように大事な事に頭を悩ませる俺であつた。

新たな援軍とともに、彼らは真のボスに挑む。

これは後で聞いた話だが、真のボスである《アステリオス・ザ・トールスキング》の情報は、二層迷宮区近くの密林に開始イベントが設定されている、とある連続お使いクエストをクリアしたらちやんと入手できたらしい。

ボスの攻撃パターンや弱点……つまり《額の王冠に投擲武器を当てればデイレイする》ことも。

どうやってそんな情報を入手したのかは知らない（《鼠》の恐るべき情報網が明らかになりそうで聞きたくない）が、さしもの《鼠》といえども、情報を入力するにはかなり時間がかかり、クエストをクリアしたのは攻略部隊が既に迷宮区に入った後だった。ソロで行くには《鼠》のビルド（AGI全振り）では不安が残る。かと言って、迷宮区に入っているプレイヤーにはメッセージが届かない。そんなときにやはりソロで迷宮区前をウロウロしていたネズハと合流、できるだけ戦闘を避けてボス部屋まで来たらしい。

「いつまでへたり込んでんダ。麻痺、もう回復してるゾ」

《鼠》が言った言葉につられて二人の方を見る。キリトがアスナを所謂床ドンしている状態なので……凄く、百合百合しいです。

リアル（仮想空間だけど）で初めて見た床ドンが女子同士ってなかなかないなー、と思考放棄しつつ、二人の武器を拾いに行く。……ネズハの時にも思ったが、キリトのアニールブレードがすごい重い。

「ほれ、武器落としてたぞ」

二人にそれぞれの武器を差し出していると、《鼠》がリンドと……緑隊のリーダーの方へ歩いていく。

《鼠》は『ピーター』と呼ばれている俺に並ぶピータテスターの代表格だ。

そんな奴が近くに來たら当然反ピータテスターの二人はいい顔をしない……が、緑隊のリーダーは苦い顔だ。一層の時にキリトのアニルブレードを買い取り工作を行ったというリーダーとしてあまりよろしくない経歴があるからだろう。

「よう、トンガリ頭。久しぶりだな」

嫌な顔のリンドをスルーして、トンガリ頭に声をかけられる《鼠》さんまじりスペクトツつす。

ここが俺が《鼠》を苦手な理由その二だ。弱味を握られたらすぐに流出できる立場にいるところが苦手だ。……まあ、噂などはちやんと確証を持ってから流すのだが……

「撤退するなら、早くするんだな。だがこのまま戦うなら、ボスの情報を売るゾ。代金は……特別にタダにしといてヤル」

……うわあお。こうして《鼠》は貸しをつくっておくんだなあ……

《鼠》のタダの（本当の意味でタダなのかは疑わしいが、ソースは《体術》スキル）情報を聞き、リンドと緑隊リーダーはすぐに戦闘続行の指示を出す。

……意外だ。あいつらが一番ボスの近くで麻痺して死を実感しただろうに。まあボスが出てきた直後とは状況が違うしな。

「よし……攻撃、始めるぞ！ A隊D隊、前進！」

リンドの指示で、重装甲なタンク部隊が体当たりにも似た近距離攻撃を繰り返し、ようやくネズハからタゲが外れる。

その途端に、ネズハが足の力が抜けたようにしりもちをつく。俺達

三人が駆け寄ると、ネズハは右手の俺が渡した武器——チャクラムを掲げるようにして、笑みを浮かべる。

チャクラムと言っても、古代インドに実際にあつたとされるチャクラムとは違い、……なんて言うんだろうか、タンバリン？みたいな輪に刃と革の持ち手がついており、投げたりナツクルとして使うことも可能。

それ故に《投剣》スキルだけでは扱えず、《体術》スキルも必要なのだが、特徴はなんとと言っても、さつきみたいに俺の投げナイフとは違いブーメランのように手許に戻ってくることだ。

だから装填数無限の投擲武器として扱え、FNC判定で距離感が上手く掴めないネズハでも戦えるのだ。（さすがにソロでは無理だろうが）

ちなみに、二層でチャクラムが入手できるのは、迷宮区にいる《トールス輪投げ男（リングハーラー）》からだけらしい。

そんなチャクラムをふらつきかけた両足を踏ん張り、投げようとする。するとそれがソードスキルのモーションだったのか、チャクラムの円形の刃が黄色く光る。

「やあっー！」

という気合いの入った掛け声と共に投げられるチャクラム。

漢字で円月輪と書くように、丸い黄色い光を発するチャクラムはまるで満月だ（月は太陽の光を反射して輝いて見えるのだが）。

名は体を表すって本当だな……雪ノ下は冷たいし、百合ヶ浜は百合百合しいし。……それなら俺、八幡だから八幡大菩薩みたいに弓の名手じゃん！さすが八幡！弓はないから投剣の名手になれるね！

脱線した思考はハンマーを振りかぶったアステリオス王の王冠にチャクラムが命中した金属音で中止される。アステリオス王は大きな体を仰け反らせ、攻撃を中止する。その足許で「ナイス！」と言っていたのは緑隊メンバーだろう。

戻ってきたチャクラムを危なげなく掴んで（ソードスキルはここままで続いているのだろうが）、泣き笑いのような顔をつくった。

「夢、みたいです。僕が……僕が、ボス戦で、こんな……」

「……夢じゃないぞ」

俺達の本体は頭にナーヴギアを被って、恐らく病院のベッドで寝ているようなものだから、夢みたいなものだが……

「はい……僕は大丈夫です！皆さんも、戦線に加わってください！」  
「わかった、ブレス阻止を優先にディレイを狙ってね！」

キリトのアドバイスに頷いたネズハを見てからボスに視線を移す。

「さて、俺達も……行かなきゃ駄目なんだろうなあ……」

「当然でしょ？」

「ほら、ボス戦くらいめんどくさがらずにやろうよ」

いや、だってアステリオス王に繰り出されるあの無数のライトエフェクト見たら、行かなくていいんじゃないやね？って思っちゃうでしょ。

「わかったよ……H隊全員、アステリオス王に攻撃するぞ！」

おうっ！という返事を背に受け、最前線まで身を投じる。

一度こそ未知のボスというインパクトと、一撃パラライズ有りの雷ブレスで全レイドメンバーを恐慌させたが、《鼠》の攻略情報で着実にHPを減らしていつている。

ここで目につくのがG隊……つまりレジェンド・ブレイブスだ。

王も将軍と同じく《ナミング・デトネーション》を操るのだが——あれ？そういえば俺にナミングどころかハンマーの攻撃すらなかったけど、遂にモンスターまでに下に見られちゃったの？……ではなく、ブレイブスは全身をガッチリ強化していて、阻害抵抗値（デバフレジスト）が高いため、近くでナミングを喰らってもスタンしないのだ。……もちろんその強化した金はネズハに《強化詐欺》をさせて得た莫大なコルというのがひっかかるが、ネズハが強化詐欺をやめた今、ブレイブスの奴らを糾弾する機会はもうない。

「………なんだか複雑ね」

「そうだね……でも、少なくとも今後は二度とできないはずだしね……」

「……まあ、ゲームクリアにも貢献してるわけだし、いいんじゃないかな？」

名前も顔も知らない人に申し訳なく思う必要もないしな、と心の中

で付け足す。

「そう……ね」

なおも浮かない声に耐えかねてか、キリトがある提案をしてくる。「でもこのままMVPを取られるのも癪だから、少し抵抗してみない？ タイミングが合えば、だけど」

アスナに耳打ちをしているキリト。アスナは呆れた後にコクリと頷く。キリトは俺に手招きをしている——え？ 俺も？

十センチくらい差があるキリトに合わせようと膝を少し曲げる。こしよこしよとした声がこそばゆい。

「……いいんじゃないか？」

ビーターの俺にぴったり過ぎる提案だ。

「あのな、エイト」

不意に後ろから野太い声が聞こえた……というかエギルだった。

「お前ら、トリオ組んでないって言ったよな？」

「組ん「組んでないわ」……」

何？ H隊では俺の言葉を遮るのが流行りなの？

行きどころのない開いた口をどうしようか考えているときにリンドの指示が飛ぶ。

「E隊、後退準備！ H隊、前進準備！」

さすがに全く役割を与えないのはまずいと思ったのか、ここで俺達に役割を与える。

「よし、じゃあ行くよ……ゴー！」

キリトの掛け声で一斉に走り出す俺達。

俺が一番AGI寄りなので少し距離が空くが《シングルシュート》を発動し僅かな硬直に襲われる。その硬直時間で二人が追い越し、それぞれ右足、左足にソードスキルを叩き込む。怒りの声とともに繰り出された薙ぎ払い攻撃を硬直が解けた俺含めバックステップすると、すかさずエギル達三人がガードする。

体の巨大さは確かに厄介だが、一度に攻撃できるパーティー数が増えるという利点もある。ナト大佐は一パーティー、 balan 將軍は二パーティー、そしてアステリオス王は三パーティーが適正だ。





という紫のシステムメッセージが、俺の視界の端に写った。

ボス戦は終わり、されど安堵の空気は訪れず。

「終わった……」

迷宮区ボス部屋に大の字で寝っ転がっている俺は、ポーションを取り出す気にもなれなかった。

……人を足場にするのって、結構酷くね？おかげで二回目の死が見えたよ。

二人がこつちに歩いてきたため、新しい不名誉な称号（スカートを覗いたなど）を貰わないために体を起こす。

「コングラチュレーション」

さすがにボス戦で聞き慣れたエギルの祝福の声が投げかけられた。座っていた体勢からしつかりと両足で立ち、声のする方に向くと、やはりエギルの姿があった。今まで見た中で一番デカイ右手をサムズアップしてくるので、適当に右手を挙げてヒラヒラして返事をする。

「相変わらず見事なコンビネーションと剣技だった、二人とも。エイトは……うん、頑張っていたな。だが、今回の勝利は、あんたらじゃなく彼のものだな」

……オブラートに包んでるけど、踏み台にされて憐れだなあとか思っているんだろうなあ……俺もまさか踏み台にされるとは思わなかったわ……

「うん、そうだね。彼が来てくれなきゃ十人以上が死んでいたかもだしね……」

死んでいたかものところで俺に目を向けるが……え？俺が何かしましたか？

「エイトだって死んでいたかもしれないんだよ？」

……あー、そういうことか……一層の時にも言われたしな……

「いや、あのな？キリ「エ・イ・ト？」はい、スイマセンでした……」

……男という生き物は、美人の笑みには勝手に惚れて勘違いし、怒っているときは逆らえず、世間からの男が働かなきゃいけないという認識が強いんだろうなあ……最後は関係ないか。あとキリト、お前

達のせいでレッドゾーンになったんだからな……怖いから口には出さないけど。

俺がキリトの怒った顔に屈服していると、一際大きな歓声が聞こえたので視線を移す。すると、リンドと……関西モヤットボールが右腕をガツチリと絡ませていた……言葉で説明すると、特殊性癖者（海老名さんが好きそうな）のように聞こえるが、多分そんなことはない……と思う。一時のテンションだろう。

ダメだよ、一時のテンションに身を任せちゃ。俺みたいな目をした銀髪天パ侍も言ってたでしょ？「一時のテンションに身を任せる奴は身を滅ぼす」って。

「なんだ、案外仲いいんだね……」

「どうせ、三層に登るまでのことでしょうけどね」

身も蓋もない言葉だが、事実なんだよなあ……

何はともあれ、これでようやく二層は突破された、ということだ。死者はゼロ……と言えば聞こえはいいが、実際は壊滅（ワイプ）と紙一重だったのだ。俺も死にかけたしな……二回も。

今回のボス戦での教訓は二つ。

一つ、これからはフロア最後の村、または街にあるクエストは全てやること。

二つ、これは特にベータテスターに対してだが、一層、二層のボスの傾向からして、三層以降のボスも何かしら変更点があるだろうということだ。

ゆえにこれまでに以上に情報を收拾したり、偵察戦をする必要があるが、後者は簡単ではない。ほとんどのボスは奥まで踏み込むか、キーオブジェクトを破壊する必要がある（らしい）からだ。

つまり、だ。これからは《鼠》とチャクラムを持っているネズハが重要になり、俺が偵察戦をする可能性が高いのだ。

そういえば《鼠》が見当たらないと思いい辺りを見回すが見つからない。どうやらハイドしているらしい。

あのやろう……俺のことを《女たらし》なんてエギル達に広めたの多分あいつだろ……

《鼠》にどう報復するかをシミュレーションして、返り討ちに遭う結果しか浮かばないので諦める。

ガサゴソとポーシオンをポーチから取り出そうと漁っていると、ネズハと二人がお互いに健闘を讃えているのが聞こえた。

「お疲れさまでした。キリトさん、アスナさん。最後の空中ソードスキル凄かったです」

「ありがとう……でも、私にはLAきてないんだよね……アスナはどう？」

「わたしもない……」

ここで俺の方に三人の視線が向く（うち二名はジト目）が、華麗にスルーしてブレイブスの方に向くと、三人も視線をブレイブスに向ける。

ブレイブス達五人は、誇らしげな顔をして、オルランドはリンドと、ベオウルフは関西モヤットボールと、他の三人は幹部級プレイヤーと握手を交わしている。

そんな勇者達を見て、キリトが口を開く。

「……ネズハ。君もあそこに居ていいんじゃないの？」

しかしこの戦い最大の功労者であろうネズハはかぶりを振った。

「いえ、いいんです。僕にはもうひとつ……やらないといけないことがありますから」

やらないやいけないこと。それは恐らく……

「え？何を？」

キリトが疑問の声を出している時に、本隊から三人こちらに歩いてくる。

一人は確か……リンド隊のシヴァアタで、その隣を歩いているのも青カラーの服を着ているが、もう一人は緑カラーだ。表情は揃って固い。

「あなた……何日か前まで、ウルバスやタランで営業してた鍛冶屋だよな」

「……はい」

肯定の言葉。やはりネズハは強化詐欺をしたことをバラし、一人で

罪を償うつもりなのだ。

「なんでいきなり戦闘職に転向したんだ？しかも、そんなレア武器まで手に入れて……それ、ドロップオンリーだろ？鍛冶屋でそんなに儲かったのか？」

……実際にはレア武器でもそんなに高くないらしいけどな。

そんな言葉を呑み込む。俺はネズハを擁護する気も庇護をする気も弁護する気もない。あいつが……いや、正確にはブレイブスだが、強化詐欺をしたのは変わりがないのだから。ブレイブスの分まで贖罪をしようなら、それをあれこれ口出しする権利は俺にはないのだ。

シヴァタの言葉に静まり返るボス部屋。そんな中、ネズハはチャクラムをコトリ、と床に置き、両膝を曲げ、手を地面に着ける……所謂土下座の体勢だ。

「……僕が、シヴァタさんと、そちらのお二人の剣を、強化直前にエンド品にすり替えて、騙しとりました」

さつきよりも静かな、耳が痛くなるほどの静寂がコロシウムを包み、シヴァタ以外の二人は顔を真っ赤にする。

S A Oは現実のプレイヤー達の姿を正確に再現しているが（なにせ俺の腐った目すら再現している）、感情表現においてはいささかオーバーと言わざるを得ない。少し怒ったくらいでぶちギレたかの様に額に血管が浮かび、顔が真っ赤になったり、少し涙を流しそうになったら号泣したりするのだ（俺は経験がないが）。

そんな環境で、僅かに眉間にシワを寄せただけのシヴァタの自制心は見事と言わざるを得ない。他の二人は爆発寸前だというのに。

実際に経った時間に比べて長く感じた沈黙は、シヴァタの声によって破られた。

「……騙し取った武器は、まだ持っているのか？」

土下座の姿勢のまま、ネズハは頭を左右に振る。

「いえ……。もうコルに替えてしまいました……」

そこまでは予想できていたのか、シヴァタはそうか、と呟いただけだった。

「なら、金での弁償はできるか？」

……無理だろう。詐取した武器は金に替えた、ネズハはブレイブスの一員、ブレイブスのデバフレジストが高い装備、そして、装備の強化は金があれば幾らでもできる（ただし強化試行回数を除く）……この四つから導き出されるのは、金は全てブレイブス……正確にはオルランド達の装備の強化代として消えた筈だ。

「いえ……弁償も、もうできません。お金は全部、高級レストランの飲み食いとか、高級宿屋とかで残らず遣ってしまいました」

案の定ネズハは金がないと告げた。だが、視覚に異常が出て、ブレイブスの足手まといになった罪滅ぼしなのか、本当の理由は話さない。

ここで遂に、リンド隊の大柄な男が堪忍袋の緒を切った。

「お前……お前、お前エエ!!」

何回も右足のブーツで床を蹴るリンド隊の男。

「お前、解ってるのか!!オレが……オレたちが、大事に育てた剣壊されて、どんだけ苦しい思いしたか!!なのに……オレの剣を売った金で、美味いもん食っただあ!?!高い部屋に寝泊まりしただあ!?!あげくに、残りの金でレア武器買って、ボス戦に割り込んで、ヒーロー気取りかよ!!」

色々違う事実があるが、叫んでいるリンド隊の男が知るよしもない。

続けて、緑隊のプレイヤーが叫ぶ。

「オレだって、剣なくなつて、もう前線で戦えないって思ってたんだぞ! そしたら、仲間がカンパしてくれて、強化素材集めも手伝ってくれて……お前は、オレたちだけじゃない、あいつらも……攻略プレイヤーも全員裏切つたんだ!!」

……武器がなくなつて、前線で戦えなくなると思ってた気持ちだけは解る。実際、俺もアニールブレードを失って戦えないとまでは言わないが、二層での戦いは一層の倍くらいキツかった。

その言葉が起爆のスイッチの様に――。

――裏切り者!!

——自分が何をしたか解ってるのか!!

——お前のせいで攻略が遅れたんだ!!

——今更謝ったって、何にもならねえんだよ!!

石が次々に投げ入れられる水面にできる波紋の様に罵声は次々と広がり、怒声が大きくなるのに反比例してネズハの体が縮こまる。

ブレイブスは何やら囁きあっているが、怒声が大きくて聞こえない。

俺は事の成り行きを見守るしかない。

事ここまで至れば、この怒声を一言で黙らせる魔法の言葉は存在しない。償えるとしたら、同額のコルか、同等な何か……例えば、命とか……

いや、さすがにそこまではないな。いや……そう信じたい。

ようやく、この場を収められる可能性を持つ二人——つまり、各隊のリーダーだ——の内の一人で、レイドリーダーのシミター使い……リンドが歩いてくる。

さすがにリーダーが出張ると徐々に声が小さくなっていき、会話ができるくらいになった。そんな中、シミター使いは口を開く。

「まず、名前を教えてくださいるか」

レイド隊メンバーに入っていないネズハは、名前を知られていない。リンドは頼むような口調だが、この場において悪であるネズハに拒否権はない。

「……………ネズハ、です」

ネズハが自分のことをナタクと言わなかったのは、俺の時みたいに英雄の名前だとバレない様にして、ブレイブスと関係がないと思わせるためか、単に自分ではナタクと名付けたつもりだが、他の奴らからはネズハと呼ばれるつもりで付けた名前だからかは定かではないが、リンドは二、三回頷いてから続ける。

「そうか。ネズハ、お前のカーソルはグリーンのままだが……だからこそ、お前の罪は重い。システムに規定された犯罪でオレンジになったなら、カルマ回復クエストでグリーンに戻ることもできるが、お前の罪はどんなクエストでも雪<sup>そそ</sup>げない。その上、弁償ももうできないと



言うなら……別の方法で償ってもらおうしかない」

まさか——。

俺が危惧したものは、今のSAOでは絶対に越えてはいけない一線だ。

「お前がシヴァアタ達から奪ったのは、剣だけじゃない。彼らがその剣に注ぎ込んだ長い、長い時間もだ。だからお前は……」

そこまで聞いて、心配は杞憂のようだ、と肩の力を抜く。恐らくリンドはこれからのゲーム攻略の貢献と、収入からの定期的な賠償を要求するつもりだろう。

しかし。

その声は遮られ、誰かが叫ぶ。

「違う……そいつが奪ったのは時間だけじゃない！」

そう言っ走り出てきたのは、緑服——つまりリンド隊ではないということだ——を着た痩せている男が、今までの誰よりも悲痛な声で、プレイヤー達の暴走を止められなくなるであろう一言を言い放つ。

「オレ……オレ知ってる!!そいつに武器を騙し取られたプレイヤーは、他にもたくさんいるんだ!!それで、その中の一人が、店売りの安物で狩りに出て、今までは倒せてたMobに殺されちゃったんだ!!」

それは、鍛冶屋——いや、強化詐欺師ネズハが間接的とはいえ、人を殺したという事実だった。

どんなことも、自分への因果応報である。

主亡き部屋が何回目かの静寂に包まれる。誰も喋らない、いや、喋れない。

しかしそんな中で口を開いたのは、シヴァタの隣にいたリンド隊のメンバーだ。

「……し、死人が出たんなら……こいつもう、詐欺師じゃねえだろ……ピッ……ピ……」

そこから先はまるで言えないかのように言葉を切る。しかし、詐欺の被害に遭った緑隊のプレイヤーが言葉を続けた。

「そうだ!!こいつは人殺しだ!!PKだ!!」

PK。PKとは数多あるネットゲーム要語の中でも最も有名なものの一つだろう。その意はプレイヤーキル、またはプレイヤーキルをするプレイヤーキラーの略だ。

SAOは、最近のMMORPGにしては珍しく、プレイヤー間でのPKができる……いや、この状況だとできてしまう、か。

一ヶ月間のベータテストの間では、競いあいながら上を目指しており、プレイヤー対プレイヤーのデュエルも少なからずあったらしい。

ちなみに、一層のリトルペネントの時にキリトがされた（とクエストをクリアしてから聞いた）のはモンスタープレイヤーキル……通称MPKという。MPKの最たる例はタゲをとったモンスターから逃げ回り、他のプレイヤーに擦り付けて殺す、というのがベータ時代に（MPK自体あまりなかったそうだが）一番使われていた方法らしい。キリト曰く、MPKをしてきたやつはクエストアイテム目的で、生き残るための消極的な行為だった、と言っていた。

序盤のスタートダッシュが落ち着いた今、そんなことは起きない、いや起こしてはいけないのだ。この世界で死ぬことは現実でも死ぬことと同義なのだから。

そもそもPKができるのは圏外……つまりフィールドだけなのだ。現在は二層までしか（他のプレイヤーは三層開通の事実を知らないため）開通していないため、ミドルプレイヤーは存在しない。つまり、現

在フィールドに出るのは攻略プレイヤーしかいないのだ。攻略プレイヤーをPKすることは攻略が遅れるということであり、アインクラッドからの開放も遅れるということなのでPKしても得がないのだ。

頭に血が上っているのか、こんな簡単なことにも気づかず緑隊のダガー使いは叫ぶ。

「土下座くれーで、PKが許されるわけねえぜ！どんだけ謝ったって、金を積んだって、死んだやつは帰ってこねーんだ！どーすんだよ！お前、どうやって責任とるんだよ！言ってみろよお!!」

ナイフで金属を引つ掻いているような金切り声でダガー使いは叫ぶ。そんな糾弾の声を全て受け止めたネズハは身を縮こまらせながら細かい声で言った。

「皆さんの……どんな裁きにも従います」

またもや部屋が静まり返る。《裁き》という言葉の意味、それがどんな重みを持つのかを初めて認識したのだろう。そして——この世界では明確な法律がないため、集団が法律なのだ。ヒートアップしているプレイヤーでは冷静な判断ができない。割り込む気はないが、人命が懸かるかもしれないなら話は別だ。

故に俺は先に声を出して、割り込もうと思ったが、遅かった。

「なら、責任とれよ」

その言葉はそんなに意味を持たないものだったが、導火線に火を点ける役割を果たしたようだった。

一斉にプレイヤー達はネズハに謝罪をしろという言葉や償いをしろという言葉がこちらから聞こえてくる。

「そうだ、責任とれ!」

「死んだ奴に、ちゃんと謝ってこい!」

「PKなら、PKらしく終われ!」

謝れ、から終われ、までボルテージを上げたプレイヤー達の声は、遂に分水嶺を超える。

「命で償えよ、詐欺師!」

「死んでケジメつけろよ、PK野郎!!」

「殺せ！クソ詐欺師を殺せ！」

この言葉の怒りは大半は詐欺による怒りではなく、ソードアート・オンラインというデスゲームそのものへの怒りをぶつけているのだろう。

ニユースで詐欺師が人を騙し、騙された赤の他人が自殺した……などということを知っていて、詐欺師を殺してやると思う人が何人いるだろうか？

デスゲームが始まって三十八日目。クリアした層は僅か二層。この絶望的数字がもたらす抑圧が、自分達を正義にでき、悪を糾弾できる、という名目で怒りをぶつける機会を得て、遂に爆発したのだ。

こんな状況になったら、さすがに両隊リーダーもエギルももちろん俺にも止める手だてはない。あるとすれば――

ブレイブスの方を見ると、さすがにネズハを責めることはしていないが、全員顔をうつむかせてネズハから目を逸らしている。こうなることを、強化詐欺がバレることを全く考えていなかったのだろう。

そして、黒ポンチョの男から教えてもらったと言っていた強化詐欺。見返りは何もいらないと行っていたそうだが、そんなことはあり得ない。人間は感情をひた隠しにし、計算と打算で動く生き物なのだから。しかるに、黒ポンチョの男が望んだのは、この状況なのではないか――？

しかし、この状況を作り出した原因の一端は俺にもある。戦闘職への移行を勧めなければこの状況はなかったのだから。贖罪をしろと言われたならそれは妥当な判断であり、当然の報いと言えよう。しかし死ぬというならば止めなくてはならない。

どうやってこの場を収め、人殺しをしようとするのを止めさせればいいのか考えていると、ブレイブスの五人が動き始めた。

がしやつがしやつと金属製の鎧を鳴らし、広場を横切り、ネズハに近づいていく。うつむいているため、表情は窺えないが、ずっと無言で歩いている。

ブレイブス五人のただならぬ気配を感じたのか、ネズハを半円に取り囲んでいたリンドとダガー使い、シヴァタは道を譲る。

かつての仲間の気配を感じているであろうネズハは動かない。ただただ両拳を床につき、頭を垂れた姿勢のままだ。正面に置かれているチャクラムを挟んで立っていたオルランドだったが、やがて右手を左腰に当てる。キリトとアスナの二人が小さく息を漏らす音が聞こえた。

やがてガントレットを着けている右手は柄を握り、じやつ！とキリトと同じ——いや、それ以上に強化されているであろうアニールブレードを抜き放つ。あんなものが軽装な——しかも、無防備なネズハの背中に降り下ろされれば、僅か三、四回でネズハのHPを削りきるだろう。

「……オルランド……」

低い声で聖騎士（パラディン）の名前を呼ぶ。

もし仮に、アニールブレードがネズハの背中に降り下ろされようものなら、俺にはそれを止める責任がある。

少し前傾体勢になって右足に体重をかけ、いつでも走り出せるようにしておく、二人も同じような体勢をしていたので囁きかける。

「お前らは動くな」

すぐに返事は返ってきた。

「嫌」

いつもならここで俺が引き下がるところだが、今回はそういう訳にはいかない。

「ダメだ、動くな。こんなことをしたら攻略部隊にはいられなくなる。そして攻略するにはお前らの力が必要なんだ」

「それでもよ。言ったでしょ？わたしは、わたしでいるためにはじまりの街を出たの」

「エイトだって攻略には必要不可欠なんだよ？」

「……そんなことはねえよ」

そこまでの覚悟があるなら俺には止める権利などない。

いつの間にかボス部屋は静まり返り、誰もがブレイブスの行動に固唾を呑んで、決定的瞬間を待っていた。

その時、周りはなんの反応も示していなかったから聞こえなかった

のだろうが、確かに俺には聞こえた。

「…………ごめんな。…………ほんとにごめんな、ネズオ」

すると聖騎士は、片手剣をチャクラムの隣に置いて、ネズハと同じ方向を向いて膝をつく。被っているバシネットを床に置き、両手も床につく。

続いて、ベオウルフ、クフリーン、ギルガメシユ、エンキドウの四人もそれぞれの獲物と兜を床に置き、横一列に並び、それぞれ床にひざまずく。

静寂の中、誰もがブレイブス五人の行動に呆然としながら見下ろしている。

やがて、わなないているが毅然としているオルランドの声がコロシアム中に響いた。

「ネズオ…………ネズハは、オレたちの仲間です。ネズハに強化詐欺をやらせていたのは、オレたちです」

「まったく…………なんでわたしたちが使いつ走りみたいなきことをしなきゃいけないのよ」

「…………俺の学校の先生曰く、上からの命令に理由を求めちゃいけないらしいぞ」

いや、あれはホントに聞きたくなかった。嫌だ、絶対に働かない。「ぞ、そうなんだ…………でも、実際エギルが気を利かせて入れてくれたパーティーだしねえ…………」

「あー、まあそうだな。何かお礼した方がいいのか？」

そう言うと二人は驚いていた……なんで？

「……な、なんだよ？」

「いや……ただあなたの人付き合いスキルの熟練度も上がってきてるのだから思っただけ」

失礼だな……俺は人に迷惑をかけないんだぞ？それが俺の人付き合いなんだ。

「お前に言われたくねえよ……一層でパーティー組まずにぶっ倒れたツ!!」

あ、危なツ!!レイピア抜きやがったコイツ……

「ま、まあ、なんにせよネズハからベンダーズカーペットを貰ったんだから、エギルに渡すよ……純戦闘職プレイヤーには無用の長物だからな……」

階段をカツカツ鳴らしながら、一層の時のよく言えば遊撃部隊、悪く言えばみそつかす、または余り者である俺達三人は歩いている。

俺達が指揮官リンドから言われたのは、メッセージが使えない迷宮区を脱け出し、二層クリアの一報を待っているプレイヤーに届けることだ。

本来、この仕事は青隊、緑隊リーダーがする仕事だが、迷宮区を脱け出せない——わけではなく、単にブレイブスの処遇について話し合っているのである。

まあ、処遇についてはあまり心配していない。

ブレイブス五人——いや、六人の死を攻略プレイヤーは見たい訳でもなく、賠償は自分達の装備を売ってする、と言っていた。

それでも死んでしまった人は帰らないため、ちゃんと死んでしまった人の仲間などに謝りに行くらしい。……まあ、装備の換金方法に悩んだレイド隊メンバーは、やはりプレイヤーの手で買い取るのが確実だ、ということで見解が纏まり、SAOプレイヤーの中で、強い装備が一番必要な攻略プレイヤーが集まっている今のうちに買い取ってしまうおう、ということでもボス部屋は一時的にオークション会場になっていて、誰がどの武器を買おうか話し合っているのが長引いている原因なのだが……。

キリトとアスナは革装備のため、あまり食指が動かなかったように、俺はちやつかりオルランドのアニールブレードを買っていた。久しぶりだぜ、この感触ウ！とか言って二人から白い目で見られて新しい黒歴史を作ってしまったのは余談だ。

「詐欺事件はどうか収まりそうとして……ネズハさんとブレイブスはこれからどうするのかしら」

ブーツで階段を小さくカツカツ鳴らして、歩きながらアスナが訊ねたため、キリトが少し考えてから答えた。

「彼ら次第……じゃないかな。最前線に強化詐欺の噂が広まるのは止められないとして……そこからはじまりの街にでも逃げるか、踏ん張って一から攻略部隊を目指すかは彼ら次第だしね」

俺がキリトの言葉に更に捕捉をする。

「……少しリンドに聞いたんだが、もしブレイブスが攻略部隊を目指すなら最低限のコルは戻すらしいぞ。……まあ、なんにせよ、ブレイブスがネズハをお荷物扱いするのはもうないんじゃないか？」

「ふうん……。——正直、オルランドさんにはまだちよつと複雑なものがあるけど……でも、前線に戻ってきたなら、その時は一緒にやっいていけるよう努力するわ。あなただって、リンドさんやキバオウさんとそこそこ上手くやっってるようだし」

キバオウ……キバオウ？あつ、あの関西モヤットボールのことか。

「……いや、あれは上手くやってるというより、嫌悪し過ぎて自分の敵になることを嫌がってるんじゃないか？」

「へー、じゃあエイトはどつちかに入る気はあるの？」

首を横に振るジェスチャーをしながら、キリトの質問に答える。

「いや、ないな。そもそもビーターなんて呼ばれている俺は入れても入らないだろうしな。入る気もないし」

はつきりと否定すると、アスナが何かに気づいた様子をしていた。そのまま俺にジト目を向けてくる。

「……ど、どないしましてん？」

……言葉づかいがおかしくなった……

「……そう言えばビーターさんはナト大佐、 balan 將軍、アステリオス



王のL Aを全部取っていったなって思っただけよ」

「あつ……そう言えば」

アハハく、嫌だなー二人とも。偶然に決まっているじゃないか。……ホントによく三つもL A取れたな……俺。

「で？何が出たの？」

「私も聞きたい」

「えっ？いや、うん……あつ、出口だな」

「出口に向かって走り出す——もとい二人から逃げる俺。」

二〇二二年、十二月十四日、水曜日。

——二層クリア。

下層に降り立ち、比企谷八幡は黒猫達と出会う。

唐突だが、今俺は酒場にいる。別にそれ自体はおかしくない。俺だって酒場くらい使う。問題なのは――

「それでは、命の恩人エイトさんにカンパニー！」

「三三カンパニー!!」

「か、カンパニー……」

――他の人といえるのだ。それも、五人。

……なんでこんなことになったんだっけ？

「フツ、と。こんなもんか」

目の前にいたゴブリンに水平四撃技《ホリゾンタル・スクエア》を喰らわせると、ゴブリンは断末魔を遺して体をポリゴンへと変えた。

二〇二三年、四月八日。

このデスクゲームが始まってから約五ヶ月。俺は最前線の十層以上も下の十一層で強化素材集め、及びスキル熟練度上げをしていた。

一般的に前線プレイヤーが中堅層の狩り場を荒らすのはよくないとされている。だから目的を達した俺はさっさと帰ろうと歩いていると――。

なんともバランスの悪いパーティーが通路を少し大きいモンスターに追われながら撤退していた。

五人編成のパーティーで、前衛が盾とメイスを装備した男一人だけで、あとは短剣のみのシーフ型に、クォータースタツフを持った棍使い、長槍使いが二人だ。

あれでは後退するのもしやむ無しだろう。

……さて、どうするか。

あのまま他のMobにタゲられなければ安全に逃げ切れるだろうが、万が一ということもある。

基本他人なんてどうでもいいが、死ぬ（かもしれない）のを黙って見ているほど薄情でもない。

知らない人と話さなくてはいけないことにため息を吐きつつ声をかける。

「あ、あのー……よかつたら前衛やりましようか？」

手伝うなら、一応タンク役をやらうと思っているので普段は全く装備しないバックラーを装備する。これはクォーターポイントと呼ばれるようになって、一層ボス以来の犠牲者をだした二十五層ボス、《The Emperor》——通称皇帝のLAボーナス《シールド・オブ・エンペラー》だ。

あのボスはかなりゲームバランスを崩していた。二層のトールラス族とは違う、上から見たら十に見える本来両手で持つはずのハンマーを片手で携え、カラーリングが黒と紫の鎧を着ている——というよりは、鎧の下には肉体が存在せず、さすがは皇帝と言うべきか渴を入れするような咆哮を一定間隔でしてきて（タンブルしているときはなかったが）、耳を塞いでいなかったプレイヤーを無理矢理跪かせるユニーク技を使ってきた。

……その時は背中のマントを斬って短くすれば防御力が下がることに気づき、なんとか倒せたが……

まあ、そんな攻略組を苦しめたボスのLAは、最大強化すれば五十層まで使えるであろうトンでもない代物だったが……

二十五層のボスを思い出したり、普段は感じない左手の重みになれていると、リーダーであろう棍使いが声をかけてくる。

「すみません、お願いします。ヤバそうだったらすぐに逃げていいですから」

返答に頷き、左腰に手をやり剣を引き抜く。

その時には目の前に迫ってきた片手剣使いゴブリンのソードスキルを同じソードスキルで相殺し、すかさず後ろに下がる。

「スイッチー！」

槍使い二人と入れ替わり、違うソードスキルを喰らわせているのを後ろから見ていると、ゴブリンはHPを0にして爆散した。

それを見た俺は残心、索敵スキルで他のMobがいなか確認してから鞘に剣を収める。

「あ、あの……ありがとうございます、助けてくれて！」

「え？あ、ああ……なんなら出口まで護衛しましょうか？」

放っておけない、という訳ではないが、このパーティー編成はかなりバランスが悪い。

「心配してくれて、どうもありがとう。それじゃ、お言葉に甘えて、出口まで護衛お願いしていいですか」

あの後、何回かゴブリンと戦ったが特に問題なく撃破。主街区に戻った俺は、リーダー格のケイタというらしい棍使いに、酒場で一杯やりましょう、と言われて断ろうとしたが、結局押しきられて酒場までついてきたのだ。

酒場で騒いでいるギルド名、《月夜の黒猫団》の五人を見ながら（ゲームシステム的には）アルコールがないジュースをチビチビ飲み

ながら飯を食べていると、ケイタがおずおずと言った様子で俺のレベルを聞いてきた。

現在の俺のレベルは四十五。この層どころか最前線でも安全マージンをとれるレベルだ。

俺が正直にレベルを告げると、黒猫団の五人は声をオオツとあげた。

「じゃあなんでエイトはこんな下層にいるの?」

「あー、武器の強化素材をとり、な」

一般的なルールに乗つとるなら、上層プレイヤーが下層の狩り場を荒らすのはよくない。しかしこちとら悪のビーターなのだ。今さらどう思われようとどうでもいい。……別にルールを積極的に破る訳でもないが。

「そ、それじゃあエイトさ……君ならすぐに他のギルドに誘われちゃうと思うからさ……よかったら、うちにはいつてくれないか?」

「は……?」

ヘイユー、会って一日の人にギルドに入ってくれて、どれだけ警戒心ないんだYO♪……いや、ホントに警戒心無さすぎじゃない?

「ほら、僕ら、レベル的にはさっきのダンジョンなら問題なく狩れるはずなんだよ」

「ああ……そうだな。でも……」

ぶつちやけバランスが悪すぎだ。

「うん、君ももう解つてると思うけど、前衛できるのがテツオだけでさ。どうしても回復がおっつかなくて、じり貧になっちゃうんだよね。エイトが入ってくればずいぶん楽になるし、それに……おい、サチ、ちよつと来てよ」

ワイングラスを持ちながらこちらに来る黒髪槍使い——サチというらしい——は、ペコリと会釈してくる。

「こいつ、見てのとおりメインスキルは両手長槍なんだけど、もう一人の槍使いに比べて、まだスキル値が低いんで、今のうちに盾持ち片手剣使いに転向させようと思ってるんだ。でも、なかなか修行の時間も取れないし、片手剣の勝手もよく分からないみたいだし。よかった

ら、ちよつとコーチしてやってくれないかなあ」

「何よ、人をみそつかすみたいに」

「!!? 声がすごく雪ノ下に似てるんだが……そう言えば、ディアベルも材木座に声似てたな……顔は正反対なのに。哀れ、材木座。」

「だつてさー、この前まで後ろからチクチク敵を刺す役だったのに、急に前に出て接近戦やれなんて、おつかないよ」

「盾の陰に隠れてればいいんだって、何度言えば解るのかなあー。まったくお前は昔っから臆病すぎるんだよ」

「いやー、うん。実際怖いと思うけどね？ 敏捷極振りにしたのはタンクやりたくないからって思ったのもあるしな……」

「しかし同じギルドってだけにしては仲いいな……これも人に合わせるのが上手いリア充の為せる技なのか？」

「そんなことを思いながら二人を眺めていると、視線に気づいたケイタが照れたように言った。」

「いやー、うちのギルド、現実ではみんな同じパソコン研究会のメンバーなんだよね。特に僕とこいつは家が近所なもんだから……。あ、でも心配しないでいいよ。みんないいやつだから、エイトもすぐに仲良くなれるよ、絶対」

なるほど、つまりリア充ということですね？ 理解しました。

俺は、その誘いを――

「いや、いい。俺に関わるとロクなことにならないぞ？」

――蹴った。

その選択によって黒猫団は散り、三人だけが生き残る。

ギルド加入の話を蹴ってから約一週間。二十八層狼ヶ原でレベリングをしていたのだが、いつの間に来ていたのかキリトとクラインがなにやら話しているのが聞こえてきた（たまたま聞こえただけで盗み聞きではない）。

会話内容は……なんかクラインがキリトがギルドに入ってよかった!!的な感じだったな。

クラインよ……お前はキリトの親父か?……歳の的にそれはないか。

あれから更に一ヶ月後。俺は最前線三層下の二十七層迷宮区で探索をしていた。

理由としては、ここはトラップ多発地帯であるため、まだ開けられていないトレジャーボックスが多くあると思ったからだ。

もちろん、トラップが発動しないに越したことはないが、トラップにかかっても大丈夫なようにレベルもちゃんと上げてある。現在のレベルは五十だ。

一時間で未開封のトレジャーボックスを三つ開けて、さあ帰ろうと思ったところで大音量のアラームが鳴り響いてきた。

「な、なんだあ?」

こんな音、今回の探索中はおろか、この層が最前線だった時にも聴いたことがなかった。

音は帰り道の方から聴こえたため、一応様子を見ていこうと思い、

走り出す。

戻っていくにつれ、大きくなっていくアラームの音が聴こえる。音が一際大きくなった扉の前で立ち止まり、外からは簡単に開くのか、中から開ける暇もないほど切羽詰まっているのか知らんが、扉は簡単に開いた。

「は……う？」

そこにいたのは、五十匹にもなろうかというMobの大群に、黒猫団の四人……いや、たつた今ポリゴンになって消えたダツカーを除けば三人と、キリトだった。明らかにピンチだ。

「クツ……おい！三人とも、お互いに背中合わせになって、目の前の敵にだけ集中しろ！キリトはトラップを破壊しろ！」

指示を出しながら三連撃技《シャープ・ネイル》を繰り出し、三本の鋭い爪で引っ搔かれたようなダメージエフェクトを残して敵の一体が爆散する。が、圧倒的に手数が足りない。

「チツ……」

技後硬直をなくすかのように投剣貫通スキル《ピアスシュート》を放ち、名前の通り五匹を貫通するも、貫通するにつれ威力が落ちるので、倒せたのは二体だけ。

残った三体が黒猫団のテツオを刺す、刺す、刺す。

「うわああああ!!」

絶叫を残して、プレイヤーのHPが無くなった証であるポリゴンに体を変えた。

それでも嘆く暇は与えられず、敵は迫ってくる。キリトがトラップを破壊するまで、まだ少し掛かるだろう。

「二人とも！範囲攻撃ソードスキルを交互に繰り出せ!!技後硬直は互いのソードスキルで埋めろ!!」

単純だが、この混戦状態で出せる指示はこれくらいだ。何回も繰り返しやっていたらいずれ対処されるが、時間稼ぎにはなる。

「やあああああつ!!」

キリトも片手剣上位スキルを使って、獅子の如く、連続で敵を葬り去っている。



「うわああああッ！」

段々と敵A Iが対処してきたのか、敵にソードスキルを避けられ、逆にソードスキルをモロに喰らったササマルは、その身をポリゴンへと変えた。

「やああああー！」

発狂しているような声で叫びながら、もはや繰り出しているとも言えないようにソードスキルを乱発しているキリトから視線を外し、サチに目を向けると、十体ほどの敵に囲まれている。

「なっ……」

驚愕、からすぐに頭を切り替える。

あの状況で、一番適切な行動は――

頭で結論を出した行動をするべく、壁に走り出し跳躍。そのまま壁を蹴る。システム外スキル《壁蹴り（ウォールキック）》だ。

壁蹴りで天井スレスレの高さまで跳んだ俺だが、ここから更に《シングルシュート》を数十発も放つ。

これは《鼠》曰く、俺しか使えるのを見たことがないらしく、システム外スキル《シングルシュート・レイン》とか言ってたな。

雨のように降り注ぐ投げナイフを何発も喰らった約十体の敵は、一斉に四散する。

「ハアアアアアッ!!」

という掛け声とともに、何かが破碎される音。とともに、まだ二十体以上もいたMobが姿を消す。

生き残った……という安堵の息も吐けず、ただサチの泣き声とレベルアップのファンファーレが虚空に溶けていった。

あの後、自失杳然とした二人に着いていき、待っていたらしいケイタに何故ここに俺がいるのか、何故他の三人がいないのかの全てを聞いたケイタは、一言だけ言い放った。

『ビーターのお前たちが、僕たちに関わる資格なんてなかったんだ』と。

……考えてみればおかしな話だ。俺は深く関わってないし、キリトはそもそもビーターではない。

だが、キリトは悲壮感を、残った黒猫団の二人は喪失感を漂わせているのを見て、ケイタの言った通りなのではないか？と思ってしまう俺は、動けなかった。

あれから、更に半年。

俺はレベリングの為に、最も経験値稼ぎの効率がいい最前線から三層下の四十六層のダンジョンに来ていた。

このダンジョンは巣穴から、ぞろぞろと蟻が出てきて、その蟻は攻撃力が高くHPと防御力が低いというモンスターで、敏捷極振りの俺にとっては戦いやすい敵だ。

そんな蟻二匹をつい最近、スキル熟練度が九五〇になって会得した、単発重攻撃突進系スキル《ヴォーバルストライク》を放ち、続けて《ホリゾンタル・スクエア》を二発ずつ当てて残り二割程度だったHPを削りきる。

「ふう……」

息を吐き、鞘に剣を収める。

このダンジョンは効率はいいのだが、攻撃力が高いため囲まれた時には非常に危険で、HPを一気に持つていかれるのだ。——特に、俺

みたいな軽装プレイヤーは。

そろそろ一時間経つかと思い、出口へと歩き出す。

効率がいいので人気であるこのダンジョンは、一パーティー一時間まで、という制約があるのだ。

ダンジョンを出た俺は、新鮮な空気を吸い深呼吸。適当に手を振りどうぞ行ってくれとジェスチャーしてから、大量に手に入れた戦利品をどう処理しようか考えていると、錆びた声が聞こえた——というよりクラインだった。

「ちよつとお前らとレベル差がついちまったから、オリヤあ今日は抜けるわ。いいな、円陣を崩さないで、両隣の奴のカバーを常に意識するんだ。危なくなったら遠慮せずすぐに呼べ。女王が来たらすぐ逃げろ。いいな」

それぞれの返事を返した六、七人はぎくぎくと靴音を鳴らして歩いていった。

「……で、何の用だ？クライン」

野武士面の趣味の悪いバンダナを額に巻いている刀使いは、こつちに向き直るとニカツと笑う。……これでイケメンなら様になるのになあ……

「いや……用ってほどじゃ……いや、ううーん、ええーいメンドクセエ！」

……一人で会話を進めないで貰いたいんだが……まあ、大体言いたいことは解るけど……

「はあ……大方、俺がフラグMobを狙っているか聞きたいんだろ？」  
フラグMob。フラグMobとはクエストを進めるためのキーモンスターのことを指す。基本的に倒されてから数時間から数日でリポップするが、今回俺が指したフラグMobは、クリスマスイベントポストでも言うべき、一度倒したらリポップしないというボスだ。

当然、そのモンスターは強大な強さを誇っており、フロアボスとフィールドボスの間くらいだ。

「あ、ああ……で、どうなんだ？」

「……別に狙ってはない」

そして強大な強さを誇るボスにふさわしいアイテムが入手できるとあちこちで噂になっているのだ。

「そうか……死者蘇生アイテム、本当にあると思うか？」

「ハッ、ないだろ」

思わず嘲笑をしてしまう。

過ぎた時間は巻き戻せない、失くした物は戻ってこない、死んだ人は帰ってこないのだ。

時間は全ての薬というが、それは違う。

時間とは悲しみに慣れさせ、その悲しみを背負っているのを普通にし、知らず知らずのうちに傷を抱え込ませる物だ。

「そうか……お前エもそう思うか……実はな、キリトがそのフラグM o b狙ってたんだよ、無茶なレベリングまでしてな」

「……そうか」

そのあとクラインから聞いたキリトのレベルに驚いた。六十九。俺より五レベル上だ。

「頼む！キリトを、キリトを止めてくれねえか!？」

コイツは本当ににお人好しだ。

そんなお人好しに俺が返せる言葉は一言だけだ。

「……断る」

モミの木の所で、キリトはサチの思いを知る。

クリスマス。それは、リア充達が騒ぐとともに、イエス・キリストの誕生日である。

リア充どもは誕生日をダシにし、友達、想い人、あるいは恋人と過ごすのだろう。

だが、ちよつと待つて欲しい。誕生したときには皆独りであり、だから産まれたら悲しみの産声をあげるのだ。

古人曰く、初心忘るるべからず。

したがって、キリストの誕生日を祝うクリスマスを集団で祝うのは間違っている。

さて、俺の断りの返事を聞いて、驚き、続いて怒りの表情を浮かべて胸ぐらを掴んでくる。

「な……何でだよ!!お前エ、キリトが死んでもいいってのかよ!!」

前後にブンブンと揺らしてくるクライン。あくたくまくがくゆれくる。

「お、落ち着け」

その言葉にようやく落ち着いたクライン。

いや、あのね、クライン君?君の中での俺のイメージってどうなつてんの?

「お前の頼みは断る。だが報酬ありの依頼としてなら承けてやる」

はー、と呆れたような大きな溜め息を吐かれたんだけど……

「お前エのことが攻略プレイヤーじゃなくて、商売プレイヤーに見えるてきたぜ……そしてメンドクセエ性格だな、お前エさん」

「余計なお世話だ……で？ 依頼するのか、しないのか？」

「もちろん、させてもらおうぜ」

……クラインにはディアベルみたいに歯がキラツとするエフェクトはつかないんだな……

そしてクリスマス。

クリスマスフラグMob 《背教者ニコラス》は、三十五層迷いの森にあるクライン曰く、俺の性格みたいに捻じくれているモミの木に現れるだろうとのことだった。

クラインからの依頼はキリトを止めることだ。俺が考えた方法は二つ。

一つは蘇生アイテムなんてないと解らせ、諦めさせる。しかし、これを知ったらキリトは生きる希望をなくすだろう。

もう一つは――

と、そこまで考えたところでキリトが街区から出て、走り出す。

クライン達ギルド名《風林火山》には少しキツイかもしれない速度だろうが、なんとか着いていつてる。

疾走して十分ほどすると、迷いの森が見えてきた。

このフィールド・ダンジョンは名前の通りに踏破が難しいダンジョンだ。

無数の四角いエリアに区切られ、それぞれを結ぶポイントが入れ替わるため、地図アイテムを持っていないととても踏破なんて出来ない。

しかし、ちゃんと用意してきたのかキリトは迷わずに走り出した。どうしても避けられない戦闘を二回だけし、あらかじめマークしてい

たのであろうモミの木まで、あと一回移動すれば着くところまで迷わず走ってきた。

ここで説得するつもりなのか、風林火山の約十人は木の陰から出ていったため、俺もそれに倣う。

「……尾けていたの？」

一層の時とは違う冷たい声だった。キリトの視線が俺を貫くが、すぐにクラインに向きなおす。

「まあな。うちに追跡スキルの達人がいるんでな」

「なんで私なの？」

「お前エが全部のツリー座標の情報を買ったっていう情報を買った。オレは、こう言っちゃなんだけどよお……」

念のため、索敵スキルを発動させていると、案の定引っ掛かった奴がいた。

元々が一回しか入手できない超レアアイテム。狙うのが俺達だけな訳ないのだ。

「ストップだ二人とも。誰か……三十人くらい来る」

俺の言葉の直後。ザツザツと雪を踏む音と、ガチャガチャという金属音が聴こえてきた。

人数は約十人の風林火山の約三倍——俺が言った通り、三十人くらいだ。

三十人もの人数を見て愕然としているキリトが、クラインに声を投げかけた。

「あなた達も尾けられたみたいだね、クライン」

「……ああ、そうみてエだな……」

五十メートルほど離れた場所にいる三十人ものプレイヤーの中に、レベリングしていたダンジョン——通称アリ谷で見かけた顔もちらほらいた。

風林火山の一人がリーダーであるクラインに耳打ちをしている。

「あいつら、《聖竜連合》っす。フラグボスのためなら一時的オレンジも辞さない奴らっすよ」

《聖竜連合》。俺でも知っているギルド名だ。攻略組最強ギルドがア

スナが副団長を務める《血盟騎士団》だとしたら、《聖竜連合》は攻略組最大ギルドだ。

レベル的にいえば俺やキリトより低いと思うが、あの人数と戦って勝てるかどうか……

キリトは剣を抜こうとしているが、それを押し止めるようにクラインが叫んだ。

「くそッ！くそつたれがッ!!」

クラインはキリトよりも早く自分の獲物である刀を抜き、キリトに背中を向けたまま怒鳴る。

「行けッ!!キリト!ここはオレらが食い止める!お前は行ってボスを倒せ!だがなあ、死ぬなよ手前エ!オレの目の前で死んだら許さねエぞ、ぜってえに許さねエぞ!!」

「……………」

返事もせずに最後のワープポイントへとキリトは走っていった。

……………さて、と。

「さて、依頼主。俺は戦えばいいのか?依頼は『キリトを止めろ』だったが」

「決まってるんだろ!お前エはキリトを追え!!」

「……………解った」

俺が最後のワープポイントへと走り出した瞬間、剣と剣がぶつかる金属音を背に俺はワープした。

俺がワープした先は、クラインが言っていた捻じくれた木しかない四角いエリアだった。

俺が入った瞬間、視界端の時計が零時を指し、どこからか鈴の音が



響いてきた。

上層の床の背景である夜空に、二筋の銀色の軌跡ができ、ボンヤリとだが軌跡を描いているものの輪郭が見える。どうやら奇怪な形をしたモンスターに引かれているソリのようだ。

ソリがモミの木の真上に達した時、ソリの上にはいた人影が上空から降り立った。

雪一粒一粒が散弾のように飛び散り、思わずたじろぐが、雪が収まると人影の姿が露になる。

赤と白の絵に描いたようなサンタ服に三角帽、灰色の捻れた髭、左手の白いプレゼント袋……ここまでなら普通のサンタに見えるが、右手に持った斧に厳しい顔のせいで、夜中にプレゼントを置いていくサンタというより強盗に見える。

クリスマスイベントに合ったことを言おうとしたのだろうが、その前にキリトが一言。

「うるさいよ」

キリトと背教者ニコラスとの戦闘が始まって一時間。戦況は五分五分だった（俺は観戦）。

攻撃してHPを減らす↓相手が反撃してくるから避ける↓たまに当たる↓回復する↓また攻撃をするというサイクルが、キリトと背教者ニコラスの戦いの様子だ。

クリスマスイベントボスというだけあって、ゲージは三本で、今は一本と少し削られている。

ニコラスの攻撃パターンは、斧で攻撃、袋で攻撃、ブレスの大きく分けて三つ。その全ての対処法をキリトはもう掴んでいた。

たまにイエローゾーンになるが、未だにレッドゾーンにはなっていない。

「オイオイ……あいつホントにスゴいな……」

そんな感嘆をしている間にも攻撃は続き、ついに二本目も削りきられている。

「やああああッ!!」

掛け声とともに繰り出された《ヴォーバルストライク》はニコラスの脛に当たり絶叫。膝をつき動けなくなっている。

赤、黄緑、青など様々なカラーをしたライトエフェクトでキリトが攻めていると、最後のゲージが赤になった。

「ウ……ヴォオオオオッ!」

雄叫びの衝撃だけで周りに雪が吹き飛ぶ。顔の前に腕をやつてニコラスから目を離さずにいると、袋からなにやら取り出しているのが見えた。

ニコラスが出したのは、もう一つの斧だった。

「な……にい?」

SAOでは二本目の武器を装備するとイレギュラー装備扱いされ、必殺技ともいえるソードスキルが使えなくなる。

それはニコラスでも例外ではないようだが、目は爛々と紅く輝き、明らかに暴走状態だ。

迫りくる斧の連撃に、キリトと言えども初見では完全に避けきれず一撃モロに喰らった。キリトのHPが二割、グンと減る。

「マジかよ……」

俺が驚いたのは暴走状態のニコラスの攻撃力にもだが、もう攻撃に対処し始めてるキリトに特に驚いた。

「ハアアアアアアッ!!」

再びキリトの剣を《ヴォーバルストライク》の深紅のライトエフェクトが包み、直撃。オオオオオ……という弱々しい叫びを残してニコラスは爆散。少し遅れて地面に置かれていた頭陀袋も辺りを一瞬照らして消えていった。

「終わった、か……」

それにしてもソロでボスを倒したのには驚いた。俺も一層以来……いや、一度だけあったわ。

一人でボスを倒した黒づくめ剣士を見ると、戦利品確認……いや、蘇生アイテム確認をしていたのであろうキリトは泣き崩れてしまった。

「うわああああ……」

……俺は、クラインとは別にもう一つ以来を承けている。依頼内容はメッセンジャーだ。

ザク、ザクと足音を鳴らして歩いて近づくと、グシャグシャな顔のキリトがこちらを見てきた。

「……これで解つたろ？ 死者は、蘇りなんかしないって」

俯いていたキリトは、力なく立ち上がる。

「俺がここに居るのは、メッセンジャーを頼まれたからだ」

興味がないようにフラフラと歩き去っていくようにするが、次の一言で歩みを止めた。

「サチからだ」

俺はクラインの依頼を承ける数日前、下層でたまたまサチと出会っていた。

お互い会話も何もなかったが、サチが一言だけ言ったのだ。『キリトに届けて欲しい物がある』と。それは録音結晶だった。

『キリトへ、メリークリスマス。まず一つ謝りたいと思います。私、本当はあなたのレベルを知ってました。

未だに隠していた理由は解らないけどうれしかったよ。そんな強いキリトが毎晩毎晩大丈夫って言うてくれたお陰で生きてこれたん

だと思いません。

だけど、私は臆病で弱虫だから、いつもわたしはいつか死ぬんじゃないかって思ってた。今でもたまにそう思っちゃうんだ。

えっと……えっとね、つまり私が伝えたいのは、もし私が死んでも、君は頑張って生きて、この世界の最後を見届けて、この世界が生まれた意味、私みたいな弱虫がここに来ちやった意味、そして君と私が出会った意味を見つけてください。それだけが、私の願いです』

次に流れたサチの歌、『赤鼻のトナカイ』。その歌を聴いて、とつくにキリトは涙を流していた。それでも、サチのメッセージを一字一句も聞き漏らさないように、必死に嗚咽を抑えていた。

『最後に、私にとって、君は、暗い道の向こうでいつも私を照らしてくれた星みたいなものだったよ。じゃあね、キリト。君と会えて、一緒にいられて、ほんとによかった。

私の道を照らしてくれてありがとう。

希望を見せてくれてありがとう。

私を……守ってくれて、本当にありがとう。

じゃあね』

「う、うわあああああん!!」

投げ所を求めるように、キリトは俺に抱きついてきた。

あり得ないはずだが、涙に濡れた胸の部分が異様に熱く感じた。

十二月の冬だから、当然周りは寒い。

だけど、本当に何となくだけど、この涙の熱さだけは冷ましてはいけないと、そう思った。

三十五層の森にて、比企谷八幡は少女と出会う。

二〇二三年の二月。ただいま迷いの森を探索中であり、隊長。  
いや、別にただ探索している訳じゃないんだけどね？ちゃんと理由あるよ？

地図を頼り、二ヶ月以来の迷いの森を脱け出そうとしていると、一瞬木々の向こうから硝子が割れたようなサウンドエフェクトが聴こえた。

この場合の音は、様々な意味合いを持つ。例えば、敵を倒した時、アイテムやオブジェクトの耐久値がなくなった時、そして……プレイヤーのHPが全損した時などだ。

鍛え上げた敏捷力と軽業スキル熟練度で障害物を避け、スピードを緩めずに走る。

僅かに泣き声があった。俺は《聞き耳》スキルをとっていないため、聴カブーストはされていらないから、距離的にはもう近い。

「……いた……」

別に正義感を出して助ける訳でも、見返りを求めている訳でもない。ただミドルプレイヤーも攻略には必要な存在なのだ。

例えば、商人、情報屋、あとは……亡くなった攻略組の補充人員とかだ。

泣き声の発生源には、やはり泣いているプレイヤーがいた——それも、女プレイヤー。

SAOに来てから女の人と関わること多いな……という関係ない思考を切り替え、ソードスキルを発動させようとする。

相手は《ドラクエイプ》。三十五層最強クラスの敵で、複数のドラクエイプと戦うと、HPが少なくなると持っている壺（の中身）で回復するため、確かにソロではキツイだろう。

なるほど。大方特殊能力を知らずに挑んで返り討ちつてところか。俺もここが最前線の時、かなりキツかったしなあ……。

最前線の頃はスイッチされる前に投剣スキルで倒す、で戦ってたからなあ……

昔を思い出ししている間に発動させた《シャープ・ネイル》を一発ずつ当てると一気に爆散。未だ泣いている少女に声をかける。

「あー、そのー、大丈夫ですか？」

声をかける……が、泣き止まない。泣き止ませようにも理由が分からない。ていうか分かつてても出来ないレベル。

ふと、そこで目にはいる物があつた——少女が大事そうに抱えている尾羽……だと思う。多分、きっと、メイビー。

あれは確か……《使い魔》の心アイテム……だったか？

《使い魔》。使い魔とはプレイヤーに飼い馴ら（テイミング）されたモンスターのことを指す。

戦闘中、通常は好戦的（アクティブ）なモンスターがプレイヤーに友好的な興味を示してくるといいうイベントがごくまれに発生する。そこから上手く飼い馴らし（テイミング）に成功すると、モンスターはプレイヤーを手助けしてくれる貴重な存在になるらしい。

そして、タイムに成功した者のことを賞賛とやっかみを込めて《ビーストティマー》というらしい。

つまり、この少女はビーストティマー……だったのだろう。

泣いていること、大事そうに抱えている物、さつきから独りにしないでと言っていることから、恐らくドラクエイプに使い魔が殺されて、そのため泣いているのだろう。

さて、泣いている理由は解ったが、どっちにしても泣き止ませることは出来ないのだから、事態は何も進展していない。

そう言えば……二週間ほど前、キリトとした会話を思い出す。

く回想く

「あのー、キリトさん？いい加減無理矢理拉致って一緒に飯を食おうとするの、やめては……」

俺の切実な懇願を、清々しいような、小悪魔のような笑顔で……

「い・や・だ」

ハハハ、デスヨネ……まあ飯代自分で出してるから何も言えんが……

キリトは基本天使だが、飯に誘う時に限って多少強引だ。ついでに言うなら、こういう飯に誘ってくるときは何かしら聴いて欲しい話があるときだ。

コーヒー（砂糖とミルク大盛）を飲みつつ、キリトに訊ねる。

「で？今回はどんな話なんだ」

「うんっ！あのね、四十七層の《思い出の丘》ってダンジョンに、使い魔蘇生のアイテムがあるんだって！」

嬉々とした様子で語るキリト。だけど……

「蘇生アイテムってのはすごいけど、そもそもお前、使い魔いねえじゃん……」

「あっ」

く回想終了く

などという会話をしていたな……これだ。

「あー、その、それ、心アイテムって言うんですけど、それ残ってたら多分まだ使い魔蘇生できますよ？」

「え!？」

顔をいきなり上げるので、思わずたじろいってしまったぜよ……

「ひゃ、ひゃい。四十七層の《思い出の丘》っていうフィールドダンジョンに。名前のわりには難易度が高いんですけど、そのてっぺんに咲く花が、使い魔蘇生のアイテムらしいです……」

「ホントですか!!」

今度は立ち上がり、一步近づいてきた。俺は一步下がる。

……お、おかしいな。レベル的には俺の方が上なのに、勝てる気がしない……だと……？

肉体的距離のATフィールド（パーソナルスペース）が破られようとしたとき、少女が思い出したかのように顔を暗くし、進撃を止める……助かった……

「……四十七層……」

肩を落とし、残念そうにしている少女。様子と装備から察するにレベルが足りないのだろう。無理もない。今いる層より十二層も上なのだから。

「そつちが依頼して、それなりの報酬を払うなら別に一人で رفتてもいいんですけど……使い魔を亡くしたビーストテイマーが直接行かないと、肝心の花が咲かないらしいですし……」

少しだけ目を見開きこちらを見て微笑んで少女は言った。

「いえ……。情報だけでも、とつてもありがたいです。がんばってレベル上げすれば、いつかは……」

少女はそう言うが、現実……いや、仮想世界はそんなに甘くない。

「いや、でも三日以内に行かないと、心アイテムが形見アイテムに変わって、もう蘇生できなくなるらしいですけど……」

「そ、そんな……」

再び絶望に打ちのめされた顔。

S A Oが通常のR P Gゲームだったら層の適正レベルは層の数とⅡだが、今の状況では更に+10の上積みが必要だ。

そのセオリーに乗っとなるなら少女のレベルは三十五+10でおよそ四十五。つまり蘇生アイテムを取ろうと思ったら三日で更にレベルを十二も上げなくてはならないのだ。

またもや涙が滲んでいる少女の顔を見て溜め息をついてしまうが、乗りかかった船だ。

アイテムのトレード欄に十個以上のアイテムを入れてO Kを押す。

最前線を使うには心許ないが、そこそこ優秀なレアアイテムで、少なくとも少女が今身に着けている装備よりは高性能だろう。

「あの……」

少女が戸惑いながら聞いてくる。まあ当然だろう。

「……それで五、六レベルは底上げできるから、あとは俺が着いていけば多分大丈夫だと思います」

内心ではキモいとか思われてないよな……とか、ストーリーカーに思われてないよな……とか、これで断られたら新たな黒歴史ができちゃうな……とか思っていた。

「なんで……そこまでしてくるんですか……?」

おずおずとした、しかし若干警戒の色が入った声で訊ねてくる。

……ま、当然だな。《旨い話しには裏がある》が世界の鉄則だしな。



……この警戒心をキリトも少し持って欲しい……

それにしても、理由、理由か。

「……リアルではお兄ちゃん、だからかな？」

一番これがしっくりくる。もつとも、この少女は小町より更に年下だろうけどな……

そう言うとき少女はなぜか笑った……何で？

「あ、あの……？」

今度はこちらがおずおずと訊ねる。すると少女はスイマセン、とだけ言ったのでこちらも何も言わない。

やがて少女がペコリと頭を下げてくる。

「よろしくお願ひします。助けてもらったのに、その上こんなことまで……」

言いながらトレード欄を操作しようとしているのを見て、声を出す。

「お金は別にいららないです……どうせ、余ってた物ですし。むしろストレージが片付いてスッキリしました」

それに多少目的とも被るのだが、目的については語らない。しかしその言葉だけで十分だったのか、少女は操作をやめる。

「すいません、何から何まで……。あの、あたし、シリカっていいいます。あと、あの、敬語いいですよ？あなたの方が年上ですし……」

少女——シリカからのお許しも出たので敬語をやめるように努める。

あちらが自己紹介したので、今度はこちらの番だ。

「あ、ああ。じゃあやめさせてもらうぞ。俺は、エイトだ。しばらく、よろしく」

……俺の人生の中で、初めて嘸まずに自己紹介ができた瞬間（かもしれない）だった。

その後、俺達は俺の地図を頼りに俺はすたすたと、シリカは心アイテムを包んで守るように迷いの森を脱け出すために歩き始めた。

三十五層主街区で、二人は赤髪の槍使いに会う。

三十五層主街区は、壁が白くて屋根が赤い建物があり、どこことなく落ち着く農村だ。

俺は基本攻略をしているため、宿は最前線にとるが、さすがに解散して最前線で宿をとろうとは思わなかったため、今日はここに泊まろうと思っっている。

中層はシリカの方が詳しいため、おとなしく後ろをついて歩き、大通りから転移門広場に入ると、シリカが他のプレイヤーからパーティーの勧誘をされている。

「あ、あの……お話ありがとうございますけど……」

必死に頭を下げ、やんわりと断ろうとしている姿は、まるで上司の飲みに行こうという誘いを断ろうとしているようだ。……働きたくなえ。

いたちごつこの会話を繰り返して、こちらを見てシリカは言う。

「……しばらくこの人とパーティーを組むことになったので……」

え？ここで言います？ヘイト俺に向くじゃないですか……

案の定不満の言葉を洩らしながら胡散臭そうな顔をして俺を見てくる。

……まあ当然だわな。鎧の類は一切なくて、防具は羽織っている灰色で黒いラインがいくつか入っている革製のコートだけで、武器は刀身と柄が黒く、刃が鈍い銀色の片手剣一本だけ。更に盾を装備していない上、眼が腐っているときた……おい、最後関係ないだろ……

「おい、あんた——」

最も熱心に勧誘していた背の高い両手剣使いの男が、俺の前に立ち、見下ろす形になって口を開く。

「見ない顔だけど、抜け駆けはやめてもらいたいな。俺らはずっと前からこの子に声をかけてるんだぜ」

いや、知らんがな……

それにしても何コイツら、ロリコンなの？

「い、いや、そんなこと言われなくても……」

ヘルプ！ヘルプシリカさん！

目線を配ると思いが通じたのか会話に入ってくる。

「あの、あたしから頼んだんです、すみませんっ」

コート裾を掴まれ引つ張られる。今度メッセージ送るよーとか言っているロリコンどもは無視して、北のメインストリートに連れてこられる。

……というか、メッセージってことは、フレンド登録してるんだな……憐れなり。

やはり友達というのは迷惑なものだな……スパムメールを送ってくるとは……あれ？俺友達いないのにスマホにスパムメール来るんだけど……

なぜかスパムメールが来ることに疑問を覚えるが、妹からの愛情メールでイーブンだなと結論付けていると、シリカがこちらを見上げている。

「あの……すみません、巻き込んだじゃって」

「いや、別に」

ここでホントに勘弁してくださいよ〜とか言っただけなのは、十八年ずつと上がらないコミュニケーションスキル熟練度の持ち主である俺にもわかる。

「……人気者なんだな」

葉山とかとは違うベクトルの。こっちは宗教の教祖みたいな感じだな。

「そんなことないです。マスコット代わりに誘われているだけなんです、きつと。それなのに……あたしい気になっちゃって……一人で森を歩いて……あんなことに……」

……地雷踏んだ。

ここで「大丈夫、必ず生き返るから」なんて無責任だしな……

「そ、そうか。じゃあ何とかして生き返らせないと」

俺史上最高の慰めの言葉をかけていると、二階建ての建物が見えてきた。名前は《風見鶏亭》とある。

急にハツとしたようにシリカが俺に話しかけてくる。

「あ、エイトさん。ホームはどこに……」

「個人情報だから秘密……と言いたいが、ない」

なんかホームがないって言うのと、ホームレスみたいで虚しくなるんだが……買おうかな、ホーム。

「そうですか!」

嬉しそうに手をパン!と叩くシリカ。何?俺が家無き子なのがそんなに嬉しいの?

「このチーズケーキが結構いけるんですよ」

……甘いもの関連で思い出したけど、アスナへの借りがヤバイな……

半年ほど前に、MAXコーヒーが飲みたくなつたのだが(自分でもよくここまで我慢したと思う)、当然ない。

ならば作るしかないのだが、俺は《料理》スキルなど取っていない。

そこで白羽の矢がたったのがアスナだ。かなり熟練度を上げていたアスナに俺は頼んだ。

『俺が納得する味になるまでコーヒーを作ってくれないか』と。

普段からは考えられないが……一種の禁断症状みたいなものだったのだろう。

引き受けてくれたアスナに対し、お金を払おうとしたらいらないと言われ、またあの言葉。

『代わりにわたしの言うこと一つ聞いてね』

しぶしぶ頷き、結局完成したのは約一ヶ月後。

これでアスナの言うことを二つ聞かなければいけなくなつた俺は、血盟騎士団副団長の立場を持つアスナに、立場的にもプライベートの面でも頭が上がらないのだ。

どんな命令されるんだ……とおののいていると、シリカが固まってどこか見ている。俺も同じ方向に目線を移すと隣の建物から四、五人のプレイヤーが出てきたところだ。

そのプレイヤー達は広場に歩いていったが、最後尾にいた女プレイヤーがこちらに近づいてくる。

赤い髪に槍使い……いや、邪推が過ぎる……か？

シリカにとつて話したくない相手なのだろう。さつさと宿屋に入ろうとしている。

「あら、シリカじゃない」

しかし声を掛けられて無視するわけにもいかないのか、仕方なく立ち止まっている。

「……どうも」

「へえーえ、森から脱出できたんだ。よかったわね」

……会話から察するにどうやら元パーティーメンバーだろう。

見た目は赤い髪を……なんだ？アツプ？にしている、口紅でも塗っているのか唇も紅い。一言で言えばケバいオバサンだ。

「でも、今更帰ってきたって遅いわよ。ついさつきもうアイテムの分配は終わっちゃったわ」

「要らないって言ったはずですよ！——急ぎますから」

会話を切り上げようとするシリカだが、しつこく話し掛けてくる。

「あら？あのトカゲ、どうしちゃったの？」

トカゲ、はシリカの使い魔であったフェザーリドラのピナ（という名前らしい）を指しているのだろう。

俺は使い魔に詳しくはないが、使い魔はストレージに収納したり何処かに預けたりはできないらしいので、ティマーの近くにいないなら答えは一つだ。

「あらら、もしかしてえ……？」

底意地の悪い笑みだ。だんだんと俺が森にいた目的の相手かもしれないと疑う。

「死にました……。でもー」

キツと名前が分からないオバサンを睨んでいる。

「ピナは、絶対に生き返らせませすー」

オバサンは愉快痛快といった様子で笑っていたが、僅かに目を見開き口笛を吹く。

「へえ、てことは《思い出の丘》に行く気なんだ。でも、あんたのレベルで攻略できるの？」

「できる」

あまり口を挟みたくないが、恐らくコイツ……

「別に難易度的には不可能じゃないしな」

実際シリカのステータスはレベル＋装備の性能で五十レベルくらいあるだろう。俺が……というより、攻略組がだれか一人ついていけば不可能じゃない。

しかしオバサンは俺を値踏みするように眺め、再び嘲るような笑いをする。

「あんたもその子にたらしこまれたクチ？見たトコそんなに強そうに見えないけど」

人を見た目で判断するんじゃないやねえよ……俺はロリコン認定でもされてんのか？あん？

「心配どーも。別にたらしこまれてないし、少なくともアンタよりは強い。じゃーな、オバサン」

久しぶりにムカつく奴に会ったため、若干イラつく。クラスの上位カーストの連中が下位カーストを見るとときと同じ目だ。知らず知らずのうちに見下して、自分が上だと信じて疑わない。

しよせんそんなものは砂上の城、馬の耳に念仏、猫に小判、豚に真珠、ただのハリボテでしかないのに。

そういう風に群れていることが強いと思いついてる奴が、俺は嫌いだ。

「ま、せいぜい頑張つてね」

俺の皮肉に対する精一杯の強がりの声を背に、俺とシリカは《風見鶏亭》に入った。

自分の部屋なのに、比企谷八幡は困り果てる。

二階建ての宿屋である《風見鶏亭》は、一階がレストランで二階が客室という造りになっている。

受付にいるNPCに話し掛け、チェックインを済ませて、レストランにある椅子に座り、向かいに座っているシリカに話し掛ける。

「取り敢えず、飯にしないか？」

俺の提案にシリカが頷いたところで、NPCが飲み物を運んでくる。

グラスに注がれた飲み物を飲もうとしたが、シリカがグラスを上げていた……え？何？

「あー、その……乾杯」

俺の考えは正しかったらしく、カチンとグラス同士が当たる音が聴こえた。

赤い熱い液体（血ではない）を口に含むと、スパイスが効いた酸っぱい味が口に広がる。

成人しているクラインやエギル曰く、ホットワインに味が似ているらしいが、酒はあまり俺に合わないのかあまり美味しく感じない。

それでも飲んでるのは、この飲み物にはコップ一杯で敏捷力の最大値が＋1されるからだ。

シリカは飲み覚えがないのか、俺に訊ねてくる。

「あの、これは……？」

……別に毒なんて入ってないから安心しろ。……圈内じゃ毒にならないか。

「ん、ああ……これは《ルビー・イコール》っていうアイテムで、敏捷力の最大値を＋1してくれるんだ。ちなみに持ち込み」

これはアイテムトレードで、筋力に＋1されるアイテムとキリトと交換して手に入れたアイテムだ。

「そ、そんな貴重なもの……」

「いや、別にいい。どうせ今日飲もうと思ってたしな」

何なら一緒に飲む奴いなくて一生開けなかった可能性もある。

グラスの中の飲み物を全部飲んで一息ついたシリカが口を開く。

「……なんで……あんな意地悪言うのかな……」

恐らくシリカはこういった悪意や害意に自らが体験するのは初めてなのだろう。

「あの……シリカは大規模ネットゲーム（MMO）は……」

「初めてです」

やはりか……という言葉呑み込み続ける。

「人は誰しも仮面を被ってキャラを演じて生きている。それは現実世界でも言えることだ……それをネットゲームの世界ではロールプレイというんだろうが……それにしたって……いや、この世界には悪意が多すぎる」

アイテムやコルなどを奪いプレイヤーに危害を加えるオレンジプレイヤー。そして……殺人まで犯す自称レッドプレイヤー。

「ここは、限りなく現実に近い。負けたら死ぬデスゲームじゃなくて、ここは《異世界》なんだ。だから……俺は、ここで犯罪を犯す奴は現実でもろくでもない奴なんだと思っている」

どの口が言うんだ。俺は、人助けなどせずに自らの強化だけをしてきた男が。どちらかと言えば俺もオレンジプレイヤー寄りのくせに。

俺の言葉で重くなった空気を軽くしようと、軽い声を出す。

「……ま、俺もそんなこと言ってるけど、全然いい奴じゃないんだけど。人助けなんてろくにしたことないし」

「エイトさんは、いい人です。だって、あたしを助けてくれたじゃないですか」

いい人。俺に向かって言われるいい人は、『都合がいい人』という意味だ。

常日頃から人間観察を怠らなかった（それ以外することがなかっただけ）俺は、人が嘘を吐いているかくらいはわかる。……まあ、雪ノ下さんレベルに底が知れないとわからんが。

さすがにこの小さい少女が雪ノ下さんレベルってことは……ない、と思う。つまり、嘘を吐いていないということだ。

「……そうか。まあ、ありがとな」



……このデスゲームで、嫌が応でも人と関わらなくてはいけなかったからか、（年下限定で）感謝の言葉は言えるのだ。

そんな会話をしているうちに持つてこられたシチューと黒パン、デザートチーズケーキは、味があまり俺好みじゃなかったが、普通に旨かった。

食事を終えた頃には時刻は夜八時を過ぎていて、四十七層攻略のために早く休もうという提案が了承されたため、お互いの部屋——偶然にも俺の部屋はシリカの隣だった——に入った。

「ふう……」

……妙な展開になったものだ。まあ、目的の人物（かもしれない）と会えたからいいか……やっぱり人助けはだいじだね！

さて、見つけたのはいいがどうするか……できるなら一気に潰したが、尻尾を掴むためにモタクサしてたらシリカがパーティーを組んでいた奴らが壊滅する可能性も……

武装を解除して、紺のシャツ一枚でベッドの上で所謂『考える人』のポーズをして思案していると、ドアの方からノックが二回聴こえた。「こんな時間……いや、この状況で俺の部屋を訪ねる奴は一人しかい

ない、か」

重い腰を上げると、ベッドがギシツという音をたてる。扉を開けるとやはりシリカがいた。寝間着なのか服が替わっている。

「……何のようだ？」

ヤベツ、少しキツく聞こえたか……？

少し戸惑い顔のシリカを見てそう思う。また泣かれでもしたら、手に負えません……

「ええと、その、あの、——四十七層のこと、聞いておきたいと思って！」

ああ、そういうえば全然説明してなかったな。

「解った。階下に行くか？」

「いえ、あの——よかつたらお部屋で……」

は？ヘイユー少しは警戒心を持とうぜ。

「あつ、あの、貴重な情報を、誰かに聞かれたら大変ですし！」

「いや、まあ、それはそうだが……まあ、いいか」

話が終わつたらちやんと帰せばいいか。

シリカに椅子に座るように促し、自分はベッドに腰掛け、ウィンドウを操作して小さな小箱をオブジェクト化する。中の水晶球がランタンの光を受け光っている。

「きれい……。それは何ですか？」

「ん、ああ、これは《ミラーージュ・スフィア》っていうアイテムだ」

箱を机に置いてタップすると、メニューウィンドウが出現したので迷わずOKボタンを押す。

すると、円形のホログラフィックが出現し、四十七層がこと細やかに立体映像で映し出されている。

「うわあ……！」

地図を覗き込むシリカを傍目に説明を始める。

「ここが主街区。こっちが思い出の丘……この道を通らなきゃいけないんだが、こっちにはメンドクサイモンスターが……」

どうにかつつかえることなく説明をして、もう説明が終わりそうになる。

「この橋を渡ると、もう丘が見え……」

その時、俺の索敵スキルに引つ掛かった奴がいる。それも……ドアの前から。

「……？」

まだ気づいていないシリカに唇に人指し指を当て、『静かに』というジェスチャーをする。わかったらしく、首を上下に振っている。

さて、会話が途切れたことに不審を抱いているだろうから、ドアに近づき一気に開ける。誰もいないが、足音が聴こえた。

俺はシリカに聞こえないくらいの声で呟く。

「逃げられた、か」

むしろ好都合だ。これで尻尾を掴む必要もなくなり、四十七層にあっては現れる。

「な、何？」

「ああ……どうやら盗み聞きされていたみたいだ」

「え……で、でも、ドア越しじゃ声は聞こえないんじゃない？」

「《聞き耳》スキルが高いとその限りじゃないんだ」

何せリア充の営みを盗み聞きするのが一時期流行ったくらいだからな……

「でも、なんで立ち聞きなんか……」

「すぐにわかる」

具体的には明日。

「ま、なんにせよ、ちゃんと寝とけよ？」

言いながらホロキーボードを叩く。返事はなかったが、きっと自分の部屋に戻ったのだろう。

現在十一時。……さて、作業は終わったのだが……

「……………どうしよう」

シリカが俺のベッドで寝ているのだ。

それから更に約三十分かけて自分が寝るポジションを探し、そこで寝るのに更に一時間ほどかかり、結局寝たのは午前十二時半になってしまった。

四十七層は、比企谷八幡にとって一番来たくない場所である。

ピピピツという音で起床。現在六時半。

ブーツとする頭でベッドの方を向くと、すやすやと寝ている人……シリカがいた。

床で寝たので、必要はないが一伸びして仮想の筋肉をほぐす。

「朝飯でも買うか……」

欠伸をしながらドアを開ける。いつも昼くらいに起きているから眠い。

階下に降りて、朝食を買う。朝食は簡単なサンドイッチだ。

アイテムをストレージに収め、階段を昇っていると、また欠伸がでる。

「フワアアアアツ……ねみい」

普段は八時間は寝ているが、昨日（というより今日）は僅か六時間しか寝ていない。ネットゲやってる時にはたまに寝るのが異常に遅いときがあつたが……あつ、今もネットゲやっているような物でした。テヘペロ。

時間に縛られるからというのがギルドに入らない理由の一つだ。

……命令権でアスナがギルドに入れと言わないのが救いか……

そんなことを考えながら、部屋で装備の耐久度とポーションを確認している、時刻七時。シリカが起床する。

「……おう、おはよう」

声を掛けられて状況を把握したシリカは顔を真っ赤にする。

「いや、その……起こすのも悪いし、お前の部屋は扉が開かないし……何もしていないから安心してくれ」

俺の言葉に落ち着いてくれたシリカに提案をする。

「準備に時間がかかるだろうから、早く宿屋を出よう」

ちゃんと宿の隣の道具屋でポーション類を補充して、今回はロリコン達とエンカウントせずには転移門まで着く。

先を歩いていたシリカが転移門前で足を止める。

「……どうした?」

「あたし、四十七層の街の名前、知らないんです」

ああ、そういうことか。確かに昨日は街の名前まで説明していなかったしな。

「じゃあ俺が指定する」

確か四十七層の主街区の名前は……

「転移、フローリア」

声と同時に青い、転移していることを示すライトエフェクトが全身を包む。視界が眩しく、目を閉じて光が収まってから目を開けると四十七層主街区に着いていた。

四十七層主街区転移門広場は丸く、十字路になっていて、それ以外は花壇となっている……のだが、それ故に観光スポット……というよりはデートスポットになっていて、リア充が多いからなあ……

俺の目は——何回目かは分からないが——更に凄まじい速さで腐っていつてるだろう。……眼が腐っていくこと光の如しと言うくらい嫌な場所なのだ。

「……出来るなら来たくなかったな……」

「え? なんですか?」

「いや……フィールドに行こう」

俺とは真逆に、花を見てテンションが上がっているシリカに何でもないと思魔化し、メインストリートへと向かうべく男女二人組が多い広場を歩く。すれ違う時にリア充爆発しろと言っておくのも忘れない。

メインストリートに行っても花壇は大量にある。  
無断で全部採って下層で売ったら儲かるんじゃないか？

なんて商人でもないのがめついいことを考えつつ歩いていると、シリカが口を開く。

「あの……エイトさんの妹さんって……」

「天使」

本来タブーな現実の話に注意もせず妹を褒める俺って妹好きすぎイー……おっと、シリカが引いてるな……自重自重。

「あー、まあ、仲はいいな。あと目に入れても痛くないくらい可愛い」「へー……そうなんですか……」

自分のフォローの言葉は最後の一言で失敗した。

何とも言えない微妙な空気の中、フィールドに着く。ここから南へと歩いていけば目的地の《思い出の丘》に行ける。

「さて、探索開始……と言いたいんだが……一つ、必ず守って欲しいことがある」

「なんですか？」

さっきまでの空気とは一変、真面目な空気になったため、思わず背筋を伸ばしているシリカに忠告する。

「危なくなったら……具体的にはイエローゾーンになったら逃走準備、レッドゾーンになったら転移結晶で迷わず逃げろ」

あれだな。SAOでは某神喰いの極東支部第一部隊隊長の言葉がモットーだ。リン○ウさんは俺の心の師匠です。……リア充なのが嫌だが。

「で、でも……」

「それを守れないなら、連れていく訳にはいかない」

冷たい言い方だが、引き際を間違えて死んでいった奴なんか腐るほどいる。二十五層の《アインクラッド解放軍》——通称《軍》がいい……いや、悪い例だ。

そんな物言いでも危険だから、ということを理解してくれたのか頷くシリカ。

「そんじゃあ、行くか」

「はー」

あまり気合いが入らない出発の掛け声を俺が掛けて、俺達は思い出の丘を目指してフィールドを南へと歩き出した。

——のはいんだが。

「ぎゃ、ぎゃああああああ!?なにこれー!?き、気持ちワルーーー!!」

フィールドを南に歩き始めて数分後。めでたく?四十七層モンスターとエンカウントしたのだが……

「や、やあああ!!来ないでー」

二層の時の、どこぞの《閃光》様を思い出させる台詞だが、当然相手が違う。……て言うか閃光って二つ名恥ずかしすぎだろ……。余談だが、アスナは《閃光》の他に《攻略の鬼》、キリトは《黒の剣士》、または《黒づくめ》(ブラツキー)、血盟騎士団団長ヒースクリフは《聖騎士》という二つ名がついている。……俺にも(恥ずかしい)二つ名があるのだが、下っぱ臭が半端ない。

話が逸れたが、現在シリカはモンスター——歩く花に教わられている。

人間の腕はあろうかという茎が向日葵のような花から生えていて、先の方で枝分かれしていて触手のようになってる。

花の方も中心がパツクリと割れ、鋭い歯と赤い舌が見えている。立派な食虫植物ならぬ食人植物の出来上がりだ。

「やだっばー」

ただ一つ、閃光さんと違うところがあれば、怒りをエネルギーに変えて立ち向かっているか、逃げ惑っているかだな。



「コイツ凄く弱いし、逃げてちゃ勝てんぞ?」

「戦え!戦え!戦え!……別に人買いに誘拐も、両親を殺されてもいいだろうけど。」

「……あそこからミ○サはヤンデレ化したんだろなあ……」

「だ、だって、気持ち悪いんですううー」

「安易に俺に戦えって言うてない?嫌ですよ、気持ち悪いし。」

「そうか……なら仕方ないから帰るか?」

「俺が戦うと思ったらMAXコーヒーくらい甘い!……いや、やっぱり甘くない。だってMAXコーヒー超甘いし。」

「まあ、取り敢えず甘い考えだ。俺はそこまで年下に……あれ?俺って年下に結構甘い?」

「ええっ!?や、やります!頑張ります!」

「え?あ、ああ……」

「俺が自分を見つめ直している時にシリカが返事をしたため、呆けた声が出てしまう。」

「キエエエエー!」

「と、同時に、シリカが繰り出したソードスキルを避け、食人植物は二本の莖をシリカの両足に巻き付け、ひよいと持ち上げる。」

「わ!?!」

「ワー、アンガイコノシヨクブツツテカイリキダナー。アハハハハハ。」

「仮想の重力に従い捲れていくスカートから目を逸らし、現実……いや、仮想現実逃避をする。」

「わわわ!?!」

「バシツという音は慌ててスカートを抑えた音だろうか。」

「そういえばキリトとパーティーを組んでた時もこんなことあったな……あの時のキリトの長い髪が右へ左へと揺れるのは、軽くホラーだったわ。」

「えっ、エイトさん助けて!見ないで助けて!!」

「無理!」

「即答だ。無理に決まっている。システム外スキル『心の眼』(勝手に

作った)でも使えって言うんですか？

「こ、この……いい加減に、しろっ！」

目を逸らしているため、何が起こったのかは解らないが、ザンツという音とモンスターが爆散する音を聴いて、もう大丈夫かと思いい振り向くと、シリカが地面に着地したところだった。

シリカもこつちに振り向くや俺に訊ねてくる。

「……見ました？」

……ここで冗談でも見たなんて答えたら、社会的に死ぬな……

「……な、何を？」

実際俺は見していない。……ホントだよ？ハチマン、ウソツカナイ。

このようにして、比企谷八幡はオレンジギルドと対する。

その後、五回ほど戦闘をすると、さすがに慣れたのか逃げ回ることにはなくなった。

俺はサポート役に徹し、攻撃を防ぐ役をしている。イソギンチャクみたいな奴にぐるぐる巻きにされていた時は、俺が速攻で倒したが……

SAOでは、ダメージを与えた量に比例して、貰える経験値が増えるためシリカのレベルが一上がったようだ。

赤煉瓦の街道を歩いていると、やがて小高い丘が見えた。

「あれが思い出の丘だ」

「見たところ、分かれ道はないみたいですね？」

「ああ、けど代わりに出てくるモンスターの量が段違いみたいだから気を引き締めていくぞ」

「はい！」

花が咲き乱れる坂道へと足を踏み入れる。すると、期待を裏切らずモンスターの量が増え、凶体も大きくなっている。

しかし大体シリカの短剣のコンボワンセットで倒せるため、俺は手を出していない。

俺は戦闘をしていないため、楽々歩いていると、小川にかかった小さな橋があり、更に向こうに小高い丘がある。

「あれが思い出の丘だ」

弧を描く道はだんだん急角度になっていき、藪を潜ると——そこが丘の頂上だった。

「うわあ……！」

丘の頂上は、アニメによくでてくる幼い頃よく遊んだ花畑を絵に描いた様だ。

「やっと着いたな……」

剣を左腰のコバルトブルーの鞘に収めながら言う。

「ここに……その、花が……？」

「ああ、ちょうど真ん中のあの岩に……」

言い終わる前に駆け出したシリカを、コートと同系色、同デザインのズボンに手をつ突っ込みながら後を追う。

「え……」

何か予想外のことが起きたのか、シリカが驚きの声をあげる。

「ない……ないよ、エイトさん！」

こちらを振り向き、涙を滲ませて叫んでくる。

「んなバカな……。——いや、見てみろ」

俺の言葉に促され、再び岩の方にシリカが顔を向けると――

「あ……」

正にその時、一本の芽が生えようとしていた。二本の双葉が生え、更にその間から細い茎が伸びてくる。

植物の成長過程を写真で飛ばし飛ばし見ているかのようグングン伸びていき、やがて先端に蕾をつける。色は汚れのない白で、涙滴型をしている。

純白の蕾の先端がだんだんほころんでいき――しゃらん、と鈴の音の様な音を出して開花した。

たった今七枚の花弁を開いた純白の花は、星屑の様な光の粉を放出していて、宗教や神など全く信じていない俺でも神聖な物に見えた。

こちらを見てくるシリカに頷くと、シリカは右手を伸ばし、茎に触れる。すると茎は繊細なガラス細工の様に碎け、手の中には白い花弁だけが残る。

シリカが花の表面を触り、ネームウインドウが開く。俺は後ろに立っていたためウインドウが見えた。どうやら《ブネウマの花》というらしい。

「これで……ピナを生き返らせられるんですね」

「ああ、多分な。でもここは危険だから街に戻ってからするべきだ」

「はいー」

シリカが頷いて花をストレージに仕舞うのを横目で確認しつつ、帰り道のことを考える。

行きでは何のアクションもなかった……あるとすれば帰り道か。

索敵スキルを発動しながら歩き、弾むような足取りのシリカが小橋を渡ろうとしたとき、前に右腕をやり足を止めさせる。

「待ち伏せとは随分趣味が悪いんだな」

「え……………!?!」

そう言っ出てきたのは赤い髪に同色の唇、エナメル状の黒いプレートアーマーを装備し、十字槍を携えているシリカにとって見知った顔だ。

「ろ……ロザリアさん……!?!なんでこんなところに……!?!」

……どうやらこのオバサンはロザリアというらしい。

シリカの質問には答えず、ニタリと唇の片端を吊り上げて言った。

「アタシのハイディングを見破るなんて、なかなか高い索敵スキルね、剣士サン。あなどってたかしら?」

「ハッ、ボッチは視線に敏感なんだよ」

今度は俺の言葉を無視し、シリカの方を向く。

「その様子だと、首尾よく《ブネウマの花》をゲットできたみたいね。おめでと、シリカちゃん」

「そいつはどーも。でも花は渡さないぞ。ロザリアさん……いや、オレンジギルド《タイタンズハント》のリーダー、の方が適切か?」

唇から薄ら笑いが消え、眉がピクリと跳ね上がる。

SAO内では、盗みや傷害、最悪殺人などシステムが規定した犯罪を犯すと通常グリーンのカースオルがオレンジになる。

それ故にカースオルがオレンジのプレイヤーをオレンジプレイヤー、オレンジプレイヤーの集団をオレンジギルドという。

「え……………だって……ロザリアさんは、グリーン……………」

「オレンジギルドと一口に言っても、全員が全員オレンジな訳じゃない。街中で獲物を釣る役や情報収集する役……昨日みたいに盗み聞きをする奴だっている」

「そ……………そんな……………」

シリカは愕然としながらロザリア……オレンジギルドリーダーを見やる。

「じゃ……じゃあ、この二週間、一緒のパーティーにいたのは……」

ロザリアは再び薄ら笑いを浮かべ、言った。

「そうよオ。あのパーティーの戦力を評価するのと同時に、冒険でたっぷりお金が貯まって、おいしくなるのを待ってたの。本当なら今日にもヤツちやう予定だったんだけどー」

シリカの顔を見ながら、毒々しいほどに紅い舌でチロリと唇を舐める。

「一番楽しみな獲物だったアンタが抜けちゃうから、どうしようかと思つてたら、なんかレアアイテム取りに行くつて言うじゃない。《ブネウマの花》つて今が旬だから、とつてもいい相場なのよね。やつぱり情報収集は大事よねえー」

「……全くもつてその通りだ」

たとえば……俺が攻略組だということとかな。

「……なあ、ロザリアさん。アンタらが三十八層で襲つた《シルバーラグス》つてギルド、覚えてるか？リーダーだけが脱出した」

「……ああ、あの貧乏な連中ね」

表情筋を少しも動かさずいい放つ。……反省、罪悪感はなし、か。

「リーダーだった男はな、毎日毎日最前線で泣いていた。仇討ちしてくれる奴を探してな」

自分でも自分の声に怒気が混じっていることが解つた。そもそもこんならしくないことをしているのは、ギルドメンバーが死んだときのキリトの様を見たからだ。

「しかも殺してくれとは言わなかった。捕まえて黒鉄宮に入れてくれ、と頼んだんだ。……だから、俺はお前たちを潰しに来たんだ」

親しい者が亡くなった時の悲しみは——特にそれが理不尽なものだったら——より深い。親しい人が死んだことなどないが、それくらいは解るつもりだ。仮に現実で殺人犯を捕まえる力があつたのなら、積極的に捕まえようとも思わないが、目の前にいるなら一市民として捕まえるだろう。

「へえー、でもさ、たった二人で何が出来るの？」

言葉とともに鳴らされた指の音が合図かの様に、一、二、三……十

人ものプレイヤーが木の陰から出てきた。しかも殆どがオレンジカーソルだ。

「え、エイトさん……人数が多すぎます、脱出しないと……!」

「大丈夫だ、問題ない」

……何かフラグをたてたような気がするが、ダイジョウブ、モンダイナイ。

俺が逃げろと言うまでは転移結晶を持って待機と指示を出して、小橋の方へと歩いていく。

「エイトさん……!」

「エイト……?」

その声がフィールドに響いた途端、盗賊の一人が眩き、笑いを消して記憶を探るように眉をひそめる。

「その格好……盾なしの片手剣……。——《犠牲》(サクリファス)……?」

出たあー、下っぱ臭が半端ない恥ずかしい二つ名。

ちなみに名前の由来は、ボス戦でいつもファーストアタックをしている姿が死兵、または突撃兵に見えるかららしい(《鼠》調べ)。

「や、やばいよ、ロザリアさん。こいつベーターテスト参加者(ベーター)上りの、こ、攻略組だ……」

……ベーターっていうのはあつてるけど、ベーターテストっていうのは違うけどな。

俺が攻略組という衝撃?の事実にくをポカンと開けていたロザリアだが、数秒後にまた甲高い声で叫ぶ。

「こ、攻略組がこんなところをウロウロしている訳ないじゃない!どうせ、名前を騙って「一応言っておくけど本物だぞ」びびらせよう……」

俺の言葉に勢いがなくなつたロザリアに代わり、味方……というよりは、自分自身を鼓舞するように先頭の斧使いが叫ぶ。

「お、落ち着け!もし攻略組だとすれば、すげえ金とかアイテムとか持ってんぜ!オイシイ獲物じゃねえかよ!!」

その言葉に一斉に抜剣する盗賊達。ロザリア含め、二人のグリーンを除いた九本の剣先がこちらに向けられる。

「エイトさん……無理だよ、逃げようよ!!」

その言葉にも俺は無反応を貫き、動かず抜剣すらしない。

その行動を恐らく諦めととったであろう盗賊×9は俺を半円に囲み、一斉に突撃してくる。

「オラアアア!!」

「死ねやアアア!!」

自分のアバターに攻撃が叩き込まれる感覚がした。一、二、三、四、五、六、七、八、九発攻撃を喰らう。

「いやあああ!!」

シリカが絶叫した。

「やめてーやめてよ!!エイトさんが、し……死んじやう!!」

その声にますます笑みを深める盗賊達は気づかない。俺が退屈そうな目をして、口に嘲笑を浮かべているのに。

一分ほど攻撃を続けてようやく気づいたのか、盗賊達は戸惑いの表情をする。

「あんたらなにやってんだ!!さっさと殺しな!」

ロザリアに叱咤激励され、止めていた剣の嵐を再び再開するが、激励でシステムの数値を覆せる訳もなくさっさきの再現となる。

「お……おい、どうなってんだよコイツ……」

何か異常なものを見たような目でこちらを見てくる盗賊達。

種、というほどのものではないが種明かしをする。

「……十秒あたり五五〇。それがお前らが十秒あたりに俺に与えられるダメージの総量だ。俺のレベルは80、ヒットポイントは一二〇〇  
○……更に《自動回復》(バトルヒーリング)スキルで十秒あたり七〇  
○回復する。いくらやっても無意味だ」

いくらやっても敵わないと悟ったのか、サブリーダーであろう両手剣使いが掠れた声で言った。

「そんなの……そんなのアリかよ……。ムチャクチャじゃねえかよ……」

「そうだ」

吐き捨てる様に言う。攻略組だからレベルの大切さが解るのだ。



「たかが数字、たかがレベル……それだけでこれだけの差がつく。それがレベル制MMOなんだ」

理不尽、と言う他ないだろう。しかしレベルが高い者が強い。それがレベル制MMOの真理なのだ。

「チツ」

舌打ちが聴こえた方を向くと、ロザリアが腰から転移結晶を取り出して逃げようとしていた。

「転移——」

一気に近づき、剣を抜いて転移結晶に当ててどこかに飛ばす。目の前で怯えているロザリアを眺めながら剣を収める。そしてそのまま襟首を掴み、橋の方へと引き摺る。

「は……放せよ!!どうする気だよ畜生!!」

言葉を無視し、筋力値の有らん限りを使って盗賊の中心に投げける。ポーチを漁り、転移結晶よりも濃い青色をした結晶を取り出す。

「これは依頼主が全財産はたいて買った回廊結晶で、出口は黒鉄宮に設定されている。お前らには牢屋（ジエイル）に跳んでもらう」

地面に座り込んだまま、虚勢の笑みを浮かべロザリアが言う。

「——もし、嫌だと思ったら?」

「これはお願いじゃない。命令だ。死にたいならそうしろ」

ビキツと笑みが凍りつく。殺す、とまでいくとは思わなかったのだろう。

「……と言いたいが、冗談だ。その場合は麻痺毒を使って放り投げてやる。その赤髪オバサンみたいにな」

沈黙したのを確認して、濃紺の結晶を掲げて言う。

「コリドー・オープン」

右手の結晶が砕け散り、代わりに目の前に光の渦が出てくる。

「畜生……」

ある者は無言で、ある者は毒づきながら一人一人光の渦へと入っていき、残るは地面に胡座をかいている赤髪オバサンだけとなった。こちらを挑戦的な目で見上げてくる。

「……やりたきや、やってみなよ。グリーンのアタシに傷をつけたら、

今度はあんたがオレンジに……」

「俺もそいつは勘弁したいからな、こうさせてもらう」

赤髪オバサンに無理矢理十字槍を握らせ、俺にわざと刺させる。カーソルがオレンジになったことを確認して、俺は剣を三十五層が最前線の時に使っていたのに変え、ロザリアの右足、左足、右手、左手の順に部位破壊して胴体と頭だけになったアバターを持ち上げて、消えかかっていた光の渦に放り投げた。

未だ展開に着いていけないシリカに取り敢えず謝罪をする。

「……スマン、囲みたいな真似をして」

見たところ、自分より四、五歳年下の相手に謝るのもどうかともし見ている人がいるなら思われるのだろうが、何の説明もせずには巻き込んだのはこちらなのだから責任がある。

「街まで、送るわ」

そう言っただけで歩き出そうとしたが、一向にシリカが動き出す気配がないため声を掛ける。

「……どうした？」

「あ——足が、動かないんです」

……思わず足を滑らせて転んだ俺を笑える者はいないと思う……

三十五層主街区にある風見鶏亭に着くまで、俺達は無言だった。

二階に上がり、俺の部屋に入ると、シリカが口を開く。

「エイトさん……行っちゃうんですか……っ？」

頷いて肯定する。

「ああ、前線から五日くらい離れたからな……」

ぶっちゃけこれ以上離れると、《攻略の鬼》がうるさい。

「あ……………あたし……………」

シリカの瞳から、二つの雫が零れ落ちる。…………え？なんで泣いてんの？

「え、えーつと……………一つ、アドバイスだ。SAOには、数値よりも大事な強さがある。プレイヤー達はそれぞれ戦っているんだ。だから…………シリカも自分の戦いを見つけるんだ」

綺麗事に聞こえるかもしれないが、実際そうなのだ。攻略組はボスや強いモンスターと、情報屋は情報収集の為のクエストと、商人プレイヤーは攻略組のサポートを、中層プレイヤーは死の恐怖と…………

「はいー！」

どうにか泣き止ませた事に安堵の息を心の中で吐く。

「んじゃあ、ピナを生き返らせらせるぞ」

「はいー！」

頷き、シリカはウィンドウを操作して《ピナの心》を実体化し、テーブルに置く。続けて《ブネウマの花》も呼び出した。

シリカが花を取り、ウィンドウを消すと、こちらを見上げてくる。

「その花に溜まっている雫を、羽根に振りかけたらピナは生き返る」

「解りました……………」

シリカは目に涙を溜め、徐々に花を傾けると、やがて一粒の雫が花に触れた。

五十層ダンジョンで、危うく比企谷八幡はトレインさ  
れかける。

二〇二四年、三月三日、ひな祭りの日。

拜啓小町へ。もし小町が総武高に合格したのなら同学年ですね。  
今クリアしている層は約六割のため、生きて帰れても小町の方が先輩  
になっっちゃうと思います。

そんなお兄ちゃんが何をしているのかと言うと……

「エイトー……こつちこつち！」

……昨日初めて会った女プレイヤーとパーティーを組んで行動し  
ています。……どうしてこうなった。は、ちゃんと経緯があるから言  
わないが、パーティー組むと疲れます……

今巷で話題のフィールドがある。エギルの雑貨屋がある五十層に  
出現したダンジョン——通称《ボーナスステージ》。

どの辺がボーナスなのかと言うと、最前線が五十五層なのに対し  
て、五十層クラスの敵が出てくるダンジョンなのに、トレジャーボツ  
クス、またはモンスタードロップで出てくるアイテムが六十層クラス  
らしいのだ。しかもモンスターから取得できる経験値がそこそ多  
いらしい。

勿論五十層クラスとはいえ油断は出来ないが、最前線より弱い敵を  
倒して最前線より強いアイテムがゲットできるなら食い付かない訳  
がない。

攻略組に限らず、攻略組まであと一歩といった中層ハイレベルプレ

イヤーもその限りではない。

俺も例に洩れず、そのボーナステージ——正式名《欲望の金廊》へと足を踏み入れたという訳だ。

トレジャーボックスを開けるとミミックだった。

「うおっ！」

驚きながらも抜剣して、剣の刃でミミックの噛みつき攻撃を防ぐ。

ミミックが剣から口を放すことはなく、このままだと剣の耐久値が減るため剣を思いつき振り、上空へと放り投げる。

落ちてくるタイミングに合わせて、体術基本スキル《幻月》……要はサマーソルトキックでもう一度浮かせ、今度は《バーチカル》を放つ。  
「グギイイイイ！」

どちらも下位スキルの為、合計三割ほどしか減らなかったが、ミミックは吹き飛ばされて隙が出来る。距離約三メートル、体勢はまだ整っていない。そう判断し、《ヴォーバルストライク》で一気に距離を詰め、弱点……口の中に剣を刺すと、ミミックはHPが全損、ポリゴンになった。

「だあーっ、疲れた……」

ダンジョンに籠って四時間。アイテム容量もそろそろ限界が近いし、もう帰ろっかなーと思っていた時、地響きの様な足音が聴こえた。  
「……な、なんだ……？」

だんだんと近づいてくる足音に怯えながら、戦闘になった時の為に剣を構えておく。

そうやって走ってきたのは——女の子だった。……しかも、後ろに大量のモンスターを連れて。……え？なにあれ、モンスタートレイン

なの？

「あんたも逃げて！早く！」

すれ違い様にモンスターを引き連れてきた女プレイヤーが言うてくる。

「おいおいおいおい……マジか……」

俺もモンスターを引き連れてきた女プレイヤーと同じ方向に走って逃げる。

女プレイヤーも敏捷寄りのビルドなのか、なかなか追い付けなかったが、それでも俺の方が速いのでいずれ追い付いた。

「そんじゃあな」

と横に並んだ時に囁く。

「えっ、ちよ、ちよつとく〜！」

許せ。そもそもお前がタゲられたんだからな。

あばよー、とつつあーんと言い出しそうな勢いでグングン距離を広げていき前を見ると、安全地帯があったため滑り込むように突入して一息吐く。

そして数秒（必要ないが）息を整えていると、背中に衝撃。……そう言えば、コイツも走ってきたの忘れてたわ……

後ろを向いて走っていたためか、俺に激突して倒れ込んでいるという状況が理解できていないようで動かない。女子特有の膨らみが背中を、甘い香りが鼻を襲う。

ふええ……柔らかくていい臭いだよお……

男としての本能が刺激されるが、このままでは《ハラスメント倫理コード》に《不適切な接触》とされ、最悪黒鉄宮の牢獄送りにさせる。それは避けたい。

プロレスでギブアップを示しているように床をバンバン叩くと、やっと上から退いてくれた。

「はー、重かつ……」

ヤバイと思つて口をつぐんだが、遅かった。恐らく怒りと羞恥で顔を真っ赤にした謎の女は、すでに平手打ちの体勢に入っていて……バチンツ！と寧ろ心地いい音が鳴った。グラグラ揺れる視界の中で、お

前がモンスタートレインしようとしたのが悪いんじゃないか？と思った。

HPが減らないギリギリの強さで叩けるのは、女子特有のシステム外スキルなのか？

そんなことを考えながら、俺は目の前の少女と向き合っていた。しかし少女は口を一向に開かない。そんな空気の中で俺が喋りかけられる訳もなく、必然的に安全地帯は沈黙に包まれる。

少女は全身の装備の殆どが青と白で、肩から胸にかけての肌が露出しているが、肩は青い短いマントの様なものを、着ている？羽織っている？のどっちかは解らないが装備していて、僅かながら隠れている。……それでもかなり刺激的な格好だが。

武器は短剣の中でもソードブレイカーと呼ばれる物で、一目見ただけで上質な業物だと解った。考えてみれば当然の事である。最前線から僅か五層下のダンジョンでも通用する物なのだから。

……と、冷静に分析しているつもりなのだが……空気が重い。

別にコイツに付き合う必要もないかと思い、一応忠告してから帰ろうとする。

「……一応言っておくが、きつきみみたいな状況になったなら転移結晶を使った方がいい。万が一という事もあるし、MPKに間違われるぞ」

実際俺もPKかと思ったわ。

「う……それはその……ゴメンナサイ……」

シユンとする青装備の女。やめて！何か罪悪感ができちゃうから！

「う……うん、まあ、以後気をつけたらいいと思うぞ？そんなじゃあ

「待って」……」

何でしょうか。俺なんかした？

「……な、なんだ？」

「あなたたつてき、攻略組？」

……どうしよう、素直に言うべきか？

「まあ、そうだな」

下っぱの下っぱの下っぱみたいなものだけだな。

「そうなんだ！」

急に目をキラキラ輝かせる青装備の女。……俺には一生出来ない芸当だぜ……

「それならさ、私の護衛をしてくれない？」

「は？」

何言ってるの、この娘？ 出会って一日どころか一時間も経ってないよ？

「順を追って説明するとね、私宝探しが好きなの」

「はあ……」

全く話が見えん。

「でね。ここって《ポーナステージ》って呼ばれるからには、たくさんのお宝があると思うんだ」

「それは、まあ、そうだな」

実際中にはたくさんのお宝があるんだけど、複数相手じゃ思ったより

キツくて……だから、強い護衛の人が欲しいんだ」

「なるほど……」

要は、宝探しをしたいけど一人じゃキツイから手伝って、ということだ。

「……で、その依頼を承けた場合のメリットは？」

「ここって錠があるトレジャーボックスが多いでしょ？ だから、その中身を半分でどう？」

「ふむ……」

段々と話に引き込まれていくのを自覚しながら考える。



提案自体は悪くない。俺が容量が限界になるのに四時間かかったのも、錠があるトレジャーボックスが多かったからというのが一番の理由だ。

それに、錠があるトレジャーボックスは《開錠》スキルを取っていないと開けられないため、レアアイテムが入っている可能性も大きい。

それに——期待爛々の目でこちらを見ている少女の誘いを断つたら……うん、確実にヤバイな。

「……解った。けど、明日からでいいか？ちなみに、期限は？」

「ありがとう！全然OKだよ。期限は明日までだけでいいよ！」

了承の返事をする、嬉しそうに感謝の言葉を述べ、ウインドウを操作してパーティー申請を受託する。《P h i l i a》……フィリア、か？

「俺はエイトだ。読みは……フィリア、でいいのか？」

「うん、合ってるよ。改めまして、フィリアです。よろしくね、エイト」

五十層主街区アルゲードは、まるで迷路の様な街である。

二〇二四年、三月三日。

朝起きると、キリトから《フレンド・メツセージ》、フィリアから《インスタント・メツセージ》が来ているとあったため、ウインドウを開いてメツセージを見る。

フレンド・メツセージとインスタント・メツセージの違いは、フレンド・メツセージは、受信先がフレンド、ギルドメンバー、結婚相手だったら送れて、迷宮区にいない限りはどの層からでも届くが、インスタント・メツセージは名前を知っていたら送れるが、同じ層にいないと届かないのだ。

キリトからの一緒に攻略しようという誘いに即座にOKと返事をしようとしたが、昨日のことを思い出し、一言謝っておいて断る。

フィリアからは……午前九時に、五十層主街区《アルゲード》転移門広場に集合、か。

了解と返信し、時計を見る。八時丁度。……一時間って二度寝するには短いし、もて余すには長い時間だよな……

暇なので、メンテをしたばかりの装備やアイテムを確認していると、あることに気づく。

……あ、ヤベ。昨日ダンジョンから出たままで、何の整理もしてねえ。

どこで売ろうか……エギル……はダメだな。あいつアコギな商売しやがるし。となると……普通にNPCショップか。

昨日取った中に六十層クラスの装備やらアイテムやらはなかったが、五十層クラスの物ならドロップしたためそれなりの値段は付くだろうと思いながら、まだ眠気が抜けない体で宿屋を出た。

「いらつしやいませ」

あまり抑揚がないNPCの、来店した時にかけられるを言葉を聞きながら俺は入店する。

それから看板娘らしきNPCに話し掛け、アイテムを売却。そこそこの値段となった。なったのだが……

「……迷った……」

アルゲードは脇道や裏道、分かれ道など、道が入り組んでいるため、迷うのだ。

ここが最前線だった時は、もう少し造りが解ったのだが……今は懇意にしていた今のNPCショップ、エギルの店、そして転移門広場しか解らない……のだが、ここから転移門広場には行ったことが数える程しかないため、すっかり忘れている。時刻は八時五十四分。

転移結晶を使えば転移門広場まで行けるが、こんなことで高価な転移結晶を使うのはもったいなすぎる。

となると……

《隠蔽》スキルを発動させ、横幅三メートルくらいの裏道に入る。

軽く助走をつけ、跳躍。最高到達点に至ってから右の壁を思いつき蹴る。すると左の壁が近づいてくるので、さつきと左右対称に近い体勢で蹴る。

……マ○オみたいだな。何てことを考えながら右↓左↓右↓左……と交互に蹴り、どんどん壁を上っていく。

十メートルくらい上ったところで左の建物の天辺に着き、壁がなくなる。最後に右の壁を蹴り、着地。こうすることで普通に階段を上るより早いのだ。

辺りを見回し高い建物に飛びうつる。隠蔽スキルを発動していなかったら、どこの敏捷力自慢だよとか言われていただろう。

高いところから見下ろすのは、野蛮的だが有効な手段だ。事実、転移門広場を見つけた。……南西か。

広場を視界から外さないようにピョンピョン建物から建物へと飛びうつる。距離約百メートル、時刻は八時五十九分。

最後にこの建物から飛び降りればいいのだが……超怖い。

恐怖心を乗り越え、なんとか飛び降りる。足から全身に衝撃。

心なしかビリビリする体を動かし、辺りを見回す。フィリアーフィリアはつと。いた。

転移門の右斜め前あたりにいたので近づいていくが、一向に気づく気配がない。

遂には目の前まで着て、顔の前で手を振るがまだ気づかない。

「おーい?」

なぜか疑問系になってしまった……

「ヒッ!」

……あれ、まだ気づかないの?……あつ、隠蔽消すの忘れてたわ。

八幡ウツカリ、テヘペロ。

「うわあつ!」

今度は驚かれて尻餅までついている。いや、そりゃいきなり目の前に現れたら驚くだろうけど、尻餅つくほどか?

いくら隠蔽スキル熟練度が最高の一〇〇〇だとしても、ここまで気づかないものなのだろうか。

どうやらステルスヒッキーは仮想世界でも健在のようである。

「え、え、え、え、エイト!い、いつからそこに?」

「いや……ついさっきだが……」

驚きすぎだろ……思わず『餅つけ!』って言っちゃうところだったわ。

「な、な、な、何で声掛けなかったのよ!」

「ごめんなさい、目の前でガン見してました……とは言えずに、適当にでつち上げる。」

「いや、掛けたぞ?おーい?つて」

「え?あれってエイトだったの?」

「ああ、まあな……それよりそろそろ行かないか?」

待ち合わせ時刻から十三分経っている。これ以上だらだら喋る必

要もない。……というか、会話に発展がない。

リア充の『それマジないわー』『それな』『あーあるわー』の会話くらいにはない。あるのかないのかハッキリしろよ。

「うん、そうだね。そろそろ行くっか」

道中、フィリアが訊いてきた。

「ねえ、エイト。……って、何で後ろにいるの？……まあいいや、で、攻略組って、どうなの？」

「どうってどういうことだ？」

質問に質問で返したが、何を指しているのか全く判らないのでしようがない。

「うーん、なんだろう、雰囲気とか……思想とかかな」

「俺は攻略組、って言っても下っぱみたいなものだから、詳しいことは分からんが、雰囲気は……そもそもボス戦以外に普段組んでるパーティー以外と共闘することがないから、余程険悪な空気じゃない限り、あつてないようなもんだな」

ふーん、と適当に流しているような返事をするフィリア。

「思想は……三大ギルドを例にあげると、『血名騎士団』は有能なプレイヤーの勧誘にゲームクリアだな」

なんせあそこの副団長様は攻略の鬼だからな……

その攻略の鬼に命令権を二回も握られている俺は、会うたびに冷や汗ダラダラです。

「で、『聖竜連合』は効率のいい狩り場の独占、レアアイテムの強奪とかいい噂は聞かないが、まあ最大ギルドで居続けるためだろうな。

最後に『アインクラッド解放軍』だが……あそこは二十五層で痛手

を受けてからは前線に出てこなくなったからな……今は、一層のはじまりの街を根城にして、自軍強化つてところじゃないか?」

軍は恐らくもう一度最前線に戻ってくるだろう。

根拠は信頼……などという綺麗に見えるがウソっぱちなものではなく、単純に忘れられないだろうからだ。

攻略組と呼ばれ、畏怖され、尊敬され、羨望の眼差しを向けられ……そんな快感が忘れられない、だから戻ってくるだろうと思うのだ。

それは軍だけに限らず、攻略組……いや、S A Oに限らず、ネトゲのトッププレイヤー殆どのモチベーションと言ってもいい。

俺もレア武器をゲットして自慢できるとか思つてテンションを上げていたところを小町に見られて引かれ、更には自慢する相手もないことに気づき、軽くネトゲが嫌いになった……あれ?何か快感得るところか鬱になつてね?

うん、まあ、キリト曰くそうらしいのだ。

「攻略組と言えばお前、昨日俺が攻略組だと知った瞬間飛び付いてきたのは軽く引いたぞ……」

「うっ、あれはその……テンション上がったやつ……」

「ただ宝探し好きなんだよ……と心の中で呟いていると、目的のダンジョン……の一步手前まできた。」

昨日の《欲望の金廊》に行くためには、この洞窟……《欲望の金窟》の最奥にあるデカイ転移結晶から行かなくてはならない。

転移結晶は四角錐の底辺をくつつけた様な形をしていて、金色の台座に収まっているのだ。

初めて見たとき——といつても昨日だが——は、何これ?ラ○ユタにあるデカイ飛行石?とか思つたものだ。

ラピ○タつて異常に放送数多いよな……ゲドやれ、ゲド。あれ面白かつたから。

横を見ると、まだ見ぬ宝に目を輝かせているファイリアがいた。お前もうワ○ピース探してこい。そして海賊王になってこい。

「それじゃあ、探索開始ね!」

走り出しそうなファイリアが急かす様に言ってきたため、俺達は金が

沢山埋まっている（といっても持ち帰れないただのオブジェクトだが）洞窟内へと足を踏み入れた。

仕事が終わったと思っても、まだまだ仕事は終わらない。

既にマッピングを完了していた金窟を踏破し、金廊に足を踏み入れたのだが……フィリアに振り回されて疲れました。

いや、だって、トレジャーボックス見つけたら走っていくんだぞ？ 護衛の身としては辛いことこの上ない。

「ごめんなさい……ついテンション上がっちゃって……」  
それ聞いた。

「いや、別にそれはいいが、一言言ってくれ。護衛がしづらい」  
いきなりダツシユされると驚いちゃうし。

「はい……」  
フィリアも反省はしている様なので、これ以上言う必要もあるまい。

「いや、まあ、反省してるならいいんだが……ッ！止まれ」  
「え？」

右手を出して静止させる。発動させていた《索敵》スキルで、モンスターが近くにいるのを感知したのだ。

このダンジョンでは、ゴ布林やコボルド、オークやトールラスなどの所謂亜人系M o bが多い。例外はトレジャーボックスに擬装しているミミックくらいである（俺がヒヤヒヤする原因もここにある）。

今回はトールラスであるようだ。名前は《バーサク・ブル・アックス》……暴れる牛の斧、と言ったところだろうか。

「いいか？一応確認しておくぞ。俺達は二人とも敏捷寄りのビルドだ。片手武器なら兎も角、五十層クラスのM o bの両手武器は筋力値が足りずにパライユすることが出来ない。だから……」

「防御方法は基本回避、危なかつたら武器で受け流して、片方のHPが危なくなったらソードスキルで攻撃してタゲをとる、だよな？」

すっかり覚えていたみたいだ。俺はああ、と答える。

「んじや、行くぞ」



「うん！」

今回の相手はトールラス……牛人間で、禍々しい、鹿のように捻れた角と、褐色の顔に鼻についている金色の輪。顔と同色の筋骨隆々の体に、黄色の腰巻きと、見るからに攻撃力が高そうだ。

フィリアは飛び出し、俺はダガーの投擲体勢に入る。

投剣スキル上位剣技《ミーンティア・シュート》。このスキルは敏捷力が高ければ高い程威力が上がるため、かなりお気に入りだ。

ただし、欠点もある。威力、速度という点では文句はないが、速度が速すぎるがためか（そもそもS A Oに現実の物理法則が当てはまるのか解らないが）、投擲する物自体がそれなりに性能が高くないと敵に着弾する前に燃え尽きてしまうのだ（正確には耐久値がなくなる）。

今は最前線のダガーを使っているため大丈夫だったが、最前線がどんどん上になるにつれて俺のレベルも上がり、それに伴い敏捷力もどんどん上がる。敏捷力に比例してミーンティア・シュートの威力と速度は上がるので、装備と同様、投擲武器も更新しなくてはならない。

欠点が多い流星は、偶然後ろを向いた牛の後頭部にクリーンヒット。

バックアタックだからか、いつもより多いダメージ量にラッキーと思っていると、牛がこちらを振り向くが、既にフィリアが懐に潜り込んでいる。

牛男の腹に四連撃スキル（名前は知らない）を喰らわせる。

牛男の腹には赤い点が四つついており、線で繋がれば正方形になるようなどころにあつた。

「スイッチー！」

技後硬直から立ち直ったフィリアがバックステップ。《ヴォーバルストライク》を発動させ、入れ替わるように前へと突進する。

俺のヴォーバルストライクは、ニメートル程もある巨大な体を持つ牛男の胸にヒット、攻撃が当たっても突進の勢いは緩まず、牛男を吹っ飛ばす。

「ブルモオッ!!」

情けない声を出して吹き飛んでいく牛男を硬直体勢のまま眺め、再

びスイッチする。

フィリアは今度は短剣の二連撃スキルで牛男を攻撃、HPを余すことなく0にした。

「ふう……」

攻撃を喰らうどころかさせてもいないから当然HPバーは減っていない筈だが、つい戦闘後には確認してしまう。これは一年以上の歳月で染み付いた、謂わば癖みたいなものだから仕方ない。

見ると、フィリアが片手を挙げている……何で？

「ハイタッチだよ、ハイタッチ」

「ああ……」

触れた瞬間「菌がついた!」とか言わないよな……

ズボンのポケットから右手を出してハイタッチ、

鈍い黄金色に輝く回廊にパァン!と手と手がぶつかる音がした。

「よし、じゃあどんどん行こう!」

「え……ゆつくりがいいです……」

「でも、まだ六十層クラスの武器出てないよ?」

「そうなんだけどな……」

そうなのだ。今までにドロップしたのはせいぜい最前線クラス。これでも充分強いのだが、六十層クラスの物はまだ出てない。

そもそも情報がデマだったんじゃないかと思いついた時、前方に三メートルはあるかという巨大な二枚扉があるのが目に入った。

「なんだろう……あれ」

「普通に考えたらボス部屋……か?」

どうする?という視線をフィリアが向けてくる。

「……ここまでもう一度来るのもめんどくさそうだし、覗くだけ覗いてみるか?」

「そうだね」

別にやる必要はないのだが、緊張から抜き足差し足忍び足になってしまう。

扉に手をあて、軽く押すとゴゴゴゴゴゴ……という音をたて、ゆつくりと開いていく。

案の定ボス部屋だったそうで、奥に巨大なシルエットが見えた。転移結晶を手に持ちながら部屋に入ると――広い。二十メートル四方くらいだろうか。

壁にある松明が奥へと火が灯っていくのは、一層のコボルドロード戦を思い出させる。

と、その時シルエットが動いた。壁に立て掛けてあった装飾が派手な金色の両手剣を手に取ると、こちらにノシノシと近づいてくる。

目を凝らしカーソルを合わせ、名前とHPバーを見る。HPバーは二本、名前は……《ザ・デューク・オブ・デミヒューマン》とあった。顔は牛で角もついている。防具はオークが着ているような物で、リザードマンの様な尻尾に、全身鱗で覆われていて体色はゴブリンの様な緑色と色々な亜人が混ざっていて、デュークと言うよりただの出来損ないに見える。

「気持ち悪……」

「……同感だ……」

人体実験でもしたのか？と言いたくなる容貌である。怖いものと怖いものを足せば更に怖くなると思っている様なスタッフが創ったんじゃないだろうか。

「ブルワアアアアアッー!!」

迫力はあるが、イマイチカツコ悪い咆哮をしてこちらに突っ込んでくる。

お互い左右に分かれて回避、振り向いて通常攻撃をするが鱗があるためかそこまで効かない。

「チッ」

益々コボルドロード戦に似てきた展開だ。こうなるとメインアタッカーはフィリアになる。

「フィリアー！コイツにはあまりダメージが通らない！だから、お前の短剣スキルを使ってデバフをかけるぞ！」

「了解！」

短剣スキルの強みは手数もさることながら、様々なデバフにかけられるという付随効果があることだ。

今回は麻痺などの動きを止めるデバフはあまり意味がない。効果的なのは毒や出血といった持続ダメージを与えられるデバフだ。

フィリアもそれは理解しているのか、五連撃スキルを亜人王に喰らわせる毒になった。

技後硬直で動けないフィリアに、亜人王は両手剣を降り下ろすが、ただの通常攻撃なので俺のソードスキルで相殺をする。

ノックバックした亜人王に技後硬直が解けたフィリアは、今度は四連撃スキルを叩き込み、出血状態にする。これで二重デバフだ。

……どうやらこのボスは防御力は高いがデバフレジストが低いようだ。

ボスのソードスキルは避け、通常攻撃は俺が相殺し、出来た隙でフィリアがソードスキルを叩き込み、デバフをかけるという戦闘を三十分ほどしていると、俺のヴォーバルストライクがクリティカルヒットし、亜人王は爆散した。視界にラストアタック・ボーナスを取得したとのメッセージが映る。

またもやフィリアが手を挙げているためハイタッチ、フィリアがラストアタック何だった？と訊いてきたのでオブジェクト化する。

アイテム名は《ダークスカイ・ネックレス》というらしい。見た目は暗い空の色の宝石が、紺色の金属に埋まっている様にはまっている。

……第一印象が灼○のシャナのアラス○ールじゃね？って思ったのは仕方ないだろう。……形状がすごい似てるし。

「うわあ……綺麗……！」

男である俺には全く解らないが、フィリアにとっては綺麗らしい。

「あー、その、なんだ、気に入ったならやるぞ?」

「えっ! いいよ、悪いし……」

わざとらしく『私これ欲しい!』とか言っているのなら俺もやらんが、純粹に欲しそうだからと俺は別にいらんからな。

「……別に俺はいらんから、取っとけ」

「……じゃあ、貰うね? その……ありがとう」

「……おう」

そうやってはにかまれると、妙な気恥ずかしさがする。

そういえば身につけるプレゼントは女子的に重いと小町から言われたのを思い出したが、フィリアが喜んでいたので大丈夫だろう。

……多分。

「……さて、このダンジョンも最奥まで来たし、探索終了、か?」

ラストアタックが六十層クラスの装備かと思っただが、性能を確認したところ、あれも最前線クラスだった。

結局六十層クラスの装備なかったなーと思っていると、フィリアから声が掛けられる。

「待って、エイト。あれ……何かな?」

「あ?」

フィリアが指差す方を向くと、何やら光る物体が。目を凝らして見ると、ボス撃破が出現のキーだったのか、デカイ転移結晶があった。

「マジか……」

どうやら、まだまだ俺達の探索は終わらないようである。

こうして比企谷八幡は穴に落ち、フィリアはレッドプレイヤーと会合する。

ダンジョンに設置されていたデカイ転移結晶で転移すると、さつきまでとは打って変わって暗いダンジョンだった。

ダンジョン名は《虚ろなる者達の修練場》というらしく、あちこちに武器のオブジェクトが立て掛けてある。

「なんか……薄気味悪いね」

「……そうだな」

明かりは頼りなさげな壁にある松明だけで、周りは石でできている壁や床のせいか、閉塞感がある。アンデット系やアストラル系モンスターが出てきそうである。

という俺の予想は、見事に外れた。

黒い鎧を着ている——と言うより中身がないので、黒い鎧そのものが片手剣スキル《スラント》を放ってくる。

「セ……アアアッ！」

掛け声とともに《バーチカル・アーク》を繰り出し、一撃目でスラントを相殺する——のではなく、攻撃の軌道を逸らす。続く二撃目の斬り上げは鎧に当たる。

初期ソードスキルの撃ち合いは俺の勝ち、更にフィリアが既に毒にしていたため、相手のHPバーが一定量減る。

「めんどくさいね……」

「ああ、せめて誰か筋力値が高い奴を連れてくるべきだったな……」

真つ先に思い付いたのはフレンド（といってもキリト、エギル、クライン、《鼠》、そしてなぜか副团长殿の五人しかいない）で一番筋力値が高いエギルだが、アイツ店があるしなあ……

次に思い浮かんだのはキリト。……そうじゃん、キリト連れてくれば俺は天使と行動でき、攻略も進む。バカ！俺のバカ！

このやるせなさをどこにぶつければいいのか考えていると、目の前に丁度いい鎧騎士ターゲットが。

完璧な八つ当たりだが、片手剣最上位十連撃スキル《ノヴァ・アセンション》を左右の手足に二発ずつ、胸に一発、最後に頭に一発喰らわせると鎧騎士は硝子片へと姿を変えた。

「……そんな凄い技あるなら、最初から使ってよー！」

い、いや、切り札は最後までとっておく物なんでせうよ？

あの後、あの切り札ノヴァ・アセンションを見せてしまったせいで、戦闘で前衛に……働きたくないでござる。

「あの……フィリアさん、そろそろ前衛を替わっては……」

「うーん、じゃあ次の戦闘が終わったら交代ね？」

フィリアも怒っている訳ではないので了承してくれる。

それにしても、『次終わったら』という言葉で人にやる気を出させようとするフィリア、恐ろしい子！

……了承してくれたのは嬉しいんだが、俺達は今、巨大な二枚扉の前にあります。

「あの……ところでフィリアさん？次の戦闘というのは……」

「ん？勿論ボス戦だけど？」

いや、そんな薄暗いダンジョンを照らすような明るい笑顔をされても……

「じゃあ、行こう！」

ネパールランドへ！……じゃなくて、ボス部屋へ……

フィリアが扉を開ける。開けた後、また直ぐにシルエツトが見えるかと思っただが、何も無い。

「……あれ？」

拍子抜け、といったような声を出すフィリアとは正反対に、俺は安堵の息を吐く。前衛しなくて済んだ……

ボス部屋（らしきもの）は、俺達が入ってきた扉の他にも左右に扉があり、奥には特に何も無い。

「今度こそ終点、か？」

「うん、そうかもね」

これで終点なら、結局六十層クラスの装備があるという噂はデマとということになる。

「……ん？エイト、あれなにかな？」

「……何だよ？」

また転移結晶で、まだダンジョンが続くようなら、流石にエスケープしよう……という俺の決意は無駄だった。

トレジャーボックスだ。終点にあるということは、あれが噂の六十層クラス装備なのかもしれない。

途端、フィリアの目がキラキラと輝く。

「エイト、あれ開けていい？いいよね？」

「お、おう……いいんじゃないか？」

許可を出した瞬間、フィリアが瞬間移動をしたかのようにすっ飛んでいき、早速開錠作業に移る。

修煉場っていうのは雰囲気的に解るけど、結局虚ろなる者達ってどういうことだったんだろうなーと考えつつ、フィリアが作業している姿を眺める。

三十秒ほどカチャカチャやっている、カチツという音が辺りに広がった。

開いたのか？と訊こうとしたら、浮遊感が襲ってくる。おそろおそろ下を見ると、石畳がなく、下が見えない暗闇——明らかに、落ちて



いる。

「えっ？うお……ワアアアアアアアアアア！」

「エイト……ツ！」

暗い、底無し沼のような暗闇に、俺の姿は完全に消えた。

side out

フィリアside

「そんな……」

私のせいだ、私の……

既に閉じてしまった落とし穴に手を伸ばすが、当然エイトには届かない。

「Wow……偶然来たダンジョンだが、とんだサプライズがあったもんだ……」

「ツ！誰！」

反射的に声がした方へ向くと、黒ポンチョの長身な男に、髑髏のようなマスクを被っている男、頭陀袋の様なものを被っている男の三人がいた。

コイツらは……

「アンタら……ラフィン・コフィン笑う棺桶……！」

殺人ギルド《ラフィン・コフィン》。

結成されたのはSAO開始から約一年後。それまではソロ、あるいは少人数パーティーを大人数で襲っていただけの一部のオレンジプレイヤー達が、ある過激な思想のもと集まって出来たギルドだ。

その思想とはつまり——《アインクラッドデスゲームならば殺して当然》。

現代日本では許されるはずがない殺人が、この世界なら可能になる。なぜなら、現実世界の自分の体はナーヴギアによって囚われていて、無意識状態だからだ。

日本国の法律では、プレイヤーを殺したのはナーヴギアと計画者たる茅場晶彦であって、HPバーを減らしたプレイヤーではない。

——ならば殺そう。ゲームを愉しもう。それは全プレイヤーに与えられた権利なのだから。

そんな考えを持つ奴等を前にして、警戒せずにはいられない。私は短剣を構えた。

しかし武器を向けても男達の態度は変わらなかった。

「クク、そんなに、構える必要は、ない。同じ、人殺し同士、仲良く、やろうじゃないか」

髑髏マスクの男——《赤眼のザザ》が、しゅうしゅうと耳障りな音をたてて言ってくる。

「同じ……」

違う、そんなわけない。でも……エイトがそう思ってたなら？ 私を人殺しだと思ってたなら？

そんな嫌な考えが頭をよぎる。

「だって、そうでしょー？ トレジャーボックス開けようとしてえー、罠にかけてー、おめでとう！ これで君もレッドの仲間入り！」

子供のような無邪気な声だが、おぞましい内容を話している頭陀袋の男——《ジョニー・ブラック》は、嬉々とした様子で言ってくる。

「そういうことだ。一度この道を来たらもうもう引き返せねえ……だが、No problem、問題ない……なにせここは『ゲーム』だから」

そう言ったのは、ラフィン・コフィンの首領《P O H》。ポンチョの中で口を歪ませ、静かに笑い声をあげる。それに同調するかのよう配下の二人も笑い声をあげている。

——狂ってる。

思うのはそれだけだ。そして、故意的にせよ、故意的じゃないにせよ、アイツらと同じようにエイトを殺した私も同じ……？

直接死亡確認をした訳ではないが、あの高さだ。エイトみたいな軽装では生きていまい。

カーソルはグリーン。だがそれが重く乗しかかっているようだ。両目から涙が零れる。どうすれば人一人殺した罪を償えるのか、解らない。

「あれー？ ヘッドオ、コイツ泣いてますよお」

「ほうって、おけ、どうせ、まぬけな、ビーターのことでも、思っ

いるんだろう」

「Oh、disappointed……いい駒になりそうだと思うんだがな……使い物になりそうにないな……殺すか」

殺す。自分の命の危険が迫っているが、体が動かない。

POHに首を掴まれるが、そもそもこの体は酸素を必要としないため息苦しくはないが、不快感はある。

そのままPOHの魔剣——友切包丁メイスチヨッパーが持ち上げられ、僅かに首に食い込む。

「ごめんなさい……」

生への執着を捨てて、私は目を閉じた。

落とし穴に落ちて辿り着いた部屋で、比企谷八幡は偽物の自分と戦う。

エイトside

「うおわああああっ!!」

只今落下中♪じゃねえええええ!

死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ。

落とし穴から落ちてから数秒。周りは石でできている壁のみで、松明すらない。

幅は三メートルほどで、上から見たら正方形の形をしているだろう。

ともあれ、このままじゃ勢いよく地面に激突し、死亡は免れないだろう。

俺は落ちながらで操作しにくいのが、ウィンドウから二本目の剣を取り出す。

左右の両手に剣を持ち、体全体で十字架みたいになるように両手を広げ、剣を壁に当て減速しようとする。

当然ダンジョンの壁などは、破壊不能なオブジェクトのため、剣が突き刺さったりしないが、弾かれもしなかった。

「グッ……」

途端に腕に負荷がかかり、ギヤリギヤリと剣と壁が擦れる嫌な音をたて、摩擦熱からの火花が散って、辺りを照らす。きつと両手の剣は物凄い勢いで耐久値が減っていつてるだろう。

それでも徐々に徐々に減速していき、おっ、止まるか?と思った時に、減速させるために必要な壁がなくなった。

剣は空を切り、仮想の重力に従い落下していく。自分が落ちてきた正方形の穴が遠ざかっていく。

「うおわああああっ!」

本日二度目の絶叫。背中から打ち付けられ、アルゲードの建物から

飛び降りた時とは比べ物にならない衝撃が俺を襲い、HPも六割程持ってかれたが、生きている。

本当に死ぬかと思った……などとぼやきつつ、ポジションを口に運ぶ。

口の中に甘酸っぱい味が広がり、みるみるHPが回復していく。

ボロボロの剣を見て、ため息を吐きつつ、部屋の中を見る。

俺が落ちる前にいた部屋みたいな造りで、奥に扉がある。トラップで落とされた部屋だからモンスターはいないのか？と思うと、奥に人影。

プレイヤーか？と目を凝らそうとすると、左右の壁にある松明の火が、俺のいる方から人影がある方へと点いていく。

ボツ、ボツと点いていく松明の灯りによって、どんどん露になっていく人影の姿は――

「……俺………？」

間違いない。ピヨンと立ってるアホ毛に、ちよいちよ跳ねてる髪の毛。死んだ魚の様な特徴的な腐った目。灰色で幾つかの黒いラインがあるコートに、同色同デザインのズボンにブーツ、紺色のインナーを着ているのは見間違うことなき俺だ。違うところと言えば、腐った目に加えて虚ろになっていることくらいだ。視線を凝らし、カーソルとHPを見る。カーソルは、赤……

「は………？」

この偽エイト（仮名）は、プレイヤーではなく、モンスターのようだ。

更に目を凝らすと二本のHPバーと名前――《ホロウ・アバター》というらしい――が判明した。多分あれが虚ろなる者だろう。

「……なんにせよ、モンスターなら倒すしかないか……」

自分の姿だけに気が乗らない。あれはゾンビあれはゾンビあれはゾンビ……って、おい、誰がゾンビだ。

おふぎけ思考を切り替え、敏捷力を活かしたダッシュ。しかし相手は難なく振るわれた剣を受け止めた。

見た目では平静を保っているが、内心驚きが隠せない。初撃を止め

られたのは、エギルの店の開店記念パーティーの催し物でやったデュエル大会以来だ。

罅迫り合いからバックステップして体勢を立て直そうとするが、直ぐに距離を詰められる。

「う……おっ！」

後ろに下がるのをやめ、《ヴォーパルストライク》で迎え撃つ。

すると相手もヴォーパルストライクを使ってきて、深紅のライトエフェクトを纏った同じ剣が激突、辺りに衝撃波が広がる。

その瞬間お互いにノックバック、必然的に距離ができる。

「ハア……」

今の攻撃の応酬で、解ったことが二つある。

一つ目は装備とステータス……少なくとも、筋力と敏捷力が同じということ。

二つ目は戦い方も全く同じこと。後ろに下がった敵を追うところ然り、剣技の出すタイミング然り。

こうなつてくると分が悪いのは——俺だ。技も力も全く同じだが、一つ違うものがある。それは装備の残耐久値だ。

このままソードスキルを撃ち合えば、最初に耐久値がなくなるのは当然俺だ。装備がなくなれば隙ができて不利になり、新しく武器を取り出せても今装備している武器が現状俺の最強装備だ。

《武器破壊》をしようにもステータスが同じだから、それも難しい。ならばとポジションでステータスを一時的に上げようとしても、あの速さでは厳しい。

そもそも、だ。ステータスは兎も角、何で戦い方まで同じなんだ？ それに対する俺の仮説は、意見が飛躍し過ぎているかもしれないが、こうだ。

SAO開始時点から、俺達は意思があるシステムによって監視、観察されており、戦闘データを分析されていて、そのデータが目の前のMobに反映された、というものだ。

もしこの仮説が合っているなら、今までの戦い方は通用しない。詰まるところ、この戦いは、俺のプレイヤースキル対意思があるシステ

ムの学習能力だ。

「こりゃあホントにヤバいかもな……」

回復ポーションすら飲む暇を与えられず、ステータスと戦い方は俺と同じだが、武器の残耐久値とHPでは俺が劣る。圧倒的に俺が不利だ。

……いや、相手が使えないかもしれない、発動に手間がかからない物が一つだけある。約五ヶ月前に突然現れた、奇妙な『奥の手』が。  
「使うか……う・奥の手」

切り札は最後までとっておく物だと思っているが、奥の手は戦闘中でも隠し通すものだと思っているが、命の危険があるならしょうがない。

俺は奥の手を使うことを決意して、偽物の俺——ホロウ・アバターの方へと走り出した。

「……………」

断末魔すら出さずに、ホロウ・アバターの体は硝子片に変わり、空気に溶けるように消えた。

奥の手を使ってからの展開は一方的だった。相手は攻撃を回避できず、人型Mobのため、首やら胸やら頭やらを刺していたらクリティカルヒットし、あつという間にHPバーが0になった。

「ふう……」

今までの疲れを出すように息を吐く。早くファイリアと合流しなければ。何か嫌な予感がする。

武器を俺が見るのは初めての、選択式ラストアタック・ボーナスで選んだ——どうやらこれが六十層クラスの装備だったらしい——の

片手剣《ホロウ・フロントム・ワンハンドソード》を装備し、出口用に設置されていたのであろう扉を出ると、螺旋階段があった。

落とし穴を落ちてきた時間を考えると、百メートルはあるだろう。その高さにゲンナリしつつも、俺は数段飛ばしで螺旋階段を駆けていった。

一気に螺旋階段をかけ上がり、昇りきって直ぐに目の前に現れた扉を迷わず押す。

そうして写った景色は——フィリアが黒ポンチョの男に首を掴まれ、鈍のような剣——あれは、友切包丁……？

「う、おおおっ！」

ダガーを構え、《ミーティア・シユート》を発動させ、今まさに降り下ろされようとしていた友切包丁を黒ポンチョの男——POHの手からファンブルさせる。

突然の乱入者に、POHと恐らくラフィン・コフィンの幹部であるう三人と、フィリアが目を向けてくる。

「エイト……！」

こちらに目を向けたフィリアが涙を流す。落とし穴に落としてしまったところを見て、死んだと思っていたのだろう。実際俺も死ぬかと思った。

「Oh……まさか生きていたとは驚きだぜ、エイト」

「俺だって、まだお前がそんな趣味悪いポンチョを着ていることに驚きだぜ、POH」

軽口を叩きながらもお互いに気は抜かない。POHは武器を持っていないが、フィリアが人質にとられている上、配下の二人もいる。



「クク、しかし、ここに戻ってきたのは、愚かと言わざるを、えないな、  
《灰の剣士》」

「別に俺は好き好んで灰色の装備をしているわけじゃねえよ」

しゅうしゅうと息を吐き言ってくる赤眼の髑髏マスクを被っている男。

「それにしても、大人しく逃げてれば死ぬこともなかったのにねー」

「生憎ここで死ぬ気は毛頭ねーよ。頭陀袋被っている変な奴」

「ああ……?」

子供のような無邪気な声と口調で言ってくる頭陀袋を被っている男。俺の言葉が頭にきたのか、怒ったような声を出す。

「てめえ、状況解って言ってるのか?……すいませーんヘッドオ、コイツ、俺に殺らせてくれませーん?」

「ほう……じゃあこうやって遊ぼうじゃないか。エイト、お前がジョニーに勝ったら女を返してやる。存分に殺しあえ……イツツ・シヨウ・タイム」

P o H が決め台詞を言うと、頭陀袋の男——どうやらジョニーというらしい——は、細身のナイフを構える。

「ダメ……エイト……」

フィリアの静止を無視し、対する俺もついさつき手に入れた、黒いのに透けている片手剣を構える。

……どうやら偽物の俺の相手の次は、レッドプレイヤーらしい。

レッドプレイヤーと戦ったのも束の間、比企谷八幡は黒い天使とエンカウントする。

レッドプレイヤーとの戦闘開始。開始のゴングは剣と剣を撃ち合う金属音——ではなく、いきなり投げられた投げナイフを俺が弾く金属音だった。

「うおっ……」

俺がナイフを弾いている間に、ジョニー・ブラックがいつ取り出したのか二本目のナイフを持って追撃してくる。

ナイフは緑色の液体がついており、一度でも喰らえば動けなくなり、袋叩きだろう。

故に俺は一度距離を取り、耐毒ポーションを取り出して一気に飲む。

「あつ、このっ！」

ナイフを投げてくるがもう遅い。耐毒ポーションを飲み終えた俺は、空になった瓶を放り捨て、ナイフを弾く。

次のナイフを装備する前に接近、両腕を部位破壊しようとして剣を振るうがエストツクに阻まれる。

「おいおい、二対一ってか？」

「悪い、な。どうも、ジョニー一人では、荷が、重い、ようだ」

「チツ……」

途中で割り込んできた髑髏マスクのエストツク使用の言葉に舌打ちをするジョニー・ブラック。こうなるとキツイ。

相手は命を奪うことに何の躊躇いもない。負ければ俺もフィリアもお陀仏だ。

「こうなれば……ブラフしかないか。」

「……まあ倒すこと目的じゃないな。この部屋に入る前にメッセージ飛ばしておいたから、俺の役目は攻略組が来るまでの時間稼ぎ、お前ら二人くらいなら後十分は軽く耐えてやるよ」

「なに……」

「なんだと……」

「……S u c k」

三者三通りの答え方。流石にラフィン・コフィンのトップスリーと言えども、複数の攻略組に勝てるとは思ってないらしい。

「お前ら、後五分で殺せ」

「了解、だ」

「了解つす、ヘッド」

追い詰められたものほど怖いものはない。これからはコイツらも死に物狂いでくるだろう。

未だにP O Hに組伏せられているフィリアは動けない。つまり、これから五分、この二人の猛攻を凌がなければならぬ。

さつそく赤眼男が前衛、ジョニー・ブラックが後衛というフォーメーションをとって攻撃してくる。

確かに赤眼男のエストックのキレとジョニー・ブラックの投げナイフの狙いの正確さは凄まじいが、キレは閃光の異名をとる副団長殿ほどではないし、投げナイフの狙いも俺も投剣スキル使いだから大体解る。

ソードスキルを使った後の技後硬直を狙い、エストックを武器破壊、エストック使いの両腕を斬り落とし、肩タツクルの体術スキル《メテオブレイク》で赤眼男をジョニー・ブラックの方へとぶつ飛ばし激突させる。

「ふう……これで解つたろ？お前らじゃ俺には勝てん。それとも……次はお前がやるか？P O H」

俺が問いかけると、黒ポンチョのリーダーは組伏せていたフィリアをゆっくり解放する。

「そうしたいところだが、Game over……時間切れだ」

それだけ言うとP O Hは黒ポンチョを翻して、足早に部屋から去っていく。続いて配下の二人も立ち去ろうとするが、出ていく寸前に殺意に満ちた眼で俺を射抜くように睨む。

「俺が、お前を、殺してやる」

「てめえ、覚えてろよ……次に会ったら絶対に殺してやるから……」

「……そーかよ。じゃあ、しばらくは人殺しをやめて、せいぜい頑張つてレベリングすることだな」

ラフィン・コフィンの三人が立ち去っても静寂は訪れず、フィリアが泣いている声が部屋に響く。

俺はフィリアの近くまで歩き、へたりこんでいるフィリアに目線を合わせるようにしやがむ。

こういう時に主人公体質な奴は、気が利いた一言でも言つてフラグをたてるんだろうが、生憎おれはボツチだ。フラグたてるどころか地雷踏み抜いちやいます。

そこそこ高スペックな頭をフル回転させるが、なにも出てこない。我輩の辞書に、慰めるなどという言葉はない！とか言っちゃやうべル。

「あー、あの、アイツらならもういないぞ？」

どうにかこうにか捻り出した言葉は、ただの現状報告。ボツチのコミュニケーションのなさなめんな！

心の中で、自慢にもならない自慢を大声で叫んでいると、急にフィリアが俺を抱き寄せてきた。

「ありがとう……ありがとう……」

泣きじゃくりながら絞り出された感謝の言葉。しかし頭にあるのは、ハラスメント行為として認められてないよな……という焦りだった。

「べ、別にお前を助けた訳じゃない」

胸板に当たる柔らかい豊かな胸の感触と甘い匂いにドギマギしつつ口を開いた。

「え……？」

顔を俺の肩から離して真っ直ぐ見つめてくる。近い近い近い近い……

「ただ俺は護衛の依頼を遂行しただけだ」

キョトン、とするフィリアだったが数秒後には立ち直り、楽しそうに笑う。

「フフツ、そっか。なら、ちゃんと街まで護衛してね？」

「……まあ、それが依頼内容だしな」

脅威は去つたため、転移結晶を使わなくてもいいだろうと思い、最初にこの部屋に入ってきた扉へと歩くが、フィリアが歩いてくる気配がない。

「……どうした？」

「こ、腰が抜けて……歩けない……」

……なんかデジャヴ。

「え……いや、じゃあどうすんだよ、帰れないじゃねえか……」

転移結晶を使えば帰れるが、命の危機でもないのに高価な転移結晶を使うのは躊躇われる。

フィリアもそれは理解しているのか、なぜか顔を赤くしながら真剣な声で言ってくる。

「あ、あの……エイト、おんぶか抱っこかどっちがいい？」

「はい……？」

やだなに言ってるのこの娘。そんなに俺を黒鉄宮の牢屋に送りたいの？

「え……いや、そんなに俺を黒鉄宮の牢屋に送りたいの？」

「ち、違うよ！というかハラズメント倫理コードは圏外では出ないよ？」

あ、そうなんですか。まあ考えてみれば当然か。例えば麻痺になった女プレイヤーを移動させようと男プレイヤーが触ったら一々コードが出てくるのウザいしな。

「ほら、倫理コードの心配はないよ？」

「ぐっ……だ、大丈夫、きつと立てる」

「いや、立っていないからこうなってるんだよ?」

なんかどんどん追い詰められているような……

「て、転移結晶を使うのは……」

「高いから無理だよ……」

ですよね……ダメだ、これ以上の反論が思い付かん……もういいや。諦めた。なんせ座右の銘が『押して駄目なら諦めろ』だからな。

「わ、わかりました……」

モンスターとの戦闘を極力回避し(エンカウントしても走って逃げた)、虚ろなる者達の修練場、欲望の金廊、欲望の金窟を出て、今はフィールドをアルゲード方面に歩いている。

五分に一回くらいの頻度で、そろそろ下りてくれませんか?と言って  
いるが、もうちよつとーと返される。

いかに俺が敏捷力極振りと言えども、レベル八十ちよいあれば、一人担ぐことくらい辛い。

辛いのは——女子特有の二つの山が柔属性攻撃で、俺のSAN値に  
継続ダメージを喰らわしていることだ。

ムニムニモニヨモニヨという感触を背中に受けながら、足早にアル  
ゲードに向かう。

「ねえ、エイト……本当に、ありがとね」

「……別になんもしてねーよ」

「それでもだよ」

「……そうかよ」

いきなり礼を言われて驚いたが、真正銘この感謝の言葉はフィリアの心の中から出てきた言葉なのだろう。ならば、それを何回も否定

する必要はあるまい。

と、そんなことを考えているとそろそろアルゲードの街に着く。

「あの、フィリアさん？そろそろ下りてくれませんか？」

「んー、もうちよつとー」

俺に社会的に死ねと？

「いや、あのね？フィリアさん……」

「やだー」

幼児退行して胸を押し付けんなー！くっ、諦めるべきか、抗うべきか……

「……解った……」

折れた。幸せな感触に負けた訳じゃないよ？ホントだよ？ハチマン、ウソツカナイ。

「ほら、着いたぞ……」

転移門広場前に到着したが、未だにフィリアが下りてくれない。周りの視線が痛いです。

「エイト？」

息が詰まった。この声は……

振り向くと、黒いコートにロングスカート、ブーツ。黒い鞆に収められた片手剣……

「よ、よお、キリト」

「うん、こんばんは、エイト」

あつれえー？おつかしいなあ、キリトの顔も黒い影が射しているように見えるよ？

「あ、ああ、こんばんは、キリト。じゃあこれで……」

「待って」

ガシツと腕を掴まれる。フィリアはなにがなんだかといった顔だ。

「な、なんでせうか？」

「いや、紹介くらいあってもいいんじゃないかな？その背中の女の子について」

「は、はい、そうですね」

もう転移結晶使っちゃおっかなーと思っただが、なにもやましいことしてないしー？無理矢理やらされてるだけだしー？そもそもやましいこととしてても、キリトには関係ないしー？

……というか、彼女いないから関係ある奴いないな……

「あ、はい！私はフィリアって言います。エイトとは……どんな関係だろう？」

「俺に振るなよ……」

依頼主と依頼受領者でいいんじゃないか？

フィリアなりのジョーク（この場においては起爆剤）が炸裂する。

「そうだな……エイトの彼女、かな？」

ビシツ、と空気が凍った。ただならぬ空気を感じ取ったのか、既に広場には誰もいない。

「へ、へー、そうなんだ……」

ヤバイよ、キリト眼がイツちやってるよ。虚ろだよ。ヤンデレみたになっちゃってるよ。戦場○原さんみたいだよ。

「エイトの……バカー……」

キリトの右手が黄色く光る。あれは、貫手の体術スキル《エンブレ》……

「ザッ！」

腹にクリーンヒット。要求筋力値が異常に高いと言っていたエリユシデータを装備するために底上げしているキリトの半端ない筋力値で、アンチクリミナルコードによって保護されているため、HPは減らないが、衝撃で吹き飛ばされる。

そのまま破壊不能なオブジェクトであるベンチに当たり、ようやく俺は止まった。



…：…ていうかフィリア。さりげなく避けんじやねえよ。動けるなら直ぐに背中から退いて下さい…：…。

納得いかないやり方にキリトは抗議し、比企谷八幡は二人を仲裁する。

二〇二四年、三月六日。キリトヤンデレ事件（俺命名）から三日後。五十六層《パニの町》で、ちよつとしたトラブルが起きている。

それはマイエンジェルキリトと攻略の鬼の閃光様の（キリトは可愛さが、副団長殿は怖さが）人外決戦である。

その経緯はこうだ。

俺達攻略組は五十五層を突破し、現在は五十六層フィールドボスの攻略会議をしている。

今回の攻略は《血盟騎士団》主導の攻略だが、血盟騎士団団長である《聖騎士》ヒースクリフはいないため、リーダーは副団長の《閃光》アスナだ。

血盟騎士団副団長になってからは、気軽にアスナと言うのも躊躇われるため、大抵リーダーか副団長殿と言っている。

で、その副団長殿はマップを広げてじっくりと見た後、叩きつける様にテーブルに手をダンツ！と置き、攻略組に指示を出す。

「今回はフィールドボスを村に誘き寄せます」

攻略組がざわめく。隣にいるメンバーと意思……というより感情の確認をするが、誰も反対の意見を出さない。

出したのは——キリトだ。

「ちよ、ちよつと待ってーそんなことをしたら、村が……」

その反論を予測していたのであろう副団長殿が毅然と言い放つ。

「ええ、それも狙い通りです。NPCにはボスの囿になってもらって、その隙に攻撃を仕掛けます」

「で、でも、オブジェクトとは違って、NPCは……」

「生きている、とでも？」

ピシヤリと言葉を切り、冷たく言った。

「彼らはオブジェクトです。たとえ死のうとも直ぐに復活するのですから」

……二人の言わんとすることを、理解できない訳じゃない。

アスナは復活するNPCを囿にする効率重視の理論。対してキリトは、生きているNPCを死なせたくないという感情論。

俺だつて一日も早く現実に戻りたい……というより、小町と戸塚に会いたい。しかしそのために小町と戸塚の姿をしたNPCを囿にできるかと訊かれたら、断じて否だ。

お互いがお互いの正義をぶつける——その規模が大きくなると、言い争いから殴りあい。行き着くところまで行ってしまったら戦争になる。つまり攻略組がバラバラになるということだ。それは避けたい。

それになにより——攻略組メンバー全員の『お前の案件だろ。なんとかしろよ』という視線が痛い。いや、勝手に他人の案件作んなよ。

ちなみにこれは余談だが、俺が灰色装備をしているのは、よく衝突する副団長（白）とキリト（黒）の仲裁（白と黒を混ぜた灰色）に入るから、という説が出ているらしい。……深読みし過ぎだ。

「はあ……少し落ち着け、二人とも」

俺が仲裁に入ろうとすると、副団長は貫通属性の、キリトは癒し属性の視線を向けてくる。

やだ、ダメージ喰らっても、直ぐに回復しちゃう！やったね八幡！永久ヒールだよ！だが忘れるなかれ、永久ヒールということは、永久にダメージを受けるということでもあるのだ。

「いや、その……二人の意見を尊重する作戦を思い付いたから、報告しようかなと……」

「……なんですか？」

今度は疑属性に変わった視線を一身に受けながら、俺は口を開く。

「いや、そう難しい話じゃない。俺が囮をやるっただけだ」

「はあ……」

おい、なんだその聞いただけ損したみたいなため息は。それでも俺はめげない。だって八幡強い子だもん！

「……多分だが、攻略組で一番足が速い……というより、敏捷力が高いのは俺だ。NPCを囮にするより、五分……いや、十分長く耐えてやるよ」

副団長殿も俺の敏捷力の高さは知っているため、思案顔だ。一番敏捷力が高いからボス戦で先陣切って戦い、不名誉だが《犠牲》なんて二つ名を頂戴しているのだ。

「……わかりました。その案、採用します」

「あいよ、じゃあおつかれさーん」

その言葉を皮切りに、攻略組は各々解散して散らばっていく。

俺も借りている宿屋の部屋に戻ろっかなーと思っていると、後ろから二人に声を掛けられる。

「待ちなさい」

「待って、エイト」

後ろを振り向くと、やはりそれぞれ黒と白の装備に身を包んだ二人がいた。

「……なんだ？」

キリトが副団長に先にどうぞというジェスチャーをしているのを見て、コホンと咳払いをしてから俺に言ってくる。

「……本当に大丈夫なんですか？」

「……なにがだ？」

「囮役のことです」

……つまり俺が役割を果たせるか心配だっただけのことか？

「大丈夫だ……と言っても、お前は信用しないだろ？」

「ええ、直接見せてもらわないと」

「なに？なにすればいいの？百メートル走？」

それとも障害物競走？パン食い競走？リレーは無理だよ？

「違います。そうですね……私とデュエルしてもらいます」

「おいおい、なに、戦闘狂なの？」

「いやだ。やるメリットがない」

最強ギルドの副団長とデュエルとか軽く罰ゲームだぞ……ヒースクリフと戦えとか言われた日には……エスケープだな。

「メリットがあるかないの問題ではありません。この囚役がちゃんとできるかによって、生死が決まるプレイヤーもいるかもしれないからです」

「……………」

なるほど、一理ある。俺の役割によって、ボス攻略の効率も変わるという訳だ。……うええ……めんどくせえ……

「……………わかった」

「えっ？ちよつと、エイト……」

キリトが心配そうな声音を出してくるが、あくまでもこれは腕試しみたいなものなのだ。命を懸ける訳じゃない。

俺達も石でできた洞窟みたいな建物から出て、副団長殿はデュエル申請、俺は装備点検、キリトは観戦と、各々の行動をとる。

申請は《半減決着モード》……HPバーがイエローゾーン、つまり半分になると勝敗がつく形式だ。

六十秒からカウントが始まり、一秒一秒減っていく。直ぐに武器を抜くのは三流。使う獲物を悟らせるのは二流、一流はギリギリまで武器、構えを見せないのだ。

「……………なあ、一ついいか？」

「……………なんですか？」

このままではこいつは失敗する。それも、致命的な大きな失敗を。確かにこいつが攻略組を引っ張っているお陰で、攻略ペース、効率はとにも上がっている。それは間違いない。

しかし世の中にノリスクハイリターン、またはローリスクハイリターンはあり得ないのだ。事実、攻略ペースは上がっているが、HPが危険域に落ちるプレイヤーも増えている。

このままじゃ、きつと——いや、近いうちに死者が出る。それだけ

は避けなくてはならない。

だから、俺は論さなければならぬ。高々一、二年だけの人生の先輩として、まがりなりにも攻略の一員として、そしてなにより——  
——今まで、失敗を積み重ねてきた者として。

「……一言だけ言っておく。……お前のやり方は、間違っている」

今の攻略方法に、不満がないと言ったら嘘になる。

かの有名なアニメに、こんな台詞がある。『人類が人間性を捨てて勝ったとしても、それは人類の勝利なのか』と。

俺も勝てばいいんだよとは思っているが、最低限のライン——人間性を捨ててまで勝ったら、俺は小町に——家族に顔向けできるだろうか？

今、副団長——いや、アスナは、焦りからか最低限のラインも失いかけている。偉そうに治せ、とも言えないが、コイツの指揮に命を預ける攻略組の一員としてくらいなら、眼を覚まさせるくらいの権利はあるだろう。

カウントがゼロになり、すでに抜剣して、右手に持った剣を振りかざし、俺が振るった剣が空気を切る音が、《閃光》アスナとのデュエル開始を告げた。

デュエルの後に、比企谷八幡は攻略の鬼の胸の内を知る。

基本的にデュエルでは、ソードスキルの乱用は避けるべきだ。

相手はMobと違い、ソードスキルの知識があるかもしれないため、下手にソードスキルを放つと完璧に対処され、手痛い反撃を喰らうからだ。

だからソードスキルはここぞというタイミングで使わなければならない。詰まるところ、Mobと戦うときとの最大の違いは、心理戦の要素が絡むことだ。

よって、俺の初撃もソードスキルを使わずに放ったのだが……

閃光の異名の由来、レーザーのごとき《リニア》を繰り出してくる。

「うおっ！」

単発突きであるリニアは、回避した後体勢が崩れようと、相手は技後硬直になるため、走っていた勢いを使って地面を転がるように回避。

技後硬直にかかっている間に立ち上がり、剣を構える。仕切り直しだ。

今度は俺が《ソニックリープ》を放つ。《ヴォーパルストライク》や《ノヴァ・アセンション》の様な大技は使わず、隙の少ない初期技や下位技で戦いを組み立てる。

俺のソニックリープはあっさりと避けられ、反撃のソードスキルのライトエフェクトが細剣を包むが、まだだ。

俺の剣ではなく、左拳が光る。体術基本スキル《閃打》が腹にクリーンヒット、相手のHPバーを一・五割ほど削る。

「グッ……」

相手はうめき声を出す。

これはシステム外スキル《スキルコネクト》(キリト命名)だ。スキル後の技後硬直をなくし、更にスキルをタイミングよく発動させ、繋

げる。故にスキルコネクト。

そもその発端は、偽物の自分と戦って、プレイヤースキルを磨いたほうがいいと思ったことからだ。

このスキルコネクトは、キリト以外に見せていない（キリトには練習中に見つかった）。初お披露目のスキルコネクトは効果覷面だったようで、僅かながら動揺が見てとれる。

そして心理戦も戦いの要素に加わる対人戦において、それは致命的だ。理解させない、考えさせない、自分の手の対処法を思い付かせない。

そのために追撃、思考する暇を与えない。

飛び退いたところに《シングルシユート》を発動し、投擲する。

弾くか、避けるか……力の入れよう、体の動きから俺から見ても左に回避か。システム外スキル《未来予知》を使い、人間観察で培った動体視力で相手の体の動きを見て、次の動きを推測する。

どこのキセキの世代キャプテンだよと思うが、キリト命名ならしうがないよね！

好機と思い、右手の剣を右肩に乗せ、剣を握っていない左手を前に出す。これはヴォーパルストライクのスキルモーシジョンだ。

右手の剣が紅く煌めき、キィィィィンとスケ○ト団部長が集中モードに入ったような音がする。

ブオオオオン！と自らが流星になったように突撃、このデュエルに終止符を打つべく閃光に犠牲が向かっていく。

シングルシユートを避けるのに多少の意識を割かれていた副団長が迫り来る俺に気づき、咄嗟にバックステップをするが、それは悪手だ。

ソードスキル使用中は、いくらシステムが勝手に体を動かすとしても、自分の意思で全く動かさない訳じゃない。といつても、スキルモーシジョンからあまりに大きく違った形になるとスキルは発動せず、より長い硬直に襲われるが。

相手の意識は間違いなく煌々と輝く右手の剣に向いている。そのミステイレクションを利用し、投げナイフを左手に持つ。



ヴォーパルストライクの射程圏内から僅かに遠く、攻撃は届かない。端から見れば俺が大ピンチだろう。

右手は前に出され、左手は後ろにある。まるで左利き投手がボールを投げるフォームになっていて、再び俺の左手に握られている投げナイフが発光する。

「フッ！」

「ハアッ！」

お互いの短くも気合いの入った声が重なり、互いのソードスキルを発動する。投擲する間に右腕を上げておく。

先に着弾したのは――相手だ。ノックバックし、僅かな隙ができる。対する俺は、僅かにかすっただけなので、スキルモーションに入るのはそれで十分過ぎた。

上げておいた右腕を曲げ、また剣を肩に担ぐ。二連続スキルコネクトだ。

また右手の剣が煌めき、キイイイインとジェットエンジン染みたま音が空気の振動を耳に伝え、草木がざわめくようにほんの少し揺れる。

「う……おおおおっ！」

俺が放った必中のヴォーパルストライクは、副団長の腹に入り、残り七割五分ほどだったHPを一気に一割に減らし、副団長の華奢な体を吹き飛ばし、俺の視界にWINNER表示が写った。

「はあ……」

僅かにかすった程度で5%も減ったHPがバトルヒーリングスキルで回復するのを眺めながら、未だに仰向けで転がっているアスナに

眼を向ける。

「……なんで」

「あん？」

「なんで、あなたはそんなに強いのか？」

「いやいや、なに言ってるの？下っぱの下っぱの下っぱである俺が強いわねえだろ。」

「……別に強くねえよ」

「嘘」

「おい、速攻で否定すんな。俺ほど正直な奴はいないよ？人なんかいつも嘘を吐くしな。」

「はあ……適材適所ってやつだよ。俺はソロプレイヤーとして自分の強化をして、それなりに攻略組の役にたつようにする。お前は攻略組を引っ張り、プレイヤー達の力を最大限発揮できるようにするのがベストなんだよ。逆にお前の方がステータス的に強かったら、俺の立つ瀬がねえよ……」

「なんならもうないまである。いや、ほんとさ、攻略組にいいように使われてない？俺。自分でも知らず知らずに社畜になって怖い。」

「で、でも、エイト君は、わたしが強くないから……認めてないから、名前で呼ばなくなったんでしょう？」

「はっ」

「え、話が飛びすぎじゃね？なんで俺が名前で呼ばなくなったのに関係あるんだ？」

「だって、呼ばなくなったじゃない。名前」

「な、なんで名前を呼ぶことが関係あるんだ？」

「素の口調になってるアスナに対し、しどろもどろになりながらも質問する。」

「わたし……怖いのか。わたしがたてた作戦で、誰か死ぬんじゃないか、って」

「……なるほど、いかに攻略の鬼と呼ばれようと、副団長——いや、アスナは一人の人間なのだ。」

「攻略組を率いる『責任』。上にたつ者だからこそその『重圧』。そして

そこから生まれる、人の命を預かる『恐怖』が、ないはずがないのだ。きつとアスナは、そんな焦りを行動で消すように——いや、自分でもなぜかよく解らないまま、無茶苦茶な作戦を立案してしまうのだろう。

「わたし、君に名前を呼ばれていた時、認められてるんだって思った」  
勝手にだけどね、と付け足し、アスナは続ける。

「だから……名前で呼ばなくなった時、なんだか悲しかったんだ。お前には着いていけない、勝手にしろって言われてる気がして」

俺が名前で呼ばなくなったのは、ただ単に大手ギルドの副団長を名前で呼ぶのは指揮系統、上下関係が乱れるのでは？と思つてのことだが、それは置いといて考える。

もし、小町にお兄ちゃんからお前なんて言われたら……うん、しばらく部屋に閉じ籠るな。

もちろん、俺とアスナの仲が俺と小町ほど深いとは言わないが、悪意がない行動が、人を傷つけることはままある。

「だから……認めさせようとして、意地を張つて、攻略効率重視の作戦をたてて……」

不器用、なのだろう。自分を認めさせる方法を努力しか知らないこともそうだし、努力が変な方向に行くことから、それは伺える。

「でも……結局認めさせることができなくて、こうしてデュエルにも負けて……」

アスナは自分は役たたずだと思つているが、もし本当にそうならとつくに血盟騎士団副団長なんて辞めさせられているだろう。

「あのな……お前を役たたずなんて思つてんなら、お前がリーダーの時に、攻略会議に出てこねえよ……」

「え？」

きつかけは些細な拗れなのだ。それをアスナが考え、思い、独り合点してできたのが攻略の鬼だ。

ならば、その拗れを元に戻すのはどうすればいいか？——簡単だ。

相手と自分の意見の相違を知り、自分の考えを伝えればいいのだが……俺には難易度が高い。故に遠回しに悟らせる。

「だから……お前が明らかに間違っていることを言ったり、気に食わないことをしたなら、そりゃ異論や反論を唱えるし……下手すると攻略に参加はしないって言ってるんだよ」

「え？でも、エイト君、攻略に参加して……」

「……これ以上は言わん、なんで俺が攻略に参加してるか、自分で考えろ」

ちよつと考えれば解るけどな……と思いつながら、はあーと史上最長の溜め息を吐き、後ろで微笑ましげにこちらを眺めていたキリトにバトンタッチし、俺は宿屋へと向かった。

なにもしていないのに、比企谷八幡は性犯罪者扱いされる。

二〇二四年、四月十一日、正午前。

五十九層主街区ダナクの天気は最高で、宿屋で一日中寝てようと決意し、午前の攻略を終えた俺は宿屋へと向かう。

中央広場を歩いて、ふと風が吹いたときに芝生の方を見ると見知った顔が。

一人は最近の悩みが結婚を申し込まれることが多い（普通なら自慢に聞こえるだろうが、顔を真っ赤にして話す姿は眼福でした）こととの《黒の剣士》キリト。もう一人は最近の悩みが忙しすぎて目が回ることとの《閃光》アスナ。……なんで二人とも俺に愚痴ってくるの？ちなみにアスナがあまり求婚されないのは、地位的に高嶺の花だからだと推測している。

……まあ、首を突っ込むとろくなことがない他人の恋愛はさておいて、これは些か警戒心がなさ過ぎると言わざるを得ない。

確かにこの広場——というより街は《圈内》……正確には《アンチクリミナルコード有効圏内》だから、HPが減ることも、毒などの状態異常になることも、ましてやアイテムを盗むこともできやしない。

しかし、触つても起きないくらいに深い眠りに入っているなら、寝ている相手の手を勝手に動かして《完全決着モード》でデュエル申請をし、所謂《睡眠PK》をされるし、もっと大胆なら《担架》ストレッチャアイテムを使って《圏外》まで運んで殺すという方法もある。

このケースは、実際に《殺人者》レッドブレイヤーによって行われたため、今でもプレイヤー達は施設が可能な宿屋の部屋か自分のホームに帰るのだが……なんともまあ、警戒心のないことである。

それぞれに悩みがあり、理由のベクトルが違うが疲れているのだろう。

キリトはポツチ故に慣れない会話で気を張り詰めて、アスナはギルドメンバーの面倒を見て。

はあ……と溜め息を吐く。最近溜め息を吐き過ぎだから、幸せがないんじゃないか?と思ってしまう。

攻略組の主力の二人を万が一にも失わないため、俺は長い長い暇との戦いをするはめになった。

太陽が西に傾き（アインクラッドが自転しているのかは知らないが）、夕陽が出てきた頃によく二人は眼を醒ました。

たっぷり八時間も付き合わされた身としてはたまったもんじゃないが、攻略組でも一、二を争うアイドル的存在の寝ぼけ眼な姿を見られただけでもまあ、得したような気分ではある。

生涯二度と見られないであろう女子の寝起き姿を脳にインプットしつつ、未だに脳が覚醒していない二人に声を掛ける。

「……おい」

「うひゃあ!」

声を掛けた後にこちらを見ると、一気に脳が覚醒したのか眼を見開く。

……どうやら寝起きに俺の顔を見ると眼が醒めるというのは、雪ノ下の言った通りのようである。

やったね八幡!あの言葉は毒舌じゃなくて真実だったよ!……どっちにしても嬉しくねえ……

キリトは恐らく羞恥で顔を赤くし、アスナは恐らく怒りから顔を赤くする。

「な、なんでエイト（ハチ君）がここに!」

さつきから仲いいですね、君達……

ちなみにハチ君、というのは別に俺がアスナの忠犬になった訳じゃ

なく、愛称ならぬ哀称だ。なぜかデュエルをした日を境に呼び名を変えた。

その哀称をやめると抗議したものの、命令権一回分ね？と正に閃光の様に輝く笑顔で言われてしまったら拒否権はない。救いは、ちゃんと公私のメリハリをつけて呼び名を変えてくれることか……

余談だが、公的な場においてはエイト君と呼ばれており、君付けされるプレイヤーは他にいないため、疎まれてるぞとはクライン談だ。……いや、歳が近いからだろ。

「いや、別に……たまたま通りかかったただけだが……」

約八時間前にな、とは言わずにここにいる理由を述べると、キリトは未だに思考停止しており、アスナは歯ぎしりをしているかの様に歯を食い縛っている。

「……ゴハン一回」

「は？」

「ゴハン、何でも幾らでも一回おごる。それでチャラ、どう」

「いや、別にいいから、そんな大したことやってねえし」

ぶつちやけKOB（血盟騎士団の略）の副団長と飯を食うとか、息が詰まって死ぬ。

「いいから、借りを作るの嫌いな」

「俺は養われる気はあるが、施しを受ける気はない！」

フツ、自信満々に言っただぜ……なんか呆れられてるけどな。

「はあ……いいから、行きましよ」

いーやーだーと抵抗しても、結果は変わらなかった。世界は集束して結果は変わらないはずなのに、シユタインズゲート世界線に辿り着いた岡○さん、マジパネエす。

あの後、どこで食べる？と聞かれて、特に最良の店がないので、復活したキリトが勧めてきた店に向かっている。

そのNPCレストランがあるらしい五十七層主街区《マーテン》は、最前線から僅か二層下ということもあり、攻略を終えて帰ってきた攻略組や飯を食べに来たプレイヤー等が集まり、大いに賑わっている。

メインストリートを肩を並べながら歩いて、楽しそうに会話をしている二人を眺めながら、あれ？これって一応お礼だね、なんか凄いやウエイ感などと思っている。……別に混ぜてほしい訳でもないが。

アウェイ感がする理由の一つに、周りの眼がある。二人とも攻略組のアイドル的存在……その事実を知らないプレイヤーでも、十人中九人は振り向く美貌の持ち主だ。

そんな人達の後ろに、知らない、見たことがない、おまけに眼が腐っている……いや、最後のは関係ない……ないよね？

ともかく、知らない奴がアイドルの後ろを歩いているという認識をされていて、悪くてストーカー、良くてストーカー……つまりストーカーにしか見えないのだ。

だからといって前を歩いても、店を知っているのはキリトだけだし、横に並んで歩こうものなら、ゴミを見る眼に加え、殺意も入ってくるため論外。つまり何が言いたいのかというところ、詰んだ。

それならばいつそ逃げればいいじゃないと思うが、阿修羅が降臨しようものなら、社畜を越えて馬車馬の様に働かされる存在——略して馬畜になってしまう。

社会的地位の強さを思い知り、そんな圧迫にも負けない存在である専業主夫に、俺はなる！と新たに決意していると、どうやら着いたらしい。

「ハハハ。」

「うん、お薦めは肉より魚だよ」

おお、じゃあ俺みたいな眼をした、見所のある魚はいるのか？などと冗談混じりなことを考えながらスイングドアを開けて二人の後に入店すると、NPCウエイトレスの声に迎えられる。



そこそこ混み合っている店内から注がれる眼差し（俺に向けられているのは殺意くらい）にそろそろウンザリしつつ、完全にシカトをしてフロアの中央を横切り、窓側の席に歩いていく二人のあとを溜め息を吐きながら着いていく。

すでに二人並んで席に座っているため、窓側のテーブルの奥の椅子に腰掛け、また溜め息。席に座るだけでこんなに疲れたのは、約十八年八月生きてきた中で初めてだ。

だがここでイラついて高い料理を注文したら後が怖い。

俺が一番安い料理を注文し、背中を背もたれに預けると、まさか奢らせる気なんじゃ……、最低だなという声が聞こえてきた。

いや、違うから。奢ってもらうのは事実だけど、無理矢理だからという弁明を心の中だけでしておいて、窓の外にボーツと眼を向けているとグラスが運ばれてきた。

それに口をつけてチビチビ飲んでいると、閃光様がモジモジしていた……トイ、んんっ！お手洗いか？

「……どうした？」

「……」

「え、なに言ってるの？」

虫が囁く様な声しか聞こえなかった。はつきりしないのは日本人の悪いところらしいぞ。

見かねたのかキリトが助け船……というより通訳をする。

「今日はありがとう、だって」

「はっ..」

俺は難聴系主人公じゃないが、聞き間違いか？あの攻略組の鬼がお礼を俺に言うなんて久しぶり……いや、今までなかったんじゃないか？

「す、すまん。どうも最近耳が遠くてな……もう一度頼む」

「だから、ありがとうだって。ガードしてくれて。私からもお礼を言わせて。ガードしてくれてありがとう」

……うん、キリトの微笑みが見られたからオールオツケー！Smile is all OK.

「いや、まあぶつちやけ本当になんにもしてないけどな」

「でも、（あんなにたっぷり寝たのは）初めてだったから……」

おい、ぐっすり寝られたことをはしよるな。ほら、観客の皆さんが「初めて!?!」とか言ってるから、俺のカーソルオレンジとして見てるから。

やめてえ！それでも八幡のカーソルはグリーンよお！

「そ、そうか。まあ、ぐっすりと寝られたならよかったな」

またもや聴衆がざわめく。「寝られた!?!」とか言ってるじゃねえよ。深い意味はねえよ。お前ら絶対除夜の鐘の音を聴かなかつたら、煩惱だらけなもの。

S A Oプレイヤーには煩惱が強い奴が多い事実を知ってしまい、なんなんだコイツら……と軽く引いていた。

そんな空気を気にしてないのか気づいてないのか、キリトが口を開く。

これ以上の爆弾を投下してくれるなよ……という俺の切実な願いは、聞き届けられなかった。

「うん、そうだね。私もエイトと一緒に寝たことあったよね!」

ビシツと、確かに空気が壊れる音がした。今回ばかりは聴衆も黙らざるを得なかった。何故なら——目の前に、阿修羅<sup>アスナ</sup>がいるから。

ゴゴゴゴゴゴ……という文字が背景に見えそうなオーラを纏い、噴火直前の火山の様な顔から一変、ドライアイスの様な冷たい笑顔を向け、問うてくる。

「ハチ君？それ、どういうこと?」

サラダが来るまでの間に、それは一緒に昼寝をしたのと、攻略上の

都合で野営をするしかなかっただけだと言うと、どうにか信じてくれた。……決め手がキリトの証言だったことは、もう何も言うまい。

ともかく、何とか信じてもらえた後に運ばれてきた謎野菜のサラダに謎スパイスを振りかけているキリトを見つつ、今までの疲れを癒やす。

どうでもいいことだが、ふと気になったことがあるので訊いてみた。

「……なあ、なんで栄養バランスとか関係ないのに野菜食ってんだ？」

「えー、美味しいじゃない」

「いや、(トマト以外)不味いとは言わんが、せめて調味料があればな……」

いや、ホントに。ここ来てから初めて調味料のありがたさが解ったわ。

「うん、マヨネーズに、ソースに、ケチャップに……それから」

「醤油！」

うんうん、(千葉県民か知らないけど)千葉の醤油は(生産量が)日本一だからな。

などと思っていた、その瞬間――。

「……きやああああ!!」

――恐怖の悲鳴が、聞こえた。

真面目な空気から一転、比企谷八幡はこれは間違っていると思っっている。

悲鳴が聞こえて真っ先に動き出したのは、KOB副団長アスナだ。更にキリトが続き、最後に飲み物を溢必要がないことした机を拭をしいていてスタートが遅れた俺が続く。

最初は一番に敏捷寄りビルドのアスナ、次に本当に最初の頃は敏捷寄りだったが、今はエリユシデータを装備できるようにするために筋力寄りになったキリト、最後に敏捷極振りの俺の順で走っていたが、カーブをしたあたりからキリトが次第に遅れる。

リレーで後ろにいた奴に抜かれたら罵声か舌打ち、酷いときには石が——あれ？これってイジメじゃね？……まあ、いい思い出がない俺としては少し胸が痛むが、今はそんなことは言ってられない。

まあ、遅れるといっても、カーブを曲がったらすぐに円形広場に着いたのだが——

「な……なに？」

そこで俺は、有り得ないものを目にした。

狩りの帰りなのか、フルプレート・アーマーを着こんだ男が目立っている——ここまではいい。問題は、その男が教会らしき建物の二階の窓から延びているロープに吊るされ、胸に刺々しい片手剣の様な短槍を刺されていることだ。

男は槍を抜こうと、槍の柄を両手で握っているが、動かない。刺された胸からは赤い、血みたいなエフェクト光が出ていて、着実にあの禍々しい短槍が男のHPを削っていつてることを示している。あれは一部の貫通系武器にのみ設定されている特性、《貫通継続ダメージ》だ。

あの短槍には無数の逆棘があり、恐らく継続ダメージ特化の武器なのだろう。

「早く抜いてー！」

有り得ない事態ながらも、できるだけ冷静に観察しているつもり

だったが、キリトの声でそれは後回しだと結論付ける。

その声に反応し、ノロノロと動かしている両手で槍を引き抜こうとしているが、容易には抜けない。死の恐怖で手が動かないのか。

ロープで首を吊っている状態の男と地面の距離は十メートル強あり、今の俺の敏捷力では届かない。

ならばと、せめてスロージョウグダガーでロープを切るべきか……など考えるが、万が一ダガーが男に当たって、HPを全損させてしまいかもしれないという思いが、俺の体を止める。

もちろん普通に考えれば、圏内においてそんなことは有り得ないのだが、そもそもこの状況が有り得ないのだ。何事にも例外はあるかもしれない。

投げるべきか、投げざるべきか……と逡巡している間に、さすが副団長というべき貫禄でキリトに指示を飛ばすアスナの声が聞こえた。「きみは下で受け止めてー！」

キリトの返事を待たずに、恐らくロープを切るのだろうかアスナは、猛然と教会内に足を踏み入れた。

「うん！」

すでに教会の中を駆けていったアスナの背中に返事をしたキリトは、ぶら下がる男の真下へとダツシュした。

——だが。

大型ヘルメットから僅かに窺える男の双眸が、俺達から見たらなにもないはずの虚空を凝視している。だが、なんとなく俺には解った。軽装な俺が、攻撃を喰らったら絶対にやること——HPバーを見ているのだろうか。正確には、恐らくHPがゼロになる瞬間を。

広場を覆い尽くす悲鳴と驚声の中、男が口を開いてなにかを声に出した気がした。

だが——その声は届かず、今までイヤと言うほど見てきたポリゴン片に姿を変え、無数のガラスが砕け散った様な音を残し、男の姿は消えた。

男を吊り下げていたロープはダランといった様子で垂れ下がり、胸を刺していた短槍は落下し、石畳に突き刺さった。

平和な街のBGMをかき消すプレイヤー達の悲鳴を聞きながら、俺は辺りに眼を走らせる。

公開処刑かなにかは知らないが、圏内で相手のHPを全損——いや、減らせるのはデュエルしか有り得ない。俺みたいな軽装だったらともかく、あの重装甲だと半減決着モードとは考えにくい。恐らく全損決着モードだろう。

あの男がなにを思い全損決着モードを受託したのかは知らないが、デュエルなら『WINNER／名前 試合時間／何秒』という形式の巨大なシステムウインドウが近くにあるはずであり、それを見ればあの男を短槍一本で殺した相手が解る。

——はずなのだが。

「……ない……？」

教会の方も、円形広場にも、上空からはたまた地面までも見たが、WINNER表示どころかなんのシステムウインドウもない。

「くそっ……」

三十秒しか表示されないシステムウインドウを探そうとすると、どうしても焦ってしまう気持ちを抑え、ゆっくり、じっくりと辺りを見回す。

その時、俺と同じことを考えていたであろうキリトが、広場にいるプレイヤー達に指示を出す。

「みんな！デュエルのウィナー表示を探して！」

すぐに意図を察したプレイヤー達がキョロキョロと辺りを見回してウィナー表示を探すが、未だに発見の声がない。もうすぐ十五秒経つ。

これだけの人数、時間をかけても広場で見つからないことを考えると、建物——男が吊るされていた教会の中か、と思ったとき、問題の窓から純白の騎士服を身に纏った《閃光》アスナが顔を出す。

「ウィナー表示、あったか!？」

普段出さない大声を張り上げるが、それほど有り得ない事態なのだ。

しかし顔を蒼白にして力なく首を振るアスナを見て、言葉を聞かず

とも結果が解ってしまった。

「無いわ！システム窓もないし、中には誰もいない!!」

「やっぱりか……」

何度も何度も広場を見渡すが、たかが数秒間俺一人が探して見つけれられるはずもなく、数秒が経つと、やがて誰かの声が聞こえた。

「……ダメだ、三十秒経った……」

もう消えてしまったシステムウインドウを探すのを諦め、一階にいたNPCシスターの横をすり抜け、キリトとともに教会の二階へと上がる。

二階は、宿屋の部屋に似ている四つの小部屋があるが、ドアロックはできない。うち三部屋を通り過ぎて、目視でも、俺の索敵でも誰も見つからず、俺より索敵スキル熟練度が高いキリトですらなんの反応もなかったのだろう。

本当に幽霊のような殺人者だと不気味に思いつつ、問題の四部屋目の扉を開け、中に入る。

先に走って教会の中に入って、既に中にいたアスナが毅然と振る舞っているかに見えるが、表情が固いことから、少なからずショックを受けているようだった。

「……教会の中には、他に誰もいなかったよ」

やはり沈んだ声で報告をしたキリトに、KOB副団長は問い返してくる。

「ハイディング隠蔽アビリティ付きのマントで隠れてる可能性は？」

「それはない。キリトの索敵スキルを無効化するほど性能が高い物は、多分最前線でもドロップしない」

「……ハチ君ならできそうだけどね……」

呆れ四割、冗談四割、本気四割ほどの割合に聞こえたアスナの声。

……十二割になっちゃった……

「おい、冗談でもそう言うこと言うのやめろ。何？俺が第一容疑者として疑われてるの？」

「そんなつもりはないけど……攻略組でも一番ハイディングが巧いのハチ君だし……」

「うん、私もエイトを看破<sup>リビール</sup>できる自信があんまりないよ……」

えー？お前ら最初の頃は二層であっさりリビールしてたじゃん。あれから隠蔽スキル熟練度が上がったのは事実だけどさー。

「……ち、違う！冤罪だ！俺は無実だ！」

「犯人は皆そう言うんだよ？大人しく吐くんだ、エイト！」

俺の結構本気な無実主張を、なぜかノリノリで返してくるキリト。刑事なら食いそびれた晩飯代わりにカツ丼下さい。

「……それじゃあ、検証してみたらどうかしら？」

「え？」

頭脳明晰副団長様が考えた方法はこうだ。

俺が二階階段前から隠蔽を発動させ、アスナがいる問題の部屋まで歩き、その部屋に続く廊下で顔を壁に向けたキリトが索敵スキルを発動させて待機、俺が来たと思ったら裏拳をする。

見事気づかれずにアスナがいる部屋まで辿り着いたら即逮捕<sup>景品獲得</sup>☆気づかれたらキリトの裏拳炸裂<sup>罰ゲーム執行</sup>★……どっちにしても俺が損する検証である。

もちろん俺は拒否したが、その場合は問答無用で牢屋送り<sup>犯罪者認定</sup>、本気でやらかなきや裏拳<sup>罰ゲームの上</sup>&牢屋送りである。……理不尽だ。

そんなこんなで検証を開始した訳である。

「はあ……」

開始してすぐに溜め息を吐き、歩いていく。といっても、普通に歩いているわけではなく、隠蔽スキルと《忍び足<sup>スニーク</sup>》スキルの複合技を使っている。

アスナは固さは取れてきて、少しフランクになったが、その分遠慮



もなくなってきた。俺のAT<sup>心</sup>フィールド<sup>壁</sup>を侵食してくるので、思わず、助けて母さ〜ん！とか言っちゃうレベル。

……まあ、そこまでイヤなわけではないし、あれが元々の性格だとしたら否定する気もない。ただ自分の見た目を理解し、適切な距離で接してくるなら八幡的にポイント高い。

アスナに対する八幡ポイント評価は、ようやく黒い影が視界に入ったため一時保留。

そーつと、音もなく近づいていき、真後ろに。頭がピクリと動き、漆塗りのような艶やかな髪がハラリ、と一房、肩から落ち、甘い臭いが鼻腔をくすぐる。

後ろを過ぎ、アスナがいる部屋のドアをガチャリと開けると――

――満面の、閃光様がいました。

「はい、逮捕♪」

そう言うとロープのポップアップ窓を出し、結束ボタンを押して、俺をグルグル巻きに――え？これ冗談だよ？ジョークだよ？

「さ、黒鉄宮に行きましょ？」

あれ？事件解決？そんなわけねーよ！冤罪だよ！

そのままズルズルと引き摺られる俺。

あれ？俺って無実だよな？なんか自信なくなってきた……

やはりキリトが聞き込みをするのは、なかなか辛いものがある。

廊下をズルズル引き摺られている間に、アスナがお願いをしてくる。

「ハチ君、この圏内事件の捜査を手伝って？」

「こ、断ったら？」

「そんなに黒鉄宮に行きたいの？」

……違った。お願いじゃなくて脅迫だった。

「わ、解りました……」

ここまでするか？それとも、俺ってここまでしないと手伝わないと思われてんの？そこまでしなくても手伝いますよ？……多分。

「お前、ヤンデレの素質あるかもな……」

ポツリと呟いた言葉は、アスナには届くことはなかった。

ようやくロープをほどいてくれ、晴れて自由の身となった俺。シャバの空気が美味しいぜ……

それはいいのだが、事件の方は誰が、何で、どうやっての一つも検討がつかない。

暫定的探偵トリオを組んだ（俺は組まされた）俺達は、ひとまず証拠物件である槍とロープを回収し、教会の出入り口へと戻る。

キリトの知り合いであろう二人のプレイヤーにキリトが声を掛け、ここを通過した人はいないか？と訊ねたが、誰もいなかったらしい。

「……なあアスナ、入り口に監視がいたなら、検証の必要なかったん

じやないか？しかもよく考えたら事件が起きたとき、お前らと一緒にいたから、アリバイあるし……」

「……言質はとったからね？」

確信犯ですか……怒ればいいのか、さすが副団長と感嘆すればいいのか……

制服は白いのに腹の中が案外黒い副団長様と話していると、キリトが広場に出てプレイヤー達に声を掛けていた。

「みんな、さっきの一件を始めから見えた人はいない？」

数秒後。おずおずといった様子の女プレイヤーが一人、人垣から出てきた。見たことがないプレイヤーだ。武装はなんの変哲もないNPCショップで売っている片手剣のことから、どうやら観光目的で来たことが窺える。

こちらをチラリと見て、ヒツと声を漏らしている。

声を漏らしたことに、俺より女プレイヤーの近くにいるはずなのに気づいていないキリトは、女プレイヤーに優しげな口調で声を掛けた。

「あ、あの……まず、お名前は？」

インタビュウ？解っていたことではあるが、キリトのコミュニケーションスキルは、見ず知らずの人と話せるほどの熟練度はないらしい。

「あ……あの、私、《ヨルコ》っていいいます」

震える声は、どこかで聞いたことがある……というより、さっきの悲鳴の声の主か。

名前を聞いて、これ以上なにを訊けばいいか思い付かなかったのか、泣く泣くキリトはアスナとバトンタッチする。……お前はよくやった、と人類最強の兵長風に心の中で言っていると、キリトの後を継いだ、俺達三人の中では一番コミュニケーション力が高いアスナが質問する。

「あの……さっきの悲鳴は、あなたが？」

「は……、はい」

濃紺色のウェーブ？がかかった髪を揺らして、女プレイヤー——ヨルコさんは頷く。ざっとした年齢は、俺と同じくらい——十七、八歳

くらいといったところか。

髪と同じダークブルーの瞳を揺らし、うつすら涙の膜が瞳を覆っている。

「私……、私、さつき殺された人と、友達だったんです。今日は、一緒にご飯食べに来て、でもこの広場ではぐれちゃって……それで……もしたら……」

それ以上は言葉を紡げないと言わんばかりに口許を押さえたヨルコさんをアスナが教会の内部に導くの見ながら、俺は考えつく仮定をできるだけ整理していた。

まず一つ、デュエルで死んだ可能性は限りなく低くなったことだ。飯を食いに来てデュエルを——それも《死ぬ確率が高いデュエル全損決着モード》をする奴はいないだろう。

しかしそうになると、少し解らないことも出てくる。なぜ男はフルプレート・アーマーを着てたのか、ということである。

普通、パーティーで狩りをしていて、終わって直ぐに待ち合わせをしたと考えるだろうが、ヨルコさんは『広場ではぐれた』と言っていた。

つまり、少なくとも広場ではデュエルはなかったことが解り、食事に鎧を着てくるのもそうだが、どんな地味な鎧でも目立つ全身鎧装備の人を見失ったこと、更には死んだ男の抵抗がなさすぎたことがおかしい。

仮に教会の問題の四部屋目でデュエルしたとしても、胸に槍を刺され、首にロープを結束され、持ち上げられて窓から落とされるまでに、あまりにも抵抗がなさすぎる。

継続ダメージといっても、そこまでHPが急速に減るわけではないから、槍が刺されたなら抜けばいいし、ロープを結束されたなら武器で攻撃して切ろうとするなりすればいいし、持ち上げられたなら暴れればあんな重装甲だったら半端ない重さのはずだから、支えることなどどのプレイヤーでも不可能だろう。

などなど、例をあげればキリがないほどこの事件は不可解なことが多い。……まあ、デュエルのウィナー表示が見つからない時点で不可

解なのだが……

限られた情報で考えても解るわけないか、と頭を切り替え、俺を置いていった二人の後に続いて教会に入ると、何列も並んでいるベンチに三人は腰かけていた。

アスナはゆっくり、ゆっくりとヨルコさんの背中を子供をあやす様にさすっている、やがてヨルコさんは泣き止み、聞き取れるギリギリの声ですみませんと言った。

「ううん、いいの。いつまでも待つから、落ち着いたら、ゆっくり話して、ね？」

「はい……、も……もう大丈夫、ですから」

そう言うのアスナの手から体を起こし、こくりと頷く。

「あの人……、名前は《カインズ》っていいいます。昔、同じギルドにいたことがあつて……。今でも、たまにパーティーを組んだり、食事したりしてたんですけど……。それで今日も、この街まで晩ご飯食べに来て……。」

若干落ち着いたものの、未だに震えが残る声でヨルコさんは続けた。

「……でも、あんまり人が多くて、広場で見失っちゃって……。周りを見回してたら、いきなり、この教会の窓から、人——カインズが落ちてきて、宙吊りに……。しかも、胸に槍が……」

……話を聞くに、はぐれてから十数秒後には、フルプレート・アーマーの男……。カインズが窓から吊るされていたということか。……。そんな速攻決着デユエルがあるのか？

「その時、誰かを見なかった？」

アスナの問いに意識を話に戻す。ヨルコさんは一瞬黙ったが、ゆっくりと首を縦に振った。

「はい……。一瞬、なんですけど、カインズの後ろに、誰か立ってたような気が……。しました」

そうになると、あの衆人環視の中を、誰にも気づかれず、悠々と脱出したことになる。

まさに《幽霊》、《暗殺者（アサシン）》、《忍者》など、様々な言葉が

浮かんでくる。

デュエルによる殺人は考えにくい。まさか、このSAOに、アンチクリミナルコードをも無効化する、未知のスキルがあるのか……？

ヒースクリフの《神聖剣》のような、一人しか取得できない《ユニークスキル》だったなら、よくはないが、まだいい。圏内殺人をできるのは一人だけなのだから。

しかし、条件さえ満たせば誰でも取得できる《エクストラスキル》だったなら、それこそSAOには心休まる場所はもうなくなる。

同じことを考えていたであろう二人の背中が僅かに震えた。しかし、ヨルコさんに心配させまいと思ったのか、直ぐに顔をあげて訊ねた。

「その人影に、見覚えはあった？」

「……………」

少し考える素振りを見せたヨルコさんだったが、解らないといった様子で首を横に振った。

あと一つ、訊かなければいけないことがある。答える側はイヤな気持ちになるだろうが、イヤなガサ入れは俺の専売特許だ。

「その……カインズが恨みを買っていた人とか、疎まれていたりしてたことは……？」

予想通り体を硬くしたが、訊かない訳にはいかない。レッドプレイヤーの快樂のために殺されたならともかく、それ以外なら動機は必ずあるはずなのだ。

しかし、ヨルコさんはまたも首を横に振った。一言すいませんでしたと謝っておく。

大まかに考えて、犯人の可能性は二つ。一つはレッドプレイヤー、もう一つはヨルコさんが知らないが、カインズと何らかのトラブルがあった人だ。

もちろん他にも色々あるだろうが、候補を絞らなければキリがない。

しかしレッドプレイヤーというだけで、カーソルがオレンジの奴、カルマ回復クエストをしてグリーンにした奴、潜在的にその傾向があ

る奴などを考えたら数百人はいるだろう。

これは骨が折れそうだという思いがこもった俺のため息は、見事に二人とシンクロした。

いつか、比企谷八幡にも愛せる人がきつと見つかる。

一人で宿屋に戻るの怖いと、のヨルコさんを一緒に着いていき——というよりは、護衛的な意味合いが強いが——ちゃんと部屋に入るところまで見届け、俺達は転移門広場に戻った。

事件から約三十分後。さすがに人はほとんどいなくなっていたが、広場にはまだ二十数人ほどの、主に攻略組がいた。……いつの間にか呼んだんだ？

そんな疑問に答える人はいるはずもなく、キリトとアスナは今まで聞いたこと——殺された男の名前が《カインズ》だということ、殺害方法は全く不明だということ、そして、ことによると、未知の《圈内PK》なるものが存在するかもしれないこと。

「……という訳だから、当面は街中でも警戒した方がいいって、できるだけ広範囲に警告して下さい」

キリトの言葉を聞きながら、俺がいる必要性が皆無じゃね？と思いつつながら攻略組を見ると、一様に真剣な面構えで頷いていた。

「分かった。情報屋のペーパーにも載せてくれるように頼んどく」

装備からして、大手ギルドに属しているであろうプレイヤーの言葉を潮に解散した。今何時かなくと思いつつ視界隅の時計に目を向けると、午後七時過ぎだった。

「……次どうすんだ？」

解散？帰宅？休憩？睡眠？そんなことを考えていたが、アスナが僅かな間もおかずに言ったのは、どれでもなかった。

「手持ちの情報を検証しましょう。特に、ロープとスピアを。出所が分かれば、そこから犯人が追えるかもしれない」

うええ……と思っていたのが顔に出たのか、睨まれたため、(できる限り)真面目な顔をして言った。

「な、なるほどです。動機がダメだというなら物証って訳ですね」

思わず変な言葉遣いになってしまったです……

「でも、そうなると《鑑定》スキルが必要になるよ？二人とも上げてるの？」



現在俺のスキルスロットは十二個（本来は十一個）あるが、そんなものはとっていない。一つを除き、全部バリバリ戦闘用スキルだ。

「俺はとっていない」

「そうだよね……アスナは？」

おいおい、キリト。とってるわけないだろ？コイツ、少し前までは泣く子も黙る攻略の鬼だったんだからな」

「フンッ！」

「なッ!？」

い、一本背負い……痛くはないけど、背中がビリビリする……

「なにやってんの、二人とも……」

「んんっ！わたしもとってないわ」

まさかまた無意識に口に出てたのか？そのうち小町と戸塚への愛の言葉が漏れそうで怖い。そしてアスナさんもつと怖い。

「そうなる……二人とも、鑑定スキルとっている人にアテはない？」

「ない」

「うーん……友達の、武器屋やっている子が持つてるけど、今は一番忙しい時間だし、すぐに頼むのは無理かなあ……」

へえ……コイツに友達なんかいたんだ

「なッ!!」

み、鳩尾……そのうち一層のセンチネルに対してやってたみたいに喉を突かれたり、男子最大の急所を蹴られそうで怖い……ジークンドーでも殺ってたの（誤字ではない）？お前世○さんかよ……

「な、なにすんだ……」

「……いや、なんか不快なことを考えられた気がするから……」

やべえよコイツ。かくとうに加えてエスパタイプだよ。……と  
いうことはゴーストタイプが苦手なのか？

「そ、そういうえば、キリトは心当たりないのか？」

「熟練度が不安だけど、あるにはあるよ」

なんで訊いたんだ……早く言ってくれば血名鬼死断負苦断腸（血盟騎士団副团长）の染紅（閃光）様に殴られずに済んだの  
「にッ！」

あ、顎……このやろう……アバイオレンスナと呼ぶぞ……

「ほら、二人とも、早く行こうよ」

「あ、ああ、そうだな」

顎を殴られフラフラする頭ながらも、なんとか千鳥足で着いていくのだった……

五十層主街区《アルゲード》は、某オタク都市の様な猥雑さで俺達三人を迎えた。

攻略組が四十九層を攻略してからまだそれほど経っていないのに、目抜き通りの商店街には無数のプレイヤーショップが軒を連ねている。なぜかと言うと、ここは店舗物件の値段が驚くほど安いらしいのだ。

近々キリトもここにホームを買おうと計画しているらしい。俺はホームを買うなら静かなところがいいです。

人酔いしそうな喧騒の中、足早に進もうとするが他二人が進まない。

一人はなんか串焼き肉みたいなものを買っていて、もう一人は武器屋を見ていた。

「……なにやってんの？お前ら」

俺が言うのもなんだけど、何しにきたの？観光？

「だってさつきはサラダつっただけで出てきちゃったじゃない。結構イケるよ、これ」

「その……つい……珍しい武器とかあると……」

なにやってんだという意味合いを込めてため息を吐いていると、アスナが左手を——正確には左手に持った、謎の店で買った、謎のタレ

がかかっている、謎の肉を——差し出してきた。

「……あの、なんですか、これ」

「元々ご飯は奢るって話だったでしょ？」

奢られるものが串焼き肉とは随分質素だが、こっちの方が罪悪感がなくていい。一言お礼を言っておいて串焼き肉を口に運ぶ。なかなか美味い。

「なんか美味しそうだね……私もちよつと買ってくるね」

そう言い残し、キリトは謎の店に早歩きで向かっていく。……途中で人にぶつかっていたが。

そんな光景を微笑ましげに見ていると、視線を感じた。というかアスナだった。

「……なんだよ」

「……別に。ただキリトちゃんは大事に想われてるなーって」

「……そうか？」

「……そうだと思うけど。もしかしてハチ君ってキリトちゃんのこと好きなの？」

なに言ってるの？ヤバイな、天使に対するとこういう感じになっちゃうだけなんだが、考えてみればキリトは妹（小町）でも男（戸塚）でもないんだ。自重せねば……

「そういう感じではない。あれだな……天、じゃない、妹みたいな感じだ」

「ふーん」

まだ疑っているような声音だったが、キリトが戻ってきたためこの話題は強制終了。

そもそも俺は、本当の意味で誰かに恋愛感情を抱いたことがないのだろう。人の思いは、季節や人間関係と同じく、時間と共に知らず知らずのうちに移ろうものだ。だから、いつか俺にも心の底から愛せる人が現れるのだろうか……などと柄でもないことを考え、先を歩く二人の後に続いて歩いた。

……さしあたっては、このゲームをクリアして、俺を養ってくれる人を見つけてからだな。

エギルが営む雑貨屋に着いたのは、串焼き肉が全部腹のなかに収まって、丁度いい具合に膨れた頃だった。

「……おっす」

「……客じゃない奴に『いらっしやいませ』は言わん」

雑貨屋店主兼斧戦士エギルは、巨大な相貌と厳つい顔によく合うむくれ声で唸り、狭い店内の客に呼びかけた。

「すまねえ、今日はこれで閉店だ」

えーっ、という不満の声は、多少なりともこの店が繁盛していることを示している。筋骨隆々の店主はペコペコ頭を下げて全員追い出し、店舗の管理メニューから閉店操作を行う。

様々なものが置いてあり、混沌と化している陳列棚が自動で収納され、表の錠戸が閉まる。

……おお、あれだな、なんか秘密基地っぽい。ラタ○スクみたいだな。小汚ないし陰気な感じだけど。

「あのなあエイトよう、商売人の渡世は一に信用二に信用、三、四がなくて五で荒稼ぎ……」

……荒稼ぎしたら信用なくなるんじゃないやねーの？さすがアコギな商売しているだけはあるわ。などと突っ込み満載の渡世は俺の後ろにいる副団長殿を見たときに途切れた。

禿頭の頭と蓄えた髭をプルプル震わせ、棒立ちになるエギルに、眩い笑顔でアスナは言った。

「お久しぶりです、エギルさん。急なお願いをして申し訳ありません。どうしても、火急にお力を貸して頂きたくて……」

厳つい顔がだらしなくなり、エギルはゴリラのドラミングの様に任

してくださいと力強く胸を叩き、お茶まで出てきた。  
本当に……美人は得で、男は損だな……単純的思想過ぎるわ……

武器の鑑定を雑貨屋に頼み、彼らは僅かな手がかりを得る。

二階に移動して、事の顛末をすべて聞いたエギルは、この一件がいかに重大かを理解したようで、両目を鋭く細めた。

「圏内でHPがゼロになった、だとお？——デュエルじゃない、というのは確かなのか」

「……なら逆に訊くが、お前は誰かと飯食いに来てデュエルをするのか？それも《完全決着モード》を」

巨漢エギルは顎に蓄えた髭に指をあて、僅かに考える素振りを見せてからそりやないなと答えた。

まあそりやそうだろう。飯を食いに来たわけではなくても、普通は完全決着モードでデュエルなんてしないだろう。この世界のHPの全損は、現実世界の死と同義なのだから。やるとしても、途中で降参をするだろう。俺だったら半減決着モードでもやらない。アスナとのデュエルは、例外中の例外中だ。

「それに、直前までヨルコさんと一緒に歩いてたなら《睡眠PK》の線もないしね」

補足するように付け足してくる頭脳明晰副団長ことアスナ。……いや、解つてんなら昼寝するときにはせめて《索敵》スキルの接近警報をセットしろよ……。それとも索敵スキルを取ってないの？

「……一つだけ言えるのは、この一件は突発的殺人じゃなくて、計画的殺人つてことくらいだ。……エギル、こいつを鑑定してくれ」

ウインドウからアイテムストレージを開いて操作し、被害者を吊り下げていたロープを実体化させる。なんの変哲もないただのロープだ。

エギルは片方だけ輪になっているロープを目の前に持ってきて、いかにも嫌そうな顔をして鼻を鳴らした。

エギルは開いたポップアップウインドウから、《鑑定》メニューを選択する。俺達みたいな戦闘用スキル構成組とは違い、商人であるエギ

ルならばある程度の情報は引き出せるだろう。

二人は真剣な顔で、俺はなんとなく部屋を見回していると、鑑定結果が出たのか太い声で解説した。

「……残念ながら、プレイヤーメイドじゃなくNPCショップで売ってる汎用品だ。ランクもそう高くない。耐久度は半分近く減ってるな」

「そうだよね……あんな重装甲のプレイヤーを支えたんだし……きつと、ものすごい加重だったと思うよ……」

確かに加重は凄かっただろうな。ざっと見ただけで、百キロはあったように見えたし。……しかし殺人者にとっては俺達観衆に見える数十秒間持てばよかったのだろう。

「まあ、ロープにはあんまり期待はしてなかったしな。本命はどつちかと言えば……こつちだ」

開いたままのストレージを再び操作して、今度は由比ヶ浜のクツキーくらい禍々しいあの短槍を实体化させる。あれだな、この槍がNPCショップかプレイヤーショップで売られてたなら、その店の名前はジョイフル本田だな。

未だ信じきれないが、確かにこの槍が一人の命を奪った凶器であることは確かなので、そーッと渡す。

凶器はこのカテゴリの武器にしては珍しく、色が黒で統一されていて、全長は一メートル半、三十センチくらいのクリップがあり、そこから伸びるように柄があり、先端には十五センチの穂先が妖しい金属光沢を見せている。

遠目に見ても分かった、びっしり生えている短い逆棘のせいで、一度深く刺さると容易に抜けないだろう。相当な筋力値が要求されるはずだ。

この場合の筋力値とは、プレイヤーに設定された数値的パラメータだけではなく、脳から出されなうヴギアが延髄でインタラプトする信号の強度も含まれる。つまり某初号機パイロットの名台詞の「逃げちゃダメだ」は、逃げてはいけないという自己暗示と自分を強くするためにやっていたのではないだろうか。違うか？違うな。

……まあ、つまり俺が言いたいののは、カインズは槍だけに殺されたのではなく、自らの死への恐怖で死んだとも言えるのだということだ。

初号機パイロットの名台詞を思い出していると、鑑定を終えたエギルの声が聞こえた。

「PCメイドだ」

PCメイド。別にパソコンが造った訳ではなく、《鍛冶》スキルを習得したプレイヤーなよって造られた物であるということだ。そして、プレイヤーメイドの武器は必ず造ったプレイヤーの《銘》が記録される。加えて、恐らくこの槍は特注品だろう。こんなMobに効果が無い、プレイヤーキル特化の武器は店にあっても売れないだろう。

「誰ですか、作成者は？」

切迫したアスナの声に反応し、エギルはもう一度システムウインドウを見下ろしながら答えた。

「《グリムロック》……綴りは《Grimlock》。聞いたことねえな。少なくとも、一線級の刀匠じゃねえ。まあ、自分用の武器を鍛えるためだけに鍛冶スキルを上げてる奴もいないわけじゃないが……」

この面子で一番顔が広い……というよりは知り合いが多いエギルでも知らないプレイヤーなんて俺達が知っている訳もなく、部屋は静寂に包まれた。

「……ま、なんにせよそのグリムロック氏を探すってことでいいんだよな？」

「そうね、この武器を作成できるレベルに上がるまで、まったくのソロプレイを続けているとは思えない。中層の街で聞き込めば、《グリムロック》とパーティーを組んだことがある人がきつと見つかるわ」

「確かにな。こいつらみたいなのがきつと居るとは思えん」

そう言つて俺達——正確には真つ黒黒のキリトと灰まみれの俺の方を見てくる。

「うう……私だつてパーティーくらい組むよ……」

「ボス戦だけでしょ？」

「うう……エイトオ……」



見事に一刀両断されて斬り捨てられたキリトが俺に助けを求めように見てくる……アスナ、グツジョブ。

「まあ必要以上には組まないけど、組むことくらいはあるぞ。一週間くらい前にもパーティー組んだしな」

確か久しぶりに会ったフィリアと組んだな。宝探しに付き合わされたが、俺もそこそこ楽しいし、ちゃんとりターンもある。

「嘘（だろ）……」

戦慄したハゲ（エギル）と天使（キリト）と鬼（アスナ）の三人。おい、短槍落とすくらい衝撃の事実だったの？カラアアアとか音たてて落ちてるよ？

「おい、危ないぞ、槍を落とすな」

「ハッ！す、すまん」

いそいそと槍を慎重に拾い上げているエギルを横目に見つつ、二人の方に目を移すとなにやら秘密話のようにこしょこしょと話している。今までの経験（トラウマ）から言うと、こういうパターンのときは百パーセント悪口だ。いや、ホントさ、小学生って酷いよね。せめて聞こえないところで言えよ……

なんか收拾つかなくなってきた。どこまで話してたっけ……確かグリムロック氏がパーティーを組んだことがないわけないから要中層での聞き込み……だったか？

……なんにせよ、そのグリムロック氏とは（知らない人とは全員だが）話したくないものである。

普通人殺し特化の武器なんて作成する鍛冶屋はいないだろう。いとすれば、金目的の奴か、倫理観が薄い奴か——下手をするとレッドギルドに属しているレッドプレイヤー、またはオレンジプレイヤーの可能性だつて捨てきれない。そんな人物に近づきたい人なんて、マトモな感覚を持つている人なら誰でもいないだろう。

いや、この極限状態の（命のやり取りをしている）時点で、このアインクラッドには正常な感覚の持ち主は未だはじまりの街にいるプレイヤーなのかもしれない……などと考えていたこの時、俺はまだ知らなかった。今日から約四ヶ月後の八月、俺は普通じゃなくなつた

と明確に自覚することを。

ようやくカオスな空気が元に戻り、さつきまでなぜかジト目で俺を見ていたキリトが口を開いた。

「……話が逸れちゃったけど、グリムロックさんを見つけて話を聞けるとしても、タダで聞けるとは限らないんだよね……」

守銭奴魂が行動に出てきて首を横にブンブン振っているエギルは放っておく。

「三人で分けましょう」

うえ、もしそうだったらボロい服装で金がないようにグリムロック氏に見せよう……

そんなことを考えていると、ふとまだ聞いていないことを思い出した。

「……そう言えばエギル、そのショートスピアの名前はなんなんだ？」  
雑貨屋店主兼斧戦士兼守銭奴エギルは、三たびのウインドウの見下ろしでショートスピアの固有名を答えた。

「えーつと……《ギルティソーン》となってるな。罪のイバラ、ってところか」

武器の名前に深い意味はないのだろうか、名前を聞いた瞬間、ショートスピアがより一層妖しく見えた。

「罪のイバラ、ね……」

……それにしても、某罪の王冠のヴォイドにありそうだなーと思っただ俺は悪くないと思う。

黒鉄宮の生命の碑は、比企谷八幡にとって感慨深い場所である。

俺達三人十なぜかエギルの四人で、アルゲードの転移門からアインクラッド最下層……つまり一層の《はじまりの街》に俺達は来ていた。目的地は黒鉄宮にある《生命の碑》という場所で、グリムロック氏の生存確認が目的だ。話を聞こうにも、生きてくれなきゃ不可能だからな。

一層——いや、アインクラッド中最大の街である《はじまりの街》は、春だというのに荒涼とした雰囲気に包まれていた。

この寒々しい雰囲気は、今日設定されている気候パラメータだけのせいではなく、プレイヤーがいないのだ。ボツチの俺としては喜ばしい限りだが、こうも人がいないと不気味だ。BGMも寂しげな音だし。

最近のはじまりの街で、《アインクラッド解放軍》がプレイヤーの夜間外出を禁止するなんてどこのお巡りだよと思うことをしていると聞いたが、案外本当なのかもしれない。その証拠に、出くわすのはどこかに《軍》の鎧を身に付けたプレイヤーだけだ。

しかも《軍》のプレイヤーは、俺達を見かけるたびに中学生を補導する警察官よろしく駆け寄ってくる。まあ、最強ギルド副団長の威圧で去っていくのだが。気分は水戸黄門。

「そう言えばエイト。どうやって落としたんだ？」

歩いている最中、エギルが二人には聞こえない声量で訊いてくるが、はしより過ぎて解らない。

「落としたって、何をだ？」

なんとなく俺も二人には聞こえない声量で返した。何？小銭？でもこの世界じゃ、オブジェクト化しないと落とせないはずだけだな。「あの二人だよ。攻略組の中ではもっぱらの噂だぞ？クラインなんか、たまに俺に愚痴ってくるくらいだ」

「……その意味の落としたって、所謂ラノベ主人公がヒロインを」と

か言うやつか？」

「それ以外に何があるんだよ」

やれやれみたいいなポーズやめろ。なんか腹立つ。

「誰だよ、そんな根も葉もない噂を流しやがったのは……」

「……ということは違うのか？」

「ああ」

確かに傍目から見たらそう見えるのかもしれないが、俺に限ってはそんなラブコメ展開はありえないのだ。今回はただ単に、乗り掛かった船だから手伝っているだけである。それ以外の時も、成り行きで仕方なくだ。

「……その割には女子と一緒にいる目撃情報が多いんだが……」

「は？」

なにそれ、雑貨屋ってそんな情報が入ってくるの？やだ、雑貨屋って怖い。

「例えばだな……茶髪のアフターシェイブの女子とか、同じく茶髪で青を基調とした装備をしている女子とかな」

……それシリカとフィリアだわ。やだ、情報が入ってくる上に正確だから、更に怖い。

「……た、確かにそいつらとパーティーを組んでたことはあるが、成り行き上仕方なくだ、仕方なく」

「ほう……じゃあ、これから新たな女子と関わる気は……」

「全くないな」

……即答した俺は知らない。今から約二ヶ月後の六月に、また新たな女子二人と関わることになることを……

「ま、なにせよ気を付けろよ？今や攻略組だけじゃなく、全プレイヤーにエイトは女たらしだと認識されつつあるからな」

「……は？」

その情報が一番知りたくなかったですよ、エギル……

あれから話題は変わり、《軍》が《課税》をするかもという噂をエギルから聞いて、お前の店も差し押さえ対象かもな、などと話していたら着いたようだ。

黒鉄宮は名は体を表すの典型的な建物で、文字どおり黒光りする鉄柱と鉄板が素材でできている建築物だ。

その建物の中には、時間が時間のためか誰もいなかった。

昼間は親しい者の死を突きつけられる場所なため、泣き声や悲鳴が絶えない。かくいう俺も、月一くらいの頻度でキリトと黒猫団の三人の墓参りに来ている。ある意味、戒めのために。二度と同じ失敗を繰り返さないために。

あの時、ちゃんと俺が黒猫団をコーチしていたら……などとifの話をしてもしょうがない。それは自らが下した選択であり、自己責任であり、時を巻き戻すことなど誰にもできないのだから。

そんな俺達にとっては戒めの場所でもある広間には、青めのかがり火に照らされた、幅数十メートルにもなる《生命の碑》がポツンとあるだけだ。

よもや、墓参り以外の目的でここに來ることがあろうとは……と不謹慎ながら苦笑しつつ《G》の段を探す。

Gr……Gr……《Grimlock》……あつた。横線は——なし。生きている。

「……生きているね」

「うん……そうだね」

同時に安堵の息を吐く二人を見ながら俺はエギルに訊ねた。

「……なあ、エギル。カインズの綴りって、《Kains》の他になんかあるか？」

ヨルコさんから言われたカインズの綴りは《Kains》だが、初対面の——それも、女の人の話を易々と信じる教育は、親父にされて

いない。それに、未だ信じきれないのだ。デュエル以外の方法で圈内殺人が起きたなど。

「え？そうだな……《Caynz》……じゃないか？」  
「そうか」

《K》段のカインズを二人が探している間に、俺は《C》段のカインズを探す。……あった。横線は——なし。

もちろんこのカインズが、ただの同姓同名で（綴りが違う人を同姓同名というのか知らないが）、事件に全く関係ない確率の方が高いが、情報を多く持っておいて損はない。

《K》段のカインズを見終わったらしい二人とエギルと共に、足早に黒鉄宮を出る。さすがに《軍》の徘徊プレイヤーも見当たらない。

街灯のカンテラだけに照らされている道を、終始無言のまま歩き転移門前広場まで着くと、アスナが口を開いた。

「……グリムロック氏を探すのは、明日にしましょう」

「うん、そうだね……」

キリトが同意して頷くと、エギルが八の字眉にして言ってくる。

「あのよおエイト……オレはだな、一応本職は戦士じゃなく商人でな……」

「はいはい、助手役をクビにすればいいんだろ？」

なんなら俺もクビにしてほしいものだ。システムのことはキリトが一番よく知ってるし、頭が一番アスナがいいのに、俺と一緒に捜査する意味が解らん。

俺と一緒に捜査する意味を考えると、巨漢エギルがすまねえなと言ってくるので、冗談めかして商品安くしろよ？と言っておく。

頑張れよ、というエールだけを残して、エギルは転移門に消えた。アスナも一度ギルド本部に戻るらしい。

「明日は、朝九時に五十七層転移門前で集合にしましょう。寝坊しないでちゃんと来るのよ」

「お前に言われたくね……ヒッ！す、すいません」

物凄い一睨みをしてから怒ったようにヒールをカツカツ鳴らして、アスナも転移門に消えていった。

「エイトも懲りないよね……」

「いや、なんとなく反論しちゃうんだよね……」

このアマ……みたいな感じで。雪ノ下と話しているみたい……いや、付き合いはもうアスナの方が長いのだから、雪ノ下と話しているとアスナと話しているみたいを感じる、と言った方が適切か？

「まあ、それはそうと、帰って寝なきやな。寝坊なんかしたら、後が怖い」

「そうだね……そう言えば、エイトって今どこの層を定宿にしてるの？」

「ん、ああ……四十八層の……確か……《リンダース》、だったか？」

俺が答えた瞬間、なぜか目をキラキラさせてくる。

「そうなんだ！私もリンダースに定宿があるんだ」

「そ、そうか……じゃあ、《リンダース》に一緒に行くか？」

これで求めていた言葉が違ったら、約束なんかすっぽかして軽く一ヶ月は宿屋に引きこもっていたが、頷く姿を見ると、どうやら合っていたようだ。

ボイスコマンドで《リンダース》を指定すると、僅かな浮遊感。再び地に足が着いた感触がすると、景色が変わっていた。

水路が網目のように広がっていて、一定の早さで回る水車は、どことなく俺を落ち着かせる。

さっさと帰って休もう……と思っていた時、突然六、七人のプレイヤーが俺達を囲んできた。

キリトが俺の後ろに隠れたのをコートが掴まれた感触で認識しつつ、半円形で俺達を囲んでいる。プレイヤー達を見ると、攻略会議の時に見かけた人がいた。名前は確か……

「《シユミット》さんだよ、エイト」

ああ、そうだ、シユミットだ。でもキリト。耳打ちすんな、こそばゆいから。

「……なんか用ですか、シユミットさん」

一応礼儀に倣って訊いておく。最大ギルドとわざわざ険悪になる必要もあるまい。……今の時点でも、どっちかというと険悪だが。群

れているのが強いと思い込んでいる時点で仲良くできそうにないし、する気もない。

「聞きたいことがあってアンタを待ってたんだ、エイトさん」

「へえ。何をですか？」

俺には意味を為さない（壁走りや壁蹴りなどで抜け出せる）ハラスメント行為である《ボックス》に近い隊列をしている《なんちやつてボックス》をしているリーダー格に再び問い返す。

「夕方、五十七層であった圏内PKのことだ」

その言葉を聞いて、キリトがより一層コートを強く握ってきたのを感じながら、視線で先を促す。

「デュエルじゃなかった……って噂は本当なのか」

向こうが敬語じゃないので、こちらも素の口調で質問に答える。

「少なくとも、ウイナー表示窓を見た奴はいないが、なんらかの原因で見落とした可能性も、ないわけじゃない」

「……………」

首の装甲をガシャンと鳴らして、シュミットは唾を飲み込んだ。二メートルくらいある、銀に青が差し色が入った大槍も、シュミットの体が揺れると共に、右に左に僅かに揺れる。

しばしの沈黙。静寂を破ったのはシュミットだ。

「殺されたプレイヤーの名前……《カインズ》と聞いたが間違いないか」

「ああ。事件を目撃した人はそう言った」

実際には生きているかも知れないが、《鼠》じゃないが不確かな情報なので言わないでおく。

「……知り合いか？」

「……アンタには関係ない」

「否定しないってことは知り合いなのか」

俺の一人合点のようにも聞こえる言葉に、シュミットが声を張り上げる。

「いい加減にしろ！アンタは警察でもなんでもないだろう！KOBの副長とこそこそ動いてるみたいだが、情報を独占する権利はないぞ



！」

その怒鳴り声に、聖竜連合メンバーは顔を見合わせ、キリトは怯えたようにシワになるんじゃないかというくらい力でコートを握ってくる。

反応を見るに、他のメンバーはろくに事情を知らずに連れてこられたらしい。御愁傷様です。どうやら事件に関係がありそうなのは、シュミットだけらしい。そしてシュミット、許すまじ。

「アンタが現場から、PKに使われた武器を回収してったことは知ってるぞ。もう充分調べただろう、渡してもらおう」

「あいよ」

明らかなマナー違反だが、調べたのは事実だし、早く帰りたい。渡しても鬼の副長（土方ではない）に怒られないだろうし。

あつさりとした答えに呆けているシュミットは放っておき、ショートピアをオブジェクト化する。

せめてものお礼に、ショートピアをボックスの隙間に投擲、光跡を残して槍は何処かに消えた。

事情を知っているシュミットだけが怯えていたが、やがて動きだし手早くストレージに槍を収めた。

憎々しげに残した言葉は、実に典型的なものだった。

「……あまりコソコソ嗅ぎ回らないことだ。行くぞー！」

なら堂々と嗅ぎ回ればいいんですか？と思っていると、聖竜連合の男達は転移門へと消えていった。

——さて、と。

二層の再現のように、彼らは議論を重ねる。

「DDAが？」

一応昨日のことを報告したら、僅かにアスナが眉をひそめた。

DDAとは、デイヴァイン・ドラゴンズ・アライアンスの頭文字で、《聖竜連合》の略称である。ちなみにアスナ属する《血盟騎士団》は、ナイツ・オブ・ブラッドの頭文字をとってKOBと言う。つまり俺達ソロプレイヤーはSP……つまり特Special Security Police別な護衛だ。やだ、知らず知らずのうちにアスナの護衛をさせられちゃってる！

そう言えば、ナイツ・オブ・ブラッドって、直訳で『血の騎士達』なのに、制服は白いよな……と、DDAの威光を全く気にしていない、普段の騎士服ではない血盟騎士団トップツィのアスナを見ながら思った。

サクラの月（つまり四月）二十三日の天候パラメータは、昨日とは打って変わって霧雨模様だが、アインクラッドでは雨のせいで風邪をひくことはない。ちよつと冷え込むくらいだ。

午前九時ちようどという、俺みたいな不真面目ソロプレイヤーにとっては早い時間に待ち合わせた俺達三人は、朝食がてら情報整理のために、手近なカフェテラスに入った。最大のトピックは、『DDAギルメン、一般善良なアインクラッド城民プレイヤーエイトから武器巻き上げ事件（俺命名）』だ。血盟騎士団副団長、《閃光》のアスナ氏に聖竜連合所属、シュミット氏のことを訊くと……

「あー、いたわねそんな人。でつかいランス使いでしょ」

……どうやらシュミットは、(少なくともアスナには)あまり知られてはいないらしい。隣れ、シュミット。

「ああ、なんか二メートルくらいあるバカでかいランス背負ってる奴だ」

そこで一息つき、極甘コーヒー（MAXコーヒーではない）を口に運ぶ。練乳をいれてないからか、やはりMAXコーヒーとはどこか明らかに違う。そもそもこの世界に練乳があるのか知らないが、MAXコーヒーが作れるのだからきつとあるのだろう。

同じくカップを抱えて、アスナが思案顔でカフェオレを見つめる。

「……実はそいつが犯人、てセンはないわよね？」

「断定は危険だけど、それはないと思うよ。もしシュミットさんが犯人だとして、槍をわざわざ回収しにきたなら、最初から現場から持ち去ればいい話だし……」

「ま、あのショートスピア器の形状と名前からして、犯人が何かメッセージを伝えるために残したと考えるのが妥当だろ」

「そうか……、そうだね。あの殺し方に加えて、武器の名前が《罪の茨》ギルティーンだしね……」

アスナが陰鬱な表情で呟いた言葉に、俺は更に付け加えるように口を開く。

「……あれならPKじゃなくて、一方的な虐殺……《公開処刑》と言った方が適切だろうな」

《公開処刑》一方的虐殺。未だかつてレッドさえ成していなかったことだ。その恐ろしさに、俺達三人は思わず身震いする。

「でも……そうになると、動機は《復讐》とかじゃなくて、《制裁》になるよ？」

「シュミット、ヨルコさん、カインズの三人が過去に犯人にとってなんらかの《罪》を犯したとしか思えないな。で、その制裁に公開処刑をした……」

「そう考えると、シュミットはむしろ、犯人側じゃなくて狙われる側、って感じだわね。以前にカインズと一緒に《何か》をして、その片方が殺されたから焦って動いた……」

「その何かが判れば、自動的に復讐者殺人した人も判る気がするね……」

「逆に言えば、その何かが判らなければ何も解らないってことだけだな」

「身も蓋もない言い方するわね……」

うっせえ、事実だろ。探偵漫画じゃないんだ。コロンでも金〇一でも緋弾〇アリアでもないんだよ。最後はラノベな上に、探偵じゃなくて武偵だし、アクション主体だけだな。しかも主人公がチートスペック、一級フラグ建築士だ。

一年半以上も昔に電子書籍で読んだラノベの内容を覚えている自分の脳を自画自賛しつつ、時刻確認のために視界端の時計に目を向ける。十時からこの近くにある宿屋にいるヨルコさんにまた話を聞かすらしい。

黒パンと野菜スープの朝食をゆっくり食べても時間が有り余ることに安心しつつ、モソモソと黒パンを千切って噛む。

小町の愛妻ならぬ愛妹（決してイマイチパツとしない訳ではない）朝食の方が百倍旨いな。そもそもあれだな、人を愛する気持ちを含め、感情がSAOでも表現できる時点で、デジタルデータ化出来るってことだよな。感情も随分安っぽくなったもんだ。

このままVR技術が研究されれば、人の感情さえもコントロールできそうだな、などとうすら寒いことを考えながら朝食を済ませる。

やることがない俺は、流し目でいつもと違う服装の二人を眺める。まずアスナ。いつもの騎士服ではなく、ピンクとグレーの細いストライプ？型のシャツに黒レザアのベストを重ね、ミニスカートもレースのフリルがついた黒、脚にはグレーのタイツ。更に靴はピンクのENAMEL、頭には同色のベレーと、なんかキメているみたいだ。そのらのリア充とは違い、ファツションには疎い俺にも判るほど服を着こなしている。

対するキリトは、ピンク、グレー、黒と三色を主色にしているアスナとは違い、全身黒だ。

上はリボンをあしらったブラウスにカーディガンを羽織っており、下は白い線でなんかの花が描かれているエスニック、靴はオックスフォードだ。小町に無理矢理見せられた偏差値が低そうなものファツション雑誌がこんなところで役に立つとは……

ちなみに俺は、長袖紺色のTシャツに、腕の部分は黄緑、胸の回りに太い灰色のラインが入っている白いフード付きパーカーを着ている。ズボンも黒、スニーカーは灰色という、まあ身の丈にあった冴えない服装だ。

俺のは適当に安い服を買ったため、これ一式で確か一万五千コルくらいだったが、女物の服となると皆目検討もつかない。

三万？五万？とどこか博打じみた思考をしていると、さすがに見すぎたのかアスナがこちらを見上げ、顔を逸らした。……ヤベ、見物料とか取られないだろうな……

「……なに見てるのよ」

「い、いえ、なんでもありませんー！」

あれはヤバイ。なに見てんだよ、ああん？くらいの目付きだった……

弾かれるような勢いでメニューウインドウを開き、自分でも何がしたいのか解らないまま操作を始める。リア充が待ち合わせの時にいかにも用があるみたいにスマホをいじるのと一緒だ。

俺の対角線上に座る、俺とは違う野菜スープを飲んでいるキリト、正面に座ってなにやらシチューっぽいものをスプーンでかき混ぜているアスナを見ながら、少し二層の時のことを思い出していると、アスナが話し掛けてきた。

「わたし、昨夜ちよつと考えたんだけどね。あの黒い槍の《貫通継続ダメージ》だけど……」

その言葉に、俺はアイテムを整理していたシステム窓から目を離し、キリトは俺とは違う野菜スープを飲んでいた顔を向ける。

「例えば、圏外で貫通属性武器を刺されるじゃない？そのまま圏内に移動したら、継続ダメージってどうなるのか、知ってる？」

「うーん」

まあそれが普通の反応だろうな。そんなシチュエーション稀有事態になることなんて、そうそうないだろう。今のところだが、モンスターは貫通継続ダメージがある攻撃をしてくる奴はいないしな。

「ごめん、知らない……。けど、毒や火傷による継続ダメージDは、圏内に入った瞬間消えるから、貫通継続ダメージも同じじゃないかなあ……」

「でも、刺さってる武器はどうなるの？自動で抜けるの？」

「……所有権がある奴のストレージに自動収納されるんじゃないか？所有権がある奴がいらないなら、武器が刺さってる奴の物になるとか」「でも、イマイチ確証に欠けるよね……」

「……んじや、実験するしかないんじやないか？」

「実験!？」

いや、実験と言ってもそこまで危険なものじゃないよ? どんなものを想像しているのか知らないけど。

そんなツツコミを心の中でしつつ、街区マップを開いて、ここから圏外に出られる門までの最短ルートを探した。

女子の何気ない行動が男子にトラウマを植え付けると、比企谷八幡は今でも思っている。

五十七層主街区《マーテン》の外は、節くれだった枯れ木が点在する草原だ。

ここが数週間前に最前線だった時、何回も通った筈なのに、全く覚えてない。季節が春に移り変わり、景観が変化していることもあるだろうが、攻略組は基本、攻略完了したフィールドは来ないのも原因の一つだろう。

霧雨のせいで、俺のチャームポイントであるアホ毛がへなりとしなっていく。

市街の門を出ると、《OUTER FIELD》の文字が表示され、警告される。ここからは《圏外》……つまりアンチクリミナルコードの庇護も保護も擁護も恩恵もない、一言で言えば強者生存の世界なのだ。

まあ、そうは言ってもすぐにMobが襲いかかってくる訳ではないのだが、緊張してしまうのはこの一年半で染み付いた無意識の癖なのでしようがない。

いつもの白い騎士服、黒革コート、灰色黒ラインコートにそれぞれ着替えた俺達の中で、唯一コートを着ていない細剣使いが話し掛けてきた。

「……それで、ハチ君。実験っていったいなにをするつもりなの？」

「ん、ああ……別に大したことじゃねえよ」

いつもの服装（装備）に着替えたので、手に装備されている指ぬきグローブを外しながら返答する。指ぬきグローブとか材木座みたいに中二臭くて嫌だが、ただでさえ紙装甲なので少しでも生存確率を上げるために装備せざるを得ない。

アイテムストレージとは違い、直ぐにアイテムが取り出せるポーチを探り、普段はスローイングダガーを使っているから滅多に使わないピックを出す。

アインクラッドの存在するあらゆる武器は、必ず斬撃、刺突、打撃貫通の四種類に分かれる。例えば俺やキリトみたいに片手直剣だったら斬撃武器、アスナのレイピアは刺突、メイスやハンマーは打撃、そしてカインズに刺さっていたショートスピアやシユミットのランスは貫通武器だ。

しかし投擲武器は少し勝手が違う。投擲武器と一口に言っても様々な種類がある。チャクラムやブーメランは斬撃、俺がよく使うスローイングダガーは刺突、スローイングピクは貫通と属性が分かる。つまり、今俺の右手に握られているピクは曲がりなりにも貫通武器のため、僅かながら貫通継続ダメージが発生するのだ。

既にグローブが外装備解除されてされている左手を眺めながら、今頃現実世界の俺含むSAOプレイヤー達の体は痩せこけてるんだろうなあ……などと、帰れるか分からない現実世界に思いを馳せる。

自分で自分の手の甲を刺すのは少し怖いが、男は度胸、女は愛嬌、オカマは最強、天使は桃源郷、ボッチは卑怯、俺が好きなのは妥協だ。

どうでもいいことで気を紛らわし、一思いに手の甲にピクを刺そうとする。今の気持ちは注射をされそうな幼稚園児だ。しかしそこでストップをかけられる。

「(ちよ……ちよつと) まってー!」

鋭い声に動きを一時停止し、代わりに口を動かす。

「……なんだよ」

二人に顔を向け、アイテムストレージから高価な治療結晶ヒーリングクリスタルを取り出すのを見て、あまりのオーバーリアクションにため息を吐く。

「大袈裟過ぎだろ……いくら俺の装甲が薄くても、さすがにピク一本じゃどうにもならんぞ……」

具体的にはコート脱いで、インナー脱いで、ズボン脱いで、ブーツ脱いだ上で攻撃がクリティカルヒットしないと、初級ソードスキルではさすがに死なないと思う……まあ肉体的に死ぬ前に、社会的に死ぬが。なんだよ、グローブとパンツだけって。中二病じゃなくてもはや要治療だな。

「ダメだよ! (バカ!) 圏外じゃなにが起こるか分からないんだよ(の



よ)!!?いいから(さっさと)パーティー組んで、HPバー見せて!」  
「解った。解ったから」

詰め寄ってくるからパーソナルスペースを保つために後ろに下がったらまた圏内に入っちゃったでしょうが。

また湿った草を踏みしめ、再び表示された《OUTER FIELD》の警告は、一回目とは違い緊張感なんて皆無だった。

圏外に出て、この一年半でも十回も使っていないであろうパーティー申請を二人に送る。直ぐに受託され、新たに俺より小さいHPバーが二本追加される。

「……ていうかさすがに治癒結晶<sup>ヒーリングクリスタル</sup>二個も要らんだろ」

ネットゲ用語にあるのか知らんが過剰回復<sup>オーバーヒール</sup>過ぎる。一個で全回復できるわ。現時点ではどんなSAOプレイヤーも(多分)。

「……私が回復するからアスナは回復しなくていいよ?」

「……いや、そういう訳にもいかないでしょ?万が一ということもあるし。回復要員は多い方がいいんじゃない?」

【攻略組に速報】どうやら第二次人外口論大戦が五十七層フィールドで起こっている件について。

なんかいいあらそってるけど、けんかするほどなかがいいっていうし、たのしそうだからほうっておこう。あははー。

……割りと本気で言い争っている姿が怖い。

あの迫力に比べれば、自分の手の甲にピックを突き刺すことくらい怖くない!と大分恐怖に対する神経が麻痺していることに気づかないまま《シングルシュート》のモーションに入り、ピックを突き刺す。

ピックが手の甲に突き刺さった瞬間、不快な痺れに僅かな鈍痛に襲われる。貫通武器をプレイヤーに使うと、ダメージ云々の前に不快な痺れのせいで戦闘に集中できなくなりそうだから、反射的に引っこ抜いてしまえそうだ。

初級ソードスキルの《シングルシュート》を使った筈なのに、八パーセントもHPが削れたのを見て、思わずなんでや!と関西人が聞いたら怒るであろう突っ込みを心の中でしてしまう。……まあ多分、レベルが上がるにつれ、防御力よりも攻撃力が上がっているからだろうが

……

「なんでいきなり突き刺したの（よ）!？」

「い、いや……決心が揺らぐ前に？」

「なんで疑問系なの……」

二人↓俺↓キリトと言葉のキャッチボール（最初は気迫が凄くて豪速球だった）をしていると、五秒経過したのか、ピックが刺さっている手の甲から血のような赤いエフェクト光が噴き出す。

HPバーを見たら○・五パーセントほど減っていた。これがカインズの命を削った貫通継続ダメージダメージに他ならない。《自動回復バトルヒーリング》スキルを計算に入れなければ、千秒で俺のHPバーが全損することになる。

「……早く圏内に入ってよー!」

「ひゃい!」

鬼の一喝で即座に圏内であるマーテンに入る。すると、HPの減少が——止まった。

五秒ごとに明滅するように赤いエフェクト光がフラッシュするが、HPバーは一ドットも減らない。やはり、圏内ではあらゆるダメージはキャンセルされるのだろう。

「……止まった、ね」

一応頷いて首肯しておく。

「貫通武器に刺されたまま圏内に入ると、武器は刺さったまま貫通継続ダメージはストップする、か」

「感覚は？」

「残ってる……これは圏内で武器を刺したままにするプレイヤーがないようにするための仕様、だな。多分」

「今の君のことだけどね」

まあその通りなのだが。今度は一気にピックを引き抜き、再び不快な感覚。思わず顔をしかめると、二人の両手で左手が握られていた——否、包まれていた。

「……なにやってんの？」

この仮想体アバターは、女子の体は柔らかいように設定されているのか？ テガ、スゴイ、ヤワラカイデス。

「だって、エイトが顔をしかめてるから……」

キリトのてんしのかお！こうかはばつぐんだ！エイトに80000のダメージ！

「これでダメージの残留感覚は消えたでしょ？」

アスナのギヤツプ僅かに頬を染めた上目遣いもええ！こうかはばつぐんだ！エイトに80000のダメージ！エイトはたおれた！

……じゃなくて。

「……そういうのは、ちゃんと相手を選んでやれ」

顔を背けながら言う。俺だったからよかつたものの、それ以外の思春期男子だったら、惚れて↓告白↓撃沈↓クラスに広まって↓トラウマに。のコンボが炸裂するから。そういうのは好きな男子だけにやりなさい、単純ビュアな男子のためにも。

実験は終了したため、痺れがとれた左手をズボンのポケットに突っ込み、ヨルコさんがいる宿屋があるマーテンの街に足早に歩いていった。

……べ、別に役得なんて思っていないんだからねッ！

何回目になるか判らない理不尽が、比企谷八幡を襲う。

十時キツカリに宿屋から出てきたヨルコさんは、どうやらグツスリ眠れなかったようで、目を瞬かせながらキリトとアスナにペコリと礼をした。俺はそもそも気づかれていない。

二人もお辞儀仕返しているの、一応俺もそれに倣う。

「ごめんね。友達が亡くなったばかりなのに……」

「いえ……」

軽くウェーブがかかったダークブルーの髪を左右に揺らし、ヨルコさんはかぶりを振った。

「いいんです。私も、早く犯人を見つけたいですから……」

言いながらまたも私服に着替えたアスナに目を向けたヨルコさんは、目を見開いた。

「うわあ、すごいですね。その服ぜんぶ、アシュレイさんのワンメイク品でしょう。全身揃っているところ、初めて見ましたー」

……誰だ、アシュレイって。阿修羅？確かにアスナは怒ったら阿修羅になるけど……

「……なあ、キリト。アシュレイって誰だ？」

「さあ……」

ワンメイク品とか言ってたから、多分職人クラスの人なんだろうが……

「知らないんですかあ!?!」

まるでダメな人を見る目で俺達を見てくる。いいだろ、別に知らなくても。

「アシュレイさんは、アインクラッドで一番早く裁縫スキルを1000にしたカリスマお針子ですよ！最高級のレア生地素材持参じゃないと、なかなか作ってもらえないんですよー」

「ほーっ（へーっ!）」

感心の声がキリトと被る。スキル熟練度を1000にするのは、一

朝一夕で出来るものじゃない。俺も主武器メインウェポンである片手剣のスキル熟練度が一〇〇〇になったのは、遠い昔という訳ではない。

そんなにすごい性能なのだろうか……と、見た目のセンスは解らないので、機能はどうなのだろうと思わずまじまじと眺めていたら、アスナは頬を引き攣らせ、一言怒鳴った。

「……ち、違うからね！」

「何がだよ……」

その服、アシユレイさんに作ってもらったものではないってことか？

俺の思考とキリトのため息が重なった。

得心したみたいな顔のヨルコさん、呆れた顔のキリト、思考放棄した俺を引き連れて、アスナは昨日飯を食いそびれたレストランの扉を潜った。

時間が中途半端だからか、店内にプレイヤーの姿はなかった。扉から充分距離のある奥のテーブルに座る。秘密話をしたいなら宿屋でロックを掛けるのが一番だが、聞き耳スキルで盗み聞きされた前例がある。

俺達同様ヨルコさんも朝食は済ませたようで、全員お茶をオーダーして、速攻で届けられた……三個。

「……あのー、すいません。お茶、三個しか届いてないんですけど……」

NPCに訴えかけるが、何も返事がない。仕方ないので持参のお茶をオブジェクト化する。

なんか微妙な空気になってしまった中、キリトがなんとか取り繕

う。

「んんっ！まず報告だけど……昨夜、黒鉄宮の《生命の碑》を確認したら、カインズさんは間違いなくあの時間に亡くなってたよ……」

その報告を聞いて、ヨルコさんは短く息を吸ってから瞑目し、静かに頷いた。

「そう……ですか。ありがとうございます。わざわざ遠いところまで行って頂いて……」

「ううん、いいの。それに、確かめたかった名前が、もう一つあったし」  
本当に何でもないように首を振り、アスナは一つ目の重要な質問をヨルコさんにした。

「ね、ヨルコさん。あなた、この名前に聞き覚えある？一人は、たぶん鍛冶職人で、《グリムロック》。そしてもう一人は、槍使いで……《シユミット》」

ヨルコさんの頭がピクリと震える。

少しの間をおいて、ゆっくりと、けど確かに肯定の意を示すジェスチャーがあつた。

「……はい、知ってます。二人とも、昔、私とカインズが所属してたギルドのメンバーです」

……なんらかの形で接点があると思っていたが、まさか同じギルドのメンバーだったとは……

こうなるとカインズが起こした《罪》はギルド絡み……いや、断定は危険だが、十中八九そうだろう。

ならば、次に訊くべきことは、そのギルドで《何があつたのか》ということだ。

嫌なことのがサ入れは俺の専売特許だ……って、昨日も同じことを考えたな……

「ヨルコさん、正直に答えて欲しいことがある。そのギルドに所属していた時……何か、トラブルがなかったか？」

真面目な空気に真面目な質問だからか、噛まずに言えたことに少し感激しつつ、返答を待つ。

長い沈黙の中で、ヨルコさんは震える手でカップを持ち上げ、唇を

湿らせてから口を開いた。

「……はい……、あります。昨日、お話できなくて、すみませんでした……。忘れたい……あまり思い出たくない話だったし、無関係だっ  
て思いたかったこともあって、すぐには言葉にできなくて……。――  
でも、お話します。《出来事》……そのせいで、私たちのギルドは消  
滅したんです」

長い話だったので、要点だけ言うと、昔所属していたギルドの名前は《黄金林檎》で、メンバーは八人の宿屋代と食事代のためだけの安全な狩りだけをしていたギルドだったらしい。

だが、半年前の秋口のある日、中間層のサブダンジョンに潜っていたら、真つ黒なすばしっこい小さなトカゲのレアモンスターにエンカウントし、誰かが投げたダガーが偶然当たり、倒せたようだ。

ドロップしたのは敏捷力が二十も上がる指輪だったらしい。参考までに言うと、今の俺が装備している首飾りで敏捷力が十七だ。

当然、ギルドで使うか売るか意見が割れたらしい。最終的に多数決で決めて、五対三で売却に。しかしそんな代物を中層の商人には扱えるはずもなく、ギルドリーダーが前線の大きい街に持っていき、オークション競売屋に委託することになったらしい。

相場や信用できる競売屋を調べるのに時間がかかるから、一泊の予定で帰ってくるリーダーをヨルコさん達《黄金林檎》のメンバーは待っていたが、結局帰ってこなかったらしい。

メッセージは来ず、追跡も出来ない。送ったメッセージの返信もなく、それでもリーダーが持ち逃げするはずがないと信じていたヨルコさん達は、嫌な予感がして何人かで黒鉄宮《生命の碑》を見に行つたらしい。

そこから先は言葉にされなかったが、予想はつく。引かれていたのだろう、無慈悲に無情に残酷に、リーダーの名アバターネーム前に横線が。

実際に体験していない人が言う安っぽい慰めの言葉や同情の言葉はともかく、掛ける言葉すら見つからない。

そんな空気を察してか、ヨルコさんは目尻を拭い顔を上げ、しつかりとした口調で告げた。

「死亡時刻は、リーダーが指輪を預かって上層に言った日の夜中、一時過ぎでした。死亡理由は……貫通属性ダメージ、です」

「……そんなレアアイテムを抱えて圏外に出るはずないよね。なら……《睡眠PK》かな」

キリトの呟きに、アスナも僅かに首肯する。

「半年前なら、まだ手口が広まる直前だわ。宿代を節約するために、ドアロックできない公共スペースパブリックで寝る人も少なくなかった頃よ」

「まあ前線近くは宿代もバカにならないしな。ただ……偶然とは考えにくい。となると、《黄金林檎》のリーダーを《睡眠PK》したのは、指輪のことを知っている……」

俺の推測を、ヨルコさんが引き継ぐ。

「……ギルド《黄金林檎》の残りの七人……の誰か。私たちもそう考えました。ただ……その時間に、誰がどこにいたのかを遡って調べる方法はありませんから……皆が皆を疑う状況のなか、ギルドが崩壊するまでそう長い時間はかかりませんでした」

何度目か解らない重い沈黙が、再び部屋を支配する。

ギルド《黄金林檎》で起きた出来事は、充分起こりうる物であり、また人間の《欲》を如実に表している。

レアアイテムを取り合つて、それまでパーティーやらギルドやらを組んでいた人と離散、疎遠になることは、MMOでは珍しいことじゃない。当然だ、人は人間関係よりも自分の欲を優先するのだから。特にこの異常な状況命懸けの下では、レアアイテムをめぐる争いが起きない方が稀有だ。

人間関係含め、そんなことが面倒だから一人ソロプレイヤーで攻略をしているというのもある。

しかし、僅か八人の《黄金林檎》でもこんな争いが起こるのだから、それより規模がでかい《血盟騎士団》は、アイテム分配をどのように取り決めているんだ？……とアスナに少しだけ目を向け、またヨルコさんに向き直す。

まだ、最低あと一つは訊かなければいけないことがある。

「その……指輪売却に反対した三人の名前は……？」



「またも数秒押し黙り、やがて意を決したような表情で答えた。

「カインズ、シユミット……そして、私です」

……意外だ。何が意外かと言うと、カインズ、シユミット共に重装甲装備なのに、なんで敏捷力を上げるんだ？それとも半年前はプレイスタイルが違ったのか？ということだった。

「ただ、反対の理由は、彼らと私で少し違いました。カインズとシユミットは、前衛戦士として自分で使いたいから。そして私は……当時、カインズと付き合い始めていたからです。ギルド全体の利益よりも、彼氏への気兼ねを優先しちやっただんです。バカですよね」

……さすがの俺も、ここで「リア充爆発しろ！」とか言うほどKYじゃない。ヨルコさんが圈内殺人をされて、仮想体を爆散されるのかもしれないのだから。

洒落にならない駄洒落を考えていたら、長く沈黙していた我らがコミュニケーション高い副団長様が柔らかい語調で訊ねた。

「ね、ヨルコさん。もしかして……あなた、カインズさんと、ギルド解散後もずつとお付き合いしてたの……？」

今度はアスナの質問に、俯いたまま顔を横に振り答えた。

「……ギルド解散と同時に、自然消滅しちゃいました。たまに会って、ちよこつと近況報告するくらいで……やっぱり、長く一緒にいればどうしても指輪事件のことを思い出しちゃいますから。昨日もそんな感じで、ご飯だけの予定だったんですけど……その前に、あんなことに……」

「そう……。——でも、ショックなのは変わらないわよね。ごめんなさいね、辛いこと色々訊いちゃって」

ヨルコさんはまたかぶりを振る。

「いえ、いいんです。それで……グリムロックですけど……」

ある意味一番訊きたかった話題を出され、思わず緊張してしまう。「……彼は《黄金林檎》のサブリーダーでした。そして同時に、ギルドリーダーの《旦那さん》でもありました。もちろんSAOでの、ですけど」

「え……。リーダーさんは、女の人だったの？」

SAOにおいては、同性婚はシステム的に不可能になっている。つまり、グリムロックが男ならば、必然的にギルドリーダーは女の人になる。

「ええ。とつても強い……と言つてもあくまで中層レベルの話ですけど……強い片手剣士で、美人で、頭もよくて……私はすごく憧れてました。だから……今でも信じられないんです。あのリーダーが、『睡眠PK』なんて粗雑な手段で殺されちゃうなんて……」

「……じゃあ、グリムロックさんもショックだったでしょうね。結婚するほど好きだった相手が……」

結婚。考えられない重みだ。現実世界では、今俺は十八歳、今年で十九歳、法律上はリアルで結婚できる歳だが、バク○ンじやあるまいし、実感すら湧かない。

「はい。それまでは、いつもニコニコしている優しい鍛冶屋さんだったんですけど……事件直後からは、とつても荒んだ感じになっちゃって……ギルド解散後は誰とも連絡取らなくなって、今はもうどこにいるのかも判らないです」

「そうか……最後に訊きたいんだが、今回の圈内事件……犯人はグリムロックさんの可能性があると思うか？あのショートスピアを鑑定したら、作製者がグリムロックさんだったんだが……」

この問いは、カインズが半年前に指輪を奪った真犯人であるかと訊いているのと同義だ。

思考を張り巡らせているのか、認めたくないと思つているのか、長い逡巡のあとに小さく首を縦に振った。

「……はい……その可能性はあると思います。でも、カインズも、私も、リーダーをPKして指輪を奪ったりなんかしてません。無実の証拠はなにもないですけど……。もし昨日の事件の犯人がグリムロックさんなら……あの人は、指輪売却に反対した三人、つまりカインズとシュミット、それに私を、全員殺すつもりなのかもしれません……」

俺達三人は、昨日と同じようにヨルコさんをもとの宿屋に送り届け、一週間分の食材アイテムを渡し（二人が）部屋からでないように言い含めた。

せめてもの配慮として、宿屋で最も広い三部屋続きのスイートに移動してもらい、一週間分前払いをしたが、暇潰しの道具などなにもない宿屋にずっと引きこもっているのも限界がある。（二人が）なるべく早く事件を解決すると約束をし、宿屋を後にした。

「……ほんとは、KOBの本部に移ってもらえればもつと安心なんだけどね……」

……あんな物々しい《鉄の都》にいたら、それこそ息が詰まるわ。確か……トランザム……じゃなくて、《グランザム》……だったけ？

「そうだね……だけど、本人が嫌ならしょうがないよ……」

もしヨルコさんがKOB本部に匿ってもらうなら、ギルドに事情……つまり、《黄金林檎》の事件を逐一報告しなければならぬ。カイNZの名誉のために、それは嫌だったのだろう。……なんとも、まあ、献身的なことだ。

転移門前広場に着くと同時に十一時の鐘が鳴る。

霧雨は上がったが、代わりに辺りには霧が出ている。

そんなときにふと、さっきのアシユレイさんがどーたらこーたらという話を思い出す。やはり防水性も凄いのか……？と、知的好奇心の赴くままに、またまじまじと見てしまう。

「……な、なによ」

「いや……そんなにスゴい人が作製した服なら、防水性も凄いのかな、と」

俺の装備にも防水性付加とかできないのか？コートが水吸ったりしてウザいときがあるんだが……

「ふ、ふふ、ふふふふ」

壊れたレコーダーみたいに声を出して笑っている阿修羅——否、あれは幽鬼だ。

「は、はは、ははは」

乾いた笑いしか出ねえ……あの幽鬼 阿修羅を止められるのは、誰にもいない。

いつの間に装備していたのか、レイピアを抜き放ち、ソードスキル  
のモーションになるように構える。あれは、アスナが最も得意とする  
《リニア》だ。

「ハチ君の……バカーツ！」

放たれた光を纏う剣は、まさに閃光。なぜかデュエルするときより  
剣速が速くなっていて、モロにクリーンヒット。

人々の驚きの声と、俺がノックアウトされて地面に倒れる音、息を  
切らした閃光様の息遣い、そしてキリトの呆れたようなため息だけ  
が、広場を支配した。

……俺がなにをしたのか、誰か教えてください……

自分が少し変わったことを、比企谷八幡は少し自覚する。

剣で繰り出された衝撃波（ただのリニア）によって濡れた地面に背中からフルダイブし、びしょ濡れになった服をストレージに仕舞い、いつもの灰色装備に紺色インナーを着る。それに同調した訳ではないのだろうが、俺と交代して近くの家屋でいつもの騎士服に着替えたアスナが、同じくいつもの黒革コートに着替えたキリトを従者のように伴いかつかつと歩いてくる。

その様子は、お嬢様とメイドのようにも見えなくもない……まあ、アイコンクラッドにメイド服があるのかは知らんが……あつたら超見てみたい。

「で、これからどうするの?」

「そ、そうですね……捜査の方針としては、黄金林檎のヨルコさん達以外のメンバーに接触、さっきの話の裏付けをするか、カインズ殺害の詳しい手順を検討するか……ですではなからうじゃないでしょうか」  
……言葉遣いが意味解らなくなった……それでも聞き込みを言わない辺り、俺がどんだけ人と会話したくないか解るな……

「聞き込みを選択肢に入れないところが、エイトらしいよね……」

「まあな、俺が知らない人と話す⇨俺に新たな黒歴史が刻まれるという等式が成り立つからな」

「ハチ君はなんでそんなことを自信満々に言えるのか、理解し難いけど……まあ聞き込みは効率も悪いし、しないでいいんじゃない?」

我がが頭の閃光様直々に許可をもらい、いかにして聞き込みをバツクれるかと、バツクレたことに対する上手い言い訳を考える必要はなくなったようだ。

「じゃあ、黄金林檎のメンバーを探すの?それとも検討?」

「黄金林檎のメンバーを探しても、結局その人達も当事者だから、裏の取りようがないのよね……」

「えっ?どういっしょ?」

「つまりだな、黄金林檎の他のメンバーに話を聞いたとして、なにかヨルコさんから聞いた話と矛盾した点があるとする。だけどその矛盾した点は、認識の違いかもしれないし、どっちかが嘘をついているかもしれない。または両方嘘をついていることもあり得る。それを断定する判断材料がないんだ」

あれだな、人の陰口自分を言ったのを聞いて問い詰めても、「証拠出せよ証拠」とか言われるのがオチなのと……うん、全然違うな。

「じゃあ消去法で、カインズの殺害方法を詳しく検討する、ってこと？」

その言葉を肯定し、俺とアスナは同時に頷く。

そもそも黄金林檎の他のメンバーに話を聞いても捜査が発展するとは限らない。別に依頼を請けているわけでもない（むしろ報酬を貰うどころか宿代を割り勘で払っている）し、半年前の事件を調べる義理も人情も人手もない。あくまで今回の圈内殺人に関係がある（かもしれない）から知りたいだけだ。

結局のところ、解らないことだらけなのだ。ならば、現時点で判っていること、知っていることから解る推測をとことん議論する必要がある。これは長丁場になりそうだ……マツ缶欲しいわ……

「でも、もう一人くらいもう少し知恵のある人の協力が欲しいね……」その言葉に眉を寄せるアスナ……そんなに寄せたら、将来シワになるぞ。

と、そこまで考えたところで気づく。

『将来』ということは、俺は心のどこかでこのデスゲームを生きて現実に帰れると思っっているのだ。だから今まで攻略組として戦ってこれたのかもしれない。

もちろん生きて帰るつもりだし、茅場晶彦からデスゲーム開始を告げられてから、生きて帰ると決意もした。その決意は未だ消えていない。

それでも、俺もまだ希望を持つことが出来ることに違和感を感じている。自分らしくない。

だが、希望を持つことは裏切りのリスクがあることを重々承知して

いるはずなのに、希望を持っている自分がそんなに嫌じゃなかった。それは、奉仕部での性格矯正という名の日常の賜物なのか、アインクラッドでの非日常のせいなのか、はたまたその両方か……

らしくないのに、嫌じゃない。そんな自分の中で矛盾するような気持ちを抱え、俺が考え込んでいる間に話が纏まったらしい二人のあとを着いていった。

場所は変わって五十層主街区《アルゲード》。普段から喧騒で騒々しいこの街は、ある男が現れたことによつて更なるざわめきに包まれる。

ホワイトブロンドの長髪を垂れ流し、武器を一切装備していない。フードが付いている、団員達とは白と赤の色の比率が逆転したようなローブは、これまで屠ってきたモンスターの返り血を全て浴びてきたかのような暗赤色をしている。その男は、剣の世界であるS A Oにはないはずの《魔導士》クラスのような雰囲気纏っている。ローブを着ている男——S A O最強プレイヤーと名高い《血盟騎士団》団長ヒースクリフ——またの名を、《神聖剣》ヒースクリフだ。他にも《救世主》やら《聖騎士》などと呼ばれている。

あつちは《聖騎士》<sup>パラディン</sup>、こっちは一介の踏み台剣士《犠牲》<sup>サクリファース</sup>。一言二言くらいなら喋ったことくらいはあるが、こうして面と向かったことはない。

どこか芸能人と対面したような不思議さを感じながら、俺はヒースクリフを観察するように見た。

血盟騎士団での規則なのかルールなのかは知らないが、アスナは自衛官顔負けの敬礼をビシッ！とサウンドエフェクトが聞こえそうな

ほど見事にした。

「突然のお呼び立て、申し訳ありません团长！この者がどうしても言ってきかないものですから……」

……は？俺？俺そんなこと言っていないよ？むしろヒースクリフが来ることさえ知らなかったよ？説明全くなかったよ？

自らの上司と話している社畜アスナの代わりにキリトに説明を求め目配りをする。

すると申し訳なさそうな顔をして、シユンとする。……こつちが罪悪感で潰れそう。

それくらいなんでもないことだから大丈夫だという意味を込めて手をヒラヒラ振ると、キリトの顔が輝くような笑顔になる。……おかしいな、キリトのコートが白に見えるよ？

キリトに目配りをしてから今までこの間実に一秒。俺達が一秒の間に以心伝心していると、ヒースクリフが口を開いた。

「何、ちようど昼食にしようと思っていたところだ。かの《灰の剣士》エイト君にご馳走してもらう機会など、そうそうあろうとも思えないしな。夕方からは装備部との打ち合わせが入っているが、それまでなら付き合える」

……ちよつと、またなんか知らないところで勝手に話が進んでるんですけど。俺のオゴリなんて聞いてないよ？

今度はため息を吐く。これはキリトに貸しができたのか、アスナに貸しができたのか……まあ、ナチュラルにオゴらされたことなんか何度もあるけどな。

また余計な<sup>トラウマ</sup>ことを思い出していると、フレンドメッセージが届いた。差出人は……キリト？

チラリとキリトを見てからメッセージを開く。タイトルは『弁明』か。

『エイトへ。』

ヒースクリフを呼ぶことは二人で決めたんだけど、来てくれるか判らないから興味を引くために、エイトがご飯をオゴると言いました。ちやんと後で割り勘するから安心して』



……うん、取り合えず安心したわ。俺一人で金を払わなくていいことに。でもなんで俺なんだ？あれか、一度も飯をオゴったことがないからか。プレミアアなのか。二層の時のショートケーキはノーカンな。あれもはや脅しだったからな。

「……まあ、ちよつと聞きたいこと……と言うか、教えてもらいたいことがあるし、ここのボス戦の時の礼もしてないしな」

適当に話を合わせる。礼をしてないのは事実だし、借りを作つたままなのは嫌いだ。具体的に言うなら、借りを作つたままにして、命令権を握られるのがコワイ、ヤダ、オソロシイ。

たまに暴走するお宅の副団長、なんとかして下さい……と俺の命令権デッドラインを握っている《閃光》の上司に心の中で訴えかけるが、当然ヒースクリフと以心伝心の仲ではないので、届くことはなかった。

やはり底が知れない人物は、比企谷八幡の警戒の対象である。

俺がオゴる（という設定）はずなのに、なぜかキリトが案内して辿り着いたのは、どこから見ても胡散臭いとしか言いようがないNPCレストランだった。

迷宮区よりも入り組んでいるとさえ思える隘路を右へ下へ左へ上へと五分ほど歩いてようやく着いた薄暗い店を眺め、アスナが言った。

「……帰りもちゃんと道案内してよね。わたしもう広場まで戻れないよ」

「キリトに頼め、キリトに」

俺も一ヶ月半前くらいに迷ったんだよ。というか、ここまで案内したのキリトだし。

「その場合は、道端のNPCに頼めば、10コルで広場まで案内してくれるのだ。その金額すら持っていない場合は……」

両手を持ち上げ、すたすたと店に入っていくヒースクリフを見て、アイツも道に迷ったことがあるのか？などと考えながら、ヒースクリフの後に続き、二番目に店に入った。

汚く狭く暗い店内は、どこか現実世界で行ったことがある古いラーメン屋を彷彿とさせる。そのラーメン屋の味は……老舗と古い店は紙一重、とだけ言っておこう。

つまり、このラーメン屋（ラーメン屋かは知らないが）は、あまり

美味くないだろう。……いや、見た目で判断するなど言うし、俺だつてさんざん悪口を言われる腐った眼をしているけど、心は清み渡った清水みたいに綺麗だしね！

《アルゲードそば》なるものをキリトが四人前注文してから、周りに水滴が付いているコップを傾け水を飲む。(行ったことないけど) 節乃食堂のお冷やには及ばないな……凄いい飲んでみたい、エアアクア。

「なんだか……残念会みたくなってきたんだけど……」

「祝勝会も残念会も認識の違いだろ。食って飲んで騒いで疲れて散財するのは一緒なんだからな」

「うわあ……エイトの打ち上げ、凄いい楽しくなさそうだね……」

「甘いな、打ち上げなんて一回行ったら、もう誘われなくなったわ」

「……」

おい、そこで黙るんじゃねえよ、打ち上げなんてものに行つて、金払つて黙々と隅っこで飯食うくらいなら、小町と一緒に小町の美味しい飯食う方が百倍……いや、打ち上げはマイナスだから、×(―百倍)くらいいいわ。

「……そんなことよりも、多忙な団長様のためにさっさと用件を伝えた方がいいんじゃないか？」

皮肉にも聞こえる強引な話題転換。やっぱりあれか、無理に喋ろうとしたことが致命的な失敗だったか。

昨夜の事件のあらましをアスナが簡潔かつ解りやすく説明している間に、何が致命的な失敗だったかを考え、全部だったことに気づいてしまう。

態度……キョドっている。口調……噛みまくり。顔……にやけている。スリーアウトチェンジ！

俺が脳内野球で攻守交代していたら、どうやら説明が終わったようだ。

「……そんなわけで、ご面倒をおかけしますが、団長のお知恵を拝借できればと……」

恐らくだが、この四人……いや、アインクラッドで一番博識なのはこのヒースクリフだ。……何それ、S A Oプレイヤー最強で最強ギル

ドの団長なのに博識とか、どんなハイスペック？もはや廃スペックだろ……じゃなくて、そのハイスペックのせいなのか、こいつは雪ノ下さんと同じくらい……いや、もしかするとそれ以上に底が知れない。故に俺はこいつを信用していない。大魔王を越える存在……魔神だな。神聖とはほど遠いわ。

俺がそう評価を下している男は、氷水を再度口に含み、ふむ、と呟いた。

「では、まずエイト君の推測から聞こうじゃないか。君は、今回の《圈内殺人》の手口をどう考えているのかな？」

話を振られ、先ほどのヒースクリフと同じように水を飲んでいた行動をやめる。

「……一つ目は、可能性は低いが、圈内デュエルによるもの。二つ目は、何らかのシステムの組み合わせによってできた抜け道によるシステムのロジック。三つ目は……アンチクリミナルコードを無効化する何らかのアイテム、もしくはスキル」

四つ目のカインズはそもそも死んでいないという可能性は言わない。不確かな希望は、より大きい絶望を与えるだけなのだから。

「三つ目の可能性は除外してよい」

断言したヒースクリフに疑わしげな眼を向けるが、無表情な真鍮色の瞳からは何も窺い知ることとは出来なかった。

「……断言しますね、団長」

「想像したまえ。もし君達がこのゲームの開発者なら、そのようなスキルなり武器を設定するかね？」

「ま、しないな」

「何故そう思う？」

隣に座っているKOB団長の小、中学校の先生が生徒にするような問いかけ方で訊いてきたこと問いを、コップを見つめながら答える。

「まあ、そりゃゲームである以上、公平フェアじゃないとダメだろ。チートみたいな違法改造ツールアンフェアみたいなのを使って不公平になったら、MMOはゲームバランスが崩れる。……まあ、そんなこと違法改造ツールが出来るなら、とつくにアインクラッドは百層まで攻略出来ているけどな」

水を飲んで一息吐き、最後に付け足すように言う。

「……ま、ゲームバランスを崩すっていう意味なら、あんたの《ユニークスキル》……《神聖剣》もそうなんだがな」

実際あのユニークスキルはゲームバランスを崩している。ここ五十層……つまりクォーターポイントのフロアボスの猛攻を何分も一人で凌げる奴は、今のレベルのままの壁戦士<sup>タンク</sup>でも一人では防げないだろうから、このヒースクリフの他にいない。

嫌みを込めた笑いを、同種の笑いで返してくる。少し焦るが、いくらKOB団長と言えども、他人のスキルスロットを覗けるはずがない。当然、俺の《奥の手》を知っているはずがないのだ。

お互いの腹の内を探り合うかのように笑いを応酬していると、アスナがため息を吐きながら俺達を順に見やり、口を挟む。

「どつちにせよ、今の段階で三つ目の可能性云々を考えるのは時間の無駄だわ。確認のしようがないもの。てことで……仮説その一、デュエルによるPKから検討しましょう」

「よかろう。……しかし、料理が出てくるのが遅いな、この店は」

「……まあ、この店の店主NPCは、私の知る限り一番やる気がないからね。そこも含めて楽しんだ方がいいよ。水はお代わりし放題だから」

キリトに言われた通りに楽しむことにしたのか、水差しからコップに水を注ぐヒースクリフを俺は見ていた。

「今までの通例からいくと、圏内でHPがなくなるのはデュエルだけだが……まあ、可能性は限りなく低いだろうな」

「ほう、何故かね？」

その声音は、どうしてそう思うかを自分が解らないから聞きたいのではなく、何故自分と同じその答えにたどり着けたのかを答え合わせをしているようだ。

「……まず目撃者の証言を信じるなら、カインズは飯を食いに来てたらしいし、見失ってから数十秒で窓から吊るされていたらしい。そんな速攻決着デュエルがあるとは思えない、余程のレベル差がない限りな。それに被害者の抵抗も無さすぎで色々おかしい点がある……更

に、あの大人数で探して広場にも教会の中にもウィナー表示窓が見つからなかったことから、デュエルの可能性ほぼないだろうな」

「うむ。それにウィナー表示が出る位置は、決闘者ふたりの中間位置、決着時に十メートル以上離れていた場合は双方の至近に表示される。つまり……」

「……つまり、少なくともカインズから五メートル弱の位置にはウィナー表示が出ていた、ってことでもいいんだな？」

声を遮り、言葉を紡ぐ邪魔をしたのにもかかわらず、嫌な顔どころか表情筋すらピクリとも動かさず、肯定する。まるでロボットのようだ。

自分でも何の感情から来たのか判らない若干ヒクついた笑いを、K O B団長様はどう解釈したのか、再び笑みを向けてくる。二度目の笑いの応酬……いや、牽制の方がこの状況では正しいのかもしれない。

「(あの二人、仲良さそうだなあ……)」

全てを見透かされそうな瞳から視線を外し、正面に体を向けると何やら不満そうな眼を向けてくるので、その視線から逃げるためにまたもコップに視線を移す。……俺、何も悪いことしてないよな？

「……まあ理由はどうあれ、結論としては圈内殺人はデュエルによるものじゃない、ってことだ」

長々とグダグダ喋ってしまったが、一言で言えばそう言うことだ。

だから、話が長くなったのは謝りますから二人とも、その眼をやめてください……

アルゲードの店の食べ物は、大体珍味である。

刺すような視線から逃げるために、トイレという建前で店を一時離脱（戦略的撤退とも言う）をした。ちゃんと飯が来たら呼ぶように言っている。

隠れた店というだけあり、アルゲード名物とも言える猥雑さを思わせる声は、周りの建物に遮られてかあまり聞こえない。静かだ。

「ふう……」

思えば、ここ最近一人でゆっくりすることがなかったかもしれない。基本的に迷宮攻略に、休日オフ（と言っても、ソロプレイヤーなので週休七日制だが）はキリトやアスナに連れ回されたり……

デスゲームが始まってから約一年半。ようやくこの世界に『慣れ』と言うべき余裕が出来たときに、あの事イレギュラー件だ。

思い起こされるのは、これまで俺がこの世界で歩んできた軌跡（英○伝説ソロの軌跡と言われちゃうレベル）と、この世界に戦いを挑み、そして散っていった無数の命。  
ゲームオーバー命を亡くす。俺にとって……いや、攻略組にとって、その場合は、完全に準備を整え、最善の策に全力を尽くし、それでもなお実力が至らなかった時に起こることだ。この事件は、そんな常識を覆すものだ。

もがいてあがいて、それでもなお届かなかった生もの。それを知ってしまったと、初めて『生きることに重みを感じる。』  
別に今までに死んでいったプレイヤー達の分まで生きるなどと言うつもりもない。ただ俺は、圏内PKの矛先が絶対に向いていないとは言いい切れないから、万が一にも自分も圏内PKをされないために捜査をしているだけだ。そこに善意の欠片もない。

なんか疲れたな……と、カンカンに五十層を照らす太陽を見つめ、そんなことを考えていると、アスナが俺のこの世界での名前ネームを呼ぶ。春先、肌を照りつける太陽と微かに聞こえる喧騒を背に、俺は妖し

げな店に二度目の入店をした。

「……で、俺が外に出ていた間に何があつたんだ？」

この数分の間は何があつたのか、キリトが頭を抱え何やら悩んでいるように見える。いや、ほんとに何があつたの？

そんな俺の疑問を、頭脳明晰アスナ先生が氷解してくれた。

「大したことじゃないんだけど、あの後も議論を続けてて、アンチクリミナルコードを無効化する抜け道を探してたんだけど……」

「見つからずに今に至る、ってところか？」

ファイナルアンサーどころかニアリーアンサーも見つからなかったらしい。当然と言えば当然だが。そんなすぐに判れば苦労しない。

「……うん、それは解つた。で、あれ何？」

指差し俺はもの申す。ドンブリだけみればラーメンだが、中身の麺が縮れていて、とてもじゃないがラーメンには見えない。言われて「ああ、そうかも……」と思うくらいだ。アスナも渋い顔で、「多分ラーメン……」と言っている。

「うゝつ」と唸り、苦悩しているキリトをアスナが正常に戻し、全員でラーメン（に似た何か）を啜る。……不味くはないが、何か物足りない。強いて言うなら、何の調味料も入れずに、鶏ガラの出汁だけで食べてるみたい……

ズルズルと侘しい味のラーメンを啜りながら、無言で食べる。最強ギルドツートップである有名<sup>ヒースクリフとアスナ</sup>所と、ソロ<sup>俺</sup>プレイヤー<sup>キ</sup>ボツチ<sup>トリ</sup>が同じ卓でラーメン（らしきもの）を啜っている姿は、ピカソの絵画並みにシユールだろう。

麺を全て食べ終わったので邪魔になったドンブリを端に寄せ、俺はヒースクリフに問うた。

「……で、あらかた俺たちの意見や事件当時の状況は伝えたが、あんた



「何か思い付いたか？」

「……………」

すぐには答えず、スープまで飲み干して、ドンブリの底の漢字っぽい文字を凝視しながら言った。

「……………これはラーメンではない。断じて違う」

「それは俺の管轄外です、クレーム苦言文句言いがかり等はキリトに言ってください」

「えっ!? 私なの？」

「お前が案内したんだろ……………」

それはそうだけど…………と呟きながら唇を尖らせるキリト。コラ、不貞腐れるんじゃないやありません、自分の非を認めなさい、可愛いから。

脱線していく話の流れを修正するように、一つ咳払いをしてからアスナが再び訊ねた。

「すみません、団長…………改めて、何か気づいたことがあったらご教授をしてもらいたいのですが……………」

「ふむ…………現時点の材料だけで、《何が起きたのか》を断定することはできない。だが、これだけは言える。いいかね…………この事件に関して絶対確実と言えるのは、君らがその目で見、その耳で聞いた一次情報だけだ」

「……………? どういう……………」

「当たり前だろ」

キリトが疑問の言葉を漏らし、俺は当然だと肯定する。

「つまり……………」

キリトの疑問の声に対しての回答を、隣に座る俺、並んで座るキリトとアスナを順に見つめ、言った。

「アイコンクラウドに於いて直接見聞きするものはすべて、コードに置換可能なデジタルデータである、ということだよ。そこに、幻覚幻聴の入り込む余地はない。逆に言えば、デジタルデータでないあらゆる情報には、常に幻や欺瞞が内包される。この殺人…………《圈内事件》を追いかけるのならば、眼と耳、つまるところ自分の脳がダイレクトに受け取ったデータだけを信じることだ」

……長い、そして解り辛いわ。いや、言わんとすることは理解できるが、お前はどこの科学者か。できる奴はできない奴の気持ちを理解できないと言うが、案外その通りかもな……

と、心中で突っ込みを入れた後に妙に納得していると、当の本人であるヒースクリフがごちそうさま、エイト君、と言い添え立ち上がる。飯も食べたし、話を聞く相手が席を立ったので、ここに留まる理由もない。

続いて俺も席を立ち、追隨している訳ではないが、狭い店内では必然的にヒースクリフの後ろを歩くことになる。

丁度顔にピンポイントの位置にある暖簾を左手でかき揚げ——そこで二人がついてきていないことに気づく。

左手を挙げたまま首を動かし後ろを見ると、未だラーメン(?)を啜っているキリトと、それを見て応援しているアスナがいた。

「……………」

何とも言えない気分になっていると、体の向きからしたら前、視線の向きからしたら後ろに立っているヒースクリフの、「何故こんな店が存在するのだ……」という呟きが耳に残った。

……うん、それは俺も思う。アルゲード三大珍味だな……

迷路のように曲がりくねっている街に団長殿が姿を消すと、キリトがアスナに訊ねた。

「ねえ、アスナ……きつきの言葉の意味解った？」

「……………」

なんでこんなに陽気な春の日に、アインクラッドを駆け回っているんだ……と周りの暖かい季節の雰囲気とは真逆の憂鬱なオーラを体

から発しながら耳を傾ける。

「アレだわ、つまり《東京風しようゆラーメン》。だからあんなに怪しい味なんだわ」

……どうやら偽ラーメンは副団長殿のお口には合わなかったらしい。あとアスナ。絶対キリトが訊いてるのそれじゃない。

「え？うん、まあそうだね」

キリトも真面目に受け答えせんでもいい。

アインクラッドに来て、対人コミュニケーションスキルよりも、突っ込みスキル熟練度が上がるって、どういうことだよ……いらないよ、アインクラッドの職業に漫才師クラスなんてねえよ……そもそもアインクラッドに職業なんてないけど。

また突っ込みをしてしまったことで、思考の永遠ループをしてしま突っ込みいそうだったので、無理矢理打ち切る。恐るべし、イザ○ミ。

「決めた。わたしいつか必ず醤油を作って見せるわ。そうしなきゃ、この不満感は永遠に消えない気がするもの」

まあ確かに現実世界と同じ味のラーメンを食べてみたいとは思う。

……作るか、俺が唯一趣味用で取得した《料理》スキルで。

「いやそうじゃないでしょー!」と、キリトのレア物の突っ込みが見事に炸裂する。

「え？何、キリトちゃん?」

「変なもの食べさせてごめんさい、許して。そっちじゃなくて、あの禅問答みたいな方だよ」

「ああ……」

本当に気づいてなかったような声だが、疑わしいものである。

「あれはつまり、伝聞の二次情報を鵜呑みにするなっことでしょうか?この件で言えば、つまり動機面……ギルド黄金林檎の、レア指輪事件のほうを」

「ええー?」

……今日はキリトのレアボイスを聞くことが多い日だな、吉日だわ……と思しながら、引き続き会話を耳を傾ける。

「ヨルコさんを今さら疑うの?確かに証拠は何もないけど……アスナ

だってさつき今更裏づけの取りようもないから、疑っても意味ないって言ってたよ？」

無垢（と言うより天使）過ぎて人を疑うことを知らないキリト。人並みには疑うアスナ。人一倍疑う俺。……なるほどそういう面で見れば、俺達はバランスがとれているのかもしれない。

「まあ、それはそうなんだけどね。でも、団長の言うとおり、PK手段を断定するにはまだ材料が足らなすぎるわ。こうなったら、もう一人の関係者にも直接話を聞きましょう。指輪事件のことをいきなりぶつければ、何かぼろつと漏らすかもしれないし」

「え？誰？」

「もちろん、あなたたちからあの槍をかつぱらつてった人よ」

……アイツかよ。うええ、会いたくないでござる……て言うか、やっぱり俺、必要なくない？

やはり比企谷八幡の無駄な思考は長すぎる。

視界右下の時計が、午後二時になったことを指し示す。

普段なら、午前中の攻略を終えた攻略組が、昼飯を食べた後の迷宮区攻略午後の部を開催している頃だろう。

そして俺は、迷宮に向かうプレイヤーを社畜乙ギルメンと思いながら、宿屋でシエスタを洒落こんでいたはずなのだが、どうやら今日はそんな余裕はないらしい……

不真面目な俺と、基本真面目だがおらかなキリトはいいが、最近鳴りをひそめていたが、《攻略の鬼》とまで言われていた《閃光》様の胸中やいかに。

俺がそんなことを考えているとは知る由もない副団長は、キリトと一緒になんかの店を冷やかしたり、どこに続いているか判らない暗渠を覗き込んだり……なんか深淵っぽいな。

そのくせ俺がため息を吐くと、「どうかした？」みたいな眼で見てるときたもんだ。「お前本当に最恐プレイヤー、《攻略の鬼》と言われたアスナ？」と思わず訊きそうになったが、恐らく黒歴史であろうその地雷を踏んで、また幽鬼阿修羅モードにでもなられたら目も当てられない。

これは余談だが、最恐はアスナ、最強はヒースクリフ、最凶はPoh、最驚は俺らしい。語源は影が薄く、いつの間にかいて驚くからだろうだ。……俺は黒○なの？ 影になっちゃうの？

「どうしたの？」

いや、お前がどうしたの？ キャラ変わりすぎだよ？

そう言いたい衝動をグツと堪え、開きかけた口を無理に閉じたため、引きつっているであろう顔で首を横に振る。

「変な人。今に始まったことじゃないけど」

「バツカお前、俺ほど普通な人はいないよ？ 戦うときもヒット&アウェイ、超安全性重視な戦い方だろうが」

「エイトの場合、10ヒット&アウェイだと思うけどね……」

いや、しょうがないでしょ？ 筋力値S<sup>T</sup>Rがあまりないんだから手数でダ

メージを稼がないといけないんだよ……

実はクラインみたいにかタナスキルで一撃一撃が重い攻撃にする方針にしようとしたことが無いわけでもないが、スキル熟練度の問題もあつたし、何より片手剣——正確には片手用直剣——は使いやすい。

まあ、その要因となつたのが、中二病時代に剣のレプリカを振り回していたから馴染みがあつたからというのが、何とも言えないな……もちろんそれ以外の理由もある。主武器を変更すると、《剣技連携》スキルコネクトを使うためにまた一からソードスキルを吟味しなければならぬこと。

二つ目は——これは俺がソロプレイヤーのことが原因だが——ソードスキルを使うタイミングがよりシビアになるからだ。

短剣は一撃の威力が軽い代わりに、手数が多く、ソードスキルにはMobをデバフするという付随効果があるが、デバフレジストがある相手に遭遇したら太刀打ちできない。対してかタナは手数が少なく、一撃が重い。——故に、技後硬直の時間も長いのだ。それはソロプレイヤーの俺にとって、あまりよろしくない。

だから俺は間をとって片手剣にしている、というわけだ。まあ、だからと言って、片手剣の一撃がかタナ程重いというわけでもないから、手数でダメージを稼いでいるのだが……

ちなみに俺と同じ片手用直剣を使っているキリトは俺とは違い、手数重視より一撃重視だ。同じ武器と言えども、プレイスタイルはプレイヤーによって千差万別というわけだ。

などなど脳内武器辞典を開いている間に転移門広場の喧騒が近づいてくる。ホーム買うときは、絶対に人里離れた……とまでは言わなくとも、静かな所にしよう……と、俺が改めて決意した瞬間だった。

「……さて、これから、シュミットに、話を、聞くわけ、何だけでも……」正直気が乗らないどころの話ではない。テンションダダ下がりである。その証拠に気分が声にも出ている。ただでさえ働くのが嫌なのに、聞き込みとかマジ罰ゲームにござざる……

「もうちょつとやる気出そうよ、エイト……」

ならどこにやる気が出せる要素があるのか教えて欲しい……

「どこにやる気出す要素があるんだよ……」

Q. DDAのプレイヤーに話を聞くのに、テンションが上がる要素はありますか？

A. いいえ、ありません。皆無です。

はい、証明終了。というわけで、

「というわけで俺、帰っていい？」

「どんな起承転結があって帰っていい結論になったのよ……」

「俺、シュミットと話すの嫌だ↓なら帰ってしまおうという結論に至りました。というわけで帰っちゃ……ダメですよね、すみません」

へ、へへ。そんなマジになんなよ、冗談だよ。

悪口を言っていたことを問い詰めると半分の確率で返ってくる常套句を心の中で呟く。ちなみにもう半分はしらばっくれ。

「でも、この時間ってDDAも狩りに出てるんじゃないの？」

「ハッ、それはないな」

アイツがそんな凶太い神経を持っているとは思えん……いや、アイツのことなんか知らないけどね？

「なんで？」と言っているように小首を傾げる《黒の剣士》と《閃光》に、つらつらと説明を始める。

「いいか？ まずアイツが知っている情報を整理するとだな、《被害者がカインズである》ことと、《凶器のショートスパアの作成者がグリムロック》であることは、多分アイツも武器鑑定して知っているだろうな」

二人が頷いてここまでは理解していることを確認しながら言葉を続けた。

「で、カインズ、グリムロック……アイツからしてみれば、この二つの名から思い浮かぶのは、当然《黄金林檎》だ。しかも指輪売却に反対したカインズが殺された……しかも圏内で殺されたと知っているなら、シュミットはどうすると思う？」

「そう言われると、街にいてもPKされるかもしれないから……」

「だからこそ、最大限の安全を確保しようとするでしょうね。となる

と宿屋に閉じこもるか、あるいは……」

「あるいは《籠城》するか、だね。DDAの本部に」

はい、よくできました。百点……いや、八万点満点です！ ……  
言いにくいし桁多いな。

三大ギルドの一角《聖竜連合》が五十六層に本部を構えたのはつい先日のことだ。何の意地なのかは知らんが、《血盟騎士団》が居を構える五十五層の一層上なのは決して偶然ではないだろう。初めてこの建物を見た、お情けで呼ばれた披露パーティーでは《ホーム》と言うよりは、《城》<sup>キャッスル</sup>、《要塞》<sup>フォート</sup>のような物々しさには、「どこら辺がホーム？」と真剣に考えた。

俺を無理矢理パーティーに参加させたキリトが食い過ぎた——正確には過剰な味覚信号が入力された——せいで異常な満腹感に襲われて歩けないと言ったときにはわりと本気で悩んだものだ。

キリトにとっては飽食ならぬ嘔食の館だからか、建物を見ている眼は若干虚ろになり、顔も青ざめているように見える。だがアスナには関係ないらしく、赤レンガでできた坂道を、自分の領地だと言わんばかりに登っていく。

銀の布地に青のドラゴンの染め抜きされているギルドフラッグを見ると、どっかの軍事国の所有物みたいだな……と思ってしまう。

白い尖塔群を見上げ、この要塞はいつたいいくらするのか……と、わかるはずもない予想をして遊んでいると、同じことを考えていたのかキリトがぼやく。

「それにしても、いくら天下のDDAって言っても、よくこんな物件買えたよね……」



「まーね、DDAはK<sup>ウ</sup>oBの二倍近くいるしね。それにしたって腑に落ちない感じはするけど。うちの会計のダイゼンさんは、『えろう高効率のファースティングスポットを何個も抱えてはるんやろなあ』って言った」

「ほお……（へえー）」

関西弁が上達してるな……最後に聞いた時は、全く抑揚がなくて棒読みだったのにな……

ファースティングスポットというのは、Mobを高回転で狩り続けるという意のMMO用語だ。しかしその場所で発生した時間辺りの経験値が閾値を超えると、この世界のシステムの神——《カーディナル・システム》の手によって下方修正されるのだ。

ゆえに俺達が優秀なファースティングスポットを見つけたときは公平を期すために場所を公開するのが暗黙のルール……と言うよりマナーなのだが、さっきアスナが言っていたように隠すやつもいる。

もちろんその行為はモラルに欠けるが、人が複数存在する以上平等なんて言葉は眉唾物だし、結局は攻略組全体の戦力で見れば総合値が上がることは間違いないので、一概に悪いことばかりとは言えない。

つまるところ、これはエゴなのだ。誰よりも強く、上でありたいという競争本能。本能は誰しもが持っているものだから、人は皆エゴイストと言える……じゃあ皆で合唱しよう、ギルティ○ラウンの歌！

……あれは合唱するもんじゃないな。大人数で『世界は終わりを告げようとしてる』とか『もうあなたから愛されることも、必要とされることもない』とか合唱したら、「なんの宗教団体？」となるな、うん。

それにしても……あれ主人公が報われない話だったな。軽く人生の縮図？　とか思っちゃったよ。「いのりいいー！」とか

「祭ええー！ー！」とか「キャラルうううう！」って叫んだのを親に聞かれて、「やっぱ千葉は海苔だよな！」とか「明日は晴れだな！」とか「キャラメルうめええ！」とか苦しい言い訳しちゃいましたよ……

最終的に綾瀬ルートとかの説が出てきたけど、実際はどうなんだろうな……て言うかこの坂、こんな無駄なことを長く考えながら歩いてるのに未だ入り口に着かないとか長すぎませんか？

愚かしいと解つていても、比企谷八幡は期待せずには  
いられない。

赤レンガの坂道をどれくらい歩いたか判らない。なんせあれから  
ずっと中の人つながりでハイ○クールD×Dだの変○王子と笑わな  
い猫だのブラック○レットだのロ○きゅーぶ！だの考えていたから  
な……ハーレムもの多くね？ しかも後半幼女ハーレムだし。桜満  
君を見習え、桜、満、君、を……アイツもハーレム築いてた……のか  
？ 好意を持っていたヒロイン死んじゃったけど……微妙なライン  
だな。好意を持っていた複数のヒロインが死んでしまったアニメを  
ハーレムと言うのか否か……

ふとここで、俺の前を歩いている二人に目を向ける。絹のように艶  
のある黒の髪と、光を反射し粒子を振り撒いているかのような栗色の  
髪をなびかせ前を歩く二人を見、思う。

不謹慎だが、この二人が……つまり攻略組でも三指に入る実力の持  
ち主が死ぬとき、それはすなわち攻略組の壊滅ワイプ……事実上アインク  
ラッドの攻略が不可能になるだろう。いくら最強と言われるヒース  
クリフが生き延びたとしても、主力二人がいなくなればどうしようも  
ない。

現実ならば『たかがゲームくらい、クリアできなくていいだろう？』で  
済ませられるが、こんな死と隣り合わせの世界で生涯を終えるなど  
まっぴらごめんだし、何より小町俺の天使たちと戸塚たちに会えないのは嫌だ、絶対に  
だ。

あとはもう一つ……これは俺の酷く勝手な、傲慢で、独りよがりな  
意見だが、俺はあいつらに死んでほしくない。

あいつらは悩み、もがき、考え苦悩し、時には大きな間違いを犯し  
後悔する。しかしそれでも諦めず前に進む……俺が諦め、棄てて、切  
り取ってきたものだ。だからこそ、俺にとってその姿はどんなものよ  
りも眩しい。

つまるところ、俺は二人を通して仮想世界だけじゃない、嘘と欺瞞

と偽りに満ち溢れていて、人は皆虚飾の仮面で自らを飾り立て、嘘を吐くのが巧いやつほど上に立つ……そんな散々嫌なことを見てきた現実世界にも希望を見出だしたいのだ。

そんな世界に希望を見出だす……いや、そもそも他人に自分の意見を押し付けること自体が傲慢で、独善的で、酷く愚かしい行為なのだろう。しかし、それでも俺が奉仕部で過ごした日々の意味、届かないと知っていながらも、俺が唯一諦めきれなかった『何か』。

俺は何回も人に裏切られながらも、何を欲しがり、何を渴望し、何を羨望したのか……未だ答えは見つからずにいる。

それはきつと、このゲームをクリアするより難題で、俺の人生全てを使っても判らないかもしれない。

だが、それでも自分が何を求め、何をしたいのか考えるのは間違いじゃない……と、奉仕部での日常と仮想世界での体験から今は思う。

《圈内殺人》。今ある情報で元を辿ればギルド《黄金林檎》が解散した理由でもある《指輪事件》が事の発端だろう。

さつきははネタで思考が逸れたが、《指輪事件》……ひいては《圈内事件》の原点は、やはり人より上に立ちたいという競争本能……人間のエゴだ。

ネトゲで競争が激しいジャンルのゲームと言えばMMOだろう。

仮想大規模ロールプレイングゲーム

つまりジャンルとしてはVRMMORPGにあたるこのSAO……正式ゲームタイトル『ソードアート・オンライン』は、デスクゲームであると同時に、ネットゲーム史上……いや、全てのゲームの中で最も順位争いが激しいゲームであるとも言える。当然だ、MMOでは……それもこのデスクゲームでは、特に自分の強化は必須事項なのだから。

「茅場はつくづく性格悪いいな……」

なんでMMOなんだか。もうちよつとお手軽に決着がつくジャンルのゲームだつてあつたらうに。俺がよくやっていたFPSシューティングとか。

俺はゲームは今ではVR技術が発展したせいで、現実世界では絶滅しかけているであろう（このSAO事件でVR技術が淘汰されていなければだが）携帯ゲーム機（特にVita）をよくやっていたが、ネットゲはあまりやっていなかった。

強いて言うならFPSとかならよくやったが、MMO……特にレベル制のは全然やらなかった。……いや、だつてレベリングしている時にいつもPKされるんだよ？

その死亡罰則デスペナのせいでレベリングで手に入れた経験値が大体ブライマイ0だし……（だからレア武器を手に入れた時に異常に喜んだのだが）。それなら最初からPvPのFPSの方が楽しい。ちなみに俺が《投剣》スキルを取得しているのは、FPSでのノウハウを遠距離攻撃に活かせないかと思つたからだ。……まあ、ソードスキルを発動させたら勝手にシステムが当ててくれるから、ノウハウもクソもないんだけどね！

話がまたも逸れたが、SAOがMMOである以上、全プレイヤー……少なくともトッププレイヤー攻略組は、一度人の上に立つという甘い蜜を吸ってしまったがために、もう我執の焰からは逃れられない。そしてその焰は、自らを焼き尽くす……下手をすると周りの人間をも燃やし尽くすまで止まらないかもしれない。

勿論俺だつて例外じゃない。ヒースクリフの《神聖剣》ほどじゃないが、絶対的秘密をスキルスロットに隠している俺には。……まあ地味なんだが。少なくともヒースクリフ程強くない……というか、ヘタすると普通のエクストラスキルより弱いかもしれない。

その時、俺の眩きどころか思考までも読み取つたようにエスパ、かくとうタイプのアスナ様は囁いた。

「だから、わたしたちがこの事件を解決しなきゃいけないんだよ」

いきなり右手を握られ反射的に引っ込めようとしたがガツチリホールド。真正面から微笑を向けられたため、忙しなく眼を泳がせる。その眼の泳ぎようと言つたらギネスに載つちやうレベル。

「ちよつとその辺で待ってて」と言い残し解放された右手を即座にポケットに入れ、樹に寄りかかる。……キリトさん、とても怖いので体術スキルの技名をブツブツ呟くのやめてください……

「き、キリトさん、あの、こつち来てあれ……お菓子食べませんか？」

「ん？ エイト、なんで敬語なの？」

いつも通りの天使の笑顔。だが俺は騙されない、何故なら後ろに俺を押し潰すようなオーラが出ているのだから。

「い、いや、何でもない」

今の闇オーラを纏っているキリトに比べれば、DDA本部の門前で仁王立ちしている金剛力士像（ただの門番）なんか怖くない！ アスナに笑顔で挨拶されたら「ちゅーっす」とか言ってるけど！ キリトの貫き手<sup>エンブレザー</sup>で吹っ飛ばされるのはもうごめんだ。

「あ、あの……何に怒っているのか判らないのですが、すいませんでした……」

マジ、コワイデス。ユルシテクダサイ。

もはや土下座どころか神を崇め奉る気持ちで謝っていると、キリトがため息を吐き、「まあいつものことだしね……」と、どこか諦めたように言っている。……俺ってそんなに日常的にキリトを怒らせてるの？

「……うん、こつちもなんかごめんね？ でも一つ約束してね？」

「な、なんででしょうか……」

さつきとは違い穏やかな笑みだが、まだ緊張感は抜けない。まるで裁判で有罪判決を受ける前の被告人みたいだ。……俺が有罪なのは確定なのかよ。

「この事件を解決したら……また、一緒にご飯食べにいこ？」

思ったより簡単に拍子抜けした。勿論俺にとってはめんどくさいことだが、理由が判らなくとも人を怒らせたのならば穴埋めはするべきだし、そもそも明日俺達がこうして話している保証などどこにもないのだ。ならば、それくらいのお願いは甘んじて受けるべきだろう。「……まあ、そんなくらいなら別にいいぞ」

俺の返事に嬉しそうにはにかむキリトを見ると、話を終えたの

かアスナがこちらをジト目で見ながら近づいてくる。

「……あなたたち、人が話を聞いている間に随分楽しそうね？ 何話してるの？」

一難キリト去つてまた一難アスナかよ……

「い、いえ、なんでもありません！ それより、シユミットの方はどうなつたんだ？」

強引すぎる話題転換に怪訝そうな顔を向けてきたが、今は圈内事件の解決を優先したのか真剣な顔になって話した。

「本部にいるらしいから、『指輪の件でお話が』つて伝えてくれるようにあの門番の人に頼んだとこ」

ふうん、やっぱり立て籠っていたか。それにしても……

「それにしても、その言い方だとアスナとシユミットさんの結婚指輪の話みたいだね」

あつ、ばかキリト。せめて心の中で思うくらいにしとけ、何の気無しに言つたんだらうけども。

羞恥にまみれ、怒声をあげる予備動作を見切った俺は、巻き添えを喰わないように隠蔽スキルを発動させ、樹の裏に耳を塞いで隠れる。

一秒後――。

アスナの坂の下の街まで届かんばかりの怒声とキリトの驚声、そしてメッセージを受けて門から出てきたであろう状況を把握できていないシユミットの呆声がD D A本部門前を支配した。

……キリト、強く生きろよ。

やはりリア充は、いつまで経つても比企谷八幡の敵である。

アスナがキリトへの怒声を息を切らしながら止め、ようやく場（というよりアスナ）が落ち着いたところでハイディングを解く。

俺は素知らぬ振りをして樹の裏から出てきて、アスナは松岡修造並みに熱くなって全力で運動してもこんなに切らさないだろと思うほどに切れた息を整え、キリトは怒声を浴びせられ停止していた頭を再起動し、シュミットは状況把握よりも『指輪の件』のを知るのが先と判断したのか真剣な顔つきになる。

カオスな雰囲気から真面目な雰囲気へと、分子構造は（と言っても空気もプログラミングされたポリゴンなのだろうが）変わっていないのだが、確かに空気が変わった。……そう言えば某中二病でも恋がしたい（願望）のアニメで『混沌なるカオス』とか言ってたけど二重の意味じゃね？ どんだけ混沌としてるんだよ……。……あのアニメを観て、中二病でも恋ができると思ひ込んでしまう単純な中二病患者<sup>材木</sup>達が新たな心の傷<sup>トラウマ</sup>を負わないか僕は心配です。自業自得だからどうでもいいけどね！

でもあれだな、なんやかんやであるのアニメ二期までいったしな。これは関係ないが、なんで既刊が十巻超えてアニメ化されたラノベの作品は大体二期ないんだろうな？ 緋弾○アリアとか星刻○竜騎士とか。その点で言えばハイス○ールD×Dは三期までいったから凄いな！ 俺の青春模様をラノベにしたら売れ……。ないな、うん。タイトルは『やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。』にしようかと思っただけど、長文タイトルは廃れたしな。そもそも俺ラノベ作家志望じゃなくて専業主夫志望だし。

中身も見た目も文科系<sup>インドア</sup>の俺（と言うより大半のSAOプレイヤー）とは真反対の体育会系の見た目をしているシュミットは、あの（俺の思考速度が加速していたのかただ単に坂道が長かったのかは判らないが）長い坂道を下り、街に入ったところで鎧をガシャンと鳴らし立

ち止まった。そしてそのまま振り向くときに俺より先に目に入ったはずのキリトとアスナをスルーし、俺に詰問してくる。……材木座かよ。

「誰から聞いたんだ」

「はっ」

ちゃんと指事語を入れろ、指事語を。一瞬何のことか判らずに俺何かやらかした!? って思っちゃっただろうが。

「ギルド《黄金林檎》の元メンバーからだ」

やはりあまりいい思い出がないからか、眉をぴくりと動かし顔をしかめる。

「名前は」

人にものを頼む態度を学んでから出直してこいと言いかけてしまった口を仮想顔筋肉でなんとか踏みとどまる。いかな、こんなことと現実世界では普通だったのに。攻略組だからか罵られることがなくなったから耐性がなくなってきたな……いや、(多分)いいことなんだらうけどね?

「……ヨルコさんだよ」

一時放心したように体が強張り、次いで安心したように息を吐いた。

俺はそれを無表情に——見ようによっては観察しているように——眺める。そのレベルといったらデウスから未来日記を授けられちゃうレベル。……それは置いといて。観察した、というのもここで安堵の息を漏らさないならほぼクロ、漏らしたならグレーと判断するためだ。そしてやはりシュミットも昨日の事件の構図が《指輪売却賛成派派》による《反対派》への復讐であることに気づいているのだから。

現時点の判断材料ではシュミットがカインズ殺害をした可能性は限りなく低いと言ってもいい……が、動機がないわけでもない。例えば指輪事件の真犯人がカインズとシュミットだとして、シュミットがカインズを殺害……みたいなシチュエーションも、ないことはないのだ。故にグレーなのである。



「シュミットさん。昨日あなたが持っていた槍を作ったグリムロツク氏、どこにいるか知ってる？」

「し……知らん!!」

キリトのド真ん中ド直球ドストライクな質問に凶星を突かれたかのように、シュミットは首がもげんばかりの勢いで激しく首を横に振った。

「ギルド解散以来いちども連絡してないからな。生きてるかどうかも知らなかったんだ!」

視線が街のあちこちを彷徨う。何処からか槍が飛んでこないか恐れているようだが、噂話をして人が出てくるならとつくにグリムロツク見つかつてるし、最初の頃なら俺攻略組の居るところ居るところに現れますよ? 主に悪口だけど。

と、そこで今まで黙視していたアスナが穏やかな声で話しかけた。

「あのね、シュミットさん。わたしたちは、黄金林檎のリーダーさんを殺した犯人を捜してるわけじゃないの。昨日の事件を起こした人を……もつと言えば、その手口を突き止めたいだけなのよ。《圈内》の安全を今までどおりに保つために」

ほんのわずかな間を開け、いつそう真剣な声を加えて続ける。その鋭さは、おおよそ中高生が出せるものではない、修羅場を潜ってきたものの声だ。やはりSAOプレイヤー……それも特に攻略組は命のやり取りをしているせいかな精神年齢が著しく上がっている。

「残念だけど、現状で一番疑わしいのは、あの槍を鍛えた……そして、ギルドリーダーさんの結婚相手でもあったグリムロックさんです。もちろん、誰かがそう見せかけようとしている可能性もあるけど、それを判断するためにも、どうしてもグリムロックさんに直接話を聞きたいの。今の居所か、あるいは連絡方法に心当たりがあったら、教えてくださいませんか?」

じつと髪と同じ色の瞳に見つめられた体育会系男子(青年かもしれないが)は、ぐつと息を詰まらせ上体を反らす。大規模コミュニティに属している奴は全員リア充だと思っていたが、そんなことはないらしい。でも甘いな。俺だったら男子でも息を詰まらせるぞ。……最

近ではそんなことはあまり記憶にないが。

防御不可の眼差しでシュミットの精神を攻撃する手法に胸中で感心していると、黒の布に覆われた触れたら折れてしまいそうな華奢な腕（この世界では俺より筋力があるが）を曲げてキリトが俺の脇腹を肘うちしてきた。もちろんアンチクリミナルコード圏内なのでダメージはない（もしあるならキリトがオレンジカーソルになっている道理だ）が、衝撃によって生み出される不快感は決して気持ちのいいものではない。

なにすんだと抗議及び今の行動の意味の説明を求める視線を送ったが返事はなく、顔をプイツと背けられたただけだった。……やだこの子可愛いけど訳もなく肘うちをしてくるのやめてください。いや、説明したらやっていいって訳でもないんだけどね？

そんなやり取りが繰り返り広げられていたとは露知らず、シュミットは横に顔を向け固く閉ざしていた口を開いた。……やだ同じ顔を背けている行動なのに少しも可愛くない。戸塚がやったら絶対可愛いのに。同じ男でどうしてこうも……いや、戸塚の性別は戸塚だから男じゃなかったわ、八幡ウツカリ、テヘペロ。

「……………居場所は本当にわからない。でも」

いい加減スイッチを切り替えて真面目に話を聞こうとする。ぼそぼそという擬音がぴったりなほど弱々しく、シュミットは話し始めた。

「当時、グリムロックが異常に気に入ってたNPCレストランがある。ほとんど毎日のように行ってたから、もしかしたら今でも……」

「ほ、ほんと?」

キリトが身を乗り出す。

アインクラッドに於いて、食べることが唯一の快樂と言ってもいい。しかし廉価なNPCレストランでは自分好みの店が見つかるのは稀だ（俺が《料理》スキルを取得した大きな要因でもある）。唯一の快樂である食事で、毎日通うほど気に入ってた店の味を何日も絶つのは無理だろう。人とはとにかく自らの欲を満たすことにはひたすら貪欲なのだから。……そしてこの世界では、欲に吞まれた者は大体死

ぬ。ここでは引き際をきちんと見極めることが生き残るための必則事項だ。……そしてそれができずに黒猫団の三人は死んだ。これも『ソードアート・オンライン』をMMOにカテゴリした茅場を性格悪いと思う理由の一つだ。ここで戦っていくには、自分を御しなければならぬ。

「そ、そのお店の名前は？」

「条件がある」

だから指事語を入れろ、指事語を。それを教えるにはをちゃんと条件があるの前に入れましょう。それともあれですか？ 体育会系は略すのがノーマルなんですか？ 「お願いしまーす！」を「しゃーす！」って言うみたい。……よく考えたらリア充もよく略語使ってるな。つまりシユミットはリア充か。ならば、俺の敵だ。

俺が一方的に敵視した（シユミットはそもそも俺のことなんざ眼中にもないだろう）シユミットの『条件』とやらを聞くために耳を澄ませる。

「教えてもいいが、一つだけ条件がある。……彼女に、ヨルコに会わせてくれ」

半年の歳月を経て、彼ら彼女らは再びの会合を果たす。

シュミットを手近な道具屋に待たせ、俺達はシュミットが出してきた条件についてできるだけ手短に話し合った。……頼んでいる立場だからか、ボス攻略の時とは打って変わって殊勝な態度のシュミットに、僕はとても驚きました。

「危険は……ないかしら？　あるのかしら？」

「うーん……」

キリトが唸る。可能性は低い、ヨルコさん、またはシュミットのどちらかが圈内事件の犯人だとして、会わせた瞬間に圈内PK技炸裂！　みたいなきことを危惧しているのだろう。まあ、もしヨルコさんがそんな技スキルを使えるのなら、事件捜査をしている俺達も今頃カインズと同じように殺されてもおかしくないのだが。……笑えないな。

「……まあ大丈夫じゃないか？　万が一の事態になりかけたら取り押さえたらいいしな」

ヨルコさんは攻略組じゃないので俺達誰か一人でも取り押さえられるし、シュミットは攻略組だが、二人がかりなら大丈夫だろ。問題は刑事みたいにちゃんと押さえられるかだが……

「うん……それにスキル発動までにはある程度プロセスを踏まなきゃいけないから四、五秒かかるし、眼を離さなければ大丈夫だと思うけど、問題は……」

「シュミットが今更どうしてヨルコさんに会わせろって言ったか、だな」

まあ、特に事件には関係なさそうだが、真意を確かめないと安心して会わせることができないのも事実だ。

「さあ……実は片想いしてたとかじゃ……ないわよね、うん」

「えっ、ほんと？」

んなわけないだろ……もし仮にそうだとしたら、俺は絶対邪魔するぞ。『人の恋路は必ず邪魔をして、もし馬に蹴られそうになったらり

ア充に馬を仕向けろ』が親父の教訓だからな。さすが親父、クズいな。  
「違うって言うてるでしょ！ ……ともかく、危険がないならあとは  
ヨルコさん次第だわ。メッセージ飛ばして確認してみる」  
「う、うん、よろしくお願いします……」

自分でウケないと思った冗談を、冗談ともとられなかったことに  
怒っているのか、はたまた何か別のことに怒っているのかは定かでは  
ないが、とにかくホロキーボードに怒りをぶつけるようにタイプして  
いる。キーボードクラッシュシャーみたいだ。

キリトが「私、何かした？」みたいな眼で見てるが、人は時とし  
て自分でも解らない激情に駆られることがあるのだ。「何かその表情  
ムカつく！」とか、「ていうか顔がムカつくな」とか、挙げ句の果てに  
は「お前の存在がムカつく！」だからな。何？ 俺は存在することす  
ら許されないの？

今アスナが打っている《フレンド・メッセージ》は、離れていても  
即座にメッセージが届く便利な仕様になっている機能だが、当然誰に  
でも送れるという訳ではない。結婚相手と同じギルドのメンバー、ま  
たはフレンド登録した人にしか送れない。アスナとヨルコさんは女  
同士……つまり同性なので結婚相手などではないし、ヨルコさんは血  
盟騎士団ではない。となると、フレンドということになるのだが……  
いつの間にしたんだ？ まあ、要は俺達と何の繋がりもないグリム  
ロック氏には《フレンド・メッセージ》は送れないということだ。名  
前が判っていれば送れる《インスタント・メッセージ》なるものもあ  
るにはあるが、同じ層にいないと届かない上に届いたかどうかを確認  
する術もない。

ヨルコさんからの返信は直ぐにあつたらしく、ウィンドウを一瞥し  
てからアスナは一つ頷いた。

「OKだつて。じゃあ……ちよつと不安だけど、案内しましょう。場  
所はヨルコさんが泊まっている宿屋でいいわよね」

「いいんじゃないか？ 圏内PKはできても、さすがにシステム全て  
を無視なんてできないだろうしな」

というかできたら困る。宿屋の錠も開錠できるなら、圏内PK技で

寝ている間に死んでいた……なんてこともあり得る。

キリトがシュミットに向けてOKの意を示す大きな丸を両腕で作っているのを見ると、改めて犯人に対してうすら寒いものが背筋を走った。

俺達一行が五十九層から五十七層主街区《マーテン》に転移をし、青ポータルから出たとき、アインクラッドには赤い夕陽が昇っていた。朝から夕方まで働きづめとか、俺マジ社畜。上司に全く逆らえてないじゃん。

全体的にオレンジの色合いが加わった街では、NPCや商人プレイヤーの売り声が響く。軒並み連なる店の間を縫うように一日の疲れを癒しにきたプレイヤー達は歩いているが、まるで避けるように——実際避けられているのだろう——ポツカリと人がいない空疎な空間があった。言わずもがな、カインズが槍に胸を貫かれ、ロープで吊るされていた教会に面している一画である。

人が惨死を遂げた場所を見る悪趣味も度胸もないので、さっさと視線を前に座標固定し、昨日歩いたのと同じ道を二人……いや、三人の後ろをやはり一歩退いて歩き進む。なんならこのまま逆走ならぬ逆歩でランナウェイまである。

それからほんの数分後に宿屋に到着し、階段を上る。二階長廊下の一番奥の部屋がヨルコさんが滞在している……悪く言えば閉じ籠っているスイートルームだ。

キリトが三回ドアにノックし、キリトです、とちゃんと名前を告げる。……俺だったら名前を告げずに部屋に入って、錯乱したヨルコさんに包丁で刺されてたかもな……圈内だから刺さんないけど。

キリトの声にヨルコさんの細い声でいらえがあり、キリトがノブを

回した。《フレンドのみ開錠可》設定のドアロックがかちんと金属が擦れる音ともに外される。

引き開けられたドアの正面に位置する、向い合わせのソファアの片方に、ヨルコさんは腰掛けていた。滑らかな動作で立ち上がり、ダークブルーの髪を揺らしながら俺達……いや、恐らくシユミットに一礼した。

ギルド《黄金林檎》の元メンバーの二人の心境は再会した歓喜などではなく、お互いがお互いを敵視しているとまでは言わなくとも、少なくともギルド時代の信頼関係はないだろう。その証拠に二人の顔は同じように強張っている。

メインは二人。本来何の関係もない俺達は……いいとこ仲介人だろうか。一向に口を開く気配のない二人に対し、一応の忠告をしておく。

「……まあ、双方思うところはあろうが、どんだけ激昂したり錯乱しても、武器だけは抜くなよ？ もし抜いたなら……」

左腰にあるコバルトブルーの鞘を手に持ち、カシャン、と金属音をならす。くすんだ銀色の柄が夕光を受け、わずかにだが怪しく鈍く輝いた。

さすがに（まだ強化素材が出現していないため）未強化とは言えども今の最前線より少し上——六十層クラスの武器をちらつかせたら大胆な真似は出来ないだろうと思っただけだが、効果は覷面だったようだ。

「……はい」

「解っている」

俺の《ホロウ・ファントム・ワンハンドソード》のステータスは、キリトの《エリユシデータ》みたいな《魔剣》クラスではないが、剣の威光は通用したようで、ダメージを与えられない《圈内》だということも忘れ、ヨルコさんは顔面を蒼白にして、シユミットは虚勢を張りそれぞれ答えた。

そしてまた無言。

お前が会わせろって言ったんだから、会話を切り出せとシユミット

に言うのは酷だろう。顔を合わせただけで苦い思い出が蘇る相手と積極的に話したい訳がない。

かつて同じギルドのメンバーだったと言えども、攻略組として最前線で戦ってきたシュミットとミドルプレイヤーであるヨルコさんとは、今はレベル差が二十以上あるだろう。しかし、堂々としているヨルコさんと萎縮しているシュミットとは、どう見てもヨルコさんの方が立場が上にしか見えない。

いい加減口を開かねばなるまいと思ったのか、ヨルコさんがシュミットに挨拶をする。

「久しぶり、シュミット」

そして薄く微笑む。

——シュミットが何を思い、ヨルコさんに会わせろと言ったのかは解らないが、黄金林檎元メンバーの久しぶりの会合。それが事件の謎を解く切っ掛けになったことを、俺は十数分後に知ることになる。



なすすべもなく、また新たな犠牲者が目の前で生まれる。

ヨルコさんの笑顔に緊張したわけではないだろうが、より一層顔を引き締め、唇を噛んだシユミットが答えた。

「……ああ。もう二度と会うことはないと思つてたけどな。座つていいか」

いきなり開始のボディーブローを放ってくるが、そんなことを気にした様子もないヨルコさんが頷くと、がしやがしやとアーマーを鳴らして向かいのソファアーに座つた。俺は軽装敏捷極振りヒット&アウェイ型プレイヤーなので、フルプレートアーマーなんぞ数える程しか着たことないが、慣れないのも相まつてか、メチャメチャ窮屈で息苦しかった。おまけに重い。それでも心の安寧を保つための防護だからか、除装する様子はない。……それならちゃんとドアを閉めろよ。

俺はキリトに「俺が閉めておく」と目配せをして、ちゃんと扉を閉め、フレンド以外開けられないドアロックがされたのを確認してからシユミットの後ろにある部屋の壁にもたれ掛かる。キリトはヨルコさんとシユミットの東側に立ち、アスナはその逆に立つ。

さすがスイートルームと言うべきか、ヨルコさん、シユミット、キリト、アスナ、俺の五人が疎らに位置してもかなりの広さがある。北はドア、西は寝室に続くもう一つのドア、南と西は大きな窓になっている。

その大きな窓から赤い夕光が射し込み、暖かい春の柔らかな残照を思わせる。風は涼しく気持ちがいいのに、部屋の中の空気はどんより重く暗くて最悪だ。窓からは風が吹いているとは言つても、もちろん風のようにプレイヤーが侵入……なんてことはあり得ない。そもそもここは周りの建物より高いために、そんな不審な人物がいたらすぐわかる。

澱んでいる空気を少しでも爽やかにしようと思っていると吹いているときえ思

える風とともに、アルゲードほどじゃないが、確かに喧しい喧騒が届いてくる。

「シュミット、いまは聖竜連合にいるんだってね。すごいね、攻略組のなかでもトップギルドだよね」

素直な賛辞に思える言葉だが、シュミットの背中が勘に障ったようにピクリと震えた。

「どういう意味だ。不自然だ、とても言いたいのか」

刺々しいを超えて、むしろ毒々しいまでの返事だが、心に余裕がない人間は誰でもこうなるものだろう。そしてそれはヨルコさんも解っているのか、一切動じなかった。

「まさか。ギルドが解散したあと、凄く頑張ったんだなって思っただけよ。私やカインズはレベルアップに挫けちゃったのに、偉いよね」肩にかかる濃紺色の髪を払い、再度微笑む。

余裕そうな表情に態度だが、シュミットがフルプレートアーマーを着込んでいるように、厚手のワンピースに革の胴衣、紫のベルベットの短衣チュニックを羽織って、肩にはショールを掛けている。服の性能は知らないが、これだけ着込めば装備が胴衣の蒼いシャツに灰色のコート、同色ズボンにブーツとグローブだけの俺にも匹敵するんじゃないだろうか。

ポーカーフェイスという言葉を知らんのかと言いたくなるほど動揺を隠さないシュミットが、金属鎧をがしやと鳴らし、身を乗り出した。

「オレのことはどうでもいい！ それより……、訊きたいのはカインズのことだ」

口調をドスが効いたものに変え、続けた。

「何で今更カインズが殺されるんだ!?! あいつが……指輪を奪ったのか? GAのリーダーを殺したのはあいつだったのか!?!」

GAというのがGolden Apple……すなわちギルド《黄金林檎》の略称だということは、中学生以上の年齢なら解るだろう。しかし、この台詞はシュミットが《圈内事件》及び《指輪事件》の双

方に無罪主張したのと同じことだ。これが演技ならば、体育会系という言葉は訂正して、演技系男子と言わなければならぬ。……まあ、人はみんな人生ロールプレイングしているようなものだけだな。

これまでうすら寒いときさえ思えたヨルコさんの張り付けたような笑顔が変わり、睨み付けるようにシュミットを見据えた。

「そんなわけない。私もカインズも、リーダーのことは本心から尊敬してたわ。指輪の売却に反対したのは、お金コルに変えてみんなが無駄遣いしたやうよりも、ギルドの戦力として有効利用すべきだと思っただらよ。ほんとはリーダーだってそうだったかっただはずだわ」

「それは……、オレだってそうだったさ。忘れるな、オレも売却には反対したんだ。だいたい……指輪を奪う動機があるのは、反対派だけじゃない。売却派の、つまりコルが欲しかった奴らの中にこそ、売りを独占したいと思っただ奴がいたかもしれないじゃないか！」

正論、である。反対派にも賛成派にも指輪を奪う……つまり《黄金林檎》のリーダーを殺す動機があるのだ。

——いや、ちよつと待て。リーダーが指輪を持っていたから殺した、ここまではいい。しかし聞いたことがある——結婚している人は、結婚相手とストレージが共通化される、と。

なら、ならだ。ストレージが共通化されているのならば、結婚している片割れが死んだのならば、そのストレージ内にあつたアイテムはどうなる？

まさか全部破棄されるなんてことはないだろうが……。まさか、全部生きている方のもことになるのか？ となると、指輪を奪った犯人は……

一歩一歩真相に近づき、一つ一つパズルのピースがはまっていくような感覚はするものの、未だ全貌は掴めていない気がする。

結論を逸るな、落ち着け、と焦燥感を無理矢理心の奥底に押さえつけ、再び二人の会話に耳を傾ける。

見ると、シュミットが何やら籠手に包まれた両手で頭を抱えていた。

「なのに……、グリムロックはどうして今更カインズを……。売却に

反対した三人を全員殺す気なのか？ オレやお前も狙われているのか!？」

そう。本当にカインズが死んでいたのならば、今更カインズが殺された理由は恐らく三つのうちどれかだ。一つ、何らかの準備や仕込みが必要で、それがようやく整った。二つ、この半年の間にアンチクリミナルコードの穴を突くシステムのロジックを見つけた。三つ、何らかの理由でこの日じゃないといけなかった。

まあ、少なくとも二つ目の可能性は低いな。そんな偶発的に見つけれられるなら、意図的に見つけようとしている俺達が判らないのはおかしい。

……やはりあと少し、あと一つ、ピースが足りない。

俺がこれ以上の思考は無意味だと判断したとき、平静さを取り戻したヨルコさんが囁くように投げ掛ける。

「まだ、グリムロックがカインズを殺したと決まったわけじゃないわ。彼に槍を作ってもらったメンバーの仕業かもしれないし、もしかしたら……」

視線がソファアの前に置いてある低いテーブルの表面をさ迷う。

「リーダー自身の復讐なのかもしれないじゃない？ 圏内で人を殺すなんて、普通のプレイヤーにはできないんだし」

「な……」

パクパクと金魚のようにシュミットは喘いだ。何をバカな、と言いたくなるが、今までの常識が打ち破られ、おまけに自分達が関わっていた人間が殺されたと聞いたら冷静でもいられなくなるだろう。

まるで諦めたかのような笑みを浮かべるヨルコさんに、恐らく呆けた表情であろう顔で、シュミットは言った。

「だって、お前さっき、カインズが指輪を奪ったわけがないって……」  
そのすぐるような質問にはすぐに答えず、スムーズに無音で立ち上がり、右に移動した。

両手を腰にやり握ると、俺達には背中を見せずに、ゆっくり、ゆっくりと後ろ歩きしていく。部屋を支配する微かなスリッパと床が当たる音に混じり、短く切られている言葉を紡いだ。

「私、ゆうべ、寝ないで考えた。結局のところ、リーダーを殺したのは、ギルメンの誰かであると同時に、メンバー全員でもあるのよ。あの指輪がドロップした時、投票なんかしないで、リーダーの指示に任せてればよかつたんだわ。ううん、いつそ、リーダーに装備してもらえばよかつたのよ。剣士として一番実力があつたのはリーダーだし、指輪の能力を一番活かせたのも彼女だわ。なのに、私たちはみんな自分の欲を捨てられずに、誰もそれを言い出さなかった。いつかGAを攻略組に、なんて口で言いながら、ほんとはギルドじゃなくて自分を強くしたかっただけなのよ」

途切れ途切れの長い言葉が切れると同時にヨルコさんの腰は南窓の窓枠に当たった。

そのまま現実世界だったら窓から落ちるんじゃないかと思うように窓枠に腰掛け、短く言葉を付け足した。

「ただ一人、グリムロックさんだけはリーダーに任せると言ったわ。あの人だけが自分の欲を捨てて、ギルド全体のことを考えた。だからあの人には、たぶん私欲を捨てられなかった私たち全員に復讐して、リーダーの敵を討つ権利があるんだわ……」

それは違う。いかに己を正当化し、正しいと断じようとも、人を殺していい権利などない。

俺の心と同じように夕暮れの冷たい風が、部屋の中を吹き抜ける。

沈黙した部屋の中を、やがてかちやかちやかちや、と小刻みに震えるシュミットの鎧が当たる金属音が鳴る。歴戦の猛者であるトッププレイヤーシュミットは、もはや独り言のように呟いた。

「……………冗談じゃない。冗談じゃないぞ。今更……………半年も経ってから、何を今更……………」

感情が爆発したかのように突然上体を跳ね上げ、叫ぶ。

「お前はそれでいいのかよ、ヨルコ！　今まで頑張つて生き抜いてきたのに、こんな、わけも解らない方法で殺されてもいいのか!？」

その言葉で、この部屋にいる全員の視線はヨルコさんに向けられる。

狂ったように叫ぶでもなく、激昂するわけでもなく、平静な——い

や、弱々しい雰囲気を纏う濃紺色の髪を持つ女性プレイヤーは、どこを見ているのか解らない視線を彷徨せ、しばらく言葉を探した。

やがて唇が微かに動き、発声をしようとした——  
その瞬間。

とん、と乾いた音が部屋に響いた。同時に、ヨルコさんの目と口が、大きく開かれる。

続き、細い体が傾き、がく、という感じで足を一步前に出し、よろめくように振り返ると、開けたままの窓の窓枠にてをついた。

ヨルコさんが背中を見せたとき、より一層強い風が吹き、背中にかかっている髪をなびかせた。

今度は俺が、目を見開くことになる。

紫色の光沢のチュニツク。その中央辺りから、小さな黒い、俺が見慣れている投げ短剣スローイングダガーが赤いエフェクト光を撒き散らしている……つまり、ヨルコさんを貫いていることが窺えた。

フラフラと足許がおぼつかない動きで前後に揺れていた体が、遂に前に大きく傾いた。

「あつ……い！」

アスナが悲鳴じみた声を出すとともに、キリトが飛び出す。

俺もソフアーを飛び越え、すぐに窓枠に駆け寄るが——

「ヨルコさん!!」

キリトが窓から身を乗り出したとき、石畳にバウンドしたヨルコさんの体が青いエフェクトが包んだ。

この世界で嫌というほど見た、ガラスの破碎音とともにポリゴンが巻き散り、青い光が石畳を拡散し——

数秒後には、そこには金属音をたてて地面に落ちた、禍々しいダガーしかなかった。

予期せず、比企谷八幡は殺人者達と二度目の会合を果たす。

ヨルコさんの体が四散するのを見て、俺が抱いたのは絶望感や虚無感といったものではなく、喉に刺さった魚の小骨がとれた——すなわち、謎が解けたという高揚感だった。

そんな気分になっていた俺は、気づかなかつた。ニブロック向こうの同じ建物の上に、黒衣の人影があつたことに。

俺がその人影に気づいたのは、キリトが窓からフライアウェイした時だった。

あの人影は、《黄金林檎》のリーダーなんかの幽霊じゃない。あれは、恐らく昨日殺されたはずのカインズだ。

その確証を得るためには、行かねばならない……黒鉄宮にある生命の碑に。

「アスナ。俺ちよつと確かめたいことがあるから、別行動していいか？」

「はあ!? こんなときに何を……解つたわ」

(多分)ボス戦の時にしか見せたことのない、俺の真剣な顔を見てか、許可を出してくれた。

悪いと一言謝り、俺はドアを開け、宿屋の二階から降りていった。

第一層《はじまりの街》黒鉄宮《生命の碑》。

俺も連日ここに来たのは初めてだ。ここには《圈内事件》のトリックの確信を得るために必要な、ヨルコさんの生存確認のために来た。

Y o l k o …… Y、Y …… やはりだ。Y o l k o に横線は引かれていない……つまり、ヨルコさんは生きている。なら、さっきのは死亡を擬装した——そう考えれば、デュエルのウィナー表示が出なかった理由も、殺されたカインズが異常なほど抵抗がなかったことも説明がつく。カインズは重装備の鎧、ヨルコさんは分厚い服装の耐久値が0になる瞬間、転移結晶で脱出したのだろう。

それに、なぜカインズが大々的に殺されて、ヨルコさんが僅か四人の前で殺されたのかも解った。まず、カインズを不特定多数の観衆の前で殺したように見せかけ、《黄金林檎》の元メンバーの耳にはいるようにする。そして、目の前で見せつけることで、圈内PK技は存在すると見せかける……つまり、ヨルコさんとカインズはグルだ。

動機はやはり、指輪事件関連だろう。となると……目的は犯人を炙り出すことだな。

《圈内事件》によって、極限まで追い詰められたシュミットが次にとる行動は、全く関わりのない俺にも解る。《黄金林檎》リーダーの墓に、赦しを乞うはずだ。そこに自らがリーダーとグリムロツクの幽霊となつて出てきたという演出で、シュミットに独白をさせるだろう。

指輪事件の犯人と真相を知りたいだけのはずだから、シュミットを殺したりはしないし、攻略組から放逐されるのに耐えられないはずのシュミットはオレンジになることはしないだろう。

つまり、俺達のこの事件での立ち回りは終わりだ。そう結論付け、キリトとアスナに《フレンド・メッセージ》にトリックを打って送ろうとした。

だが——。

一つだけ、気がかりなことがある。

指輪事件。シュミットの急激な成長。ギルドリーダーの死……こう考えて思い浮かぶのは……

さすがにシュミットがリーダーを殺したとは考えにくい。なら、シュミットは知らず知らずにリーダーの死の片棒を担いでいたと考えるべきだ。多額のコルと引き換えに。

指輪を奪いたかった？ いや、あの指輪は婚約者であったグリム



ロックのもの……

……つまり、指輪目的じゃなかった？ それ以外にリーダーを殺すメリットはないはずだが……

思考を進め、シュミットに片棒を担がせた人物の目的を考えていると、唯一浮かび上がったこと……すなわち、殺すこと自体が目的のレッドプレイヤーによる殺害。そう考えたら辻褃が合う。

カインズ、ヨルコさん、シュミットによる犯行ではないとすると、残るのはグリムロック。今回の凶器を作り、二人に協力したのは三人を殺すため……

そこまで思考が至ったところで、ヨルコさんとフレンド登録をしていたアスナに、急いでメッセージを飛ばす。

『謎は全て解けた。フレンド一覧からヨルコさんのいるところを探して教えてくれ。そしてそこにできる限りの攻略組を集めてきてくれ。時間がない。訳は後で話す』

ホロキーボードを全力でタイピングし、送信したあとに黒鉄宮を出て転移門を目指す。

幸い、何も訊かずにシンプルな返信が走っている途中に来たので、減速しないでメッセージを見る。十九層《十字の丘》か。

メッセージを一瞥し、即座に邪魔になるウインドウを閉じながら、敏捷度を最大に活かしたダッシュで駆け込み転移する。

「転移！ 《ラーベルク》！」

時刻は十時過ぎ。思考の海に浸っていたため晩飯を摂っていないせいで仮想の胃を苛む空腹感も忘れ、一心不乱に一回だけ行ったことがあるフィールドに向かって駆ける。

現実世界でこんな長時間連続疾走したら確実に横っ腹が死ぬが、そこは仮想世界。全く痛くならない。

煉瓦造りの門の下を疾駆し、《OUTER FIELD》と表示された瞬間《索敵》スキルを発動させる。

《圏外》のフィールドを直進してから数分後。オレンジカーソルが三つ、グリーンカーソルが三つ、グリーンカーソルはヨルコさん、シュミット、カインズだと解るが、まさかオレンジカーソルはラフコフトップスリー……

正直、厄介事に首を突っ込むのも、人殺しと命を懸けて戦うのもまっぴら御免だが、人の命をなんとも思わなくなる方が俺は御免だ。

黒ポンチョ、髑髏マスク、頭陀袋……確定だ。ラフィン・コフィンの頭三人だと判断するや抜剣。左腕は肘を曲げ、指と指の間にダガーを挟み、右腕はしっかり伸ばし剣が体の後ろにある状態だ。

走ったままダガーを《シングルシュート》で投擲。光跡を描いた投擲武器はあっさり友切包丁に弾かれるが、そのまま肉薄し右斜め上段斬り。またも防がれ、辺りを照らす火花が散る。

「Oh……とんだサプライズがあつたもんだ。会いたかつたぜ、エイト」

「ハッ、心にもないこと言ってるじゃねーよ。俺はちつとも会いたくなかつたぜ、POH」

ガキイイイン！ と金属音と火花を散らしてバックステップし、一度距離をとる。相変わらず一合打ち合っただけで逃げ出したくなる狂気を纏ってやがる。

「ヘーイ。久しぶりいエイトオ。あの日からお前を殺すために頑張つたんだぜえ？」

軽い調子で声をかけてきた頭陀袋の男……確か、ジョニー・ブラックって言つたけな。

「……なんだ、誉めてほしいのか？ お子ちやま頭陀袋」

「ああ!? ンの野郎……！ 今すぐぶっ殺してやろうか！」

「そいつは勘弁願いたいな。そもそも俺戦いに来た訳じゃねーし」

毒ナイフ持っている奴となんか戦いたくねえよ。幸い……と言つ

ていいのかは判らないが、エストック使いの髑髏マスクは、武器でヨルコさんとカインズを牽制してるから戦闘に参加はなさそうだが、シユミットも麻痺で動けないため二対一だ。

「ほう……じゃあお前は何しにここに来たってんだ？」

「あ？ まあ、あれだな。《犠牲》サクリファースは《犠牲》サクリファースらしく、先兵の特攻兵だよ」

なんなら自爆兵まである。ま、意味が伝わろうが伝わらまいがやることは同じ、時間稼ぎだ。

「つまり先兵のお前をぶつ殺せばいいんだよな？」

「……ま、先兵の仕事は攻撃だけじゃないけどな」

本隊が来るまでの囮とか。

そんな呟きは聞こえなかったようで、いきなり毒ナイフが投げられてきたので剣を薙ぎ払い弾いた。

「おいおい、リベンジがしたくてウズウズするのは解るが、短期は損気だぞ」

出きるだけ言葉を重ね、時間を稼ぐ。存外、戦闘しているときより会話をしているときの方が長く時間が過ぎるものだ。

しかし相手は会話に応じる気はないようで、毒ナイフを投擲しながら接近し、短剣——もちろん毒が付着している——を振りかざす。

その短剣を自分の剣で上にパライシ、膝を曲げてしゃがみ、腹パン

——実際には掌底だが——をするような体勢になる。

俺の左手が黄色く煌めき、ジョニー・ブラックを二メートルほど吹き飛ばす。序盤に何度も助けられた、体術スキル基本単発技《閃打》。

一合一打しただけで解った。——こいつ、強くなっている。

今のも吹き飛ばしたのではなく、自らが後ろに跳ぶことでダメージを緩和したのだ。その証拠にHPが0.5割しか減っていない。いかに初級、いかに敏捷寄りだとしても、諸に入ったなら一割は減っているはずだ。

しかし俺に一撃喰らわされたのが気に食わなかったのか、明らかに憎悪の黒い焰を眼窩の奥の瞳に宿し、こちらを睨み付ける。

ジョニー・ブラックは先ほどと同じ構えで短剣をかざし臨戦態勢に

入った。俺は剣を水平に構え、カウンターを狙う。  
《人殺し》の《犠牲》への雪辱戦第二ラウンドのゴングが、鳴った気がした。

時間稼ぎの後に、比企谷八幡は説明を始める。

投擲。弾く。投擲。弾く。

俺とジョニー・ブラックスの戦闘は、そんな流れ作業が延々と続く展開になっていた。

距離が遠ければナイフを弾き続け、近づけば鏢迫り合いになりまた距離をとられる。おまけにこちらは一撃喰らえば負け確定。向こうはナイフが尽きれば分が悪くなるという耐久戦だ。

時間稼ぎをするために戦っているこちらとしては大歓迎な展開だが、常にPOHが参戦しないかにも眼を光らせなければいけないため、辛いのはこっちだ。

ずっと五メートルほどの距離を保ち、長時間——と言ってもまだ数分だが——毒ナイフを投げ続ける戦法は、向こうもフラストレーションが溜まることだろう。だが、接近戦では自分が分が悪いと理解している証拠でもある。俺も《投剣》スキルは取っているが、あくまでサブウエポンだしな。

だが確かに成長したジョニー・ブラックスは侮れないが、いい加減眼も慣れてきたので、次にあのパターンで攻めてきたら、完璧に対処できるという確かな確信があった。

腕が動く。ナイフが放たれようとしている。どんな軌道を描いて向かってくるか、全て解る。その瞬間には既に投擲体勢に入っていた。全てがスローモーションになった世界で俺はダガーを三本取り出し、駆け出しながら投擲。システム外スキル《未来予知》ができるからこそ可能な、システム外スキル《見切り》。

この《見切り》は、普通の防御方法とは少し違う。一般的なセオリーとして、普通は相手が動き出した時に合わせて防御をする。

しかし、《見切り》は相手の挙動、視線、呼吸のリズムなどから攻撃位置を予測し、相手が攻撃する前に防御をする。端から見れば、防御しているところにわざわざ攻撃を当てているように見えるだろう。

これは防御を相手が脳から運動神経に命令を伝達する……つまり行動がキャンセルできなくなる0.2秒間（脳が命令を出して、行動

に移すまでの平均的な時間)の間にしないといけないため、タイミン  
グはともシビアだが、成功したときのカウンターは恐らくキリトの  
反射神経を持ってしても回避不可。必中の斬撃は無類の強さを発揮  
する。

《見切り》によってナイフを弾くために投げたダガーは寸分違わず毒  
ナイフに衝突し、細い金属音を発してともに地面に落ちた。ようやく  
拓いた道を駆け、左上から剣を振り下ろす——と思わせ、スライディ  
ング。

防御体勢に入っていたジョニー・ブラックの右横を通り過ぎた辺り  
で地面に左手をつき、そこを作用点として前に進もうとした運動エネ  
ルギーを利用して回転。スキルもへったくれもない単純なローキツ  
クだが、これはダメージ狙いじゃない。

「うおっ！」

物凄い勢いで繰り出された回転蹴りは、ジョニー・ブラックの足に  
当たりバランスを崩し、その回転の勢いを使い、右手に持った剣で膝  
裏辺りで両足を斬り払う。《軽業》スキルによる補正がなかったらこ  
うも鮮やかにはならなかつただろう。

当然、支えがなくなった体は倒れ地面にうつ伏せになる。また暴れ  
られてはたまらないため、そこら辺に落ちていた毒ナイフを突き刺  
し、麻痺状態で唯一動かせる利き手も部位破壊しておく。

「……さて、POH。もうまもなく攻略組が数十人でここに来る。こ  
のまま俺と戦って攻略組が来るのを待つか、大人しくここから立ち去  
るか、好きなほうを選べ」

「……Suck」

短く罵ると、指をパチンと鳴らし、配下のエストックを収めさせる。  
赤眼男はPOHの隣に位置していたが、俺が五歩程度後ろに退くと  
ジョニー・ブラックを担いだ。

リーダーのPOHは、俺を友切包丁で俺を指すと、吐き捨てるよう  
に言った。

「……《灰の剣士》。貴様だけは、いつか必ず地面に這わせてやる。大  
事なお仲間の血の海でごろごろ無様に転げさせてやるから、期待しと

いてくれよ」

「……生憎だな。俺は最下層の人間だから、とつくに無様に地面を這ってるさ」

P O Hは俺の言葉を無視したのか、くるくる器用に指の上で回していた獲物をホルスターに収める。趣味の悪い黒革ポンチョをばさりと翻し、余裕綽々と丘を降りていく頭領を、赤眼髑髏マスクの男はジヨニー・ブラツクを背負い追っていった。

しかし急に立ち止まりこちらを向くと、一言だけ言った。

「……今度は、俺が、お前の、相手をして、必ずお前を、殺してやる」

「……じゃあもつと努力<sup>レベリング</sup>することだな」

その言葉にしゅうつと呼吸だけで返事をし、霧の向こうに消えていこうとしている自分のヘッドを再び追って消えていった。

犯罪者三人が丘を下り、その姿が完全に見えなくなるとともに張り詰めた息を吐く。

索敵スキルの効果でまだオレンジカーソルだけはまだ視界に表示し続けた。

約一ヶ月ぶりの最凶三人との会合。未だ名前を知らないのは髑髏マスクの男だけだが、次に会うのはあいつが言っていた通り、剣を交わし、お互いの命を奪わんがために振るうときだ。それは遠い未来の話ではないだろう。ならば、知る必要はないし、知りたくない。

もう剥き出しにする意味のない剣を鞘に収める。

原則として、犯罪者プレイヤーは《圈内》に立ち入れない。境界に踏み込んだ途端、ボスがかわいく見えるNPCガーディアンがうじやうじや出てくる。そして今の所は転移門が設置されている街は、例外

なく《圏内》なので、あの三人が他の層に移動するためには、転移結晶で《圏外村》を座標指定するか、高価な回廊結晶を使うか、徒歩で迷宮区タワーを上り下りするしかない。あとはカルマ回復クエストをして、カーソルをグリーンに戻すくらいだ。

おそらくは一番目だろうが、それにしても往復で転移結晶×6個を使ったのなら奴らにとつても痛い出費のはずだ。

さすがにそこまで考えて撤退せざるを得なくした訳ではないが、俺、オメガGJ部<sup>グッジョブ</sup>。

それにしても——精々がオレンジプレイヤー数人くらいだと思っていたが、まさか犯罪者達のトップ三人が出張ってくるとは。つまりあの三人は、時間、場所など全て正確に知っていたのだ。シユミット——聖竜連合前衛隊長にして、攻略組でも随一の堅さ<sup>防御力</sup>とHP持つ男がここに来るのを。

その情報の出所<sup>ソース</sup>は、恐らく指輪事件の犯人であるグリムロックだ。ウインドウ・メニューを開き、キリトが攻略組を集めるように頼んだらしいクラインに『その場で待機』と送信する。

次いで未だ毒が抜けないシユミットがもぞもぞと動かしている利き手に解毒ポーションを持たせてやり、アルコール中毒者みたいに見える手を動かし、シユミットがポーションの中身を飲むのを見届け、次に少し離れたところにいるローブを被った二人に眼を向ける。「えっと……数時間ぶり、ですね。ヨルコさん。あと、初めまして、です。カインズさん」

いかに俺が影が薄いボツチだったとしても、さすがに数時間前まで同じ部屋にいた人間を忘れてなんてことはなかったらしく、ごく僅かな苦笑を向けられた。

「全部終わったら、きちんとお詫びにうかがうつもりだったんです。……と言つても、信じてもらえないでしょうけど」

「……別にお詫びどころはどうでもいいんで、信じるも信じないもありませんね」

それより事件捜査<sup>アスナ上司に振り回された</sup>のために使った時間を返してほしい。いや、人付き合いが苦手なボツチにはあの鬼と一緒にいる時間は拷問にも等し



いわ。ヒースクリフ、副団長を単独行動させんなよ……

鳩が豆鉄砲を喰らったような表情をするヨルコさんの横で、するすると黒ローブを脱ぐ朴訥そうな男——顔を見るのは初めてだ——を見る。《圈内事件》第一被害者を見事に演じきったカインズは、頭を下げた。

「初めまして、ですね。エイトさん。初対面でこんなことを言っただけですが、正直トリックを見破るのはあの黒ずくめの人だと思ってました」

「あー、俺もそう思ってたけどな。たまにはそういう日もあるってことじゃないか？」

俺の返答に軽く笑いを返し、目を細める。リア充でもなく、ボツチでもない。学校では中層カースト辺りの奴だったんだろうな、とアタリをつけていると、ようやく動けるようになり上体を起こしたシュミットは緊張が抜けない声で訊ねた。

「……エイト。助けてくれた礼は言うが……なんで判ったんだ。あの三人がここを襲ってくるのが」

まあ、当然の疑問だな。そう思い、なんと云ったものか少し言葉を探す。

「……別にあの三人が来る、ってことが判ったんじゃない、可能性としてあり得ると考えたんだ」

その説明をするためには、俺がたどり着いた《指輪事件》の真相を話さなければならぬ。三人——特に真相を知るためにここまでの演出を考え、実行した二人にとっては衝撃的なことを。

ゆっくり、ゆっくりと言葉を探しながら、俺は三人に説明をし始めた。

満を持して、比企谷八幡はかく語りき。

「……実際に圈内事件の謎が解けたのはヨルコさんが目前で擬装死したときで、オレンジプレイヤーが出張ってくるのがあり得ると思ったのは数十分前だ」

目の前で死の瞬間を見せつけるのは失敗だったな。あれが切っ掛けでオレンジプレイヤー達が来ることも判ったんだから……あれ？  
じゃあ気づいたんだから目の前で死の瞬間を見せつけてよかつたんじゃない？

「……一つ確かめたいことがある。あの凶器として使った短剣ダガーと短銃ショットスピアはあんたらがグリムロックに頼んで作ってもらった、そうだな？」

問いかける視線を送るが、同時に嘘は赦さないと眼光を眼に宿らせる。犯人である二人は顔を見合わせ、やがて一つ頷いた。

「……はい。《圈内PKを擬装する》という私たちの計画には、継続ダメージ特化の貫通属性武器がどうしても必要でした。あちこちの武器屋さんを見て回ったんですけど、そんな特殊な仕様の武器を置いているところは見つからなくて……。と言って、鍛冶屋さんにオーダーすれば、武器に銘が残ってしまいます。その人に訊けば、オーダーしたのが被害者である私たち自身であることが解ってしまうでしょう」  
「だから、僕たちはやむなく、ギルド解散以来はじめてあの人に……リーダーの旦那さんだったグリムロックさんに連絡を取ったんです。僕たちの計画を説明して、必要な貫通武器を作ってもらうために。居場所は解らなかつたけど、フレンド登録だけは残っていたので……」  
フレンド登録が残っていたなら、位置追跡ができたんじゃないか？  
と指摘しようとしたが、遂にグリムロックの名前が出てきたため耳に——正確には脳の聴覚野に——全神経を集中させ、何も言わなかつた。

「グリムロックさんは、最初は気が進まないようでした。返ってきたメッセージには、もう彼女を安らかに眠らせてあげたいって書いてありました。でも、僕らが一生懸命頼んだら、やっとあの二つ、いえ三

つの武器を作ってくれたんです。届いたのは、Caynz 僕じゃないカインズKainsさんの死亡日時の、ほんの三日前でした」

この二人はやはり、グリムロックが奥さんを殺された被害者だと思  
い込んでいるのだ。それが言葉の節々に感じられた。

ならば、これから話すことは、少なからず二人を傷つけることだ。  
だが、指輪事件の真犯人を突き止めるためにここまでのことをしたの  
ならば、それなりの覚悟や矜持があるはずだ。

「残念なことにな、グリムロックはあんたらのリーダーのために協力  
するのを渋ったんじゃない。圈内PKなんて演出で大多数の注目を  
集め、俺達みたい捜査する人が大勢いたら、気づくかもしれないと  
恐れたからだ」

一呼吸置き、俺は付け足した。

「……結婚によるストレージ共通化。それが、離婚ではなく死別によ  
る解除だったら、そのストレージ内のアイテムがどうなるのかを」  
「え……？」

俺の言葉の意味を理解できていないヨルコさんが首を傾げる。

しようがないことだ。アインクラッドに於いて、結婚までいく  
カップルアは中々いない。それが離婚……それも死別ならば、そんな  
ケースは、人口が今は六千人強である——しかも男女比が八対二の—  
—この鋼鉄の城では、一件あっただけでも稀だろう。

「……いいか？ グリムロックとグリセルダさん？ のストレージは  
共通化していた。たとえグリセルダさんを殺害しても、アイテムは全  
てグリムロックに転送されるんだ。シュミット。お前、片棒を担いだ  
時の報酬は金だっただろ？」

俺の質問に麻痺が解けても未だ地べたに座り込み胡座をかいてい  
る鎧男は、首を縦に振った。

「中層プレイヤーが一気に攻略組まで登り詰められるほどの大金を用  
意するには、本当に指輪を売らなければならなかった。そんなことが  
できるのはグリムロックだけだし、アイツはシュミットが計画の共犯  
者だと気づいていたんだ。つまり……」

「グリムロックが……？ あいつが、あのメモの差出人……そして、グ

リセルダを圏外に運び出して殺した実行犯だったのか……?」

「いや、多分違うな。万が一グリセルダさんが宿屋から運び出される時に目醒めてしまったら、全て終わりだ。そこはそうい<sup>人殺し</sup>う仕事専門のレッドがやったんだろうな。だからと言って、グリムロックの罪が軽くなるわけじゃないが」

「……………」

シュミットはもう声を発さず、焦点の合わない瞳で空を仰ぎ見ているだけだった。

そんな沈痛な表情をしていたのは、ヨルコさんもカインズも同じだった。やがて、濃紺髪をしている女性は、かぶりをふった。その動作はドンドン大きくなり、やがて髪が狂乱の如く振り乱された。

「そんな……嘘です、そんなことが！ あの二人はいつも一緒でした……グリムロックさんは、いつだってリーダーの後ろでにこにこして……それに、そうです、あの人が真犯人だというなら、なんで私たちの計画に協力してくれたんですか!? あの人が武器を作ってくれなければ、私たちは何もできませんでした。《指輪事件》が掘り返されることもなかったはずです。違いますか?」

なるほど、中々に的を射た反論だ。確かに協力しなければ過去が掘り返されることもなかったかもしれない。だが、指輪事件の真相が明らかになる可能性が完全に消え失せる訳でもない。

故に、俺は反論に反論した。

「あんた達は、グリムロックに計画を一から十まで説明したんだろ? なら、あいつは知っていたはずだ。カインズが殺される序章からシュミットに独白させるこの最終章までの計画の筋書きを。なら、逆にそれを利用すれば、完全に指輪事件を闇に葬り去ることも可能だ。その事件の解決を求めるあんたら二人、共犯者のシュミット、三人まとめて消せばいい」

「……………そうか。だから……だから、あの三人が……………」

虚ろな表情のシュミットがぼやいた言葉に首肯する。

「ああ、その通りだ。《ラフィン・コフィン》がここに現れたのは、たまたま偶然じゃない。攻略ギルドDDA前衛隊長シュミットという

大物の獲物が、一切仲間を連れずにここに来ると、グリムロックが情報を出したんだ。パイプは恐らく、半年前からあったんだろうな」  
「……………そんな……………」

力なく膝から崩れ落ちそうになったヨルコさんを、カインズが右手で支えた。しかしそのカインズの横顔も、ヨルコさんと同じ……………或いはそれ以上に蒼白に見えた。

カインズに支えられたまま、ヨルコさんは一層弱々しい声で囁いた。

「グリムロックさんが……………私たちを殺そうと……………？　でも……………なんで……………？　そもそも、なんで結婚相手を殺してまで、指輪を奪わなきゃならなかったんですか……………？……………？」

「……………さあ。俺は探偵でも警察でも心理学者でもないから、動機までは判らん。でも、《指輪事件》はアリバイ作りのためにギルド本拠地に居なきゃならなかったグリムロックも、今回ばかりは見届けずにはいられなかったはずだ。なにせ、二つの事件が迷宮入りになる瞬間だからな。まあ……………詳しいことは本人に訊けばいいんじゃないか？」

俺はここに向かって疾走している最中、あるメールを二人に送った。内容は、『グリムロックはヨルコさん達の近くにいますはずだから、見つけて連れてきてくれ』と。

事実、三つのグリーンカーソルを、俺は索敵スキルによってもう捉えており、《聞き耳》スキルを取っていないため聴力補正ブーストされていない耳でも、もう三つの足音が聞こえてきている。

夜空の中でも目立つ栗色髪と夜空に溶け込む黒髪。月明かりを反射する華美な細剣レイピアと、月光を全て食らいつくすようなシンプルな黒い片手剣魔剣。まず目に入ったのは、立場的にも見た目的にも対極とも言える攻略組でもトップの実力を持つ剣鬼と剣姫……………アスナとキリトだった。

白黒二人の愛剣二振りの切っ先と、鋭い眼光に急かされるように、一人の男が歩いてきた。

かなりの長身。裾長な、ゆったりとした前合わせの革製の服を着込み、やけにつばの広い帽子を被っている。目の辺りで時折光る物体は

眼鏡だろうか。その容貌は、武骨なおつさんが営んでいるイメージがある鍛冶屋よりも、アジア系の（主に中国や韓国、香港など）マフィアと言った方がしっくりくる。ハンマーを振り降ろすより、SAOには存在しない銃を振りかざすほうが似合いそうだ。

三人ともカーソルはグリーン……つまり、グリムロックは逃走せずに、悠々と二人に言われるがままにここに来たのだ。……これは、自分が《指輪事件》の真犯人だと認めさせる……或いはボロを出させるためには、相当骨が折れる長丁場になりそうだと溜め息を吐き、すぐに気を引き締め、どうやって嵌めようか……と、思考を開始した。

僅かな、しかし確かな矛盾を比企谷八幡は見つける。

遂に眼前に現れたグリムロックを前に、俺は一層警戒を高める。逃げるにしても、筋力、敏捷力ともに俺達三人よりは低いだろうが、まだ何か手を残している可能性も捨てきれないし、転移結晶で逃げるつもりかもしれない。

さつきは遠くで見れなかった顔は、鍛冶屋のイメージとしてこびりついているドワーフ的な厳つい感じは思ったほどではなく、どちらかと言えば柔和そうなイメージを持たせる。細い顔に、優しい目尻。まあだからと言って、警戒を緩める気はサラサラないが。いつでもニコニコしている人ほど腹に一物を抱えてるからな。ソースは……あれ？ ない？ ああそうか。俺ににこにこしてくる人なんかいないもんな。戸塚と小町とキリトは天使だから例外だし。

衝撃？ の事実を知ってしまったが、思考を切り替え、グリムロックを拝見する。ようやく現れた男は俺から三〜四メートルほど距離を取り、シユミット、ヨルコさんとカインズ、最後に苔に覆われている石——あれがグリセルダさんの墓だろう——を一瞥してから口を開いた。

「やあ……、久しぶりだね、皆」

この緊迫した状況に余りにそぐわぬ、なんてことない挨拶。だが、その言葉は張り詰めた空気を更に重々しくさせた。

グリムロックの発声から数秒後。今度はヨルコさんが声を出した。

「グリムロック……さん。あなたは……あなたは、ほんとうに……」

グリセルダさんを殺し、指輪を奪い、挙げ句の果てには自分達三人を殺害しようとしたのか、という意味合いを含めた慟哭。

その沈黙に込められている意味を、ここにいる誰もが、本来無関係の俺でも理解している。ならばグリムロックも理解しているはずだ。

しかし——音にはならねど確かな悲痛の問いかけに、元黄金林檎サブリーダーにしてリーダーの夫、そして現在は鍛冶屋のグリムロックは直ぐには答えなかった。

その眼鏡男の後ろに立っている白衣と黒衣を身に纏った女剣士は、それぞれウエストタイプとシヨルダータイプの鞆に、これまた白銀と漆黒の剣を収めた。そしてそのまま移動し、なぜか俺の左右に立つ。その様子を見ていたグリムロックは僅かな微笑を滲ませたまま唇を動かす。

「……誤解だ。私はただ、事の顛末を見届ける責任があるうと思つてこの場所に向かつていただけだよ。そこの怖いお姉さん達の脅迫に素直に従つたのも、誤解を正したからだ」

……今の言葉で第一印象をマフィアから往生際が悪いやつだと改める。おいおい、そんな不屈(笑)の精神で容疑を否認しても、無冠○五将の鉄心にもはなれないぞ。いいとこ一回使われてポイ捨てる探偵漫画の犯人くらいだ。

「嘘だわ!」

鋭く反駁したアスナさんの声で、なんも悪いことをしていない俺の胸が跳ねる。一瞬不真面目なことを考えたことを読心されたのかと思つたぜ……

年下女性に一喝されて身を縮こませるなんて情けないと思うだろうか? 俺は全く思わない。母親が強いからかあ天下ができるし、女性の方が仕事ができるから女性の社会進出が進んだ。元来男というのは、女の尻に敷かれる存在なのである。今時亭主関白な方がマイノリティだ。でも仕事ができる女性が増えることは専業主夫志望の俺にとつてはいいことなので、バンバン増えちゃって下さい。っと、イカンイカン。事件はまだ完全収束してないのに、ついつい思考がずれてしまう。

そんな俺の気を引き締めるようにアスナの怒声が飛んだ。

「あなた、ブツシユの中で隠蔽ハイディングしてたじゃない。キリトちゃんに看破《リビール》されなければ動く気もなかったでしょう!」

あ、キリトが看破リビールしたのかよ。自信満々に言うからてつきり自分がやったのかと……まあ、キリトは性格上こういうこと向かなそうだしな。俺も「この仕事向かないからやりたくないです」と言えるようになりたい。なんならなんの仕事もしたくない。



「仕方がないでしょう、私はしがない鍛冶屋だよ。このとおり丸腰なのに、あの恐ろしいオレンジたちの前に飛び出していけなかったからと言って責められねばならないのかな？」

あくまで平坦に、穏やかに言い返し、俺の布製とは違う革製の手袋に覆われた両手を広げた。

元黄金林檎の三人は、黙ってグリムロックの言葉を聞いていた。いくら俺からグリムロックが半年前の事件の犯人だと聞かされようとも半信半疑なのだろう。自分達のサブギルドリーダーが、凶悪極まるレッドにリーダー殺害を依頼した、などと。

再度何か言い返そうとするアスナを左手で制す。冷静に返す相手に感情論で返そうとも意味がない。

「……初めまして、グリムロックさん。俺はエイトっていう……まあ、部外者だな」

今更ながら部外者の俺が首を突っ込んでいいのだろうかと思っただが、本当に今更なので、まあいいかと思いい言葉が続けた。

「……確かに、あんたとレッドの繋がりを決定付ける証拠はない」

実際にはグリムロックのウインドウを可視化し、フレンドリストを見たら、レッドの暗殺依頼窓口用プレイヤーの名前があるだろうが、情報屋でもない俺達は判断がつかない。

だが、今回の殺害未遂は兎も角、半年前の事件は言い逃れはできない。そう確信し、口を開こうとしたが、キリトに先制される。

「でも、去年の秋の、ギルド《黄金林檎》解散の原因になった《指輪事件》……これには必ずあなたが関わっている、いや主導しているはずだよ。なぜなら、グリセルダさんを殺したのが誰であれ、指輪は彼女とストレージを共有していたあなたの手元に残ったはずだから。あなたはその事実を明らかにしないで、指輪を密かに換金して、半額をシュミットに渡した。これは、犯人にしか取り得ない行動のはずだよ。だから、あなたが今回の《圈内事件》に関わった動機もただ一つ……関係者の口を塞ぎ過去を闇に葬ること……」

俺は少しだけ驚愕した。その発想が出てくるということとは、キリトも半年前の事件、そして圈内事件のトリックに気づいたということ

だ。

俺が内心で驚いているのとは対称的に、荒野の丘は静寂に包まれていた。

やがて月明かりに照らされたグリムロックの唇が歪み、僅かに温度が下がった口調で言った。

「なるほど、面白い推理だね、探偵君。……でも、残念ながら、一つだけ穴がある」

「え？」

呆けた返事をするキリトをよそに、別の可能性……グリムロックが言う『穴』を考える。と、一つの可能性に行き着く。

俺の考えをトレースしたかのようにグリムロックは顴広帽子を右手で引き下げ、言った。

「確かに、当時私とグリセルダのストレージは共有化されていた。だから、彼女が殺されたとき、そのストレージに存在していた全アイテムは私の手元に残った……という推論は正しい。しかし」

銀色に光沢する丸眼鏡のレンズの奥から鋭い視線を放ち、長身の鍛冶屋はさつきとは違い、あまり抑揚がない声で先を口にした。

「もしあの指輪がストレージに格納されていなかったとしたら？ つまり、オブジェクト化され、グリセルダの指に装備されていたとしたら……？」

「あっ………」

二人がかすかな声を漏らした。

そうなのだ。オブジェクト化されたアイテムは、それを装備するプレイヤーがモンスターまたは他のプレイヤーに殺された時、無条件にその場にドロップする。だから、グリセルダさんが指輪を装備し、レッドに殺害されてその場にドロップした指輪はレッドが持ち去った……という論法は成り立つ。

追い詰めていたはずが、逆にこちらが追い詰められているという状況を自覚してか、グリムロックの口角が憎々しく持ち上がった。が、すぐにその表情は消え、次には悼むような動作をしていた。

「……グリセルダはスピードタイプの剣士だった。あの指輪に与えら

れた凄まじい敏捷力補正を、売却する前に少しだけ体感してみたかったとしても、不思議はないだろう？　いいかな、彼女が殺されたとき、確かに彼女との共有ストレージに格納されたアイテムは全て私の手元に残った。しかしそこに、あの指輪は存在しなかった。そういうことだ、探偵君」

……確かにその主張を論破し得る材料は、ない。しかし、グリムロックがまだ少しでも亡き妻を愛しているという設定ならば、その言葉にはささいな、しかし黄金林檎メンバーにとっては重要な、リーダーへの嘲りが生じる。それは『被害者』としてのグリムロックが言うには矛盾が生じる。

だが、俺がそれを指摘し、事件が解決しようとも死者を冒瀆することになる。しかも、否定されたらもうどうしようもない。だが、俺が持ち合わせているカード、今使えるカードはそれしかない。

故に、俺は――

「……待てよ、グリムロック」

――立ち去ろうとするグリムロックを引き留めた。

誰でも、人は生命と意思を受け継ぎ歩いていくのである。

「まだなにかあるのかな？」

……さて、勢いよく言い放ったのはいいものの、まず何個か訊かなければいけないことがある。

「……二つほど訊きたいことがあってな。まず一つ。あんたは今でもグリセルダさんを愛しているか？」

「もちろんだとも」

即答。まあ予想通りだ。『被害者』グリムロックが言う選択肢には、この返答しかない。

「じゃあもう一つ……これは他の三人にも訊きたいんだが、あんたらのリーダーは優しかった……いや、言い方を変えよう。あんたらのリーダーは、あんた達との関係や絆を大事にしていたか？」

質問の意図が理解できないのは、この場にいる俺以外の全員の共通の思いだろう。

ヨルコさん達三人は顔を見合わせて頭にクエスチョンマークを浮かべていたが、やがてゆっくり頷き、グリムロックは言葉で応じる。

「……ああ。そうだよ、彼女は優しかったからね。……もういいかな？ 私はこれで御暇させてもらうよ」

「ああ、ちよつと待ってくれ」  
言質はとった。舞台の幕も上がり、役者も揃っている。さあ、始まりだ。

「……いったいいつまで続ける気だい？ 私の疑いは晴れたはずだが？」

「ああ、ちよつとな。あんたが憐れでならなくてな」

初手はインパクト。なんでもいい、相手がこちらの話を聞くように仕向ける。

事実、グリムロックだけじゃない、この場にいる全員が驚いている。

「……どういふことだ？」

眼鏡の奥の剣呑とした睨みを感じながら、俺はつらつらと嘲るように言った。

「いや、最愛の妻を理解している気のアンタが滑稽で滑稽でな……」  
嘲笑を浮かばせ、嘲弄の感情を持っているように思わせる。できるだけ不敵に、大胆に。

視線だけで問いかけているのが十分伝わるので、詭弁を続けた。

「あんた達四人……少なくともグリムロック、あんたは確実にリーダーに裏切られているんだよ」

「……どういふこと？ ハチ君」

俺を咎めるべきか、黙って聞いているべきかの境界辺りの微妙な表情をし、アスナが問う。

「それを説明するには、まずさっきの質問の意図を言わなくちやならん。いいか？ まず一つ目の質問、あれはグリムロックが本当に被害者なのかを確認するためにしたんだ。正直言って、お前も完全にシロだと思っないだろ？」

戸惑いながらも、まあ……といった様子で縦に首を振る。

「つまり、だ。愛していたのなら殺すはずがない。ならばグリムロックは被害者だ、そう仮定しよう」

俺はそして、と少し大きめの声で言う。

「二つ目の質問は、黄金林檎メンバーのリーダーに対する印象の相違を確認するのもあったが……より大きい目的は、グリムロックから言質を取ることだ」

「どういう意味？」

今度はキリト。

高めのソプラノ声での質問に、俺は腕を組んだまま右手人差し指をピンと立てた。

「あのな、さっきグリムロックを被害者だと仮定した。なら、グリセルダさんについては誰よりも信用できる証人だ。当然だよな、なにせ結婚までしてたんだから」

犯人だとまだ疑っているのだろうが、グリムロックを被害者と仮定しないと話が進まないと思ったのか、アスナと同じような微妙な表情

で頷いた。

「んで、その誰よりも信用できる証人がグリセルダさんは絆を大事にしていたと言った。……ここで一つ、矛盾が生じる」

「矛盾？」

ああ、と肯定し、その矛盾について語る。

「明らかに夫としておかしいことを言ったんだ。それは、グリセルダさんが指輪を売却する前に、指輪を装備して敏捷力を体感したかった、と言ったこと」

グリムロックと俺除く五人が首を傾げている。これは言い方を変えねば解らないだろう。

「まず、システムの手に装備できるのは、左右の手それぞれ一つずつだろ？　グリセルダさんは絆を大事にする人だった。じゃあ両手に装備できるアイテムは決まっていたはずなんだ。ギルドメンバーとの絆の証である印章シキルと、夫との愛情の証である……」

「結婚指輪……」

うわ言のように呟いたキリトに、わざとらしく称賛の拍手を送る。

「そう。つまり妻を愛し、信じているはずのグリムロックは、絆を大事にすると自分で言った妻が、私欲のために愛情の証か絆の証を外した……こう言っているんだ。即ち矛盾」

これはもうグリムロックにとつては王手じゃない、詰みだ。肯定すれば妻のことを絆より私欲を優先する人だと思っていることになる……即ち妻を愛している夫としてはあるまじき言動になるし、否定は言質をとっているためできない。この辻褄が合うようにするには、グリムロックがグリセルダさんを殺した犯人だということにするしかないのだ。

チエックメイト。もうグリム王ロックを守る駒言い訳はない。

無防備な王を責めるのは、こちらの駒糾弾だ。

「グリムロック……どうして、どうしてお金なんかのために奥さんを！」

「……………金？　金だつて？」

と、俺に八方塞がり論破されたときに膝から崩れ落ちたグリム

ロックが、膝立ちのまま、と笑った。

左手を振り、メニューウインドウを呼び出す。素早くオブジェクト化されたのは、少し大きめの革袋だった。グリムロックはそれを地面に放った。その瞬間に交響した金属音が、中に大量の金貨が入っていることを示している。

「これは、あの指輪を処分した金の半分だ。金貨一枚だって減っちゃいない」

「え……………？」

驚いたように眉を寄せるヨルコさんを見上げ、次いで他の五人を見渡しながら、乾いた声でグリムロックは言った。

「金のためではない。私は……………私は、どうしても彼女を殺さなくてはならなかった。彼女がまだ私の妻でいる間に」

感情を滲ませた瞳を一瞬だけ苔むした墓標に向け、鍛冶屋は独白を続けた。

「グリセルダ。グリムロック。頭の音が同じなのは偶然ではない。私と彼女は、S A O以前にプレイしたネットゲームでも常に同じ名前を使っていた。そしてシステムの可能ならば、必ず夫婦だった。なぜなら……………なぜなら、彼女は、現実世界でも私の妻だったからだ」

なるほど、と妙に俺は得心していた。珍しい話だが、ないわけじゃない。世の中にはネットゲを出会い系サイトとして使う直結厨なる者もいるのだから。

「私にとっては、一切の不満もない理想的な妻だった。夫唱婦随という言葉は彼女のためにあつたとすら思えるほど、可愛らしく、従順で、ただ一度の夫婦喧嘩すらもしたことがなかった。だが……………共にこの世界に囚われたのち……………彼女は変わってしまった……………」

帽子に隠れた顔は窺えないが、悲壮感を纏って顔を横に振って低く息を吐いた。

「強要されたデスゲームに怯え、恐れ、竦んだのは私だけだった。いつたい、あの彼女のどこにあんな才能が隠されていたのか……………。戦闘能力に於いても、状況判断力に於いても、グリセルダ……………いや《ユウコ》は大きく私を上回っていた。それだけではない。彼女はやがて、私の

反対を押し切ってギルドを結成し、メンバーを募り、鍛え始めた。彼女は……現実世界にいたときよりも、遥かに生き生きとし……充実した様子で……。その様子を傍で見ながら、私は認めざるを得なかった。私の愛したユウコは消えてしまったのだと。たとえゲームがクリアされ、現実世界に戻れる日が来ても、大人しく従順な妻だったユウコは永遠に戻ってこないのだと」

小刻みに震える肩は自嘲の笑いを表しているのか、はたまた喪失に対する悲嘆なのか俺には判らない。虫の羽音のような語りはまだ続く。

「……私の畏れが、君たちに理解できるかな？ もし現実世界に戻った時……ユウコに離婚を切り出されでもしたら……そんな屈辱に、私は耐えることができない。ならば……ならば……ならばいっそ、まだ私が彼女の夫であるあいだに、そして合法的殺人が可能な、この世界にいるあいだに。ユウコを、永遠の思い出のなかに封じてしまいたいと願った私を……誰が責められるだろう……？」

……アホらしい。これに尽きる。

人はどんなに変わるまいとしようとも、自分でも自覚なく変わっていくものだ。過去の自分を肯定しきれないなら変わろうとし、今の自分が好きなら停滞しようとする。しかし、どちらにせよ人は変わるのだ。

例えば、雪ノ下雪乃。

あいつは自分の我を通さんがために周りから孤立し、ボツチと化した。

例えば、由比ヶ浜結衣。

あいつは人に嫌われたくないがために空気を読み、周りに合わせていた。

だが、この二人は確かに変わった。雪ノ下雪乃は由比ヶ浜結衣という友達を得て。由比ヶ浜結衣は雪ノ下雪乃が自分の信念を貫く姿を見て。

グリセルダさんの場合は、SAOという極限状態で変わった……或いは元々の性格に戻ったのかもしれない。



「……お前のちっぽけなプライドなんかどうでもいいがな、妻との生活を思い出のまましたいなら、自殺でもなんでもしろ。ただな、そんな理由で殺人なんかしてんじゃねえよ」

「そんな理由？ 違うな、充分すぎる理由だ。君にもいつか解る、探偵君。愛情を手に入れ、それが失われようとしたときに」

「いいえ、間違っているのはあなたよ、グリムロックさん」

反駁したのは、なぜか言われた俺ではなくアスナだった。

凜とした態度だが、俺には読み取れない表情で、アインクラッドで最も美しい剣技を放つ細剣士は諭すように告げた。

「あなたがグリセルダさんに抱いていたのは愛情じゃない。ただの所有欲だわ。まだ愛しているというのなら、その左手の手袋を脱いでみせなさい。グリセルダさんが殺されるその時まで決して外そうとしなかつた指輪を、あなたはもう捨ててしまったのでしよう」

指摘されたグリムロックの細い肩が揺れ、右手で左腕をギュウツと握る。が、手はそれ以上動かず、結局左手袋を脱ぐことはなかった。

もう何度目かになる静寂を破つたのは、先ほどから黙りこくつていたシュミットだった。

「……エイト。この男の処遇は、俺たちに任せてもらえないか。もちろん、私刑にかけたりはしない。しかし罪は必ず償わせる」

どうするんだ？ と二人に視線を送ると、同時に首を縦に振った。アイコンタクトによる会話を終え、俺も構わないと首を動かした。

シュミットも無言で頷き返し、グリムロックの右腕を掴んで立たせた。アスナの言葉が相当堪えたのか、未だに項垂れている鍛冶屋を確保し、「世話になったな」と言い残し連行していった。

今度はヨルコさんとカインズが丘から立ち去ろうとし、見届けようと立ち尽くしている俺達の横で立ち止まって一礼すると、ちらりと眼を組み交わし、ヨルコさんが口を開いた。

「アスナさん。キリトさん。特にエイトさん。本当に、何とお詫びして……何とお礼言っているか。エイトさんが来てくれなければ、私たちは殺されていたでしょうし……お二人がいなかったら、グリムロックの犯罪も暴くことができませんでした」

「いえいえ！ 私達は本当に何もしてませんよ。頑張ったのはエイトです」

謙遜したのち、俺を褒めるような言葉をいつてくるキリト。

「いや、俺別になんもしてねえし。元を辿れば、ヨルコさん達二人が圈内事件の演出をしたからだろ」

一瞬キョトンとしてから少し笑い、改めて深い礼と感謝の言葉を述べてから二人は丘を降りていった。

やがて四つのグリーンカーソルが主街区方面に溶けるように消え、子丘の上には青い月光と四月にしては涼しげな夜風だけが残った。

「……………ねえ、二人とも」

不意にアスナが俺達二人に語りかけてきた。

「もしあなたたちなら……………仮に誰かと結婚したあとになって、相手の人の隠れた一面に気づいたとき、どう思う？」

「えっ」

キリトの驚声。無理もない。俺も一応婚約できる歳だが、そんな人生の一大決心を考えたどころか、誰かに恋愛感情を抱いたことすらない。

そんなことを考えていると、キリトが自らの思いを告げた。

「うーん、私が好きになる人は多分、人によつて態度を変えない、裏表がない人だと思うから心配ないよ」

ね？ みたいな眼で同意を求められても解らないから、知らないから。

しかし……………やっぱり天使が好きになるやつは、嘘を吐かない清廉潔白なやつなんだな。

「ふうん……………ハチ君は？」

「俺？ 俺は慰謝料ふんどくつてり……………ごめんなさい、冗談です」

咳払いを一つして、調子を整えてから真面目に答える。

「と言つてもなあ……………やっぱりお互いに全てのことを理解して結婚する訳じゃないから、ある程度は隠し事はあるだろうしなあ……………まあ、隠し事をしてもすぐにわかるくらい以心伝心な人と結婚したいな、俺は」

イメージとしては老夫婦に近い。お互いに何をしてほしいのか大  
体判る、みたいなの。

ちよつと真面目に語ってしまった気恥ずかしさから、さっさと帰ろ  
うぜと早歩きで丘を降りようとすると、二人に襟を掴まれ首が絞ま  
る。なにすんだと抗議の視線を送るべく、後ろを振り向き――

――そこで俺は、あり得ないものを目にした。

ヒースクリフの言った通り、この世界のあらゆるものはコードに置  
換可能なデジタルデータなのだ。例えば、この仮想体も、ただの数字  
の羅列の塊でしかない。

そんな世界の、ある丘の北側にあるねじくれた古樹の根本にある、  
苔むした墓標の傍らに。

薄い金色の膜のようなものに包まれた、半ば透き通っている、一人  
の女性プレイヤーの姿があった。

細い体を守るような防具は、最低限の金属鎧だけで、腰には細め  
の片手剣。背中には盾。髪は短く、顔はたおやかな美しさだが、眼を  
引くのがその瞳。その瞳に宿す炎は、今まで見てきた何人かと酷似し  
ていた。

即ち、このデスゲームを自らの剣で斬り拓かんとする者。

そんな攻略の意思を宿した女プレイヤーは、穏やかに俺達を見詰め  
ていたが、やがて何かを差し出すように、開いた右手を俺達に伸ばし  
た。

なんとなく、本当になんとなく右手をズボンポケットから出し、受  
け皿のようにすると、全身を駆け巡るような熱さを掌に感じた。

「あなたの意思は……必ず私達が引き継いでみせます。いつか必ずこ  
のゲームをクリアして、みんなを解放してみせます」

「ええ。約束します。だから……見守っていてください、グリセルダ  
さん」

キリトの宣誓とアスナの囁きが女剣士に確かに届いたのを直感し  
た。優しげなその顔に、やはり優しげな笑顔が浮かべられ――。

次の瞬間には、もう誰も居なかった。

再びポケットに手をつ突っ込み、一步後ろから二人のように立ち尽く

していた。

「ぎ、帰ろ。明日から、また頑張らなくちゃ」

「……そうだね。今週中に、今の層は突破したいね」

俺達は振り返り、主街区に向かって歩き始めた。

出逢いもあれば、別れもある。愛があれば、憎しみもある。世の中はそういう風にバランスがとれているのだ。

しかし、二つだけ、バランスをとるためではなく、繋げるためにあるものがある。即ち、生命いのちと意志。

生命と意志を受け継ぎ、一步一步、一つ一つ歴史は形作られてきた。

ならば、この世界のクリアのために一步一步ゆっくりでもいい。受け継いだ意思を糧に、歩いていこう。

何故だか、比企谷八幡は会いたくない人物と会ったこともない人物とエンカウントする。

俺の紅く光る剣尖が、闇に光跡を残し、敵を斬り裂き、塵へと還す。それと共に、レベルアップのファンファーレが鳴り響いた。

2024年6月20日。

アインクラッド攻略層は、ようやく六割を越えていた――。

「ぐあーっ、疲れたあ……」

夜七時の夕飯時。俺は倦怠感に蝕まれ、布団の魔力に吸い寄せられるようにダイブした。しかし、少し喜ばしいこともあった。

「やっとレベル九十か……」

ゲームっていいよな、自分が努力した成果がちやんと眼に見えて反映されてる。

襲ってくる眠気の中、なんとかウィンドウを閉じ、微睡むような眠りについた。

朝。……かと思ったら、もう十二時でした。実に十七時間睡眠であ

る。昨日あと一レベで九十だから張り切りすぎちゃった☆

ふと眠気が覚めてくると、昨日晩飯を食べていないツケの空腹感がヤバくなってくる。何か食いもんはないか……とアイテムストレージを漁るも、何も無い。

仕方なく今夜料理を作り溜めすることを決意し、眩しい朝（昼だけど）に苦笑いして、俺は街に繰り出した。

見つけたのは、NPC経営のカフェ。木造建築でおしゃれっぽい店で、且つ少し古さを思わせ静かな雰囲気を漂わせる。

心が落ち着きそうだ……と、俺はドアを引き、カランカランと音が鳴る。

これまたウェイターみたいな格好をしたNPCにハニトーと極甘コーヒーを注文し、受け取ってから席を探す。といっても、閑古鳥が鳴いている店なので、すぐに空いている席を見つけた。

そこにトレー（中世っぽい雰囲気のアインクラッドになぜあるか不明だが）を持っていき、座ろうとしたところで、あまり聞きたくない声が耳に入ってきた。

「オーイ、ハッチー！」

……無視だ、無視。なんか独特な喋り方の聞いたことある声が遠方から聞こえてきたが、無視だ、無視。

「ひどいヨ、ハッチー！ オネーサンの言葉を無視するなんて！」  
「おわっ！」

目を瞑ってコーヒーを啜っていたからか、急に目の前に現れた顔にびっくりしてしまう。見事にペインティングされている三本ヒゲは見間違えようがない、悪徳情報屋、通称《鼠》のアルゴだ。

「……何の様だ、《鼠》」

「人を認識した途端に嫌な顔をしないでくれヨ……いくらオネーサンでも傷つくゾ？」

黙りんす！　ぬしがわっちの生活パターンをアスナに売ってからと言うもの、無理矢理攻略に付き合わされて大変なんだからねツ！　ちなみにこれはツンデレなんかじゃないんだからねツ！

……いや、待てよ。レベルも九十になったことだし、スキルスロットも増えた。なら、《鼠》から新しいエクストラスキルについて訊いて、それを追加するのもアリだな……

「いや、《鼠》。いいところに来た。さすが情報屋の鑑！」

「なんか次はいきなり褒め出したヨ……」

いきなり態度を百八十度回転させた俺に対し、奇妙な宇宙人を見つけたかのような眼を向けてくる《鼠》。

「ま、と言うのも……情報を買いたい」

「ホウ？　何の情報だ？　オネーサンとハッチの仲だ、安くするゾ？」  
両腕で頬付きをつき、ムフーと笑みを浮かべてくる。やめろ、なんかウザい。

「……新しいエクストラスキルの情報はなんかないか」

「ふうん？　遂にハッチは九十レベルになったんだナ？」

「ああ、まあな……で、どうだ？」

「ないこともない……が、誰もクリアしたことがないから、どんなエクストラスキルかは判らない」

「ほー、解った。じゃあその情報売ってくれ」

そのエクストラスキルを取得できるクエストは、五十二層で受理で

きるらしい。情報はクエスト内容と、取得できるスキルだけではないらしい。

五十二層は、一言で表現するなら『和』である。

中世的な建物や雰囲気なアインクラッドで、今の所唯一和式の珍しい層だ。

街は日本家屋が建ち並び、NPCも和服、連なる店々も和菓子屋や緒茶所など、今の日本もここまで和じゃねーぞと思うほどの和尽くし。

さて、目的の場所は五十二層のポータルのすぐ左を流れている川を渡れる石造りのアーチ橋を通り、ずっと真つ直ぐ言った中の山にあるらしい。思わず「トトロいるもん！ 八幡見たもん！」とか言っちゃいそうなくらい鬱蒼と木々が生い茂っている。れっきとしたワールドで、ダメージの通る《圏外》である。

ふと、気配を感じた。否、感じていた。だが辺りをキョロキョロ見回すもプレイヤーは誰もいない。

はて、気のせいだろうかと思しながら《索敵》スキルを発動すると——いた。

「ああー、やっぱ先に飯食っていいこう」

嘘の独り言を言いながら来た道に戻り、じわじわ追跡者に近づいていく。しかし俺から見えないように多分焦って後退していつてる——眼で見えないから索敵スキルでの推測だが——感じがする。

いつそ走って取っ捕まえようか……とも考えたが、相手が何者か……少なくとも、レッドかそうじゃないかを見極める必要があると思いい、さつきハニトー食ったばかりの胃——正確には味覚野——に、食べ物（のデータ）を詰め込む。

食後の腹ごなしを装い、トップスピードで街中を駆け、目的地を指した。



が、撒くことはできなかつた。まあトップスピードと言っても、手がどれくらい速さまで着いてこれるかを確認して、そこからレベルを推測するのが目的だから、本当の全速力って訳じゃないが……ちなみにこの追跡者、俺の全速力の70〜80%まで追隨してきたから相当な手練れ……仮に筋力寄りビルドなら攻略組にも匹敵するレベルだ。敏捷寄りでも、まあ七十レベルくらいは行くだろう。さて、油断しなければ俺一人でも十分倒せると判明したし、そろそろ詰問するか。

再び疾走。相手も慌てたように追いかけるが、同時に隠蔽した俺を見失った。俺は木々で身を隠しながら大きく左に回り、追跡者の後ろに回り込む。

そのまま身を隠しながら相手を目視していると、あることに気づく。

……なんだ、あいつ。スカートなんか穿きやがって。

SAOでは、男性プレイヤーが女性プレイヤーの服を着ることはできない。つまり、あの追跡者は女性、ということになる。

鞘から音もなく刃を抜き去り、まるで暗殺者か忍者のように忍び足スキルを使い、無音で忍び寄る。

絵面は変質者が少女に襲いかかるそれだが、先に不敬なことをしたのはあつちだ。

右肩の上に剣を突きだし、動いたら斬ると牽制する。

「あー、動くな。手を挙げる。そして目的を言え。尾けてたな」

後ろから見る限り、紙の色は赤。長さは背中くらいまでであり、頭防具だろうか……カチューシャみたいな物を着けている。

俺の命令通りに手を挙げたまま回転し、前方を露にする。

まず眼には言ったのは、黒と白が主色のメイド服……みたいな防具。顔は驚きからか恐怖からか少し涙ぐんでいるので罪悪感を感じないでもないが、コイツの目的が判るまで気は抜かない。

前髪は多少長さの違いはあるもののおかっぱぽい。瞳は小さく黄色。全体の顔立ちを総合した言葉を一言で表現するなら、可愛らしいとか綺麗ではなく整っている、が適切な感じがする。

「……んじゃあ、まずなんで俺を尾けていたか……説明をしてもらおうか」

「え、えーとお……」

困惑した表情を浮かべたので、今は相手の左肩の上にある剣をカチャツと鳴らして威嚇する。

すると少女はまたも跳ねるようにビクツ！ としながら体を震わせ、たどたどしく説明を開始した。

「ま、まず確認したいんだけど……エイト君もエクストラスキル、取りに行くんだよね？」

「おい、待て。何で俺の名前を知ってる？」

この少女と俺は今までで全く面識がない、それは断定できる。

「えッ、あ、そっか。そこから説明しないといけないんだね……」

いや独りで納得しないで、僕にも説明してくれませんか？ 状況全く呑み込めないんですけど。

「はあ……じゃあこれだけは取り敢えず訊いておく。お前はレッドか？ 誰かに依頼されて俺を殺しに来たのか？」

「いやいや、違うよ！ それは絶対じゃないよ！」

……なんか警戒するのもアホらしくなってきた。取り敢えずコイツが嘘を吐いていないのは、人間観察で培った経験で判る。コイツも剣をずっと突き付けられていたら話しくいだろう。

一応剣を降ろすが、まだ抜き身のままにしておく。それから大股で三歩くらい後ろに下がり、説明をするように視線で促した。

その行動に安堵と歓喜の表情をし、また唇を上下に動かし始めた。

「えつと——」

とにかく、人は白熱すると時がいつの間にか過ぎていくように感じる。

「えっと、まず自己紹介からしていいかな？」

……脱力した。なんか謎を語ってくれる雰囲気だったのに、自己紹介って……いや、逆に考えるんだ比企谷八幡。自己紹介をしておいた方が話がスムーズに進むと思えばいいんだ。そうよ八幡、どんなときでもよかったを探さなきゃ！

「私の名前はレイン。主武器は片刃の片手剣だよ」

「……お前は知ってるらしいが、俺はエイト。主武器はお前と同じ片手剣だが、俺は両刃だ。ダブルエッジ……で？　なんで俺の名前を知ってたんだ？」

「ああ、それは簡単だよ。アルゴさんから買ったの、情報」

……ね・ず・みいいいっく！　なにやってくれてんの？　アイツ。憤慨する俺とは対照的に、種明かしが楽しいと言わんばかりに微笑むレイン。後で《鼠》をシメることを決意し、次の質問に移る。

「……なんで俺の情報を買ったんだ？」

「いや、正確にはエイト君の情報を買ったんじゃないかって、アルゴさんに聞いたの」

「……何て？」

「この世界で強いプレイヤーは誰？　って」

え、レインさん。あなたチンピラ？　その質問完璧に不良の台詞ですよ？　天辺獲る気？

「え、何？　チンピラなの？　不良なの？　辻斬りなの？　人斬りなの？」

「だから違うよ！　……ちよっと手伝ってもらいたいことがあって……」

「じゃあ他当たれ。俺強くないし、もっと強いやつなんか他に大勢いる」

なんか警戒して損したな……と溜め息を吐きながら、剣を鞘に収

め、赤髪の少女の横を通りすぎる。

「わあーっ、待って待って！」

が、裾を握ってきたレインによってそれは阻まれる。うっかり惚れちやうからさういうことはやめてほしい。

「……なんだよ」

「その手伝って欲しいことがエイト君の目的と同じなんだよ！」

「……」

俺の今の目的。それは、《鼠》から聞いたエクストラスキルを取得できるようになるクエストをクリアすることだ。エクストラスキルというからには採集系やお使い系クエストではないだろう。なら殺戮系クエストか。しかも助けを求めるということは、七十レベルくらいは余裕であるだろうレインがクリア出来ない……少なくとも、ソロでは難しいと判断するほどの超難関クエストだということだ。なら、共に進行した方が得策だろうが……

害意はない、これは判る。だが、会って数分の相手を完全に信用などできない。

「……嘘臭いな……」

「えっ!？」

つい口に出してしまった本心に、眼に見えてレインが動揺する。緩めた警戒心を再びMAXにして、いつでも抜剣できるように身構える。

あくまで俺と争う気はないと主張するかのようにレインは両手をまた挙げたレインに対して、俺は「お前の目的はなんだ？」と訊いた。すると、ちよつと言い難そうに口をモゴモゴした。

「それは、その……」

「……?？」

様子がおかしいのは確かだ。だが、何かを隠してる感じでもない。なら、なんだというのか。

「……エイト君は、覚えてない? 四十層でのこと……」

「四十層……?？」

四十層、四十層………コイツと何かあったか?」

「覚えてない」

「そっか……」

落胆した表情を見せると同時に肩を落とし、少し暗い声で諦念が混じった声音で呟いた。

「……何かあったのか？」

「ん？ うん、大したことじゃないんだけど、一度私エイト君に助けられたんだよ？」

「……………は？」

助けた？ 誰を？ あ、コイツを？ 誰が？ 俺が？ え、マジで？

疑問符だらけの内心がなんとなく顔に出ないように努め、再び問う。

「すまん、全く覚えてない。会ったことあったか？」

四十層……食虫植物が闊歩する植物地獄は、攻略組もかなり苦しめられた。

高い木々が生い茂り、迷宮区タワーを眼で捉えることができず、道なき道を歩いた。更に植物型のMobがその木達に擬態していて、不意打ち強襲によって殺されたプレイヤー達は過去最多。とんだ鬼ゲード。あの層では索敵スキルを取得している奴が、ワンパーティー一人は居ないと攻略禁止と、さしもの《攻略の鬼》も言ったほどだ。まあ、その分ボスが脆弱だったのだが……

あのボス戦で死にかけたのは一人、キリトだけだ。黒猫団の一件があつてからの戦闘スタイルはまさに自暴自棄。防御も回避も最小限に、敵を滅多斬りだった。

そしてキリトのHPバーがイエローゾーンに突入するたび俺がタゲを取り、とぼちちりを喰らったものだ。

俺がこんな何か月前のことを覚えているのは、俺がとぼちちりを喰らった時にアイツが見せた自責の念が余りに濃かったからだ。

クラインやアスナが無理矢理にでも回復させなければ、危険域の体力でもボスに飛びかかって行くのでは、と思うほどに。そしてそれは次の層でも、そのまた次の層でも続いた……。俺が四十層で覚えている。

るのはこれくらいだ。

「うーん、五ヶ月くらい前、かな」

脳内検索用語に五ヶ月前と追加し、再検索。検索結果は……

「……あれか？ まさかあの……ダンジョンの奥地の？」

四十層迷宮区タワリーの更に北に位置する森のダンジョン……正式名称《暗闇の森》。そこは《迷いの森》に並んで脱け出せないことでは有名なダンジョンだ。

今は、とわざわざ付けたのは、当時は五十層開放が出現のキーであつた隠しダンジョンのため、知っている奴が少なかったのだ。

では、なぜ俺が攻略済みの層にいたのか……理由は単純、ただの偶然だ。

あの頃は《攻略の鬼》様の最高潮。傍若無人、天上天下唯我独尊、我田引水……はちよつと違うか。まあとにかく、猪突猛進の副団長が無理矢理攻略に参加させようとしたので、自由奔放な僕が本当の鬼とバーチャルリアリティー鬼ごっこしているんだが。みたいな売れないラノベのタイトルみたいなことをしていたのだ。

俺がちよつとした用で四十層フィールドに居たとき、中層プレイヤー育成でもしていたのか血盟騎士団員を数名引き連れ、バツタリ遭遇。

そこからはお説教の嵐。なんでこんなところにいるんですか？ 攻略は？ やる気あるんですか？ e t c e t c ……

鬱憤が爆発した家出少女よろしく駆けて逃げ出すと追いかけてくる鬼。修羅。夜叉。ちなみにこれは全部アスナさんを指す言葉として有名なものでした。

そんな鬼をなんとか撒くためにダンジョンに入り込むと、そこが暗闇の森だった……というわけだ。

アイテムも装備も余力があるし、探索していくかとブラリ旅を開始し、M o b をバツタバツタと薙ぎ倒し、ダンジョン最奥でボス《ザ・ウィッププラント》——直訳で鞭の植物——に正に殺されかけていたプレイヤーを救出。高価な回廊結晶を使い、そのプレイヤーを主街区に転移させたのだ。

まさか、その時のプレイヤーが……

「……お前だったのか……」

「えへへ、そうなんだ」

頬を照れ臭そうに掻きながらはにかむ。え、でも、ねえ？ 人違いじゃないの？

「でね、ちゃんとお礼がしたいなーって思って、強くなろうとエクストラスキルを取ろうとしたんだけど、ソロじゃ厳しくって……助っ人を頼もうとアルゴさんに強いプレイヤーは誰？ って訊いたら、あの日助けられたエイト君だったんだ」

「……つまり、物凄く確率で再会したってことでOK？」

「うん、OKOK」

右手の人指し指と親指で丸を作っているレインを見て、この日何回目かの脱力をした。

「……じゃあ話を戻すぞ？ お前はエクストラスキルを取得できるようになるクエストに協力してほしい、と」

「うん」

「そしてそれは俺への恩返しのためだ、と？」

「うん」

再びの肯定。

「なら話は簡単だ。礼なんて要らんから、お前がスキルを取得する必要性はない」

「……えっ？」

いきなりの否定的な言葉に戸惑っているレインはさておき、俺は口を動かす。

「そもそもな、見返りが欲しくてやったわけじゃないんだ。よく言えばボランティア、無償の奉仕。悪く言えばただの自己満足だ。だからお前が気に病む必要まったくなし。よってエクストラスキルを取る必要も全く無し」

「でも、私がエクストラスキルを取るのを邪魔する権利はエイト君にはないよね」

小悪魔的な笑みを浮かべ、試すような口調だったので、俺もつい反

論してしまった。

「……まあな。でも、俺が手伝う必要もないよな？」

「うっ、それはそうだけど……でも——」

「いや——」

当初の目的も忘れ、平行線の言い争いを日が落ちるくらいまで続けていると、モンスターが滅多にポップしないここで、珍しく出現したMobが襲いかかってくる。

するといち早くレインが動き出し、霞むほどの剣速で狼型Mobを一撃で葬る。その一撃の威力、精密さ、速さはマジで攻略組レベルかもしれない。

なんとなくドヤ顔がウザかったので、無視してクエストが請けられる小屋へと向かい歩き出すと、子犬のように着いてくる。横目でその様子をチラリと見やり、大きく溜め息を吐きながらパーティー申請をレインに送る。

後ろで喜んでいるレインの声を聞きながら、俺——いや、俺達は早足で日没までに目的地に着くべく、会話無く黙々と歩き続けた。



いつまでも、比企谷八幡は考え続ける。

森林に囲まれた並木道を歩き、藪を潜ったりMobを倒したりトトロを探したりしていると、ごちんまりとした一軒家が建っていた。

屋根は瓦だが、本体は木造。かなりの年季を思わせるほど古くさく見えるものの、倒壊の心配は無用なほどしっかりとしている。

取っ手も扉自体も木のドアを横にスライドし、お邪魔する。まず土間があり、次に十畳ほどの広さがある広間。そこには現実世界では絶滅しかけの囲炉裏があつて、その奥に貫禄バリバリの歴戦の猛者なオーラを漂わせるお爺さんが。

彫りが深く、厳つい顔つきに猛禽類を思わせる鋭い目。獅子のようなツンツンした白髪と、同じく白く艶がある大量に蓄えられた髭が怖さを二割増しにしている。

『……ぬ？ 我が剣術を習いにきた入門者か？』

この家に入ることがクエストフラグだったのか、これまた顔と見事にマッチした厳格な声で問いかけてきたので、「はい」と答えると、武士のごとく立ち上がり、一番隅の畳の上に立った。

『……汝らが本気で我が流派の剣術を会得したいのならば、この下にある迷宮の首領を見事討ち取って見せろ』

言いながらさつきまで上に立っていた畳を引っぺがし、作業を終えると横に仁王立ちする。畳の下にあったのは、地下へと続く階段だった。

もともとこうなることを知っていたレインはさつきと階段を降りていくため、俺もそれに倣う。

……しかし腹減ったな。ずっと口論してたから余計に腹減った。おまけにストレージには食材はあつても食糧がない。

降り立った所はドーム状の広間で、安全地帯のようだ。マッピングが開始されていることから、ここはダンジョンであることが解る。上を見ると、ご丁寧には畳はキツチリもとの位置に戻されており、光源は壁で点いている松明だけだ。

「それじゃ、レッツゴー！」

「おお、行っていい。一人で」

俺の衝撃発言に目を瞬かせ、次いで大声の驚声をあげた。

「えええっ！ 手伝ってくれるんじゃないの？」

いや、手伝うとは言ってませんよ？ 　ただパーティー申請を送った  
だけですよ？

「……いや、俺今日はここで寝てから攻略するつもりだから」

「……まだ八時だよ？」

呆れた語調で言うが、未開の地を開拓するならば、ベストコンディ  
ションじゃなくてはならない。無理に急いで命を落としたら本末転  
倒だ。

テントの設立、寝袋のオブジェクト化、簡易キッチンの設置をした  
辺りで俺が梃子でも動かないと理解したのか野営地の建築を手伝っ  
てくる。といっても、ピツピツとボタンを押すだけだが。

テント×2、簡易キッチン×1、寝袋×2とオブジェクト化が終わ  
り、大体寝床が完成したところで晩飯作りに入る。

S A Oでの料理は簡単。包丁アイテムで食材を切り、フライパンア  
イテムや鍋アイテムなどで調理。最短だったらこの二工程で終わる。

何かの鶏肉を包丁で細かく切り、鍋に入れる。その他野菜もポイポ  
イ鍋に放り込み、簡易コンロに乗せてスイッチオン。

レインの方を見ると、料理スキルは取っていないのかこの層のNP  
Cショップで買えるお茶を用意していた。いや、俺が作ったのポトフ  
なんですけど……

そんなことを思いつつ、料理の完成を待つ。

ゆらゆら揺れる炎を眺めていると、レインが思い出したように訊い  
てくる。

「……そう言えば、エイト君って攻略組だったよね？」

「……ああ」

「凄いな、攻略組って私たちににとっては雲の上の存在だよ」

「……そんなことはねえよ」

そう、全くもってそんなことはない。攻略組だからと言って特別な  
訳じゃない。ただ、この世界のシステムが与える数字の恩恵が、他人

より少し多いだけだ。

いくらモンスターと命のやり取りをしているとはいえ、普通に笑うし、泣くし、怒りもする。同じ人間なのだから当然なのだが。

「……俺達は別に特別って訳じゃない。知らないか？ 天は人の上に人を作らず、つてな。そりゃ物理的には攻略組は上の層にいるかもしれないが……」

「でも、全SAOプレイヤーにとって、攻略組は希望みたいなものなんだよ？」

「それも違う。俺も含め攻略組なんてのはエゴイストなんだ。人より上に立ちたい、見下されたくない……そんな感情が渦巻いて、強迫観念みたいになつてんだよ。自分達は最前線で戦う、謂わば勇者、つてな」

まあ一部はただ攻略しようと考えている奴もいるけどな……と付け足し、ポトフを皿によそう。その後は黙々と食事をしているだけだが、会って間もない人と話せるわけもなく沈黙する。

確かに攻略は順調かもしれない。だが、一つだけ懸念事項があるのだ。前々から目に余る行為をしてきたレッドギルド、《笑う棺桶》ラフィン・コフィンあのギルドと攻略組の本格的な衝突は、もう目の前なんじゃないかと。

上を見上げ星を探したが地下にそんなものがあるはずもなく、もう一度目を瞑った後に見渡しても、やはり星は見つからなかった。

食後は基本レクチャーをしてもらい、どんな敵、マップ、レベルを教えてもらつてお互いテントに潜った。

一つ、レインと話していて思ったことがある。

なぜ俺はこんなことをしているのか……ではない。

俺は、なぜ攻略組になったのか。

現実に戻るため？ 確かにそれもあるだろう。だが、より確実に生きて帰りたいのならば、ずっと《圈内》にいたべきだ。

なら、全S A Oプレイヤーのためか？ 違う、俺はそんな聖人みたいな奴じゃない。

人の上に立つのが快感だからか？ 違う、俺は目立つのが嫌いだし、むしろ自分は下の人間だと思っている。

なら、俺は――

そこまで考えが行き着いたとき、俺は睡魔に襲われてされるがままになった。

朝起きたら、寝息をたてる女の人の顔が目の前にありました。

あつれく？ おつかしいなあ、いつの間にS A Oはギャルゲーに変わったんだあ？ テンプレだと幼馴染みキャラの役目だよね、朝チュンって。

しかもご丁寧に俺の寝袋をレッグとアームでがちりホールドしているだど!?! マイマニフェストシャイマインドハートが……ホワットドウアイセイ？ オー！ 筒増しや可で谷藁か異旨が無二無二刷るY O！（訳：慎ましやかで柔らかな胸がムニムニするよ！）……いかにいかに。あたまのなかでごじりまくるほどよゆうがないぞ、ひきがやはちまん。

下手に動けばハラスメントコードが発動する。しかし動かなければいずれレインが起きてしまう。つまり変態認定Ⅱ黒鉄宮に。

何とか逃げ出せないかと悶々する思考で考えついたのは、逃げ出せ

ないという結論のバッドエンドのみ。こんなエンディング、見えてほしくねえよ……

ちなみに起きたときの反応は、意外にも怒るでもなく黒鉄宮に送るでもなく、ただただ髪と同様顔を真っ赤にし、口をこれまた真っ赤な金魚のようにぱくぱくさせているだけだった。記録結晶で撮影しようか……と俊巡したが、本気で斬りかかれそうだったのでやめた。一応ここ圏外だし。

起こそうと思ったら余りに熟睡しているので自分もなんか眠くなってしまう、そのままコロリ……だそうだ。ヤダ、春って怖い！だから雪ノ下さんも陽乃って言うんだ！ 八幡納得！

昨日とは違い、どこか気まずい雰囲気の中朝食を済ませ、装備および道具の点検。

そろそろ装備を更新するべきか……と熟考してから武器、防具、ともに装備を終え、ボス部屋の二枚扉を小さくしたような入り口——こっちは横に開くタイプ——を通り、探索を開始する前に気を引き締める。

「じゃ、行こう」

「あいよ」

足を踏み込んだ瞬間、モンスターが待ち伏せしていたのか、飛びかかってくる——しかし。

神速とも言えるほどの疾駆で、散々手こずっただけの難しいだの言っていたダンジョンのモンスターを斬殺。俺の必要性が疑われる瞬間だった。いや、俺もエクストラスキルを取りに来たんだから、必要無しって言われようがソロでやるつもりだったけどね??

「……ちなみに今一瞬で倒した敵は？」

「《ウインディ・ビー》。このダンジョンで最弱の敵だよ？」

「……あ、そ」

いやでもカーソル合わせたらレベル七十つて見えたけど。六十層くらいに出てくる敵のレベルだよ？ 最前線から数層下くらいだよ？ それを一瞬つて……

もしかしたら奥に行けば、最前線より強いMobがいるんじゃないだろうな……と、嫌な予感を払拭できないまま気を取り直してダンジョンに突入した俺だった。

……一つだけいい？ レインさん、あなた何で攻略組にいないの？

謎なことに、比企谷八幡の周りの人間は比企谷八幡のあらぬ噂を流している。

俺の必要性が疑われた瞬間から三十分後、俺の嫌な予感は見事に当たってしまった。

「……どんな難易度だよ。レベル七十五って、最前線のフィールドボス並みだぞ……」

強大な顎で俺を噛み砕かんと迫ってくる蛇——《ペインフル・スネーク》。しかも厄介なことに、牙に掠るだけで麻痺にするとという特殊効果を持っていると、レインが《鼠》から買った情報にあったらしい。

距離を取り、ジワジワチクチク投剣スキルで削っているが、まだ二割くらいしか減ってない。

いつそのこと相討ち覚悟でやった方がうまくいきそうな気もするが、SAOでそれは禁忌だ。

なら、方法は一つ。

「……なあ、一つだけうまくいけばすぐに終わる作戦を思い付いたんだが……」

「なっ、にっ！」

前衛にいるレインが辛そうな顔をして応答する。なにせ自分と同等クラスの敵と戦っているのだから当然だが……

「ああ、俺たち二人で重攻撃スキルを使って、相手をデイレイさせて一気に倒す、って手段なんだが……」

「いいと、思うよっ！」

ペインフル・スネークの噛みつき攻撃をバックステップで避けたレインとは正反対に、すでに発動させていた《ヴォーパルストライク》で蛇に肉薄。強靱な鱗を切り裂き、ノックバックさせる。

「スイッチー！」

「え、あ、う、うん！」

いきなりの出来事で呆然としていたレインが一呼吸遅れてスイツ

チし、三連重攻撃《サベージ・フルクラム》を、横から腹を裂くように斬り、剣を刺したまま九十度回転。ねじ込むように押し込み、そのまま斬り上げる。そのまま先ほどとは真逆の斬り下げを、俺の攻撃からようやく立ち直った巨蛇に叩き込む。次は俺だ。

「スイッチ！」

今度は声が重なり、数刻前より遥かにスムーズにスイッチ。

一、二、三、四、五連続突きから斬り下ろし、斬り上げの後の全力上段斬り。片手剣上位ソードスキル《ハウリング・オクターブ》。片手剣最上位スキル《ノヴァ・アセンション》の十連撃にも迫る大技だ。  
「ラス、トオオオオ！」

レインの気合いの入った声と、赤い光を纏った剣によって繰り出された五連撃スキル《スター・Q・プロミネンス》は余すこと無く蛇のHPを削り切り、塵に還す。

「フウーツ」

思わず息を吐き、安全確認をする。このしんどい戦闘が、あと何回あるのやら……

「……な？ 昨日無理して行かなくてよかつただろ？」

「う、うん。そうだね……」

相当神経を使う戦闘だった上に、自分と同等クラスの敵と戦うことなどあまりないであろうレインにはかなり辛かったのか、息を切らししている。ふええ、息遣いが艶かしいよ……

「よし、次いくぞ」

「ちよ、ちよつと休ませて……」

「甘ったれるな、キビキビ動け！ 敵は待つてはくれないぞ！」

「いや、乱獲が目的じゃないよ？」

知ってる。男なら一回教官みたいなのに憧れるじゃん？ だから艦〇れも人気なんだろうし……違うか？ 違うな。

「ま、俺が見張ってるから少し休んでろ」

「う、うん……」

虚を突かれたためか、少し驚いた顔をして石造りの迷宮に座り込み、壁に寄りかかる。「ププツ、何あいつかつこつけてんの？ キモー



「イ」とても思っているのか、口で赤い頬を隠している。見えてるから。ほんのちよつぱり傷つくから。

また余計な過去トラウマを思い出してしまい、少しドンヨリしながら俺は素敵スキルを起動した。

五分くらい経ったときにレインが立ち上がり、翁曰くこの迷宮の首領搜索及びダンジョンの探索を再開した。

どうもこのダンジョンは生物系が多い。蜂然り、鼠然り、蛇然り……あれ？ 蜂↓八↓エイト↓俺。鼠↓アルゴ。蛇↓……ないな……。惜しい。雨型モンスターだったら完璧だったのに。……雨型モンスターってなんだ？

自分でも意味の解らないことを言ってしまったことの羞恥心から少し早足で歩く。ヤバイ、超はずかちい……キモいな、うん。

まあ、とにかく生物型モンスターが多いならば、現実世界での知識も少しは役立つ。蜂だったら針に注意、鼠だったら前歯に注意、蛇だったら牙に注意とか。

友達皆無系男子だった俺にとって辞書は先生、凶鑑は師匠だったためそれなりに知識はある。そのうち天童式戦闘術が使いちやうまである。

「ねえ、最前線ってこれ以上強い敵が出てくるの？」

「あ？ ああ……今ん所は同じくらいだな」

少し詰まりながらも回答する。俺も少し訊きたいことがあったので、流れにのって質問した。

「お前こそ、なんで攻略組にいないんだ？ 人との相性にもよるだろうが、パーティーを組めば最前線でも戦える……いや、ソロでも十分

戦えるくらい強いだろ？」

俺の問いがなにかの核心に触れたのか、少ししどろもどろになって答えた。

「えっ、うーん、ソロに必須の索敵スキルとか取ってないからかな、アハハ……」

それが嘘であることはすぐに判ったが、会って一日のやつがそのまま突っ込むのもおかしいだろう。

「……そうか」

それ以上はどちらからも何も言わず、ただ黙々と敵を警戒するだけだった。このダンジョンの全容は未だ判らないが、階段を降りてきた時間から察するに、ここはそんなに広くはない。多分、登ってきた山の中がこのダンジョンになっているのだろう。そう考えると、あの爺さんはかなりの大地主……？ いや、だからなんだって話だが。

「それにしても、お爺さんが授けてくれるっていう剣術ってなんだろうね？」

「さあ……けど、こんだけ難易度が高いダンジョンのボス討伐がクリア条件だから、相当強いんじゃないか？」

「うん、あの人凄い貫禄だったもんね……」

そしてまた沈黙。積極的に喋りたいわけでもないけど、会話が続かねえ……

「あー、あれだ。ボス見つけたらすぐに挑むか？ それとも一回撤退して、アイテム買ってから挑戦するのかわ？」

「うーん、臨機応変に、で良いと思うよ」

「そうか……」

「……………」

「……………」

……………なんだこれ。俺達はこんな気まずい雰囲気を作るためにパーティーを組んだんだっけ。違うよね？

一、二回キャッチボールをしたところで、コントロールを誤って川に落ちたみたいと言葉が続かない。別に沈黙自体は辛くないが、重苦しい雰囲気らしいか、苦手だ。なんせ、そんな雰囲気になった

ら学級会（と言う名の吊し上げ）だったからな……なんでなんも悪いことしてないのに、悪いことをしたのが俺になってんの？ 違います先生、花瓶を壊したのは真君です！

そんな俺の暗く澱んだ気持ちを晴らすように、レインが明るい声で訊いてきた。

「そ、そう言えばエイト君って、下層とか中層で自分がなんて呼ばれるか知ってる？」

「……知らん」

「……というか、知りたくない。《鼠》のせいで、変なアダ名が広まってるからな……」

例。女たらし、百人斬り、食い荒らし、挙げ句の果てには女の敵！

だそうだ。……冤罪過ぎる。

「色々あるよ？ 《侍の右腕》とか、《侍の刀》とか、《侍の》……」

「ねえ、ちよつと待ってちよつと待って？ 何？ 侍？ 右腕？ ま

さかとは思うが、それ、誰が言ってた？」

「え？ 私も偶然聞いたただけだけど、なんか和服っぽい……それこそ侍みたいな格好をした人が、女性プレイヤーに攻略組について訊かれたときに答えてたよ？」

……確定である。クウーライアインくうーん？ 何俺を勝手に自分の右腕とか、お前の武器にしちゃっててくれるのオ？ 思わずどこぞの学園都市第一位みたいな口調になっちゃったでしようがア。

「そりゃガセだ。赤いバンダナ着けた野武士面だろ？ そいつの言うことは八割嘘だから信じんない」

「そ、そうなんだ。アハハ……」

然り気無くクラインの株を落としておき、更に自らの汚名を返上しておく話術。我ながら惚れ惚れするな……

株を落とした上で、《鼠》に加えてクラインもしばいておくことも決意し、取り敢えずこの鬱憤をいつの間にか目の前にいたワイバーンにぶつけることにした。

……というか《攻略の鬼》さん？ 俺の生活パターンを把握して無理矢理攻略させる前に、合コン行ってる野武士侍無精髭刀使いに攻略に参加するように言ってくれよ……

やはり少年の夢は、人の夢と書いて儚いと読むものである。

俺が攻略組になったのは、最後のチャンスだったのかもしれない。地球上でもっとも賢く、愚かで、強く、弱く、善で、悪である……俺達人類。そんな人間を、俺が信じることができる、最後のチャンス。俺達アインクラッド攻略プレイヤーは最前線……つまり、アインクラッドでも、もっとも死に近い場所、ということになる。つまり、人の本性が最も出やすい場所とも言える。

醜く、汚く、穢れていて、されど、俺が美しいと信じていたもの……人。

それは、本当に美しいものだと思いきれる、延いては俺が人を愛せる、人生最初で最後のチャンス。

俺はこのデスクゲームにいた歲月のうちに変わった……と思う。アインクラッドで日々を過ごす前は……いや、奉仕部に強制入部させられるまでは自覚がなかったとは言え、俺は人のことを偽物のぬるま湯に浸かり、虚飾の仮面を被り、自らの手の届く甘い果実だけを咀嚼する……そんなものだと思っていた。だが今はどうだろう。

馴れ合いを嫌い、独りを好み、孤高を誇りに思っていた俺が、攻略組集団と馴れ合い、独りになれず、孤高にもならずにただひたすらゲームクリア一つの目標に向かっていてではないか。

もちろん、ゲームクリアは全SAOプレイヤーの最終目標であり、ここで攻略を諦めることは今までに死んでいったプレイヤーへの何よりの裏切りだ。だから、俺達は攻略を止められないし、止める気もない。自分の命惜しさに罷業をしたところで、現実世界には帰れないのだから。

そのためにも、今みたいなクエストをやっているのだが、これも俺が変わった証だろう。

なにせ、会って一日の人とパーティーを組み、一緒にクエストをしているのだから。

それがいいことなのか、悪いことなのか、今の俺にはまだ判らない。

飛竜、翼竜、ワイバーン……その定義が翼を持つ竜だと言うのなら、目の前のこいつは最早ワイバーンとは呼べない。

翼は（俺によって）もがれ、地べたを（俺のせいで）這いずり、体を支えるのは二本の足だけである。

「よっ、と」

体力が一割にも満たないワイバーンを、単発水平斬り《ホリゾンタル》で止めを刺す。

自在に動けない飛竜の長い首を断ち切ると、入手アイテムと経験値が表示されたので確認の後閉じる。

ふと目を見遣ると、レインが驚きと呆れと尊敬が混在する瞳で俺を見つめていた。

「……何て言えばいいか解らないけど……凄いけどエグいね。アハハ……」

その笑みは乾いていた。どのくらいかと言うと、サハラ砂漠でオアシスの蜃気楼を見つけて期待して駆け寄ったら消えてしまった時に感じる喉の渇きくらい乾いている。……サハラ砂漠行ったことないけど。

「いや待て。こんな天井が低いところに飛行系モンスターを配備したやつが悪い。つまり全て茅場が悪い」

「うん、そうだね……本当にそうだよ……」

俺はここで、自らの失言を悟った。

この『ソードアート・オンライン』をデスゲームと化し、アイソククラッド巨大な牢獄に俺達を閉じ込めている茅場晶彦の名前を軽々しく出すべきではな

いのだ。

「その……なんと言うか、悪い」

「ううん……エイト君達攻略組の方が、私たちよりきつと辛い思いをしたことがあると思うから……私に至っては、人が目の前で死ぬなんてこと、一度もなかったし……」

「……そうか」

確かに、命を懸けて前線に身を投じる以上、人が目前で死ぬ事態は避けられない。一体今まで、何人の仮想体が散り散りのガラス片オブジェクトになるところを見ただろうか。

そういう意味では、俺は性格が悪い。自らの疑問を解消するために死戦に赴いていると言っても過言ではないのだから……

「……ま、攻略組も安全重視と言うか、安全第一で攻略を進めてるから、ここ最近の犠牲者はあまりいないんだけどな」

そんなに出ていない。つまり、多少なりとも犠牲者は出ているとも言える。

特に、クォーターポイントの二十五層の皇帝、ハーフポイントの五十層の四本腕巨人はゲームバランスを崩していたと言えるほど強大で凶悪だった。

あの悪夢を思い出していると、レインが無理に浮かべたような笑みをする。さっきの言葉が少し嫌味に聞こえたのかもしれない。「こっちは命を懸けているのに、お前達はいいご身分だな——と。」

「あー、別に嫌味とかじゃないからな？」

俺の訂正に「解ってるよ」と言っている風に微笑みを返したのを見た後に再び前方を向く。別れ道だ。

「……どうする？」

「……マップを見た限り、余白の部分は左が多いけど……」

「つまりボス部屋がある確率は左の方が大きいってことか？」

「まあ、単純に考えるならだけどね」

俺もマップを開き、ダンジョンの全貌を見んとする。レインの言った通り、もともとスタート地点が右寄りということも相俟って左側はほぼ空白だ。なんならウィーアーマーベリックしちゃうまである。

ダンジョン踏破率は約半分。迷宮自体の小ささもあり、短時間でかなりマッピングされている。

「……右に行くぞ」

「え？ どうして？」

まあ、当然の反応だ。確率論的には左の方がボス部屋が見つかる可能性は大きいのだから。

「……俺の索敵スキルのModは主に索敵範囲広範囲化に振ってるけど、強さは黙視しないと判らないから半分以上勘だが、左は多分今以上に強いモンスターが出てくると思う。消耗した状態で挑戦するのは危険だ」

「万が一、ってことだね……じゃあ右行こう」

体を右に九十度回転させ歩こうとするレインを慌てて呼び止める。

「待て待て待て」

「え？」

話は最後まで聞きなさい。確かに強さ的には左の方が上だが、だからと言って右が安全な訳じゃないんだよ。

「いいか？ 確かに個々の強さで言ったら左の方が上だろうが、右は今までの数倍Mobがいる。つまり質より量の道だ。どちらにせよ、これ以上進むなら一度引き返した方がいい。別に急いでる訳じゃないんだろ？」

「うん……でも、どうやってポーションとか補給するの？ 入口は塞がれちゃったから転移結晶を使うしかないよ？」

小首を傾げこちらを見てくる様子には愛嬌があるが、訓練されたぼつちである俺は然り気無く眼を逸らして回避する。……愛嬌あるとか思ってる時点で見えちゃってるだけだね！

「違う違う。ポーションはまだ十分にある。俺が言ってるのは精神的疲労が格上相手だと激しいから休息をとったほうがいいってことだ」

ここは幸い、泊まり込みで攻略するのが前提なのか安全地帯が頒布している……と言っても、隠し部屋扱いになっているのかじっくり眼を凝らさないとわからないくらいの微妙な違いのスイッチを押さねばならないのだが。この薄暗いダンジョンでは、俺も《暗視》スキル



を持っていなかったら気づかなかっただろう。

索敵スキルに何の反応もないことから安全地帯だと断定。恐らくだが、この隠し安全地帯と言うべき場所が設定されている場所は一度に攻略する目安なのだろう。

レインに隠し安全地帯があったことを説明した後來た道を少し戻り、マップにチエックしておいた付近の壁を探ると、さつき見た通りのスイッチを発見する。

スイッチを俺達はスイッチして押すと、スイッチがスイッチの役割を果たしスイッチを押したことによって作動した……うん、スイッチ言い過ぎだな。

とにかく、スイッチを俺はレインと押す役を（押したそうだったので）替わり押すと、縦七十センチ、横六十センチほどの道？ ができたため、四つん這いで直進——したところで、俺は自らの失敗に気づく。

レイン、メイド服っぽい装備↓スカート↓何がとは言わないが、後ろだと見える。

万有引力ならぬパン有引力に眼を奪われそうになるが、視界の端に留めておく。……って、ダメじゃん！

そこで気づく。何がとは言わないが、見えないのだ。なん、だ……：チラリズム……いや、ただ単にシステマ的に規制が掛かっているだけか。

また純粹な男子の幻想が一つぶち殺された瞬間であった。

その悲壮感漂う四つん這い姿は、四つん這いではなく、どちらかと言えばネットで言うorz状態に近かっただろう。

何度も見たことがある扉を、比企谷八幡は開ける。

あの出来事(ただチラリズム設定だっただけ)から立ち直るには、俺とても少し時間を要した。

いきなり落ち込んだ俺を気遣ってか、休憩中何回かレインが「大丈夫？」と訊いてきたので「ああ……」と適当に答えておく。

なぜだ、なぜシステムの不可視なんだ……と一頻り嘆いたので、復活の呪文を心中で唱えて復活。……って、ゲームオーバーしてんじゃん！ 笑えねえ……

「……そう言えば、お前なんでメイド服みたいな装備なの？ 戦闘には不向きだろ」

「え？ その、まあ、ただの趣味です……」

「……………」

……………コメントしづれえ……なんて返せばいいの？ へー、そうなんだ？ 似合ってるね？ 論外だな。そんな歯が浮く台詞は俺には言えん！

「そ、その……似合ってる、かな」

……コメントしなきゃいけませんか？ コイツ、今まで俺が会ったことのあるタイプとは違うな……キリトや戸塚みたいな天使系でも、小町みたいな小悪魔系でも、由比ヶ浜みたいなアホの子でも、雪ノ下みたいなドライアイス系でもない。一番近いのは……めぐり先輩の天然系、だろうか。

と言っても、めぐり先輩のようなゆるふわな感じじゃなくて……なんだろうな？ 謂わば天然小悪魔系、だな。現に今俺、アイツは無自覚だろうけど追い詰められてるし。

さて、ここで問題です！ 服誉めスキル、女性免疫スキルともに0どころかマイナスに行きかけている俺は、何て言えば正解になるでしょうか？

A. 何を言っても気持ち悪がられます。諦めましょう(笑)

役に立たたねえ……八幡脳内会議員八万人もいるくせに、結論が(笑) ってなんだよ(笑) って。

「あー、その服、なんか凄いあれでそれだな」

自分でも何を指しているのか解らないが、あれそれ言っておく。あれこれそれを多用したときの言葉の薄っぺらさは異常。つまり「それな」を乱用するリア充は坊さんの髪の毛並みに薄い。もしくは野球部員でも可。

「あのー……結局何を言いたいのか、まったく解らないよ?」

うん、知ってる。俺も解らないもの。

「いや、ほら、知らぬが仏って言うだろ? 知らない方が幸せなこともある」

「それどういう意味ツ!?!」

なんかレインさんの性格が少し解ってきたよ?

めぐり先輩+小町+由比ヶ浜を三で割った感じだな。

「……言っちゃっていいのか? これあれだぞ。ファイナルジャツジメントだぞ?」

「う、うん……」

「まあ、その、なんだ? 俺の真反対だな」

これは攻略組……いや、SAOプレイヤーとしてしようがないことなのだが、俺はマジで防具が似合わない。中二時代に自分がコート着て、なんで酔いしれていたのか解らないレベルだ。

キリトは髪と同色であるコートは違和感なく着こなしており、アスナは騎士服がなんというか映えている。エギルやクラインですらも筋骨隆々の体や野武士面にフィットしている装備だというのに……いつそのこと俺も忍者みたいな格好にしちやおっかな……

ジョブを剣士↓忍者にしようかと思っていたとき、結局どっちか解らなかったのか、レインがもう一度メイド服うんぬんかんぬんについて訊いてきそうだったので、寄りかかっていた壁から背中を離して立ち上がり、「もうそろそろ行くぞ」と伝える。

訊くタイミングを逃したレインも渋々と言った様子で立ち上がり、俺に倣った。

一度ぶち殺された幻想をもう一度見たら今度は微粒子レベルで粉々にされそうだったので、出るときはちゃんと俺が前になって狭い

通路を通りました、まる。

さて、精神的疲労は回復しても、右か左か選ばなければいけないのは変わりがない。

さつきは右の方が安全だ！ みたいなことを言ったが、完璧な主観である。俺のビルドはキリトをして『対人戦の鬼』と言わしめたものだが、個人的には多対一の乱戦特化なビルドだと思っている。まあ、酷いときなんか二桁になる敵と戦ったからなあ……

月日にして一、二ヶ月前に攻略完了した五十九層に思いを馳せる。  
モンスター地獄。

それが、五十九層の呼び名だ。

最低で三匹の群れを為し、多いときは十以上の最早小隊が闊歩していた。おまけにHPが危険域レッドゾーンになると仲間を呼ぶ。俺にはできない芸当だ。はちまんはなまをよんだ！ しかし誰もこなかった！ はちまんはなまきさけんでたすけをもとめた！ いみがなかった！ っとなるからな。なにそれ、コイキングのはねる並みに無意味！  
で、何の話だったか……

「右行くんだったよね？」

「うお？ あ、ああ……」

そうだ、右か左のどっちに行くかだった。左は質。右は量。ここはお互いの意思を確認し、合意の上で決めるべきだろう。後腐れがあっても面倒だしな。

「……なあ、一対一と多対一、どっちが得意だ？」

「……一対一、かな」

う、うん。ま、まあ俺は多対一の方が得意だけどく？ こ、ここは

相手の意見を尊重するべきだよね？ うん。はあ……強い奴と戦わなきゃいけないのか……

「りよーかい。んじゃ左行くぞ」

「えっ？ あ、うん！」

索敵スキルを発動させながらブーツの鋏と石床が当たる音を聞きながら俺は昨日歩いた道を左に曲がった。

感想から言おう。アホちやう？

ついに来ましたレベル七十七！ 最前線より上になってるよ！

やったね！ ……アホちやう？

「オオオオオオオ！」

迫ってくる半人半狼……モンスター名《ウェアウルフ》。発達した筋肉が与えるのは攻撃力と敏捷力ではなく、強固な筋肉そのものが防具とも成り得る。つまり、力、速さ、堅さの戦闘能力の三柱を兼ね備えているのが目の前にいる獣人というわけだ。

妙に人間臭い疾走のエネルギーを活かし、重く鋭い爪を振りかざす。

後ろに下がったところで追撃が来るだろうし、なにより基本スペックは相手が上だ。いくら俺が敏捷力が高いと言っても、後ろに下がるのと前に走るとじゃどちらが速いかなど幼稚園児でも解る。

しかしながら左右に避けても二本目の腕で連続して攻撃してくるだろう。

ならば――

「フッ！」

左下から右上への斜め斬り《スラント》。初級ソードスキルだから

と言って侮るなかれ。なぜならちゃんとシステム補正は働くのだから。

光を纏った俺の剣と、獣にとつて自慢であろう鋭利な爪がぶつかる  
と斥力が発生し、お互いに後ろ向きに力が掛かる。

俺はそれに逆らうことなくバク転し、すぐさま前を見据える。すると、スイッチの掛け声もなかったというのに、この好機を逃すまいと  
レインがソードスキルを発動させていた。

一、二、三、四本と刻まれたダメージエフェクトは正方形を描いている。あれは、俺もかなり愛用している《バーチカル・スクエア》だ。  
バーチカル・スクエアはそこまで重攻撃ではないので仕切り直し、  
だな。

「……エイト君捌くの巧すぎない？」

「あ？ まあ、ボス戦ではタゲ取ったり、なぜか壁役タンクみたいなことをやらされてたからな……」

あの鬼！ 悪魔！ 阿修羅！ アスナ！ ずっとボスから攻撃を  
繰り返されるの、凄く怖いんだからねッ！ いや、マジで。

ボスの攻撃という研磨により、磨かれていく俺のプレイヤースキル石 ……なんでだろう、あまり嬉しくねえ……

戦闘中に長々と話している暇などあるはずもなく、少しの後退から  
立ち直ったウエアウルフの眼が赤く輝いている。

「……もしかしなくても、あれ」

「怒ってるよねえ……」

バーサク暴走状態。体力がレッドゾーンになった一部のモンスターがパワー  
アップするという認識で間違いはない。

そして、こういう肉弾戦特化なMobは大抵がステータス上昇と相  
場が決まっている。

眼を血走らせ、鋭く射抜くような眼差しを向けてくるが、こちらら  
仮にも最古の攻略組だ。ボスとの戦闘経験だつて一番多い自負もある。まあ、攻略組最強プレイヤーはヒースクリフ、キリト、アスナの  
誰かだろうが。

「グオアアアオアアッ！」

ダンジョン全体に行き渡るように咆哮を轟かせる狼が、体感速度にして二倍ほどに感じる速さで突っ込んでくる。

——が、まだ遅い。

《武器防御》スキル、《リペルソード》を発動。

システムに従い動く体が、寸分変わらず相手の渾身の一撃を弾く。

このソードスキルは非常に優秀で、無理な体勢でなければ、どんな体勢からでも繰り出すことができる。しかも出だしは早く、硬直時間も短い。欠点は冷却時間が五分と、少し長いことくらいだ。

十分の一秒にも満たないくらい早く硬直から回復した俺が振った剣は抜刀術の如き雷閃が煌めき、腹を深々と抉る。

単純な剣技だからこそ洗練されているのがはつきりとわかる俺の水平横風ぎは光跡を残す。直撃した手応えを感じると、さっきの技とは違い荒々しく声を上げる。

「レイン！ ラスト！ スイッチー！」

「ヤアアアアッ！」

僅か三単語の言葉でもはつきり意味が伝わったようで、さっき俺が抉った箇所にもう一度攻撃を加え、徐々に体がずれていく。

完全に上下の半身が分断されたのを認識したのは、もうウェアウルフが跡形もなくいなくなった後だった。

「やったね！ エイト君！」

「ああ……それに、奥を見てみる」

レインが黄色の瞳を前に向けると同時に俺も視線を移すと、さっきは相手の巨漢が影となって見えなかったが、確かに厳かな扉がある。いよいよボス戦のようだ。

「……行くぞ」

「……うん」

勝利後の歓喜もそこそこに、俺達は気を引き締めてこのダンジョンの主に拝謁するべく、部屋に足を踏み入れたのだった。

こうして比企谷八幡はボスを倒し、新たな力を手にする。

ボス部屋に足を踏み入れ、辺りを見回そうともほとんどのボス共通と言つてもいい巨大な体はどこにも見当たらなかった。

「……何もないね」

「ああ……ッ！ 下がれッ！」

「え？」

突然の交代命令に体が反応できずに硬直しているレインを突き飛ばし、剣を構える。

「ぐっ、はっ……」

なんとかガードするが……重い。それに尽きる。もし索敵スキルを発動させていなくて、レインがそのまま斬られていたとしたら——タダでは済まなかっただろう。下手したら真つ二つだ。

そんなことを考えている間にも受け身もとれないほどの力を一身に受け、無様に転がり続ける。

ようやく視界が多方向に移り変わるのが終わったと認識すると、地面に先ほどの防御でピキツと嫌な音がした剣を突き刺す。

すぐさま戦況確認のために吹き飛ばされてきた方向を向くと——あり得ないものが存在した。

二刀。

確かに左右一本ずつ持っている剣が光を纏い、レインに襲いかかっている。

「レイン！ 後方ステップ！」

「クッ！」

言われたままに回避した0.5秒後に。

X字に描かれた光が空中に跡を残すのを眼が捉える。続いて雷が落ちたかのような轟音に、台風が来たかのような剣風。そんな状況下で見えたボスの名前とレベル——《The master》Lv80。

「おいおいおい……趣味悪すぎだろ」



心の中でこのクエストを創った奴——十中八九茅場だろうが——に悪態づく。

師匠を倒す。

なんとも修行終わりの最終試験的なもののテンプレートだ。しかし、この世界では趣味が悪いと言わざるを得ない。要は、人の形をしたものを自らの意志で殺せ、ということだ。

これまでずっと避けてきた、人型モンスターとの戦闘。人型モンスターの定義が二足歩行するモンスターだと言うのなら、中身がない甲冑やグールなど様々な相手と戦ってきた。しかし、ここまで人に近いものなど剣を交わせたことすらない。

デュエルなら何度かしたことはあるが、本気の殺し合いをしたことなど、デスゲーム開始序盤でしかない。それも決着の前に相手がリザインしたものだ。HPを全損させることなど一度もなかった。

故に——プレイヤーではないにせよ、人型のものどちらかのHPが尽きるまで戦うのは、これが初めてである。

ドン！ と、地面を揺らさんばかりの踏み込みにおもわずたじろぐが、次なる攻撃の防御のためにいつもの構えをする。

右足を前にし、左足は後ろ。足と同じように左手を開いて後ろにやり、剣を持っている右手は剣が地面と平行になるように構える。

「オオオッ！」

「……ッ！」

野太い叫びをする巨漢に、無言の気合いをいれて迎撃する俺。

両剣で上段を噛ましてきて、地面が陥没するんじゃないかと思うほどの重量が俺の双肩に掛かる。

「ガッ……」

罅迫り合いなど、最も苦手にする展開に割り振っているステータスで拮抗状態などになるはずなく、徐々に膝を屈し、ついには片膝立ちの体勢になってしまう。

このままでは押しきられ、体を真つ二つに斬られる——俺一人なら。

「ヤアアッ！」

重突進単発片手剣技《ヴオーパルストライク》。

慌てているように見える表情で離脱をしようとする老人だが、そうは問屋が卸さない。

剣を手放し、今まさに引かれようとしていた二刀をガツチリ掴む。幸い両刃ダブルエッジではないため、引き抜こうとされて俺の手が切り裂かれることはない。まあ、ガツチリ握っているため、刃のあるほうの手からは紅いエフェクト光が出ているが些末なことだ。

片膝を突いて低姿勢になっていたため、俺に当たることなく《ヴオーパルストライク》は俺の上を通り過ぎ、老軀に食い込む。

ここで俺も剣から手を離し、体術スキル《幻月》を放つ。サマーソルトキックは見事な髭を蓄えている顎にクリーンヒット。脳が揺れている（という設定）なのか、気絶のデバフがかかっている。

顔を見合わせ確認するまでもなく攻撃を開始し、遠慮なくソードスキルをバンバン使った。

「アアアッ！」

「エエイッ！」

《バーチカル・スクエア》。その後に、次のスキルにコネクトするために右腕を曲げながら、左手掌底《閃打》。多少不恰な体勢での攻撃になったものの、強制終了はされない。ならいい。続いて、数刻前レインが使っていた大技、《ヴオーパルストライク》。

《ヴオーパルストライク》は、距離を詰めて一気に斬る《ソニックリープ》とは違い、突き刺すタイプだ。故に、片手剣突進系統の技の中でも、特に剣を持っていない手が後ろに来やすいのだ。

槍のように先を尖らせたような手刀が、雷光のごとく黄色い光を纏う。

「ラス、トオオオオ！」

渾身の貫手、《エンブレイザー》。さすがに相手のHPを余すことなく……なんてのはボス相手には無理だったが、少なくともダメージを与えたはずだ。

「ヌウッ！」

あくまで無様な姿や叫び声をしない老翁に称賛を贈りたい気分だ

が、あからさまに怒りの形相をしている顔の恐怖に萎縮するしかなかった。

俺の一瞬の硬直を見逃さず、下駄を穿いている足で俺の腹を蹴る。否、蹴り飛ばす。

サツカーボールよろしく空を舞う俺は、着地してからは、する暇がないであろう体力回復ヒーリングをする。もし、俺がさつき掴んでいた片手剣をそこらに放り投げていなかったら斬られてたな……などと冷や冷やしながらも戦況を認識する。

俺は落下中に今の戦況を認識した。敵はレインを蹴り飛ばし、武器を拾ったところ、レインは体勢を立て直したところ、か。

レインに追撃しようとしているジジイに《シングルシュート》を放つも、あつさり弾かれ不発。と、ともに地面にできるだけ衝撃を殺して着地する。

さつきの《シングルシュート》のせいか、またもや爺にタゲられたので迎撃体勢に入る。

鳴り響く金属音。剣があげる悲鳴。それだけが場を支配している。力で勝てないのならば、こちらのアドバンテージ……速さと技で戦うしかない。

血湧き肉踊る戦いなどでは全くないが、加速した思考が倦怠感を吹き飛ばす。

レインが介入してこないことを見るに、恐らくこの高速戦闘ハイスピードバトルについていけないのだろう。この爺さんと一対一で渡り合えるのは、俺の知る限りのプレイヤーでは《神聖剣》ヒースクリフ、《黒の剣士》キリト、《閃光》アスナくらいしかないだろう。

基本として、二本の剣を扱う奴は左右交互に攻撃をしてくる。何故か？ それは二本剣を持つアドバンテージにある。

例えば、右手に持っている剣で攻撃した後、また右手の剣で攻撃したとしよう。

……片手剣と何が違うの？

これに行き着く。初撃のうちに二撃目の攻撃準備をし、二撃目のうちに三撃目の準備を……みたいには、お互いの隙をカバーし合い、息吐

く間も与えないほどの乱撃<sup>ラッシュ</sup>。個人的には、それが二刀の真骨頂だと思っている。

ソロとして戦い一年半になるが、こんな苦しい戦いは初めてかもしれない。

右の剣と左の剣によるラッシュ、二方向からの同時攻撃、未知のソードスキル。いずれも対処が難しい。

剣速は、筋力値に由来するのか、敏捷値に由来するのか……答えはプレイヤースキルだ。

アインクラッド一の剣速を誇る《閃光》アスナは、そのたゆまぬ努力によりアインクラッド一の剣速……《閃光》という二つ名を付けられた。

剣速がプレイヤースキルに由来するというのなら、目の前のプレイヤーではない存在は相当高い知能を有していることになる。

見切られたソードスキルはあまり使わず、自らの通常攻撃の連撃で、的確に俺の命を狩ろうとしている。

左の剣を刃毀れまくっている薄紫の剣で流しつつ、前に疾駆。頭を破損させようと、鋭い突きを放つ。すると俺の動きをコピーしたように相手は動き、俺の眼前に剣尖が迫る。

それをなんとか首の動きだけで避けるが、その代わりに俺の刺突の軌道もぶれ、相手の頬を掠めるだけに終わる。

こちらの攻撃は一度途切れるも、相手は二本持っているためお構い無しに鈍く光る剣を降り下ろしてくる。防ぐ術はない。

しかし、その時。

ビュオン！ と風を切りながら飛来してくる物体を反射的に避け

「キャッチー！」

その声とともに、これまた反射的に飛来物を掴む。

これは、レインの剣だ。

弾かれるように左手を動かして、細身の剣で俺を屠らんとしていた必殺の剣のベクトルを僅かに変え、逸らす。その際左肩口が浅く斬られたが、これくらいで済めば万々歳だ。

とは言え、今までにイレギュラー装備扱いされる剣の二本持ちなどしたこともない。下手をすると片手剣の時より戦力がダウンするかもしれない。さっきのはたまたま防げたただけだ。

かと言つて、この状態のまま戦い続けてもじり貧は必至。なら、一か八かある程度の賭けに出るしかない。

まあ、腹を決めたとは言え、気合いですぐに技倆がよくなるなら学園都市第7位がヤバイことになる。

取り敢えず、左の剣で攻撃を防ぎ、右の剣で攻撃する、と簡単に決めておいて戦うことにしよう。

攻防の移り変わりが一度途絶え、強制的に仕切り直しとなる。

普段ならここで撤退しているところだが、入ってきた扉は閉じ、転移結晶は使う暇がない。おまけに俺が戦っているのだから逃げるわけにはいかないと思つているのか、戦いの行く末を見届けたいのかは知らんが、レインも逃げていない。状況的にはお前が逃げなきゃ俺も逃げられねえんだよじゃなくて、お前が逃げて俺は逃げられねえんだよ状態だ。つまり、今の状況では、キツイ言い方をすれば居ても居なくてもあまり変わらない。

「ハッー」

先ほどと変わらぬ——あるいは重量が増えたせいで遅くなったかもしれない——剣速で、右からの横一閃を繰り出す。

当然防がれるが、相手に剣を弾かれるより早く、左の剣で上段斬りの二撃目を降り下ろす。これまた防がれたが、俺は左、相手は右の剣での鏢迫り合いになる。

俺は上から力を加えられる状態にあるため、全体重をかけ、全力で降りきらんとする。

お互いに鏢迫り合い勝負に全身全霊を懸けているため、もう一振りの剣に割く意識はない。こちらは二人だが、下手に攻めさせたら手痛いしつぺ返しを喰らうかもしれない。

もはや剣が光っているように見えるほど絶え間無く火花を散らしているのは、耐久値の限界を示しているのだろうか。

ここで決めるしかない。

これは、相当にシビアな技になる。僅かにでも隙を見せたら、即座に斬り捨てられるだろう。

『コピー・ソードスキル  
模倣剣技』。

……大層な名前が付いている（キリト命名）が、なんてことはない。ただ、システムアシスト無しでソードスキルを繰り返す……要は、ソードスキルの形をした通常攻撃だ。

ならば何の意味があるのか、と訊かれたら『慣れているから』と答えるしかない。リアルで何かの流派の剣術を習っていたやつなら兎も角、大半のSAOプレイヤーの流派……というか剣術は、言うまでもなくソードスキルにカテゴリーされている。システムアシストに頼りきりなのだから、当然プレイヤー本人たちの技術が上達するわけではない。トッププレイヤーである攻略組でさえも、通常攻撃の連続なんてしたら、半分はただ剣を振り回しているだけになるだろう。

だが、システムアシストに頼りきりと言っても、動きは体が覚えていくはずだ。ならば、慣れている動きをアシスト無しで再現するのは不可能じゃない。鍛練さえ積みめば、それこそソードスキルに限りなく近い技を習得することも、さらに発展して、自分オリジナルの連続攻撃も創れるかもしれない。……まあ、そこまで至っている奴は、俺含め一人もいないだろうが……

要するに、本家の剣技と同等のクオリティと仮定した場合のコピー・ソードスキルを使うメリットは主に二つ。硬直時間がないことと、その分若干タイミングがズレようが構わずコネクトできること。デメリットは威力がないことだ。

レベル十差ということもあり、相手の通常攻撃はなんとか弾ける。だが、ソードスキルを弾くには当然こちらもソードスキルを使わなくてはいけない。だが、ソードスキルを使えるようにするために、この仮・二刀流をやめたら手数で負ける。

以上の三点を踏まえると、この状態仮・二刀流の通常攻撃で相手がソードスキルを発動できないほどの乱撃で攻めまくるしかない。

そのためには、剣撃が途切れないように連続で繰り返せるほど使い慣れている技……ソードスキルが必要になる。

ならば、俺が勝つための条件は、ソードスキルの型をした通常攻撃を繋げて繋げて繋げまくるしかない。

相手の残HPと俺の攻撃力を考慮すると、コピー・ソードスキルを十回くらい繋げないといけない。

いくら剣技連携スキルコネクトのために訓練をしてきた俺でも、今までの最高チェイン回数は五回。実に二倍の数である。だが、それでも、やるしかない。無理を押し通して道理を引つ込ませろ。

「バーチカル・スクエア、ヴォーパルストライク、ホリゾンタル・スクエア、ノヴァ・アセンション、ハウリング・オクターブ、サベージ・フルクラム……」

ブツブツとソードスキルの名前を唱え始めた俺に怪訝な顔を向ける偉丈夫は、なんとも人間臭い。恐らく、相当高度なAIが積み重ねられているのだろうが、今は関係ないので話題をシャットアウト。

雷迅疾風。

雷の如く、風よりも速く駆け抜ける。当然相手も迎え撃つも、致命的な攻撃だけを叩き落とし、陽動の突きは無視する。二本の剣を使ってしまった相手は俺が懐に潜るのを防げない。

「オオオッー」

雄叫び。普段は全く出さない大声を抵抗なく出せたということとは、俺は今かなりの興奮状態なのだろう。

僅かな光源に半透明な黒い剣が照らされ、鈍く薄紫色に光って、本物のソードスキルのようにも見えるほどの完成度で放たれた一発目のコピー・ソードスキル……バーチカル・スクエアは、深くしつかりと正方形のダメージエフェクト線を引き、その巨体を僅かに傾ける。次。

「二ー」

バーチカル・スクエア最後の一撃とともに軽く後ろに跳び、一メートルほど距離を開け、間髪いれず詰める。キリト愛用のヴォーパルストライク。

胸に当たったのがクリティカルヒットだったのか、網膜を焼かんばかりの激しいライトエフェクトが飛び散る。それにお構いなしにさらに深く、よりダメージを与えんと左腕に力を込め、一気に前に突き

出す。同時に足を踏み出し、胸を突き刺したまま力走する。

ふと上を見ると、老翁の苦悶の表情が見え、甘さ、とでも言うべき罪悪感に胸が苛まれるが、やらなきゃこっちがやられると思ひ直し、左腕を引き絞り一秒と経たず前を出す。

突き刺さっていた剣が余すことなく抜け、獅子の風貌をした老人はベクトルに従ってノックバックする。

「三！」

相手の左脇腹——俺から見たら右脇腹——に容赦なく剣を食い込ませ、丁度中心辺りでピタリと止める。続いてアスナお得意の《リニア》のように剣を持ち、グイツと無理矢理押し込む。そのまま後ろを向き、縦に切り裂きながら剣を抜く。

使いどころには若干悩むが、それ故に高威力な三連撃剣技、サベージ・フルクラム。当然システムの加護無しじゃ重攻撃なんて肩書きは形だけだが、システムアシスト無しでも僅かな行動遅延<sup>デイレイ</sup>は発生する。

「四！」

二本の剣を束ね、両手持ちに移行。一時期使ったことのある両手剣、そのカウンタースキル《バックラッシュ》。

振り向き様一閃。予期せぬ攻撃に虚を衝かれたような顔をし、少し遅い防御体勢に入るが、それより速く重ねた剣が相手を斬り捨てる。

「五！」

重ねていた剣を分裂するように再び両手に一本ずつ装備し、次なるコピー・ソードスキルに入る。

最初は右脇腹、次は背中、左脇腹、最後に正面。水平四連撃斬りホリゾンタル・スクエア。最後は特に渾身の力を込めたため、二倍の太さの赤線が刻まれる。

「六！」

ホリゾンタル・スクエアの正面からの攻撃をしている間、左腕を剣の切っ先は相手に向けたまま曲げ、神速の一突き。それに勝るとも劣らぬスピードで、追加の四連突き。その後には斬り下ろし。それとは百八十度逆の斬り上げからの全力上段斬り。片手剣八連撃技ハウリング・オクターブ。



「七！」

ここからは一度も成功がしたことのない領域。すでにヒット回数は二十以上。ノヴァ・アセンションの二倍だ。だが、それでもやらなくてはならない。

気合いを入れ直し、未知の連携の初めに選んだのは片手剣技唯一の逆手持ちスキルにして、両刃専用スキル《リバース・スラッシュ》。

まず右下からの斜め斬り上げ。次いで、さっきのモーションを巻き戻したかのような動きで、先ほどと同じ箇所を斬る。更にこの一連の動きを鏡写しにしたかのように、左右対称で斬り上げ、斬り下ろし。最後に中心からの斬り上げ、そして斬り下ろし。計六発。

『グウツ……』

ここまで連撃を受けながらも、一言も呻き声すら発さなかった老翁が、初めて苦しそうな声を出す。HPバーを見ると、最後の一本がレッドゾーンとイエローゾーンの狭間くらいになっていた。残りHPから考えるに、これからは全てクリティカルを入れないと削りきれない。

「八！」

相手に積まれているであろう高度なAIに学習されぬよう、これまで同じ技を使うのは出来るだけ避けてきた。しかし、上位スキルの数はそれほど多いわけではない。

連続七連斬り剣技《テッドリー・シンズ》。

曲芸染みた動きとともに繰り出される剣技は、まるで踊っているような剣舞に見える。かなり初期から助けられてきた軽業スキルの恩恵あつてこそそのコピーだ。

大振りな上段。そのエネルギーに逆らわず左に回転し、右からの斬裂。切り返しの左。下からの斬り上げと同タイミングで後方宙返りをして距離ができたかと思うと、前傾体勢になつての右水平斬り。再びの左回転から、右下からの振り上げ、最後に剣を盾にするかのようなモーションからの垂直斬り。計七発。

「九！」

最後の十回目の最高にして最上位の剣技……ノヴァ・アセンション

に繋げるための布石として、体術高等技にして重単発攻撃の肩タツクル《メテオブレイク》。

未だデッドリー・シンスの余韻であるノックバックが残っていた老躯は新たな衝撃に耐えられず、着物から鍛えられた筋肉が浮き彫りになるほど上体を反らす。

「十！」

限界近くまで酷使してしまった剣に内心謝りつつ、一気に多方向からの斬撃を、まさしく新星のごとき激しきで叩き込む。傍目から見れば雑多に適当に剣を振り回しているだけに見えるが、実際には繊細なコントロールで全てクリティカル部位……頭、首、胸の三ヶ所何処かに必ずヒットさせている。

クリティカルエフェクトが恒星のように煌々と輝き、バチバチッとプラズマの如く雷光が奔る。

「オオオアアアアッ！」

十撃目の突き。ノヴァ・アセンション最後の攻撃は、俺のこの一年半にも及ぶ命のやり取りの中でも、最も速く、最も強く、自分でも最高の一撃と自負できるくらいだ。

そう———それこそ、物理的境界……システムの壁すらも破つたと錯覚するほどの。

重突進攻撃、ヴォーパルストライクすらも凌駕する勢いで突き刺さった剣……否、流星は、一際大きく美しい<sup>クリティカルエフェクト</sup>光を残して消え、先ほどまで見えなかった相手のHPバーが見えた。

0。

『ふふ……まさか、本当に儂を倒すとは……約束だ。汝等に私の奥義を授けよう……』

とてもクエストの演出とは思えない柔らかな笑みを浮かべた老人の輪郭がブレ——

——最後のライトエフェクトを残し、この世界の死の証であるポリゴンに、姿を変えた。

目の前のクエストクリアという文字の下にある、[You got an Extra Skill!!]という文字列が、先ほど授けら

れた……いや、俺が篡奪したエクストラスキル《双剣》を、俺が使えるようになったことを示していた。

きつと、誰しもが大小様々な心の傷を抱えている。

ボスを倒してまず俺が感じたのは、新しいスキルを取得した高揚感でもクエストクリアをした達成感でもなく、あれほど忌避していたことをしてしまった嫌悪感だった。

いや、解っている。あの老人は人ではないことなど。現実世界には何の体も持たない、たつた<sup>茅場</sup>一人の天才<sup>晶彦</sup>によってプログラムされた存在であることも。

あれは、人ではない。

俺は、そう断ずる。

だが――。

だが、僅かなりとも罪悪感を感じているもう一人の俺も、声にならない糾弾を煩いくらいに喚く。

それは逃げだ。妥協だ。それならまだお前は自分を赦せるだろう。だがそれはお前が最も嫌った欺瞞だ。それでも違うと言ひ張るなら、訊こう。人の定義とは何だ？ お前は何を持ってあの存在を人ではないと断じたのだ、と。

人の定義とは？

……最高の知能を持つ者？ ——違う。最高の知能を持つ者は、あらゆる無意味で愚かな争いはしない。国民のため、祖国のためなどと宣い、人々には欺瞞の表層的な部分しか見せず、甘言で籠絡し、絶え間無い争いを繰り返してきた生物がどうして最高の知能を持つ者などと言えようか。

なら、食物連鎖の頂点に立つ者？ ——違う。人間なんてものは所詮自然界に出たら最も脆弱な生き物だ。科学——使う人によって、悪魔にも天使にもなりうる存在……まさに、今現実世界の俺達が被っているナーヴギアがいい例だ。そんなものに、守られているだけだ。

そもそも、さっきの存在と、俺達との相違点は何だ？

現実世界の体がないこと？ だが、体がないと言ふのなら、この世界が彼らにとつてのリアルであり、帰る場所であり、生きる場所だ。その世界から居なくなるというのは死と同義ではないのか？ この

世界の命と現実世界の命がリンクしている俺達と同じように。

「……流石に、感情移入のしすぎ、だな」

全く、一体いつから俺はこんなに打たれ弱くなったのか。苦笑と自嘲の間くらいの笑みを浮かべ、気持ちを仕舞い込むように、刃こぼれ傷痕劣化なんでもござれの剣をコバルトブルーの鞆に収める。

あ、そう言えば左手の剣はレインのだったな……ヤバイ、意識したら手が滑<sup>ぬめ</sup>ってきた……ナーヴギア、こういうところは再現しなくてもいいわ。

古人曰く、剣——正確には刀だが——はその人の魂とも言うし、さっさと返そう……と、俺が数十秒も立ち尽くしていたのにも関わらずノーリアクションだった特徴的な服を身に纏う少女に向き直る——と、俺に話しかけるどころかこちらを見てもいない。

「……おい、どうした？」

声をかけても無反応。ブツブツと、まるで俺の言葉を拒絶しているかのように更に身を縮こませた。

長髪の赤髪に隠された顔がどうなっているか窺い知ることができないが、一滴、二滴と規則的に落ちる雫がどんな表情をしているか容易に予想できた。

涙を流す。と、一言に言っても流す際には様々な感情がある。悔し涙だったり、嬉し涙だったり、最もメジャーである悲しさからくる涙だったり。

肩を震わせ、嗚咽を必死に噛み殺している姿が嬉し涙などの正の感情からの涙のはずなく、明らかに負の感情から来ている。

そして、恐らく涙を及ぼしている要因は、俺もよく知っている。トラウマ、PTSD、心理的ダメージ、精神異常……俗にそんな呼ばれかたをされているものだ。

ヒエラルキー、カースト、位階性、階層性最下位にいつも属していた俺が唯一人より多いと誇れるものでもある。……いや、そもそも誇るもんじゃねえな。

……まあ、トラウマを刺激された出来事については予想はつく。

あの老人の、砕け散る瞬間。

それが、どんなトラウマを刺激したのかなどS A Oプレイヤーなら誰もが想像がつく。

ガラスの破砕音。飛び散るポリゴンの欠片。絶叫。悲鳴。慟哭。呼び起こされるのは、人の死。

確かこいつは、人の死の瞬間を間近で見たことがないと言っていたが、あれはトラウマを思い出さくないが故の嘘だったのだ。

そして、攻略組クラスの實力を持っているのに何故攻略組にいないのか。

別に俺は實力があるから攻略組に入れなどとは言わない。本当に何気なく訊いただけなのだが、今のレインを見ると、些か無神経な質問だったと言わざるを得ない。

攻略組は最前線……つまり、死亡率最多の戦場に身を投じる特攻隊みたいなもんだ。当然、βテスト時の到達階層はとくに越えているため、全く情報がないまま戦うことになり、その危険さは中層とは比べ物にならない。

だから俺やキリトみたいなソロプレイヤーはマイノリティーだし、安全マージンのレベルも、パーティーを組んでいるやつらより+5さされている。つまり、今攻略している階層+十五がソロプレイヤーの適正レベルだ。なので六十三+十五=七十八はレベルがないと、最前線で独りでは戦えない。あくまで目安だが。

そんなところにトラウマ持ちの年端もいかない少女が行きたがるわけもない。かといって、ここも最前線と同等かそれ以上の難易度のダンジョンの中。早くここを脱け出さないといけない。基本的にボス討伐後のボス部屋はモンスターがリポップしない安全地帯みたいなもんだが、だからといっていつまでもここに居るわけにもいかない。

ふと、ここで疑問に思う。

人の形をしたものが壊れていく様を見ると、トラウマを呼び起こされるレインが、なぜこんな高難易度ダンジョンに挑戦したのか。

俺はレインじゃない。だから、あいつが何を思いわざわざトラウマを穿くり返すようなことをしたのかは解らない。もちろんただの自

虐ではないはずだ。

幾度も幾度も声をかけても反応しないので、仕方なく肩をつかみ揺する。ここでようやく顔を上げ、くしゃくしゃになった顔を露にする。

「……取り敢えず、帰るぞ」

返事はない。だが確かにゆっくりと首を縦に振ったので、自分のポーチから転移結晶を二つ漁り出し一つを渡す。か細い声でこの層の主街区の名前を唱えたのを見届けた後、俺も同じく転移した。

ボス戦がかなり速攻（約四十分）でけりがついたのもあり、燦々と太陽が輝く昼前に帰ってこられた。

太陽サンサン労働サムワン！ WORKING!! を観てバイトに応募した高一の頃は若かったな……初日は仮病で早引きして、二日目からはバツクレたけど。

明るく光を降り注がせる太陽とは対極に、鬱々とまるで泥のごときどろどろとした雰囲気身を纏っている雨さんをどうしたものか……と、同じく濁った目をしているであろう俺は嘆息した。

ただでさえ和の街にメイド服（みたいなもの）を着ているだけで目立つのに、更に人通りの激しい転移門のポータルに座り込んでいるので、道行くプレイヤーの視線を釘付けにしている。

意気消沈しているパーティーメンバーを見捨てて消え去るのも目覚めが悪い。しかし気分があらさまに落ちている異性に人目がつくところで話しかけるのも居心地が悪い。取り敢えず、俺としてはひとまず泣き止むことを希う。

「あの一、大丈夫ですか？」

泣いている人を見過ごせないと思ったのか、道を通りがかった優しげな顔をしている男はレインに安否を確認する。装備は軽装で、藍色のインナーに銀の胸当てや脛当て、手甲を身に付けていてDDAを彷彿とさせる。まあ、装備の質はかなり違うが。

……なんだ、あのリア充感溢れる男は。無意識ハーレム築いてそうだな……

基本的に俺は優男が（優女もだが）好きじゃない。

中学時代、誰からも……とは言わずとも、大多数の人間に人気があつた一人の男子がいた。それはもう八方美人で、俺とすらも仲良くするくらいである。

ある日のことである。いつも通り帰宅しようとする自分の下駄箱を開けたら、見慣れないものがおいてあつた。ピンクの便箋にハートのシール、見事に俺は勘違いした。

手紙に指定された場所に行っても誰もおらず、気がつけば濡れになった。後日、教室での会話を聞く限りでは賭け事だったらしい。俺が手紙を真に受けてあの場所に来るかどうか。まあ、優等生の羽目外しの遊び道具にされたようなものだ。

思えば、悪意ある悪意に晒されたのはあれが初めてかもしれない。小学生は無垢な悪意で二重の意味でせめてくるからなあ……

まあ、そんなこんなで俺は優男が嫌いだ。なんなら優男⇨腹黒という公式が意識にこびりついちゃってるまでである。

いくら取っつきやすそうな雰囲気醸し出そうとも、見知らぬ人を見て驚いているレインを野次馬達に混じって見ていると、なにやらキョロキョロと辺りを見回している。

何かを探しているのかと思ひ、注視して——野次馬に混ざっているからできること——いると、気のせいではなかったら目が合った。

そこからは脱兎の如く敏捷力を活かして走り、今度はモーゼの如く人の波を割る（物理的）。

俺も周りの奴らの例に漏れず、転移門方向に急ぐレインに道を譲った——と、思ったら手を掴まれ、先行く赤髪を眼が捉えたと思ったら、また青い光に包まれた。



いきなりの転移光に網膜を焼かれ、一時的な暗黒の世界に光が射し込んできた時に目を開けると、見慣れた……とまでは言わないが、知らないとも言えない街が広がっていた。

鉄都《グランザム》。

攻略組最強クラスのプレイヤーが集まる血盟騎士団のホームが居を構える、謂わばこの街が血盟騎士団に事実上統治されていると言っても差し支えない。

中世ヨーロッパの雰囲気構造を基本的に行っているアインクラッドでは珍しく、工事現場のような……まあ、言い回しをせずつに言えば鉄でできている。

しかしまずい。この鉄の魔都には鬼アスナと魔神ヒースクリフがいる。まさに人外の巢窟。逃げるのが得策だ。

「あの……レインさん？　なにをするのかは判りませんが、階層を変えませんか？」

目尻に涙をためている少女と一緒にいるのを誰か……主に俺のフレンド欄に入っている人物に見つかったら黒鉄宮にぶちこまれる。キリトキリトに鬼アスナに悪趣味クバンダナラにスキンヘッドエに悪徳情報屋鼠、トレジャーハンターア……うん、二つを除いてろくなのがいないな。

ここで最もエンカウント率が高いであろう阿修羅さんを危惧してのことなのだが、首をかしげるレインを説得するのもめんどいし、血盟騎士団のホームから離れてれば大丈夫だろと思い、大人しくレインについていく。

——それが、キリトに続く……いや、キリト以上に恐ろしい存在の降誕になるとも知らずに。

人は馴れないことが多くあり、もちろん比企谷八幡も例外ではない。

鉄の都はまるで城塞都市のように物々しく、女性プレイヤーに不人気である（ただ、血盟騎士団を一目見ようと来る人がいないわけではない）。

おまけに、NPCショッププレイヤーショップどちらも例外なく、経営しているのは鍛冶屋道具屋武器屋などが九割を占めているのも（もちろん元々女性プレイヤーが少ないこともあるが）要因の一つだ。九割、ということはレストランやカフェみたいなものがないわけではない。今いる《アイアン・カフェ》なるものもそのうちの二つだ。

立地、内装、設備の商売三種の神器が一つもないこのカフェに腰を落ち着けた理由は恐らく、人にあまり聞かれたくない会話をするからだろう。余談だが、料理はメチャクチャ旨い。

俺が飯を食べているゆえに話しかけにくいのか、自分の気持ちの整理がついていないのか、口を開いては閉じるレインを顔は飯に向けたまま盗み見る。

そうこうしているうちに俺の味覚野へと消えた昼御飯が乗っていた皿を眺め、なにか決意したように声を発する。

「え、えっと、まず、あの……取り敢えず、ありがとう」

「……………」

……………。

……………。

……………は？

この重苦しく、俺が今から裁かれるの？　と思うくらいの空気で紡ぎだされた言葉に人生最大級の肩透かしを喰らう。その度合いと言ったら、《メテオブレイク》が外れた時くらい……うん、それは肩透かし（物理的）だな。肩透かし（精神的）じゃないわ。日本語って難しい！

「……………」

「あの……なんかリアクションしてくれないと……」

「いや、なにに対して言ってるんだよ、って思ってる……」

ぶっちゃけ俺は感謝されるようなことをしていない。むしろデスゲーム開始一ヶ月後からは讒謗陰口悪言etc etc……いや、て言うか今もクラインとか鼠に色々事実無根の話を吹聴されてるよな……。

「色々だよ」と返され、軽く肩をすくめて「そんなことはねえよ」と俺もキャッチボールの如く投げ返す。

「……やっぱり、さ。エイト君って優しいよね」

「は？　そういう言葉は一番似合わないだろ。なんせ俺は悪のビーターだぞ？」

俺が否定的な言葉をかけると、全く嫌味がない笑顔で朗らかに笑う。いきなりすぎて戸惑いの声が隠せない。

「ど、どうした？」

「ううん。私もビーターの噂は何回も聞いたことあるけど、やっぱり噂ってあてにならないな、って思ってる」

噂、か。今一番有名な噂——噂ではなく真実ののだが——は、恐らくヒースクリフ不敗神話だろう。そのお陰でビーターの噂も今じゃ霞んでいる。ありがたや。

血盟騎士団のホームがある方をいつまでも見ているわけにもいかず、再び赤髪の少女に顔を向ける。

「あの、さ、エイト君ってずっと攻略組なの？」

「……ああ、まあな」

「そっか。……私はね？　昔……と言っても5ヶ月くらい前なんだけど、それくらいまで、用心棒みたいなことやってたんだ」

5ヶ月。それはつまり、俺とレインが初会合を果たしたときくらいに辞めた、ということか。それにしても、用心棒がインクラッドにいるなんて驚きだ。と言うのも、金が目的なら弱いやつは護衛なんかしないで乱獲でもしたほうが効率がいい。

「……………」

俺も人間だ。多少なりとも知識欲はあるし、なんで用心棒をやめた

のかを詳しく知りたい気持ちも、まあある。しかしそれは地雷トラウマのはずであり、利己的な思いで自分から掘り下げていいはずもない。君子危人のトラウマうきに近寄らずとも言うし、君子は危俺うきにトラウマ関わらないのだ。

「それで、えっと、その日も依頼を受けて、四十層にある、『暗闇の森』に同行したの——」

二〇二六年一月十八日。

薄い茶髪の少女を先頭に、五人の冒険者達プレイヤーが光が一切射し込まない森を歩いていた。

「しつつかし、ハイレベルな人が一人パーティーにいるだけでも違うもんだな！」

「ノリ、油断してるとお前の頭髮みたいに体がダメージエフェクトで真っ赤になるぞ?！」

「それにしても、なんで俺たちのヘアーカーラーを派手な……所謂戦隊モノみたいなにしたんだ?！」

本人曰く戦隊モノみたいな髪色の緑髪を弄りながら素朴な疑問を口にする。それに対してのノリの返答は単純明快だった。

「決まってんだろ、タケ！——カッコいいからだ!!」

自信満々に言い切ったノリに、苦笑する面々。しかし納得がいかないと声があがった。

「ノリ、タケ、ヒロ、お前らは戦隊モノでもメジャーな赤、緑、青髪をしてるからいいけどな……。——なんで俺はピンクなんだよ!? それもくすんでも暗い感じでもない、真ピンク！」

ピンク髪の少年——プレイヤー名をヨシと言う——の悲痛な叫び

に、他三人は冷静に、眈々と一言返した。

「二ピンクだって、戦隊モノのメジャー色だろ？」

「なら黒とかでもいいだろ!？」

「だって……」「なあ……」と意思確認したのも一瞬、すぐに顔をヨシに向けて答える。

「二面白くないから」

トリプルカウンターに完全にノックアウトされ、散々いじられたヨシはがっくりと肩を落とす。

一応仕事のため、顔には出さず内心で今のやり取りに笑っていると、《暗視》スキルを取得しているヒロが全員に報告する。

「なあ、この先に今までこの森になかった拓けた場所があるんだが……」

「じゃあボス戦じゃないか？」

こういったフィールドダンジョンは、ボス部屋を二枚扉で区切っている迷宮区などのダンジョンとは違い、仕切りがない。だが目印で言うならば、拓けた場所がボス部屋と断定しても問題がないくらい、広いスペースがある場所はボスがいる確率が高い。そこから挑戦するか諦めるかはボスを見つけた者次第だ。

「……どうする？ ノリ、パーティーリーダーはお前だ」

髪だけでなく装備も全体的に赤い彼は、しばしの逡巡の後、すぐに結論を出す。

「俺達だけじゃ危険だったけど、今は用心棒さんがいるし……ここのモンスターのレベルは思ったほど高くなかった。加えて回復アイテムも七割くらい残ってる。行かない理由がないな！」

S A O 開始初期からパーティーを組んでいた青、緑、桃色頭の少年三人は共通してこう思った。

「ノリらしいな」と。

もちろん三人にはリーダーの意見に反対する必要はないので、あとが用心棒——レインがOKを出せば満場一致でボスに挑むことができる。

「じゃあ、行きましようか」

全員が期待の眼差しを向ける中、一用心棒にすぎないレインがクラアントの意向に逆らうわけにもいかず、了承する。

——その選択が、今後自分が悩まされ続けることになる要因になるとも知らずに。

「ウワアアアアッ！　なんだよこいつはアアアアッ!？」

しなやかに伸びる鞭のような巨大な植物の蔓に追われ、ノリは元々筋力寄りで、走ることなど得意としないビルドにも構わず、ひた走る。

だが、慈悲など一欠片もない攻撃は、ノリの疾走など遥かに凌駕する剣速ならぬ鞭速で、みるみる距離を縮めやがてノリの体を捉えた。

彼の体や装備以上に紅いライトエフェクトが散る。それから五秒も経たぬ間に、叩かれた……否、あまりの攻撃の鋭さによって切り裂かれた仮想体の輪郭がぼやけ、爆散。

「うあ……」

自分は今までなんて温い世界にいたんだ。これが今いるこの世界。デスゲーム《ソードアート・オンライン》。

今はもう遥か昔に感じる一年以上も前、茅場晶彦が言った言葉が思い出される。

——これは、ゲームであっても遊びではない。

痛感した。

確かに、この世界でしか見えなかった景色、作れなかった思い出、本来関わることのなかった人との出会いはあった。

これも、ネット『ゲーム』の一つの魅力なのかもしれない。だが、自

分の命を懸けた時点で、その『ゲーム』は『遊び』じゃない。

それは、今はもう自分一人になっているこの状況が何よりも如実に語っていた。

相手残戦力はボスが一匹に取り巻きが五匹。五人で挑んでも取り巻き五匹が精々だった。更に十分ほどでパーティーはほぼ壊滅。生還は、絶望的だった。

「……そんなとき、視界が明るくなったと思ったらいきなり街にいるから、最初はなんかのバグかと思ったよ」

「……そんなんでよくあの森に居たのが俺だって判ったな」  
てつきり、顔くらいは割れているものと思っただけに意外だ。

「二応、色々考えたんだよ？　まず、街までの移動手段は当然転移だったけど、私はボイスコマンドを唱えなかったし、転移結晶は使っていない」

「……だから移動手段は回廊結晶を使った、と？」

コクリと頷くレインに対し、察しのいいやつだと舌を巻きつつ、再び会話に意識を集中する。

「……それで、転移先は最前線の街だったから攻略組ってことだけは判ったんだ」

「他には？」

「あと、あの状況を切り抜けられるほどの実力者は、アルゴさんの知る限りではヒースクリフさん、アスナさん、キリトさん……そして、イト君だけだった」

「……俺、あんな人外達と一括りにされてんの？　俺はノーマルだよ？」

密かに人外扱いされていることを全力否定しつつ、またシリアスモードになったレインの言葉に耳を傾けた。

「……その一件以降当然だけど全く仕事が来なくなって、仕方なく用心棒を辞めたんだ」

それは当然の結論と言える。護衛がクライアントを守れず、自分だけ帰ってきたら人はどう思うだろうか？

十中八九批難する。

なんで一人だけ帰ってこれたのか、見捨てたんじゃないか、なら、こいつは人殺しだ……人が人を悪と断ずるのは、この三工程で事足りる。

「……だから髪色も、地毛から染めてこの色にしたんだ」

「じゃあ、あれか？ 転移門の前であの優男に話しかけられたら驚いていたのは……」

「うん、5ヶ月くらい前に話題になった用心棒だつて気づかれると思つたから」

じゃあ、なんでそんな目立つ服着てんだ、と心で軽いツツコミをして頭をクールダウンする。予想していたとはいえ、苦い話を中和するように甘い珈琲を啜る。今でもなんであるのかよくわからない皿（鉄製）に珈琲カップ（鉄製）を置き、一呼吸してから俺は口を開いた。

「散々色々質問して答えてもらったのに悪いが、お前はその話を俺にして、なにをして欲しいんだ？ 安っぽい同情か？ 薄っぺらい慰めか？ それとも、俺にそのトラウマでも治して欲しいのか？」

自分のトラウマの根源を話した相手に対し、あまりにも辛辣な言葉。パーティーを組んでた時間だつて二日にも満たない相手に話すにはあまりにヘビーな内容ゆえに、こいつの心情が解らない。

俺の無神経極まりない発言に、それでも雨の少女はやんわりと笑みと言葉を返した。

「違うよ。私はエイト君になにかしてもらいたいんじゃないやなくて、私がしたいの」

「……なにをだ？」

ちよつと語気が強くなってしまったことを自覚しながら、レインの返答を待つ。と、急に椅子から立ち上がり、腰を曲げ頭を下げる。

「何があつたのかを全て知ってもらつた上で改めて——5ヶ月前、助



けてくれて本当にありがとう」

純粹な、感謝の念。十八年間の人生で、家族以外では数回あったかどうかくらいの体験にどうしていいか解らず、視線をさ迷わせる。

逃げることは悪くない。今でもそう思っている。

だが、今この時勘違いでも何でもなく俺に向けられた感謝の念からは、逃げてはいけない気がした。

未だ対処法を模索する俺を見ながら席に着き直し、やはりレインは笑った。

と、その時。鉄のカフェの入口である鉄扉が開いた。別に不思議なことではない。いくら閑古鳥が鳴く店でも、たまには客くらい来るはずだ。問題は、来客の面子だ。

白が主色の騎士服とともに一線を画するオーラも身に纏い、立派に光沢する獲物は間違いない業物。見間違いようもなく、最強ギルド《血盟騎士団》のメンバーだった。

その先頭にいるプレイヤー……《閃光》のアスナとたつぷり三秒目が合い、逃げるように逸らす。

眼では捉えてないが、カツ、カツとブームの鋌と鉄床が当たる音から、閃光……いや、攻略の鬼が迫っていることが解った。

「こんにちは、ハチ君」

「……おう」

なんも悪いことしてないのに、刑事に追い詰められている犯罪者のような錯覚を受け、今すぐにでもトンズラしたくなる。

「ところでハチ君？　この子だあれ？」

「れ、レインと言います」

「デート中？」

「い、いえ、全くそのようなことは……」

「ところでハチ君、話は変わるけど……」

「な、なんでしょうか？」

「わたし最近武器を更新したんだけど、試し斬り……ううん、試し突きさせて？」

跳躍。からの疾走。

ヤバイ怖い鬼悪魔阿修羅……

後ろを振り返ってはいけない。この世のものとは思えないものが  
顕現しているだろうから。

ああ、そういえばこんなことがなかったら、昨日あの赤髪の少女と  
会うことはなかったんだなと思いつながら全力疾走した。

エイトが逃げ出し、アスナがそれを追いかけて、更に血盟騎士団メン  
バーがアスナを追いかけて、あつという間に閑散とした空気の中、虹の  
ような笑顔で、今は見えない青年に少女は言葉を掛けた。

「ダスヴィダーニヤ、エイト君♪」

とにかく言葉の定義は曖昧で、比企谷八幡でもよくは解らない。

六月も中旬から下旬に移り変わり、初夏と言っても差し支えない頃、今の時期にしては多すぎるほどの汗を掻きながら俺は屹立していた。というか、鬼を待っていた。

「あちい……」

いったい鬼に何をされるのかという恐怖と、初夏の暑さのミックスのせいで汗だくである。さすが俺、ヒキガエルの悪口は伊達じゃないぜ！

六十一層の街の一つである《スイルベーン》は、基本洋風なアインクラッドの街並みによく合う湖上都市である。俺もマイホームが欲しいとはある程度思っているが、静謐な場所がいいのでここはない。と言うかここ鬼さんのホームがあるし。

転移門前広場にあるベンチに腰掛け、じゆるじゆるとオブジェクト化したMAXコーヒー擬きを啜る。甘い。

缶を振り、ちやぽちやぽと薄茶色の液体が音を立てるのを聞きながら、俺はどこぞのアクセロリータとはコーヒーの趣味は相容れないだろうなあ……と思いつながら二口目。

青い空、青い湖、青い俺の気分、青い光……誰かが転移してきたようだ。

六十一層に自宅があるアスナが転移門から現れるわけないので、興味を失ったように目を逸らす。

意図したわけではないが、目線を向けた先にはコバルトブルーの鞞に収められた刀傷だらけの剣があった。

「そろそろ替え時、か？」

「なにが？」

「そりゃあ……って、うおおッ！」

あるはずのない返事にガラにもなく驚き、声がした方を向く。別に聞かれて困る話題でもないが、自分が知らぬうちに聞かれるのも好ま

しくない。

振り向いた先にいる鬼……アスナを気づかれないようにジト目で睨み、密やかな抵抗を終えたらベンチから立ち上がる。

布装備は金属装備とは少し違い、《裁縫》スキルで耐久値を回復できる。が、メンテナンスをする度に最大耐久値は下がり、金属装備同様に格好がみすぼらしくなる。端的に言えばほつれだらけだ。性能だけでなく見た目的な意味でも更新が必要だ。

そう結論付け、改めてアスナに向き直る。

「おはよ、ハチ君」

「……おお」

普段通りなら今頃は宿屋で眠っていたんだろうなあ……と、怠惰な生活に思いを募らせ、早速提案する。

「じゃあ、俺帰るわ」

「え、え？ か、帰っちゃうの？」

……上目遣い。正直、グツと来ました。だが残念。小町の上目遣いでいつもグツと来てるからセーフ……いや逆にアウトだな。……じゃなくて。

「いや、お前の要求は『明日自分と会うこと』だろ？ 昨日出された案件は全て達成したから帰るわ」

「……じゃあ言い替えるわ。ハチ君、命令♪ 今日一日わたしに付き合って？」

「よし解った。喜んで」

まさか命令権を使ってくれるとは……前々からどんな命令をしてくるか怯えていたが、ようやく解放される。

解放されたことの喜びが半端ないことを初めて知った日であった。ジユウ、スバラシイネ！

「え、喜んで？ あわあわあわ……」

目の前にいるキリツと冷静副団長が、天然キャラみたいな慌てかた(?)をしている摩訶不思議な光景が眼前にある。

こいつが顔を赤くしたときは十割怒鳴り散らしてくるので、対処法(ただの逃走)を行使する。

アインクラッドに来て、アスナと会った日は毎日が体育祭だ。肉体的疲労はないが、精神的疲労は体育祭の比じゃない。

どこぞの電圧の単位の名前である現実世界最速の男顔負けのスピードで、脱兎の如く駆けた。

が、すぐに捕まった。千里眼でもあるの？　と思っただが、アインクラッドにはあつたわ。フレンド限定の。

俺が一日付き合おうと承諾したにも関わらず遁走したと勘違いしたのか、例によって制裁された。でもね？　アスナさん。走って追いかけるから丁度いいからって、フラッシング・ペネトレイターはやめてください。冗談でも何でもなく、圈内だから剣技の衝撃で十メートルくらい飛ぶから。そのお陰と行っていいのか解らんが、空中での空間認識力は上がったが……

さて、今現在俺はその空間認識力をフル活用している……誰に説明してんだ？　俺。ついに二重人格になっちゃったの？

余計なことに思考を割いていたため受け身をとるのを忘れ、勢いよくなにかにぶつかる。

頭が痛……くはないな。けど脳が揺さぶられて気持ち悪いですます……。

ここでアスナが「あつ、やつちまった」みたいな顔をするのもお約束。

脳味噌をシェイクされたような不快感の中、泥酔した社畜のように立ち上がる。

「オエエ……」

二日酔いとはこんな気分が続くのだろうか、ぜってえ酒なんか飲ま

ねえ……

数分後に疑似二日酔いが収まったのち、本日二回目のジト目。

「……お前さあ、リニアーまでは俺も許容範囲内だけど、フラツシグ・ペネトレイターはまずいだろ……」

見ると細剣——確か名前はランベントライトだった——は、徐々に頭角を表し地上を照らす日光を一刀に受け、鈍色に光沢している。

「それは悪いけど、リニアーまでは許容範囲なんだね……」  
「うるせえよ……」

対照的に、俺の剣。歴戦の勇士と呼ばれる範囲を越え、ただの檻樓剣に見えてきた。一合打ち合えばすぐに折れそうなほどだ。

「ハチ君、さつきから剣ばかり気にしてるみたいだけど、どうかしたの?」

「いや、別に……」

左腰にある確かな重みを感じながら転移門に向かう。しかし、なぜかキョトンとした顔をするので、俺もギョロンとした顔をする。

「……どうした?」

「え? どこ行くの?」

どこって……攻略じゃないの? そのために(無理矢理)呼んだんじゃないの?」

「言っておくけど、今日は攻略しないわよ?」

「は!? お前熱あんじゃねえの? 帰って休めよ」

「どういう意味よそれ!」

いや、だってなあ……お前休日もらっても攻略ばっかしてそうだし。むしろ攻略が趣味みたいな」

「ふーん、ふーん、ふうーん」

「……なんだよ」

「別にー、どうせわたしは攻略バカですよーだ」

「え、なんでわか……あ」

もしかしなくても、声に出た? まずい、こういうときのパターンは一年半くらいも前に味わってる。

「……よ、よし。どこ行くんだ?」

当然、対処法も熟知している。二の次を言わせないで話題を転換。自分から喋るのは苦手だが、背に腹は替えられない。

「どうせわたしは攻略バカだから最前線でも行こうかなあ？　もちろん前衛はハチ君ね？」

「よ、よ、よ、よし。解った。何でも言うことを聞こう。だから勘弁してくださいお願いします」

全然対処出来てなかった。まずい、別にソロの時なら前衛後衛回復全部こなせる……と言うよりこなさなければいけないが、鬼と一緒だとどんなことを言われるか判ったもんじやない。

「解った、解ったから。頼むから攻略以外でお願いします」

こいつ、超スパルタだからな。戦い方にダメ出しされたら泣くぞ、マジで。ボス戦とか超難易度高いことやってるからね？　タゲ取ってひたすら回避とか。タンクの役目なのにマジ理不尽。

「冗談よ。さつきも言ったでしょ？　——今日一日わたしに付き合ってます？」

小悪魔的且つ蠱惑的な笑みに一歩たじろいだか、なんとか言葉を絞り出した。もちろん、肯定するしかない。

「……はい」

デートの定義が異性と待ち合わせをし、ともに出かけることならば、これもデートと言うのだろうか？　答えは否である。

例えば、自分が作家だったとして、異性の編集者とファミレスに行ったとしよう。それをデートと呼ぶものはいない。まあ、例えるならそんな感じだ。

最前線から僅か二層下と——つまり、解放されて間もないというこ

とに加え、景観が美しい湖上都市にそこそこプレイヤーは多い。それは即ち、軽やかなステップのような足取りで歩くアスナに顔をだらけさせ、後ろにいる俺を見て睨んでくる人が多いということだ。断じてストーカーをしているわけではないと、内心で弁明しておく。

それにしても、攻略以外無意味！　みたいな思考回路をしていた攻略の鬼が丸くなったものだ。ちよつとはゆとりを持って、と常々言っていたのが実を結んだのだろうか。

「ハチ君、ハチ君！　これ、どう思う？」

どこかの店で見つけたのか、差し出された右手には白と赤、灰色のリボン？　だろうか。が乗っていた。

「……なんだそりゃ」

「これリボンじゃなくて、装備したら手首に結ばれた状態でオブジェクト化するらしいよ」

「ほー……」

リストバンドみたいな物だろうか。一種の装飾アイテムとも言える。

確かにシステム補正的には無意味なものだが、こういう何気ない日常が一番大事なのだ、常に命を懸けているSAOプレイヤー達は知っている。

アインクラッドに入って、ボッチである俺ですらも独りで戦えたこととはない。それは、ソロプレイヤーだから独りで戦っているとか、そういうことでは恐らくないのだ。

情報屋から情報を貰い、商人プレイヤーから高性能の装備や回復アイテムを買う。そうして万全の準備をし、俺達が攻略をする……どれか一つでも欠ければ、アインクラッドを六割以上も攻略できなかつた。

人は、独りで過ごすことはできても、独りで生きることができない。なぜなら、独りでできることには限界があるのだから。

ボッチである俺の人生を全て否定するような言葉だが、これが一年半のデスゲームの中で俺が行き着いた答えだ。俺は神じゃない。何度も間違え、苦悩し、考える、人だ。



この答えは間違っていて、前の考えが正しかったのかもしれない。この答えは正しくて、前の考えが間違っていたのかもしれない。あるいは、どちらも正しくて、どちらも間違えているのかもしれない。いや、そもそも、正しいとか間違っているとかなんてないのかもしれない。

そんなことを考えながら、三色の布を購入した。

ふと、会ったときから気になったことを訊いてみた。

「お前、装備ピツカピツカだからこの後ギルドで攻略すんのかと思っただけど、耳にイヤリング着けてんのはなんでだ？」

「えっ、気付いてたの？」

「いや、すごい日光反射してるから、そりゃ気付くだろ……」

そこまで注視したわけではないが、一目見ただけで服とかブーツとか輝きが違った。

光るランベントライトを見て、そういえばあれは友達の鍛冶師に作製してもらったと言っていたのを思い出す。

俺に背を向け、なにやら自分の世界に入っている閃光さんに声を掛ける。

「すいません、アスナさん。ちょっと訊きたいことがあるのですが……」

「ハッ！ な、なんですか？」

「前、確かその細剣友達の鍛冶師に造ってもらったって言ってたよな？」

「う、うん」

アスナの細剣、ランベントライトは紛うことなき業物であり、そん

な武器を作製できる鍛冶師はなかなかいない。それこそ一線を画する鍛冶師のはずだ。武器を更新するにはちょうどいいかもしれない。

説明を一から始めるために抜剣し、刀身をアスナがすっかり見えるようにする。

「まあ、この武器を見たら解ると思うが……そろそろ装備を更新しなきゃならん。だからその、何？ その鍛冶師をできれば紹介して、だな……」

「もちろんいいけど……でも！ 条件があるわ！」

「……なんだよ」

「その娘を惚れ……じゃなくて、その娘にあんまりいいカツコしないこと！ いい？」

その子？ 子供のの？ あれか、要はわたしからお姉ちゃんポジシオンを盗らないで……みたいな感じか。

「解った」

その後は相も変わらず街をぶらぶらし、その鍛冶師の営む工房を教えてもらって別れた。余談だが、あまりの剣幕のせいで若干冷や汗が出た。なるべくアスナを怒らせないようにしよう、と誓った日でもあった。

比企谷八幡が思う材木座義輝は、妄想のなかでもやっぱりウザい。

四十八層主街区《リンダース》。

それがアスナから聞いた、高熟練度《鍛冶》スキルを持つという鍛冶師がいる……らしい街だ。

レベルが遂に九十の大台に乗ったこともあり、攻略を休んでいつも以上にたっぷりと睡眠を取ってから先日アスナから聞いた鍛冶師のもとへ繰り出すことにしたのだ。

《料理》スキルで適当に作ったサンドイッチをムグムグと食べながらあまり見慣れていない道を歩く。

アスナ曰く、水車が付いているから特徴的でわかりやすい工房を指し、マップを開きながら迷うことなく歩く。もちろん街はそこまで入り組んでいるわけではないので、到着までに要した時間は十数分だ。

カラカラと回る水車が付属されているレンガ造りの一軒家みたいな工房には、《リズベット武具店》と英語で書いてある看板がある。どうやらここで間違いないらしい。

「……失礼します」

外観が一軒家っぽいからか、畏まってお邪魔……もとい入店する。木製の扉には来店を告げるベルがあつたようで、カランカランと高い音をたてた。

別に悪いことをしている訳じゃないのに、自分でもオドオドしながら辺りを見回す。俺も使っている片手剣はもちろん、両手剣、片手槍、両手槍、戦斧、戦鎚、刀、曲刀、ナックルなんかもあった。

肝心の店員はと言うと……いた。椅子に座って寝てやがる。髪がピンクのそばかす少女が着ている服はウェイターのようで、とてもじゃないが鍛冶師には見えない。

明らかに営業放棄しているウェイター(?)に、本当にこの店で合ってるのか若干疑わしく思いながら、取り敢えず起きてくれなければ話

が進まない、声を掛ける。

「あの、すみません……」

「……………」

……返事がない。ただのオブジェクトのようだ。

「あのー？ すいませーん……」

「……………」

返事がない。以下略。

もう声で起こすことは諦め、物理的に起こしてやろうとも思ったが、見ず知らずの奴を叩き起こすのも悪いか……と実行に移せずにいる。何より……何より、下手に触って倫理コードに触れたら……ヤバイ。ヤバすぎる。

手を出すことはできず、声を出しても起きない。起きるまで待つても、起きたときに通報されること請け合いだ。と言うか、こいつ全然子供じゃねえじゃん。まさか『こ』って、子じゃなくて娘？

仕方ないので、この店の鍛冶師の腕を確かめるのも兼ねて店内の商品を物色し始めた。

しかし物色はものの数分で終わった……と言うより終わらされた。新たな来店者が来たからである。

黒い装備を身に纏い、自らの命を預ける剣も黒。これは生まれつきだろうが、長髪も眼すらも漆黒。その風貌ゆえに、『黒の剣士』と呼ばれるプレイヤー……そう、天使だ。

俺と目が合うと、キリトが顔を綻ばせる。……なにこれ、絶対マク○ナルドに勤めたら「スマイルください！」って言われるぞ。

「エイトオー！ 久しぶり！」

「お、おお。二週間ぶりだぞ、そんな久しぶりか？」  
「うん！」

肯定されてしまったらなにも言えない。そんなに久しぶりか？  
二週間。

キリトの装備を見るに、更新は疎かメンテナンスも必要がないはずだ。なにせ魔剣クラスの化物が獲物なのだから。

「お前ここに何しに来たんだ？」

「うえっ？ な、なにが？」

会話の脈絡が全く繋がってないからか、別のことが理由かはわからないが、明らかに動揺した声を出すキリトにアスナ直伝（別に習っていない）の疑属性の視線を向ける。すると眼を明後日の方向に向け、ダラダラと脂汗を流す剣士が一名。凶星かな？ もし俺に眼を向けられたことが原因なら割り和本気で傷つく。

「……いや、だってお前エリユシデータあるじゃん」

エリユシデータ……和訳すると解明する者。五十層ハーフポイントのボスのL A ボーナズである魔剣のスペックは、俺はおろか、攻略組の装備とも一線を画するほどのスペックを誇る。アインクラッドでも一、二を競う名剣だ。

当然、耐久値も頭抜けているはずなのだが……

「エツ、エツト、ソノ、ヨ、ヨビニケンヲツクツテモラオウカトオモツテ！」

「お前、今めっちゃ片言なの解ってる？」

「う、うう……」

今度は顔を赤らめ、頭から湯気のエフエクトが出てきそうな様子になる。同じ顔を赤らめる行為でも、鬼アスナと天使キリトでなんでこうも違うのかが謎だ。

材木座だったら

『なぜかだとお、八幡。貴様、そんなことも解らないなんてそれでも我の相棒かアアアアアツ!?（中略）なぜならそこに萌えが無いからだアアアアアアアアツ!!!』

……うーわっ、ウザ。さすが材木座、想像のなかでもうざっ。

「そ、そういうエイトは何しに来たの!？」

反撃開始と言わんばかりにビシツ! と指で指したポーズで訊いてくるが、俺は歴とした理由がある。

「俺はただ単に武器の更新だ。もうボロいからな」

コバルトブルーの鞆を小突きながら理由を述べる。散々かつこつけたのに大したことじゃなかった羞恥心からか、さらに顔を赤くしてしやがみこんでしまった。何? 俺が悪いの?

ちなみに鍛冶屋は、俺達がかかなり大声で会話していたのにも関わらず、まだ寝ていた。

……なにあいつ、すごい寝てんだけど。過眠症なの? 東京でスピリットなイエーガーなの?

この状況、鍛冶屋を見て驚いている風に混沌な仮想現実逃避している俺か、四つん這いになっているキリトか、客をほっぽらかして寝ている鍛冶屋か、誰が一番正常だろうか?

——言うまでもなく、俺だ……よね? そうだよね?

結局、キリトが再起動する前に桃色髪の鍛冶屋が眼を覚ましてしまった。

「な、なにやってんのよ、あんたたち! うちの店で! この不審者、ドロボー!」

雪ノ下に比べればまだまだ温く青い絶望に内心で嘲笑しつつ、対雪ノ下用汎用人型決戦兵器、(ある意味で)人造人間ハチマンゲリオンを起動する。ただし勝率は皆無。

「それが客商売中に眠りこけてたやつと言う台詞かな?」  
「なっ、なによ!」

バカにするような口調に食って掛かる鍛冶屋。短絡的すぎる。

「いえいえいえ、別に〜？ 営業中に寝ていても経営していきける鍛冶屋さんだから、さぞかし腕がいいのだろうなく、と思っただけですが？」

「はいはい解ったわよ！ なに、メンテ？ それとも武器作製？ 精々腕がいいってことを証明させてもらいますよ！」

クラインとか雪ノ下とかエギルは言う。——俺に煽られると異様にムカつく、と。

アスナは言う。——俺は人をイラつかせる天才だと。

キリトは言う。——アスナがよく俺に怒る原因は、俺の言葉じゃなくて行動だと。

そして、目の前のこいつはこう思っているだろう。——目の前の男、すごいムカつく、と。

どうやら俺は、プレイヤーからヘイトを向けられるのが得意らしい。なんならモンスターからもヘイトを向けられるまでである。

半ばヤケクソ気味に汚名返上をしようとしている鍛冶屋（未だキラネームは知らない）。やっとなら本来の目的を遂行できる……遂行って言うとなんか任務っぽいな。

「お客様？ リズベット武具店へようこそお〜」

愛想の欠片もない笑顔で出迎えるの言葉を言う。その様子にキリトが若干怯えているのを見ると、さすがに煽りすぎた感が否めない。

笑いながら怒れるのはあれだな、女子の特権だな。

「ぶ、武器作製をお願いします……」

声色も言った言葉もまったく同じだったということは、思っていることもほぼ同じはずだ。

——こいつ、怒らせるとまじこええ、と。

新たな出会いによつて繋がりは増え、同時にトラウマも増える。

「武器作製イ？ 今棚に飾つてある剣じゃダメなの？ あたしの最高傑作よ！」

自信満々に差し出される一振りの剣。キリトと「どっちが先に持つ？」とアイコンタクトをし、結局柄に近い位置に立っている俺から持つことになった。

「軽ッ。これじゃ今の剣ボロ剣とそう耐久性変わらねえな……」

小声でボロ剣などと言つてしまつたが、ヒュン、ヒュンと、明らかに軽い感じの空気を切る音が聴こえたら不安にもなる。せめてブンとまでは行かなくとも、ビュンビュンくらいまでは行つてほしかつた。濁音をつけると重い感じがするのつてふしぎ！

軽い剣は俺のビルドからも相性がいいし、嫌いではないが、ソロで戦う以上耐久力ではできるだけ欲しい。それに基本的に軽い剣は一撃の威力も落ちるしな。

大体感触を確かめ、好みに合いそうにないなと結論付ける。キリトは俺なんか比にならないくらいにストレングス要求が高く重い剣を好むから、多分お気に召さないだろう。

「うん？ うーん……」

ちよ、キリトさん？ いくら耐久度チェックしたいからつて、魔剣と軽く当てちゃダメでしょ？ 最高傑作がガインガイン言つてるよ？ 鍛冶屋は鍛冶屋で、「アタシの剣が折れるわけない」みたいな顔してるし。折れちゃうよ？ 最高傑作折れちゃうよ？ もうそれはゼット○ードとか天鎖○月みたいにポツキリ。

「ぎ、キリト。一応それ売り物だからな？」

「あ……」

左手に握る売り物の剣を見つめ、いきなり肩を組んだと思うとひそひそ話並みに小さい声で話してくる。ふええ、耳がくすぐったいよお……。



(ど、ど、ど、どうしよう、エイト!? ちょっと欠けちゃった、刃毀れしちゃったよ!)

(バカ野郎! だからエリユシデータをぶつけるなって言ったんだ!)

(いや、言われてないよ!)

(言ってなくとも俺知らね。関係ないし、なんもやってないし、ちよつと剣を振っただけだし)

(それはないよ! 私達は一蓮托生でしょ!?)

(知らん。うまい言い訳でも考えてくれ。シャトルは切り離し作業に移ってるんだ)

(言い訳はエイトの専売特許でしょ?)

(その言葉でお前が俺を言い訳製造マシンって思っていることがよく解ったよ)

我関せずのスタイルを保つことにした俺を見て助けは望めないと判断したのか、嫌な汗を掻いて元々白い顔をさらに白くしていた。諦めたらそこで試合終了だから、断固たる決意を決めて鰐のように泥にまみれて頑張りなさい。……名言を複合するとありがたみがなくなるな……。

とは言え、この生殺しみたいなしチュエーションはさすがに居たたまれない。というか、ウエイター(仮)さん? あなたなんも話しかけてこないから、その笑顔が逆に怖いんですけど。

「あ、あのー。ち、ちよつと、好みに合わないかな、なんて……」

なんで俺が気を遣ってフォロウをせなあかんのや。似非関西弁なんて使ったら関西人が怒るぞ。使ったの俺だけどな(心の中で)。

「ふうーん? どこらへんが気に入らないのか言ってくれる?」

自分の最高傑作を貶められた憤慨よりも鍛冶屋としての向上心が勝っているようで、若干眉を寄せながらも訊いてくる。

「ああ……まず一つ。これは個人的趣味だが、軽い。まあ、回避主体の戦い方をするやつなら問題ないだろうが……」

(……エイトにピツタリじゃん)

黙れ。俺だって軽すぎて頼り甲斐がない剣を好き好んで使いたく

ないわ。むしろ人生に於いても嫁さんに頼りきって天寿を全うしたいわ。

「で、二つ。これは軽い以上仕方ないが、威力がない。細剣みたいに点の攻撃で弱点を突くとかならまだやりようがあるが、面で攻撃する片手剣はそんなことできないしな」

「ふうん……。他にもまだあるの?」

「あと一つだけな。最後。脆すぎる。これは致命的だ。さつきも言ったように、攻撃回数を少なくしたウィークポイントアタック特化の細剣ならそれでもいい。けど……」

「急所を狙いにくく、広い範囲で攻撃する片手剣じゃ以下略、ね」

あとこれは機能に関係ないが、光沢が激しい。鈍い感じに光るのが個人的には好みだ。目立ちたくないしな。

「……と、言うわけで……ちよつと、欠けちゃった」

「ハアアアアアッ!」

耳をつんぎく絶叫。もはや新たな攻撃用スキルと思うほどの音響が工房内で反響する。

聴覚が一時的に殺られ(割りとマジで)、気のせいだろうが心なしか頭が痛くなってきたと感じていると喧嘩上等の番長よろしく胸ぐらを掴んでくる。

「なにしてくれてんのよ! 仮にも人の最高傑作を!」

「落ち着けよ、別に折れた訳じゃないから、修復できるから! それに簡単なことで欠けるくらいに柔いこの剣が悪い!」

鍛冶神に恋慕を抱く唯一魔剣造れるレベル2の冒険者も言っただろ? 『使い手を残して壊れる魔剣を造るのは好きじゃない。俺は間違っていない。だから魔剣を造らないのはいいことなんだ』って。……途中から違うな、うん。

「ふふふ、ふざけんなあー!」

「あぶねっ!」

戦鎧を振るってくるので、膝と腰を曲げ低い姿勢になり躲す。こうやって攻撃を避けられるのを実践すると、この一年半で反射神経とか動体視力が鍛えられているのが実感できる。見える、動きが見える!

ア○口、行きまーす！

「ちよ、やめ、キリト、たす……」

「フンツ、フンツ、フンツ！」

現実だったら間違いなく人を撲殺できる戦鎚が顔に迫ってくるせいで反射的に避ける。ヤバい、ボス戦でこれ以上のサイズのハンマーは見たことあるが、現実でもまだあり得る大きさという要素が恐怖心を煽ってくるんだが……。実際剣を欠けさせたのキリトなのに。

……仕方ない。

「南無三……」

雷のごとく一瞬だけ煌めいた俺の剣が残したのは、一閃の余波による突風と轟音、そして……。鍛冶屋の手から儚げに散っていく鎚だった。

「ア、アアア……」

絶望。からの茫然自失。千尋から千になって、さらに千から千尋になった神隠しの映画に出てくる顔がない黒いやつみたいな声を上げ、膝から崩れ落ちた。ぶっちゃけ鍛冶屋としての顔無しである。要は面目丸潰れ。

さすがに武器破壊はやり過ぎたか……？

「ふ、ふふ……。解ったわよ、やってやろうじゃないの。あんたの剣がポツキーみたいに折れるほどの名剣を造ってやるわよ！」

半ば……。いや十割ヤケクソ気味に怒鳴り散らし、仮にも俺の愛剣がポツキーになる剣を作ってやると豪語されては黙っていられない。そのうち始解ができるまでである。

「ハッ、最高傑作(笑)が何回かキリトの剣に当たったくらいで欠けるなら無理だな」

ブチッ。ブチ……。ブチ？ なんだブチって。おおよそこの世界でもあつちの世界でも出ちやいけくない音だよ？

(……エイト、十分後に生きて会おうね)

キリト、なんで俺の死を匂わせる言葉を言った？ デスゲームである今の環境と、目の前にいるヤバい形相をしてる鍛冶屋が揃ってる今の状況じゃ洒落にならない。

「ふふふ……」

「ははは……」

獲物を狙う狼のごとく鋭い眼をし、ユラリユラリと近づいてくる名も知らぬ鍛冶屋。キリトはいつの間にかいない。

類は友を呼ぶ。なるほど、やはり鬼の友達は鬼だった。

さすがキセキの世代エースを有するバスケット部主将の言葉だけはある。確かにことわざは趣味で作られているわけじゃないわ。

「……出直してきます」

そして鬼が顕現したときの対処は三つ。逃げる。捕まったら土下座しろ。隙があれば迷わず逃げろ。間違っても抵抗はするな。あ、これじゃ四つだ。いや、同じことを二回言ってるから三つだな。

思考を割くかのように拳が飛ぶ。

容赦なく顎に当たる。

俺が宙を飛ぶ。

俺の意識も飛ぶ。

……なんで、アツパーカットなんて知ってたんだよ……。

最近、バイオレンスなことが多い気がする。

意識が覚醒したときに第一に思ったことがそれだ。

どこぞのラノベみたいのに、起きたら気絶前の記憶が消えているなどあるはずもなく、あとに残ったのは強制的に眠りにつかされる恐怖だけだった。ヤベエヨ、イママデトハチガウイミデ、ジョシツテチヨウコエエヨ……。

「ん、あれ？ あいつらが消えた……」

どうやら気遣いの欠片もなくそのままの状態で商店で気絶してい

たらしいが、ピンクと黒の色はもうない。武器作製のための素材でも  
獲りに行ったのだろうか。

こうなつては仕方ないから、出直すか……。

……それにしても、あのパンチ速すぎだろ……。

結局、キリト&鍛冶屋（どうも店主らしいので、恐らく名前はリス  
ベットだろう）が戻ってきたのは翌日だった。

昨日の敵は寒さ、今日の敵は暑さという状況に、とある鍛冶屋は苦悩している。

俺、比企谷八幡は情熱で赤くなっているという設定の千葉県公式キャラクターとは真反対の人間である。『押してダメなら諦めろ』。我ながらいい言葉を座右の銘にしているだけのことはあると、平塚先生（皮肉）や小町（皮肉）、更には雪ノ下（挽き肉）までもが言ったものだ。……て言うか最後、俺の座右の銘ミンチにされてるだろ。

現実の壁にぶつかつたら五十メートルもの壁をも破壊したどころの超大型巨人とは違い、迂回ルートを探すまで根性に染み付いている。言うなればジ○ンポジションだ。最前線にもいるしな。

とある漫画に、『諦めたらそこで試合終了ですよ』という名言がある。確かに間違つてはいない。

だが三〇さんは諦めなかったから勝てたのではなく、勝つべくして勝つたのだ。本当に諦める場面っていうのは、もう本当にどうしようもないときのことを言うのだ。……今の俺のように。

この敵は強大すぎる。

殴つてもびくともせず、剣で斬りつけても傷ひとつない。今までそれなりに研鑽してきたと自負できる剣技ですら弾かれる。

その敵の名は――

「……やっぱり壊すのは無理か？ 扉」

閉鎖空間。閉店状態になっている工房内から、鍵を開ける手段を持たない俺が出られるわけもなく、もちろん破壊不能オブジェクトである建物を破壊など――一応試みたが――できるはずなく、マジで閉じ込められた。

「……まさか、あいつらが帰ってくるまでこのまま？」

やだ、留置場に収監されてる犯罪者みたい。カーソルはオレンジじゃないけどね！

以下、延々と暇潰しの独り言が続く……。

（とあるソロ剣士のモノローグ）

「なあーに人ん家で寝てんのよ!」

「ブツ!」

六月下旬の今日のこの良き日、朝起きたら初めに見たものは人の足の裏でした。

「いてえな……」

「あんたが仮にも人の家で寝てんのが悪いんでしょ!」

「その人の家に閉じ込めたのは誰だよ。昨日俺にも予定あつたのにな」

宿屋で寝るといふ予定が。俺の睡眠時間を減らさないで欲しい。俺は別に守鶴の人柱力じゃねーんだよ。言うなれば不覚の人柱力だ。「どうせ寝てるだけだったんじゃないの?」

さすがに一年半もの付き合いとなればある程度相手のことが解るよううで、俺の休日スタイルをピタリと言い当てられた。

「いや、バカ、お前、睡眠不足はマジ命取りだぞ? つまり自分の命を護るために必要な行為であり、特に攻略組には必要不可欠なことだから俺は超攻略熱心だと言える」

「それならリズに新しい剣を造ってもらった後に一緒に攻略でも行こっか」

「あたしが今日もつかい素材取りに行くことは確定なのね……」

「は? 別にお前と一緒に素材取りに行く必要はないだろ」

「はー……、いい鉱石つてのは、大体マスターミスがいないとダメなの。昨日キリトと取りに行った奴も然り、ね」

ほー、今まで武器作製なんてお願いしたことがなかったから知らんけど、どうやらそうらしい。まあ鍛冶屋と戦闘職を兼業してやれるや

つはそういはずだから、一緒に取りに行かなければならない、つという条件は確かにシビアなんだろうな。でもな……

「……お前レベルどれくらい?」

「……六十半ばくらいね」

六十半ば。安全マージンを気にしなければ最前線クラス。気にするならば、五十五層くらいが限度だ。

「……ちなみに、鉱石を取りに行く層は?」

「六十層よ」

……かなりギリギリだな。いや、それ以前に……

「……と言うか、お前俺の剣造ってくれんの?」

「え? ああ、まあ一応お客様だしね」

「そこは一応なんだね……」

「まあ、俺の剣も造ってくれるつてのは解ったが……、今更だけど、キリトの剣を造らなくていいのか?」

一晩かけてようやく素材を手に入れたのだから、すぐに新しい剣を見たいはずだ。造られる側も造る側も。

「ああ、私、ちよつと予定あるんだよね……。まさか一晩もかかるとは思ってたからさ……」

用事。キリトの用事内容を予測するのは実に容易い。アスナと攻略もしくは出掛けるか、クラインと情報交換、エギルとレアアイテムの話、《鼠》になんか依頼でもされたかのどれかだろう。やだ、キリト検定一級を飛び越えてストーカー扱いされちゃう!

「キリトも新しい剣は一番に見たいでしょうし、そうなるそこいつとあたしで素材取りに行つてる間に用事を済ませてもらつて、あんたたちが揃つてる時に剣を打つしかないわね」

「……まあそうなるな」

ぶつちやけ馬が合わないこいつとパーティーを組むなんて仮想体の胃に穴が開きそうだが、致し方ない。SAOには精神安定剤とかないのだろうか。

「うん、それじゃあ二人とも、がんばってね」

ゆるゆるほわほわ手を振って店から出ていくキリトから逆振じさ



れたように沈鬱な雰囲気を漂わせる俺達は、とてもこれからパーティーを組む二人だとは思えなかっただろう。

「……で、その武具素材入手クエストが受けられるのはどこなんだ？」  
「ちよ、ちよっと待つて……」

ぜー、はー、と荒い息をしながら後ろを着いてくるリズベットさん——いや、しつくりこないからリズベットでいいや——で、リズベットが休憩要求をしてくる。仕方なくそこらに腰を下ろし、水分補給をした。

「昨日は寒かったし、今日は暑いし、もういや……。て言うか、キリトといいあんたといい、なんで全然平気そうな顔してるわけ!？」

お、おおう。そんな平気ではないぞ？　そこらからダメージは受けないただのオブジェクトだろうけど火柱が上がってるし、くそ暑いし。

「ま、まあこれよりひどい環境もあつたしな。……水飲むか？」  
「へえ、例えば？　……あ、水頂戴」

水筒をオブジェクト化し、リズベットに投げつけながら今まででも酷かった環境を思い起こす。……あれ？　暑さのせいとは違う汗が……。

「例えば……指」  
「はっ。」

「……ある日、俺はある隠しダンジョンを探索しててな、まあ当然ダンジョンの最奥にはボスがいたわけで……アイテムもレベルも余裕があつたし、ちゃんと転移結晶で逃げられるようにしてからボス部屋に入ったんだ。なぜか綱が張り巡らされてたな」

「ほうほう」

話してらうちにさらに克明にあの時の状況が脳内に描かれる。

「……そしたら部屋に入った瞬間下の地面が崩壊してな、張り巡らされてた綱……いや、糸に掴まって事なきを得たんだ」

「い、糸？」

「ああ、クリスタル無効化エリアだったのか、転移結晶が使えなくてな。そんで上を見たら足が八本に複眼が大量にある虫がいてな……。そいつがボスだったんだが」

「……………」

もはやなんのリアクションもしてくれなくなったりズベツトにも構わず、俺は語る。

「下は底が見えない深淵だし、足場指くらしいの細さしかないし、ボスは襲いかかってくるし……あ、でも糸は粘着性はなかったな。で、糸から糸に跳び移ったり、投剣スキルで攻撃したり……あれは軽業スキルなかったら落ちてたな、ハハッ」

俺が笑うことはあまりないと自負している。それでも笑ってしまふほどあれは酷かった。今でも笑えてくる。ハハッ（乾）

「あの、もういいから。充分よ」

それはありがたい。このあと特に語らないようなかったしな。ボスを倒したら地面が復活したってことくらいだ。

「……………行きましようか」

「……………ああ」

あのあとNPCの老人に、北にある《煉獄の山》というマップの主であるドラゴンの核……つまり心臓が目的の鉱石であることを教え

てもらい、クエストを受託したのが十分前。

「……なんか一際炎がすごいところに来たわね……」

確かに。松岡〇造もビックリの暑さだ。だが登場演出が派手なボスだとしたならばこれ以上にうってつけな場所はこの山にはないだろう。

「多分、ここで例のドラゴンが出てくるだろうから逃げる準備だけはしとけよ」

「はいはい。レア武器素材がドラゴンから取れるのってS A Oじゃ決まってるのかな……」

意味不明なことを呟きながら転移結晶を用意するリズベットから視線を外し、前を見据えると山からまるで噴火した火山のように火が噴き出す。

「キヤアッ！」

「どっか掴まっつけよ〜」

軽い感じに忠告しておき、山が動いていると錯覚しそうなほどに激しい揺れに備える。

——と。

「グオアアアオオアアアッ！」

まるで山全体に轟かせんと響く轟音。その振動によってかは判らないが、火の粉がパチパチと当たるがやはりダメージはない。

「来るぞー！」

呼び掛けた通りにこっちに突進してくる紅い影。さすがにこれを受け止めるのは不可能なため、リズベットを抱えてその場から離脱する。

「ちよっ！ あんたなにすんのよ！」

「黙ってる！ さすがに死にたくはないだろー！」

むしろ死ぬことより俺に抱えられることの方が嫌だとか言われたら、俺が精神的に死ぬ。材木座並みにキモい声を出して死んじゃう。

ドラゴンが地面に激突して散弾の如く飛び散った石の破片は《スピングシールド》で防ぎ、相手が自滅して動けないでいる間にリズベットをまた岩の陰に隠す。

「いきなりとかスゲエ驚いたぞこの野郎」

いくら索敵スキルを発動させてなかったからといって、ここまで不意を突かれたのも稀だ……が、逆に言えば、不意を突くことに長けているやつは不意を突かなければ勝てないということだから戦闘能力が欠けている。

「ギギヤアアアグアアッ！」

周りの火よりも遥かに赤い焰が視界を覆い尽くす。後ろにはリズベツト、避けられない。

「チツ……」

数少ない広範囲攻撃迎撃用武器防御スキルを使い、相手のブレス（多分）を霧散させる。

「……攻略組って、どいつも化け物みたいなやつなの……？」

後方から不本意極まりないことが聞こえてきたが今はスルー。多分タンクならこのくらいは防げると思う。ダメージディーラーだと……判らんけど。

鉄が赤熱しているかのような赤銅色をしている鱗……いや、あれは岩石か？ 俺と同じくらい大きい岩が何百個か無理矢理くつついて龍の形作っているようでかなり歪だ。

「ああいう敵には衝撃とか打撃が効くと相場は決まってるんだが……まあ、なんとかなるか」

見たところレベルは七十ちよいらしいし、俺でも十分なダメージは与えられるはずだ。

俺が初撃に選んだのは《ソニッククリップ》。時間を跳躍したかと思間違うほどのスピードで肉薄し、ライトグリーンの光が発せられる剣を振り下ろす。

「うつそく……」

うつそく……俺も驚いた。まさか片腕もげるとは……。腕とかを最低限に曲げたり、他にも色々工夫したから速さはそれなりだと思うけど、えく……。

「脆……」

いや、俺のメンタル並みに脆い。雪ノ下の口撃が物理化したら一発

K・O・されるんじゃないんだろうか。でも俺は口撃に耐えてるからあつちのほうが脆いな、うん。

右手の剣をペン回しするように弄びながら前を見据えると、超次元サッカーならぬ超次元バスケットのなかでも限られたものしか入れない……要は集中力百%状態みたいに眼が光っていた。つくづく思います。火○君は、誠凛のエースだ光と。……ドラゴンは○神君じゃないけどね！

アホなことを考えながらもしっかりと剣を構え、隻腕の龍との第二ラウンドに備えた。

最弱を自称する比企谷八幡でも、油断や慢心は少なくともある。

バーサク状態になった赤龍（ドライグさんではない）との第二ラウンドを告げる鐘は、相手の鋭利な剛爪と俺の薙ぎ払いが衝突した甲高い金属音だった。

お互いに攻撃できるのは片腕だけで、連続性には欠けるものの一撃の衝撃や轟音は攻略組とボスの戦いだからこそ起こりうる規模だろう。後ろでリズベットが悲鳴をあげているのを聞くともう少しくく攻撃を捌いた方がいいかもしれない。

受け止めるのではなく、受け流す。受け流すのではなく、紙一重で躲す。そうすれば、おのずと反撃の機会も増える。

「グギウアアアアアアアッ！」

「ッー」

だが、そんな俺の策略など知ったことかと言わんばかりに禍々しくも神々しい双翼を広げ、力のあらんかぎり突風をぶつけてくる。現実で体験した台風など比にならないくらいの強風。剣を地面に突き刺し、両手でしっかり握ってどこかに飛ばされないようにする。リズベットは岩のオブジェクトの陰に隠れているから無事なはずだ。だが……ただ単に風を吹かせるだけってのは、ボスにしてはお粗末すぎやしないか……？

まだなにかあるのではないかという杞憂は見事に的中し、顔の横を何かが通り過ぎた。

「……は？」

左頬に軽い痺れを感じ、それを認識した途端、痺れの原因を察した。――斬られている。

何かが通り過ぎた。それは解る。だが、まるで攻撃方法の識別をすることができなかつた。まずい。

「リズベットー！　すぐに転移結晶で離脱しろー！」

返事はなく、耳は風が吹き荒れる音しか捉えていない。この爆音で

声が掻き消され、指示が通らない。願わくはリズベットが自分の判断で離脱してくれているといいが……。

「いや、それ以前に俺もヤベエな……」

荒れ狂う嵐は俺に一步の歩を進めるどころか、自らの体を支えるため地面に刺さった剣から手を離すことすら許してくれない。

と、その時。悪いことは重なるもので、無理をさせ過ぎた愛剣が遂に半ばから折れた。

バキインツ！ と鳴った音は、この轟音と轟風の中でもよく耳に残る、剣の断末魔だった。

手から心強い相棒の姿がガラス片となって消えゆくのを見ながら、俺は遥か遠くに謎の攻撃に斬り刻まれながら吹き飛んでいった。

「……生きてる、な」

体全体がダメージエフェクトだらけでも、左肘から下が斬り飛ばされてなくても、生きている。

HPは残り403。実に三十分の一以下だ。山のどこまで落ちたのかは判らないが、俺の下にある火山灰がなければきつと死んでいた。つくづく悪運が強いらしい。

右手でポーチをまさぐりポジションを出す。そのまま飲み干そうと思ったが、ゴトン、と瓶を落としてしまう。別に怒りに震えているわけでも、武者震いでもない。純粋な死の恐怖からくる手の震えを無理矢理押さえつけ、口から液体を垂らしながらも一気飲みした。

「はあ……」

裾でポジションを拭い、改めて状況を確認した。武器は折れ、パティーのリズベットとははぐれた。確認したところ、どうやらここは

この火山の五合目らしい。……最悪だ。

リズベットとコンタクトするべくインスタント・メッセージを送るが……結果は送信失敗。

「……は？」

もう一度何処にいるかの旨を書いたメールを送るが、送った文と同じように返された文も同じ、『送信失敗』Sending failed。

可能性としては、ボスと俺が戦っていたときに転移結晶で逃げて、転移した街からそのまま転移門を使って他の層に行ったか、ダンジョンにいるか、もしくは……

「いや、落ち着け。パーティーの解除がされてないならあいつはまだ生きているはずだ……」

そう、早合点する必要はどこにもないと三回心のなかで唱え、平静さを取り戻す。鈍い銀色の長剣を装備し、深呼吸を数回。

——こんな事態になったのは、俺がああボスを侮り油断し慢心したせいだ。そのせいで俺が被害を被るならまだしも、他人リズベットを巻き込んでほならない。

——故に、俺にはリズベットを生かして帰す義務があり、それを放棄することは決して許されない。

もう、慢心はしない。最弱の俺にはそんなゆとりも余裕もない。

右腰に新たな重み。人前で使うのは初めての双剣スキルを使うことも決意し、火山灰が積もっている一帯から全力で走り去った。

索敵スキルを使つてできるだけ戦闘を避けながら山を駆け、それでも避けられない戦闘になったら双剣スキルで一撃で屠った。双剣スキルは既存のスキルで例えるなら刀スキルに近く、一言で言うなら



《一撃必殺》だ。

師範が一度だけ見せた双剣スキル……《クロスブレード》であらゆるMobを一撃死させ、頂上までひた走る。

「ハッ、ハッ……」

肉体的苦痛や疲労がないアインクラッドでも、精神的疲労とは別の、錯覚による擬似的な肉体的疲労はある。今回は山を駆けるという現実では果てしなく疲れる作業という認識が擬似的な肉体的疲労を与えているのだ。だが、今はそんなこと関係ない。

もつと速く。ただひたすら、早く着かねばならない。

NPCの老人の家があった八合目からリズベットと行動して約十分で頂上に着いたことを考えると、俺が単騎で五合から頂上まで行ったら……いや、計算するだけ無駄だ。

ただ、走れ。頂上に。

太宰作の小説じゃないが、ただ一つの義務を果たすため、疾走する。踏み込んだ足からは尋常じゃない衝撃波が発生し、足許の火山灰が爆散、煙が上がる。

六合目、七合目、八合目、九合目……ついさつき通った道をさつきとは比べ物にならないスピードで駆け抜ける。

攻略組も比企谷八幡の全力の速さというのは見たことがない。なぜなら全力を出す相手は一部の例外を除きボスだけであって、ダンジョン内にいるフロアボスはボス部屋にいるため速度が多少なりとも制限される。ゆえに、これが今比企谷八幡に出しうる正真正銘の全力。

めくるめく変わっていく景色を尻目に、遂にたどり着いた天辺。

「いねえ……」

この場合、危険な場所にはぐれたパーティーメンバーがいないことに安堵するべきか、いると思っていた場所にいなかったことを嘆くべきか……多分前者だろう。

だが……あの忌々しい龍は出てくるはずだ。今倒しても別に問題はないが、リズベットの安否が完全に確認していない以上戦っている暇はない。

そういえば、あのNPCの爺さんが少し気になることを言ってたよ  
うな気がする。

曰く、この山の北方向には火山灰に隠された洞窟がある、と。

年寄りの武勇伝は聞くに耐えないと思いつながらも全然本題に入っ  
てくれなかつたからな……。

街に帰ってるならメッセージを送ってくるはず……はずだよな？

一般常識だよな？ 俺だから送らないとか、そういうことじゃない  
よね？ ……うん、送ってくるはずだからいるとしたら近場のダン  
ジョンのはずだから、爺さんが言つてた洞窟が確率的には高いが……  
本当に俺が連絡を入れられないだけじゃないよね？

不安に心が押し潰されそうになったが、赤龍が出ないうちに反対側  
の北方向に行こうとまた足に力を込める。

遙か彼方から聞こえた龍の雄叫びが「あれ？ 誰もいない……」み  
たいな声音だったことは……うん、俺知ーらない！

仮想世界とはいえ、汗を掻いたらスポーツドリンクが恋しくなる。  
ポ○リでもアク○リアスでもなんでもいい。

そう考えると、葉山とかマジリア充。女子マネージャーに「タオル  
とスポドリです♪」って差し入れされてたし。なんだっけ、あの女子  
マネージャーの名前……確か名字には色が入ってたような……七色  
だっけ？ あと、名前は天然水みたいな……いろはす？ 七色いろは  
すって……絶対違うな、うん。そもそもいろはす透明だし。名前変だ  
し。比企谷八幡なんて名前の俺が言えたことじゃないけどね！

「クソツ、見つからねえ……」

火山灰を両手で掻き分け、ダンジョンを探しているが……これ下手

な隠れダンジョンより見つけないの難しくない？ サイゼリヤの間違  
い探しと同じくらい難しい。あれ未だに十個見つけたことないんだ  
よなあ……なんか店員さんに聞いたら負けのような気がするし。

荒い方法だが、ソードスキルでここらの火山灰を全部吹き飛ばして  
やろうかな……。

「おら……よっ！」

諸手を挙げているような姿勢から、一気に両手を斜め下に斬り下ろ  
すという実にシンプルな剣技《クロスブレード》。連撃数的に言うの  
なら一撃……いや、正確には二撃だが、双剣スキルの中でもクロスブ  
レードは上位にカテゴリーされる。

そもそも、双剣最上位スキルは本当に一撃必殺……なんだが、使  
いどころを見極めるのは困難だ。即死攻撃というわけでもないから、当  
たれば反撃を喰らわないなんてこともない。あくまで一撃の威力が  
デカイというだけだ。

さて、ここでクエスチョン！ 周りは一面に火山灰。そんな環境で  
威力のある必殺技ソードスキルを使ったらどうなるでしょうか？

答え、こうなります。

「げほっ！ げほっ！ おえっ！ 咳し過ぎて気持ちわりい……」

顔面唾だらけ。視界は皆無。「粉塵爆発ッて知ッてるかア？」状態  
だ。

「うえっほ！ げほっ！ げえ……」

ん？ 今俺より高い声が聞こえたんだけど……。

「うえっ……ダメ、もう、吐きそう……」

女子らしからぬ台詞を吐く、今は灰のせいで若干くすんでいる桃色  
髪をしている少女は……俺以上に凄い、うん、凄い顔でした。

……なんか、すいませんでした。

パーティーというものの重さを、比企谷八幡は改めて認識する。

俺のせいで火山灰にむせた？ リズベットは、当然のごとく俺に怒鳴り散らしてきた。

「あんたねえ、ちよつとは周りを考えてやりなさいよ！」

「そ、それは悪かった。ほんと、マジで。でも……お前、鏡見た？ ナニコレ珍百景みたいになってんぞ」

「鏡なんて普段から持ち歩くわけないに決まってるでしょ！」

別に俺の口から説明してやってもいいんだけど、その場合こいつが羞恥に悶えるか、俺が罵倒されて終わるかのどっちかだな。女の人のぐちゃぐちゃになった顔をジロジロ見るなんて、変態ツ！ みたいな。

「その、な？ 自分の顔をちよつと触ってみたらどうだ？」

「なによ、そのお年寄りが幼い子供が遊んでいるのを見てるような慈愛に満ちた眼差しは……」

あ、そんな眼してたの？ 俺としては過去の俺みたいに黒歴史によつて悶えるであろうお前に対して、お前も黒歴史を作るんだなあ……みたいな眼で見てたと思うんだが。

ペタペタ、いやヌルヌルと自分の顔を触るリズベットに対して、近くにハンカチアイテムを放り投げて一回洞窟を出た。俺、超紳士。

数秒後。洞窟内の反射も相俟って、物凄いポリウームの声が辺り一体を支配した。

……うん、ほんと、すいませんでした。

「ああー……、もうお嫁にいけない……」

「……なら婿養子でもとつたらどうだ？」

「そういう問題じゃないでしょ!？」

「ならどうい問題だよ……」

「男の人にあんな顔を見られたのが問題なんでしょうが!」

おおう……まさか、人間扱いされているとは……。僕、感激です。

「……すまん、ちよつと泣きそう」

「なんでよ!」

「いや、会って間もない女子から人間扱いされたのが久し振りすぎて……」

「……それ、ツツコミ辛いわね……」

いや、もうヒキガエルとか菌とか生ゴミ、グールなんかもあったな……そのとかもうすでにもの扱いだしな……。

「……それにしても、お前どうやってここに来たんだ？ 入り口なんて火山灰が積もって塞がれてたし、偶然入れるようなところじゃないだろ？」

「ああ……。……あのボスの暴風は、あんたが吹き飛ばされた後に止んだんだけど……」

「……お前に襲いかかって来たのか？」

首肯するリスベツトを見て、復活した左手で頭を搔く。その際被っていた灰が頭から落ちる。あんな巨大龍が襲い掛かって来たら、普段からモンスターを見慣れてる攻略組でもないかぎり足は竦むし恐怖で体は震える。大方そのまま攻撃を喰らって吹っ飛び、俺みたいになつたつてところだろうか。

「はあ……。まあ俺がいなくなつたあとの事態は把握した。で？ なんでお前はここに来れたんだ？ そもそもなんで転移結晶で街に帰らなかつた？」

「……使う暇がなかつたのよ。あと、ここへは蟻地獄みたいな流砂に巻き込まれて落ちたらいつの間にかいたの」

「なるほど。ま、アイテムを使う暇がないなんてのはザラにあるし、クリスタル無効化エリアなんてものも上層にはある。流砂つてのは少

し意外だったけどな……。俺が吹き飛ばされてからどれだけ時間が経ったかは知らんが、お前がここから脱出してないことを考えるに、ここはクリスタル無効化エリアだったんだな？」

「……あんたって、意外に聡いのね。驚いたわ」

「お前、もうちよつと年上を敬う心を持つたら？　学校の先輩に対してもあんたとかって言うの？」

後輩ってみんなこんな感じなの？　葉山とかすげえ甘い声でせーんぱいっ♪　とか言われてんのに。いや、そもそもヒエラルキーが最上の葉山と最底辺の俺を比べんのがおかしいんだけどね……。

「ちゃんと名前で呼ばれたいなら、もうちよつと年上の威厳とかを持ちなさいよ」

「はっ、そりや無理だな。なんなら年下の妹の荷物くらいしか持てないまである」

「妹は全員年下でしょ……」

いや、義妹だった場合は年上も有りうるけどね？　小町しか兄妹いないから、義兄妹なんかできないけど。妹は誰にもやらん、親父にもだ！

「さて、そっちはなんか訊きたいことないか？」

「吹き飛ばされた後、あんたの方はどうだったのとか、どうやってあたしを見つけたのとか、色々訊きたいことはあるけど……まずはその両腰にある剣について訊きたいわね」

あ、これ？　剣のグレードとしてはそんな高くないぞ？　最前線ですこれを使うにはかなりのリスクを伴うくらいのグレードだ。

「じゃあ、まず右の剣から……これは《ピースフル・デストロイヤー》って言う銘で……」

「いや、そっちじゃなくて。なんで二本の剣を腰に差してるのかってこと。っていうか、ピースフル・デストロイヤーって……」

完全にネタだよな？　言葉には出さなくても、リズベットが呑み込んだ言葉はアインクラッド城民なら予想できると思う。

ちなみにもう一振りの剣は《フライトニング・クラウン》と銘打たれている。恐ろしい道化って……。この二振りの剣の名前を合わせ

たら、平和を破壊する恐ろしい道化になるな。……本当に恐ろしいな。

世界を破壊するピエロを想像したら、確かに奇怪で恐ろしいイメージが浮かび上がってしまった。ていうか蛭子影胤である。

「……で、なんで両腰に剣を差してんの？」

「あ？ そんなの二本とも使うからに決まってるだろ？」

俺としては一番解りやすいと思う説明だったんだが、要領を得ないとばかりにリズベツトは憤慨する。

「だあかあらあ！ なんでソードスキル使えなくなるのにわざわざイレギュラー装備になる剣の二本装備なんかしてんのって訊いてんの！」

「説明が面倒だ。見たら解ると思うから、お前が嫌じゃなかったらもっかい頂上まで行こうと思ってる。もちろんお前が付き合う義務はないし、もしお前が頂上に行きたくないって言ってもちゃんと剣を二本差してる理由を説明する。もちろん護衛を担えなかったやつ言葉なんかアテにする必要もない。今回の責任は全面的に俺にある……悪かった」

自分の予定に付き合ってもらう以上、それも相手にとって危険な場所に連れていく以上無事に帰さなければならぬ。それが最低限の義務であり、責任だ。そして俺はそれを自らの油断と慢心で忘れていた。

レベルはあくまで戦いの勝敗を決めるファクターの一つであり、絶対じゃない。そんなことすら忘れていた。

命は一つ。無くしたら……否、亡くしたら帰ってこない。失ったものは戻らない。過ぎた時間は巻き戻せない。取り戻せるのなら、一体何人のSAOプレイヤーが助かり、命を取り戻し、失敗をなかったことにし、現実世界に帰れるのだろうか。それもifの話、なんら意味はない。

「うわっ、急に殊勝な態度になって気持ち悪……」

「おい、俺は結構真面目に言ったんだぞ？」

なんかさつきまで考えてたことがバカらしいじゃねえか。そして

凄い恥ずかしいんですけど。

「じょーだんよ、じょーだん。確かにこんな事態になったのはあんたのせいであっても、そもそも自衛ができるレベルじゃないのにここまですべてきたあたしにも非があるし……それでもあんたが責任を感じてるって言うなら、今度こそあたしを守ってみせてよね」

可愛らしいとか、綺麗とかではなくカッコいい笑みを浮かべ、右手を差し出してくるリズベット。

これは多分、あれだよな……。

俺も右手を出したら固く握ってくる。どうやら合っていたらしい。

「……戦場に身を投じる以上、絶対とは言えんが……解った。できうる限りお前の護衛を実行すると約束……する」

現実世界なら取るに足りない口約束。命を懸けるこの世界だと、この言葉の一つ一つにどれだけの重みがあるのだろうか。

どちらともなく手を離し、改めてリズベットが満面の笑顔を向ける。

「あたしは四十八層主街区《リンダース》にある鍛冶屋兼武器屋、《リズベット武具店》の店主、《リズベット》。改めてよろしく」

「ああ……。俺は最前線に身を投じるプレイヤー集団、通称《攻略組》に属するソロプレイヤー、《エイト》。こちらこそ……よろしく」

もう一度、固く、固く手を握る。

この時初めて、俺達は《パーティー》になれた……ような気がした。



かくして、彼と彼女はようやくボスを倒す。

とある漫画の台詞にある、「一時のテンションに身を任せるやつは身を滅ぼす」この台詞は言い得て妙だと思う。

一時のテンションとは、その時自分がしたかったこと、成したかったことを後先考えずすること。それには必ず何かしら代償が伴う。

今回のハイテンションな時に失われていたのは、最もポピュラーで馴染み深い感情……羞恥。

うおおおおああああああっ！ 恥ずかしい！ 何？ 約束つて？

一国傾城しちゃうのん？ 直ぐに討ち取られるわ！ 今日絶対宿屋のベッドで絶叫してやるううううう！！ 王様の耳はロバの耳イイイイイッ！

……はあ。

怒りが振りきれると逆に冷静になるように、羞恥も振りきれると逆に冷静になるらしい。

羞恥の度合いで言うなら、部室で自分の本音を暴露するくらいの恥ずかしさだ。

「はあ……」

こいつも同じ思いなのか、無意識のうちに口から出てしまった溜め息が被る。

もうやだ。あんだだけ大見得切つといてなんだけど、帰りたいたい。帰って思いつきり叫んで寝たい。

火山灰に足が埋もれて歩きにくいのもあり、足取りは重い。精神的にも肉体的にもこれは辛い。

本日三度の頂上の景色を見た感想は飽きた、だ。いくらスペクタクルなシーンでも、一日のうち三回も見たらそりゃ飽きるわ。

「グググウアアアアアアッ！」

こちらは今回で……何回目だ？ まあ、それほど印象に残らないということなのだろう。俺みたいに。で、龍が咆哮を上げ、何時間か前の状況をリプレイする。

リズベットは先程の戦闘を踏まえ、さつきよりも更に遠くに待機さ

せているから問題ない。

攻略組の一番槍、特攻兵、死兵とまで言われた灰色と紺色の剣士、サクリフアス《犠牲》双剣スキル。その全力を見たものは、中堅プレイヤーの鍛冶屋が初めてだった……。

side リズベツト

選ばれた……って訳じゃないけど、それでも全SAOプレイヤーのほんの一握りしか属していない、属せない攻略組の実力はあたしたちミドルプレイヤーとは一線を画すものがあった。

剣を二本持っているアイツ……エイトにとって、そのアドバンテージは大きい。両方の剣で防御するもよし、バランスを取って一本で攻撃し、もう一本で防御するのもいい。

通常、アインクラッドでは攻撃力よりも防御力が優先されがちだ。なにせHP全損＝死という等式が成り立つのだから。火力が足りないならパーティーを組めば充分補えるし、大きなダメージを与えられるプレイヤーなんて、極論を言ってしまうえば必要ない。ダメージが一通り通るのなら、バトルヒーリングスキルなどのスキルを持つやつなどの例外を除いて——他にも集中力の問題とかはあるけど——安全を第一にして長い時間をかければ倒せない敵はいないのだから。一撃死しない防御力が前提だけど。

でも、あたしの中の結論が昨日今日と出会った黒と灰色の剣士によつて覆われそうになっていた。

漆黒の剣士は猪突猛進。多分あれは自分が一番やり易い戦闘スタイルを突き詰めた型なのだろう……が、目の前の男の戦闘スタイルはいまいちよく掴めない。

このデスゲームで洗練されたのか、現実世界から研磨されてきたのかは判らないがとにかく巧いのだ。《閃光》と呼ばれ、最強と名高いヒースクリフに一对一で食い下がることのできる数少ないプレイヤーだと言われている友と同じくらい。

「グルルウアアアアアッツツ!!」  
「おっと」

今も急降下して剛腕を振るってくるドラゴンの真下に潜り込み、攻撃を回避。さらにソードスキルで火山灰を撒き散らして視界をゼロにする。あれもだ。

紙一重の回避のみならず、相手が巨体で隠れようがないと瞬時に判断し、お互いの視界を奪う攻撃をする。メリットデメリットの換算も早い。ああいうこともできなければ最前線では戦えないのだろうか？

さつきは判らなかつた一面。

アイツはさつきの戦いは慢心していて惨敗をしたと言った。でも今は逆に圧倒している。人は、気持ちの持ち方一つで強くも弱くもなれる。それをエイトは証明していた。

心。想い。強さ。

形作られるものじゃないし、眼にも見えない。でも……デジタルコードで作られたものじゃない、唯一無二のモノ。

温かい。

数字の羅列。プログラミングされたポリゴン。ただのデジタルデータ。

ほんの数日前までそう思っていたはずの、今触れている岩が、灰が、山が、世界が偽物だなんて、どうしても思えなくなっていた。

side out

今回の戦闘は、今までのように防御という俺にとって無駄なことはない。

今まで軽装備でありながら死の恐怖には打ち勝てず、中途半端な防

御となまじな回避が主な防御手段だったが、今回ばかりはそういう訳にもいかなかった。

今の戦いは俺だけの命が懸かっている訳じゃない。なまじ恐怖心のせいで真価を發揮できず死んじやいましたくなんて笑い話にもならない。

俺の思いに呼応するように剣が一際強く、神々しく光り、最初に右の剣、次に左の剣がドラゴンの胴体を真一文字に斬り裂く。

「グア……ア……」

体に張り付いていた？ 岩はぼろぼろと剥がれ、醜悪な、ヘドロのようにドロドロとしているような中身がちらほら見える。怒りと憎悪に満ちた瞳は、とても作られたそれとは思えない。

「グ……グルワアオオオオオオウウツツツツツ！」

HPは二本あるゲージのうち、二本目のレッドゾーン。今までで一番強力な攻撃が来てもなんらおかしくない。

無惨に切り刻まれている翼をはためかせ、先程と同じかそれ以上の強風。だが今回は少し違う攻撃も混じってくる。上体を仰げ反らせ、肺を膨らます。口からは赤々とした灼熱の炎。

「ガアアアアアアアアアアア！」

突風と火炎。現実世界の法則に則るなら、これが組み合わせたらより大きな爆炎が生み出されるだろう。

「チツ……」

あまり手の内を晒すのは好きじゃないが……仕方ない。

右の剣は横に倒し、左の剣を十字になるように重ねる。まるで弓を横向きに倒し、矢を引いているようなモーション。

二本の剣がライトエフェクトに包まれ、体がシステムの力に後押しされる。

投剣と双剣の複合スキル《ソード・アロー》。ライトエフェクトで形作られた弦を引き、思いつき引き絞る。筋力値に比例する上位スキルだ。

ソード・アローという名前はしているが、そのまま剣が射出される訳じゃない。剣が纏ったライトエフェクトが発射されるのだ。射程

はアローといえども本当の弓ほどはなく、——剣の世界だから当然だが——三々七メートルほどだ。それでも驚異的な射程なのだが……。

目には目を歯には歯を。遠距離攻撃には遠距離攻撃を。

シャイニングアローとかに改名した方がいいんじゃないの？と常々思っている光の矢……大きさを言うなら槍と炎の嵐が激突。一瞬の静寂の後、爆発する。敏捷極振りとはいえ俺の方がレベルは二十近くも上。さらに単発ダメージがデカイ上位双剣スキルということもあって、ドラゴン渾身の爆炎は掻き消された。

爆風で多少のダメージを負うのを省みず、片手剣重単発攻撃《ヴォーパルストライク》のモーションに入る。

巨体ゆえに隠れることができないという不利を背負っている巨龍の影は、視界が不明瞭な中でもしつかりと捉えている。クリムゾンレッドに輝く剣は、さっきの暴風と火炎の組み合わせ攻撃の赤よりもどす黒かった。

爆発の際に起こった嵐が原因か、それ以外の理由があるのかは知らないが……なんにせよ、地に降り立ち屹立する岩龍はこれ以上ないのだった。

光が増し、赤というより黒に近くなった剣を捉えたものは誰もいない。気付いたときには剣は深々と龍に刺さっている。

「や、やった……の？」

微動もしない龍を見て、リズベットが心の内から漏れたのであろう疑問を呟く。しかし——

「グガ……ギユ、ギユアアアアアッ！」

グリンツ、と長い首が曲がり、嬉々とした表情——見た感じだが——で俺の頭にかぶりつこうとしている。だが、甘い。

「二撃、目ッ！」

ヴォーパルストライクと途中まで全く同じ動きの双剣上位スキル《ツイン・ヴォーパルストライク》。

またシステムが体を動かし、左腕が稼働可能限界まできつく引き絞られる。左手の剣には憎悪と怒りが混じった色みみたいな炎のようなライトエフェクトが纏われている。

剣の先端が龍に触れたとき——その場に太陽が現れたかのような光に目がやられ、視界が白一色になる。

網膜を焼く光がなくなつて、目を開けたとき——ダイヤモンドダストのようにキラキラと光るポリゴン片だけが俺達の勝利を告げていた。

彼ら彼女らの時間は今この時だけ交錯し、いずれ離れゆく。

火山にできた擬似的ダイヤモンドダストが消えるまでこの幻想的な景色から意識を離れたのは、ボスを討伐したことによるリザルトメニューが出現した時だった。

「武器素材、岩赤龍の心臓……か」

オブジェクト化をすると、脈打つ漆黒の岩石が現れる。未だ龍が生きているかのように活発に動いているが、ついさつき俺が塵芥に変えたはずだからそれはない。

「おい、リズベツト。素材ってこれだろ？」

「ちよ、放り投げないですよ！ エイトみたいにバカみたいなステータスしてないんだから！」

バカみたいなステータスとはなんだ。筋力値ならアスナにも劣るぞ俺は。

「そもそも光を矢として飛ばすってどうゆうことよ……」

「ああー、確かにあれはチー……あ」

「? どうしたのよ」

あ、あれ? おかしいな、さつきこの剣たちを装備したときにはあつたのにな……。

「あ、あれ? さつきまであつた最前線でドロップした槍がねえな……」

「……ねえ、さつきあんたが使った光の矢? みたいなソードスキル使ってたけど、あれって弾を全く必要にしないの?」

「……そういえば、知らねえな……」

スキル一覧を開き、《ソード・アロー》をタッチする。

スキル名: ソード・アロー

一対の剣を弓のように構え、ストレージ内にある武器をランダムに選出し放つ剣技。威力は剣技を放つプレイヤーの筋力値と選出された武器の攻撃力に依存する。

「どうだったの？」

「……なんで今まで気付かなかったんだ……」

ストレンジ内武器からランダム選出して、それを矢として放つ剣技？ 数回しか使ったことないけど、まさかこんなデメリットがあると  
は……。

「……ストレンジ内武器をランダム選出して放つ剣技だよ」

「……地味に嫌なデメリットね」

やつべー、槍だったからよかったけど、それなりにレアな片手剣  
だったらかなり本気でへこんでたわー、つべー、まじつべーわー。

「ま、なんにせよ武器素材は手に入れたし……帰るか」

「……そうね。主に顔が灰まみれだし、さっさと帰りたい。あ、これ返  
す……わッ！」

さっきの意趣返しか、思いつきり心臓をぶん投げてくる……が、こ  
のくらい反応できなきや最前線ではやっていけない。飛んできた心  
臓を片手で驚掴みする。

「チエツ……ステータスもだけど、反射神経も化け物ね」

「反射神経なら多分、キリトが一番攻略組の中でも良いと思うぞ」

龍の心臓をストレンジに仕舞いながら、一度決闘デュエルした時の反応速度  
を思い出す。

なんだよ、完璧に決まったと思った攻撃がパライイされるとか……。  
お陰で逃げ回ることしか出来なかったよ？ 界王様にフリーザから  
逃げろと言われたような使命感で逃げたよ？

「……ていうかお前、今の投げた心臓俺にモロに当たってたらオレン  
ジになってたんじゃねえの？」

「あーら、そのときはどっかの双剣使いさんに贖罪クエストを手伝っ  
てもらおうから大丈夫よ」

「やだめんどい」

「……それが自分の適正レベルを越えた層まであんたの用に付き合っ  
てやった人に言うこと？」

「グッ……」

実際死にかけさせたのは事実だし、反論のしようがない。



「どちらにしても、あたしは今オレンジじゃないけどね」

あ、アブねー。あんなめんどいクエストは二度と御免だ。クリア目的がはつきりしていて、大体誰でもクリアできるのに時間が掛かるクエストなんてあれくらいじゃなからうか。

溜め息を吐きながら俯くと、六十層主街区《マグマ・カルタ》が見える。街名には突っ込むまい。

火成岩で出来ている街の建物は歪だが、古くからの歴史みたいな趣がある。なんか不死鳥とかを信仰してそうだ。……ドラゴンならいたけど。

「何時間か前にも来たけど、相変わらずなんというか……観光地として見る分には良いけど、住みたくないと思う街ね」

「それについては同感だ」

文明レベルとしては縄文時代みたいな街並みに、ファンタジー存在の転移門は浮きまくっているためすぐに見つかる。

「……なあ、前々から思ってたんだけど、転移門って擬似的どこでもド……」

「ファンタジー世界観が崩れるようなことを言うな！」

いってえ……いいじゃん、科学と魔術が交錯して人気を博してるラノベもあるんだから。あれタイトルとある科学の幻想殺しイマジンプレーカーが出ないのはおかしいと八幡思うんだ……。なんで禁書目録インデックスとか超電磁砲レベルガン、一方通行とかはあるのに肝心の主人公はタイトルにないの？ いや、一方通行カッコいいけどね？ アクセロリータとか言われてるけど。

「いい？ この世界はファンタジーなんだから、現実世界の文明の科学を持ち込んだじゃダメ」

「……何でだ？」

「何でって、そりゃあ現実世界を思い出しちゃうからでしょ。まあドラえもんはフィクションだし、現実の文明まで口に出さないってのは神経質過ぎるかもしれないけど……」

成る程、と思った自分をぶん殴りたくなる。

当たり前だ。今いる俺達はこの世界の住人。誰も彼もがそう思わないとやっていけないのだ。でないと、現実世界への帰還の願望で押

し潰されそうになってしまうから。

今のリズベットの言葉で、活を入れられたような気分になった。

——最近、現実世界に戻りたい、帰りたいとも思わず、家族に会いたいとも頭の中に浮かんでこなかった。

攻略には勤しんでいる。だが、S A O開始初期のような必死さは自分でも感じられなくなっていた。

薄々感じ始めている、このデスゲームの中の自分と、現実世界での自分エイトの乖離感。  
比企谷八幡

S A Oで攻略組として剣を取る勇敢な自分と、現実世界のどこまでも卑屈で陰湿で最低な自分。

どちらが本当の自分か、判らない。解らない。分らない。あるいはどちらも本当の自分なのか？ どちらも本当の自分ではないのか？

勇敢な自分を否定するのはインクラッドで一年半以上過ごしてきた自分を否定することと同義だし、最低な自分を否定するのもインクラッドに来る前の十七年間の自分を否定するのとイコールだ。

ならばどちらも本当の自分だといえるかと言えばそうでもないのだ。お互いがお互いの存在を認めない、二律背反。ジレンマ。正反対の性格はお互いを決して認めやしない。

どちらも違うというのなら、俺とはなんだ？ 俺はどんな信念を持ち、何を欲し、何を為そうとした？ 行動原理は？

世界で一番理解していると思っていた自分自身が理解できなくなっていく。

「——ト」

いや、そもそも俺は俺自身を理解できていたのか？ 心は見えない。見えたとしてもそれは欺瞞に他ならない。人は、本当の意味で心の内を伝えうる手段を持たない。

「——イト」

いや、違う。例え上辺しか解らなくとも、それは俺が思っていたこととはずだ。自分の心さえ解らなくなったら、人は何を信じたら良いのか、信じるべきはなんなのか。

「エイト！」

「うおっ！ ……なんだよ？」

「エイトが工房に戻ってもなんの反応も示さないからでしょー？」

深々と溜め息を吐き、いかにも呆れてますみたいなポーズを取っているリズベツトを見て、思考の海から無理矢理引き揚げられる。

「そういえば、あたしまだキリトとフレンド登録してなかったんだけど、エイトは？」

「……まあ、一応してる、けど……」

「そ。じゃ、連絡ヨロシク。あたしは作製の準備するから」

「へいへい……」

キリトに用事が終わったなら鍛冶屋集合の旨のメールを送り、ウエイターみたいな格好をしているピンク頭をキモがられない程度に見ているのだった。

「……ナンデオマエマデイルノ？」

「ひ、酷いよハチ君」

黒の剣士を呼んだら白の細剣士まで召喚された件について。鬼の同伴より妹同伴しろよ。絶対売れるぞ。

「え!? エイトとアスナって知り合いだったの!？」

知り合いというか上下関係だよ。こいつの言うことにあまり逆らえた試しがないもの。

着実にヒエラルキーが構築されつつあることに身震いしていたら、急にリズベツトがニタァーと笑って訊いてきた。

「ねー、エイト。あんたアスナとデュエルして勝ったことあんの？」

「ちよ、ちよつとリズ！」

慌てふためくアスナが必死にリズベットを捕らえようとする。  
……なにこれ、言った方が良いの？ 言わない方が良いの？ キリト  
を見たら「まあいいんじゃない？」みたいな顔してるから言っちゃっ  
ても良いか。

「……まあ、一回だけならある、けど……」

言うのと、さらに笑みを深くしたリズベットが一步こちらに詰め寄っ  
てくる。

「デュエルはどのくらいで決着が着いたの？」

「え、えく……どんくらいだったか……？」

「……アスナとエイトはどっちもスピードタイプの剣士だったし、確  
か五分十分だったと思うよ」

あのデュエル唯一の観戦者のキリトが答えると、リズベットは怖い  
ほど笑みを深め、アスナはトマト並みに顔赤くした顔を両手で覆って  
いる。

何この状況？ とキリトにアイコンタクトで訊ねると、キリトも私  
が教えてほしい言わんばかりに首を振る。

一回工房裏に消えた二人を見送り、次にキリトと目を合わせる。

工房裏から出てきた二人はどちらも赤面していて、赤と白の副団長  
とピンクの鍛冶屋に今度は黒のソロプレイヤーが呼ばれる。

赤面病は伝染するものなのか、次に出てきた三人の顔は全員赤かつ  
たとき。何がめでたいのか判らないけど、めでたしめでたし。

……うん、なんでもいいから早く武器作らない？

カーン、カーンと鎚が鋼材を叩く音が工房内を支配する。まずはキ  
リトの剣だ。アスナは血盟騎士団員になんか引き摺られていった。

多分リズベットの安否確認だけヒースクリフに許可をもらってしに  
来たのだろう。もしかしたら昨日もキリトと行動して、俺が工房から  
去った後に同じことがあったのかもしれない。

俺が獲ってきた素材とは真逆の白銀の素材は赤く染まり、リズベッ  
トが一回一回叩く度に剣に近い形へと変貌していく。

武器作製をしている瞬間をこれほど間近で見るのは初めてだが、な  
かなかどうして迫力がある。

十回ずつ数えていた二十四セット目……つまり二百四十回を越え  
た辺りで、今まで叩いたら散っていた光とは比べ物にならないくらい  
に発光する。

数秒かけてオブジェクトのジェネレートが完了し、目に入った剣は  
素材と同じく白銀。

ワンハンド・ロングソードにしては華奢。横からみたら刃は薄く、  
細身だ。まるで氷で出来ているかのようで、わずかに透き通っている  
ようにも見える。ただ、刃の色は白、柄の色は青が入った銀と、ちゃ  
んと色も入っていた。

「さて、コイツは取り敢えず後にして……次はエイトの剣ね」  
「ああ……」

すでにオブジェクト化をさせていて、未だドクドク脈打つ龍の心臓  
を手渡す。

そこからキリトの獲ってきた素材と同じ工程を踏むが、台に乗せら  
れた素材は色が何も変わっていないかった。が、リズベットは何も言わ  
ずにまたハンマーを振り始めたのを見るに、どうやらこれで良いらし  
い。素人の俺達が口を出すわけにもいかず、黙って見守る。

肃々と鎚を振り続けて、キリトの剣と同じかそれ以上の時間が経っ  
たとき——前触れもなく、闇……黒い光が剣から溢れ出た。

夜にブレーカーを全て落としたかのような暗闇が目を覆い、部屋の  
電気がついたと錯覚したような光が眼を差すと、その黒さが一層際  
立った。

柄、刃、刀身、峰などの部位の区別はなく、漆黒という言葉すらコ  
イツの黒さを表すには足りない。ブラックホールのように底知れな

い深淵の色。

俺達三人は全員唾を飲む。

「それじゃ、剣を視るわよ……」

「……うん」

キリトの返事を合図に、リズベットが剣の鑑定をする。

「キリトの剣の銘は『ダークリパルサー』……暗闇を払う者ね。あたしが初耳ってことは、今のところ情報屋の名鑑には載ってない剣だと思  
うわ。次——」

次に俺の剣に触れ、ポップアップウィンドウを覗き込んでいる。

「……こっちの銘は『トレイター』。反逆者……かな？ こっちもあたしは知らないわね。——どうぞ、試してみて」

キリトにダークリパルサー、俺にトレイターと銘打たれた剣を順番に渡し、一步下がる。

一つ頷き、剣の柄を握る。が、キリトは問題なく剣を持ち、左手を振ってメインメニューから白い剣をターゲットしてシステム上も自分の物にしたのに対し、俺は剣を持つことすらできない。

二人が怪訝そうな顔でこちらを見てくるのに対し、なんでもないと視線で言い、気合いを入れ直して剣を握る。名前の通り天の邪鬼な剣らしい。

俺もキリトのように剣をシステム上で自分の物とし、二、三回振るう。柄の握りやすさにも、重さも問題はない。けど、振りにくい。剣そのものに拒絶されているようだ。

「——どうっ？」

無反応な新しい剣の持ち主×2に不安を抱いたのか、満足気な笑顔を浮かべる黒の剣士と苦悶の表情を浮かべる灰の剣士（笑）が同時に答える。……自分で自分を灰の剣士（笑）って称するのは被虐的すぎるな……。

「重くて良い剣だよー」

「……名前の通りの剣だよ……」

明確に良い剣だと称するキリトに、良い剣か悪い剣かすら判らない微妙なコメントの俺に、手放して喜んで良いのか複雑な顔をする。

「……良い剣過ぎてまだ俺には扱いきれないってことだよ」

「そ、そう！ それならよかったわ！」

喜色満面のリズベツトさんとは裏腹に、剣を持つことに全力を尽くして内心汗まみれな俺。重さは感じないのになぜこんなに剣を支えるのが辛いのか。

なにかをポツリと呟いた（ように見えた）リズベツトの声は聞こえなかった。……別に俺が難聴だからじゃないよ？

「さ、剣も作り終わったし、どっかで乾杯しよ！」

言うなり、スキップでもしそうな足取りで店を出るキリト。……いや、お代とか鞘とかどうすんの、アイツ？

「行っちゃったわね……」

「ああ、悪いな……。取り敢えず、二本鞘を見繕ってもらえるか？」

「分かったわ。……にしても、剣のスペック的にはダークリパルサーはキリトの持つてるエリユシデータと変わらないのに剣が二本いるってことは、キリトも双剣スキルを使えるの？」

「知らん……。けど、多分その可能性は低い。ただ単に予備じゃないか？」

あのクエストは危険性もさることながら、クリアしたとしても人間性を喪うことから、クエストを教えてもらった情報料はちゃんと払い、訳を話して誰にも教えないことを《鼠》に頼んでおいた。アイツは真面目なことだと秘密は守るからな……。

「ふーん……。あ、これ」

漆黒の鞘と、ダークグレーの鞘が差し出される。それを両手で受け取り、ダークグレーの鞘はトレイターを収めて、黒の鞘はそのままストレージに仕舞う。

「よし……。で、お代は？ もっかいキリトを呼ぶのは面倒だろうし、俺が全部払っとく」

そしてキリトの分の剣の値段を二倍にしてキリトに渡せば……と、考えていたが却下。あの天使を人の薄汚さに触れさせてはいけない。清水に泥水を入れるようなもんだ。

ただ、二倍にしてキリトに売ろうがそのままの値段で売ろうが、

どっちにしても関係なくなることを目の前の少女は言った。

「お金は、いらない」

なんだと!? と柄にもなく(心の内で)叫んだ俺を責められる奴はいないだろう。ていうか周りには俺とコイツしかいないし。

ピンクの髪からもまん好きの武偵を連想して、代金の代わりに奴隷にされちゃうのかなとか、かなり鬱な気持ちで考えていた。

「そのかわり……」

「その、代わり……?」

死刑宣告を待つ囚人の気分である。もし本当に奴隷になれば、って言われたら、「よし解った! 言い値で買おう!」って言おう……。

「あたしを、エイトの専属スミスに「よし解った! 言い値で……」ホント!」

あれ? いまりズベットが言ったことのなかに奴隷という単語がなかったよ? 代わりに俺の両肩を掴んで眼を輝かせてる鍛冶屋リスベットがいるし……。

「ホント!? ホントにホントよね!」

「う、うん。ホントにホント。だから体を揺らすのをやめろおお……」

脳味噌がスクランブルエッグならぬスクラップエッグにされる。

あれ? 上下感覚が、失われて、きたよ?

「あつ、ゴメン」

「全くだよ……」

頭のなかでまだ残っている不快感を感じながら、改めて言われたことに対して考える。

専属スミス。キリトが前になんか話していた気がするが、俺には縁がないので生返事ばかりかをしていた。

よって、俺の専属スミスという認識は、ダンジョンに出会いを求めらる少年と魔剣を造れる鍛冶屋の関係性でしか判断できない。

「二人とも、なんで来ないの!」

俺達が着いてきていないのによく気づいたらしいキリトが、今度は俺達の裾を掴まんで引っ張っていく。



人の関係は目眩く変わっていく。まるですぐに過ぎ去ってしまう流れ星のように。人の関係は停滞することはあっても、変わらないなんてことはないのだ。

他人から知人へ、知人から友人へ、友人から親友、親友から恋人へ、恋人から婚約者へと関係が深まることもあれば、その逆も然りである。

ならば、現実世界で一回も会ったことのない俺達は、一体なんなのだろうか。

他人にしては関係が深すぎ、友人とは言えない。知人ではあるが、俺はこいつらの一体何割を理解できているのだろうか。

ズルズルと続いているこの世界で会った奴との関係。曖昧模糊とした関係だが、悪くないと思っっている自分がいる。

せめて、この世界にいるときだけは、俺とは違い心底性格がいいこいつらと関わることを許されるのだろうか。

ならば、現実世界に戻ったとき、こいつらと俺の関係は消え行くのだろうか。

それは、誰にもわからない。いつまでも続く関係はない。続いていた関係は、いずれ終わりが来る。

ただ、それでも、今は。

今ある関係を保とうとしてもいいはずだ。

この世界で0から築いた関係は、少なくともこの世界にいるときだけは間違っていない……はずだ。

徐々にその時は迫り、剣と戦闘の世界に不穏な空気が流れる。

剣戟の音が空虚に響く。

弾く。避ける。斬る。躊躇など一切ない、殺し合いの動き。一歩間違えばこちらが死ぬ、戦いの場。

目の前には狂った笑みで斬りかかってくるモノ。憎々しいまでにつり上がった口端からは、獣のように舌が出ている。そこに理性の欠片すらどこにもない。今この場にいる全員は皆そうだ。

俺は飛びかかりとともに振るわれたそいつの剣を上弾き、カウンターの突きで体を斬り刻む。

狂気。

それだけがこの戦場を満たしていた。

あるダンジョン内で繰り広げられる狂宴の乱舞は、誰にも終わりの見えない泥沼と化していた。

狂宴の数日前の八月中旬。十九歳の誕生日を終えて少しの日。俺はじやじや馬な相棒を手懐けるため、五十代の層で戦闘をしていた。「えーっと……切れ味確認だから、取り敢えず盾、防具、鱗があるところ、鱗がないところの硬いところから順に斬つてくか……」

切れ味確認の実験道具として扱われていることを理解し、明らかに嘗めた口調に聞こえたのか、切れ味確認のターゲットにしている実験<sup>リザードマン・ガーディアン</sup>物が大振りに剣を振る。

軽く地面を蹴り、体を三十センチ右に移動するだけで曲刀は勝手に

空を斬る。俺に届いたのは剣が動いたことよって起こった風だけ。

赤い瞳がギョロン！ とこちらを睨み、牽制してくるが構わず  
円盾を斬ると……盾もろとも、相手の左腕が絶たれた。

「……は？ year、ない、これはない。疲れてんのかな……」

日本語にしたら全く関係ない英語を口にしてしまった上に悠長に眼を擦ってしまったが、今は戦闘中。今度は横薙ぎに振るわれる曲刀が見えなかった。まあ、防いだけど。どんな攻撃か判ってるのに防げない道理はないし、見なくてもどこから攻撃が来るのか判るほど気配が駄々漏れだ。

ていうか、防御したのはこっちなのに、相手の剣が折れるとかどういうこと？ リズベットさん、この剣、固さも半端ないんですけど……。

新しい剣に慣れるためとはいえ、百体乱狩りというのはなかなかどうして辛いものがあつたが、お陰で大分この武器を扱えるようになってきた。低層から順に上の層、上の層と上って今は五十代の階層。我ながらこの二ヶ月努力したな……。

女尊男卑の風潮が広まる切っ掛けになつた某宇宙用スーツではないが、剣がこちらのことを理解……と言うより認めてくれているように感じる。正解は出来なくても始解は出来ちゃうレベル。いや、でも浅打のままでもいいかも……。

少しばかりの達成感に満足しながら歩いていると、転移門までの最大の関門……メインストーリーに突入する。

俺みたいなのが好きな雑踏の中を歩いていると、多少なりとも人の声が入ってくるもので、ちらほら共通して聞こえてくる話題が

あった。

「ラフコフの野郎共に殺られた中層プレイヤーがまた出たんだとよ」

「マジか!? トチ狂った奴らの考えることはわかんねえな。人殺して何が楽しいのやら……」

「ああ、理解できねえな。あいつらのせいで一体何人が死んだのやら……」

今やアインクラッド中にその名を轟かせている笑う棺桶ライインコライイン。S A O 史上最凶最悪の人殺し集団レッドギルド。誹謗中傷などされても文句の言えないことをしているのだから、悪態吐くやつらがいない方がおかしいのだ。

「チツ……」

ただそれでも気に食わないものは気に食わないので強く舌打ちを一つ。別にラフコフの奴らを擁護する気など微塵もないが、目の前の人死んだのを見たこともないような奴らが知ったような口で人の死を語るのも苛立たしい。それも軽い口調でただ話のネタとしているだけの奴には不快感すら覚える。

……暇だし、五十代の階層繋がりで、エギルの店でも行くか……。怒りと不快感を溜め息とともに吐き出し、雑多な街の中にある店にしては心落ち着く店を目的地に定め、この居心地悪い空間から早く抜け出すためにいつもより早足で転移門まで歩いた。

「ウースツ」

「……いつも言ってるけどな、客じゃない奴にいらっしやいませは言わないぞ」

「いいだろ、この時間帯はどうせ閑古鳥が鳴いてるだろ? もうちよ

い立地を考えた方がいいと思うぞ」

「お前……。はあ、コーヒーでいいか？」

こめかみをピクピク動かしていた筋骨隆々の雑貨屋店主は諦めたように深々と息を吐き、飲み物をストレージから出す。……巨大な男がこめかみをピクピクさせたのつてめっちゃこええ……。

「ほら。どうせお前は甘くするんだろ？」

砂糖&ミルクを出す辺りエギルも俺の好みを理解してきたようだ（コーヒー限定）。遠慮なく大量の砂糖とミルクをぶち込み、黒のコーヒーが薄茶色になるまで入れ続けた。それを一口。ちょうどいい。

「ん」

「おう」

これもいつも通り。暇を潰すアテがない時にエギルの店を使わせてもらう代わりに、いらぬ素材を安く買い取ってもらうのだ。客と店員ではなく、ギブアンドテイクの関係だ。こういう雑貨屋には掘り出し物があるかもしれないし、色々なものがあるから暇潰しにはもってこいの場所だ。

「まあそれにしても最近の話題はラフコフのことばかりだな。最近活動がまた活発化してきたらしいから無理はないが……」

「……いい加減対策なりなんなり、攻略組が本腰あげて考えなきやならんかもな。むしろ遅すぎたくらいだ」

俺は四ヶ月前の四月と、それよりも前にラフコフ幹部プレイヤーの二人と戦い、まあどちらもなんとか勝利した。……のだが、あの後からラフコフの活動が少し沈静化したのだ。

普通なら喜ばしいことなのだろう。だが、俺にはどうしても嵐の前の静けさにしかな思えなかった。思えば、あれは攻略組に今は敵わないことを悟つての準備期間だったのかもしれない。

そして、今。

準備期間を終えたラフコフは全SAOプレイヤーを震撼させるほどの猛威を振るっている。

そこまで考えていると、険しい顔つきで俺を見ている巨漢の顔がカウンター越しにあった。お互い立っているので、十センチ近い差があ

る本当の上から目線で厳ついおっさんから険しい顔をされたら睨まれているようにしか感じない。

「確かに、攻略組でも本格的にラフコフに対処せねばならんが……エイト、気を付けろよ？ ラフコフ幹部二人と戦って打ち勝ったお前は、特に恨みを買ってるだろうからな」

「……そうかもしれないが、過剰にビビってもしょうがないだろ」

「ま、それもそうだ。要は気を付けておいて損はないってことだ」

そう結論付けたエギルは俺の今日の戦果の勘定を終えたのか、小ぶりの袋を置いてくるので袋の口の近くを掴む。

「リザードマンの鱗が三十一個にレアドロップ品の剣が三本。締めて十万五千三百コルだな」

「あいよ」

トレード欄に鱗と剣を全部セットし、OKを押す。振り込まれた十万五千三百コルが自動的に俺の所持金にプラスされたのを確認してからウインドウを閉じた。

「毎度あり。……お前、今日このあとどうするんだ？」

「あー……まあ今日はもう狩りに出ないから、多分リズベットのところに武器をメンテしに行くと思う」

「そうか……。……なあエイト。実は今日ある会議が開かれるんだが、知ってるか？」

極甘コーヒーを飲み干し、店を出ようとしたところに投げ掛けられた質問をエギルに向き直し、首を横に振りながら答える。

「いや、知らんな。なんかあんの？」

「実によくない話なんだが……今日、攻略組も本格的に対応するそうで、《第一回ラフィンコフィン対策会議》が開かれる……らしい」

いつものことながら、比企谷八幡はあらぬ噂を流されている。

現在の最前線である六十九層のテーマは浮遊都市。浮遊城のなかに更に浮遊都市があるのは若干の疑問があるが……まあ、単にテーマとしてそうなるだけだから気にする必要はないだろう。

——《第一回ラフィンコフィン対策会議》、か。

当然いつかはあるだろうと思っていたが、少なからず攻略組もラフコフによつて殺されている今の状況は流石に看過できないらしい。

情報収集役としてグリーンとして圏内に潜伏しているラフコフメンバーもいるため、会議をすること自体機密にしなくてはならない。つまり、会議の存在を教えられなかった俺はラフコフメンバーと疑われていることになる。

「胸糞悪いな……」

大方俺を気に入らない大手ギルドがそんな噂を流したのだろう。それもあからさまではなく、匂わせる程度に。人は噂が大好きであり、尾ヒレ背ヒレ胸ヒレがついて誇張されるのなんかザラ……どころか必ずされる。

別に悪意や害意に晒されるのはどうでもいいが、このハッキリしない感情を向けられるのは、嫌というより気持ち悪い。

最前線だからいるのは攻略組が大多数を占める。噂を知っているやつが多い。視線が突き刺さる。

「はあ……」

人の噂も七十五日とは言うが、この噂はラフコフを淘汰しなければ消えないんだろうなあ……と陰鬱な気持ちを抑えず、最近の寢床である宿屋を目指した。

「——それじゃ、第一回ラフィンコフィン対策会議を始めたいと思う」  
分厚い鎧に身を包む大男——シユミットが司会を勤める会議は、今正に始まろうとしていた。——が、進行は二人の剣士にさっそく遮られた。

「(ち、)ちよつといいですか？」

一人はハキハキと、もう一人はどもりながら今この時だけは立場が上な大男に訊ねた。

「なぜハチく……エイト君がいないんですか？ 彼のレベルはトップクラスだし、実力も申し分ありません。呼ばないのは不利益しか生まないはずですが」

八幡本人は否定しているが、ヒースクリフ、アスナ、キリト、エイトは攻略組の中でも隔絶した実力を持っている。それはすなわち、アインクラッド最強の一角を担っているのだ。故に戦いになるかもしれないのに特記戦力となる八幡がこの場にいないのはおかしい。そう思つての発言だった。

シユミットは大きく頷き、アスナだけでなくこの場にいる三十名近く全員に聞こえる声で答えた。

「ああ、ちよつどその事を話そうと思つていた。——今この場で、彼について知らない人はいないか？」

質問の意図が解らない、と、まずアスナは思った。ただシユミットのニュアンスは八幡という人がいるのを知っているかという意味合いではなく、もつと他のことを訊いているとアスナは悟る。

手を挙げている人は疎らながら確かにいる。先程と同じように力強く頷き、できるだけ真面目な雰囲気を出そうとしたのか低い声で話し始めた。

「端的に言つと、エイトはラフコフメンバーの疑いがある可能性がある」

ざわつ、と空気が揺れる。ひそひそと話す声は明らかに非難の色が



込められ、話を拡大しているのが明らかだった。

「……ちなみに、根拠は？」

爆発しそうな怒りを押さえ、できうる限り平坦な口調でアスナは訊ねた。キリトも右手を剣の柄とズボンのポケットの間をさ迷わせている。

「今から話す。……今年の三月、あるプレイヤーからエイトがあるダンジョンでラフコフのスリートップと密会してたとの報告があった」  
数十秒前より大きなざわめきが室内を覆う。実際には戦闘がすぐ始まったもおおしくなくらい一触即発な空気の中での挑発のし合いだっただが、会話が聞こえなかったあるプレイヤーはそんなことに気づかなかつたらしい。

人は噂というものが大好きで、一人に言ったら百に広がる。おまけに誰が噂を流したのかを聞いても、誰もが『噂で聞いて……』としか答えないとは八幡の言葉だ。聞いたときはあまりピンと来なかったが、今この状況を見ると納得するしかない、とアスナは思っていた。  
「そ、その情報の信用性は？」

キリトは震える声でシュミットに訊ねる。人と話すのが以前に比べ得意になったとはいえ、あくまで以前に比べて、だ。未だそのコミュニケーション能力は人並み以下なのだ。

「ない。……が、その情報が本当か嘘かのメリットデメリットを考えると、エイトを呼ばないのは当然だろ？」

あなたも四ヶ月前にラフコフから助けられたくせに、よくいけしやあしやあと。つい口を利きそうになったがグツと堪えた。

八幡の英才教育？ のお陰で、こちらにも何の証拠もないのに何を言っても無駄だと理解しているのだ。

忸怩たる思いで強く唇を噛み締め、少し俯きがちに後ろに下がった。

「よし、それじゃあ——」

しかし、司会進行役のシュミットの声はまたも遮られる。室内の誰かが声を発したわけでも、無礼暴れたりしたわけでも——アスナとキリト、クラインはその一歩手前だったが——ない。

ならば何が遮ったのか……何てことはない、ただの扉の開閉音。ならばなぜ、歴戦の猛者たる攻略組が驚いているのか？ 理由は二つある。

一つ、攻略組は会議の存在自体を隠蔽するため、信用できる攻略組にのみ会議場所を教えた上でこの宿屋を貸切状態にしたのだ。なのに、ここに入ってきたものがいるのが一つ。ちなみに貸切状態とはいえ、貸し切る前に宿屋の部屋を取っていたら普通に入れることを誰も知らなかったのが原因だろう。

二つ、そして今宿屋に入ってきた人が、先程話題沸騰？ していた比企谷八幡その人だったからだ。

俺にとってSAO内で唯一心安らぐ場所である宿屋。そんな場所に攻略組が全体の半数以上がいたら意識が一時停止してもおかしくはないだろう。

ようやく俺のそこそこハイスペックな脳が再起動をしたとき、敵意ある視線で睨み付けられる。

血盟騎士団、聖竜連合がボス攻略以外で同じ空間にいるのは珍しい光景だ。最強ギルドと最大ギルド、お世辞にも仲が良いとは言えないからな……。

まあアスナが緩衝材になってなんとか衝突せずに済んでいる二大ギルドはさておき、今俺が考えるべきはこの状況だ。

どれくらい確率か、どうやら俺が部屋を借りている宿屋とラフコフ対策会議の会場が被ったらしい。そして、そこにラフコフメンバー容疑者エイトが突撃してしまった、と……。

あ、いつけね、なんか会議中の場に入っちゃったアハハくでは済ま

されないことくらい解る。敵だと疑っているやつが敵の対策を話し合ってる場に入って、笑って済ませるなら警察はいらない。アインクラッドに警察いないけど。強いて言うならば軍か。……じゃなくて。

逃げればラフコフと確定され、真実を話しても恐らく……いや確実に信じてもらえない。かといって何もせずにといたら噂は広がり、真実如何に関わらず、事実上俺はラフコフということにされる。

この会の代表者なのか、四ヶ月前とボス攻略以外で話したことのないシユミットが近づき、俺の前まで立つと一つ問うた。

「……なぜ、お前がここにいる?」

「……別に、お前らを害そうとか考えてねえよ。単純にここの部屋を借りているからだ。ほら、部屋の鍵」

さすがに物的証拠——システムの証拠かもしれないが——を出したらひとまず納得したのか、目に見えて睨むのはやめた。あくまで目に見えて、だが。

「……ちようどいい。もう一つ訊きたいことがあったんだ。——単刀直入に訊こう。エイト、お前はラフコフなのか?」

本当に単刀直入だな。もう少しオブラートに言えないの?

場違いにそう思ってしまうほど遠慮も何もない問いだった。まあ、体育会系らしいと言えづらいが……。

「違う。俺はラフコフメンバーじゃない」。……俺はこう答えるが、それでお前らは俺の言葉を信じるのか? 信じないだろ? だから訊くだけ無駄なんだよ、こういうのは」

静まり返る室内。噂をいくら否定しようとも、そんな信憑性のないことを信じやしない。なぜなら、その方が面白いから。

噂なんてものは、人が誰かを貶めるか人が誰かで楽しむかから始まる。だから、本人の話なんか聞きやしない、信じない、受け入れやしない、なぜなら、その方が面白いから。

そして誰が噂を流したのか聞いても、誰もが『知らない』、『皆が言っていたから』、『噂が流れてるから』と答える。

そのくせ信憑性も根拠もないという点では同じなのに、本人が言うことは信じない。

諸悪の根元を突き止めることすら叶わず、自分がいくら否定しようとも、誰も信じない。噂を流された側は、ただ黙して人が自分のことを嘲り罵り誇るのを聞きながら噂が消えていくのを待つしかない。

「別に俺がラフコフだと何処の誰が言ったのか興味ねえし、特に知りたいとも思っていないけどな、噂を流す……いや、他人の噂で楽しんでいいのは自分の噂で楽しまれる覚悟があるやつだけだ。覚悟しとけよ？ お前らの弱味とその証拠を掴んで、流して、俺みたいにしてやるからな……」

今までのイライラを全て出すように凄みを利かせて睨み、寧猛な笑みを浮かべる。特に目の前にいるシュミットなんかは黄金林檎のことを知られているだけに青い顔をしている。

「オイオイ、エイトよオ。んな言い方したんじゃお前がさらに疑われるだけだぜ？」

諭すように言ってくるクラインに、睨みと笑みを浮かべるのをやめ、普段のやる気なげな顔（多分）で返答した。

「あ？ 別にもう疑われてんだろ？ ここに来るまでスゲエ多く視線を感じたからな、ありや多分アインクラッド全体に広がってるよ。つたく、根拠もないだろうに……」

「こゝ、根拠ならあるぞ！」

装備から察するに、恐らく聖竜連合のメンバーが声高に叫ぶ。正直耳障りだ。

「お、お、お前、三月に、ラフコフトップスリーと密会してたらしいな!?! ならお前はラフコフなんだろ!?!」

三月。三月にラフコフと会ったのは一回のみ。フィリアとの初会合……からの隠しダンジョン探索もとい宝探しの時だ。どうやらあれが曲解されて密会ということになってるらしい。

ラフコフと意図していないとはいえ、会ったのは事実。まあまだ抜剣してないときに見られたならそういうこともあるのかもしれない。なぜ今更噂が広まったのかは謎だが……。

顔を片手で覆い、明らかに呆れた溜め息を吐く。あの雰囲気を見てそんなことを本気で思ったなら、そいつは相当天然だぞ……。

「……別に答えなくてもいいが、ソースは？」

「あ、ああ……アイツだ」

おい、訊いておいてなんだけど、ソース言っちゃダメでしょう。俺が本当にラフコフメンバーだったら、アイツPKされちゃうよ？

……目付き俺並みに悪くてそんな気すら起きないけど……。

血盟騎士団の制服に身を包み、痩せ細っている。それだけなら覇気がないように見えるが、目付きは鋭い三白眼。獲物は両手剣。ちなみに俺を超睨んでらっしゃる。

なんだつけ？ アイツのプレイヤーネーム。ニューデイルみたいな名前の……多分アスナの側近だった気がするんだが……。まあどうでもいいか。両手剣を腰に差している長髪のやつはさておき、俺はそろそろ休みみたいのだ。

「んじゃ、俺はこれで。ラフコフ対策を練るんだっけか？ 俺に聞かされたくないなら別の場所で行ってくれ」

背中に視線を受けながら、今日は無性に長く見える階段を一段一段上る。部屋に着いてベッドにダイブした数十秒後。大勢の前で話したから精神的疲労からか、俺の意識はすぐに闇に落ちていった。

打算と計算をし、比企谷八幡は会議に臨む。

脳が精神的疲労を完全に回復して俺が覚醒したのは、夜中か夜かの微妙なライン……十一時だった。なにか夢を見てた気がするけど、まったく思い出せない。死に急ぎ野郎もこんな気分だったのだろうか？

起きた途端に空腹が体を蝕み、料理をする気分でもないため街に繰り出そうと防具を外し、普段着に着替える。さつきあんなことがあったから、一応武器は装備しておくか……。

部屋を出て、しつかり鍵を閉めておく。夜は嫌いだが好きだ。というのも、誰かに見つければ不審者扱いされるけど、居酒屋などの施設がない場所に限り静かな夜は心が落ち着く。

夏休みの時の不規則な生活のように、自堕落極まりない起床時間だがしようがない。俺は悪くない、攻略組の奴らが悪い。

当然のことながら、一階にはもう攻略組はいなかった……三人を除いて。

「……家に帰れ、不良学生」

「む、ハチ君には言われたくないなあ」

いや、だってお前高く見ても高校生じゃん。現実世界だったら十一時だから補導されるぞ。キリトもだけど。

「それにしてもここの飯うめえな……。おいエイトよオ、なんでこないいところ教えてくんなかったんだよ？」

「こういうことになるからに決まってる……。」

いやもうさ。アスナに無理矢理攻略を手伝わされる時点でバレたくないのに、クラインも<sup>酔っ私</sup>プラスされると絶望的なんだけど。

「ま、いいから座って飲め飲め」

「いや、俺今から飯食いに行こうと思ってただけど……」

「いいじゃん。私たちもまだ食べてないから、一緒に食べようよ」

「よし今すぐ食うぞお前ら早く座れ」

「キリトちゃんの言葉に弱いのは相変わらずなんだね……」

いや、俺が弱いのはキリトじゃなくて天使だから。小町戸塚キリト

の三大天使を新たに聖書に加えるべきだと思います。

「何食うか……」

夜中だからそこまで脂っこいものを食いたくないが、腹は猛烈に減っている。結局、ラーメン（アツサリ系）に決定し、ずるずると啜る。

「……ねえ、ハチ君」

「あ？」

「さつき、シユミットの質問に答えたのは……本当、だよな？」

ピタリ、とラーメンを啜る手を止める。SAO内の食事は冷めたりはするが、麺が伸びたりしない。だから悠長に話しても、温くなつたラーメンが出来上がるだけだ。

「……俺がラフコフメンバーか否かって話ならさつき言った通りだ。お前らが信じるかは……」

「信じるよ」

「信じるわ」

「信じるに決まってるだろ？」

三者三用ながら意味合い的にはまったく同じことを答えた奴らに面喰らう。ちよ、こいつら無垢すぎない？ 無ツ垢ル、無垢バード、無垢ホークなの？

「お前ら……マジでバカじゃねーの？」

「お、今回は捻デレじゃなくてツンデレか？」

おい、なんでクラインがその言葉を知ってる？

俺を知ってるやつの中で、造語を作るやつは……《鼠》か、もしくは……。

重度のネットゲーマーである黒の剣士を責めるように睨む。と、脂汗を流ながら下手な口笛を吹き始めた。

「キリト……。はあ、まあいいか……」

捻デレなんて歴代の噂の中じゃまじな方だし、まあいいか。

ラーメンか……。平塚先生は結婚できたのか？ あの人独身から独神になりつつあるよ。誰か、本当に早くもらってあげて！ 今もラーメン独りで食べてるかもしれないから！

不思議なことに、切ない気持ちで啜ったラーメンは、塩味じゃないのによっぱかった。

「……ねえ、ハチ君。やっぱり、ハチ君もラフコフ捕獲作戦に参加してくれない?」

「え?」

捕獲作戦、ねえ……。捕獲で済めばいいけど……。いや、やめよう、済めばいいではなく、済まさなければいけないのだ。だが……

「……別に俺必要なくないか?」

「む、それはハチ君にデュエルで負けた私への嫌味?」

「いやばつかお前、あれはお前が冷静さを欠いていたからだ。な、攻略の鬼?」

「や、やめてよ……」

あれはキリトの格好張りの黒歴史なのか、顔を赤くして首を少し振るアスナ。あれだな、奉仕部だいつも悪口を言われる側だったからなんか新鮮な気分ではある。今なら死んだ魚の目から生きている魚の目にジョブチェンジできるかも。

「……それにしても、こいつらどうすんだ?」

チラリと眼を向ければ、眠気に負けたキリトと酔い潰れているクラインの姿が。だから酒は控えろと……。

「えつ、と……キリトちゃんは今私が連れ帰るから、エイト君はクラインさんをお願い」

「へいへい」

クラインの手を動かし、フレンドリストを開く。そこからメッセー지를打ち込み、クラインがギルドマスターのギルド《風林火山》のメ



ンバーに、クラインを引き取るようにメールを送る。

「あくまで自分では動かないのね……」

「俺に男をおぶさる趣味はないからな」

まあ、女の人をおぶさる機会もないけど……。フィリアのはやむにやまれぬシチュエーションだったしな。……状況をシチュエーションって言うと、なんかエロく聞こえます。

「ふー……。じゃあ、女の子をおぶさるのは？」

「き、嫌いじゃねえな」

というかなんで俺は自分の好みを暴露してるのん？ 軽く罰ゲームだろ、コレ。

「ふうーん。嫌いじゃないって言うわりには、前にハチ君が女の子を背負ってたってキリトちゃん言ってたけどなあ」

「あれはそれ以外に移動方法がなかったんだよ……。転移結晶使うのも勿体なかったしな」

「ふうーん」

隠す気もないジト目で見られるのは初めての経験ゆえに処世術も判らん。眼をそらしてちびちびとカルピスみたいなものを飲む。

「……話が逸れちゃったけど、結局ハチ君は捕獲作戦に出てくれないの？」

「……判らん、としか言えん。確かにラフコフの連中がしていることは正義感がない俺でも目に余ると思うが、好き好んで参加したいわけでもない。なにせ死にたくないからな」

「そっか。……うん、そうだよ。私も強制するつもりはないけど、参加しようと思ったら言ってるね？ 元々、ハチ君がラフコフだと疑われてるのは、KOBクッパチのクラデイルのせいみたいだし……」

だが、正直シユミットが最高指揮官と言うのは不安が残る。集団に属すからこそ、人は孤立を恐れ、孤独を嫌い、孤絶を拒む。

指揮に関してはアスナがいるが、最悪の場合、人を殺せと命令しろというものは、十六、七の少女に求めるものではないだろう。

「……ああ、解った。明日も対策会議はあるのか？」

「え？ うん、あるよ。どうして？」

「いや、まあその、何？ 俺も一応参加しとくかな、って思ったただけだ。いつまでもラフコフだと疑われてるのは、面倒だしな」

「ん、解ったわ。それじゃあシュミットに連絡しておくから」

さて、明日の会議、どうなることやら……。自分から参加するとは言っただが、早くも鬱だ。

「——それじゃあ、第二回ラフコフ対策会議を始めろ！」

二回目の会議が始まる。——俺という、不協和音を交えて。

当然、そんな存在を認めない奴らはいらぬ。

「お、おい！ な、なんでラフコフメンバーのそいつがいるんだよー！」  
「勝手に決めつけんな。そもそも、俺がラフコフのトップスリーといつ、どこで、何を話したのかを正確に知っているのか？ 正確に知ってるのなら、録音結晶とかの証拠でも出してみろ。勝手な憶測で人を判断しないでくれるか？ 妄想癖でもあんの？」

罵詈雑言の限りを尽くした俺の言葉に、しかし反論するものはいない。シュミットは弱味を握られているも同然のため、何も言えない。

ここまでしてラフコフの捕獲作戦に出る必要はないかもしれないが、いつ命を狙われるか分からない中圏外に出るといいうのもなかなかのストレスなのだ。それに、俺が直接殺されるわけではなくとも、ラフコフをこのまま蔓延させていたらSAO内のプレイヤーが減る。すなわち、攻略組のバックアッププレイヤーがいなくなるのだ。

「……じゃあ、シュミット。続きをお願いします」

「あ、ああ。……それじゃあ、昨日の会議で決めたことの振り返りをまですしたいと思う」

昨日会議に出ていない俺への配慮なのか——多分ないが——、昨日

の振り返りを話し始めるシュミット。

「まず、ラフコフの根城は五十八層のダンジョンのボス部屋だ。当然中に入ったら戦闘になるはずだ。突入は明日、最終ミーティングをした後にする」

あくまで昨日の確認のため、誰も遮ることなく、恙無く会議は進む。誰も理解していない人がいないと確認してから、シュミットはまた口を開いた。

「突入後、交戦を開始し、最終的にはこの縄アイテムで捕縛して黒鉄宮に送る、というのが一連の流れだ。ここにいる三十人ほどのメンバーはパーティーを作り、パーティーリーダーの指示に従って戦ってもらうことになる。……じゃあ、今からパーティーを組んでくれ」

なん、だと……。はちまんしつてるよ、これぼっちいじめつてやつだよ？　なんかデジャヴだよ？　俺リーダーイングシュタイナーでもあんの？

あの頃と違うのは、アスナは血盟騎士団のメンバーとパーティーを組み、あの頃は攻略組にいなかったクラインがいること。同じなのは、三十二人から六パーティー作って二人の余り物が俺とキリトだったことだ。

「……取り敢えず、パーティー組みますか……」

「そうだね……」

ピツピツと慣れた手つきでパーティー申請をするキリトをボンヤリ眺めながら、横目でクラディールとかいう奴を盗み見る。

血盟騎士団だから当然だと言うべきだが、あいつはアスナとパーティーを組んでいる。

目からチラチラと覗き出るのは狂気。いや、狂愛か。向けられているのは鬼……じゃねえや、アスナ。

「よし、全員組み終わったな？　——明日の戦闘はボス戦とは違い、個人対個人の戦いになると思う！　だから正確な戦力を教えてもらいたい！」

じゃあなんのためにパーティー組んだんだよとか、要は個人情報のレベルを開示しろってことだろなんて言葉が口について出そうに

なったが、指揮系統に支障が出るかもしれないと思い直す。

「なっ……しかし、それはマナー違反では？」

「確かにそうだが、マナーを守って戦力を把握できずに適切に戦闘できなかつたら意味がないだろう？ 重々承知だと思うが、明日の戦いには命が懸かっているんだ」

それを言われては何も返せないのか、渋い顔をして下がるアスナ。結局、各パーティーのリーダーが代表してメンバーのレベルを教えることになった。

「――よし、最後！」

「ああ……」

じゃんけんで負けたため名目上のリーダーになったので俺が報告役だ。

「パーティーメンバーは二名、俺とキリト。レベルは俺が九十五、キリトが九十一だ」

「そ、そうか。解った、下がってくれ」

室内が少しどよめき、またすぐに静まり返る。そんななか横を通りすぎるときに投げ掛けられた言葉はよく聞こえた。

「ビーターめ……」

ビーター、か。また随分古い悪名を出してきたもんだ。別にこいつに何かした覚えはないのだが、相当深く恨まれているらしい。

そんなことを考えながら、ボンヤリと残りの会議内容を消化した。

極限の状況下で比企谷八幡は黒く染まっていく。

翌日。五十八層ダンジョン、ボス部屋前。

「——では、これから最終確認をする！」

そんな大声出したら中にいるラフコフに聞こえるんじゃないの？  
と一瞬思ったが、扉が閉まっていたら多分聞こえないのだろう。と  
いうか、聞こえてしまうのならシユミットはただの間抜けになっ  
てしまおう。

「ラフコフスリートップは、皆知っていると思うが《最凶》Poh！

《赤眼》ザザ！ 《毒ナイフ使い》ジョニー・ブラックだ！」

一度言葉を切り、さらに重々しくシユミットは告げる。

「知つての通り、奴らはレッドプレイヤーだ。俺達を殺すことにな  
んの躊躇いもない！ だからこっちも躊躇うな！」

ごくり、と全員が唾を飲む。頭では解っていたが、実際に他人から  
言われることで認識したのだろう。この戦いは、人と人の殺し合いだ  
ということ。

「……ま、レベルも装備も人数もこっちの方が上だから、案外戦闘にな  
らずに終わるかもな」

シユミットは場を和ませようとしたのか、軽い冗談——希望的観測  
とも言おう——を言い、軽い笑い声が暗い迷宮に響く。

「よし……それじゃあ行くぞ！」

五十八層ボス部屋は、四角錐を逆さにした青に淡く光る石が多数浮  
いているという、ボス部屋でも三指に入るほど見映えがいい。

三次元機動力が求められるフィールドであり、重装備の奴はろくに

戦えなかったボス戦はいつものことながら辛かった。

基本的な足場となったのは、今攻略組全員が立っているこの正方形の石。そこにはラフコフどころか攻略組以外のプレイヤー一人すらいない。

「いない……う？」

誰かがポツリと呟いた言葉も虚しく虚空に溶けるばかり。

下を見ても当然映るは足場のみ。横を見渡しても俺と同じように困惑する攻略組。なら……上？

「……ッ！ 上だ！」

ほぼ反射的に抜剣し、上から命を刈り取ろうとしてきた殺<sup>プレイヤーキル</sup>人特化の剣を弾く。

情報が、洩れていた……？

「シュミット！ 指示！」

「あ、ああ。——戦闘開始！」

奇襲されたものの、迅速な対策で多少持ち直し、攻略組と殺人ギルドの戦いは、長い均衡状態に入った。

誠に遺憾ながら、俺はヒースクリフ、アスナ、キリトの人外と一括りにされている。もっと言うなら、俺含むその四人は戦闘のある分野の極致と言われているのだ。

ヒースクリフは《防御》、キリトは《攻撃》、アスナは《剣速》、そして俺は《回避》。いずれも戦闘のフアクターであり、少なくともあつて困るものではない。

だが極致だなんだと言われていても所詮は人間。数には勝てない。

「ハアアア……」

狂笑を浮かべ、同時にラフコフメンバー五人が襲いかかってくる。周りは大体一対一で戦っており、今いる最大戦力のキリトはラフコフ幹部のジョニー・ブラックと戦っていて手助けは求められない。

「クソツ……」

飛びかかって来た奴は蹴りを入れ、右から攻めてきた奴を掴み左の奴にぶん投げる。後ろから振られた剣が背中に軽くかするが、《閃打》で吹き飛ばす。あとの一人は俺を観察し、動いていなかった。

「……ほう、どうやら、腕は、落ちていないようだな」

黒いローブを被っているため解らなかったが、その独特な声は忘れられない。

「……二度あることは三度ある、ってか？」

「クク、俺から、すれば、三度目の正直、だがな」

「……正直、俺が三回もお前みたいな奴に関わってることに驚いたけどな」

喋っている間にも当然立ち上がってきたラフコフメンバーは剣を振るってくるが、主に体術スキルで撃退する。こいつら、数の利を全く活かせていない。ただの烏合の衆だ。

「クク、安心、しろ。お前は、俺が、殺す。もう関わることは、ない」

「そつちも勘弁願いたい……なツ！」

四人を捌きながら話しているが、判ったことがある。こいつら、チームワークなんてあったもんじゃない。戦う身としては嬉しい限りだが、なんでこいつら四人を組ませたのかという不気味さが残る。

「フフ、そろそろ、頃合い、か？」

「何が……」

赤眼に答えてもらうまでもなく、解は首を少し回すだけで見付かった。

「う、うわああああっ！」

ガラスの破砕音。砕け散ったのは、レベルでも装備のグレードでも上回るはずの攻略組だった。

「な……」

バカな。レベルや装備が上でも、連携や数、プレイヤースキルで上

回ることは確かにできる。だが、戦って解ったが連携は杜撰、数は同じ程度、プレイヤースキルは格下を狩ってきたラフコフと常に命懸けで戦ってきた攻略組ではそれこそ天と地の差だ。

なのに、攻略組の一人は殺された。

たった今人を殺したラフコフメンバーにカーソルを合わせ、原因を探ると、原因らしきものが判った。

「……なるほどな」

「クク、所詮、お前らは、正義感や義務感で、命の奪い合いに來ただけだ。そこには、人を殺す覚悟なんて、ない」

そう、それがあらゆるスペックでラフコフに上回るはずの攻略組が殺された原因。

——人を殺す、覚悟。

断言できる。この場はもう、捕獲作戦なんてもんじやない。討伐戦、殲滅戦のほうが適切だ。

殺すか、殺されるか。

強者生存。

弱肉強食。

頭にそんな言葉がよぎる。

自然の法則だ。どこでも行われている、ただ俺達とは縁遠い世界だっただけ。ただ、縁遠かった世界が今ここにあるだけ。

「やだ、やだあああつー！」

——またガラスの破砕音。また一人、死んだ。

誰かが、誰かがやらなければ、否、殺らなければならぬ。

小町、戸塚、親父、母ちゃん、雪ノ下、由比ヶ浜、平塚先生……。

時はもう、二年近く過ぎてる。奉仕部はどうにもなくなり、俺達の関係はどうなっているのか。高校を卒業している年齢の今、あの残念ながらも良い先生は、もう俺の先生じゃない。

このラインを越えてしまったら、もうあいつらと関わることは許されないのかもしれない。

それでもいい。俺が居ようと居なくても、あいつらの人生は変わらない。平塚先生にとっては俺は単なる生徒の一人。所詮、偶然に偶然



が重なって関わっただけなのだ。

誰かを、特別に思いたかった。人は優しいものだと、信じるに足るものだと、信じたかった。

誰かに、特別に思われたかった。俺という人間を理解してもらいたくて、その上で信じてもらいたかった。

そんなことは、砂上の楼閣、ただの俺の幻想だった。

雪ノ下雪乃に抱いた憧憬。由比ヶ浜結衣から感じた優しさ。もしかしたら、それすらも……。

考えれば考えるほど、疑心暗鬼に駆られる。数ヶ月ながらも、あの温かな部屋の中での出来事が黒く染まっていく。

——違う。たとえ雪ノ下雪乃が弱くとも、由比ヶ浜結衣が優しくなくとも、あの日だまりの部屋を作っていたのはあの二人、そこに疑いの余地はない。

アインクラッドの俺 善の意識が叫ぶ。しかし、現実世界の俺 即座に悪の意識も反駁する。

——だが、強い雪ノ下雪乃こそが、優しい由比ヶ浜結衣こそが比企谷八幡の幻想であり、理想。なればこそ、比企谷八幡にとって弱い雪ノ下雪乃、優しくない由比ヶ浜結衣は欺瞞なのだ。

どこまで押し付けがましいのだ、俺は。今、俺は雪ノ下雪乃と由比ヶ浜結衣に最大の侮辱をした。弱い雪ノ下雪乃、優しくない由比ヶ浜結衣は欺瞞なのだ。そう、思ってしまった。あいつららしさを決めつける権利なんて、俺には……いや、あいつら自身以外誰にもないというのに。

人殺しをする怖さ、人を殺した後の罪悪感。

なぜ人を殺したくないのか、その理由が他にもあることに、俺は気づかなかった。

言いたいことを一言に纏めれば、それは言った人の個性が出るものである。

八月。

茹だるような暑さが身体を、蟬の鳴き声が耳を蝕み、比企谷小町の不快度指数を著しく上昇させる。

千葉市から電車に乗り、兄がいる東京へと急ぐ。

お兄ちゃんがいた頃は、望めばバイクで大体どこでも連れてつてくれたなあ……。僅かに揺れる電車で、兄がまだSAOの虜囚じゃなかったときを懐かしむ。

家族だからといっていつまでも一緒にいられるわけではないことくらい小町は知っている。ただ、もし兄が死んで、それでお別れなんてことは納得できない。

SAOが始まってから二年近く経つ。まだ兄は生き残っているが、いつあの悪魔の機械に脳が焼き切られるかもしれないと思うと気が気じゃない。

おもわず滲んだ涙を、周りの人に気づかれないうそつと拭う。

——小町が泣いちゃダメなんだ。泣きたいのは、知り合いが誰もいない命懸けの世界に小町のせいで入り込んだお兄ちゃんなんだから。悔恨の気持ち小町の胸中を占めたとき、目的の駅に電車が到着する。

ハンドバッグを手に持ち——一応小町も花の女子高生なのだ——、駅の改札口を出てから見慣れたバス停に足を運ぶ。——願わくば、病院で兄が死んでいないように……。

「ん？ 比企谷妹じゃないか。君も比企谷の見舞いか？」

「あつ、平塚先生！ どもども、こんにちは♪」

八月の夏休み中だというのにも関わらず、相も変わらず白衣を着ている平塚先生に内心苦笑いしながら小町は先手必勝とばかりに挨拶をする。

「いい挨拶だが、ここは一応病院だ。少し音量を考えるべきだな。まあ、ボソボソ挨拶する比企谷より全然いいが……」

「うちの愚兄がどうもすいません……。でも平塚先生、一人の生徒に肩入れしていいんですか？」

「ん？ ハツハツハ、何を言ってるんだ比企谷妹。私は担任としてクラス代表で見舞いに来ただけだぞ？」

私的なのは明らかだけど、あくまで担任として来た、と言い張る平塚先生が少しおかしくて笑ってしまう。

「……ま、戻ってきたらいつまで私が受け持つクラスにいるのか、お灸を据えねばな。最近衝撃のファースト○ブリットが繰り出せなくてなあ……」

「兄でよかったら、今まで心配させた分を思いっきりやっちゃって下さい」

「ああ。まっ、それもこれも比企谷が帰ってきて、リハビリを終えたあとだな」

悲しきかな、八幡が帰ってきたら平塚先生が殴ることが決まり、また二人は微笑を浮かべる。

小町ももう高校二年生。総武高校は進学校のため、二年留年している八幡は学年的にはもう小町と同じだ。

ただ悪いことばかりではなく、政府が各大学に掛け合って、SAOから生還した時、年齢的に大学生のプレイヤーの受け入れを頼んでいて、先日一校だけ許可した大学があったのだ。総武高校も八幡が帰ってきたら——総武高校でSAO事件に巻き込まれたのは八幡だけだった——、特別措置として卒業試験で卒業するだけの学力があると判断できるなら八幡が帰ってきたその年度に卒業させることが決

まった……というより、平塚先生が掛け合っただの。

兄はきつと生きて帰ってくる。帰ってきた後の生活も、政府にある程度保証されている。

だから、少しでも早く帰ってきてね。

神様でも仏様でも星にでもなく、十数年同じときを過ごした兄に願いを。

そこで目的の部屋の前に着く。白くて代わり映えのない院内でも、そのドアは比企谷小町にとって特別なもの。

兄、比企谷八幡の病室の前の扉。

この扉を開けると、比企谷小町は淡い願望を抱く。どうか兄が、この扉を開けたら起きていて、いつものあの腐った眼を開いてこっちを見てほしい、と。

しかし比企谷小町は知っている。何十回も同じことを思い、この扉の向こうで寝ている兄を見て幻滅する。

今回も、同じだった。

「……あの眼だから朝には弱いとは思っていたが、比企谷はかなりの寝坊助だな。千葉村の時然り、な」

さ、中に入ろう、と肩を軽く叩かれ、小町は少し沈んだ気持ちを浮かせる。

病院近くの花屋で買ったブリザーブドフラワーを置き、ベッド近くの椅子に腰掛ける。

布団からはみ出た、痩せこけた兄の腕は年齢が下で女の人の小町よりも細い。

「お兄ちゃん……」

「……………」

本人いわくチャームポイントの眼を閉じ、眠り続ける……否、別の世界で戦い続ける兄は痛々しかった。

頬は骨の形がわかるほど痩せ、筋肉が全くないように見える四肢、そして室内と同じように真っ白な肌。白くないところといったら、長く伸びた髪くらい。初めて見る人は死んでいると判断してもおかしくない状態だ。

「……私は久しぶりに来たが……想像以上に……」

それ以上を口にしなかったのは小町への気遣いだろう。数ヶ月ぶりに見た八幡の姿は、それほどまでに酷かったのだ。

別の世界にいる兄には届かないと理解しながらも近況を報告する。

「えっと、お兄ちゃん。一週間くらいぶり。こっちは八月で、物凄い暑いんです。それで、えっと……」

言葉の途中で涙が滲む。声は震え、かすれて出せなくなる。兄は生きて帰ってくると信じている。だが、胸中渦巻く不安はどうしたって拭えない。

平塚先生は粗っぽく小町の頭を撫で、ベッドで眠り続ける問題児に声を掛けた。

「比企谷、久しぶりに会った君に言いたいことは多くあるが……取り敢えず、生きて帰ってこい。そうすればファーストブリットで勘弁してやる。だが、もしこの命令を破ればラストブリットを放ち、魔人ブウにボコられたベジータみたいにしてやるからな」

本人の意識があつたら、どっちにしろ一発殴られんですねとか、先生古い少年漫画好きすぎでしようとか言ってただろうが、重い空気を払拭するにはこのくらいがちょうどいいのかもしれない。

「じゃあ小町も、取り敢えず一発ビンタと、なにか奢ってくれるだけで勘弁してあげる。だから……絶対生きて帰って来てね。可愛い妹からのお願いなのです♪」

あざとく微笑んだ小町は、骨が浮き出てゴツゴツしている手を握る。と、二人以外の声がドアの外から聞こえる。

「ねえねえゆきのん。病室ってノックするべきなの？」

「さあ……、私も見舞いなんて縁がなかったからよくは知らないけど、した方がいいんじゃないかしら。一応入室する意を示すのだから」

「そ、そっか……」

コンコン、と二回ノックされ、扉が横に僅かにスライドされたところでもまた声が聞こえる。

「……由比ヶ浜さん、二回のノックはお手洗いの個室で中に人がいるか確かめるときの回数よ」

「ええっ！　じゃあ何回すればいいの？」

「仕事場とかでは四回、親類の部屋をノックするときは三回らしいのだけれど……まあ、三回でいいんじゃないかしら」

「そ、そっか！　ようし……」

また一回ノックされ、今度は完全に扉が開けられる。

「由比ヶ浜さん、そこはやり直すべきだったのではないかと思うのだけれど」

「へ？　でもさつき二回ノックしたんだから、今のと合わせて三回でしよ？」

「……もう、それでいいんじゃないかしら」

諦めたように短く溜め息を吐きながら雪ノ下雪乃は入室してくる。

「あ、雪乃さん、どうもやつはろーです！」

「ええ、こんにちは、小町さん」

「小町ちゃんやつはろー！」

「やつはろー、結衣さん！」

病院に似つかわしくないキャピキャピした雰囲気を感じ、平塚先生は一言。

「……これも若さのなせる技なのかなあ。……はあ、結婚したい」

哀愁を超えて、いつそ悲愴なオーラを出している平塚先生をスルーし、小町は唐突に提案する。

「せっかくだし、雪乃さんと結衣さんもお兄ちゃんに一言あげて下さいー！」

「……？　なぜかしら」

「まあまあいいじゃんゆきのん。私たちもそんな頻繁にこれる訳じゃないし。たまにはこういうのもいいじゃん」

「はあ……まあ、たまには、ね」

（平塚先生。前々から思ってたんですけど、雪乃さんって結衣さんに特別甘いですね）

（はあ、けっ……ん？　ああ、まあ、そうだな。比企谷曰くゆるゆりらしい）

（はあく納得しました。やってないとか言って、やつぱお兄ちゃん造

語作るくらいネットやってるんじゃない……)

(……そっちに納得したのか?)

ボソボソと話す八幡の妹と教師。そんな様子には気づかず、八幡の同級生×2の一言が始まるうとしていた。

「そ、そのー、なんか改めて言うのって恥ずかしいね……ゆきのん、ちよつとパス！ 考えたいから！」

「あなたが私を懐柔したのでしよう？ まあやるなら早いか遅いかの違いだからいいのだけれど」

ひとつ呼吸を置き、雪ノ下雪乃は鋭く冷たく、されどどこか温かい声音で一言。

「比企谷君。取り敢えず生きろ、と言おうかと思っただけれど、ゴキブリ並の生命力のあなたがくたばるはずないから、帰ってきたら取り敢えず心配を掛けた人達に一発殴られ、謝り、そして感謝なさい。特にあなたのご家族に……これでいいかしら？」

あまりにも雪乃らしい一言に苦笑の面々。奉仕部は三人がいてこそ成り立っていた。だが八幡が事件に巻き込まれたことによりなくなり、それでもいつかは戻ってくると守ってきたのだ。あの場所は三人共通で、居心地のいい場所だったから。

「うん、そうだね。取り敢えず、生きて帰ってきて、ヒツキー。そうしたら、また皆で遊びにいきましょうね？」

四人の思いは、いくら祈り願おうとも比企谷八幡には届かない。そして、この四人は知らない。比企谷八幡が今まさに違う世界で人との殺し合い……狂乱の舞踏を演じていることを。

人生とは選択の連続であり、大抵が悪い方に転がる。

さっきの思考は、俺はあまりに汚れきっていると気づかせるには充分すぎた。

俺には、あの温かな部屋に戻る——いや、最初からいる権利すらなかったのかもしれない。

敵と何合か斬り結びながらそんなことを思う。

この二年近く、この世界で出来た……いや、錯覚した俺は偽物で、まやかして、虚偽で、嘘で、幻で……なんでこんな錯覚を起こしたのか、自分に嘲笑を送りたくなる。

「はははあああッー！」

喜色が混じった声で、気色悪く嗤う。相手の体力はレッド。あと一撃こちらが喰らわせたなら、死ぬ。

「さっき、なぜお前の相手が、連携が杜撰なこいつらなのか、不思議そうな顔を、してたな？ 簡単な、ことだ。死に対する、恐怖がない、奴らを、集めた、だけだ」

人を殺す覚悟がない攻略組に対して、なるほど確かに自らの身を盾にして攻めるのは悪くない。

もしも、ここに居るのが誰よりも誇り高い雪ノ下雪乃なら、どうしただろうか。それか、誰よりも優しい由比ヶ浜なら別の解を導き出せたのだろうか。或いは、誰とでも仲良くしようとする葉山隼人なら正しい行動をとれたのだろうか。それでも、今ここに居るのは比企谷八幡であり、他者に解答を求めることなど許されない。

だから、俺はさっき気づいた自分……どこまでも醜く、浅ましく、最低な自分らしい解を出す。

「そうか、そうか。——けど、死んだら何も出来ないっていう点では、他の奴とおんなじだよなあ？」

自分でも解る、低くどすの利いた声。声を物質化したような鋭い黒い刃は、ラフコフメンバーの振り上げた右手と首を撥ね飛ばす。

儚げな甲高い音。

それは激戦続くボス部屋の中でも響き、誰もが驚愕している。



ラフコフが攻略組を殺したのではなく、攻略組がラフコフを殺した。

「フフ、フハハ、フハハハッ！ お前も、俺たちと、同類だったと、いうことか？」

「……お前らと、同類になんかすんな」

赤眼のエストックと鏢迫り合いしながら、スロージングダガーを後ろに投擲する。ダガーは後ろから襲い掛かってきたラフコフメンバーに当たったのだろうと、後ろから聞こえるガラス音で判断。そして、一言。

「……お前ら、殺されに来たのか？」

静謐な室内では、俺の低い声はよく通った。一度力を込め、作用反作用の法則を利用し後ろに飛び退く。

「今この場で、とれる選択肢は二つ。こいつらを殺さずに自分が死ぬか、こいつらを殺して自分が生きるか……俺は、こんなところで死ぬのなんか、真つ平ごめんだ」

一人を体術スキルで蹴り飛ばして塵にし、もう二人は縄アイテムで捕縛する。

「……これで、一対一だな」

「俺に、とっては、望んだ、展開だがな」

ブン、と侍が刀についた血を払うのように剣を振り、再び構える。

一瞬の睨み合いの後――。

スピードタイプの二人の剣士がぶつかり合う。片方の突きは頬を掠め、片方の斬撃は肩を浅く斬るに留まる。

お互いの左側を通り過ぎると相手が思ったであろうときに、左足の膝を腹に叩き込み相手を後ろに吹き飛ばす。

「グッ……」

細剣系統の武器は、突くものであつて斬るものではない。故に、先端部分より近づいてしまえば相手は攻撃できないのだ。

膝を着きかけたものの踏ん張るまでに留まり、そのまま向かってくる。

さつきよりも速く、頭を狙った刺突を咄嗟に左手で防いで逸らす。

ビリビリとする左手の不快感に耐えながら、エストックが刺さったままの左手にも構わず右手に握った漆黒の剣を振るった。

「……ッ！」

切れ味はSAOでも随一の剣は、おぞましいほど滑らかに赤眼の右手を手首から切断した。

「うっ、うわああああっ！」

悲鳴がした方を眼だけを動かして見、ダガーを投げ飛ばす。

呆けた声とガラスが破碎したような音。今まさに降り下ろされようとしていた武器が落ちる音が聞こえた。

心はドライアイスのように触れたら相手を傷つけるくらいに冷えきっていて、今はなにも感じない。

「……ザザ」

「ほう、戦闘中に、会話、とはな。まあ、いい。なんだ？」

「俺は、本気でお前を殺しにかかる。隠しだても何もなしだ。——見せてやんよ、対人特化ユニークスキルを」

「なに……？」

言うや否や、俺の右手から剣が消え始める。俺がストレージに仕舞った訳でも、耐久限界を迎えて塵と化した訳でもないのに、だ。

徒手空拳となった身にも関わらず突撃してくる俺に驚愕しながらも、喉に狙いを澄ました迎撃の突きを放ってくる。首の動きだけで回避し、なにもない右手を横風ぎ一閃。

通常ならそよ風程度を起こして終わりだが、今回は紅いダメージエフェクトをしつかりザザにつける。

「な……」

相手が狼狽えているときこそ最大の好機。現れた剣に光を纏わせ、光の軌跡で正方形スクエアを描く。

カーソルを合わせるとザザのHPはもうレッド突入寸前のオレンジ。一応問いかける。

「選べ。投降して大人しく黒鉄宮の牢に入るか、このまま戦って俺に殺されるか」

眼前に剣を突きつけ、冷ややかに告げる。しばらく熟考してたよう

だが付き合う義理はないため、半強制的に縄で縛る。

しつかりと縄が手に結ばれたことを確認してから、乱戦模様の戦場に走る。

「た、たす、助け……」

呂律も回つてない攻略組が殺されようとしていたとき、再び剣が消えた右手を振るい、ラフコフのメンバーを斬り伏せる。

——《消滅剣》。

現在では他に例を見ない、俺だけが有する、恐らくヒースクリフの《神聖剣》と同じ、ユニークスキル。その性能は単純明快。

任意で装備している剣に不可視属性を付随すること。

神聖剣みたいな固有スキルは一つを除き何もない。ただ、見えなくするだけ。消滅剣、という名前だが、物質的になくなり、相手の剣や盾を透過するわけでもない。ユニークスキルにして恐らく全ソードスキル中最弱。攻撃力皆無の剣技。

それを発動したままにし、ボス部屋を走り回り、斬る。

時には今まさに人を殺そうとしていたやつを斬り、また、時には複数人で襲い掛かってきたやつを斬る。

斬った人数は、数えている暇がなかった。ただ眼前の敵を斬り伏せ、自分が生き延びるしかなかったのだ。

結局、地獄にも等しい狂宴が終わったのは、それから一時間近く経った後だった。

——その日、誰が名付けたのかは解らないが、俺に新たな名が付けられた。

縦横無尽、無い剣であらゆるものを斬り伏せる。故に、《無剣》。

その日から、俺は《無剣のエイト》と呼ばれるようになった。

「うおえっ……」

吐き気を催しても、元々なにもない胃の中のもののは出てこない。

何人斬った……いや、殺したかは正確に覚えてない。ただ、十人は殺ったことを覚えている。

十人、十人は殺した。その重みは果てしなく、重力が何倍にもなったようだ。

俺はヒロイックな人間ではない。ここがなにかの物語ならば、ご都合主義が罷り通る世界なら、俺のした行動は英雄とされただろう。勸善懲惡を貫き通し、惡を裁いたなど。だが、人を殺して英雄ぶれるほど俺は自分に酔えない。

やるせない気持ちをつつけ、思いつきり壁を叩く。他の攻略組はもう帰り、捕縛したラフコフを連行しているだろう。

そうだ、ラフコフは壊滅した。死者は出たが、大多数を殺したのは俺の剣。他にも確かにラフコフを殺したやつはいたが、俺が間接的に唆さなければそんなことはしなかっただろう。

自己犠牲などではない。それでも責は全て一人で負う。二年近くも前、雪ノ下雪乃が自分のやり方を貫き通し、自分の力を十全に発揮し、文化祭を成功させたように、比企谷八幡が今切れる、最善で最低な手段を貫き通した結果がこれだったというだけのこと。

自分のことは自分で。小学生でも知っていることだ。

後悔してはいけない。それは過去その選択をした自分と、俺が殺したやつへの最大の侮辱だ。

雪ノ下雪乃は実は弱いのかもしれない、由比ヶ浜結衣は実は優しくないのかもしれない。

そう疑心暗鬼に駆られ、俺はあいつらに最大の侮辱をしたが、少なくとも俺なんかよりもあいつらはずっと強く、優しい。

俺は、自分が好きだ。

この腐った眼も、中途半端に良い顔も、少し跳ねたアホ毛も、他人から批判されまくる性格も、全部。

ただ、今日、高2の夏休み開け以来、俺は俺を嫌いになりそうだ。

俺は際限なく汚れている。解っていた。いや、解っていたつもりだった。ただ、どうにも俺は、俺が認識しているより遥かに薄汚かったらしい。

なぜかは判らない。前まではなんてことのないはずだったのに、今は、薄汚れている自分のことが、どうしようもなく嫌で、認めたくなかった。

俺は、いつの間にこんなに弱くなったのだろうか。

取り敢えず、比企谷八幡は考えを先送りにする。

「はあ……」

自分でも出所が判らない憤りにイライラしながら、作戦後のミーティング場所に早歩きで向かう。

周りのプレイヤー達はあまりに和やかで、まるで俺達攻略組だけがまちがっているかのようなのだ。

右に曲がり、左に曲がり、上り、下り……なんてことはなく、単純に噴水広場を左に曲がれば会議場だ。

木製扉を開き、同じく木製の宿屋に入ると、どうやら皆様お揃いのようだ。

「……よし、それじゃ始めるぞ」

捕縛したラフコフは黒鉄宮に送ったらしく、当然ながらどこにもいない。

俺に向けられる視線は、軽蔑侮蔑恐怖嘲りエトセトラ……。感情がハッキリしている分、こっちの方が断然良い。

「今回のラフコフ捕縛作戦、攻略組には三人、ラフコフには十七人の死者が出た。……だが、これで殺人ギルド《ラフィン・コフィン》は壊滅した。ただ……なぜ情報が漏れていたのか？ これは看過できない」

大ギルド故なのか、あくまで間接的にオブラートに包んで言い、体裁を気にする。

要は、誰が情報漏洩したのかを探り、吊し上げるといふことなのだろう。そして、今一番疑われているのは他ならない、俺だ。

ラフコフだと噂が流れていて、なおかつ情報が漏れていた。その後俺はラフコフメンバーを殺していたが、関係ない。感情論はあらゆる矛盾をかなぐり捨て、理論を無視し、こちらを糾弾してくる。そこにあるのは醜く浅ましい自己保身欲。責任逃れしたい、自分が疑われたくないと思ひ、他人に押し付ける浅ましき。

「こいつが、こいつが洩らしたんじゃないのか!? 俺達を売って、ラフコフに!!」

来た。感情論で返す、激情型の人間。俺が苦手とする人の部類に入

る。いや、俺はほとんど全ての人を苦手としてました、てへっ。

小学校時代を思い出すため苦手な重い空気を緩和するために脳内でふざけたが、重い空気に軽い空気がプラスされてさらに重くなるだけだった。

「……はく……。言っただろ？俺が何を言っても、お前は、お前らは俺の言うことを信じやしない。だから、俺が何を言っても無駄だ。どうしても俺がラフコフかどうか知りたいなら、物的証拠を個人的に探せ」

何回も同じことを言わさせないで欲しい。こちららドラクエのNPCじゃないのだ。

「う、嘘だ！お前、ラフコフメンバーを殺したじゃないか、十三人も！それでなんで平気そうな顔をしてるんだよ！」

平気そうな顔？さすがに顔を思いつきり歪ませたり、苦痛な顔をしているようには感覚的に感じない。ただ俺は人を何人も殺しても感じないほどの外道ではない。

鏡で自分の顔を見てきたわけではないが、表情的にはいつもと同じ顔だろう。いや、だからこそ、か。

「……別に表情的にはいつもと同じだが、さすがに何も感じてないわけじゃねえよ。それとも、ここで俺に、泣いて、喚いて、慟哭してほしいのか？」

いつもと同じ表情。その原因を、俺は知っている。嘘を吐いているのだ、俺は。自分自身に。汚れていると認めたくなくて、無意識に、無自覚に。そして当然、自分のことだからまた無意識に気づく。自分自身に嘘を吐いている、と。そうして雪だるま方式に嘘を吐き続け、自分を騙す。自分の中のなにかを失いたくないから。

「なっ……それとこれとは話が違うだろ！論点をずらすな！」

ああ、煩わしい。お前があいつと同じ言葉を吐くな。

「……なら、なんだ？いざというときには俺をここにいる全員で殺しにかかればいいじゃねーか。それでも俺を止められないなら、アイコンクラウドにいるやつがいくら対策しても無駄だ」

「く……」

「もう一つある。お前らの考えを当ててやろうか？ 犯人は攻略組内にいると思っっている。だが、犯人探しをしたら攻略組の仲は軋み、攻略に支障が出る。しなかつたらいつまでも全員が疑心暗鬼に駆られる。なら、どうする？ はい、あなたの回答を述べよ」

気だるげに右手をポケットから出し、人差し指で指す。奇しくも文実をしていた時、雪ノ下さんに問いかけられたような図だった。雪ノ下さんはこんなポーズしてなかったけどな。

「……んなの、どうしようもないだろ」

「不正解。正解ならあるだろ？ 今この場の状況が答えだ。言葉に表すなら、一人に責任を押し付けて、自分はなんの傷も負わない、か？」  
「な……」

憎々しげに睨んでくる……多分聖竜連合の男……と、なぜかニューデイル。人は凶星を突かれると、大抵睨んでくる。ソースは俺。

「だから今考えるべきは、事後処理だ。攻略組内にいるラフコフメンバーも元が壊滅したんじや後ろ楯もないしな。んじや」

話すことはもうない。俺はラフコフじゃないと、俺が、俺だけが知っていればいい。

「……エイト」

「ハチ君」

怒号飛び交う室内で、本来聞こえるはずないが、確かに聞こえる声。

「私は信じてるからね？」

無償の信頼の言葉。二年近く前、文化祭の相模を搜索するとき投げ掛けられた言葉以来だ。

思わずこいつらの姿をあいつらに重ねてしまい、また嫌悪する。こいつらは、あいつらの模倣品でもなんでもない。

一回溜め息を吐いて心を落ち着かせてから、ドアノブを回し出いった。



「……うつす」

「……あんた本当に前触れもなく現れるわね……。せめてメッセージくらい送rinaさいよ」

「いや、女子に自分からメール送るとか、いい思い出無いし……」

送った覚えのない外国人からメール来たり、ごつめくん、寝てたとか送られて既読スルーされたりな。あとそもそも返信されないとか。

さつきまでの感情には蓋をし、いつもの俺を取り戻している。

「はあ……まあいいわ。で、ここに来たのは剣を取りに来るためでしょう。」

「……まあな」

言うど、白い布がぐるぐると巻かれた剣が差し出される。こういうの中二心がくすぐられちゃうからやめてほしい。

「さすがにトレイターほどのスペックはないけど、キリトのダークリパルサー位はあるわ」

おい、それアインクラッドでも一、二を争う名剣じゃねえか。こんなほいほい作れるとか、お前何なの？ <sup>スーパー</sup>超サイヤ人のバーゲンセールなの？

「銘は《ソリチュード》。うん、なんか……ごめん」

ごめんって何だ。しおらしい感じだから逆に傷ついちゃうだろうが。いや、やっぱり傷つかないな。意味的には《孤独》だし、俺にこの上ないくらいぴったりだ。

「いや、別に俺にぴったり過ぎて逆に困るくらいだ。見た目もなんかいいし」

もう全ての色を混ぜたみたいな色だ。要は灰色である。図工の間は作品仕上げたら、どんな色を混ぜたら何色になるのかなって、もはや実験気分だったな。

「……ねえ、あんた。その……何？」

「……何だよ」

煮え切らない感じのこいつは珍しい。言いたいことは言う、雪ノ下スタイルに近い雰囲気なのにな。いや、あいつは空気読まずにずけずけしてるだけか。

「……なんか、気持ち悪いわよ」

前言撤回。こいつもずけずけしてた。少しは遠慮しろよ。ずけずけ系女子って流行ってるの？ 略して凶形女子。……俺とは相容れなそうだ。

「なんとというか、無理にいつもみたいになってるというか、顔が歪んでるみたいなの……」

「……んなことねえよ」

嘘だ。凶星だった。

女の勘は鋭いとよく言うが、なかなかどうしてバカにはできないらしい。

たった一つの物を守るために、自分にも、他人にも嘘を吐く。人は、こうして崩壊し、守りたかったものからも遠ざかっていくのだから。

隠し、装い、それでも守りたかったものは知らないうちに壊れゆく。それでも人は、俺は、嘘を吐く。

それしか、守る方法を知らないから。本当は守れなどしてはいないのに。

失って初めて気づくこともある。俺の場合は、俺の高校生活で奉仕部は欠かせないものだったと気づくのが遅すぎた。

「……話がそれだけなら俺、もう行くけど。お代は？」

「え、うん……いいわよ別に。専属ミスなんだし」

「いや、そういうわけにもいかんだろ。親しくないから礼儀ありとも言うし」

「親しき仲にも礼儀あり、でしょ……」

親しき仲って定義が判らんから……。家族以外で俺が一番友達っぽい会話をしているのって平塚先生の気がする。一回ラストブリット喰らったら、臓器破裂したかと思っただわ……。その次は北斗百

烈拳……考えたくもない。

どうにも俺は重苦しい雰囲気になると、頭のなかで逃避する癖が若干あるらしい。

逃げているのだろうか。

そんなつもりはないが、どうしても、あの時あの場所での俺が下した選択は最適解だったのか、どうしても解らない。

秒読みで人の命が奪われかけたあの場所では捕縛なんて出来なかった。

会話して和解なんて以ての外。話すことすら叶わなかった。

いや、違うな。俺は最適解を得たいんじゃない。正当化したいのだ。俺が下した選択は正しかったのだと。間違いじゃなかったのだと。

「……そんじゃあな」

「あ、うん……」

いつの日か、現実に帰るために俺達は戦っている。二年近く戦い続け、アインクラッドは七割近く攻略された。最終層の百層まではあと三割。

悪い想像ばかりをしても仕方ない。頭の回転は速い方だが、並列思考なんてものが出来るほど器用じゃない。現実世界の話は現実世界に帰ってから考える。

仮想世界で人を殺し、確実に汚れた俺の話聞き、俺を拒絶するものもないもあいつらの自由だ。

だから、取り敢えず、今は。

上を向いて、歩こう。

正反対に、彼は関係を断ち、彼女は関係を紡ごうとする。

十月のある日。

最前線のモンスターが、眼前で黒い剣に受け止められる。

元々がそんなに筋力値はないので、鏢迫り合いを終わらせるため相手の鈍色に光る剣を弾き、相手を仰け反らせた。

相手の重心が後ろに行ったことをこの二年間で磨きあげられた勘で察知し、システムアシストなしの蹴りを革鎧に覆われている部位に放つ。

更にバランスを崩した《リザードマンロード》に容赦なくソードスキルを四撃当て、灰塵に変化させた。

「うおあく……。キツ……」

モンスターのステータスもそうだが、アルゴリズムも複雑になってきている。攻撃のバリエーションも増え、回避が困難になりつつある。ぶつちやけ決まった動きをするソードスキルの方が躲しやすいくらいだ。

ラフコフ捕縛……。いや、討伐作戦から二ヶ月後。攻略組が開拓した層は七割を越え、七十四層に辿り着いていた――。

迷宮区の鬱々とした雰囲気は戦闘後の疲労回復に適さず、むしろ遅延させると言えよう。これもフィールドと迷宮区の危険度が違うと区分される基準の一つである。その分迷宮区から出たときのフィールドの空気はうまい。超うまい。やはり自然は偉大だ。

現実世界ですると変質者扱いされるためあまりできない深呼吸を数回し、木々の間に存在する小路に行く。

あれから一ヶ月は色々あった。二つ目のユニークスキルの露見はアインクラッドに多大な衝撃を与え、当然俺のところに詳細を聞こうと群がる人は数えきれないほどいた。

まあ元々俺は住居を決めているわけでもなかったし、ハイディングをしたらロクに索敵スキルを上げてない奴に見つかるわけもなく、ほとぼりは二週間程度で冷めた。

あとの二週間は、まあ、新しく買ったマイホームでダラダラ精神療養していたな、うん。

七十四層ソロ攻略適正レベルは八十九。今の俺のレベルは百一だから、まだ行ける……が、油断は禁物だ。

そのために戦闘で磨り減らした神経はまだ緩めるわけにはいかない。

迷宮区出たあとフィールドあんのめんどくせえなあ……。

一旦開き直ってしまうと、案外心に余裕が出来るらしく今はもうそこまで心は荒んでいない。それでも、あくまで一時的に蓋をしただけだし、ふとしたことでまた自己嫌悪は顔を出すことがある。……特に、キリトやアスナが近くにいるとそれは出やすい。

あいつらは人の悪意に鈍く、だからこそ清い。そして、傷つきやすい。

まるで、昔の誰かを見ているかのようだ。

例えば。

例えばの話である。

例えばもし、ゲームのように一つだけ前のセーブデータをに戻って選択肢を選び直せたとしたら、人生は変わるだろうか。

答えは否である。

それは選択肢を持っている人間だけが取りうるルートだ。最初から選択肢を持たない人間にとってその仮定はまったくの無意味である。

故に後悔はない。

より正しく言うのならはこの人生およそすべてに悔いている。

ただ、それは俺に限つての話。

「……げ」

「げ、とはなによ。げ、とは」

考えてた矢先にアスナとの遭遇である。相変わらず純粹無垢な目をしてこつちを見ている。というか近い。近い。近い匂い。……混ざつちやつた。

「……別になんでもない。そんなじゃ」

「ちよつと待つて」

制止の言葉も気にせずホームに帰ろうと体を反転させた。ら、襟首掴まれ再反転される。

紙に水を垂らすと滲んでいくように、黒い感情がじわりと溢れ出ていく。

純朴の眼で見られ、体が拒否反応を起こしてつい突き飛ばしそうになるが、ギリギリ踏みとどまる。

「……なんで、わたしを避けるの？」

「……別に避けてない。元々お前と俺じゃ、住んでいる世界が違うつてだけの話だ。」

もしお前がこのデスゲームの始まりの頃と今で俺がお前との接し方に相違を感じているなら、始まりがおかしかったってだけだ」

そう、現実世界でも元々上流階級に位置するであろうアスナと最底辺の世界の住人である俺とは交わらない。

人生が紙面に書かれた一本の線だとするのなら、アスナは少しの歪みもない直線、俺は正反対にぐにやぐにや曲がる波線だろう。

平行ではないが決して交わらない二本の線。俺達の人生

付け足すなら、似たような境遇の雪ノ下雪乃とも本来関わることはなかったはずだ。俺は運命論者ではないが、仮にそれを奇跡と言うならば某千本桜の使い手じゃないが二度は起きない。

それを歪めたのはこの異様な世界。

どこまでも残酷で、正直で、居心地がよく、美しい世界。そして俺が”なにか”を求めている世界。

キリトとアスナ。こいつらの行く末を、取りうるルートを見てみたという気持ちはある。

ただそれを果たすには、取り敢えずこの黒い感情に折り合いを付けることが最低限必要だ。一応出来ないことはない。しかしあくまで最低ラインだ。

だがさつきも考えた通り、俺とこいつの住む世界はまるで違う。

「違うよハチ君。ハチ君のわたしへの接し方に相違を感じているのはSAO初期じゃなくて、二ヶ月前からだよ」

「……………」

「接し方も変わったし、それに…………いくらなんでもフレンド解除されたら気づくよ」

嘘はどんどん看破され、どんどん追い詰められる。断崖絶壁の崖にいるような錯覚を起こすほどだ。

「…………なんでハチ君がフレンド解除したのかは知らないよ。ううん、原因に心当たりはあるけど理由は知らないよ。でも、さ…………」

俺は二の句を言わず、一つの重大な事実をアスナに告げた。

「アスナ…………周りに人がいることを忘れてないか？」

途端、《閃光》は紅くなった。

「……で、なに。話無いなら帰るわ、じゃ」

人気のない裏通り（決して淫猥な意味ではない）に移動した俺たちは早速解散しようとしている（アスナの護衛らしき血盟騎士団はアスナが帰した）。

しかし今度は裾を掴まれ、足を止めることとなる。

「……はあ。……フレンド解除した理由を訊きたいのか？」

ゆっくりと首を振ったのを確認してから、俺もゆっくりと話し出した。

「……と言っても、別に、なあ……理由はねえな」

「……嘘。さつきも言ったけど、原因は知ってる」

「……なんだよ」

問いかけると、話してもいいかと一瞬の悩みが見え、瞼が閉じられる。そしてすぐに瞳には確固たる意思があつた。

「……ラフコフ捕縛……ううん、討伐作戦。原因として思い当たるのは、それだけしかないんだ……」

二ヶ月前のリズベットとの会話以来に核心を突かれた。

本当にもう、女つてやつは冷たかったり、優しかったり、鋭かったり、怖かったり……迷宮区よりも複雑怪奇だ。

『 』曰く人生はルールなしパラメーターも判らない、ジャンルすら不明のゲームだと言っていたが、違いない。

女子と会話するのに選択肢なんか出てきやしない。まあギヤルゲーみたいに甘い展開にするためじゃなく、誤魔化すための選択肢なのだが……。

「わたしたちは、解つてたはずなのに怖くて、逃げて、ハチ君一人に責任を負わせて……」

「……なに言ってるんだ？ お前」

声音に怒気が混じる。

俺はあの戦いで、十人以上もの人を、殺した。

俺はその選択を後悔などしていない。元々あのルートしか俺には選択できなかったのだ。いや、選択できたとしても俺はあのルートを選んだ。



さつきも言ったが、それ自体は後悔などしていない。

人を殺したことを否定はしないし、ちゃんと受け止めている……ただ、それで汚くなった自分だけは認めたくなかった。

ただ失いたくなかった。

死ねば、当たり前だが現実世界に帰ることはできない。

だから、人を殺してでも生き延びた。

それは誰のためでもない、俺が自分のために下した選択だ。

なら、その選択によるあらゆる結果は俺のものであり、他人は一切関係ない。

結果に満足するのも結果を苛むのも、誰にも決めさせない。だから、最悪の結果だろうと同情や憐れみ、憐憫、情け、哀憐なんていない。

それは俺の選択をなにより侮辱する行為だ。

「俺は別にお前らのためになんかやってない。泥を被ったわけでもない。だから、その目をやめろ。……正直、イラつく」

「……そっか」

なぜか安堵したような息を吐くアスナ。まだ罪悪感は見え隠れしているが、このくらいは人間性があるやつなら感じて当然だろう。

「で・もー」

「お、おおう……」

いかにも「わたし、怒ってます」というポーズでパーソナルスペースに立ち入れられ、一歩たじろぐ。そんな……。このA・T・フィールドを、いとも簡単に!?

「結局、なんでわたしたちとフレンド解除したの!?!」

「いや……、だって、なあ……」

「またそうやってはぐらかす」

いや、はぐらかしてるわけじゃないんだけどね?

俺の都合でドストレートに「お前らとできるだけ一緒にいたくない」とか、さすがに言えん。嫌われるのはどうでもいいが、必要以上に関係を悪化させる必要もないからな。

自分の中の黒い感情は、考えを後回しにする一時的な処置で取り敢

えず折り合いを付けている。キリトやアスナと一緒にいると顔を出やすくするが、理性で押し止められる程度だ。

「はぐらかしてる訳じゃない。いや、まあ、そのなに、フレンドって和訳するとなんて言うか知ってるだろ？」

「友達、じゃないの？」

そう、まさしくその通り。俺たちは友達ではない。というか、俺には友達が……いや、戸塚だな、戸塚しかいない。

「……な？」

「……友達、じゃないの？」

日本語七大不思議の一つ、ニュアンスの違いによって言っている意味が違うように聞こえるが発動した！

「……いや、違うだろ……多分」

「むう……」

この嘘は効果覿面だったらしく、アスナは俺が見た限りでは嘘を吐いたことに気付いていない。

——人殺しのソロプレイヤーがトップギルドのNo. 2とフレンド登録していたら、周りは快くは思わない。最悪、攻略組に亀裂が入り空中分解する可能性もありうる。

同理由で、ソロプレイヤー最強のキリト、今や攻略組にも欠かせないギルド《風林火山》のリーダークライン、一層からの古参プレイヤーエギル、攻略組にも多々情報提供をする《鼠》ともフレンド解除をし、不安要素を無くす。

これがもう一つの理由。

俺のフレンドリストにいるのは、リズベット、フィリア、レイン、シリカ。場合によってはこいつらともフレンド解除をしなくてはならない。

悪事千里を走る、とでも言うべきか、俺の所業はアインクラッド中に知れ渡っている。

俺のせいで誰かが糾弾されるのは望ましくない。ぼっちは人に迷惑をかけないから存在を許されることを忘れてはいけない。

「……ならハチ君。わたしは君と友達になりたいから、久しぶりに

パーティーを組みましょ？」

「…………は？」

…………どんな曲解をしたらこうなるんだ、こいつ。

…………まあ、俺が嘘ついてるんだけどな。

どうにも、三人揃えば無駄な話が多すぎる。

こちらから友達になりたいと言ったことはあるが、あっちから友達になりたいと言われたことはない。

なぜなら、普通ヒエラルキーが最下位なやつとなんか話したら、「え？　なんであいつと話してんの？　かおりやっさしーww」とか草生やしやがるからな。わー、ちきゅうにやさしいなー。

それだけならいい。

ただ、別にこつちが話しかけた訳じゃないのに「うわ、かおり可哀想……」とか言わないでください。笑ったあとに真顔になるとか、一番シリアスみたいじゃないですか……。

とまあ、過去のトラウマ掘り下げてまで言いたいことは一つ。

友達になりたいと言われたら、どうすればいいんですか？

いやまあ、分かりますけどね？　ごめんなさい、ちよつと前例がないことなので驚いて。……誰に謝ってんだ？

まあ、結論を言おう。

「ごめんなさいそれは無理」

前述の通り、友達になりたいと言われたことなどないので断り方も知らん。故に雪ノ下が俺の頼みを断った言葉をそのまま引用した。

のだが……。

固まっちゃいましたよこの子……あれか、氷の女王の御言葉をそのまま使っちゃったから絶対零度で固まっちゃったのん？

まあそれも一時的なこと。すぐにガンダムのお如く起動した。……ガンダムは起動戦士じゃなくて機動戦士だけだ。

「……ん、ま、そつか。友達って言われてなるものでもないしね……」  
「……え、それどこソース？ だから俺も断られたの？ 原因それなの？ 頼み方がアカンかったん？」

「……つうか、お前なら俺みたいなのやつをわざわざ友達にせんでも、なりたいってやつならたたくさんいんだろ」

「ううん、『誰か』じゃなくて、『ハチ君』とお友達になりたいの」  
「……あ、そ……」

千葉有数の港がある銚子にいる魚に負けないうらい目が泳ぐ。クサツタメのアクアジェット！

ちなみにアクアジェットは先制技だけど威力が弱いから使っている人はあまりいない。ソースはYouTube。

「それじゃ、パーティー組みましょ？」

「おいこら待て。それじゃ、つてなんだ。まったく話が繋がってないんだけど」

「え、友達になりたいからパーティー組みましょ？ つてさつき言っただよ？」

「それも込みでの「ごめんなさい、それは無理」だったんだけど……」  
「……強引だな、お前」

俺の悪口とも取れる言葉に、それでもアスナは微笑んでみせる。

「これくらい強引じゃなきゃ、誰かさんは絶対断るでしょう？」

「ごもっともで……」

「だが断る」

「ハチ君も文法おかしいよ……？」

「……ネタって通じないと空しいな……。平塚先生の気持ち解つた気がする。」

「……まあ、なんにせよパーティーを組む気はない。じゃあな」

スタスタ。ガシツ。グググツ。イラツ。

擬声語で表すならこんな感じだろう。

俺歩く。アスナが腕掴む。俺構わず歩こうとするも、SAOの設定上アスナ動かない。俺この状況にイラつく。

「ちよ、離してくれませんかね、閃光様？ いでで！ あ、やっぱ痛

くないけどやめろ！ 痺れる！」

閃光様って言った途端に握力強めてきやがった。血管を長時間圧迫したような痺れが襲ってくる。

なに？ キラキラネームが嫌なの？ いや、俺も閃光とか中二臭いアダ名とか嫌だけど」

「無剣に言われたくないわよ！」

ゴキツ、という生々しい音と共に、俺の絶叫が辺りに木霊した。声に、出てたんですか……。

「それじゃ、エギルさんのところに行きましょう！」

「はいはい……」

結局、アスナの武力行使お願いによって明日からパーティーを組むことが決まってしまった。誰か、僕の人権を尊重して！

今から不安一杯である。さすがにパーティー組む程度ならボス戦でもやってた……が、それは討伐作戦前の話。作戦後は俺がいたらまあ当然よくないので、一回も参加していない。

特にまずいのが、人殺しと最強ギルドNo. 2が一緒にいることで血盟騎士団の品格を落とした、とか難癖つけられるのが一番メンドクサイ。ヒースクリフはそういうタイプじゃないが、あいつ放任主義だからよっぽどの問題を起こさん限り団員を放っておくしなあ……。

「というか、なんでエギルのとこ行くんだよ」

「ん？ だってハチ君のことだから、どうせフレンド解除してから会ってないんでしょ？ 挨拶くらいしなきゃ」

「え、なんで知ってるの？ なにお前、俺のこと好きなの？ アアツツ！」

的確に足の小指を踏み抜いてきたアスナは怒ったように先を歩いていく。気持ち悪いこと言ってますいません……。

「ま、まあ言わんとすることは解った。けどなあ、正直、めんどい。家帰って寝たい」

「家、買ったの？」

「いや、今のは言葉の綾だ」

実際は家買ったけど、こいつには絶対に教えん。フレンド登録していた頃、無理矢理攻略に付き合わされたの、忘れてなんかないんだからねッ！

「ふうん……あ、キリトちゃん！」

攻略組特記戦力の一、《黒の剣士》キリトは攻略組特記戦力の二、《閃光》アスナに声をかけられ、こちらに振り向く。

「あつ、アス……エイト!？」

アスエイトって誰だ。なんかカツコいいキャラ名みたいになっちゃったろーが。

「おう……」

相も変わらず人がゴミのようなアルゲードの通りを縫うように移動してきたキリトに帰せたのはわずか二文字。というか、こいつなんで弱ぼつちなのか？ 超フレンドリーなんだけど……。

ガシツと両肩を掴まれ、強制的にヘッドバンキングの刑に処される。痛みを感じないインクラッド内では何気が一番効果的な罰かもしれない。

小さい頃、止めろと言っても親父にコーヒーカップを回されたときのような感覚に襲われながら、あのあと母ちゃんにみつともないと叱られた親父の憐れさを思い出す。親父、ザマア。……ていうか母ちゃん、泣いた息子より体裁なの？ ひどくね？

「キリトちゃん、ストップ、ストップ！ ハチ君の顔がグロッキーになってる上に、目が更に濁ってるから！」

「えっ、あつ……」

いきなり放されたことで若干よたよたするが、通行人に当たったことで止まる。その時「げっ、なにこいつ」みたいな顔をされただけで

すんだのは幸運だ。クズを育てる親父の英才教育では「人に当たったら治療費請求されると思え」と中一の時に教えられた。

「ご、ごめんね？ エイト。大丈夫？」

「全然大丈夫だ気にするなお前がちよつと二人に影分身しているように見えるだけだから」

「それは大丈夫じゃないと思うよ……頭が」

アスナさん、最後の一言は要らないから。地味に俺のMP抉ってこないで……。対雪ノ下用のダイヤモンドハートを搭載している俺じゃなかったらあつさり撃沈していたレベル。司令！ 自爆艦比企谷が轟沈しました！ むしろ嬉しいです！ ……嬉しがられちゃった……。

「で、お前なにしてるの、アイカツ？」

「いや、違うよ……ていうかなんでアイカツ？」

「いや、まあそれはどうでもいいけど、マジでお前なにしてるの、帰宅途中？」

「ううん、エギルのところに行こうと……あ、そうだ！ シェフ捕獲！」

「え、え、え？」

いきなりアスナの両手を自らの両手で包み、困惑させるキリト。なに、君らもゆるゆりなの？

「な、なに？ シェフって」

「あ、うん。一応聞いておきたいんだけど、アスナって料理スキルいくつ？」

確かアスナは俺と同じ料理スキルを取っていた覚えがある。とはいえども、俺はあくまで日常生活で飽きないくらいの料理レパートリーがあればいいため、熟練度は四百くらいだが、果たしてアスナのは……。

ちらりと頭一つ分小さい場所にあるアスナの顔を盗み見ると、氷の女王がよくみせる笑顔……勝ち誇ったような表情をしていた。おもわず「君はなにと戦っているのかね？」とか、その台詞だけ聞けば深く感じることを言っちゃいそうになっただけ……。



「聞いて驚きなさい。先日『完全習得』コンプリートしたわ！」

「うそっ！」

「……アホか……」

無意識に口を吐いた言葉のせいで鬼のにらみつけるを喰らってしまつたでおじやる……。こいつに防御力下げられすぎじゃね？

スキルとはプレイヤーの生命線であり、当然のことながらそうそう簡単に熟練度が上がるものではない。俺も片手剣スキルがカンストするようになるには一年は掛かった。

ましてや、料理スキルなんてものは完全な趣味スキル。同じ生産系スキルでも鍛冶や裁縫と違い攻略上は必要ないし、なんならNPCレストランで事足りる。

しかもこいつは攻略至上主義の攻略の鬼だったのに……丸くなつたもんだ」

「ハチ君……。声、出てるからね？」

「えげつ……。すいません、勘弁してください！ つい本音が！ フラッシング・ペネトレイターだけは！ どうかリニアーで！」

「リニアーなら甘んじて受けるんだね……」

いや、俺はMじゃないから受けたくはないけど、そこは平塚先生のスライドの技鉄拳と同じくもう割り切っているんだ。

きつちり三十度折り曲げて、恐怖心に従って誠心誠意謝罪する。スナオニナルツテダイジ。

怒りに体を震わせていたが、段々と小刻みにしてやがて震えはなくなる。許してくれたのだろうか。もし許してくれたら八万ポイントプレゼント！

「ん、まあ事実だし、なんにも言えないわね……」

なん、だと……。いつもならここで反論十倍フライ返しなのに、ヘアリードだけって……。こいつ熱でもあんの？ どうでもいいけど鈍感主人公が赤面したヒロインを見て言う言葉で「熱でもあるのか？」の使用率は異常。

「だってわたし、ハチ君とO☆T O☆M O☆D A☆T I☆になろうとしてるんだもんね」

「ごめんなさい、やっぱりお友達になるの断らせていただいてよろしい  
でしょうか？」

怖い強いこわ強いよ。最後だけ意味合い違うけど。なんだよO☆T O  
☆M O☆D A☆T I☆つて。O☆H A☆N A☆S H I☆みたいだろ。  
星使いすぎだし、ギンギラギン過ぎる。パチンコかよ。

ちなみに、キリトが方向修正をするまでシェフの話はまったく触れ  
られなかった。……本題入るまで時間かかりすぎだろ。

比企谷八幡にとつての恐怖対象は鬼であり、その本拠地は完全なるアウェイである。

「はあ、S級食材の調理ねえ……」

「うん、そうだけど……反応薄すぎない？」

「いや、自分が食べられないなら関係ないし……」

自分が持つておらず、他人が持つているものを羨望してもしようがない。本当に手に入れたいならそれ相応の努力は必要だし、それでもできないことは多い。……雪ノ下雪乃のように。

完璧超人すらも上回る人外を姉に持ち、比較され続けてきたのだろう。俺も小町と比較されることは多々あるが、それとは意味合いが違うはずだ。

まあお家のことは他人がどうこう口出しできるものではない。たとえ、その家がひどく歪んでいようとも。

「ああ、自分じゃ調理できないから売ろうとしてエギルのところに行こうとしてたんだな」

「うっ……現実世界あつちだったらできるもん……現実世界あつちだったら……」

料理できないというのは女の尊厳に関わるのか、どこぞのネトゲの嫁（ヤンデレ）みたいにぶつぶつと同じことをリピートしている。……そういえばここもネトゲの中の上に結婚システムもあつたわ……。

それにしても、『もん』か……。これを天然でやるとは、キリト、恐ろしい子……！ なんとなくぼっちになつた理由が判る気がする。

男子には高嶺の花。女子には疎ましい存在。もしくは女子も近寄りがたい存在だったか。

壁を作っている訳ではないが、そばにいと自分が劣っていると本能で察しているのだろう。一般的に見たらキリトは見た目よし、性格よし、本当に稀に暴力を振るってくることを以外おおよそよしだ。俺が判断を下すのは別として。

そしてそれに気づかないでぼっちでいたであろうキリト、やっぱり

恐ろしい子……。大事なことなので二回言いました。

「いや、それは解ったから。それよりS級食材は調理できますか、シエフ?」

「ん、できると思うわ。むしろ望むところよ、S級食材なんて滅多に見られないからね……」

お嬢様（予想）は総じて負けず嫌いなのか、やる気スイッチがONになる瞬間を見た気がした。うん、関係ないし帰るか。

ぶっちゃけ一緒に居たいわけでもなし。目的がないなら帰るに越したことはない。

様々な人の流れが氾濫する通りで有名な三人（俺だけ悪い意味）がいたらそらあ目立つ。さっきぶつかったやつが俺を知らなかったのは幸運だ。どれくらい幸運かと言うと、命中率七割のかみなりが連続十回で当たるくらい。つまり十分の七の十乗だから……解らん。そもそも計算式これで合ってるの? はちまんすうじはきらい!

盗んだチャリで走り出す……ことはしなかったが、自慢の足で歩き出した。

「ちよつと……」

「待って」

台詞も行動も完璧なコンビネーション、猪鹿蝶も感服するぜえ……。俺は虫嫌いだから猪鹿蝶まででいいと思います。馬鹿はダメだよ!

「……お前らなんなの? 最近俺の足止めんのがブームなの? むしろ俺がお前らの足引つ張つちゃうよ?」

なんなら底無し沼に引きずり込むよ? 今受けてる肩の痛みのみ分だけ沼に沈めていくよ?

アスナはともかく筋力値が馬鹿高いキリトは振りほどけない。ちなみにアスナは熊蜂（理由はレイピアで刺すから）で俺は虎馬<sup>トラウマ</sup>な。

「……はあ、ナニカヨウデスカ?」

俺は早く帰りたいんだよさつきと離せオーラを全開にするも、二人の怒りオーラに圧殺される。……バカな、俺の威圧が消えた、だど……。

「……な、なんですかすみませんごめんなさい僕がなにかしましたでしょうか」

これもDNAに刻まれた悲しい性なのか、社畜スキルの内の一つ、平謝りが勝手に発動してしまう。世界で一番ついて欲しくないスキルだ……。

「ううん、逆だよ。なにかしたんじゃないやなくてなにもしなかったから怒ってるの」

なにもしなかったから怒ってる？ こいつらに俺がすべきことはないはずだよ？ なにセソロプレイヤーだからそんな義務責任とは無関係だからな……。

「ん、ああ、ええ……？ なにをしてなかったつけ……。挨拶、はしたし、会話、もしたし、あ、無視はしてないな。もしかして他人のふりして無視した方がよかつ……」

ビュオンツ！ という音を耳が捉えたときには、アインクラッドでも有数の名剣……《ランベントライト》が平塚先生の拳以上のスピードで俺の顔の真横を通り過ぎる。

おもわず俺は（恐怖で）笑顔になる。アスナも（恐い）笑顔。キリトも（引き攣った）笑顔。周りも（何故か）笑顔。皆（種類は別々の）笑顔。

数十秒後にはゴキブリ並みにいた人々は通りから消え、そして（俺たち以外）誰もいなくなった……。

「……取り敢えず、調理器具とか色々あるわたしの家ホームに行きましょうか」

普段なら絶対にお断りするお誘い。この現状がアドベンチャーゲームだったら、選択肢は一つしか出ないだろう。

「は……、はい……」

いつものことながら、アスナが怒るツボが俺にはよく解らん。そんなことを考えながら、黒白こくびやくの剣士の三步後ろを歩く。機嫌はすつかり直っているようで、今は二人で仲良さげに話していた。

六十一層主街区《セルムブルグ》。

観光名所の湖上都市にして、ホームがちよつとお高い街は俺にとっては嬉しい街だ。

なにが嬉しいかって、アスナやキリトがいても注目を集めないことが嬉しいのだ。つまり俺が注目されない。ぼっち最高！

「ハチ君、隣歩いたら？」

「……いや、ちよつとそれは……」

さすがに隣を歩いたら注目を浴びる。それは避けたい。

アインクラッドにいる六千人強のプレイヤーのホープにしてアイドル。悟空とベジータがポタラで合体したベジットのような存在。それがこいつらだ。ちなみにゴジータでも可。

そこにピラフ並みのモブキャラが混じったら、藍染さんに普通の間が近づくがごとき命知らずとなる。俺の作戦方針は変わらず『いちだいいじに』だ。

「あつ、ちよ、やめ」

キリトにぐいぐいと腕を引っ張られ、強制的にサンドイッチにされる。わー、りょうてにはな、いや、はなたばだ。うれしいな。

二人が会話しているところに俺がたまに口を挟み会話をしていく、なんてことないありふれた日常。

この世界に入り込むまでに感じていた心地よさ。それと同じような感覚が、俺のなかを満たしていた。

……ただ、日溜まりにいるような感覚に陥るからこそ、自分が黒く感じた。

最強ギルド《血盟騎士団》No. 2 《閃光》アスナのホームはめっさオサレだった。

リビング兼ダイニングは広く、隣接するキッチンも明色の木製家具がしつらえられており、モスグリーンのクロス類は色が統一されて見映えは文句なしだ。

俺は集合住宅暮らしじゃないからよく解らないが、同じ造りの部屋でも住人によって部屋は千差万別になるんだそうだ（リアルで盗み聞きして知った）。

俺が買ったホームもそれなりに景観はいいと思うのだが、いかんせん俺は装飾のセンスがないから内装はそのままだ。

俺がポケーツと内装を見ていたときに着替えたのか、白い短衣チュニツクと膝上丈のスカートのアスナは着ていた。

俺は足フェチではないが、美脚とも言える素足に視線が吸い寄せられる。

くっ、卑怯な！ なにが卑怯って、スカートが短くていくら素足が見えても更にその先……少年たちの夢が見えないんだよ！ なんだ！ 倫理的に見せちゃダメだからか!?

俺の忸怩たる思いと下心にまみれた視線にも気づかず、ソファアアに座るように進めてくるため俺とキリトは所在なさげに並んで座る。

——おお、このソファアアモツフモフだ。人をダメにするな……。

座る前に剣とコートは外しておいたため、ソファアアに座るのに邪魔なものはない。座り心地も最高。だが、やはりなんか場違い感じがすごい。帰ってきて……。

自分のホーム以外で考えることNo. 1を獲得している思考はキリトが上質そう——実際上質なのだろう——肉をオブジェクト化したことよって中断する。

さきほど聞いた話によると、これは《ラグー・ラビットの肉》。歴と

したS級食材であり、端的に言えば超旨いらしい。

男子として旨い肉は食ってみたいが、獲ってきたのはキリトだし、調理するのはアスナだ。俺が分け前をもらえる理由がない。

俺も自分で作ったハンバーガー擬きを实体化し、一口咀嚼をした……ところでハンバーガー擬きはアスナに取り上げられる。

「えっ、ちょよ、それ俺の俺の」

掌を上に向け返却を求めるが、怒っているほどじゃないが険しい表情で言葉を返される。

「……これからご飯なのに、なんで食べてるの？」

「は？ いや、俺の晩飯それだけど……っつかお前は俺のかーちゃんかよ……」

「あ、それは解るな。なんかアスナって、たまにお母さんみたいだよ  
ね」

キリトの賛同は受けられたのだが、俺の晩飯ハンバーガー擬きを返すようにアスナに意見してくれと眼で訴えるも逸らされた。

仕方なく二個目のハンバーガー擬きをオブジェクト化し、また一口食べたところで取り上げられる。

「だ・か・ら！ これからご飯だつてば！」

「え、いやだからそれが俺の飯だから……」

どうも俺たちが互いに言っていることが食い違っているように感じてならない。俺はS級食材が食べられる様子を見ながらハンバーガー擬きを食おうと思っただけなのだが。

(……エイト、アスナは多分一緒に食べようって言ってるんだと思うよ)

(いや、だからこうしてここで飯食ってんだろ?)

お互いに首を傾げ合う混沌とした状況が出来る。

一緒にご飯を食べるってあれだろ？ 同じ場所で各々の飯を食うやつ……。

「いいから、座って！」

手を引かれては逃げることもできん。大人しくこれまた高そうな椅子に座って、所在なさげに視線をさ迷わせる。



「……よし、これでオツケー。……キリトちゃん、なにか料理で要望ある？」

「……し、シェフのおまかせコースで」

献立を全部シェフにぶん投げたキリトだが致し方ないだろう。料理ができる、という言葉を信じてても、あくまで一般的な家庭料理の話。高級食材の上、現実じゃ口にする機会なんてないだろう兎の料理なんて知らなくて当然だ。

兎、か……。戸塚が好きな動物を目の前で食べられるのは抵抗があるな……。見た目的には兎か鶏か牛か豚か孔雀か北京ダックか……。正直悩むくらいだ。ルフィが持つてる肉みたいだ。あ、やっぱ北京ダックはないな。つーか鳥類はない。

(自主規制)は天井のシミを数えていると、知らぬ間に終わっているというが、あれ相対性理論だろ。楽しい時間はすぐ終わる、みたいな……。……一瞬下ネタという概念が存在しない世界の電波を受信したぜ……。おうふ。

まあ、辛い時間は長く感じるものである。

なにがそんなに楽しいのか、エプロン姿になって鼻歌混じりにラグー・ラビットを調理するアスナを、机に頬杖突いてキリトと眺めるのだった。

だから、比企谷八幡は。

カヲル君曰く、「音楽は人類が作り出した文化の極み」的なことを言っていたが、小説だって負けてはいない。ぼっちにとって、小説は  
大説……じゃねえや、大切。

趣味で暇潰しを兼ね備える存在は最強。いつの間にか時間が過ぎ去っているのだ。アインシュタイン万歳。

しかしこの世界にはそんな最強の存在がない。それ以外にも  
ブーツとしたり、寝たりと、暇潰しする方法ならいくらでもあるがこの場所が許してくれない。

いや、女の子の部屋をジーツと見たり、寝るのって節度がないよね、うん。マナー、モラル、節度、大事。

「どんな料理作るんだろうね？」  
「さあな。ラグーってくらいだから煮込むんじゃない？」

S A Oの食材アイテムは、結構そのままの名前がつけられていることも多い。調理方法が判らない食材も多いから、せめてもの配慮……ということだろう。四千人を死に追いやったくせに、ゲームとしての配慮を忘れないのは茅場晶彦ならでは、というべきか。

名前と言えば、この世界は剣がプレイヤーを象徴する。

《孤独》はまだいい。いや、むしろ俺を表すに二番目に最適な二次熟語だ。ちなみにトップは孤高な。

だが、《反逆者》……。俺に、魔王を倒す勇者役でもやれと？ そういうのはキリトやアスナがやることだ。俺は役をもらえたらいい方、村人Aが限界だ。

考えすぎだろうが、あの天才が創り上げた世界だと全てのものに意味があるかもと深読みしてしまう。いや、それただのぼっちの性だな。

ぼっち特有のスキルともいえる思考加速をしていたら、皿が俺とキリトの前、あとアスナが座る場所であろうところ——キリトの隣——に置かれる。

湯気をモクモクと漂わせるシチューを一瞥し、アスナに顔を向け

る。またシチューに視線を戻し、またアスナを見る。それを三セツト。

「……アスナさん、これ、なんででしょうか？ 毒？」

ブチツ、と。短い音が鳴る。

「ひ、ひやえつ……。ど、どく……。独眼竜政宗が食べててもおかしくないくらい旨そうだな！ 早く食おうそうしよう!？」

「苦しい、苦しいよエイト……」

そんなこと解ってる！ それでも男にはやらにやらんときがあるんだよ！ ……自分の命を守るために。……俺は英雄にはなれないな。男だけど誰かのために立ち上がることすらできない。

「はいっ！ みなさんお手手のしわとしわ、合わせてシワ合わせ、南無〜！」

「あ、アスナ！ これ以上睨むのやめてあげて！ 恐怖でエイトのテンションが深夜でもないのにおかしくなっちゃってるから!？」

「そ、そんなこと、ないゾ？ わ、わいは怖がってないからナ？ 勘違いしないでヨ？」

「ほら、なんかアルゴみたいになっちゃってるし、お願いツ！」

「はあ……。解ったわ……。そんなに恐いのかなあ……」

「今度はアスナが……」

テンションがハイな俺。テンションがローなアスナ。ノーマルのキリト。平均したら普通に……なるわけないですね、すみません。

「うめえ……。くそ、専業主夫志望として負けた気分だ……」

「……エイトって専業主夫志望なの？」

「……ちなみに、将来プランはどうなってるの？」

俺の何気無い一言に耳聒く反応し、さらにアスナまで乗ってくる。フツ、仕方ない、話してやるか……。

「まあまずはこのゲームをクリアして現実に帰るな」

「うん、それは当然だよな」

「現実に帰る、か……」

アスナがぼつりと呟かれた言葉は憂いを帯びていたが、取り敢えず聞こえないふりをして続けた。

「……で、リハビリを終えたら大学行ってキャリアアウーマンになりそうな人と付き合って卒業後結婚。別に在学中でも可。そして俺は専業主夫に……」

「なれないよ……」

「なれないでしょ……」

「……お前ら息ピッタリだな……」

人の夢を否定するなんて最低だよ！ つまり大人は最低。特に教師。平塚先生に俺の夢、幾度となく潰されかけたからな……。まあ、あの人に限ってはなんで結婚できないのか不思議なくらいいい人、だとは思う。

ただ、男の人から見ると『都合のいい』、が頭についてしまうのがなんとも悲しい。誰か、本当に早くもらったげて！ じゃないと俺泣いちやうよ！

「……ちなみに、ハチ君って告白したり、されたりしたことあるの？」

「あ？ ……いや、まあある、けど……」

「あるの!？」

本気と書いてマジと読むほどに驚かれました……。俺って、色恋沙汰にそんな関心ないように思われてんの？ バリバリあるよ？

いちご100%、ToLove、ニセコイとかも読んでたからな。打ち切られたのだとパジャマな彼女とか恋染紅葉とかも読んでたぜ！ 全部ジャンプだけだな！

「ああ、告白して振られてな……。これだけならまだいい。その翌日、あちらこちらから、『比企谷、かおりに告ったらしいよ』『え、かおりがわいそく』とか聞こえてきた……。って、お前ら誘導尋問巧えな、

ほんとびびるわ。思わず過去のトラウマと俺の苗字喋っちゃった  
じゃねーか」

「……何一つ誘導してないけど……ハチ君って、比企谷って言うのね  
……」

「や、やめろ……。違うから、俺の苗字は比企谷じゃなくてヒキタニだ  
から」

「……そうなの？ ヒキタニ、なの？」

うっ……。少しも疑われないで信じ込まれるのも良心が咎めてく  
るんですけど……。

「いや、やっぱり比企谷です。むしろ比企谷以外ありえませぬ……」  
「??」

キリトの頭からクエスチョンマークが出てるように見えるよ、っ  
べー、幻覚見えるとかマジっべーわー。

「でも、エイトが比企谷なら私に近いね。私は桐ヶ谷だから……」

「ストゥップ！ 現実の話はタブーだからここらへんにしましょう？」

「まあ、異論はない」

実際ネットゲではリアルの話はタブーだ。チャットとかで発言でき  
ない訳ではないが、まあ、暗黙の了解ってやつだな。ちなみにカース  
トが出来上がっちゃうのも暗黙の了解がです、気を付けましょう。

あれ以降は喋らず黙々とシチューを食べるだけだった。

食われる前に食え！ と、第一回S級食材争奪戦が起きたのを切っ  
掛けに、すごい早さでシチューは減っていった（なにもしてない俺が  
お代わりするのは申し訳ないので、俺は不参加）。

大方女性二人である鍋のシチューを食いつくしたのを見たときは、

「君たちどこのギャル曾根？」と言いそうになった。が、ぼっちは学習能力が高い。そんなこと言ったら怒鳴られること請け合いだ。……でも、未だにアスナが怒るツボが解らんのだよなあ……。

「ふー……」

「ご満悦、といった様子で息を吐いた二人の声を聞き、メインメニューから目を離す。

「ああ、食い終わったのか。んじゃ俺はこの辺でお暇するわ」

「ねえ、ちよつと待って」

テーブルに手を付き、立ち上がろうとしたが呼び止められたのでまた座り直す。……着々とアスナの言うことに逆らえなくなるように調教されてて怖い。

「……ハチ君は、さ。どう思ってる？ 今のこの世界の状況……」

唐突な問いと真剣な声音に虚を突かれたが、真面目な話なのだろう。ならば、こちらも誠意を以て返答すべきだ。

「……俺の主観でいいなら、って前提で言うからな。

——まあ、一言で言うなら慣れてきてる、だな」

「……うん、そうだね」

神妙な趣で頷いたキリト。なんとなくだが、この世界に流れている空気を感じ取っているのだろう。

——古来より、常に強大な敵と対峙してきた、鋭い爪も、強靱な牙も持たない人類が生き残れたのは何故か。

とあるゲームの台詞である。

それに対しての解はこれだった。

——何かを成し遂げようとする意志、それこそが人類が生き残れた要因であり、人類最大の武器である。

間違っていないと思う。

何かを成し遂げようとするにはそれ相応の努力や犠牲は必要だ。しかしながら努力とは辛く苦しく、常に辛苦が付きまとう。それでも成し遂げたいという思い……意志という原動力があるから人は辛い努力にも耐えられる。栄光ある未来を信じ。

人はそれを成長と呼ぶのだろう。

成長は今の自分を肯定出来ない者の逃げ。

俺はそう断じてきたし、今もそう思ってる。

——なら、不変とは？

不変とは停滞であり、停滞とは現状への慣れだ。そして、現状への慣れとは現状への諦念だ。

人は早々変われやしない。そんな簡単に変われるのなら、そいつは自分なんてものを持っていない。

だが、好きで今の自分でいる訳じゃないやつ……されど変わろうとしないやつは諦めているのだ。どうせ自分は変われやしない、ここが限界だと。

別に悪いことではない。

限界なんて他人が決めるものじゃない。勝手に理解した気になって、勝手に自分を知った気になられて、自分は他人の決めた型の中に収められ、はみ出たなら疎外される。

だから人は皆自分に嘘を吐く。自分はこんなものだ、これでいいじゃないかと、妥協し甘んじ諦める。

S A O 開始から二年経った今、俺たちS A Oの虜囚の社会復帰は絶望的だ。その時点で俺たちはもう社会という枠組みから外れている。

なら、苦い現実より甘い嘘を。この世界の停滞を。

現実に戻りたいと思う反面、戻りたくないと呼んでいる。二律背反。

俺も感じたことがある。

お互いにお互いの気持ちを否定し、認めず、憎む。

感情の坩堝というのは如何ともし難い。俺だって今日の前にいる二人へと向ける感情は複雑だ。

昔の俺に似ているこいつらが一体どうなるのか、俺にも違う選択肢があつたんじゃないかと見てはみたい。だが、だからこそ汚れきっている俺と澄みきっているこいつらは近くにいてはいけない。

だから俺は戻らなくてはならない。この黒い感情に決着を付けるためにも、こいつらの行く末を見るためにも、そして……あの部屋で俺はなにを求め欲していたのかも。

「なあ……、お前らは、その……今でも現実に帰りたいとか思ってるか？」

なんとなく気恥ずかしいため、途切れ途切れとなってしまうたがなんとか言葉を捻り出す。

「——正直、私は判らないな。現実も大事だったけど、今は辛いことも、悲しいことも、苦しいことも、いくつぱいあったこの世界も大事だと思ってるから、ね……」

「そうね……。確かに、なかったことにするにはあまりに密度が濃かったし、忘れたくないこと、忘れられないこともいっぱいあった」  
「そうか……」

こいつらも現実が薄れていってることになんとも言えない感覚に襲われたが、まだ続きがあった。

「——でも、わたしは帰りたい。あつちでやり残したこと、いっぱいあるもの」

「うん……。うん、そうだね。私も帰りたくないとは思ってない。この世界もあつちの世界も大事だけど、なんか、今の言葉はすごく共感できるよ」

「そうか……」

さつきと同じ言葉。だけど、そこに込められた思いは全く違うものだど自分でも理解できる。

「……んじゃ、本当に帰るわ。じゃあな」

「ん、バイバイ」

「そうね、さよなら」

椅子を立ち上がり、玄関へと続く扉の前に立つ。そのままドアを開けようとしたが、まあ、その、なんとなくだけど、言っておこうと思っただ。

「また明日、な」

「うん！ また明日！」

「また明日、ね」

二人の言葉を背に受け、今度こそ俺は扉を開けた。



比企谷八幡にも、度重なる理不尽を嫌に思う気持ちは人並み以下だが確かにある。

午前九時。待ち合わせ時刻である。

「ふああ……」

周りにはちらほらプレイヤーはいるが、お目当ての人物はいない。宙船ばりに舟を漕いでいる。

……いかんいかん。

眠気に耐えているあいだは体感時間が長く、時計を見たら一分しか経っていない。というか、今見て気づいたけどパーティーメンバーにキリトいるんですけど……。別にいいけど。

瞼をしばたたかせ、また瞼が落ちていく。

「エイトー！」

が、一気に見開かれた。どこぞのカゲロウプロジェクト並みに目が醒め、意識がクリアになっていく。

「お、おお……。朝から元気だな……」

リポビタンDでも飲んだの？ まさか昨日一睡もしてないせいでハイテンションとかやめてね？

「うんッ！ 昨日はすごい快眠で寝起きがよかつたんだ」

ならなんで時間ギリギリ？ まあ女子は出掛ける準備に時間がかかるということに納得しておこ……。……。

「……そうか、俺は眠くてな……」

ついさつき醒めたけど。キリトの挨拶には眠気の抑止作用があると銘打ったら絶対売れるな。録音結晶使って商品化したい。

「えっ、大丈夫なの？ 最前線の攻略に行くんでしょ？」

「……まあ、戦うときにはちゃんとスイッチを切り替えるわ。死にたくねえしな」

また一つあくびをし、ブーツと行き交う人々や街並みを眺めていると、おずおずといった様子でキリトが再度話し掛けてくる。

「……ねえ、エイトって二ヶ月前から今までなにしてたの？」

「……色々、だな」

「……そっか」

周りの喧騒だけが聞こえ、俺たちはお互いに口を開かない。遠くもなく近くもない関係、和やかとも険悪とも言えない空気がちょうどよかった。

「つーか誘ってきたやつが遅れるってどういうことだよ……」

重役出勤？ 働く時間が少なくて給料を多くもらえるとかなにそれいいね。なんなら働かずに給料を多くもらいたい。

……やっぱり小説ほしいでござる。暇潰ししたい。なんなら立つたまま寝ちやおうかな……。

瞼を閉じようとしたときに、何回も見た青い転移光が目射す。

「どいてええーッ！」

青い光の中から白い物体がこちらに飛んでくるので、半ば反射的に避ける。「ふぎゅー！」という間抜けな音が聞こえたところで、俺にダイビングしてきた物体の全貌が明らかになった。というよりアスナだった。

「だ、大丈夫？」

突然の事態から立ち直ったキリトが声を掛けると、跳び跳ねるようになり上がった。そしてそのまま俺を盾にするように俺の背後を取った。……え、なに？ なんで俺を人身御供にしてんの？

またも光った転移門から出ていた人物を見たら、血盟騎士団の制服を纏った俺並みに目付きが悪いプレイヤーだった。

ば、バカな、お前は……ニューデイル（多分）！ なんでお前がここに!?

ニューヨーク（きつと）がなんでここにいるのかをアスナに訊ねる前に、入浴が話し掛けてくる。明らかに憤懣やるかたない顔で、アスナに。

「ア……アスナ様、勝手なことをされては困ります……!」

……またなにかやらかしたのだろうか、この自由奔放副団長殿は。ヒースクリフが放任主義なんだから、お前がギルドを纏めろよ……。

内心呆れている俺に同調してくれたのか、入浴（メイビー）はさら

に言い募る。

「さあ、アスナ様、ギルド本部まで戻りましょう」

「嫌よ、今日は活動日じゃないわよ！……だいたい、アンタなんで朝から家の前で張り込んでんのよ!？」

「うわあ……」

前言撤回。血盟騎士団ロクなやつがない。キリトに引かれるつて相当だぞ？　ていうかそれ、オレンジにならないだけで犯罪行為じゃね？

「ふふ、こんなこともあるうと思ひまして、私一ヶ月前からずっとセルムブルグで早朝より監視の任務についておりました」

……仕事、ご苦労様です。

接点がないので直接は言わないが、内心で皮肉る。アスナはいい加減俺を盾にすんのやめてくんない？　三白眼の睨み、モロに受けんだけど。

「そ、それ、団長の指示じゃないわよね……？」

「私の任務はアスナ様の護衛です！　それには当然自宅の監視も……」

「ふ……ふくまれないわよバカ!!」

護衛が護衛対象に不安と恐怖与えてどうすんだよ……。権力<sup>K。B</sup>を盾にのさばった結果がこれだ。

ちらりとキリトを見ると、険しい顔をしていた。いやー、ここまで来たらもう嫌悪感混ぜちゃっていいと思いますよ？　ほら、すごい形相でこつち向かってきますし。

リア充が前方から歩いてきたときののように道を開けようと横にずれる。のだが、アスナはまた俺の背後に付く。……お前はスタンドかよ。

結局俺は押しやられ、入浴はアスナの腕を掴む。……あいつ、倫理コードに引つ掛かって黒鉄宮に行かんかな……。押しやがって。

「聞き分けのないことを仰らないでください……さあ、本部に戻りますよ」

御しきれない感情を孕んでアスナを睥睨し、無理矢理に転移門に

引つ張って行く。……いや、だから護衛が怖がらせちゃダメだろ……。

ぶつちやけ俺には関係ないことだ。アスナがさすがの眼で見てもうが、キリトがアスナの腕を掴んでる、男の手を払おうとしようが俺には関係ないし、害もない。

ただ……気に食わない。

別にいたいけな少女に乱暴したとか、嫌がってるのに連れていくなんて、とか正義感じみたことを言うつもりなんて微塵もない。

ただ、人がなんでも自分の思い通りになると思っているような目が、その人をよくも知らないくせに人を下に見ているような態度が気に食わないのだ。

集団に属せばその分しがらみや制限、制約は掛かるものだし、上に立てば立つほど制約は減るか増えるかのどちらか、それは理解している。だが、その人の持つ肩書きや、周りの奴の独り善がりやで個人の意見が無視されるのは違うだろうか？

さつきも思ったが、これは正義感や思い遣りから来た行動じゃない。俺の自己満足で、利己的な気持ちから来たものだ。

「……あの、すみません。一応、俺たちが先約なんで……そちらの副団長さん、一日だけ貸して頂けますか？」

気に食わない、とは思っているがわざわざことを荒立てる必要もない。できるだけ穏便に、とまるで葉山のようなことを考えているのに辟易とするが致し方ない。……キリトが意外そうに見てるのは何気にショックだが。

配慮にフオローを重ねた俺の心遣いを、しかし目の前の男は台無しにする。

「貴様ア……！」

……ごめんなさいいけませんやっぱ副団長さん、持ち帰っていただいて結構です。

つい口にしそうになった言葉を呑み——「ご」はもう口にしてたが——、なんとか違う言葉を捻り出す。

「……安全面は保証します。パーティーは俺と副団長さんだけじゃな

くて、KOBの団長にも多分匹敵するキリトもいますから」  
「私ッ!？」

安全面という点で、ヒースクリフを除きキリト以上に安心できる実力者はそうそういまい。そう思つての発言だったのだが……。

「ふざけるな！ 貴様ごときにアスナ様の護衛が務まるわけがないだろう！」

……話を聞けよ。少数派の意見だつて聞くのは大事つて、中3の公民の教科書にだつて書いてあるぞ。……今は一対一だけどな。

「……いや、ですから。別に俺じゃなくて、そこにいるキリト……《黒の剣士》になら務まるでしょう？ あなたも血盟騎士団なら、黒の剣士の實力はよく知つてるはずですし……」

「そんなことは関係ない！ 貴様のような《人殺し》の《ビーター》なんぞのいるパーティーになぞアスナ様を任せられるか！」

「なッ！ クラ……」

なにかを言いかけたアスナを視線で黙殺する。どいつもこいつも事実なのだ。

至極全うな意見。しかし、こいつは本心からではなく、建て前として俺が人殺しのビーターということを言っている。

罵り、謗り、罵倒し、陰口を叩き、悪口を言い、批難し、糾弾し、悪口雑言、罵詈雑言の限りを尽くすのはいい。人なら誰でもやることだし、やられたところで俺はなにも思わない。

俺は人一倍トラウマを抱えていると自負している。だからこそ言えることもある。

本当に自分を責めるときというのは、他人から言われるまでもなく自分が一番やってはいけないことをしたと理解しているときだ。今思えば、俺が今までトラウマと呼んできたものはトラウマと呼ぶに値しない。確かに当時に傷ついたことは多々あった。だが、それだけだ。

あれは、俺と彼女とのコミュニケーション手段のひとつだったのかもしれない。

罪を犯した人を悪人と呼ぶのならば、誰よりも罪を悔い改めようと

する人に笑顔で傷口に塩を塗り込む貴様らは悪魔だ。

本当のトラウマというものは、精神に根深く絡み、根を断ち切れれば絶ち切ろうとするほど自らの心も同時に刻み付ける。

中学校の頃、カウンセリングの先生に一度だけ相談に行ったことがあった。

「——気持ちは私にも解るよ」

そんな安っぽい同情では心の傷など癒せやしない。

気持ちが本当に解るなら、今俺がどんな気持ちか言ってみろ。気持ちか本当に解るなら、あの時どうすれば正解だったんだ。

言葉というのはひどく無責任なもので、言った側にその気がなくとも、言われた側には曲解して伝わる。

そしてそれを勘違いと言うのだろう。

百戦錬磨の最弱。それが俺。負けることに関しては俺が最強。

だが今回は勘違いでもなんでもない。純粹な悪意、それだけを向けてきている。なら、敬意も節度も礼儀も必要ない。

「……ストーカーの血盟騎士団員よりはマシだろ。しかも護衛が副団長を怖がらせてるしな。少なくとも俺は怖がられてないぞ……多分」  
むしろこっちが戦々恐々させられてんかな？ 連れに来たのお前じゃなかったら喜んで引き渡してたからな？

ストーカーに人殺し、暴力者と、犯罪者の坩堝に流れる空気を爆発させたのは入浴だった。

「ガキがア……。私は栄光ある血盟騎士団の一人だぞ!!」

「はー……。なにお前中二病？ 栄光ある血盟騎士団とか……ハッ」

思わず失笑してしまう。

なにを強くなった気でのだろうか？ こいつは。甚だ疑問だ。

「貴ッ様ア……」

怒りのあまり、ボキャブラリーが全くなくなっている。そんなんじや語彙ノ下の口撃を掻い潜ってきた俺の精神を折ることはできんぞ。

しかし入浴は口撃ではなく、攻撃を行ってきた。

「あつぶね……。なにすんだよ」

「クラデイル！ あんたなにしてんのよ！」

何気に入浴がクラデイルということを知ったが、まあどうでもいい。苛立ちが天上越えて宇宙まで行ってしまったらこうなるんだなと他人事のように感じていた。

そもそもあいつ、ここが圈内だということも忘れている。

振られた剣はまあ両手剣らしく、鈍重で重そうな斬撃だが当たらなければどうということはない。

「……なあ、アスナ。こいつとデュエルしてもいいか？」

自分を見失ってる輩を冷静にさせるには言葉じゃ無理だ。目には目を、歯には歯を、理不尽な暴力には理不尽な暴力を。

部下の失態は上司の責任と言う。それは違う。逆だ。部下の功績は上司のもの。部下の失敗は部下のもの。そして、上司の失態は部下のもの。そう、上司の失態は部クラデイル下のものなのだ。

今までの理不尽な暴力や 暴リニア 虐フラッシング・ベネトレイターの清算はこいつにもら

おう……と、今までのイライラ（アスナ七割、クラデイル三割）をぶつけることを決意し、アスナが決闘を許可したことに内心歓喜したのだった。

おぼろげに、比企谷八幡は彼女らの道を察する。

ククク、フウーツハハハハハ！ 我が名はダークゴールデンマスタ―！ 闇の資金に追われて消えろ！ なぜかアスナから暴力を受けることはや数カ月！ 俺は！ 今日！ そのストレスを発散するぞ！ ハアアーツハハハハハ！

……いかにいかに。九割がた中二時代に戻って高笑いしてしまった。ラノベのなかの中二病も若干混じったし。どうやら度重なる理不尽な暴力は、俺に相当なストレスを与えていたらしい。だがアスナは怖いので、ロクに文句を言えずにいた結果がこれだ。……これが、底知れないオーラの圧迫の力か……。八幡、ファイトだよっ！ あれを聴いたら八幡いつでもラブライクだよ！ やだ、俺穂乃果ちゃん好きすぎイ！ でも推しメンはことりちゃんだよ！

いつもクールキャラで通している（少なくとも自分ではそう思っている）俺にしては珍しく、気分はもうキモいくらいにハイだ。

決闘の申請表示が出たことにクラディールはニタァーと笑みを深め、受理されたことが俺の目の前のウインドウが告げる。

決闘は本当に心命を賭して戦うなんてことは本当に稀なケースだ。基本的にSAO内の決闘は腕試しや、ギルド同士での纏れやいさかいを代表者の決闘でケリをつけるなどの意味合いが強い。

今回は……どちらかと言われれば後者、だろうか。俺集団に属していないけど。一人で始まり一人で終わるなんて、まさにアルファとオメガ。そうか、俺が神だったのか……。

新世界の神になることを決意している間（デスノートは持ってない）にも、刻々と時間は少なくなり、それに反比例して野次馬ギャラリイは増えていく。

なにか騒ぎ立てているが、某ベクトル反射野郎ばりに無視していると、眼前に剣が。

「うおうっー！」

なにすんだよまだデュエルは始まってないだろあつぶねーな。

……すいません嘘吐きました。なんか、もう始まった。



ぼっち特有の思考をしすぎたせいで、十全な準備はできてない。しかも、周り（キリトとアスナ含む）は俺が消滅剣使つてると思ってるし。や、腰の鞘に剣があるって時点で気づいてくれよ。

まあ、なんにせよ素手で挑むか、抜剣するだけの隙を作らなければいけないらしい。小学校六年生するとき、陸軍の対人訓練を見て親父に挑んでぼこぼこにされた俺をなめるなよ！ 親父のやつ、嬉々として四割くらいの力で殴ってきたからな！

そのあと俺のワイルドカード、【小町&母ちゃん召喚】で制裁されたクソ親父はさておき、今はこいつとやらねばならん。

赤いエフェクト光に包まれた華美な両手剣を体を仰け反らせることで避け、スキル後硬直の隙に蹴り飛ばして距離を開ける。手応えはあつたが固い感触。どうやら剣で防がれたようだ。

次いで、抜剣。

するとギャラリーに驚かれた。まさかまだ抜剣していなかったとは思わなかったのだろう。

「二介のソロゴときが……俺をなめているのか！」

剣を抜いていなかったことを嘗められているように感じたのか、両手剣最上位スキルのモーシヨンに入ろうとする。

——ヤバい。

なにがヤバいって、両手剣最上位スキルは高火力なのだ。あいつ完全に俺を殺しに来てやがる。

いかに俺が未だ被弾していないとはいえ、最上位スキルをモロに喰らえばHP全損も有りうる。クリティカルなんて判定されたら人生シャットダウンされるだろう。

俺はあいつに筋力値で劣るだろうから、ソードスキルの撃ち合いは愚策。逃げてもあれは突進系スキル、あっちの方が速い。だが、やりようならある。

猪も真っ青な突進を見せるクラディールだが、俺は左腕だけを動かす。

最上位とは対極の最下位スキル。《シングルシュート》。

飛弾してくるダガーはいわゆる陽動で、当たればラッキーくらいの

気持ちで投げたけど、当たっちゃったよ……。

「ぐう……っ。小癩な……」

小癩などかお前どこのテンプレバトル漫画の敵役？ 異世界チーレム無双並みにテンプレ。

「なっ！ あいつは何処へ行った？ まさか……逃げたのか！ ハッ、アスナ様！ あいつはとんだ腰抜けのようですよ！」

独り合点しないでほしい。アスナ呆れちゃってるし。しかも俺はここにいますよ？ 目を隠す能力もないし。ただ隠蔽スキル使っただけです。防御度外視の防具の敏捷力アップと隠蔽確率アップナメんな！ 動いてても八十パーセントはハイド出来るんだからな！

とはいえ、ストーカーに腰抜けされたのもイラツときたので、シングルシユートを真後ろから放つ。

「所詮ただのガキが俺に勝てるわけないんだ！ ハーツハハハ……ガッ！」

不意打ちのダメージと衝撃は精神的にもダメージが大きかったのか、顔を羞恥に歪ませている。や、急にお前がベジータばりに高笑いするから悪いんだ、俺は微塵も悪くない。ほら、黙ってないで笑えよ、ベジータ。

俺の十八番ならぬ十八幡（ちなみに読み方は不明）の一つ、ハイドシユート（鼠曰く）。

戦闘中にも通用するほどの隠蔽確率がある俺だからこそできる技だとか。……それ誉めてんの？ 貶してんの？

「え？ 今どこから攻撃したんだ？」

「なに言ってるんだよ、あそこらへんをスゲースピードで走ってるぞ？」  
八対二くらいの割合でギャラリー達がざわめく。……すげえな、ハイドレートドンピシャじゃねえか。

ぶつちやけ、このまま戦ったら勝つことはできるだろう。だが今回のデュエルの目的は二つ。【死なないでデュエルを終える】ことと、【アスナから受けた理由不明な暴力を倍にしてクラディールに返す】ことだ。……うん、我ながら後半の理由ヒデエ。

「クソガキイイイッ！」

怒り心頭、マジギレのクラディールさん少し怖いです……。自分で自分の株下げるとか、こいつが組織の幹部だったら組織壊滅するんじゃないの？ アスナさん、血盟騎士団潰れないようにファイトだよっ！

タネはまだバレていないようだし、危機に陥ったらまたハイドすればいい。このままじゃ目的二が達成できん。

最後にハイドしたまま閃打を背中に決める。初撃決着だったらシングルシユートでデュエルが終わってるところだったぜ。

「……ふう。それで？ 『栄光ある血盟騎士団様』。たかが『ガキ』の『一介』の『ソロプレイヤー』に虚仮にされてる状況はご自身でどう思われます？」

「ク、ク、ク、クソガキイイイッ！」

本気で振られた剣が煌めき、華麗な剣とシンプルな剣とが火花を散らす。一回剣を弾いたら体術スキルで攻め込み、白衣の剣士を吹き飛ばす。何回か違う戦闘スタイルを試したことがあるが、これが一番しつくりくる。

こんなに怒声をあげて、周りの観客はなにも思っていないのか謎だが、まあ漫才を見てる気分なのだろう。上に立つ奴が落ちていく様は見てて心地いいし。しかも自爆。

連撃が止んだと思えば煌びやかな両手剣は光を纏い、俺に襲い掛かってくる。それを弾くでもソードスキルで相殺するでもなく避ける。

「げえっ……。ソードスキルって避けれんのかよ……」

……なんかソードスキルを避けたらギャラリーから気味悪く思われたが今はどうでもいい。

技後硬直で動けないクラディールに、今度は俺の剣が迫る……。正確には華やかな装飾でんこ盛りな長剣に、だが。

ガキユイイイインッ！ と、今までに聞いたことのないくらい甲高い金属音が耳をつんざき、次いでバキンッ！ となにかが折れた音がある。

「な……。に……。いっ？」

「お、おおッー！」

クラディールの愕然とした声と、ギャラリー達の感嘆の声があがる。それに追隨して地面に半ばから折れた剣の刀身が突き刺さった。華美な剣は例外なく脆い。つまり単純な奴ほど頑丈で凶太い。これを人間に当てはめると由比ヶ浜が該当してしまう。だからあんなにメンタル強いのか……。

「はあい、しゅうりよお」

某銀髪ラストサムライのようにデュエル終了宣言をするが、こいつの目には憎悪の炎が燻っている。

まあ、システムのまだ負けてないといっても、実質的に決着はもう付いた。まだデュエルを続けても無様だということは理解しているだろう。もしまだやるようなら、右腕を斬り落として「僕の王の右腕がア！」とか言わせてやる。俺は涯なのん？

そんな機会はなく、呟くように「アイ・リザイン……」と口にし、デュエル終了の表示が出た。別に降参って言っても通じるのだが、そこは中二病、横文字に弱い。……思えば、このデュエルなんのストレス解消にもならなかったな……。

もう硬直は解けているのにも気付かず、未だにソードスキル後の体勢のままいたクラディールが動き出すと、列になって戦いを見物していたギャラリーに吠え出す。

「見世物じゃねえぞ！ 散れ！ 散れ！」

うーん、そのわりにギャラリーが集まってきたときにはなんにも言わなかったのはどうしてなんでしょーね？ ふしぎー！

剣を鞘に納めつつそんなことを考えていると、長髪を揺らしクラディールがこちらを向いてくる。

「貴様……殺す……絶対殺すぞ……」

……あ？ 殺す、だと？

「……殺人鬼相手に殺人宣言してタダで済むと思ってんじゃねーぞ……？ 殺すなら、殺される覚悟をしてから来やがれ……」

憎悪、殺意、悪意に幾度となく晒されてきた俺に負の感情は恐怖でもなんでもない。本当に怖いものはもっと別のものなのだ、きつと。

ニーチエの言葉だったか。「怪物と闘う者は、自らも怪物にならぬよう、気をつけるべきだろう。深淵をのぞきこむ者は、深淵からものぞきこまれているのだ」。

人殺しという怪物と闘うには自らもその身を落とすし、怪物にならないければならない。だが、自らだけが怪物と思うなかれ。あれはそういう言葉なのだろう。

俺たちの間に流れる一触即発の空気を良くも悪くも断ち切ったのはアスナだった。

「クラディール、血盟騎士団副団長として命じます。本日を以て護衛役を解任。別命あるまでギルド本部にて待機。以上」

なんの揺れもない平坦な声。冷たくも聞こえるが、苦悩や恐怖といった感情が見え隠れしている。こういうとき、俺は何も出来ない。キリトを横目で見ると、あちらもこつちを目だけ動かして見ている。何となく、考えを見透かされているような、そんな感覚を覚えたので目を逸らした。

「……………なん……………なんだと……………この……………」

辛うじて聞こえた言葉はそれだけ。恐らく俺に対しての呪いの言葉が口内で溢れているのだろう。少し、軽率だったかもしれない。

俺って奴の根本的な部分はきつとあまり変わっていないのだろう。自愛心が人一倍強い……………いや、自分のことしか考えていない。利己的な理由でデュエルをし、アフターケアのことなど一切考えていなかった。

自己の感情を好きに表に出す奴はタダの餓鬼だ。理性で己を律しなければならぬ。自分を殺すのと自分を律するのは別だ。あらゆる事態を予測、計算しなければ一から十まで自分でこなさなければならぬ。ぼつちは生きていけないのだ。

青い転移光に包まれ、白と赤の制服のプレイヤーが消えていくのを見届けたら、つい口からこぼれ落ちたように、意識せずに言葉を発する。

「……………なんか、悪かった」

「へ？　なんで？　むしろこつちが謝罪しなきゃいけないくらいで

しよ？」

心底不思議そうにこちらを見てくるアスナはどこか眩しくて、俺は目を背けた。

光があれば闇もある。花道を歩き続けている奴もいれば闇路を歩く奴もいるのだろう。

なんとなく、察する。

多分、恐らく、この世界が終わると同時に、こいつらとの関係も終わるのだろう、と。

人を信じることは、比企谷八幡にとってなによりも困難なことである。

天高く馬肥ゆる秋。

これは空が高く感じられるほどに澄みわたり、馬も肥えるような収穫の秋。秋の季節のすばらしさを言う言葉だ。

なるほど、確かに天は残り二十六層も残しているだけあって高く、時間が経つにつれ希望の芽も摘まれてしまっている。

日本では秋の名物といったら真っ赤に萌える紅葉や銀杏と答える人が大半だろう。だがそれは違う。

就職氷河期という言葉があるように、寒いとろくなことがない。つまり冬はろくでもない。そんな季節に向かっている途中、つまり人生街道を駆け落ちる途中の道筋が秋なのだ。

つまり秋とは……うん、なんだろう、自分の理論ながらよく解んなくなってきた……。

昨日も来たじめじめといった雰囲気、迷宮区までの道は昨日とは違い、これも血盟騎士団副団長の威光のなせる技なのか光が射していた。違うか？ 違うな。

「……よし、まず隊列を決める。キリト前衛、アスナ後衛、俺は見物だ。いいな？」

「異議あり！」

「却下」

キリトが逆転裁判ばりにビシツと手をあげたので、二文字四音で異議を却下する。キリト前衛、アスナ後衛、俺は見物、これは揺らがせねえ、絶対にだ！

「なんで自信満々なの……？」

拳を額に当て、考える人みたいなポージングを決めているアスナはさておき、俺はキリトを諭す。

「……いいか、キリト。まず統計学的に考えよう。アスナとお前がデュエルした戦績は一戦一勝、俺とお前がデュエルした戦績は同じく一戦一勝、勝率で言えば100パーセントだ。つまりお前が一番強いのは自明の理。ならお前が前衛をやるのも必然だろ？」

「む……騙されないからね？ めんどくさいからでしょ？」

「うんそうだな、解ってんなら話は早い、めんどくさいからキリト前衛な」

「ひ、ひどいよ……」

前衛命令を出された剣士は下手な泣き真似を始めて、長髪も相俟って顔が見えなくなる。

ふっ、そんな熟練していない泣き真似なんて――

「よし解った、俺が前衛をやろう」

――逆に引つ掛かるに決まっているだろ？

いや、本当に似ている泣き真似をするということは騙そうとしていることであり、逆説的にわざとらしくやるということは真実を言っているのではないのだろうか。あれ？ 何かよく解らなくなってきた。

「……こういうの、なんだっけ、チヨロイン？ って言うんだよね？」

「おいバカやめろ。男のヒロインとか誰得？ 俺、ルルル文庫は対象外なんだけど。少女漫画は読んでたけど」

小気味のいい足音が三つ重なる中、ふとアスナが問うてくる。

「ハチ君って、アニメとか漫画とかゲームとかラノベとかで好きな作品とかあるの？」

「あ……作品で、って言われると難しいが、俺はあれだな、バーダックが好きだ。死に様とかも本編で出てきてないのに印象に残るくら



いカッケーからな」

「バー、ダツク？ ……ゴボウ？」

「ドラゴンボールの主人公の父親だよ」

ドラゴンボールは国民的漫画だが、箱入り娘のお嬢様（予想）が知らなくても当然なのかもしれない。おもしれえぞ？ ドラゴンボール。おらわくわくすつぞ！

「うーん、私はワンピース派かな。色んな世界を旅したりするのって楽しいよね。仮想世界の魅力のひとつだよ」

「そうかもね、この景色だって、ビルが建ったり自然が伐採されてる現代日本じゃあまり見えないものね」

「そうだな、迷宮区のある閉鎖的空間も現代日本じゃなかなか味わえないもんね……」

「ネガティブすぎるわよ……」

遠回しに迷宮区に行きたくないと言ってることを悟れ。

ノリと中二とハイテンションで乗りきったけど、アイドル的存在といるのはやはり居心地が悪い。雪ノ下も高嶺の花な存在だったが、ファーストコンタクトの感想が性格最悪だからやってこれたのだ。

無双姫×2もいたら、俺の仕事なぞ本当に微々たるものだ。索敵、及び取りこぼしの掃討。俺がいる必要性が俺の存在感と並ぶくらいない。

「それにしても、ハチ君の隠蔽すぎすぎない？ 戦闘中にハイドできるって……」

「……まあ、敏捷と隠蔽だけが取り柄だからな」

「あれやったら、反応が遅れそうだね。初見殺しだよ」

「いや、キリトなら避けれんじゃねえの？ 言っとくけど、お前の反応速度も逸脱してるからな？」

「え、そうなの？」

お前並みの反応速度を持つやつがほしいいたら、攻略もずっと楽になってるだろ……。

さつきから疑問に思っていたことをふと思いだし、特に考えもせず口に出す。

「そういや、最強ギルドのNo. 2が一介のソロプレイヤーと一緒にいていい……に決まっていますよね、はい」

ふええ、やつぱりおうち帰りたいよお……。およそ女子の出せる睨みじゃないぞ。冷たい目ならお得意なんでしょうけどね。あれまじなんなの？ 一撃必殺のぜったいれいどなの？

「……ねえ、前々から思ってたけど、さ。ハチ君って、わたしと一緒にいたくない……。の……。？ もしかして、キライ……。？」

……。こうも泣きそうな声で言われると、返答に困る。積極的に一緒にいたくはない、いいやつだとは思う。だからこそ好きではない、だが、キライでもない。本当にキライなら、俺はこいつとの関係性を如何なる手段をもって断ち切る。

「……ああ、何か知らんけどフラッシング・ペネトレーターを喰らわしてくるのは嫌だな。せめて理由を言え、理由を」

「……も、もおー！」

大地を踏み鳴らすようにブーツで地面を叩き、ずかずか先に行ってしまう。真剣に言ったのに冗談っぽく返されたのが気に入らなかつたのだろう。いいか？ 涙目は目薬を注した後だと思え、だ。

「はあ……」

空は青く高く、俺たちを吸い込むかのように果てしなく広がった。

無双、という言葉は俺TUEEEEE！ という意味だと誤用されがちだが、本来の意味は二つとないことだ。

そういう意味では、目の前にいる狂戦士たちは無双ではない。黒白

の剣士たちが怒濤の如く相手を蹂躪する様は正に剣の舞だ。

当初の作戦通り、キリト前衛、アスナは後衛、俺は見物と完璧な隊列で戦闘をしていた。

「ハチ君もやってよ!!」

迷宮に響くアスナの声が、ぐわんぐわんと脳を揺さぶる。いや、必要なかったよね？ 入らせる気もなかったよね？

「いやー、あんだだけ完璧なコンビネーションに入っていけるやつがいたら、俺はそいつをでしゃばりと言うね、うん。実際に俺必要なかったろ?」

「それは……」

「まあ……」

……やだ、自分から言っておいてなんだけど、ちよつぴり傷ついちゃった。容赦無さすぎだろ、言葉は人を傷つけるんだぜ？ 伝えたことがあるなら、歌ってみるのもありなんじゃねーの？ や、急に歌われても困るけど。

「……ねえ、僕もう帰っていい?」

「なんで秩序恐怖症の青い山風……?」

あ、知ってんの？ 赤と白の捜査ファイル。すまん、てつきり二次元物にしか興味ないかと思ってたわ。

「……よくわからないけど、行きましょ。——次はハチ君前衛だからね!」

「えー……」

「まあまあ、私も手伝うよ。エイトはいつも無茶しちゃうんだから!」  
そうか? そうなのか?

他人から見た俺、自分で定義する自分。いつもこの二つはずれていて、合わさることはきつとない。そして、それをらしさと言うのかもしれない。

自分らしさは曖昧で、その人らしさは模糊としていて。俺たちに判ることなんて、非常に少なく。だから、勘違いをして恥をかいて間違つて傷を負つて……今の俺が形成された原因は、俺の無知だ。

だから、知りたい。理解したい。

俺という人間は理解されずとも。  
だから、いつか理解しよう。

「ホアアアアアアツ!?!」

なんでや! なんでリザードマンロードがこんなにいるんや!

剣と腕を休みなく振り続け、緑青色の鱗に覆われた体に傷をつけ、塵へと還す。そんな作業が延々と続く。

亜人対人間の剣戟は数の利があるリザードマンロードたちが有利だった。じわりじわりと後退していき、遂には背中には壁。百八十度見渡す限り<sup>リザードマンロード</sup>蜥蜴男。

こういう状況に陥ったとき、取りうる手段は三つある。

一つは各個撃破して全滅させる。一つは広範囲ソードスキル……例えば刀スキルの旋車などを使って一掃する。そして一つは突進系ソードスキルで無理矢理包围を突破する。

転移結晶で逃げる、というのも出来なくはないが、攻撃を食らえば転移は失敗するのでリスクがでかい。

さて、最初の手段は最前線の敵だと現実味がない。二番目は片手剣、細剣スキルは強い範囲攻撃を持ち合わせていないため却下。となると、消去法で三番になる。

「キリト、アスナ。俺がヴォーパルストライクで突撃して道を開くから、道の確保よろしく」

「えっ、ちよっ、ハチ君!?!」

「エイト!?!」

返事を聞かず、右肩の上に剣を置き左手を前に構える。紅いライトエフェクト。なにかに後押しされるかのように速く動く体。ジェット機のようなサウンドエフェクト。

髪をなびかせ、コートをはためかせ、一陣の風となって迷宮を駆ける。

三体ほどを串刺しにして数秒後に硬直に襲われる。とはいえ、口が動かなくならないので言葉を発することはできる。

「キリト！ アスナー！」

「やあつー！」

「はああつー！」

各々の気合いのこもった掛け声とともにソードスキルを放ち、リザードマンロードの包囲から脱出する。

スキル硬直中に二体のリザードマンロードはポリゴン片へと姿を変え、残りの一体が湾刀を振るわんとしてきたので体術スキルで仰け反らせて、止めを差し振り返る。

「はっー！」

「うああつー！」

光のごとく煌めく細剣は的確に敵の弱点を突き、光を喰らわんとするような刀身の黒剣は豪快に獣人を真つ二つにする。なにあれ、チートやん……。

所変わって、セーフティエリア安全地帯。俺氏、正座中ナウ。

「……ハチ君？ 今、ふざけたこと考えたでしょ？」

「へっ、ひゃう！」

心を見透かされたと一瞬だけ本気で思ってしまった、変な声が出る。そろそろSAOにもプライバシーの保護を実装するべきだと思いません。

「ハチ君、反省してないでしょ？」

「いや、反省すべきところが……」

「あるよ？」

言い切る前にキリトに封殺されたらぐうの音も出ない。なんかやったかな、俺……。

「……ねえ」

ポツリ、と。湿った声が染み渡るように広がる。一石を水面に投げたように、その言葉に含まれる感情がありありと解ってしまう。

「ハチ君にとって、わたしは、わたしたちは、そんなに頼りないの……？」

「……………」

頼りない訳じゃない。強さは認識しているし、俺なんかよりもこいつらは遥かに強い。

でも、それでも、俺は信じることができない。

過去の俺が囁き、嘯き、唆す。【信じたら裏切られる】と。

【過去にあつたことをお前は忘れたのか】と。

理解したいと、思っているはずなのに。

信じたいと、願っているはずなのに。

こいつらの道を見ていたいと、確信したはずなのに。

俺は答えることができなかった。

誰もいない迷宮区の寂寞、それが俺の答えを雄弁に物語っていた。

未だ彼は自分自身の心に気づかず、まちがい続ける。

静かなことを表す単語は多くある。

沈黙、閑静、静寂、静けさ、閑散、閑寂……。しかし、逆に言えばこの単語は静か、ということしか表せない。

静かさにも色々ある。

学級会のような重々しい沈黙だったり、言ったことがすべてしけたり、恋愛漫画のような甘い無言の空間だつてあるのだろう。

いわゆる空気、というやつだ。

無言の空間。会話のないパーティー。言葉を発しない俺たち。

先頭に行く純白の騎士はこちらを振り返らず、俺たちの間にいる漆黒の剣士はチラチラと俺たちを見比べる。

何てことはない。人生のレールが離れるときが来ただけなのだろう。

元々俺は独りでやって来た。できないことはやらなきやいいし、そこそままでなら大体何でもやってこれた。

だから俺は人に任せる、ということができない。幾度となくともに死線を潜り抜け、こうしてパーティーを組んだことがあるこいつらでも俺は『いつか裏切るのではないか』と思ってしまう。

信用はできる。だが信頼はできない。俺という人間はそうなのだろう。

頼れ、と言ってくれたやつなど今までにいない。こちらが勝手に頼ったら容赦なく裏切られる。SAOではそれは文字通りの命取りなのだ。

情報屋や、商人プレイヤーのバックアップがないと攻略組は戦えない。

このSAOではさすがに俺も独りでは戦えない。だが、馴れ合うつもりなぞない。こいつらだつて、なんやかんやで二年間ずるずる続いてきただけの関係なのだ。

俺には、失うものなどない。

なぜなら、なにも手に入れたことなどないのだから。

戦闘でも危ない場面が増えてきた頃に、次の安全地帯セーフティエリアに到着する。当然誰も口を開かず、各々持参した昼飯を口に運ぶ。

……なんか、マジいな。

いつも通りの出来なのだが、なんか不味い。トマトみたいな味がする。酸っぱくて、少し苦い。

それでも一応食べ物は食べ物なため、無理矢理胃に詰め込んだ。口直しにレモン水みたいな清涼飲料を飲み、リフレッシュ。だが口にはまだ苦々しさが残る。

「あーの……」

最初は強く口に出したが、凄んだつもりはないのだが俺とアスナが顔を向けた途端に尻すぼまりしてしまう。

「その……戦闘も危ない、場面が……だから、その……隊列を……」

遂には囁くような声になってしまい、迷宮にはまた沈黙が降りる。さすがにいたたまれない。

「……まあ……、そうだな。でも隊列は今がベストだろ、多分……」

いたたまれない？　なんでそんなことを感じる？

胸にしこりがあるような違和感を覚えつつ、俺が絞り出した言葉に返答をするやつはいない。

なんで俺はこいつらと関わることになったのか。

……気紛れ、だな。そうでなかったら俺はこいつらをただの物……攻略組の一戦力として扱っていたにすぎない。

俺はこいつらを、こいつらは俺を利用し百層の攻略達成を目指す。ギブアンドテイク。



「……？」

しかしなぜかしつくりこない。頭のどこかで否定してくるような感覚を覚え、考えることをやめる。

——本当に大事なものは目には見えないんだよ。

ふと、その一節が頭をよぎった。

昼休憩もそこそこに、俺たちはまたボス部屋の搜索をしていた。

「ふるふるぐるぐるるるうー！」

お前声帯ないのにどうやって声出してんだよと言いたくなる風貌の骸骨騎士……正式名称《デモニツシュ・サーヴァント》は無骨な剣をアスナに振るい——、あっさりと弾かれる。

「……………」

通常、細剣使いと骸骨系のモンスターは相性が悪い。面で攻撃する片手剣や両手剣ならともかく、点で攻撃する細剣や槍は表面積が小さい骸骨系モンスターだと攻撃が当てにくいのだ。

そんなことにも構わず、【閃光】アスナは的確に騎士のウィークポイントに刺突を当てていく。

表面上こそ冷静に見える——表情が冷たすぎて、俯瞰すれば恐怖をすることであろう——顔をしているが、内心は憤慨していた。

もちろんそれはエイト——八幡に向けているのも多少あるが、一番は自分自身に対するものだった。

——悔しかった。二年間命を預け合いながら七十三もの階層を突破してきて、未だ信頼されていないことが。

——悲しかった。未だエイトが誰かを信頼せず、今なお独りで戦おうとしていることが。

何より——許せなかった。エイトからの信頼を勝ち取れない自分自身が、なによりも。

最初の印象は、偽善者だっただろうか。

頼まれてもいないのに、見知らぬ人を助けて満足感を得る人だと思っていた。周りの人に負けないようにただひたすら親の言いなりになってきた自分とは違う人種だと。

次に抱いた印象は、変態だった。

いや、あの裸を見られた出来事は彼が悪いのではないことは頭では理解している。だが親以外の異性に裸を見られたら誰でもああなるはずだ……。多分。

決してこちらが良い態度をとっていなかった中、それでも彼は道を指し示してくれた。あの時言われたことを今でも鮮明に覚えている。

『——アスナ、この世界……《ソードアート・オンライン》はクリア不可能じゃない、だろ?』

思えば、当時は自覚がなかったが、あの時から彼に惹かれていたのかもしれない。

彼は確かに証明してくれた。SAOのクリアは夢物語じゃないと。いや、『してくれた』ではない。『続けている』。最前線の地にその二本の足で立ち続け、相棒の剣を振るい続けることで。

不謹慎だが、嬉しいのだ。彼が最前線に立ち続けることが。

二年近くも前の言葉を覚えている気がして。それは今でも自分の芯になっていると断言できる。

あの時から、命をなげやりにするのは止めた。

あの時から、いつか彼の隣に並び立ち、支えたいと思った。

あの時から……わたしは、《結城明日奈》は、彼に恋をしている。だから、今。

わたしは彼にわたしを認めさせてみせる。

俺は、なぜ人を信じれなくなってしまったのか。

今までそれが当たり前前だったのに、頭の中にその素朴な疑問がずっと根付いている。

空欄を埋め、完成した定理。

正しいはずなのに、どこか足りない。何かの計算を俺はまちがえた。

さっきまで正しいと思っていたものが、段々とまちがっているんじゃないかと思えてくる。いつもの俺、いつもの俺のやり方。なのに、解らない。

俺は、自分の行いを疑ったことはない。正しいかまちがいかなんて関係なかった。やり方を一つしか知らないのだ、俺は。

今回も同じことをした。済まそうと思えばそれで済ませられる。

計算終了。解は出た。まちがっていない。

俺が一人で敵に突っ込んで、二人がその間に包囲を突破する。……何がダメだった？

あれが一番効率が悪かった。結果として群れを殲滅させることもできた。成果は充分すぎる。

……解らん。

必死に考えているからか、俺は気づかなかった。

——そもそも、なぜこいつらがこんな顔をしているのか突き止めようとしているのか、と……。

彼が求めるものは、未だ彼自身にもわからない。

特に意識したわけではない。

だがあの時、俺はこいつらに頼るといふ選択肢は頭になかったのだ。

意識したわけではないからこそ、その時頭に思い浮かんだのは俺の内面を映したものだ。独りでやる、というものだ。

悪いことではないはずだ。

皆でやる。皆で協力する。素晴らしい、麗しい、美しい仲間理論だ。じゃあ、一人でやることは悪いことなのか？ 自分の考えを押し付け、他人に自分を殺させ、自分と違う考えだったら異教徒だと攻撃する。

Q. 一人で出来ないことがあったらどうしますか。

誰かに頼る？ 皆でやる？ 一人で出来なくても皆となら出来る？ ……否だ。

所詮人は自分しかコントロール出来ない。解らないこと、出来ないこと、やれないことを人に頼って、頼った人が自分を裏切るなんてことはザラだ。騙し嘯き欺く。誰もが仮面を被り近づいてくるのだ。

自分が救いを求めても、誰も助けてくれない。外部からの助けなんて有り得ない。助けようとすれば、自分も酷い目に遭うから。

ならば救いを求めた者をいえないものにし、不幸を一身に背負わせ、そいつを迫害した方が自分の身が守られる。

この世に誰も彼も助けられるヒーローやスーパーマンなんて存在しない。誰にでも都合のいい人なんていない。

なら、諦めるしかないのだ。自分の環境を享受し、耐え続け、歯を食い縛ってもけして膝を屈することは許されない。諦めても敗けは認めない。なぜなら俺は間違っていないのだから。

それを雪ノ下雪乃は続けてきたのだ。いや、自分の環境を変えようと、間違っているのは周りだと正しくあらんとした。

強く。

正しく。

美しく。

誰かを信じるということは、相手の言うこと全てを肯定することだ。それは信頼などではなく、依存に他ならない。

俺に優しいやつは誰にでも優しい。

だから俺は優しいやつは嫌いだ。

言葉でどんなことを言おうとも中身は空っぽで結局は俺の味方になってくれたやつは終ぞいなかった。俺と他の友達を秤にかけ、切り捨てたのだ。

それ自体に文句はない。俺が絶望したのは言葉の空虚さだ。口ではなんとでも言える、ということに絶望した。だからこそ、俺は雪ノ下雪乃に羨望したのかもしれない。

誰もが薄っぺらい言葉を並べ、結局誰かを切り捨てることになる。ならばこちらも切り捨てよう。他人という有象無象の一切合切を全て。

他人に任せるなら自分でやる。頼れという言葉なんぞ信じない。無償の信頼なんて有り得ない。

この世界は俺が人を信じられるようになるかもしれない最後の機会だったのだろう。

俺は言葉が欲しいんじゃない。

ただ、欲しいものがあつたのだと、思う。

そして、それは恐らく手に入らないのだろう、と。

ボス部屋発見である。

ボスと聞くと未だ某コーヒーを思い浮かべるのは俺だけだろうか。二枚扉を見上げ、そんなことを考える。

相も変わらず会話は無い。

「あ……っと、取り敢えず、軽く交戦して情報を探ろつか？」

「そーだな」

会話終了。

元来会話が得意じゃない俺とキリトが長く話すことなど出来るわけがない。別に悪いことじゃない。出来ないのに無理矢理会話を広げようとする痛い目に遭うからな。ソースは俺。

ちらり、と目配りをしたアスナはすぐにそっぽを向き、いつの間に取り出したのか転移結晶を持った手で扉を押した。

重厚な音をたて、扉が開いてボス部屋が露になる——はずなのだが、生憎と部屋は明かりがなく中の様子までは解らない。

——と。

壁に付着している多くの松明が唐突に発火し、青い炎をゆらゆらと燻らせる。……どここの虚無界ゲヘナの神？ 息子が祓魔師エクソシストにでもなんの？

あいつも青い炎使えるけど。

輝く双眸。それと目を合わせると、カーソルが照準される。《The Gleam eyes》……輝く目。実にそのままのネーミングである。

ボスに限らず、アインクラッドのネーミングは結構そのままだったりするものも多い。今回のボスは『目』というのがポイントだろう。《魔眼》バッドアイズ、という単語がSAOにはある。非常に厄介極まりないスキルだ。視線を合わせると、モンスターによって違うがデバフにかかる（ただし、今のようボス部屋から出ていると効果はない）上にモーションも解りづらい。

魔眼があるモンスターは少ないが、魔眼があるかないかで戦う危険度は段違いと言ってもいい。デバフを避けたいなら目を合わせなければいい。だが戦闘中にそんなことをするのは愚の骨頂だ。

つまり、今のところ有効な対処法がない。

だから今三人でボスに挑むのは大変危険であり、取り敢えずボスの

見た目と武器だけを見て帰るのが吉だが……。

そんな俺の安全第一の考えは、前行く白衣の閃光に呆気なく砕かれた。

「アスナ!？」

「あんのバカ……」

滅多にすることのない舌打ちを盛大にし、アスナに追隨する。本当になにをやったんだ、あのバカ……。

部屋の中央にいたボスとアスナが正に肉薄する瞬間、俺はアスナに追い付き、跳躍。

ソニック・リープを容赦なく顔面に叩き込み、わずかに怯ませ逃げる隙を作る。

「逃げろー!」

しかしアスナは逃げない。ギリツ、と歯を食い縛り、何かに怒っているように手を固く握っていた。

着地と同時に前転回避。振り下ろされた斬馬刀が破壊不可の地面を叩き、地震のように震わせる。まともに当たったら一撃死も有り得るな……と、冷や汗をかきながら冷静に分析する。

「やあっ!」

斬馬刀を振るうボスとともに剣を交わすキリトに戦々恐々としながら、俺はアスナのところまで疾走する。

「おい、撤退するぞ!」

「……ええ、……ごめんなさい……」

何に対する謝罪なのか。無茶な偵察戦をしたことか、それとも――

「……キリト、撤退するぞ!」

「りよーかい!」

キリトが相手の得物を思いつきり跳ね上げた時にすかさずスイツチ、ヴォーパルストライクを繰り出す。ギリギリで反応され、剣の腹でガードされたがノックバックはした。なら充分だ。

「今だ!」

俺が合図を出した途端、俺達は全力で遁走する。後ろから響く悪魔

の咆哮を、ひたすら無視して。

「……何をしてんだ、お前は」

「……………」

俺の責めるような言葉にも沈黙を保つ。黙秘権は確かに認められているが、今この時に於いてだけは撤廃したい。

まあ、俺が糾弾する権利もアスナを責める意味もさしてない。そう割り切り、一言も何も話さず、キリトに無言でバトンを渡す。

「はあ……………」

ささくれだった気持ちを押さえつけるため、ガシガシと思いつきり頭を搔く。

人生とは選択の連続である、とは誰の言葉だったか。

人生とは選択の連続であるのならば、人生とは後悔の連続であるということだろう。なぜなら、後悔とは選択しなかった一方の未練なのだから。

自分がしてきた選択は全て正しいと豪語できるほどの自信家であれば、後悔は積もり重なる。

人が取り選べるルートは本当に極僅かしかない。そのほんの僅かしかない選択肢でさえ、誰もが悩み、悔やみ、苦悩する。

そこまでして生きる意味は、長くも短くも感じる人生で見つけられるものなのだろうか。

強い人だけが生きればよい。彼の文豪太宰治著の斜陽では、そんなことを書いていた。生きることは辛いのだ、ましてやこんな命懸けの



状況では俺たちの命は風前の灯。こんな状況だからこそ、俺たちはこの世界に來た意味を探さねばならないのだろう。

俺は……、俺は、欲しいものがあつたのだと思う。

まだそれははつきりと見えていない。きつと、真面目にそんなことを言ったら馬鹿にされるものかもしれない。だが俺にとっては何よりも欲したものだ。

詰まるところ、俺は何もかもが中途半端なのだ。

裏切られて、傷ついて、他人との関わりなんぞ持たないし、それでいいと思っていた。

一人でいることは今も好きだ。だが、知ってしまったのだ。自分の世界に他の人がいる心地よさを、奉仕部で。

だが、それも結局半ばで終わってしまった。

果たして、俺の求めた何かは存在しうるのだろうか。

謂わば、これは彼と彼女らの今昔独白。

思うに、希望とは絶望と表裏一体なのだ。

人は何かを手にいれたとき、それを失うことに恐怖するのだ。

ハイリスクハイリターン。

よく出来た言葉だと思う。

リスクを恐れていては大きなりターンなど得られない。逆にリスクなしで手にはいるリターンなど、絶対に虚偽だ。

この世界に来て思い知らされたのは、俺の心の弱さだった。

頭では解っているのに、もう一度あの部屋に行きたくて。何回も裏切られ知っているはずなのに、結局人を信じることを諦められずに攻略組に参加した。

……正直、楽しかった。

命を懸けたデスゲーム。だからこそ、自分を偽る仮面なんてないこの世界。そんな世界で、俺は心の奥底で信じていた。人は美しいものだ、信じてもいいものだ。

この世界でゆっくりと人を見つめていたいと思う俺と、早く帰りたい俺がいた。

S A O 開始初期は、俺は攻略の鬼も真つ青の効率主義であったのだろう。キリトをただの情報源として扱い、アスナを助けたのだから、卓越した剣技が早期攻略のために必要不可欠になるであろうことを予期したからだ。

——どこまでも、俺は浅ましかった。

⇔

私はどこまでも臆病者だった。

祖父は厳格で、私や義妹に剣道をするように強いてきた。齡にして二桁にも及ばない私たちがそんな祖父に逆らえるわけもなく、ただただ竹刀を振り続けた。

——そんな時、私はコンピューターに出会ったのだ。

内気な私にとって、インターネットで外と繋がっているコンピューターは無限の世界が詰まっている宝箱のようなものだった。

のめり込めばのめり込むほど、祖父からの叱責は多くなり、怒声を浴びせられた分だけ私は更に違う世界に惹かれていった。

そして、遂に私を見限ったのか祖父は私にもう剣道をやれとは言わなくなった。その代わり、義妹に対してよりいっそう激しくしごいていたが。

二階の自室。小さな小さな私の世界から、私の人身御供とされより多くの回数竹刀を振るようになった義妹を見たくなくて、そつとカーテンを閉めた。

私にはなんの才能も才覚も能力もなかった。

自分から逃げ出したくせに、めきめきと剣道の実力を伸ばしていく義妹に羨望した。義妹に向ける感情ではないのだろうけど、どうしようもなかったのだ。

惨めな自分を認めたくなくて、段々と義妹とは疎遠になっていった。

劣等感にまみれた生活で、私を救ってくれたのはやはりインターネットだった。

画面の中の武器と体をマウスを動かして、キーを叩いて強大な敵を倒すだけで誰もが私を誉めそやし、称えた。

幸い依存はしていなかったが、暇があればパソコンを動かして、MMORPGのページを開いた。

——外から竹刀を振る際に漏れる、義妹の烈々とした声は、ヘッドホンに遮られて聞こえなかった。

⇔

私は親の傀儡だった。

列車のように親が用意した人生のレールをただ走り続け、生涯を終えるのだろうと常々思っていた。別にその事に不平不満を抱いたことはない。当然の事だとさして疑問も持たなかった。無意識だっ

だが、多分私は心の中で恐れていたのだ。母から見限られることを。ただ親の言う通りにやっていたらいい。

そんなことを本気で思っていた私は、自分で考え、思い、判断することはなかった。一言で言うならば、依存していたのかもしれない。  
結城明日奈  
そんな私は、実に脆かった。

自発脱出不可。

唯一の脱出方法は百階層までの到達。

そして……命懸けのデスゲーム。

どれもこれもが異常事態<sup>イレギュラー</sup>。そんな中で重大な決断を今までに一度もしてこなかった私は、自分が何をすべきか、何をしたいのかが判らなかつた。

——この時、私は十五年の人生で一度も「自分」を持ったことがないことに気づいた。

⇔

総てに於いて、創造することは困難で、破壊することは容易い。

それ自体に文句はない。簡単に手に入れられるものなど、ただの欺瞞でしかないのだから。

ただ、もがいて苦しみ足掻いて悩んで手に入れたものすらも壊れてしまうのではないか。そんな疑念が頭の中にこびりついて離れない。

苦しんでやっと手に入れたものも、虚偽なのだろうか。

何も手に入れたことのない俺には判断しかねる。いつだってまちがえて、いつだって勘違いをして、思い違つて。そして、俺は何も理解できなかつた。

相互に完全に理解をするなんてできない。そんなことは解つていない。

完全に理解をしたいだなんて、酷く傲慢な願いなのだろう。

それでも諦められないものがあるから、諦めたくないものがあるから。

だから、帰るのだ。

そのためなら、俺は……。  
SAOこの世界にいるであろう茅場晶彦間だつて。

——殺す。

⇔

些細なことだけど、誰にも言っていないことがある。私がネナベプ  
レイをしていた理由だ。

なんてことはなく、とつてもちつぽけな、私の劣等感から来た理由。  
——少しでも、変わりたかった。

臆病な私が創り出した薄い鎧。それがあの姿だった。そんなもの  
は希代の天才にあっさり剥がされ、素の私が露になってしまった  
が。

怖くて辛くて苦しくて、ちつぽけな私が攻略に乗り出したって役に  
なんて立たないと思つてた。

でも、全てが終わつて始まつたあの日。エイトは遙かな蒼穹を力の  
込もつた双眸で見詰めていた。

——違う。この人は、私とは違う。

自分を、諦めていない。

帰りたい怖い家族に会いたい悲しい……。様々な感情が縋い交ぜ  
になって、私はあの時、エイトを引き留めてしまった。

その後だつて、β時代の情報を提供して私が助けて来たように端か  
らは思われるだろうが、その実助けられてきたのは私だ。

……私達は対等ではない。

エイトを形容する言葉は様々だ。今でこそ《無剣》が一般に呼ばれ  
ているが、前まではもつと色々な呼び名があつた。

攻略組でも一、二を争う敏捷力と回避能力を活かし、攻略組の一番  
槍とタゲを取り続ける壁役を担っていたことからついた名は  
《犠牲サクリファス》。戦闘に於いてもつとも危険度が高い二役を独りでこなして  
いたことが由来だ。

それだけではない。

ビーター、ラフコフ、人殺し……彼は攻略組でありながら悪名高い。それも、殆どが攻略組わたしたちのせいだというのに……。

彼がビーターだと言われるようになったのは、私がベーターテスターだと自分から打ち明ける勇気がなかったからだ。彼がラフコフだと言われるようになったのは、一人の女の子を守ろうとしたからだ。彼が人殺しだと言われるようになったのは、攻略組わたしたちの命を一人でも失わないように、人殺しの罪を一身に背負って戦ったからだ。

だというのに、私は彼に何もしてあげられなかった。いや、してあげられなかったというのは些か上から目線かもしれない。

リザードマンの群れに単身突撃し、活路を切り拓いた。また、助けられた。

チリチリと頭の中にスグが祖父に厳しく指導をされているビジョンが思い起こされる。

——また、眼を瞑り耳を覆い、見て見ぬふりをするの？

楽だろう。そっちの方が容易く簡単だろう。けど、否だ。

恩も返していない。それもある。でもそんなことは関係無い。私がかしたいと、エイトを守りたいと思うから、やる。

——例え私が劣等品だとしても、心の赴くままに行動するのは赦される、よね？

⇔

——あの日。

私が茅場晶彦と名乗るアバターの話聞き終え、真つ先に思ったのは『宿題をやらなきゃ』だった。

そんなことあるはずない。脱出不可？ 百層までの到達？ 馬鹿な、そんな冗談は良いから早く出せ。

現状から逃避していた私にデスゲームの開始を認識させたのは、周りの阿鼻叫喚だった。

落胆と、絶望。

二つの感情だけがせめぎあい、わたしはこれまでなんだと、そう

思っていた。

わたしって……何？

答えは出なかった。何故、どうして、わからない。親の言うことだけを聞き、親に見捨てられないために行動した。わたしの世界にわたしはいなく、登場人物キャラクターは親だけ。

そして、わたしはわたしがあたしでいるために、そしてわたしを見つげるために剣を取り、狂ったように戦い続けた。このゲームはクリアできない。なら、いつ死のうと構わない。だけど、この世界には屈しない……それだけが、わたしの原動力だった。

——そんなわたしを変えたのは、一層迷宮区で会った紺の剣士。

ピンチの時に颯爽と駆けつけて助けてくれた、なんてドラマチックな出逢いなんかじゃ決してなかった。

こちらの心情を見透かすような腐眼はむしろ不快だった。

それでも

——この戦いで証明したらどうだ？ ……お前は这个世界になんか負けやしない……って。

——お前は強くなれる。

——この世界……《ソードアート・オンライン》はクリア不可能じゃない、だろ？

今も残っているその言葉に、何度助けられ、励まされ、支えてもらっただろうか。

なればこそ、次はわたしの番だ。

——わたしは彼の隣に並び立ち、彼を助け、励まし、支えてみせる。

それでも、比企谷八幡の基本原理は変わらない。

安全地帯にとどまること数十分。俺達は極東武装集団《風林火山》のメンバーと意図せず合流した。どうやらクライン達も攻略に来ていたらしい。

「しっかしよお、エイト。前々から思ってたけどよオ、お前さんギャルゲー得意だっただろ？」

「……なんだよ藪から棒に」

確かにフォトカノ、ラププラスなどのギャルゲーをやってはいた。あれだ、現実の理不尽さに触れると二次元世界に行きたくもなるんだ。……まあ、今いるここも二次元世界と言えば二次元世界だが。

「いや、おめエがキリトとかアスナさんとかと仲良かったのは重々解っていたつもりなんだがよオ……。……なんつーか、うまく言えないけど、なんかあったんか？」

「いや、全く」

そう、何も無い。

元から俺たちには何もなかった。信頼も信用も思いやりも慈しみも気遣いも。

それでも幾何かの時を重ね、やむなく命を預け合い、約二年の時を掛け、こうして七十四層の地を踏みしめている。その過程で俺達が一時的にパーティーを組んでいたのは、『なんとなく』とか『成り行きで』なんて言葉でしか表せない曖昧模糊としたものなのだろう。

アスナはよく判らないが、俺はキリトの情報を求めてパーティーを組んでいて、キリトは異常な状況下で独りで居たくなかったからパーティーを組んでいた。だが、俺達の根底にあったのは、『死にたくない』という同じ感情。——の、はずだった。

今は解らなくなってしまった。

俺はぼっちだ。やるのがなさすぎて培われた観察眼は人一倍あると自負しているし、物事を深読みする癖と相俟って、相手が何を考えているか『心理』を読み解くことは出来る。だが人の機微は解つても、『感情』を読み解くことは出来ない。



自分と同じだとシンパシーを押し付け、解った気になってたのかもしれない。自分でも知らないうちに体内を駆け巡り、侵食していく遅効性の毒のように。

「……いや、俺は多分理解していた。」

怖かったのだ。俺は。キリトとアスナ 雪ノ下と由比ヶ浜この二人をあの二人に同一視してしまいそうになることが。現実でのあの時間が、軽くなつていくようなことが。

それは個人の否定であり、冒瀆である。それでも知れば知るほど重なつていく。見た目も性格も雰囲気も、似ているとは言い難いというのに。

「……そうか。おめエは無茶しちまうところがあるかな、ボス戦とかいつもヒヤヒヤしてたんだぜ?」

「最近ボス戦出てなかったけどな」

「揚げ足取んじゃねえよ、可愛くねーな」

「俺が可愛かったら気持ち悪いだろーが……」

比企谷家で可愛いのは小町だけで充分だ。小町……何をしてるんだろうな……。彼氏とか作つてたらぶん殴るよ? 彼氏を。や、俺が殴る前に既に親父が殴つてそうだな。親父小町好きすぎて小町に引かれてるし。うわー、気持ち悪いわり。

「確かに可愛かったらエイトじゃねえよな」

「お前も無精髭に悪趣味なバンダナ、それなのに待みたいな格好じやなきやアイデンティティーないよな」

「……あ? おめエこそ腐った眼とアホ毛がなきやアイデンティティーねえよな」

「……はっ、残念だったな。もし腐った眼がなかったら俺はそこそこイケメンなんだよ」

なんなら眼鏡とかかけて眼を隠せば女子にモテちゃうまで……ないな。そもそも眼鏡が似合わねーだろうな。やだ、自分を冷静に見つめ直すと希望が一つずつ潰えていっちゃう!

俺はクライント、キリトとアスナは他の風林火山メンバーと暫し談笑していると素敵スキルに引つ掛かった奴……いや奴等がいた。キ

リトも俺と同じ方向を向いている。規則正しい足音が迷宮区内で反響し、徐々にこちらに近づいてきていることが判る。

「『軍』か……」

唸るように呟く。

俗に攻略組と呼ばれるプレイヤーは、よくも悪くも我が強い。それを纏め上げるものは様々だ。血盟騎士団ならカリスマ性、聖龍連合ならギルドに在籍することで手に入れられるレアアイテム、軍ならギルドに在籍することで手に入る威光。

ようやく見えた軍のメンバーの数は十二人。どいつも似たり寄ったりな装備をしているが、一人だけグレードが高い鎧を着込んでいる。恐らくこいつが頭だ。軍の連中はここまでノンストップで攻略してきたのか、疲弊の色が濃かった。

頭の男が一言「休め」と言うと、残り十一人が俺達のいる場所とは真逆の安全地帯セーフティエリアの地に座り込んだ。そんな部下には目もくれず、頭のプレイヤーはこちらに歩いてくる。

「アインクラッド解放軍、コーバッツ中佐だ」

「うへえ……」

誰かが思わず呟いた。すると、なぜか視線が俺に集中し、軍部隊の隊長の睨みも向けられる。……あ、今の声って俺？

「……何か？」

「いえ、別に。それより何か用ですか？」

立場が悪くなったらすぐ話題転換。これ大事。特に政治家になりたい人はこれは必須スキルだヨ！

「君らは、この先も攻略しているかね？」

「まあ、はい。ボス部屋前までは」

「うむ。ではそのマップデータを提供してもらいたい」

「まあ、いいですよ。……キリト、アスナ、いいか？」

「え？ ……あ、うん、いいよ」

「……私も、別に構わない」

一応三人でマップピングしたので許可を貰っておく。しかし正にマップデータを渡す寸前、それを制す声が聞こえた。クラインだ。

「おいおいおい、エイトよオ……本当にいいのか？ おめエさん達が命懸けで埋めたマップデータを簡単に渡しちまって」

「ああ、別に渡したからってどうこうなるもんじゃない」

送信する。ちゃんとデータを受け取れたのか、首を少し動かした。一応、忠告しておいてやろう。何も忠告せずに死なれるのは目覚めが悪い。

「ボスに手を出そうとか考えてんならやめとけ。せめて万全な状態で挑んだ方がいい」

「私の部下はこの程度で音を上げるような軟弱者ではない！」

いや、思いつきり疲弊してんじゃねえか。下の者の状態も見極められないようなら、こいつは指揮官失格だろう。

「……ハッキリ言ってる。このままボス攻略をやろうってんなら、お前らは死ぬ」

「……ほう、なら、試してみるか……？」

「ちよ、ちよつとエイト……」

不穏な空気を感じ取ってか、キリトが仲裁に入ろうとする。もちろん戦う気なんて俺には更々ない。

「いや、試さねえよ。ここまで忠告しといてまだボスに挑むかはあんな達の自由だし、それで死んでも自己責任だからな」

この世界は制約やしがらみが現実には比べ少ない。それは俗に『自由』と呼ばれるのだろう。だが、それが無条件に良いものかと訊かれたら答えはノーだ。『自由』は全面的に良い意味だと思われ勝ちだが、裏を返せば何の庇護も保護もないことなのだから。そんな世界では自分がした行動の全責任は自分の物だ。

……そう、だから俺がこの一ヶ月間、ラフィン・コフィンの壊滅のため人を殺し続けた責任も全部俺の物。

俺はユニクススキルによる騒動がおさまるまでの二週間と、ホームで休養していた二週間以外、投獄されていないラフコフメンバーの投獄……若しくは討伐をしていた。

ラフコフ討伐戦では、ラフコフ全メンバーを淘汰出来ていない。攻略の邪魔になる不穏分子は駆逐しなければ、やがてまた一つの勢力に

なりかねない。それも一区切りを迎え、七十三層からようやく攻略を再開し始めたのだが、ラフコフのトップ……P○Hをまだ排除できていない。

頭がいれば、組織は何度でも息を吹き返す。それは二十五層で壊滅的打撃を受けてもまた最前線に舞い戻ってきた軍が証明している。それがヒースクリフやP○Hなど、カリスマ性があるなら尚更……P○Hに至っては、もはや洗脳と言ってもいい。

個は弱く、集は強いと思うだろうか？ 確かに、物理的な意味では個は集に勝てない。だが、精神的な意味なら個は集に勝る。個には個のやり方というものがあるのだ。

集団とはリーダーを失い、統率するものがいなくなれば脆いものだ。しかも無能が上に立とうとも抑圧によってロクに逆らえない。何故か？ 迫害が怖いからだ。

先の命より、今の安寧を取る奴はバカだと思っただろうか？ 言葉だけで聞いたならそう思うだろう。だが、今日の前で去っていく軍の部下達はその状態に陥っている。さながら、集団のしがらみは底無し沼のようではないか。1+1は必ずしも2にならないことを、教育機関はそろそろ教えるべきだ。

互いに足を引っ張り合っていく姿は見ていて浅ましく、滑稽で、無様だった。

その部屋に、彼の姿はもうない。

軍の足音が遠ざかっていき、完全に聴こえなくなっていった辺りで俺達はようやくよく行動を再開した。嵐のような奴らだ……。

「……んで？　どーする？」

迷宮区の攻略方針の再設定……のことではない。今し方居なくなつていった軍のことを言っている。

問題です。一度失墜した権威を取り戻すにはどうしたらいいですか？

答え。失墜した原因を上回る偉業を打ち立てる。

一行は結局《軍》を追ってボス部屋へと足を向けることに決まった。俺の忠告に耳も貸さなかったあいつらの自業自得とはいえ、さすがに死ぬのを解っていて見過ごすのも目覚めが悪い。それを言ったらクラインに「おめエらしいな」と笑われたのは心外だが。

さて、そんな俺達の目の前には多数のリザードマンが立ち塞がっている。

「エイト、下がってて、邪魔だから」

キリトに有無も言えないですごすと引き下がる姿を風林火山の面々から憐憫の眼で見られてしまった。おいクライン、なんだその「キリトとアスナさんに逆らえないのは相変わらずなんだな」と言いたげな眼は。違うよ？　逆らえるよ？　ただ年上のお兄さんが大人げなく年下の子達に接するのはどうかと思ってるだけで。それとキリトとアスナが怒ると怖いからだけで。……や、ダメじゃん、逆らえ

ないじゃん。

何故か気合い充分な二人の前にリザードマンはデジタルデータの体を次々にガラス片にして散っていく。ズゴゴゴゴゴ……と効果音に描かれそうなほどの気迫がビシビシ伝わってきてちよつと怖い。なに、お前らサイヤ人なの？ いやスタンド使い？

前々からこいつらが戦闘狂——やっぱ戦乙女ヴァルキリーか？ いやブリュンヒルデだな。まあなんでも良い——だということは認知していたのだが、それともなにか違う気がする。鬼気迫ると呼ぶのが正しい。

風林火山も戦闘に参加して、完全に俺は手持ちぶさたである。

傍観者。

かつこよく家以外での俺の立場を呼称するならこれだろう。……ちなみに未来日記は持っていない。

未来は誰にもわからない。それは至極当然のことで、だから誰もがまちがえる。いや、俺は何をまちがえたのか、そもそも何が問いなのかもわからない。

ナーヴギアは感情の電気信号を解析し、擬似電気信号を仮想体に投影しているわけではなく、脳から送られる電気信号を脊髄でカットし、そのまま仮想体にトレースしているのだ。

つまり、希代の天才茅場晶彦ですら人の感情を完全に読み解ける機械を作り上げられなかった、ということだ。

果たして、天才ですらない凡人は本当の意味で人の気持ちを理解することなど出来るのだろうか？

答えは否だろう。

俺は言った。『誤解は解けない。もう解は出てるからな』と。

されど雪ノ下雪乃は言った。『なら、もう一度解き直すしかないわね』と。

問題を解いて、まちがえて、答えを探してまた迷って、問題を解き直して、正解に近づく。

だから、もう一度解き直そう。

行軍というものは大勢が規則正しく歩き進むため進行速度は遅い。俺達は走っているのにも関わらず、未だ《軍》には追いついていない。

「転移結晶で離脱したんじゃないか？」

「それはないな。ざっと見ただけだが、あいつらは二パーティー……十二人くらいいた。転移結晶で離脱したらデカイ損失だし、カツアゲ紛いのことをしてまでマップデータを手に入れる必要もない。よつて——」

「ああああああ……」

その時、俺の次の言葉を裏打ちするように地獄の底から響いてきたような叫び声が耳に届く。

「——あいつらは、ボスに挑んでいる」

俺の言葉に弾かれるように全員一斉にボス部屋に向かつてリスタートする。全力疾走をすれば、先頭に敏捷極振りの俺、次点にアスナ、その後ろがキリト、最後に筋力値よりなステータスの風林火山が着いてくる。

足が速すぎてもつれそうになるが、そこは慣れと経験で何とか堪える。敏捷極振りステータスは直線で如何に速く動くのかではなく、限られた空間でどのように動き、相手を攪乱して戦うのが重要なのだ。……と、このことは今関係ないな。

ボス部屋が見えてきたところで急ブレーキを掛け、地面とブーツの鋏の摩擦熱によって——本当にSAOは細かいところまで良くできている——火花が散る。

眼に飛び込んできたのは、地獄絵図だった。

名前にある通り、青眼をギラつかせ弱者を狩る強者。これは戦い

などではなく、一方的な残虐に近いだろう。

呑気にも言葉を失って立ち尽くしていると、遅れてきた二人も俺と同じようになる。十二人いた軍のメンバーは十人になっていた。転移結晶で離脱したのであればまだいいのだが……。

「転移結晶！ 離脱！」

単語二つを大声で叫ぶ。一度でも戦闘をしたことがあるSAOPレイヤーならこれだけでも言いたいことが伝わるだろう。しかし、返ってきたのは悲痛な叫びだった。

「ダメだ！ クリスタルが使えない！」

その一言で思わずキリトを見てしまう。

《クリスタル無効化エリア》というのは文字通り回廊結晶、転移結晶、治癒結晶などのクリスタル類をまったく使用できないエリアのことだ。《月夜の黒猫団》のように、これによって命を落とす可能性が格段に上がる。事実、いない二人は恐らく……。

撤退のためにはこの出入り口から逃げるしかない。だが、扉と軍の間はあの青い悪魔が陣取っている。

考えろ。ぼっちの長所は思考速度が早いことだ。

「……俺が突っ込んであいつのタゲを取る。キリトは軍の退却誘導及び万が一の護衛。アスナはここで待機して、風林火山にキリトの手伝いをしてもらうように状況を説明してくれ。その後キリト達に合流」  
「却下よ。なんでハチ君だけそんなに負担が大きいのか？ ダメよ」  
「悪いが他に案がないならこれで行く。タゲは複数人で取り合ったら逆に危険なのは知ってるだろ？ この中でタゲ取りのノウハウが一番あるのは俺だ」

そう言うと、きつく口を結んでしまった。何かに耐えるように歯を食い縛り、忸怩たる思いが溢れ出ている顔をしている。

「……行くか」

0から一気にトップスピードにギアを上げる。鈍重な動きで振られた斬馬刀の腹で殴られただけなのに軍のプレイヤーが吹き飛ぶが見えた。

隙だらけの背中に片手剣単発最大威力のソードスキルである



ヴオーパルストライクを叩き込む。スキル硬直の間に相手のHPバーを確認するが、大して減っていない。思わず乾いた笑みが洩れた。

タゲが俺に移った時にキリトがボス部屋に突入。避難誘導を開始しようとするがそれを拒むものがいた。コーバッツだ。

「ふざけるな！ アインクラッド解放軍に撤退の二文字はない！ 総員、突撃！」

「バカ野郎！ 逃げろ！」

言いながらグリームアイズの横風ぎ攻撃を剣でわずかに方向を逸らし、何とかやり過ごす。だがボスの背中に幾度もライトエフェクトが煌めき、再びタゲは軍へ。

「グオオオオオオ!!」

悪魔の咆哮が痛いくらいに空気を震わせ、あまりの高音響に耳が聞こえづらくなる。悪魔は状態を反らすと山羊の頭の頬を膨らませ、鋭い牙の隙間から青い炎を吹き出す。あれは、ブレスだ。

「クソツ……キリト、スピニングシールド！ タンクは前に——」

「——オオオオオオオ」

轟音とともに放たれた青い吐息によって声は掻き消され、視界が蒼然となる。更に、グリームアイズが持つ大剣が眩い黄色のライトエフェクトに包まれ、高々と頭上から振り下ろされようとしている。さながら、神の鉄槌のように。

「第二撃の振り下ろすソードスキルが来るぞ！」

パーティーを組んでいるキリトのHPバーは判るが、軍の奴等のまでは判らない。しかしキリトでさえさっきのブレスでHPを危険域イエローゾーン近くまで持つていかれているのを見るに、俺達より前に戦っていた軍のメンバーはレッドゾーン近くくらいだろう。そんな体力でボスのソードスキルを喰らったら、死は免れない。

「くっ……」

片手剣だけでできる剣技連結スキルコネクトによるダメージで何とかタゲをこっちに向けようとするが、先程の軍の一斉ソードスキルには到底及ばない。止めることは構わず、無慈悲に剣は振られた。

轟音と爆風。

大気と大地が揺れていることから自らが吐いた豪炎をも霧散させた先程の一撃の威力が窺える。だがお陰で炎の膜で見えなかったキリトと軍の様子が判る。

だが、しかし。

「う、うわあああああ!! こ、コーバツツさんが殺られたあ!」

——最悪だ。

たとえ愚人とはいえども、上がいなくなれば集団は浮き足立つ。統制はとれずバラバラになり、最悪は全滅——。

ふと、青い騎士を思い出した。

彼がいなくなつた後、俺達はどうした……? 死戦だ。下手に撤退なんてしようものなら殺される。ならば、相手を倒すしかあるまい。いつ来たのかは知らないが、風林火山によつて軍が勝手に散り散りに逃げることはない。

状況を確認しつつ放つたバーチカル・スクエアによつてようやくボスがこちらを向いた。

あんな見た目からして力こそパワー! みたいなやつは攻撃なんて喰らつたら死ぬ。攻撃が一回一回 *dead or alive* とか、俺の戦闘ナイトメア過ぎる。

攻撃を避ける、捌く、逸らすならまだ良いのだが、弾くとなると少々厄介だ。弾くためには俺の筋力値では少なくとも初級ソードスキルを使わなくてはならない。だがその後、わずかとはいえ隙が生まれてしまう。そこを突かれたら終わりだ。キリトとのデュエルもそれで負けたのだから。

「グオオオオオオッ!」

「……アアアアアアッ!!」

バーチカルのエフエクト光と火花により、薄暗い円柱状の部屋が明滅する。斥力が生まれ、巨大な斬馬刀は大きく上に、俺の漆黒の剣は下に力が働く。

右手に力を込め、弾かれる剣を何とか留める。今の俺の体勢はバーチカルのモーションだ。

再度の垂直斬りにさしものフロアボスといえども反応できず、体の正中線を真一文字に斬り裂く。

「なっ……ハチ君、撤退でしょ!? 何をしてるの!？」

残念ながら、それは無理だ。ボスの攻撃を避けていった際、徐々に扉とは反対側に追い詰められている。

「どうやら無理ッ! ぽいな。ま、何ッ! とかするわ」

「……《スターバースト・ストリーム》」

悪魔からの恐るべき凶刃をいなしていたとき、いきなり星屑が瞬いた。何事かと思えば悪魔が苦悶し、また無数の星屑が飛び散る。

キリトだ。

煌々とした粒子を撒き散らす凄絶な剣技は二刀を携えた剣士によつて繰り出され、無尽蔵に続くかのように次から次へと斬撃を叩き込んでいく。……待て、二刀？

「……まさか」

いや、そんなはずはない。双剣スキルにスターバースト・ストリームなんて技はなかった。だとするならば、あれは別物のエクストラスキルかユニークスキルのはずだ。

スター……星。バースト……爆発。ストリーム……流れる。材木座だったら星光連流撃つて和訳しそうだ。

しかし、その選択は愚作も愚作。いくらユニークスキルといえども、まだまだ余りあるボスの体力を一回のソードスキルでは削りきることなぞできん。

「風林火山! キリトスキル硬直後隙カバー! アスナ俺と攻撃!」

極限まで短くした指示でも意味を汲み取って、素早く各々の役割を果たさんと移動を開始する。

双剣スキルは、俺にとつてユニークスキルである消滅剣よりも隠していたスキルだった。それは未だ双剣スキル本来の持ち主があの老人だという認識が拭えないからだろう。最期に見せられた表情は、到底作り物なのだと判らなかつた。

だがそんなことはもういい。

俺の逡盾や躊躇いで誰かが死ぬのかもしれない。

ここは、そういう場所なのだ。

【ステラ・インパクト】

ステラ・インパクト。

数多ある双剣スキルの中でも上位に位置する剣技であり、場合によつては双剣スキルで最大連撃数を誇る。星の衝撃と名付けられている1〜7連撃の剣技は一撃一撃が既存のスキルとは段違いである。

【ムーン】

黒一色の剣が纏う黄色いライトエフェクトはどんな光よりも煌びやかで、見るものすべてを魅了するかのようだと使用者である俺でも思う。

スキル後硬直から回復するまでキリトの護衛をしていた風林火山にタゲを移していたボスは、背後から来た半端ない衝撃にさぞ驚いたことだろう。

「グギャアアアア!!」

苦痛から来たであろう雷鳴のごとき絶叫に手応えを感じつつ、次のスキルの名を呟く。

【「マーズ」】

振り向いたところで反撃はさせせん。スキルとスキルを連結させ、タイムラグなしでライトエフェクトがオレンジの光に変わった剣を凄まじい剣速のまま袈裟斬りする。

「がっ……クッ、【「マーキュリー」】!」

飛んできた拳に何とか耐え、モーションを崩さず次に入る。地を這うような一回転斬りであるマーキュリーは碧水のような色の光跡を残して終了する。

忍がただいま参上したみたいなのポーズからシステムに後押しされ、深緑色をした剣がシステムアシストなしだったら絶対にできなかつた珍妙な動きをする。あきらかに肩の稼働域を越えていた。

【「ジュピター」】! ゴッ……!」

危なかった。次のソードスキルに入っていなければ絶対に連撃が中断されて長い硬直時間に突入しているところだ。

「……アアアアアアッ!! 【「ヴァーナス」】ウウウウ!」

黄金の光が剣を取り巻く。金は成金でゴージャスな感じがするが、剣が真っ黒なのでむしろシツクに決まっている。

「ゴアアアアアアアア!!」

「[サターン]!!」

怒り心頭のボス渾身の一撃を跳躍による上向きの力とシステムアシストによる推進力、ソードスキルの勢いで弾き、相手をノックアウトさせる。

サターンによる腕だけではなく体全体を使った斬り上げで空中に躍り出た俺は体勢を立て直し、そのまま最後の一撃に入る。腕ごと覆うような焰にも似た光はもはやそれ自体が剣に見える。その焰の剣の切っ先を悪魔に向け、ほくそ笑んだ。

——勝てる。

僅かな慢心。微々たる油断。それは、命懸けの仕合……いや、死合にとつて命取りだ。

「ガアアアアアアアア!!」

こちらの剣に負けぬ青い猛炎を吐き出し、一秒も数えぬ間に俺を包み込み、みるみるHPバーが削られていく。

「ダメ……、ダメだよ……」

掠れた声。

そんなものが聞こえた気がしたが、俺の耳には届かない。

「ア、アアアアアアアア!!」 [サン]！

構うものか。どうせこれはキャンセルできない。なら、せめて……。

爆炎の中から現れた斬馬刀に目もくれず、ただただあいつの命を屠らんと剣を振りかざし、一筋の火矢と俺は化す。いや、流星か。今まさに燃え尽きようとしているのだから……などと、皮肉なことを考える。

ああ、そう言えば、初めて雪ノ下雪乃と会ったとき、それに似た話をしたっけな。

なら、こうして燃え尽きようとしている俺は、きつと最期まで自分

の居場所を見つけられなかったのだろうか、と……。

二年の時を経て、ようやく彼は彼女たちのことを少し理解する。

……暗い暗い場所に唯一の光が眼を差す。

アリーナが歓声で満たされる。

ステージはライトアップで満たされ、相対的にアリーナ全体の暗さが解ってしまう。

跳び跳ね、歌い、楽しむ。

見目麗しい五人の少女……或いは女性が、自らの演奏を奏で、他の人の音と調和している。

ボーカル。ギター。ベース。キーボード。バスドラム。

たった五つの音で一つの曲を作り上げる。

アリーナのボルテージは最高潮。

熱気と光の坩堝で響く澄んだ歌声と澁刺とした歌声。

確かに網膜に焼き付いた忘れない、忘れられない光景。

光溢れるステージすらも、暗闇に塗り潰された。

× × ×

「……うおあああああッ！」

跳ね起きる。

気分は最悪。汗も滲んでいる。

荒い息を整え、数十秒経った後、ようやく状況を認識する余裕が生まれる。

そうだ。確かボスと戦って……戦って、どうなった？

「……クライイン、ボスは？ ボスはどうなった？」

「お、おう。見ての通り、ボスは倒された。七十四層、突破だ」

「そう、か」

立ち上がろうと力を込めていた体から再び力を抜き、情けなくへたり込む。

また一つ、今度は安堵の気持ちから深く息を吐いた。

「あー、安心してるとこ悪いんだけどもよ……」

「何だ？ さっきのスキルなら企業、秘密……」

何だ？ 頭の中に違和感がある。そうだ、俺は確かボスと戦って……その後は？ 俺がステラ・インパクトのサンをボスに喰らわせて……アイツがブレスを吐いて俺は……。

「そうだ……、何故、俺は生きている？」

「……おめエは死にかけた……いや、一度死んだんだよ」

「おい、趣味の悪い冗談はやめろ。まだ死んでねーよ？」

冗談めかして言う。いくらなんでもデスゲームの状況下であるこの世界で、命のことに関する冗談はさしもの俺も笑えん。

「いや、言い方がワリイな……。おめエは一回死んで、生き返ったんだ」

「は？ クライン、頭……大丈夫か？ 俺が心配するなんて相当だぞ」「うるせえよ、至って正常だつーの。……じゃなくてだな。ほら、おめエさんも知ってたんだろ？ 去年のクリスマス」

クリスマス。その単語を聞いただけで顔が勝手にキリトの方を向いた。

キリトは若干頬を染め、そっぽを向いている。うん、俺も何か恥ずかしいわ。

「つまり……、ソードアート・オンラインで唯一かもしれない蘇生アイテムを俺に使ったのか？」

何というか、申し訳なくもあり情けなくもある。

俺が勝手にボスと戦い、死んだ。そのせいでSAOに現存するなかで一番かもしれないほどのレアアイテムを使ったのだ。しかも、それは俺が勝手にした行動の尻を拭っているということにもなるのだ。

それは、俺の信念に反する。それなのに、生き延びられたことに安堵を感じている自分が少し苛立たしかった。

キリトに向き直る。

「あー、その、なんだ、悪かったな。俺なんかレアアイテム使わせちまっ……」



乾いた、ともすればいつそ清々しい音が聴覚野に届いたとき、俺の体は宙を舞っていた。何を言ってるのか、自分でもわからねえぜ……。

キリトに平手打ちされたのに気づいたのは地面に墜落した瞬間。え、何で平手打ちされてんの？

心中の疑問に答えるものはいない。クラインは「さーて、おめエらを送らねえとな！」とか言ってる軍と共に出てくし、アスナはこっち見て立ってるだけだし、キリトは未だに立ち上がってない俺に向かって歩く度にズシンズシンと聞こえてきそうな雰囲気です近づいてきてるし……せめて立体起動装置をください。

その後もいきなりマウントポジションを取られ、ガスガスゴツゴツ殴られ続ける。嘘である。強烈なのは最初のビンタだけで、後はヘロヘロのパンチで、ポスポスと体に当たった時に鳴る。え、何これ。女子からの馬乗りつてもつとこう、ロマンと夢があるもんじゃないの？何をされるのかっていう恐怖しかないんだけど。

いや、しかし。普段温厚で少なくとも俺が知っている限りではデュエル以外に人を殴ったことのないキリトがここまでやるんだ、恐らく俺がやらかした何らかのことがキリトの怒りの琴線に触れたのだろう。

ヘロヘロパンチを右手で掴む。その際上体を起こしたからだろうか、雪ノ下とはまた質が違う感じのする黒い長髪に隠された顔が解つてしまう。

俺がキリトの泣き顔を見たのは二年間でも数えるほどしかない。

例えば、アニールブレードのクエストの時や去年のクリスマス。そして……今。

その顔を見ると何故か脱力してしまい、また冷たい石畳に背中を預ける。……うむ、何にせよこの体勢はまずい。主に俺の理性的に。

何とか上半身を起こし、逃げようとするが……、こらやめろ、やめてください抱きつく近い近い良い臭い！

超大型キリト、もしくは鎧のキリトによってウォール・リーズン<sup>壁</sup>は陥落しそうである。あれだ、南側領土最高責任者が喜んで食われにい

くだらうな。

「ちよ、ちよつとキリトちゃん、ハチ君？ 少し密着しすぎじゃない？」

さすがにこれは見かねたのか、アスナがようやく俺たちの間に割って入る。うん、俺もそう思う。アスナさん、この子離しちやって！

「ほらキリト、離せて」

「やだ」

まるで駄々っ子のように、俺を抱き締める腕と足に力をさらに込める。や、それはあれよ？ 俺はいわゆる薄い本でしか見たことのない体勢になってるのよ？

「何で嫌なんだ？」

「エイトが……また遠くに行つちやう気がするから」

「はあ？」

「……今日、ううん、五十層からずっと嫌だった。エイトは壁役タンクでもないのに、ずっとボスの攻撃を捌いてた」

五十層ボス。ハーフポイントであるだけに、強大なボスで当時の攻略組にはその攻撃を真っ向から受け止められるタンクが居なかった……ヒースクリフ以外。

とはいえ、あいつも多分人間だ。同時に捌けるのは二本だけだったのに対し、ボスの巨人の腕は四本。まあ、防ぐだけが防御じゃない、ということだ。

「……でも、それでうまくいった。それもすごい嫌だった。エイトがいなかった二ヶ月間のボス戦、キツかった。それも嫌だった」

嫌だった。そう言ってるだけだし、聞きようによつては今までの俺のやり方を否定している。だか、何かが腑に落ちた。

到底信じられないし、今までの経験則からそんなことはないと理解もしている。

だが、何回問い直しても出てくる同じ答えはもう結論となつていく。わからなくて当然だったのだ。

「あー、何か今まで色々悪かった。だから取り敢えず離してお願いし

ます」

筋力値の上では完全に負けているため、どうあっても逃げられない。アスナにSOSを求めても不満げに眼を逸らされる。……何でや。

恥ずかしいならやらなければよかったのに、赤面して離れていくキリトたん。うん、キリトという響きが男っぽいから俺がホモオ……みたいな感じになってしまふ。やめて！ おホモだどこるかお友だちもいないんだぞ！ どっちも欲しくはないけど。前者に限ればいらんと断言できる。後者は戸塚が友達になってくれるなら欲しい。むしろ戸塚が欲しい。

下らない思考をして気を逸らしていると、アスナが沈鬱な表情を顔面一杯に張り付けて、迷ったように口を開く。

「……ハチ君は、さ。人を……ううん、何でもない」

「……多分、お前が思っていることは違う……と、思う」

言うのと、花が咲いたように顔を綻ばせる。

高々数時間だけなのに、もう数週間も見えていなかったかのような感覚に襲われ、その笑顔につられて俺も口の端を少しだけ吊り上げた。

× × ×

上機嫌そうにラン、ランラランランランと前を歩く二人にいつも通りの体勢で着いていく。

……そう言えば、人型の物が猫背だと何か怖く見えるとか聞いたことあるな。三分間の超人とか五分間の人造人間もそうだしな。ちなみにエヴァンゲリオンはウルトラマンを参考にして猫背にしたらしい。ソースはテレビ。

仲睦まじく、隣り合って人気がない迷宮区の道を進行していく二人の小さく華奢な後ろ姿を見ていたら、ふと武者小路実篤の言葉が浮かんでくる。

——仲良きことは美しきかな。

美しいものとは虚飾だ。光あるところに影は必ずある。

仲が良いと自分や相手、或いは第三者が認識しているから本音を隠し建て前を並び立て、偽物の関係に輝が入らぬようにする。

逆説的に、『喧嘩するほど仲が良い』とあるように仲が悪い奴らほど仲が良いのではないだろうか。いや、やっぱ違うな。仲が良いと見える中でも本当に仲が良い奴はいる。ソースは俺と小町。

それにしてもあいつら、ものすごい上機嫌なんだけど。

「あ、ハチ君。わたし、血盟騎士団しばらくやめることに決めたわ」「……は？」

楽しげに、軽やかにステップするアスナはすべてを魅了する魅力を備えていた。キリトも若干赤面している。……いや、それはおかしくないか？

なぜ、と知らぬ内に目で問うていたのかまるで太陽のような笑顔が少し悲しげなものになる。

「……多分、ハチ君は自分からこっちに踏み込んでくれることはないと思うの。だから、待たない。こっちから行くの」

思わず、息を呑んだ。

どこかで聞いたような言葉だ。

「……そう、か」

全く、女つて奴は怖くて強い。陰湿で明るくて正直で嘘つきで厳しくて優しい。

複雑に入り乱れてできている女の子に単純な男子が勝てるわけもない。

だから、言うことは決まっていた。

「お好きにどうぞ」

× × ×

七十四層攻略から翌日。

どうやらキリトが大変なことになっているらしい。ソースは鼠。先人から言えることは頑張ってくれ位しかない。俺の双剣スキルも今までに確認できなかったスキルだからかユニークスキルだと思わ

れているらしい。

一番しつこい鼠が双剣スキルの存在を知っているのと、入手方法がよろしくないクエストをやらなきゃいけないのも解っているため、双剣スキルは広まっていない。

余談だが、レインは自分の命の危機以外に双剣スキルを使わない。ほとんどエイト君がクエストを進めたから、だそうだ。

何となく脳内に思い浮かんだ某宇宙戦艦の歌を口ずさみながら、そう言えば食料があまりなかったことを思い出してホームでごろごろしていた体を起き上がらせる。

ついでに昨日のドロップ品を売り捌くのも良いかもしれない。俺の隠蔽ハイディングを看破できる奴もそうそういまい。

樹木が数えきれないほど屹立している様は見えていて気持ちがいい。青々しい樹の緑が眼を、そこから中から漂ってくる緑の薫りが鼻を、無数の葉が奏でる音が耳を癒してくれる。

転移門までは後少しだ。

× × ×

「おっす」

「あ？ ……ああエイトか。ほらお前も早く二階行け」

五十層アルゲードにあるエギルの雑貨屋は何故か今日は誰もいなかった。店主が厳ついからついに愛想を尽かされたのだろうか。

……ていうか、何で二階に行かにならんのだ。商談なんていつもここでしてただろーが。なんなら冗談言い合うのもここだったからな。

……まあエギルの顔が怖いから従っちゃうんだけどね！

二階には何故かキリトがいる。俺今日疑問に思うこと多くないか？ その内名探偵腐眼の八幡とか言われちゃうんじゃないの？

「こ、こんにちは〜……」

「……？ おう……」

え、何これ何この空間。何で顔赤くしてんの？ 何でそっぽ向いて

んの？ 何で小汚ない部屋がピンクに見えるの？

……あ。やッベー、昨日か？ 昨日のことなのか？ 改めて考えるとかかなり恥ずかしいこととしてたよな……。俺まで恥ずかしくなつて来ちゃうだろうが。

「……なあ」

「……何？」

「昨日俺を殴つてたけど、オレンジにならなかつたか？」

「あ、うん、大丈夫だった……」

また恥ずかしそうに顔を伏せる。地雷を踏んだどころじゃない、踏んだ地雷が爆発して他の地雷を誘発してるくらいやばい。

「……」

「……」

……俺、何で女子と二人きりで無言の耐久レースをやつてんの？

「……」

「……んんっ」

「……！」

バツ、と突然音がしたキリトの方に首を曲げるが、ただの咳き込みだったらしくプイと顔を背けられる。やだこの子可愛い。けど沈黙が辛い。

そんな沈黙をよくも悪くも破つたのは、アスナだった。この時初めて、俺はアスナが鬼ではなく天使に見えた。

「どうしようキリトちゃん！ 大変なことになっちゃった！」

……前言撤回。もしかしたらやっぱ鬼かもしれない。

いつまでも比企谷八幡は女の子に逆らえない。

アスナが言ったことを一言で纏めよう。

ヒースクリフ「ルールを守って楽しくデュエル！」

……うん、違うな。絶対違うな。

「わ、ワンモア・プリーズ、アスナ？」

「ハチ君何で英語なの？　というか、ハチ君とフレンド解除しちゃったから呼べなかったのにここに来るなんて、すごい偶然だね」

恥ずかしげにはにかむアスナは確かに可愛いし、まあ役得なのだが事はもっと重大なのだ。思わず訊き返してしまったが、言葉で聞いた限りの事態は理解できる。

「……まあ、つまり纏めると、1. 昨日のことをヒースクリフに全部報告した。もちろんお前がギルドを暫く休むことも。2. 昨日はそれで帰って、許可をもらえらると思つたらヒースクリフが条件を出してきた。3. その条件とはパーティーを組む俺たち二人との決闘……と、こういうことだな」

「うん」

迷わず首肯するのを見るに、どうやら作り話や解釈の勘違いなどではなく事実であるらしい。

「……なあ、一つ言っついていいか？　——俺、ヒースクリフと絶対デュエルしたくないんだけど」

「同意」

「うう……」

珍しくキリトではなくアスナが涙目になったが、これは譲れない。戦闘狂ですら戦うのを嫌がるほどの圧倒的強者にして最強、血盟騎士団団長である《聖騎士》ヒースクリフの名は伊達ではない。

曰く、アインクラッド最強。曰く、ボスの一撃を軽々と受け止める。曰く、あの閃光をも従える猛将。曰く、そのHPバーが黄色に染まったことはない。曰く、曰く、曰く……と、もはや遊戯の神に異世界転生させられちゃうほどの実力の持ち主なのだ。

そんな奴とどうして戦いたいと思うだろうか。恥をさらすだけの

行為である。まさかヒースクリフに下克上して血盟騎士団団長になるなんて野心を持った奴がいるわけでもなし。

それに……。

俺の考えを断ち切るかのようにクイクイと袖が引かれる。やんわりと手を動かし、コート袖から手を離させる。

「ハチ君……ダメ……？」

「ダメ……ダメ……」

あ、危ねえ……。小町で年下耐性つけてなかったら八幡城があつさり落城してたわ。

「……なこともない」

「ホント!？」

……ん？ あつれれえ〜？ おつかしーな。なんで了承したことになってんの？ ……無意識に俺がOK出しちやつたからだよ、バロー。

「エイト……」

キリトの視線が妙に痛い。陥落早すぎじゃないと言いたいんだなと目線だけでわかる。

「ま、まあ、あれだ。さすがにアスナをギルドから一時脱退させるだけでヒースクリフが命を取りに来るとは思えん。なら、最強とのデュエルも悪くないんじゃないか？」

俺は嫌だけどと心中で付け足しておく。すると元々がバーサーカーなキリトも、驚くほどあっさり許可を出す。

するとさつきまでは確かに涙目だったはずのアスナが満足げに笑っている。うわ、女って怖い……。

……働きたくねえなあ。

× × ×

アインクラッド五十五層、鉄の都グランザム。

アインクラッド最強派閥である血盟騎士団が本拠を構える街であり、もはや統治していると言っても過言じゃないと思うくらいだ。



事実――。

「アスナきーん！ これ食べていってください！」

「アスナさん！ いい装備が手に入ったんですよ！ 見に来てほしい！」

「アスナさん！ こっち向いて！ はいチーズ！」

――アスナがもはやアイドル扱いである。

アスナが八人の仲間を集めてアイドルグループを結成する実話をアニメ化したら儲かるんじゃないの？ アイアンドールという新しいアイドルになろう。

まあ、しかしそれを抜きにしても、笑顔で人を捌く姿は握手会のアイドルみたいだ。握手会を行ったことねえけど。

俺とキリトは完全に手持ちぶさたである。

「すごい人気だね……」

「……まあ、攻略組ってだけならまだしも、最強ギルドの血盟騎士団の副団長だからな……しかもここは血盟騎士団のお膝元って言うってもいいくらいだし」

「あはは、ならヒースクリフは將軍なの？」

「あながち間違いでもないな……和か洋かの違いじゃないか？ 何せ聖騎士だからな」

「確かに……」

などと少しぎこちなくも下らない会話をしている間に話はずいたのか、アスナがパタパタと戻ってくる。

「さ、行きましょ」

「うえーい……」

ウェイ勢が言ってることとまったく同じなのに違うような言葉に聞こえるって、人間って不思議！

ドラクエみたいになぞろぞろ怪盗ゾロリ！ ばりに連れだっていると、段々とその街でも凶抜けてデカイ鉄製の城が近づいてくる。

「……………」

今からこの建物に入るのだと思うと自分は囚人じゃないのかと錯

覚してしまおう。やだなあ、行きたくねえなあ……。

とはいえ、当然のように入っていくアスナの後ろ姿を見ると逃げたいけないような気がする。

鬱々とした気持ちを抑えるように、俺は一步を力強く踏み出した。

× × ×

「お別れの挨拶に来ました、団長」

……言い方つてもんがあるんじゃないの？ それだともうギルドを脱退しますって言ってるようにも聞こえるからな？

「そう結論を急ぐ必要もないだろう。……少し話させてくれてもいいだろう」

玉座にいわゆる司令座りをするヒースクリフには、数々の逸話にそぐわぬオーラとでも言うものを出していた。

「久しいな、エイト君。君とは二ヶ月、キリト君は七十三層ボス攻略以来だったかね？」

「……俺がボス攻略に出なくなった以来ですから、まあそうつすね」「私もです」

こいつと話すことはいつまで経っても慣れない。……そもそも人と話すことが苦手でしたね！

「してエイト君。君はこの二ヶ月、一体何をしていたのかね？」

言われて眉根がピクリと動いたのを自覚する。ヒースクリフは態と触れてほしくないことをピンポイントで話題に出しているような気がするから苦手だ。

おかげで陰のある言い方になってしまおう。  
「……それは答えなきやならんことなのか？」

「いや、本題に入る前の雑談と言うやつだ。何か気に障ったのなら謝罪しよう」

まったく謝罪しているように見えない、張り付けたような無表情はどこかうすら寒い。これからが本題なのか、より一層厳粛な雰囲気を出すす開口した。

「……エイト君が最後にボス攻略に参加したのは六十七層だったかな？ あれも辛く苦しい戦いだった。最強ギルドなどと言われているも戦力は常にギリギリだよ。だと言うのに、君たちは私たちの大事な主力を引き抜こうとしているわけだ」

まるで罪人を裁く裁判官のようにこちらを責めるような口調でゆっくりと言葉を紡ぐ。別に俺たちが引き抜こうとしているわけではないのだが、血盟騎士団の活動に参加しないで他のやつらとパーティーを組むなら同じことなのだろう。

正直言つて俺たちがしているのは褒められるどころか非難されることだ。ヒースクリフが一言無理と言えば、アスナが血盟騎士団を休むことは不可能だろう。

なのに、わざわざデュエルをするなんて意味がない。何か目的があるはずなのだ。

「……そんなに大事なら護衛、もつと強くてマトモな奴にした方がいいですよ」

というかアスナに護衛とか必要ないだろ。

「クラデイルのことか。彼には自宅謹慎を命じている。しかし……、性格についてはともかく、君クラスともなると血盟騎士団にもそんな人材はいないのだよ。私とアスナ君を除けばね」

いや、逆に集団のやつらにスペックでも劣つてたら俺もう攻略組にいないから。

そんな内心は露知らず、ヒースクリフは続ける。

「《二刀流》のキリト君。《消滅剣》と《双剣》……言うなれば《消滅双剣》のエイト君。ここは剣が己を象徴する世界だ。アスナ君が欲しくば、《神聖剣》ヒースクリフに打ち勝ってみたまえ」

つまり、剣で白黒着けようというわけだ。

ユニークスキルと一口に言っても、相性と言うものはある。例えばキリトの二刀流は攻撃型。故に防御型のヒースクリフの神聖剣には分が悪いが、攪乱型の俺の消滅剣には相性がいい。俺だったらヒースクリフに相性がいいが、キリトには悪い。ヒースクリフはキリトに強く、俺には弱い……と、なるのだ。

まあそれだけで勝負が決まるわけではないが、拮抗した実力の持ち主同士の剣合はレベルが一違えば、相性が少し悪ければ、判断を少しでも誤れば、それで勝敗は決まる。

「……私たちが勝った場合は、アスナを貰っていいんですよね？」

「ああ、約束しよう」

そこまでは予想通りだ。アスナが血盟騎士団を休むために戦うのに——あれ？ 言葉にすると何かおかしくね？——、何のリターンもないのではやる意味がない。だが、それは向こうも同じことだ。

「……で？ 俺たちが負けた場合の条件は？」

「君たちの血盟騎士団への加入だ」

……まあ、大方予想通りと言える。

しかしそれに反駁する者がいた。アスナだ。

「だ、団長！ それはあまりに不公平な条件では……」

「アスナ君」

ピシヤリと鋭い声音で二の句を継がせない。人とのコミュニケーションが不得意な俺とキリトはともかく、アスナすらも言葉を継げなかった。

「条件、とは言ったがそもそも君たちの望みを聞く義務は私にはないのだよ。不公平と言うならば、この状況そのものが不公平だとは思わないかね？」

まあ、正論だ。元々がこちらのワガママでしかない以上、条件を聞き入れるしかない。

固まってしまつて二人は放つておいて、デュエルの日にちや段取り、勝敗の決定方法などを詰める。

「なあ、もし例えばキリトがあんたに勝つて、俺が負けた場合はどうなるんだ？ 引き分けか？」

「その場合だったら君たち二人のどちらかともう一度デュエルして決めるか、負けた人が血盟騎士団に入り、アスナ君は勝った人とパーティーを組むか、もしくは現状維持かが妥当だろう」

要は白黒ハッキリするか、引き分けか、今と変わらないかということだ。こんなの考えるまでもない。

「二番目だな。一番目はその案で行くならそもそも俺たち二人とも戦う必要はない。三番目になるとお互いデメリットしかないな。消去法で二番目だ」

「ああ、私もその案がいいと思う」

見透かしたかのような瞳に苛立つが、理性で無理矢理抑える。

「では——日取りは明日。時間は午後二時の場所は七十五層《コリア》でいいかね？」

ヒースクリフの提案に、俺は復活した二人とともに頷きを返した。



じればキリトが卓越した反射神経で反応し、捌く。

剣が交錯すれば観客が沸き、二人の剣士は真円の闘技場をまんべなく使って縦横無尽に駆ける。

お互い均衡状態に入っているが、劣勢なのはどちらかと言えばキリトだ。

ヒースクリフは完全にキリトの攻撃を防御しているが、キリトは直接的な掠り傷を負っている。無論ソードスキルで攻撃すれば多少ダメージは通るが、本当に徹々たるもので着々とHP総量に差が出来はじめている。

「このままじゃじり貧、よね？」

「……ま、そうだな。ただ、キリトはまだ二刀流スキルは使っていないから勝負はまだこれからだろ」

慎重に使いどころを見極めるのはいいが、今のキリトはいささか慎重になりすぎている。いや、怯えているようにも見える。

「……何であいつ二刀流スキル使うこと躊躇してんだ？」

「……責任というか、若干トラウマになってるんだと思うよ」

何がだ？ と問う前にアスナが続けたため、開き掛けた口を閉口する。

「自分が二刀流スキルの威力を見誤ってハチ君を危険な目に遭わせちゃった……って、昨日言ってたよ」

それは違う。あれは俺が勝手にやって勝手に死んだのだ。そこにはキリトの責任は一分もない。

自分で他人に迷惑は掛けないのがぼっちとして存在している理由だと思っていたのに。

「……ハチ君は他人に迷惑を掛けちゃダメ、って思ってる顔してるけどさ、私はそれでいいと思うんだ」

「いや、普通はダメだろ……」

俺の物言いにもまったく怯むことなく、アスナはヒースクリフと戦ってるキリトを見て、言った。

「だって、迷惑を掛けて、掛けられて……そういうのが出来る相手を『友達』って言うんじゃないの？」

「……そういうもんか？」

「さあ？ あくまで私の主観だから」

そう言つて小悪魔じみた笑みを浮かべる。

まったくこいつは……年上を試すような真似をするんじゃないやねえよ。

ふと気になつたことがあるが、訊いてもいいのか判断できなかった  
ので言葉を口内で転がす。しかしアスナの「何？」と言っているよう  
な視線に後押しされ、案外スツと出てきた。

「……お前、SAO来る前に友達いた？」

顔は前に向けたまま眼だけを動かし、チラとアスナを見る。

きよとんとしていた顔から涙が零れ、次いで何故か笑つた。

「……え、あ、や、その、やなこと訊いたか？ その……悪かった、す  
まん」

「い、いや！ 違うの！ 何か、嬉しくて……」

友達いないか訊かれたら嬉しくて泣くつて変なやつだな……と、俺  
は戦慄していたのだが、それは思い違いだと次の言葉でわかつた。

「ハチ君が現実世界そついうことの話訊いてくれたの初めてだったからさ。嬉しく  
て……」

「そう、だったか？」

言われてみれば確かに記憶にない。だが暗黙の了解というやつで  
現実世界の話を持ち出すのは禁忌とされている。

なら何故訊いたのかと言われると、俺は確言を持つことができな  
い。

「ふふ……」

「何だよ」

「別に何でもないよ♪ ——キリトちゃん！ 頑張れー！」

あの、あなたが応援してるキリトの敵、あなたの上司なんですがい  
いんですか？

まあそういうのも野暮だろう。一瞬だけこちらを見たキリトに軽  
く手を挙げると、一つ頷いた。

「やる気、だな」

勝負に出る気だ。



二刀流スキル——アインクラッド史上三つ目のユニークスキルが初めてこれだけの観衆の目に触れることになる。

「スターバースト……」

まるで魔法の式句を唱えるように、そしてそれに応えるように段々と漆黒と白銀の対の剣はライトブルーの光に包まれていく。

「——ストリームツ！」

爆発。

幾千にも剣が分裂したような剣速で、恒星のプロミネンスの如し苛烈さで、そしてソードアート・オンラインでも随一の連撃数で、最強にして最堅のヒースクリフの鉄壁に少しずつ、少しずつ輝を入れていく。

「すごい……」

うわごとのようにアスナが呟いた。

ユニークスキルはゲームバランスを崩すほど強力である、と誰かが言った。その理由が目の前にある。

あんなスキルで攻め立てるキリトも当然すごいが、それを今叩き込んだ十二撃目までギリギリとはいえ反応できるヒースクリフもヒースクリフだ。だが徐々に遅れてきている。

「ヤアアアアアアアアッ！」

キリト渾身のスターバースト・ストリーム最後の一撃。これまでの烈火の如く連撃で完全に体勢を崩されたヒースクリフに防ぐ手立てはない。

——勝った！

俺も、アスナも、衆人も、戦っている当の本人のキリトでさえそう思った。

そう、『そう思った』のだ。

壁役で動きはけて速いとは言えないヒースクリフが、このデュエルで……いや、ボス戦ですら見せたことのない敏速で最後の一撃を避ける。

そして、そのまま——

× × ×

「あはは……、負けちゃった……」

泣き笑いのような顔で先ほどのデュエルの結果を告げる。惜敗、と言う他ない結果だった。

ヒースクリフの装備のメンテナンスや休養時間として、第二試合は一時間後に始まるらしい。

まあ、キリトが反応できないならSAOプレイヤーの誰も反応できないだろう。それほどまでに速かった……いや、速すぎた。

中学二年生以上なら大体の人が知っているとと思うが、人がある刺激を感じ取り、脳に伝達、さらに脳が運動神経及び筋肉に命令を下すまでに平均0.2秒かかるという。反射でも0.1秒はかかるだろう。ナーヴギアが脳の命令を読み取るのに若干とはいえ時間がかかるなら、あの速さは人としての限界を越えている。

「……マジであいつチートすぎるだろ……」

そう形容するしかないチートっぷりだ。何だよ、ガードが硬い上に反応速度が限界突破して……。

「そんな人とこれからハチ君は戦うんだよ？ 頑張つて」

「頑張つてね！ できたら私の仇を討つてね！」

男だったら朗らかな笑顔でそんなことを言われたら断れまい。

「……ま、できるだけやってみるわ……」

ここから先は、俺の戦争だ。

× × ×

選手控え部屋みたいなところから出て、真っ直ぐ歩く。

しばらく行けば、そこはもう俺のステージ。

今までと違うのは、初めて光が当たる舞台だということだ。

「……よう」

「……今日は久々に疲れたよ。さらにもう一戦……だが、今は君と戦える喜びが勝っている」

この男にしては珍しく口角が上がり、確かな愉悦を顔に出している。

まったく……俺の周りには何でこうバトルジャンキー戦闘好きなのやつらが多いんだ？

その事実思わず苦笑する。

決闘開始まであと三十秒。

ヒースクリフは銀の長剣を抜き、俺も両腰に一本ずつ佩いてある黒色と殆ど白の薄い水色をした対剣を抜く。

……三。

お互いに剣を構え。

……二。

次いで、体勢を戦闘用にし。

……一。

相手の策を構想し。

……零。

【DUEL】の文字が閃いた。  
瞬間。

——激突。

今、比企谷八幡が戦う理由とは。

開幕の号砲は、ジェットエンジン染みた音響だった。

「ウ、リヤアアッ！」

片手剣単発重攻撃剣技ヴオーパルストライクは軽くないなされ、日光に反射し煌めく銀の長剣が迫る。

それを左の剣のバーチカルで弾き、硬直が解けたらすぐに軽業スキル補正ありのバク転で距離をとる。

「ヌウンッ！」

十字盾が白く発光し、かの閃光にも勝るとも劣らぬ速さで肉薄してくる。だが、それはさつき視た。

身を屈めると、純白の光を纏った盾は頭上を通過する。今だ——。

「オオッ！」

「グッ……！」

雷閃の光跡を中空に残すほどの剣速で放たれたスラントが鎧に擦る、紙一重ならぬ鎧一重で終わった。一瞬の間も見逃さず放たれた今度はスキルを使っていない盾を、すんでのところまで剣を交差して防ぐ。

お返しとばかりにバーチカル・スクエアを一撃目は遅く、二撃目と三撃目は速く、四撃目をまた遅くと申し訳程度のフェイントを入れる。

寸分の狂いもなくすべて叩き落とされたが、ヒースクリフの反撃も躲せたからよしとしよう。

「ほう……システムに規定されたソードスキルにフェイントを織り混ぜるのか……」

「まあ、一応努力したんでな」

ラフコフの残党を狩るために。と心中で呟き、思わず自嘲の笑みを浮かべてしまう。

だが、今はこの戦いで出来る限り抗わねばならない。

「んじやまあ——行くぜ、ヒースクリフ神聖剣」

「来るといい——エイト君無剣」

ヒースクリフは盾を構え、俺は剣を不可視にする。

姿形は見えねども、確かにある感触が剣が存在することを教えてくれる。

右は振り降ろし、左は横薙ぎに斬撃を仕掛ける。しかしまるで見えているかのようには叩かれ、軽く驚愕した。

ならば次だと気持ちを立て直し、一ヶ月間培ってきた剣術でがむしやらに、あらゆる角度からあらゆる攻撃を仕掛けるもすべてが見透かされているかのようには防御される。

——焦るな、落ち着け。

確かにどうやって見えない太刀筋を防いでいるのかは解らないが、たった一撃を入れれば勝ちなのだ。まちがってもイエローゾーンまで追い込むなんて考えてはいけない。

連撃の中途、剣をお互い反対の手に逆手で持ち替えて攪乱しても苛立たしいほどの確にガードをしてくる。まるで破壊不可の建物の壁を斬りつけているかのようだ。

スピニングシールドの要領で三本の指で逆手から普通に持ち替え、また突撃する。

「フッー」

剣尖を体を右に傾けることで回避し、次ぐ盾の殴りは前傾姿勢をさらに低くして相手の懐に潜り込む。

「くっ……」

「オオリヤー！」

後ずさったのを見逃さず、剣を落として無手になり、剣を握っているあいての右腕を掴んで投げ飛ばす。

俺に触れていないため姿が現れた二本の剣をしっかりと掴み、今度は透明にしないでスキルモーションに入る。

ヴォーパルストライクが発動したとき、ヒースクリフは着地をしていた。これなら防御する間もなく一撃を喰らわせられるはず——いや、まだわからない。

体勢を立て直す時間なんて一秒すらなかったはずのヒースクリフの体を、俺のクリムゾンレッドに包まれた剣は貫かなかった。

「——んなっ」

防いだわけでも、弾いたわけでもない。キリトの時と同じように超スピードで避けたのだ。

無慈悲に放たれた騎士の突き。それが硬直で動けない俺の体に迫ってくる。

「ウ、オオオッ！」

ギリギリのところまで幻月が発動してくれ、体が宙で一回転している間に剣が通り過ぎていく。

ヴォーパルストライクよりも遥かに短い硬直時間を終え、追撃に剣を薙ぐ。もう聞き慣れた金属音がまた聞こえた。

「……速すぎだろ」

「……君には言われたくないな」

お互いに獰猛な笑みを浮かべ、相手に一撃を入れるまでの道筋を頭中で構築していく。

「……よし」

剣を可視化し、スキルモーションを整える。

剣が纏ったライトエフェクトは、他のどのスキルにもない黒。

《グラビティーション》。

斬った空間に十秒間引力を付随する、ソードスキル自体には攻撃力がないスキルだ。

「ヌッ！」

踏ん張ろうと足に力を入れても意味などない。内心悪い笑顔でほくそ笑み、次のスキルを発動させる。

「ウォリヤア！」

ヴォーパルストライクとまったく同じ動きで——速さは段違いだが——こちらに向かってくるヒースクリフに突撃。気合いの掛け声と共に真紅の剣で突き切らんと接近していく。

「オオオッ！」

普段の氷のように凍てついた顔とはまったく違う必死の形相で渾身のヴォーパルストライクを弾く。——だが、これはヴォーパルストライクではない。

「二撃、目ッ！」

右手の剣の発光が終わった刹那、今度は左の剣がクリムゾンレッドに輝く。

双剣二連重攻撃剣技《ツイン・ヴォーパルストライク》は従来のヴォーパルストライクよりも速さ、威力が上がっている上、二撃目の突きも加えられる。

二撃目の神速の刺突は寸分違わず確かにヒースクリフに当たる……はずだった。

まただ。またあの時間が引き延ばされたような不思議な感覚に襲われる。俺の必中の一撃を避けたヒースクリフが、悠々とソードスキルのモーシヨンに入る。

この体勢、この体勢から繰り出せるスキルは……。  
ない。

自らが身に纏う衣装と同じく赤々と光る剣を振り、俺に迫ってくる。

瞬間、俺を除いたすべてが緩慢とした動きになり、剣の軌道がはつきりと解る。感覚の鋭敏化で常時は刹那に終わる剣戟が長く感じられる。

紅のライトエフェクトが俺の数センチ横を通りすぎ、観衆のみならずヒースクリフまでもが顔を愕然とさせた。

と、ここで世界が元通りに動き始めた。

「ラァアッ！」

剣道上段の構えから繰り出される双剣スキルでも単発攻撃力なら二位三位を争う重攻撃《アストロノミカル》。二本の剣を束ねて振り降ろした剛の一撃はこれまでの戦いで一番の甲高い音を響かせ、多量の火花を散らせた。

そのあまりの衝撃に俺は剣を、やつは盾をファンブルし、対等な条件……いや、速度で勝る俺が有利だ。もちろん装備を拾う間など与えない。

「シッ！」

「ヌンッ！」

互いのバーチカルが交錯し、システムの斥力が生まれ、弾かれる。ダメージディーラーと打ち合えるだけの技倆があるだけってどういうことだよ……。

だがやつも人間だ。集中力は無限に続かないし、自分が不利なら焦りも生じる。

とどのつまり、このデュエルは持久戦なのだ。先に集中を切らした方の負け。

剣技もプレイヤースキルもレベルもステータスも大して変わらな  
いのなら、後は根気。

鏢迫り合いをしていた剣に左手も添え、相手を断ち切らんとシステムの許す限り全力で力を込める。同じようにヒースクリフも力を更に込めてきた。

絶えず火の粉が飛び、正反対の色の剣の違いが一層解る。彼方の剣は光を激しく反射し、輝いているのに対し、トレイターは光を食らっているかのように明るく見えるどころかいつもより暗く見えた。

此方は必死で押しているのに涼しい顔をしているヒースクリフが言葉を投げ掛けてくる。

「……エイト君、こうして話す機会もあまりないから言っておく。――血盟騎士団に来ないか？」

「はあ？」

「キリト君は血盟騎士団に入ることが確定している。だというのに、君がこれ以上戦う意味はあるのか？ 仮に勝ったとしても、君たちが三人でパーティーを組めるわけではない」

言われればそうだ。勝っても三人揃わないのなら大してやる意味も意義もない。

だが、そういうことではない。

俺は出来る限りのことはやると約束してしまった。自分のことは自分でやるのと同じで――アスナ曰く、その自分のことを嫌がりもせず一緒にやってくれるのが友達らしいが――、約束を守るのも至極当然のことなのだ。

何より、今なお相手が上司なのに俺を応援してくれているアスナ



や、自分が負けたのにも構わず激励してくれたキリトを前に諦めると  
いう選択肢はない。

俺は知っている。一方的とはいえ、自分の願望や希望、理想を裏切  
られると辛いことを。

裏切られた時に感じるのは相手への失望と、希望を向けた自分への  
後悔。

あいつらが過去の俺だというならば、俺はあいつらにそんな思いを  
させたくない。

ifの話なんて意味がないことは知っている。

それでも見てみたいのだ。

詰まるところ、これは俺の願望、俺の欲求、俺の欲心。

期待に応え続けることなど、葉山みたいなことをする気は更々な  
い。でも、この一戦だけは。

それが、今俺が戦う意味だ。

「退く気はない、とその双眸が語っているよ」

言うと、剣と両腕にかかる負荷が倍増した。明らかに今までは手加  
減していたのであろうことが窺える。

「ガアア！」

仕方がないのでヤクザキックを腹にかまし、二メートル弱距離をと  
る。今の蹴りは一撃に含まれないのか、何のシステムウインドウも現  
れない。

俺のHPは五割の勝敗確定ギリギリ、対してヒースクリフは五割  
強。お互いあと一撃で勝負は決まるだろう。まあ元々が初撃決着な  
のだが。

双方落ちている獲物には目もくれず、ただ眼前の敵を斬り伏せんと  
疾駆する。

ヒースクリフはカウンタータイプの剣士故、こういったガチンコ勝  
負は少ない。その希少な姿を目に焼き付けることも忘れ、消滅した剣  
を振るった。

「オオオッ！」

「ヌウンッ！」

烈々とした声とお互いこのデュエルで最速の剣を振り切り、俺は地面に倒れ込んだ。

その時もう悠久の昔に見たような気がするシステムウインドウが表示され、果たしてそこに載っていた名前は——アインクラッド最強の聖騎士の名前だった。

人と人の見方には、どこか必ず相違がある。

《聖騎士》が、《黒の剣士》と《無剣》に打ち勝った――。

あの伝説のパーティーを全員打ち破ったヒースクリフ、やはり最強か？

これでまた一步、ヒースクリフ最強伝説は磐石になったのだった。

――と、書かれた新聞を傍らに置く。伝説のパーティーって何？

いつもと違う寢床、いつもと違う環境、いつもと違う服装。

今俺はくすんだような色合いのコートとはグツバイして、純白の白衣を身に付けていた。

「あー、……帰ってえ」

最後の一撃、俺は何が起こったのかまったくわからなかった。ただ一つ理解できたのはヒースクリフが気づけば眼前にいて、俺の胸から腹にかけて切り払ったことだけだ。

速すぎた、とかそんなちやちなもんじや断じてねえ。時間が跳躍したとかそんなレベルだ。

それはそうと、普段黒のキリトが白になっちゃうとか、堕天使が天使になったくらいのインパクトがある。人が神とか天使を信じるようになったのは空前絶後な美少女を見たからだと思うレベル。

やだよお、集団行動やだよお……。

「やだよお、集団行動やだよお……」

まったく同じことを思っている……というか言っている黒ずくめから一転、白ずくめになった剣士に視線を送る。

一瞬、黒猫団のことを思い出したのかと思ったが、様子を見るに純粹に集団行動が嫌らしい。まあその気持ちはわからんでもない。

集団行動のみならず、あのヒースクリフの下になんて一番就きたくなかった。

「プツ、ハチ君、聖職者みたい……」

そう、最前線でも通用する男の剣士タイプの装備がなかったらしく、魔導師然としたローブ（色はもちろん白）を着させられている。

「……これ、戦闘面に支障が出るから着替えていい?」

「んー、ならこの腕章着けて」

「エイトだけズルい!」

ふはは、恨むなら女性人口が少ないのに男性と同じ数だけ制服を揃えていた血盟騎士団を恨むんだな。

ちよつとした優越感に浸って白が二本、赤が一本とラインが入った腕章を左腕に装備する。ちなみにステータス上昇などの恩恵はない。

「それにしてもユニークスキル持ちが全員血盟騎士団に入るのって軍や聖竜連合がうるさくないのか?」

「さあ?」

さあつてお前……。血盟騎士団に対する興味、俺の母ちゃんの親父に対する関心並みにないな……。

「血盟騎士団の活動って何があるの?」

「部署によって色々あるけど……私たちは基本攻略だよ。たまに下層プレイヤーの育成なんかもするよ」

「うえ、育成なんかもすんの? 育成すんのはアイドルだけで充分だったの……」

「何言ってるのエイト……」

若干キリトに呆れられてしまった。

× × ×

「訓練?」

ヒラ騎士(笑)になって何日か経ち、副団長直属の部下として嫉妬の目線を受けるのにも慣れてきた頃、今更感がある訓練に駆り出されることになった。

血盟騎士団攻撃部隊長の……ノーマッツ? いや違えな、どこのとある魔術のオープニングだよ。

まあ、兎に角血盟騎士団攻撃部隊長の人から提案されたらヒラ騎士(笑)は逆らえないのだが……。

「そんな話、ア……副団長から聞いてないんですけど……」

「うむ。だがダメージディーラーの実力を把握しないといかん。いくらユニークスキル持ちと言えども、使い物になるかはまた別」

まあ正論だな。ユニークスキルは特権階級になるわけではないことなんて承知していた。しかし、この組織図を見るとな……。

もちろん団長ヒースクリフがトップで、その下に副団長アスナ、そこから三方に枝分かれし、攻撃部隊、防御部隊、支援部隊（参謀や経理など）になる。凄い大雑把だが、まあ精々が数十人規模の組織なのだからこんなもんだろう。

つまり攻撃部隊長のこの男より副団長のアスナの方が上位命令なのだが、どういうことかアスナに話を通していないらしい。

「無論団長からの新人研修についての許可は貰っている」

……アスナより更に上位命令でしたか。

ぶつちやけ逆らっても俺には何ら害はない。除名されようが元々がソロプレイヤーなのだから直ぐに活動再開できるし、罰を負わせられようと受けなければいい。血盟騎士団員のヘイトは買うだろうが、今更そんなことを気にする柔な精神はしていない。ただ、俺がそんなことをしでかしたら上司であるアスナに責任が問われるだろう。

あいつは迷惑を掛け合えるのが友達の一つの形だと言っていたが、こういうのは違うだろう。そもそも友達じゃない……と思うし。

まあ、今の俺は血盟騎士団副団長直属特設部隊《ツインソード》（笑）の団員なのである。ちなみにメンバーは俺とキリトだけ。

「……新人研修の内容は？ 隊長と戦いでもすりゃいいの？」

「いや、対人戦闘については先の団長との戦いでよくわかった。次は私に対モンスター戦闘を見せてもらう」

思わず息が吐いて出そうになった。それこそ今更だ。対モンスター戦闘がロクにできないやつが攻略組なんかいないだろうに。

「嫌だ。今更やる意味も意義もない」

……って凄い言いたい。でも言えない。ちよつと親父の気持ちを理解してしまう。これが、権力の抑圧か……。

がつくりと項垂れたのを肯定の首肯だと捉えたのか、純白の中年騎士は豪快に笑った。

× × ×

その翌日。

俺、キリト、アスナで円卓の席に着いていた。

「なんかさー、同じギルドって言ってもそんな頻繁に会えるもんじやないんだね。私たち一応アスナの直属の部下なのにさー」

やはり普段と服装が違おうと肩が凝るのか、キリトが肩を回した後疲れたようにグデーツと円卓に倒れ込む。うん、その気持ちは少しは解る。団体行動ってめんどいよな。

「私はもうこれが当たり前だから何とも思わなかったけど……やっぱり行動が制限されちゃうからね」

言うど、先ほどのキリトのようにアスナもグデーツと円卓に倒れ込む。や、お前はどこに疲れる要素があったの？ 慣れてんじゃないの？

自分で言っただけ嫌になっただけだよお……やだなあ、働きたくなえなあ。

精神的に何か疲れたので、背もたれに思いつきりもたれる。

ふと疑問に思ったことを述べた。

「……そういや、あのパーティー名何？ ツインソードって……如何にもな……」

「何でそこで口をつぐむの？ ちょっと気になっちゃうじゃない」

「……なら言っただけよ。あれ、如何にもな中二じゃね？ 誰が名付けたの？」

俺としては純粋な疑問を述べただけなのだが、アスナが物凄い勢いでまたラウンドテーブルに倒れ臥した。顔は見えないが、耳が莓みたいに真っ赤だ。……え、まさか、ねえ？

「(おいキリト。もしかしなくても俺、地雷踏み抜いちゃったの?)」

「(うん、そうらしいね。エイト、T O L O V E 発生だよ)」

「(お前今多分T O L O V E のトラブル使ってるだろ)」

さすがは限りなくヘビーに近いオタクと言うべきか、かなり無理矢

理ネタをぶっ込んでくる。しかもT。LOVEるだと俺がアスナにラツキースケベ囁ましてるみたいだからやめてね？

しかし、中二病の先達としては非常に申し訳ないことをした。何か俺まで恥ずかしくなってきた。

この流れはまずい。話題、話題を転換せねば……あ、そうだ。

「そーいや、キリトも訓練ってあんのか？」

「え、訓練？ そんなのあるの？」

……やめようよ、そういう男女格差社会。女尊男卑、いけないと思います。うん、アスナはそろそろ起きてね？

「……あー、その、中二病患者の先達から言わせてもらうけどな、何かカッコいい感じの名前をつけるのはまだ中二病じゃないから、気にすんなよ。ラノベ作家みたいなものだ」

「ウニャアアアアアアアア！」

閃光の羞恥にまみれた猫のような声が副団長室に木霊した。

× × ×

「もう、お嫁にいけない……」

「だ、大丈夫だよアスナ！ アスナは美人さんだから貰い手なんていくらでもいるって！」

「ふふ、ふふふ……いざとなったらハチ君に貰ってもらうね？」

妖しい笑いとともに、さりげなく俺の将来を質入れしてくる閃光様。いや、なんかダークサイドがにじみ出てるから暗黒様かもしれない。

「ふっ、残念だったな。俺の将来はもう決まってるんだ」

「……一応訊くけど、どんな風に？」

「だから現実に戻って、……あれ、現実に帰るって表現使ったら、なんか実現不可能な気がしてきた」

バカな、専業主夫になるという夢はそんなに容易く諦める気はないのに。

俺が現実に戻ると言った瞬間、俺の真剣な思考以上に真面目な顔に

なって、黒髪の剣士は言った。

「……エイト、本当に現実に帰る気ある?」

「は?」

唐突な問いだった。答えはイエスしかないはずなのに、その言葉は俺の核心を掠めた気がした。

大きな深呼吸を一つして、ツインソードの片割れはたどたどしく、弱々しく続ける。

「だって……その、ね……。何か、いつもエイト、自分が危険になるとばつかしてるから……。それに、エイトは意識してないかもだけど、そういう行動するときはいっつも誰かを救ってるんだよ?」

「いや、そんなことは」

「あるよ」

ぐっ、と言葉が詰まる。言い終わる前に断言されてしまつては反論もできやしない。

「じゃあ質問。一層のボス戦の時、何でわざわざ攻略組の人達に悪口なんか言ったの?」

「……あのまま行けばビギナーとベータテスターの隔絶は埋めようがなかった。つまり攻略続行不可能になってたから、全員に責任を負わせて解消したんだよ。ベータテスト時最高到達階層まで問題を先送りすれば問題自体がなくなるからな」

「うん、そうだね。でもエイトがそのことをしたからあのままじゃ弾圧されてた私たちベータテスターは救われたし、今七十五層まで攻略できた」

別に俺はあの時、ベータテスターを救おうなんて一部も考えていなかった。だから、その解釈はまちがっている。

「じゃあ、あのフィリアさんって人のことは? 会って一日も経ってなかったなら見捨てればよかったんじゃないの?」

「……いや、それは後味悪いだろ」

「うん、エイトが自分のためにやったのかもしれないね。でもそれでフィリアさんは今も生きてる」

何なのだ、これは。



そう疑問に思うも、キリトの真つ直ぐな黒瞳が嘘を許さなかった。その視線が、俺には妙に痛い。

「次にラフコフ討伐戦。エイトがあそこまでやる必要はあったの？」

「……そりゃ生存本能だ。ただ自分が死にたくなかっただけだよ」

キリトもあまり出したくない話題だったのか、問答は沈痛な声音で震えていた。思わず眼を逸らし、虚空を見つめた。

「……多面性ってやつじゃない？」

「……多面性？」

ここにきて口を挟んだアスナが思案顔で自己の考察を冷静に分析し、その結論が耳に入る。

「キリトちゃんはハチ君の行動の結果に焦点を当てて見たことを、ハチ君は自分自身の心情に焦点を当てた話をそれぞれ言葉で表したんじゃない？ だから……」

そして、アスナは言うのだ。どちらも正しくて、どちらもまちがっている。これは答えのない哲学を考えるようなものなのだ。

重視していることの違い。見方の違い。それすなわち意見の違い。俺から見た俺、キリトから見た俺は恐らく違って、様々な俺が形成されている。ならば、自分らしさとは何なのだろうか。

「……確かに、私が勝手にエイトを語ってるのかもしれないけど、これだけは言わせて。——出来る限りでいいから、危険なことをしないで。誰だって、知り合いが死ぬのは嫌なの」

いつか言われたような懇願。あの時、俺は何と答えたのだったか。

「……悪いが、そりゃ無理だ」

昔は昔、今は今。

前に何と答えたのかはもう覚えていないが、これが今の俺の回答だ。

俺は現実世界に帰る。

決意を新たにしたり日から、その最終目標は変わっていない。だが、その前に……あるいはそのために、俺は茅場晶彦を殺さなくてはいけない。

罪咎を弾劾するつもりなぞ毛頭ない……というより、俺にそんな権

利はない。所詮俺も同じ穴の狢だ。人殺しや殺人鬼なんて言われても反論の余地もないほどの犯罪者。

二年前。二年前のあの日から俺たちの時は止まった。

電子の檻にして鋼鉄の城、浮遊城アインクラッド。

今なお六千人強の意識はここに囚われ、外界とは隔絶している。そして四千人弱の命は現実世界を最後に一目見ることもなく奪われた。具体的な理由は何もない。だというのに、茅場晶彦を殺すということだけは揺るがしようのないほど頭にこびりついていた。

自らを世界の神と名乗ったあの男を殺すのにこちらが無傷でいられるわけがない。危険に飛び込まなくてはならないのだ。

責任ない約束はすべきでない。

七十四層で俺が死んだとき、コイツらは多分、俺のことを心配してくれていたのだろう。迷惑をかけたことは悪いと思う。心配してくれるのなら、できるだけそうしないようにしたいと思う。

ただ、俺にはそれができない。

「……うん、何となく解ってた」

ちよつと寂しいように微笑を湛え、またポツポツと語りだした。

「二年前からそんなことばっかやってるからさ、多分治そうと思って治せるものじゃないだと思ふの。それでも、やっぱり嫌だからさ」

「そう、ね。でもハチ君、一つだけ約束して」

「内容によるな」

内容も聞かずに約束をすると諭吉一個小隊が天に召されるらしい。ソースは親父。親父のトラウマの数は恐らく俺以上だろう。……どうやって母ちゃんと結婚するまで至ったんだ？

「じゃあ、約束。絶対に、死なないで」

「バツカお前それ死亡フラグ」

「茶化さないで」

茶化したつもりは一切なかったのだが、閃光様が拗ねてしまった。いい年して拗ねんなよとか思ったが、やはり見てくれがいいとそんな気もなくなる。

そろそろ訓練と言う名の扱きの時間だ。

木製扉を引き、誰に向けるでもなく呟いた。

「……………任せとけ」

さあ、騎士（笑）としての初仕事、やりますか……………。

きっと彼と彼女は、今この時もう一度始まる。

幸せは歩いてこない。だから歩いて行くんだね……。歩きたくないよお……。

これがまだ彼女（平面もしくは妄想）とのピクニックだったら意気揚々としていたかもしれないが、あいにくともに歩いているのは毛むくじやらの攻撃部隊長と自称崇高で偉大な栄光ある血盟騎士団員（笑）と俺と同じヒラ騎士だけである。

訓練内容は『五十五層迷宮区突破』と非常に簡単な物だが、転移結晶がない。治癒結晶もない。ポーションしかない。オラこんなポーチヤだ。

冗談を抜きにしても、これは取るべき行動ではない。危機対処能力を見たいとか何とか言っていたが、危機に陥らないようにする能力が大事だろう。あんたは状況判断能力を身に付けた方がいいぞとうっかり言ってしまうところだった。

それにしても、自称崇高で偉大な栄光ある血盟騎士団員（笑）が何もしてこないのが逆に気味が悪い。アスナやキリトも気を付けてねとか言っていたし……。ていうか、入団直後の団員より信用されてないって……。まあストーキングしていたからやむ無しだろうが。

訓練開始から三十分で気づいたが、これ今更すぎる。攻撃力のない俺でさえソードスキルを二、三発当てればモンスターを塵に出来てしまう。

「よし、ここで一時休憩！」

数えきれないほどモンスターを斬り倒し幾つかの岩山を越え、迷宮区タワーがうつすらと見えてきた辺りで休憩の号令がかかる。

各々手頃な岩に座り、配布された食料が入っている革の包みを開ける。さして期待してもいなかったが、固焼きパンと水だけだとテンションが下がるのも仕方のないことだろう。

水の瓶栓を開け、渴いた喉を潤そうと思ったところで凍るような寒気が背筋を走り、動きを止めた。

これの正体を今更確かめるまでもない。これは……。殺気だ。

「チツ」

小さな舌打ちを合図にしたかのように俺とあの男以外が倒れ込む。それを見て手の中の瓶を思いつきり地面に叩きつけた。

「あーあーあーあー！ 何で気づいちやうかねえ！」

「ク、クラデイル、お前……」

大人しくしていた数刻前から一転、狂気染みた笑みを浮かべる狂態で前髪をかき揚げる。

殺気と狂笑。それだけでこいつが何者なのか容易に予想できてしまった。

「……お前、ラフコフの残党だろ」

「ほう、いい目してるじゃねえか」

今度は俺が盛大に舌打ちをかます。こいつだ。こいつがラフコフ討伐戦の時に情報を向こう側に漏洩しやがった。

甲高い笛の音が辺りを囲む岩を反射し、途方もないほど反射し耳が痛いほど音響する。

瞬間、上から十の人影が降って来る。今日の戦闘ではなかった濃厚な死の予感が俺に冷や汗を垂らさせた。

やつらが着地した時に舞い上がった砂煙が晴れ、暗色の装備に身を包んだ人殺し集団が姿を現す。

さしもの俺とさえども、総勢十一人で袋叩きは現実世界含め一度もない。袋叩きというかもうリンチだろ、これ。

「……仇討ちってわけか？ はっ」

まずい。これはかなりまずい。俺一人なら俊足を活かしてこいつらを振り切つて逃げることも出来るだろうが、今回は動けないプレイヤーが二人いる。故に逃げるわけにはいかない。

俺の双剣での戦闘スタイルは未だ固まりきっていない。しかしこの状況下では相手を殺さなければ三人生き残ることはできない。逆に言えば、こいつらを殺していいなら三人とも生き残ることは容易い。

簡単に人を殺すという結論が出てくる自分の思考回路に少し嫌悪しつつ、剣を弓のように構える。

発光。

光の矢がラフコフの一人の頭を射抜き、HPを全損させる。それとともにスキル使用後の硬直のように誰もが固まり、その間に技後硬直が解けたので二撃目のソード・アローを放つ。

「……命中。残り、九人」

平坦な口調で述べた事実は、自分自身さえも凍えさせる。これでラフコフの何人かが戦意喪失してくればと願うも、むしろ奮い立って斬りかかってくる。バカが、と悪態を口の中で転がし、接敵するまでにまた一人の頭を射る。

「殺せッ、殺せエエツッ！」

「……甘いんだよ」

俺とあいつらは違う。いや、根底で言えば同じだがそういうことではなく、単に戦闘技術での話だ。

あいつらは弱者を弄び、痛め付け、殺すことしかしない。ゲームで言うならば、確実に自分が勝てる敵だけを選んで戦っているのだ。

それでは格上には勝てない。ダンまち風に言うなら冒険をしたことのない冒険者だ。

時間差で襲いかかってくるラフコフの連携はお世辞にも秀逸とは言えない。新たに三人が硝子片と化した。

「……まだやんなら、余すことなく狩り尽くしてやるが？」

「ウオオオオッ！」

単身突貫してきた有象無象に眼を向けることもなく首を刎ねる。数十人のラフコフの命をこの剣で奪い、判ったことがある。

ラフコフのメンバーは命という物の認識が薄い。奪う相手のものだけでなく、自分自身の命に対してもだ。だから、気づく時は遅く、すでに死んだ後だ。

威嚇の意を込めて思いっきり地面を踏みしめる。誰も口を開かないこの静寂な空間では砂とブーツが擦れる音はよく響いた。

「クソッ……動くんじゃないやねえ！ こいつらが……ガッ」

「人質とんのを予想しないわけねえだろうが」

蟀谷こめかみにシングルシュートを三回ほぼタイムラグ無しで射ち、見事に相

手のHPを全損させる。次いでスキル後硬直を狙い左右から同時に追撃してきたラフコフメンバーの斬撃を避け、首にトレイターとソリチュードを刺し込む。

「……残存戦力、残り三人」

「おっ、お前の方がよっぽどの人殺しじゃねえかよ、糞が！」

「……なんだ、今更気づいたのか？ クラデイル。……俺は言ったよな？ 人を殺すつもりなら自分も殺される覚悟を持ってから来いって言ったよな！」

俺が珍しく怒鳴ったことの威圧のせいか、他のラフコフメンバー二人は動けずにいた。呆然としている隊長から自分のポーチを奪い、回廊結晶を使用する。その後二人に睨むように目配せすると、自分から回廊結晶によってつくられた渦に喜んで入っていった。

「く、来んじゃねえ！」

俺が一步進めばこいつが一步退く。振るわれた剣を武器破壊で押し折り、また一步、歩を進める。

「……お前だな？ お前だよな？ ラフコフ討伐戦で情報を洩らしたのは」

「そ、それがなんだってんだよ……」

「……選べ。このままここにお前の墓碑を建てるか、あの黒鉄宮の牢屋に繋がっているゲートを潜るか」

俺にできる最大限の譲歩のつもりだったが、クラデイルは何を思ったか遁走しようとする。敏捷極振りの俺に鬼ごっこを挑んだのは愚策としか言いようがない。

すぐに追いつき片腕で首を掴んだまま持ち上げる。現実世界の軟弱な萌やしっ子の俺の体では到底できないことだろう。

「……じゃあな、クラデイル」

「ま、待……」

言い切らせる前に神速の突きが咽喉を貫いた。血の代わりに紅いダメージエフェクトが中空に飛び散った。クラデイルの双眼は怨嗟を込めて俺に向けられ、唇が動いてはいるが喉を貫かれているからか何の言葉も発さない。やがて、その存在をこの世界からも向こうの

世界からも消した。

視線を向ければあからさまに怯えた様子の血盟騎士団の二人がいる。この件をきっかけに恐らく俺がラフコフの残党を斬り殺していたことが露見するだろうが、もはやどうでもよかった。

× × ×

「……入団直後にこんなことになってすみませんね。俺、やっぱ集団行動は向いてないみたいです」

「……いや、前回といい、今回といい、非は完全にこちらにある。君が謝る必要もなからう」

約一週間ぶりの団長室で、今回は差しで密談……というほどでもないが、談じていた。一応まだ上司ではあるので敬語を使っているが、さしたる意味もないとやめることにした。

「それで……君の要求は自らを血盟騎士団から除団することだと言っていたが、一応訊こう、何故かね？」

「……俺が団体行動したくないっつーのもあるが、一番は人殺しが最強ギルドに属するのは相当にリスクだ。下手すりゃ攻略組を支える商人プレイヤーや情報屋、延いては中層プレイヤーまでに不信感が漂う。そうなれば攻略は必ず滞るからな。……こんなこと、言わずともあんたならわかんדר？」

「ふむ……確かに現状それが最善だが、君のほうはいいのかね？ その策だと君一人が血盟騎士団の責任も負うことになってしまうが」「ふざけるよ。誰がお前らの尻拭いをしてやるかよ。……貸し一つだ」

「そうか」

短く応答すると、ヒースクリフはワイングラスを傾けた。俺としては話すことは話したので退席しようとする腰を上げた。

「……こうして君と一対一で話す機会ももうなからう。一つ訊いてもいいかな？」

「……何だ？」



「……君の行動原理とは何だね？」

背中に問いかけを受け、俺は思わず動きを停止した。

——比企谷八幡の行動原理とは？

俺の核とも言えるモノ。それは……？

「……多分、欲しいものがあつた」

きつと、もう手に入らないのだろうけど。

俺もまた短く応答し、重厚な扉を引いた。

× × ×

「……あ」

「……よう」

明日からはソロプレイヤーに戻るため、もう二度と来ることはないであろうKOBの本拠の庭を散策していたらキリトに遭遇した。

月光が芝生を照らし、淡く儂い色を発色している様子は、二年前……まだ俺が右も左も知らぬビギナーであつた時にキリトと初めてやったクエストの森のようだった。

「……似てるね、ハニー」

キリトも俺と同じことを感じたのか、俺と自分に再認識させるようにぼつりと言葉を溢した。

「……エイト、八月からラフコフの残党と戦ってたんでしょ？」

……それは不意打ちだ。誤魔化しようもないほど息と言葉を詰まらせ、唾と一緒に飲み下した。

「だから、私は訊いてみたけど、エイトははぐらかしたよね？」

「いや、それは……」

こんな時もどうにか逃れようと頭を回し、舌を尽くし、嘘を吐こうとしている。そのことが、俺が最も嫌った欺瞞を甘受しているようにでたらなく嫌だった。だと言うのにまだ、また嘘を吐こうとしている。

「それが悲しかったし、嬉しかった」

「……う、嬉しかった？」

「うん、嬉しかった」

どこに嬉しい要素があったのだろうか。悪戯っ子のような、それだけで無邪気な笑みのキリトを見るに、訊いても教えてくれそうにはない。……二年間付き合があっても、知らない一面はあるものだ。

「……わからん。降参だ、降参」

「じゃあ、ヒント。エイトが嘘を吐く時ってどんな時？ 誰に吐くの？」

「はあ？」

ますます意味がわからない。俺が嘘を吐く時？ 誰に吐くか？

三分ほど黙考するも、やっぱりわからん。ぼっちのユニークスキル、深化思考力を持つてしてもわからないとは、難易度が高すぎる。

降参だと両手を軽く挙げることで示す。キリトは何かに対する不満と俺にクイズで勝った喜びがない交ぜになった複雑な顔をしている。……器用だな。

「じゃあ、宿題ね？」

「えー……」

気分が沈んだところではたと気づく。

こんな時間に一緒にいるところを見られたら、キリトの沽券に関わるんじゃないか？

何故今の今まで気づかなかったか不思議だが、気づいてしまったからには対策をせねばなるまい。対策って言っても俺がこの場から離れるだけだが。

……そう言えば、俺が人殺しと知ってなお俺に関わろうとするのは何故なのだろうか。この問いもまた答えは出なかった。

「……んじゃ、俺はこの辺で」

「あ、うん……あの、エイト」

「あ？」

「もう一回……フレンド登録、しない？」

頬を赤らめ、今にも泣きそうな眼をし、それでもキリトは言った。自分の言葉で、俺に伝えようと、自分の意思を……あるいは願望を。

友達になりたい。

キリトがそう言ったことは、俺の知る限りではない。

はじめにことばがあった。ことばは神と共にあり、ことばは神であつた。

聖書に書かれている一節だ。言葉は神であり、言葉は万物を創つた。俺にはそれが理解し難かつた。

言葉によってすべての思いが伝えられるわけでもない。言葉によってすべてのものが表せるわけではない。

フレンド登録を友達の証などとのたまうつもりは俺にも彼女にもないだろう。

誰かは言いたい言葉を押し留め、誰かは言葉で伝える術を持たずに行動で示そうとし、誰かは自分の意思をはつきりと伝えた上で行動に移した。

そんなことができていれば、俺はあの部屋で何かを見つけられていたのだろうか。もう遅いのだろうか。

終わってしまったのか、そうでないのか、それすらも知らずにいる。だが始まりは知っている。解る。理解できる。

人殺しだということ、そんな穢れた人種であつてなお歩み寄ってきてくれる人がいるのだろうか。きつといるのだろうか。

だから、俺は。

「……ああ、もう一度、よろしく」

「うんー」

もう一度、始めることもできるのだろうか。

幸せは歩いてこない。だから、自ら幸せを求めて歩いていかなければならないだろう。知らず、後退することもあるのだろうか、それでも前進していることを信じて今日も歩き続ける。

自らの心も分からぬまま、彼は厄介事を背負う。

……やはりソロはいい。リリンが生み出した人生の極みだよ。  
……俺はこのフィフスチルドレンなのん？

……うむ、独りで何かをすることは慣れているを通り越して当たり前の俺でも一人ツツコミは無理……というか、純粹に恥ずかしい。というか、カヲル君の台詞を引用するなんて恐れ多い。……あの人使徒だけど。

まあ、つまるところやはりソロライフは至高にして最高だ。休みた  
い時に休むことができ、寝たい時に寝ることができる。……あれ、そ  
れヒキニートじゃね？ いやいや、一応仕事こうりやくはしてるし違うはず。  
……違うよね？

俺はインドア派なだけであってヒキニートではないと十回復唱し、  
そう言えばと二ヶ月前に買ったこのログハウスの周辺に何があるの  
かロクに知らないことを思い出す。

自分のホームの周りを知らないのはどこか落ち着かない。例える  
なら、例えるなら……特にないな、うん。

誰にもなく弁明しながら、休養も兼ねて今日はマイスイート  
ホームの周りを散策することに決める。それにしてもスウィート  
ホームとか言うと、アツアツ（死語）の新婚の家みたいである。

適当に朝食を済ませ、さして減っていなかった腹を満たすとまた眠  
気が襲ってくる。春でもないのになんてことだ……やはり生活サイ  
クルが悪いとダメだね。でもソロは最高だよ！

× × ×

少女、ゲットだぜ！

……いや待て落ち着け。どうしてこうなった？ 確か……家を出  
て、どこか目的地を設定しないとすぐ帰ってしまいそうだからクライ  
ンが幽霊を見たとか言ってたところに設定して……、普通に着いたん  
だよな。で、幽霊なんて当然のことながらいなくて帰ろうとしたら視

線を感じて、視線を感じた方に歩いたら幼女……いや少女がいた。

……うん、何で？

俺がそう思うのにはいくつか理由がある。

一つ、この少女が眠っている……もしくは気絶しているからだ。周りにホーム一つないこの場所で。

二つ、この娘は見る限り八〜十歳だ。ナーヴギアの対象年齢は確か十二歳以上だったはず。いや、これは対象年齢を破ってこの娘がフルダイブしたと考えれば説明はつく。だが保護者みたいな人はこの世界には普通いないだろうし、どうやって生活してきたのだろうか。下手をすると精神に異常を来しているかもしれない。

三つ、視線を合わせてもこの娘の頭上にカーソルが出ない。プレイヤーでもモンスターの視線を合わせれば必ずグリーン、イエロー（オレンジ）、レッド、クリムゾンレッドのカーソルのどれかは表示されるのだが、この娘には出ない。NPCならカーソルは出ないので、これは何らかのクエストフラグとしてこの娘がいるなら納得できるのだが……生憎とこの娘の頭上にクエスチョンマークが無いことがその可能性を否定している。正直これが一番大きな謎だ。

「どうするかなあ……」

正直この少女は何か訳ありな可能性が高い。関わるべきではないし、関わったら厄介事に巻き込まれそうな気がしてならない。そもそも見ず知らずの少女に構う義理も意味もない。……リスクリターンだけで考えるなら。

S A O初期の俺だったら後ろ髪を引かれながらも見捨てていただろう。だが、これでも多少は変わったのだろうか。それとも、数多の命を奪ってきたことに対する偽善者じみた贖罪か……。

気持ち悪い。

この女々しきは親父譲りだろうか。やっぱり、血は争えない。

俺にこびりついた怨嗟の血液をこの少女で拭うなんてことは赦されない。それは自己満足であり、罪からの逃げだ。

たとえ悪人であったとしても人の命は軽くない。因果応報という言葉通り、いつかは必ず自分に返ってくる。俺は運命なんて信じな

い。だからこれは確信だ。

まあ、一寸先は闇と言われるほどに考えると鬱になる未来のことを思う余裕はない。ひとまず、この少女をどうしようかと考えるので精一杯だった。

× × ×

「……ほんと、どうするかな……」

寝室に元から二つ設置されていたベッドの片方で眠り、規則正しい呼吸をする少女を見つめて独り呟く。

ほんと、どうしたものか。俺が今していることは多分悪手だ。いや、何もしなくても……或いは何をしても恐らくは悪案だろう。

比企谷八幡の損得勘定だけで考慮するなら、この少女を見捨てるべきだった。事実一時は素知らぬ顔をして帰ろうかと考えた。

……だが、何故だろう。結局はこうして能動的に厄介事を背負い込んでしまった。

悪意、害意、敵意ならば利害や打算が行動原理だから読み解ける。それができないということは、今俺が行動した理由はきつと……。

知らないことは断定できない。ならば考えるだけ無駄だ。

確証のない予想をばつさり断ち、これからの予定を黙考する。

もしこの少女に保護者がいるという最高の状況を想定するならば、この少女の保護者を探せばいい。次善で疲れが溜まって倒れてしまったのならまだいい。……だが、最悪の場合、この娘は心が壊れているかもしれない。

HP全損Ⅱ死が絶対のデスゲームという極限の環境の中で、精神が成熟しきっていないこの小さな少女が精神を磨耗し、磨りきれて無くなってしまっても何らおかしくない。いや、むしろそうなのではないのが普通だろう。

ならば、何故厄介事と解っていてこの少女を連れてきた？ 浅慮になつたわけでも、俺にメリットがあるわけでもないのに。

ぐるぐるぐるぐると、まるでウロボロスのように絶ち切ったはずの

思考が循環して巡ってくるので、あどけない少女の寝顔から眼を逸らす。

純真さが雰囲気としてまとわりついているような真つ白な姿は俺には眩しい。光があれば影もある。俺みたいな汚れているやつがいるなら、この娘みたいに純真なやつもいる。戸塚とか。

同族嫌悪、という言葉があるが、あれは自分と似たような人間を嫌うことを指す言葉だ。まあまちがってはいないだろう。俺だって俺みたいなめんどくさい嫌なやつがもう一人いたら嫌だ。

だが、異族嫌悪という言葉もあつて然るべきだと思う。

自分と違うやつは嫌いだと言うやつは俺だけじゃないはずだ。

自分と話が合わないから。考えが違うから。人を嫌うには様々な理由があるだろうが根底は同じだ。相手のことが理解できないから嫌いなのだ。或いは、なんとなく嫌いという輩もいるだろうが、明確な理由があるのならこれに尽きると思う。……あくまで持論だが。だから俺は人が嫌いだ。

解らないから。理解できないから。それがひどく怖い。

だからだろうか、こんなあどけない少女にすら若干の恐怖心を抱いてしまうのは。

清らかに、神聖に見えるから怖い。まるで神に出会った信教者みたいではないか。

いや……この娘が起きたら恐らく、いやほぼ確実にパニックに陥るだろう。その時年上の俺がこの娘に恐怖を感じてはいけけない。それでなくとも俺は恐怖心を与える容姿をしているのだから。

……ほんと、どうするかな。

何度となく思ったことを、もう一度口内で転がした。

× × ×

システムで設定したアラームが俺の脳内で鳴り響く。喧しい音に渋々意識を覚醒させ、身を起こす。

時刻は午前六時。ソロプレイヤーとして怠惰な生活を送っていた

俺にしては起床には早すぎる時間と言ってもいい。万が一にも少女が先に起きては混乱するだろうからだ。その少女と言えば、隣のベッドで未だぐっすりだ。……もしこの娘の精神が崩壊しているのなら、目を覚ますことはないかもしれない。

だとしたら、どうする？　　ずつと面倒見るのか？　　無理だ、人

一人の面倒をずっと見るなんて俺みたいなやつに出来っこない。

責任を取る覚悟もなくこんなことをしてしまったが、……いや何かちよつと犯罪臭がするがまあそういうことではなく、関わってしまったのなら出来ることはやるのが最低限の責任だろう。

ひとまず、この娘を探しているプレイヤーを捜索することからやってみますか……。何はともあれ、まずは朝食だ。

キッチンで作るほど大掛かりな物を作る気なんてないが、料理をするとなると足が向いてしまう。サンドイッチは楽で美味しい。オマケにアレンジもしやすいし食べやすい。正に朝食の長だ。いや、やっぱ小町が作った飯が一番だな。

飯を食ったらソファで二度寝してしまい、起きてすぐに視界に映る時計を見る。八時ちよいだったので一時間程度しか寝ていないとホッとした時だった。

少女が目の前にいた。

驚きと羞恥で一気に意識が浮上し、思いっきり背を反らす。ようやく落ち着いて出た言葉は一つだった。

「えつと……おはようございますっ？」



騒がしく戦いは始まり、そして敗れる。

……ヤベエ、なんて言おうと思ってたか一瞬で全部吹き飛んだ。脳内が人類最強ゲーマー兄妹のユーザー名だ。

「えつと、そのだな、ゆ……誘拐したわけじゃあないからな？」

おい、もつと先に言うべきことあんだろ……。自分でも自分のコミュ力の無さに驚愕するわ。

それにしても、限りなく人に近い人形かと思うほどに表情筋が微動だにしない。だがナメるなよ、雪ノ下の絶対零度の視線を受け続けた俺の精神は無表情の顔くらいじゃ傷つけることは出来ないぞ。

……だとしても、話しかけることが出来るかと問われれば断じて否だが。

「えつと……名前とか……訊いていいか？」

「？」

う、うーん、不思議ちゃんなの？ 名前訊いたら首傾げちゃったよ……。

小町とも留美とも違う年下タイプである。幼児と呼べるくらい小さい子だったら元気いっぱい話しかけてきたことに応答するだけでいいが、この子くらいの年のやつが俺くらいの年のやつに話しかけるのはかなりハードルが高い。故に話しかけるべきは俺の方なのだが……。

「その、俺はエイトって言うんだ」

「え……と？」

「エイト、な」

たどたどしく復唱した少女に諭すように返し、まあ俺を指しているとわかる名前なら何でもいい。

「言いつらいなら何と呼んでもいいぞ？」

「カ……エル？ ……パパ」

ちよつと？ この娘パパ言う前にカエルって言ったよな？

ていうかパパ？ ちよつとそれは……俺にそういう趣味があるみたいだからやめて欲しいな……と思ったり……。

「パパ……パパ！」

「お、おう、そうだな、パパだぞー……」

まだ結婚はおろか、DTだというのにパパかよ……。……あれ、じゃあ小町は齡十七にしておばさ……。やめよう、今まで積み上げたポイントがマイナスカンストしてしまう。いやでも予想外に冷たく「バカなの？」とか言われたらゾクゾクしちゃうかも……。

会話の糸口が全く見つからず、変態思考に染まりかけていた時キュルルルと細い音が鳴る。この娘の腹の音らしいが、当の本人は理解できずにまたもや首を捻っている。

取り敢えず、飯をもっかい作ってやるか……。

× × ×

起きて初めて見たのが俺だからという刷り込みか、はたまた飯を食わせて餌付けしたからか少女は非常に俺に懐いた。出来れば前者ではないことを希う。この娘の記憶がないのは俺にとつてもこの娘にとつても得にはならない状況だ。

……あ、名前まだ聞いてなかった。

「改めて訊くが……名前は？ 何で自分がここに居るとかはわかるか？」

「な……まえ、はユ……。イ。他、何も……。わから、ない」

……最悪のパターンだ……。

両手に白旗を持ってお手上げしちゃうくらいにどうしようもない。だが放っておくわけにもいかんか……。この娘の記憶でこの不可解な状況がわからないのならば、どういう状況だったら今みたいな状況に陥るのかで考えるしかない。

何にせよ、今すべきことは情報収集だということだけは明確だ。

うん、それはそれとして、頬を引っ張るのやめてね？ 楽しそう

にしているのはいいけど、頬に軽い電流を流されてるみたいな感覚がするから。

そこでこの娘が見ず知らずの俺に対しての警戒心が全くないこと

に気づく。俺は自分が人一倍他人に警戒されやすい容姿であると自覚している。そんな俺に対して警戒心が皆無なのは家族か純真な奴だけだ。つまり、家族以外には天使と幼児しかいない。

しかしこの娘はどう見ても幼児と呼べる年齢ではない。……見た目に限って言うならば。……中身はどうなのだろうか。

自衛本能が働き、過去の記憶を無くして心の平衡を保つために幼児退行をする話を聞いたことがないわけじゃない。だが自分に縁のない話だと思っていたことを目前に突きつけられても信じられないが、確かに今日の前にあるのだ。

我ながら面倒ごとを背負い込んでしまったものだと思う。だが、どこか悪い気がしない俺もいた。

懐かしい、のだと思う。二年前までは自ら望んだわけではないが、こういう厄介ごとに関わることがザラだった。

高校一年までの俺だったら感じることもなかつた感情。それは俺が奉仕部、アインクラッドでの濃密な時間で確かに変わったことの証左だった。

「パパ？」

「……すまん。ボーツとしてた」

仮定をあれこれ憶測するのはよそう。今努めるべきは現状の把握と情報収集なのだから。何にせよ、情報を集めるには街に行かねばなるまい。

ずいぶんと長い思考に結論が出たので早速行こうとソファアールから腰を浮かす。するとまるでタイミングを見計らったかのようにインターホンが鳴り、思わず動きを止める。何故か冷や汗が背中を濡らす。

ヒースクリフとデュエルした時に感じた危機感と同等の恐怖が俺を襲い、無意識に頭中で警鐘がガンガンと響く。

よし、居留守しよう。

その結論を下したのは脳ではなく俺の細胞一つ一つだと感じるほどに即決できた。この状況がバレたらヤバイ相手が今俺の家に来たのだと、過程や方式をすっ飛ばしても解ってしまう。……ていうか1



留守使うつもりだったんだが……。まあいいか。だけど《鼠》だけは絶対勘弁、あいつだったら俺が社会的に死ぬ。

祈りながら開けたその扉の向こうにはー。

「こんにちは、エイト！」

「はあ……」

「……な、なんでいきなりため息吐かれたの？」

いや、これため息だけど安堵から来たものだから気にしないでください。

安心感と付随してきた脱力感を断ち切り、たつぷり数秒間瞑目していた瞼を開く。と、後ろにはもう一人純白の騎士がいた。……落ち込んでる、のか？

俺の視線に気づいたのか、キリトが後ろを振り返り納得したように

「ああ」と呟いた。それにしても芯が鋼鉄並みに硬いアスナがこうして落ち込んでいると一目でわかる雰囲気纏っているのも珍しい。一体何があったのか少し気にはなったものの地雷を踏み抜いては目も当てられない。

「……で、何の用？」

「……か何で家の場所知ってんの？」

「えーと……、用があるのはアスナで、私はただの付き添い。ほら、アスナはエイトとフレンド解除したまんまだったから居所がわからなくて……」

ああ、そう言えばそうだったな。ここ最近攻略してないから別にアスナと連絡を取らなくても不便だと思うことがなかったから忘れかけてたわ。

「……で、アスナ。俺に何の用？」

「……謝りに、来たの」

「……言つとくが、クラディールのことなら微塵も気にすることは無いからな」

怯えるように肩を震わせたのを見るに、どうやら正解らしい。

部下の失態は上司の責任であるとよく言われるが、俺はそうは思わない。……まあ、俺の賛否はともかく、その内容に当てはめるのなら

責任を取るべきは血盟騎士団——アスナではなく、ラフィン・コフィン——P O Hであるべきなのだ。

気にすんなと適当な態度で示すが、アスナの様子はでも……といった感じでモジモジしている。成る程、誠実さが行き過ぎるところなるのか。

「クラディールの件はお前のせいじゃないと被害者の俺が思ってるからいいんだよ。話が終わりなら俺やることあるから」

「……うん、そうね。その、ハチ君。ハチ君はまだ私と仲良く——」

「パパー？」

「——」

……うん、終わったな。くそう、小さい子が待っててと言われたところで守らないことくらい知っていたはずなのに……。ソースはモニタリング。

「……ねえ、キリトちゃん。私、耳がおかしくなったのかしら。曲がりなりに二年近くハチ君と交流がある私が出たことのない小さい子がハチ君をパパって言った気がするんだけど」

「ううん、聞き間違いじゃないと思うよ。私も確かにこのSYOJOがAYTOをPAPAって言ったのが聞こえたもん」

全身に恐怖が絡みつき、体が麻痺したかのように動かなくなったがそれも数秒間のこと。再び機能し始めた全身のチカラで扉を閉めようと全力で引く。

「何で、閉めようとするの〜？」

「言つとくが、俺にそういう趣味はないからな……」

弁明しながら必死に扉を閉めようとする俺の脚にしがみついて引つ張る——本人は必死にパパだと思っっている俺を手伝っているつもりなのだろう——ユイを見て更に力が強まり、それに対抗するためはこちらも力を加えるのでユイが更に強く脚に引つ付き、キリトがまた……という悪循環である。

「そういう趣味じゃないって言うならさ、取り敢えず扉開けて話し合おう？　ね？」

「お前の目に光が宿ったらな……」

あれは侮蔑の視線である。いや確かに知り合いが小さい異性の子を家に連れ込んでいて、あまつさえお兄ちゃんどころかパパ呼ばわりされてんのが見たら俺もドン引きする。

「……謝りに来たただけだから参加しようかどうか迷っていたけれど……キリトちゃん、私も手伝うわ」

「なっ！」

ズルい！　卑怯！　二体一なんてイジメだよ！

こっちも一応二人だけど、実質一人なんだからね！

まあ、結局攻略組でもトップクラスのステータスを持つ二人に勝てるはずもなく、エイト城は敢え無く落城しましたとき。

きつと、正反対に見えるものの根底は相似している。

詰み。

それはどう足掻いてもどうにもならない状況のことを指す。そも、つみと読む言葉にロクなもんはない。例えば罪であったり、もしくは積みであつたり……。

日本語を作り出した人にはつみという響きに何か恨みがあるのだろうか。

もう一つ問いたいことがある。

この状況は俺の罪が積み重なって詰みになったんですかね？

× × ×

「……よし、取り敢えず落ち着こうぜ。な？」

俺の命を永らえさせるためにも状況を説明するにも兎に角冷静さが必要だ。いやまあ気持ちにはわかる。俺で言うならざい、ざい……ざい何とかが幼女を連れ歩いてたのを目撃してしまった気分キリト達はなっているはずだ。何それ、俺じゃなくても通報するだろ。

まあ幸いSAOには運営がないので「通報？ H A？

どこにすんだよww」と言える無法地帯みたいなもんだが。

「……ねえ、アスナ。知り合いが幼女を家に連れ込んでいるのを見た時、人はどんな顔をすればいいの？」

「そうよねえ、親類なら2年間八千君と一緒にいた私達が知らないのはおかしいし、単なる迷子なら家に連れて来る必要はないし、何より……パパって呼ばれてたものねえ」

「ちちちち、違う……俺にそんな趣味はねえ……」

俺はパパと呼ばれるなら悠木碧さんに呼ばれたいんだ……。だつて千葉県出身だし？ 小町に声似てるしい？

「……なら説明、プリーズ？」

「い、イエス、マアム……」



× × ×

「……それ、ホント？」

「残念なことにマジな話なんだよ……」

俺がこいつを見つけて家まで連れて来た経緯と俺の憶測、そしてこの娘が俺をパパと呼ぶのは起きて初めて見たのが俺ということに対しての刷り込みだろうという事を念入りに話した。特に後者。

「……………エイトラしいね」

「は？」

何かを呟いたのであろうキリトの声を残念ながら捉えることができず、何を言ったのかわからない。しかし大した話でもなさそうなので追求することはしない。深追い、ダメ、絶対。

「……………ねえ、じゃあこの娘どうするの？」

「取り敢えずはじまりの街辺りに行って情報収集、だな。こんな小さい奴が街から出るとも思えん。拠点にしているとしたら八割がたそこだろ」

「でも、そもそもユイちゃんの保護者っているの？」

アスナが一番の懸念事項を問うてくる。やめろ、言うな。

そんな俺の想念が伝わったのかは知らんが、アスナがハツとしたような顔になる。当のユイは言うことが理解できないのか、外見よりも更に幼い仕草で首を傾げていた。

最初からこの世界に存在しないならばまだいい。だが、存在していたのにいなくなったのなら。そのショックでユイは記憶を無くしたのなら何故子供一人で、あんなどこにいたのかの説明はつく。まあ、システムウインドウの異常化の説明はつかないが……。

「まあ、何回でも言うが何にせよ街に行かんことにはどうにもならん」  
「ん、手伝うよ」

「……………いいのか？ 血盟騎士団の仕事とかあるんじゃないかねえの？」

「ないね」

「ないわね」

「……………思いの外血盟騎士団ってホワイトギルドなの？」

そんな眩きに目を逸らした二人を見て、俺は何かを察した。  
大変ですね……。

× × ×

アインクラッド一層主街区にして最大の街、そしてその名の通り俺たちの二年間が始まった街——《はじまりの街》。

あの日から実に二年間が過ぎている。緋く、緋く染まっていた空は清々しいほどに青いが、瞼を閉じればあの光景が蘇る。

コツコツやる作業は嫌いじゃない。だが二年は長過ぎた。長さで言えば俺がここで過ごした時間は既に俺の高校生活を超過していて、密度で言えば俺のどんな二年間より濃い。

「……？」 どうしたの？」

「いや……、思えばお前らとも二年近い付き合いになんだなと思ってな」

「……そうだね。私、このゲームが始まった頃は……ううん、このゲームに入る前は二年間がすごく長く感じたけど……ここではあつという間だった」

「まあ、なあ……」

生き残るために日々我武者羅に生きていると、一日一日が短く感じる。密度は現実には頃より遥かに濃いというのに……。いや、だからこそなのかもしれない。

「ま、それはそれとして……人が心なしか少くない？」

「はじまりの街で人が集まるのはマーケットの方じゃない？」

「どうだかな、軍が横行してんなら出てこなくてもおかしくはないぞ」  
「？」

トテトテと近寄ってきたユイを負ぶさり、久々の町並みを眺めながらゆったりと歩いていく。

この街にいるのは死に恐怖し、現実世界への帰還を諦めたもの……いや、現実世界への帰還を他人に任せられた者たちだ。死ぬのは誰だつて怖い。だからその事に思うところはない。別に俺たちはこいつらの

ために攻略を進めてきたわけでもなし。

手がかりもなんもないので、取り敢えずは人を探すのが得策だろう。しかし今更ながら軍のせいで決して治安がいいとは言えないこの街にユイみたいな小さい子がいるのだろうか。不安を後押しするように街は寂れていた。

キリトにアスナも軍の話は当然知っているため警戒は怠っていない。だからこそおかしい。常に気を張り、気配に敏感になっているのに人の気配が感じられないのは。

「……あんたら、余所モンか?」

さらに数分歩き、ようやく疎らに人を見かけるようになった頃、四十代くらいと見受けられる男が一本の木を見たまま問答してきた。

「……その通りだが?」

「なら早く帰んな。ここはもう安全な圏内じゃねえ。軍の狩場だ」  
「……………」

「あ、つと、あなたはここで何をしてるんですか?」

軍の税徴収の噂が真実だと知り、微妙な空気になったのを修正したのはやはりというかアスナだった。このコミュニケーション能力は先天性か後天性か、気になります。

「……企業秘密だ……と、言いたいとこだが余所モンならいいか……。実はこの木からたまに果実が落ちてくんだよ。食っても美味しい、売ったらそこそこ金になる」

「ほー」

「へー」

フィールドに出ないプレイヤーでも最低限生き延びられるだけの収入を得ることができるようにするのは茅場晶彦くらいだろう。

「ちなみに幾らなんですか?」

料理に造詣が深い我がが閃光アスナが尋ねると、男は一瞬思案顔を浮かべ、そして衝撃的なお値段を告げた。

「一個五コルだ」

男が言ったことがここに暮らすプレイヤーの情勢を物語っていた。プレイヤーが経営する店でアルバイトができないこともない。し

かし文字通り【はじまりの街】であるここにプレイヤーショップなんざ口くない。その上未だ数千人というプレイヤーがここにいるのだ。自分で店を出そうにもその元手がない。加えて軍の税徴収だ。

他の層に行っても圏外に出ないでもできる仕事がない。鍛冶屋？

鍛冶スキルの熟練度が足りない。情報屋？ 二年間ここ

にいたのに情報を集めるだけの人脈がない。プレイヤーショップの店員？ そんなものやっっている奴が希少だ。

それに他の層に行こうとも自らの停滞と惨めさを再認識するだけだ。誰もが前に進んでいるのに自分たちは留まり、恐怖心に足がすぐんで動き出せないでいる。そんなものを味わうなら、いつそのことこのままここで不変の日常……いや、非日常を過ごしていた方がいいのだ。

「あの……この街のすぐ近くにいるモンスター一匹倒せば三十コルくらい手に入ると思えますよ？」

「何言ってるんだアンタ。モンスターなんかと戦ったら死んじゃうかもしれないだろうが」

キリトの発言にすくま否定的案を唱え、口を固く結んでしまう。もう話す気はない、ということだろう。

キリトの言ったことは決して間違っではない。MMORPGとしての視点から見ても正しいし、事実俺たちはそうすることによってアインクラッドでの生計を立ててきた。

だが一つのミスが命取りになる戦闘をやりたいと思う人は誰もいない。今でこそ俺たちはそれを当たり前にやっているが、SAO開始初期の俺たちは……少なくとも俺は、常に精神を鋭くし、一部の油断もせぬよう戦いに臨んだ。死なないように、生きて現実に帰るために。

彼に限らず、この街にいる奴にとって、生きて現実に帰る手段というのはアインクラッドの攻略ではなく安全な圏内に引きこもり、外部からの助けを待つことなのだろう。

二年間も一切外部からの干渉がないのだから救助なんて不可能だと気づかない彼らはきつと愚かと形容すべきなのだろう。だがおか

しいのはこの世界のルールに遵守し、モンスターを倒して生きている俺たちなのかもしれない。

攻略組もまた、百層を攻略すれば現実に帰れるという確証のない希望に縋り付いている者たちの集団に過ぎない。それも彼らから見たら愚かしいことなのだろう。

だからどつちが正しいかなんて、俺なんかにはわからない。

なによりー俺は、あの戦いから自分の判断に自信を持ってなくなっ  
てしまったのだから。

然るに、彼女のことを彼は知らない。

あの後も聞き込みを続けた結果、ユイのような子達はどうかやら7区の教会にいるらしい。……集団を形成しているのならば、それを纏めているリーダー……おそらく大人がいるはずだ。その人ならユイについても何か知っている可能性が高い。

「パパ、顔こわい……」

「あのな、ユイ。これがパパの普通の顔だから。それとそういうことを人に言っちゃいけません」

心決れるから。何気に齒に衣着せられない子どもの言葉が意外にク。だが俺の顔が怖いことなんか毎日鏡見て知つとるわ。

「ユイちゃん、ああいうのは顔が険しいって言うのよ」

「かおがけわしい？」

キリトが俺の表情の見分け方をユイにレクチャーし始める。何故だろう、その姿がマママンにしか見えない。母性の象徴は……ゲフンツ！

「あいつは良妻賢母になりそうだよな……」

「……私は？」

「教育ママ」

言つた途端顔が引きつってしまったが、だってお前そういうイメージしか湧かないんだもの……。頭ごなしにあれやれこれやれと言うタイプじゃなく、すべきことはきちんとしてと諭すタイプになりそうだ。そして怒るときは笑って怒る。……女子の凍てつく視線つてき、草（食）タイプが大半の男子に効果バツグンなんだぜ……。

「ねえ、キイト？」

「キリトだよ。なに、ユイちゃん？」

「パパのママって誰なの？」

パパのママ。そのまま捉えればパパの母ちゃんということになるが、精神年齢が幼いユイは多分、自分のママ……つまりパパの嫁さんは誰なのかと訊いているつもりなのだろう。……いません。生まれてこのかた画面のなかにかいたことがありません。嫁なんていなく

ていい。妹さえいればいい。

しかしユイは納得しまい。キリトとアスナにアイコンタクトで緊急臨時作戦会議を開会することを求める。

『どう誤魔化す?』

『適当にママは遠くにいることにするとか?』

『それでママに会いたいとか痲癩起こされたらたまらんぞ』

『いつそのことママの代役を立てるとかは?』

『仮に今日ユイの身寄りが見つからなかったら俺と代役はユイの前で夫婦ごっこしなきゃいけないのか?』

『それはダメ』

『……あのね?』

私たちのどっちかをママにするとか』

『……………』

実にこの間数十秒である。人の目から考えを察するのに時間がかからないわけがない。あれでもない、これでもないと案を出し合う(ただし目で)。

「パパー」

「……………」

万事休すか……というかよくよく考えたらママはいないって言うのもいい気がしないでもない。いやだがしかしなあ……。子育てって大変なんですね、ユイは俺の子どもじゃないけども。

「ユイ、ママは、ママはな……………」

どうするどうするどうする?

キリトがアスナを代役にする

か、ママは遠くにいると嘘をつくか、……ママはいないと言うか。

「……ママはパパに愛想を尽かしていなくなったんだよ」

「うわぁ……………」

なんだろう、この虚しさ。結婚どころか誰かと付き合ったこともないのにバツイチ子持ち?　なにそれ小町が聞いたら泣いちゃうから勘弁願いたい。

「あいそ?…」

「ああ……パパのことを好きじゃなくなったからいなくなったんだ」  
「切ない……………」

いや、あくまで設定だから。じ、実際に結婚したらそんな風にならないからあ？ ……多分。 ……やっぱなりそう。

「……ん」

子供は意外に聡い。大人の機微を感じ取ることに純心だからこそ長けている。だからこれが嘘だと悟られていないという事はそれだけ俺の演技が凄かったということだ。 ……決して未来視して哀愁が漂っていたわけではない。断じて。

「……行くか」

「あ、うん……」

「そうね……」

教会に向かう途中、長い溜息が何度も重なった。

× × ×

教会と聞いて多くの人が思い浮かべるのは、聖職者が祝詞を唱える姿か死んだ仲間を復活してくれる場所だということだろう。しかし俺たちが今いる教会はもはや孤児院みたいに血の繋がりが無い児童たちが騒がしくはしゃいでいる。女三人集まれば姦しいと言うが、子供だつて負けてはいないと思う。

子供は嫌いではないが、こうもうるさいと若干辟易としてしまうのも仕方ないと思う。仕方ないよね。

最初は軍の人かと疑われたが、完全な私服姿と子持ち……なんか表現嫌だな。子連れ……まあユイを連れていたおかげで冤罪は晴れた。しかしはじまりの街に住んでいる人からも警戒されるとは、いよいよ軍の話は真実だと断定していいだろう。

「すげえな……」

「う、うん……」

ヒースクリフのような強者の圧とはまた違う勢いにボツチ×ボツチは気圧されていた。アスナはまるで幼稚園や小学校の先生かのようによびに子供達に應對していた。何あいつ、勉強できて（予想）、お嬢様（予想）で、料理できて（少なくともSAO内では）、コミュ力



高いとか何処のラノベのヒロイン？

「ハーレムもののラノベのヒロインみたい……」

「……概ね同意するわ」

やはりサブカルチャー好きな者はそう感じるんだな。この野郎、主人公はどいつだ。俺が絶対に敵役として登場してやる。

「兄ちゃんたちはあの姉ちゃんみたいに剣士なのか？」

「お、おう……」

「剣見せてくれよー」

一言言う毎に段々とにじり寄ってくるわんぱく坊主の情熱に負け、適当にストレージに入っていた武器を一通りオブジェクト化していく。無駄に溜め込んでいた剣が出るわ出るわ。……主にキリトのストレージから。

「……いや、出し過ぎじゃね？」

絶えずガシャンガシャンと金属音が鳴ってるんだけど。つーか、何でそんなストレージに剣入ってるの？ 使わないなら売れよ。

いや、わりかし邪魔だし。

「オオオオオオオッ！ カツケー！」

▶？ 剣は 少年 の 心をガツチリ掴んだ ！

日本語って、こんな訳わからん比喻ができるからすげえよな……。や、今全く関係ないけど、元私立文系志望としては語学に畏敬の念を禁じえない。……元、な。

「……こらユイ、剣は見るだけにしろよ、危ないからな」

思いつきり背丈に不釣り合いな大剣を物色し始めたユイに一言釘を刺しておく。実際圏内では武器で体が斬れることなどないのだが、何ともまあ、現実世界だったら親が発狂しそうな雰囲気である。

ふと、懐かしさを感じた。

騒がしい室内で、関心なく馬鹿にしたようにその様を俯瞰して眺めていた。自分はあるな風になりたくない、欺瞞だとそれだけを思っていた。

馴染めず、話し掛けられず、一歩が踏み出せず。

いつしか限られた状況でも満足する……いや、できるようになって

いた。

半分無意識に首元を触る。緩めたネクタイはどこにもなく、ただガラガラした生地を撫でるだけだった。

あの何でもない時間、あの箱をただ眺め、一人で飯を食い、いらなさと判断した授業中に脳を休める。そんなどうでもいいことでさえ、想起すれば懐かしい。

「……パパ、何で泣いてるの?」

「……え?」

まさかあんな下らない日常を思い起こして涙したのかと慌てて尻を拭うが、指に伝わったのは乾いている肌の感触だった。

「……泣いてないぞ」

「パパ、泣いてた」

「……だから、泣いてねえって」

頑なに俺を泣いていることにしたいユイの髪を乱雑に撫で、二の次を言えなくする。ユイは髪を荒らされたことにぐっ立腹なのかふくれっ面をしていた。

……さて、ここに来たのはユイの素性を調べるためなんだが女剣士二名は子供の相手をしている……というかスカートめくりをされないうちに必死になっていた。わんぱく坊主ども、やめとけ、鬼が降臨する。あとSAOではスカートの中が見えないから夢が碎かれるぞ。「……は……?」

その時、ありえないはずのものを見た。キリトは低階層の武器をオブリエクト化していたのに対し、俺は五十階層以上の物だけをしたのだ。それらの武具の要求筋力値はロクに戦闘もしていない子供では到底及ばないものだ。

「……だというのに。」

ユイがあんなにも軽々と剣を持っているではないか。ファイリアと共にした冒険で手に入れた、あの剣を。

こいつは……一体何なんだ?

彼がしたことはきつとどこかにつながっている。

その異端な姿を見た時、右手が勝手に動いたかのようにオブジェクト化していた剣をストレージに収納していた。

ーダメだ、これ以上は。

なぜか、そう感じた。

これ以上見たら、俺はこの少女を恐怖の視線でしか見れなくなってしまう。そんな確信が心のどこかにあった。

粒子化されて消えた剣を探してか、辺りをキョロキョロと見回す小さい子が、自分にとっての恐怖対象になる。そんなことになるのは、ユイも俺も望んじやない。

ー未知。

それに対する接し方は好奇心を以って積極的に関わっていくか、分からないことに恐怖して遠ざけていくか……。俺は後者だ。

分からないことが怖いのだ。

分からないから関わらず、分からないから遠ざけてきた。

こんな小さい子にすら恐怖の心を抱くなんて、我ながらなんて臆病な心を持っているのだろうかと思う。だか、それでも今は逃げることも遠ざけることもできない。それは、ユイを見つけて家に連れて帰った責任を放棄することだ。

ゆえに、その責任を果たすためにユイの保護者を見つけてやらねばならない。その方がお互いのためだろう。

興味を持った対象が消えたからか、小さな体を動かしてこちらへやってくる。腰に回された手は細く、力もそんなに感じない。とてもあの剣を持つには程遠い筋力値だ。

十歳程度の少女の笑顔をずっと疑うなんてことができるはずもなく、思考を放棄してユイの頭を撫でた。

× × ×

なんかかんやで女性二人は年下の対応ができるのだと思い知った。

まあ片方スカートめくりで怒ってやんちゃボーイ説教してるけど。

膝の上に座るユイの頭を撫で続けながら、大人気ないことに小さな子供相手に腕相撲で無双している黒の剣士を見ると10人抜きしたところだった。ドヤ顔すんな。筋力値違いすぎるから。

「姉ちゃん強すぎー!」

「ふふん、私はあそこのお兄ちゃんより腕相撲強いんだよ?」

向けられる視線とは真反対に首を動かして追及から逃げる。お、俺はスピード型の剣士だから……。キリトに純粋なパワーで勝てそうなのよ、マジかあの兄ちゃん弱えみたいない目で、マジで。俺が弱いんじゃないで、キリトが馬鹿力なだけだから。

現実世界で腕相撲やったらさすがに負けないと自分に言い訳していたが、女子と腕相撲したら手汗が気になって結局負けるな。こと腕相撲に関してはキリトに勝てないという結論でQEDだ。

失望したような子供たちの視線を遮るためではないのだろうか、いつの間にかサーシャさんが向かいの椅子に座っていた。

「ありがとうございます。あんなに楽しそうな笑顔をした子供たちは久しぶりに見ました」

「……礼なら俺じゃなく、あの二人に言ってやってください。俺は何もしてないんで」

実際剣を出したくらいしかしてない。

「いいえ、今のはこのゲームを攻略してくれていることも含めてです。攻略組は有名ですし、さつき出した数々の剣は明らかに上層の物でした」

「……そこそ感謝される謂れはないですよ。サーシャさんや子供たちのためにやったわけではないですから」

「……自分の命を懸けてまで戦うことがどれだけ大変で難しく、怖いかなは曲がりなりにも分かっています。私もこのゲームが始まってすぐの時はこのデスゲームをクリアしようとレベル上げてましたから」

サーシャさんはどこか申し訳なさそうな顔で「結局この子たちと一

緒にしていることを選びましたけど」と続けた。前線を退いたことの負い目が必要な戦い続ける俺を目前として出てしまったのだろうか。

凄いのはこの人の方だ。

ここにいるのは精神が成熟しきっていない子供たちが多い。そんな年齢の子供たちがデスゲームという極限環境に置かれ、どんな気持ちになったのか。恐怖に押しつぶされて精神を病んでしまったこともザラにあっただろう。

ーでも、今この子供達は笑っている。

自分のことだけを考えていては、やり通すという強い気持ちがないければ今ここでこうしていることはなかった。自分のしたことを後悔していない。きっとこの人は子供たちの笑顔を見ることで正しいことをしているのだと思えるのだ。

ーならば、俺は？

答えは、まだ見つからなかった。

× × ×

存外、人と話すことが苦手な俺でもサーシャさんと話すことは苦ではなかった。子供達と暮らすことの楽しさや嬉しさを語ってくれるので相槌をうつだけでいい。……話してねえな、これ。そんな俺に気を悪くした様子がないサーシャさんは本当に人間ができているんだろうと、まだ成人にすらなっていない未熟な精神ながらに思った。

年はそんなに変わらないのに何が違うのだろうか。育ってきた環境だろうか。……ならしやうがないね！ うちにはクズの英才教育が得意なクソ親父がいるからね！

しかし、聞いているだけというのも流石に感じが悪いと思い始めたので少し気になったことを質問してみる。

「……でも、こんなたくさんの子供達と暮らすための生活費ってどうしてるんですか？ 子供の面倒を見ながら生活費を稼ぐなんてサーシャさん一人じゃとても不可能だと思っんですけど」

「もちろん私だけじゃ無理です。でも、ここを守りたいと思ってくれ

てる年長の子達がいて、周辺のフィールドで食費とかを稼いでくれます」

もちろん絶対に安全なレベルですよとサーシャさんははにかみながら付け加えた。立派なものだと素直に感心する。サーシャさんは絶対に安全なレベルと言っているが、この世界に“絶対安全”なんて保証はない。ある日突然強力なモンスターが出現するかもしれないし、ちよつとしたミスで命を落とすかもしれない。少しでも命の危険があるのならば、好き好んでやりたくはないというのは俺だけではないはずだ。

「……へえ、すごい立派ですね。さつき会った人はモンスターと戦ったら必ず死ぬみたいなのぶりでしたけど」

「……今のはじまりの街はむしろそういう考えの人が大半だと思えます。だから私たちの収入はこの街の平均より上なんですけど……」

そこで、この会話で始めてサーシャさんの顔が翳る。サーシャさんは口を噤んだが、俺はその次に続くはずだった言葉を簡単に予想することができた。

#### 軍の税収。

きつとそれが影を落とした原因だろう。軍はきつとまだ攻略組に成り上がろうとしていて、その足がかりが資金を集めること——つまり税の徴収。

であるならば、その遠因は少なからず俺にもある。七十四層で無理やりにもあの攻略パーティーを止めていたらきつとここまでにはならなかっただろう。

もちろん自分たちと相手の力を見極められなかった軍に一番大きな責任があることに疑いはない。しかし俺が下した選択で他人に迷惑がかかったのも、また事実なのだ。

……そして俺は、それを望まない。

「サーシャさん、この装備稼ぎに出てる人にあげてください」

たまたま持っていた低階層の武器や防具。エギルの店で売ろうかと思っていたが、はした金を得るよりも明らかに必要としている人にあげる方が有用だろう。

「え、でもいいんですか？ これだってエイトさんが命を懸けて手に入れたものじゃ……」

「あれですよ、フリーマーケットと同じです。俺にはいらぬいものでも、必要としている人がいる。もしこの装備がサーシャさん達に必要なら遠慮せざるもらってください」

サーシャさんは微笑を浮かべてありがとうございますと言った。そんな綺麗な理由じゃない。自分がしたこと他人に迷惑をかけるのがぼっちの信条に反するだけだ。

だから、この子であろう少年が飛び込んできて言った内容を聞いた俺はすぐに走り始めた。

久しく会った者すら、胸中を悟る。

軍にとっての大きな転換期は二つある。

一に、アインクラッド初のクォーターボスが出現した二十五層。ここで一層から絶えずボス攻略に参加していた軍は大打撃を受け、最前線から姿を消した。

そして二つ目は七十四層でのグリーンムアイズとの戦闘。しかし二十五層以来前線を退いていた軍にボスを単独撃破する力はなく、結果としてまたもや大打撃を受けた。

二回目はきつと止めようと思えば止められただろう。しかし最低限の忠告はしたし、そこから先は自己責任だと思ったから引き止めやしなかった。

馬鹿か、俺は。

人の命は還らない。知っていたつもりだったのに分かっていたつもりだったのに。自己責任だとかそんな軽い言葉で片付けて、助けられたかもしれない命を見捨てた。

その結果がどうだ？

軍はほぼ壊滅し、回り回って全く関係ないサーシャさん達にすら間接的に迷惑をかけている。

人を殺し、どこかが壊れ、他人に迷惑をかけている。

そんな状態でなぜユイの面倒を見ようと思えたのか、どうしてキリトやアスナと関わっているのか。いつか取り返しがつかなくなりそうで、甘えてしまいそうであんな怖くなるのだ。

だから、比企谷八幡はキリトやアスナと友達になれない。

× × ×

走りながら、どんどんと自己嫌悪が増していくのを感じながらも足を動かす。自分には何が正しいのかももう分からない。間違っていないことと正しいことは違うのだから。

初めて人を殺した時も、俺は自分が間違ったことをしたとは思って



いない。だが正しいことをしたのかと問われれば、はいとは言えないだろう。そんなどうしようもない俺にまだ友達になりたいなんて言ってくるお人好したちがいる。

いい奴らだ。心の底からそう思う。だが、だからこそ関われないのだ。汚したくないのだ。こんな血にまみれた人殺しの手で触りたくないのだ。

いつか、きつとこの気持ちに決着をつけなければいけない時が来るのだろう。

俺が現場に到着した時にはすでに軍の件は片付いていた。そりや道案内してもらった二人と一人で探し回っていた俺とでは前者が速いだろう。ホツと一息つこうとした時だった。

「ーハチくんっ！」

「なんだ？ どうした？」

ボス攻略以外で聞くことはほとんどないアスナの切羽詰まった声でただごとではないのはすぐに察せた。近寄ると恐怖を目に宿したユイがゆらりとこちらに近づいて抱きついて来る。怖い、真っ暗、あたしずっとそこにいた……と、うわごとのように囁いている。

自分以上に何かに怯えている少女を突き放すなんてできるはずもなく、ユイが気を失うまで背中を撫で続けた。

× × ×

幸いにしてユイは数分で目を覚ましたが、どうにもこれ以上情報収集する気にもなれなかったので解散しようとするサーシャさんが是非お礼をと言うのでキリトとアスナにも説得されて渋々泊まらせてもらうことにした。悪いな、マイホーム……今日は帰れそうにねえや。

「本当にありがとうございます。なんとお礼を言ったらいいのかわ……」

年下である俺たちに向けて頭を下げるサーシャさんに対して向け

る表情が苦笑い以外に思いつかなかった。本当に俺は何もしていないのだから。ただ一人で街中を走り回っていただけである。

「サーシャさん、頭を下げないでください。私たちは自分の意思で助けようと思っただけなんですから」

多分本気でなんでもないかのように言っている。それが故にそれがどれだけの人が当たり前にできないことなのか分からないのだろう。なんの見返りも報酬もなく、善行を成せるやつなんてそうそういやしないのだ。

だからこそこいつらはいいやつであり、つくづく俺と一緒にいるべきではない人種なのだと思います。我ながらめんどくさいやつだ。

答えが見つからず、ヒントもない。今更遅いかもしれないが、顧問としてあるいは教師として生徒をいつも見守ってきた平塚先生のごさを今初めて少し理解できた気がする。

しかし俺はまだそこまで人間できていないのだろう。どうにも二人を見るのが辛くなってきて、ユイを任せて街に出た。

目的のない散策は嫌いではない。千葉をぶらついて美味いラーメン屋を探したり、ふと立ち寄った本屋で新刊を買ったりなど意図しない楽しみがあるからだ……が、はじまりの街は隅から隅までとは言わないまでも八、九割は知り尽くしている。正直回っていても楽しくはなかった。

道行く人々の足取りは重く、商業区ですら活気がない。だからだろう、雪ノ下によく似た澄んだ声を聞き逃さなかった。いや、聞き逃せなかった。

「——エイト?」

「……おお」

声から察してはいたが、久々に会う人物について気の抜けた返事をしてしまう。キョドツたりどもらなかつた分、俺のコミュ力も上がっているのではないのだろうか。ないですか? ないですね。

「……久しぶり。数ヶ月振り、かな？」

「多分そんなくらいだな」

「またもや沈黙。そも俺とサチはキリト経由で知り合ったのだ。人間関係パイプがない相手と喋りづらいのも当然といえは当然である。友達の友達は他人と同じ理屈だ。みんな友達とか今時小学生でも言わないだろう。」

「で、なんか用か？」

「用はないけど……今日はキリトと一緒にじゃないの？」

「別にいつも一緒にいるわけじゃ……」

「ない、と言おうとしたがついさっきまで一緒にいたことを思い出して言い切れなくなり、非常に歯切れが悪くなった。」

「さっきも言った通り、用はないけど……今日のエイトは昔のキリトみたいな顔してるから……」

不意を突かれた言動に一瞬息が止まる。そんなことはないかと否定したかった。だが、どうしようもなく俺自身がそれを自覚していて、徐々に顔を合わせたサチにすら見破られてしまうほどに表に出ているのかと、自分の弱さがにじみ出ていたことを恥ずかしく思う。こちらを心配しているような眼が、どうしようもなく痛かった。

「……まあ、そんな日が俺にもあるんだよ」

「エイト」

茶化して誤魔化そうとしたことを察したか、強い語調で会話の流れを変える。正直に言ってしまうばこの場を一刻でも早く去りたかった。しかし、その濡れた瞳と泣いているような声を聞いただけで金縛りにあつたように体が動かなくなる。

そして、サチは言うのだ。

「ちよつと話そうよ」

ようやく彼の選択は意味を持つ。

サチに連れられた場所は、一層攻略会議をした広場だった。もう二年前の話なのに、懐かしさを感じない。前までは訪れる度になんらかの感慨をもたらしたはずなのだが。

「……………ここ、エイトとキリトが初めて攻略会議に出た場所なんじゃない？」

「……………ああ、そうだが」

だからなんだ。

「二層では、とある武器屋さんのいざこざにあつたんだよね？」

「そんなこともあつたな」

それがなんだ。

「三層では…」

「なあ、なんなんだ？ さつきから」

どこにもそんな要素はない。だと言うのに、どうしようもないほどサチの言葉にイライラしている自分がいることを認めざるを得なかった。どうしようもなく。

「……………なんでもないよ。ただ、エイトは自分が思ってるよりすごい人間なんだよ」

「……………すごい？ ふぎけんな。一層や二層でのことを知ってんなら、もっと最近のことも知ってんだろ？ 例えば…」

「ラフコフのこと？」

正直、怒りを覚えるより先に呆れの息が漏れ出た。一周回って冷静になり、サチってこんなやつだっただろうかと昔のサチを少し思い出そうと頭を働かせる。

「知ってるならよくそんなこと言えたな？ なんだ、サイコパスか？」  
「あはは、違うよ。私は……………ううん、キリトとアスナさんと私と、エイトの見方は違うだけ。だから……………今、キリトやアスナさんがエイトをどんな風に思っているかちよつとだけわかるんだ」

どんなことがわかってているんだと意地悪く問おうとしたが、少なくとも人殺しの俺なんかよりサチのほうがよっぽど理解できているの

かもしれないと思う自分もいた。今までの流れから、俺から芳しくな  
い反応が来るのだろうと予想していたサチは少し間を開けて続けた。  
気に障ったらごめんなさいと前置きをして。

「……エイトはさ、人を殺したんだよね？」

質問というよりかは確認に近い語感で訊いてくる。どうあがいて  
も誤魔化しようのない事実には、掠れた声で肯定するしかなかった。

「……私にはエイトの気持ちはわからないよ、なんで人を殺せたのか  
もどんな気持ちでその決断をしたのかも。……でも、わかることもあ  
るんだ。エイトは意味なく人を殺せるような人じゃないって」

俺は何も言えなかった。俺にだってわからない、なぜ自分が人を殺  
せるようになってしまったのか。わかるのはあそこで何もしなければ、  
今ここに俺はいないということだけだ。

「エイトは優しいんだよ。ロクに関わったこともない私の頼みで、私  
のメッセージが入った記録結晶をキリトにわざわざ届けてくれたり  
してさ。だから、そんな優しいエイトが人殺しなんて怖いことをした  
のは、そうせざるをえない状況だったんでしよう？」

「それでも人殺しは人殺しだ」

サチではなく、自分を戒めるために言葉を被せた。どうしようもな  
いことだったのかも知れない。まちがってはいなかったかもしれな  
い。しかしそれは正しくはないのだ。

だから、次に言われたことに頭を殴られたかのような衝撃を覚え  
た。

「でも、それで救われた人たちがいる」

弱々しいイメージだったサチとは微塵も重ならない凜とした声で、  
断言するような強い口調で、彼女はそう言い切った。まるで正しさを  
真つ直ぐに持ち続ける彼女のように。

「エイトは確かに人を殺したのかも知れないよ。だけど、人の命を奪  
うのと同時に人の命を救ってるんだよ。キリトや、アスナさんや、み  
んなの命を。エイトがそんなに苦しんでるのは、命は軽いものじゃな  
いってわかってるからだよね？ そうだよ、みんな死にたくないよ、  
生きていたいよ！死ぬのは怖いよ！……でも、人を殺すのだって

同じくらい怖いことなんだよね？　だからエイトはそんな苦しそうにしてるんでしょ？」

そうだ、怖い。怖かった。自分の振るった剣が生きている人間の命を刈り取ることが。それでも、生きるためにはやらなくてはならなかった。それがどうしても言い訳がましく聞こえて、自分をよりキツく縛る

「……私はその場にいなかったし、偉そうに言えないけど、死にそうになるのは死にたくなるほど怖いことはよくわかってる。だから、人を殺したことを気に病まないでなんて言えないけど……気づいてほしい。エイトはみんなの命を守ったんだって。きつとキリトやアスナさんもそう思ってると思う。友達が苦しんでる姿を見るのは苦しいんだよ」

見れば、サチは涙を零していた。自分の頬を触れば、温かいものが流れていた。ずっと考えていた、俺のしたことは正しかったのだろうかという自問。答えはやはり正しくなかったのだろう。しかし問いに対する別解に、どうしようもない俺の行動が何か意味があったことなのだ教えてくれた。自分をただ責め続ける者の言葉ではなく、自分をただ慰める者の言葉でもない。

俺という人間を断片的にしか知らない者に言われた言葉。前までの自分ならロクに理解をしていない人間に言われたことなんて気持ち悪くて仕方がなかっただろう。しかし、今はただ嬉しかった。

「エイトってどうでもいいことには正直で、大事なことには嘘つきだよね」

サチは、寂しそうにそう呟いた。より一層の涙を流して。

ようやく、彼は自分の役割を見つける。

思えば、嬉し涙を最後に流したのはいつだっただろうか。

物心がついた頃から振り返って、自分は可愛い子供ではなかったと思う。あまり笑わず、子供らしく元気に外で遊ぶこともない。可愛くないから可愛がられない。

両親は淡泊な態度を取っているが、それでも十分に愛されていることはわかるのだ。それは妹の小町が生まれて比較対象が出来たから、というのが大きいだろう。

兄妹というのは不思議なもので、俺が大きくなり閉鎖的になるのに対してバランスを保つかのように人見知りだった妹は明るく、社交的になっていった。

明るい子、暗い子。

両親の愛情の天秤がどちらに傾いたかなんて言うまでもない。なにせ当の本人である俺でさえ目に入れても痛くないくらい可愛がっていたのだから。

学校でやられた小さな嫌がらせで心に傷を負い、かさぶたができたら心を理性で塗り固め鎧とする。俺の生き方はずっとそうだった。どうしようもないことがあると知っている、正しい方法じゃ出来ないことがあると知っている、なにより自分が弱い人間なんてことは一番知っていた。

例え愛情が人より向けられていないことが分かろうと、悪感情をこちらに向けていることが分かろうと理性の鎧は砕けることはなかった。

しかし。

全てが終わり、全てが始まったあの日。理性の鎧は【死の恐怖】には勝てなかった。デスゲームが始まってすぐの頃、俺は久しぶりに涙を流した。その涙で砕けた鎧を造り直すかのように。

死に近い場所は本質が出やすい。だから俺はクズみたいな人間ばかりがいるのだと思っていた。だが、そこで出会ったやつらはどうしようもないお人好しもいて、命を預けてくれたり、友達になりたいと

言ってくれたり、今も人を殺したこんなどうしようもない俺を見離さず、許されない行動に意味を与えてくれている。

世界には俺みたいなどうしようもないやつがたくさんいる。なら、こんなバカみたいにお人好しなやつらが少しくらい報われてもいいじゃないか。

「……なあ、サチ」

彼女は潤んだ瞳で俺を見つめ、不思議そうな顔を向けてくる。関わりもほとんどない少女にこれを言うのは気恥ずかしさがあるが、今はそれよりもこの決意を声に出して伝えなければならぬという気持ちで勝った。

「俺は……」

この世界で彼女たちが報われることとは。その問いに関する解は簡単だ。2年近くも前からずっと変わっていない。

今回は依頼じゃない。魚の釣り方を教えるのではなく、比企谷八幡が自分の意思で魚を獲ってきて彼女たちに与えるのだ。

「俺は、お前やキリトやアスナ達を……生きて現実世界に戻してみせる。……絶対に」

言葉というものは曖昧で、曲解され、誤解され、結局相手に通じないものだ。だがそれでも人は理解してもらおう、正しく理解させようと言を弄し、頭を働かせる。しかし今の俺はそんなことを考えもせず、ただ一言の曖昧な言葉を使うのだ。

……約束だ、と。

彼女はまた頬に光を迸らせた。

× × ×

結構長く外にいたためか二人に心配されてしまった。申し訳ない。キリトとアスナは何かを察したのだろうか、俺の顔を見ると柔らかな笑みを浮かべて話しかけてくる。

「ハチくん、おかえり。随分長かったね。迷子？」



「この歳で子供扱いか。つーかマップあるからよっぽど入り組んだ街じゃないと迷子になりようがねーよ」

だから肩をびくつとさせたの何ですかキリトさん？ え、まさか十代も後半という方が迷子になりかけたんですか？ ねえねえ？

「につ……ニマニマしないぞー！」

もうつと頬を膨らませる黒の剣士さん。なんだこれ、あざとい仕事なのにあざといと感じないんだけど？ キリトに最初から備わってるオートスキルか何か？

「しかし意外だな、キリトはMMORPGに慣れてると思ってたのに迷うなんて。……アスナと違って」

「ハチ君それどういう意味？ ……でも確かにちよつと意外かも」

どういう意味もクソもないでしょ。初期の頃にパーティーシステムすらろくに理解してなかったことまだ覚えてるから。

「た、確かにMMORPG自体は結構やってたけど、いろんなお店を冷やかしたりぶらぶらしてるといつの間にか知らないところにいることが……」

ああ……と納得の息がアスナと被る。確かに一緒に行動している時もあったちよつちとフラフラ店に立ち寄ることはままあったし、ましてや一人の時なんか気兼ねなく徘徊してそうだ。あんな辺鄙なここにあったラーメン屋とか知ってたくらいだし、キリトにとつてのウィンドウショッピングなのかもしれない。

「確かにそうやって目的もなくぶらぶらできるのは向こうと一緒にだもんね」

「むしろ私はこつちの方が外出してるよ」

明るく、しかしどこか寂しげに二人は笑った。弱さを隠し、思いを抑え、そうして二人は前に進んで攻略を進めて来た。そうして改めて実感するのだ。どんなに凄まじい剣技や技術を持っていようと二人は弱いただの人間なのだ。

だから俺は強くならなくてはいけない。自分の罪と向き合い、このゲームを終わらせるための最後の罪を重ねるのだ。それはこの世界の神を殺すこと。それだけは誰にも譲れない、俺だけの、そしてこの

世界での最後の仕事になるだろうと何故か確信していた。

× × ×

少しだけ晴れた俺の心を再び暗くするためかと勘違いするかの夕イミングで事件は起きた。事件を起こしたのはまたもや軍である。

「どうか、シンカーを助けていただきたい！」

土下座せんとした勢いで頭を下げる軍の女性——名をユリエールというらしい——に困ったような視線を向ける。事の発端はよくある話で、要は組織の覇権を巡った内部争いだそうだ。そしてキバオウが目障りになったシンカーを屠るために地下迷宮に置き去りにした。

「その迷宮はとも私では攻略できる難易度ではなく、転移結晶も使えなくて……しかし、軍の兵士を軽くあしらう程の実力を持ったお二人ならきつと攻略できると思いつ……！」

ついには涙ぐんでしまい、どうしたものかと視線を彷徨わせる二人。お人好しなこいつらのことだ、今の話が本当だという確証があったらすぐに助けに行っただろうが、現実問題それはない。自分の命も懸かるかもしれないことにやすやすとハイとは言えないだろう。

「……別にお前らがどうしようとお前らの勝手だが……、ちゃんと考えて決めろよ。この人が真実を言ってるとも限らないし、仮に全部本当だとして迷宮行く以上は命の保証はないからな」

一応釘を刺しておく。しかしどうせ返答は分かっていたし、事実そう答えたのだから苦笑の一つもしてしまふ。フヒツ。

「確かにそうかもしれない……けど、本当の場合で私たちが行かなかったらシンカーさんは死んじゃうから……私は行くよ。助けられる保証もないけど、やらないで後悔するよりやって後悔したい」

即答したことによるため息よりも先に全く予想通りの返答が返ったことの笑みが来た。

はつきり言っただけ馬鹿だと思ふ。しかし馬鹿だからこそきつとこいつなどこまでも純粹で真っ直ぐ居られるのだろう。危機への警戒は俺が人一倍してやればいいだけの話だ。

「……分かった。救助が目的なら出来るだけ早く行った方がいいだろう。早く準備しようぜ」

「え？ エイトも来てくれるの？」

「ん……、ああ、まあな……」

跳びはねるほど喜んでいるキリトには悪いが、どこまで力になれるか分からない。必要のない危険に巻き込まれるかもしれない。だがそれでこいつらが生きていられるのなら、それは安いものなんだろう。

先を生きていくには今を生きていかないといけない。ならば、このデスゲームを終わらせよう。なんだ、今までと目標は変わらないじゃないか。

そして、こいつらを現実に帰すのだ。

二度目の決意は声には出さず、胸に閉まった。

「……ええい、気安く異性に抱きつくくんじゃありません！」

俺こと比企谷八幡、20歳。未だ年齢〓彼女いない歴である……。

火花は散り、彼も塵となる。

攻略組にとって迷宮攻略とは必須スキルである。

上の階層に行くためにはボスを倒す必要があり、ボスにたどり着くためには迷宮区を攻略しなければならぬ。つまり、ゲームクリアのために最優先で身につけなければいけない技術の一つと言っても過言ではない。

況してや、情報も何もない状態で迷宮に挑むには決死の覚悟が必要なのだが……。

「さすがキリ無双ゲー」

「どういう意味？」

さすがキリト無双ゲームの略。と胸中でだけ返答し、哀れ無双ゲームの雑魚キャラかのように斬り飛ばされるカエル型のモンスターに合掌する。

そもそもが攻略組トップクラスの戦闘センスを持ち、レベリング厨でもあるキリトが今更高々五十層か六十層くらいの敵に遅れを取るはずもなかった。いいぞもつとやれ。その調子で俺の仕事を無くしてくれ。

「終わったよー。次はエイトが戦う番だからね！」

「ええ……いいじゃん次もお前で。お前は戦うのが好き、俺は休むのが好き。win-winじゃん」

「人をバーサーカーみたいに言うエイトは休ませてあげません！」

いいじゃんバーサーカー。クソ強い上にロリと不思議な絆を築けるんだよ？ バーサーカーは世界で一番強いんだから！

「ふふ、仲が良いんですね」

「はは……否定はしません」

アスナさん？ 何その自分達の子供が遊んでるのを見る親みたいな眼差し。俺、君より年上よ？ ……そういえばいたなあ、年が上つただけでクツソ威張ってくるバイトの先輩とか。体育会系、何でそんな年功序列制なん？

「はい、投擲投擲投擲つと」

「投げナイフでキルするFPSプレイヤーみたいなことしてる……」

確かに似たようなもんかもしれないが、あそこまでガチ勢じゃないぞ。そもそもシステムに規定されたソードスキルはシステムによって補助されるのだから、エイムをそこまで正確にやる必要はないのだ。

「ほい、次アスナな？」

「はい」

これでしばらくは休みである。装備の確認を一応してからシステムウインドウを閉じ、閃光様の闘いぶりを見るが、やはりというか無双状態であった。戦国ASUNAですねこれは。

「お、お強いんですねみなさん……」

「まあレベリングが趣味みたいなやつらばかりですからね……」

バトルジャンキーキリトに攻略の鬼アスナ。攻略組でもトツプク拉斯のレベルを持つメンバーなのだ。況してや二人揃っている状況下でボスクラスの敵以外に遅れを取るの考えにくい。

——という考えがフラグであったのだろう。

目の前に立ちはだかるのは骸骨の体を覆う黒いローブ。手に持つは一目見ればわかる鋭い切れ味を持つであろうサイス。そして現時点で最高峰の索敵スキルを持つキリトですら識別できないレベル……強さ、恐怖共に見た目に劣らない死神がそこにいた。

「冗談じゃねえぞ……」

文字通り運命を刈り取る鎌をどうにか躲すが、とても反撃する余裕などない。これがレイドでの戦いならそれでも良いかもしれないが、今はそこまでの戦力はない。ましてや相手は俺たちより遥かに強い。いつまでも避けられるとはこの一合だけでとても思えなかった。

だから、この言葉が出るのは俺にとって当たり前だった。

「逃げろ、お前ら」

「なっ……」

怒った顔をしているのであろうことは容易に想像出来たが、ここは引けない盤面だ。だが誰かがやらなければ全員死ぬ。それは攻略組に属する俺たちはインクラッドの誰よりも知っている。

「まあ聞け。こいつを倒せる見込みがあるなら三人で戦うのがベストなのは違いない」

「ならー！」

「だけどお前らもわかってんだろ？ そんな可能性は一厘たりともない。なら逃げるしかないよな？ その為には足止めがいる……それに適任なのが俺つつーだけの話なんだよ」

ボス戦でヒースクリフとともに攻撃を捌き続けて来たのはキリトでもアスナでもなく、俺だ。火力でキリトに敵わなくとも、正確さでアスナに敵わなくともあいつらだつて人間だ、俺が勝る部分だつてある。

「……理屈としてはわかる、けど……また、私達を置いてくの？」

「まあ待て。これまでみたいなの、ああいうのは……やめだ。その上で、三人が生き残る可能性が高い方法がこれなんだよ」

ヒースクリフを除けばという枕詞は付くが、攻略組で一番タゲを取って来たのは俺だ。格上だからこそ、攻撃を捌くのは一人でやりた。そして今ユイ達がいる安全地帯セーフティエリアに逃げ込むための敏捷性。誰がどう言おうと、適任は俺だ。

「……うん、わかった。信じるよ」

「おう、まあ任せとけ。——よし、行け！」

合図と同時にアインクラッド最高峰の敏捷力を活かし、一目散に部屋へと駆けて行く。それを阻止せんと死神が鎌を振るう予備動作をするが、ヴォーパル・ストライクを隙だらけの体に放ち意識をこちらに向けさせる。

俺の攻撃は軽い。だから硬直時間が長いというリスクがあるにしても高火力なヴォーパル・ストライククラスのソードスキルじゃないとタゲが取れないと思っていたが……予想は間違っていないかった。浮かぶHPバーはミリ単位すら動いていないが、今回は勝つのが目的じゃない。

鎌のソードスキルなんて見たことも聞いたこともないが、両手武器というのは総じて一撃一撃の隙が大きいと相場は決まっている。次の一撃を捌けなければ……俺の仮想体アバターは二つに切り裂かれ、脳が焼き

切れて死ぬだろう。

……死ねない。

今までは死にたくないから生きてきた。死は怖く、忌避すべきものだと思い、生きていたいという理由はこの二十年近くの人生で見つからなかった。けれど、漸く見つけたのだ。

バカみたいなお人好し。自分の命が懸かっているのに、人殺しをした俺なんかを見放さず、命を預けてくれた善人<sup>バカ</sup>がこの世界にはたくさんいた。そんなことが出来る人間が、果たして何人いようか。

だから、そんなバカがせめて損をすることがないよう戦うのだ。

「又ウツ！」

剣でマトモに受け止めるだけで俺には致命傷になり得る。回避なんて言えないくらいに無様に転がり、どうにかこのボスの攻撃をいならずが、離脱するだけの隙がない。意識を他に割いたら死へとまっしぐらなのが理解できてしまう。

「クツソ……！」

どうしても躲せない時に強いられるソードスキル。しかも圧倒的な能力値差をカバー出来るだけの上位高威力の技相応の硬直時間が俺を後手に回らせて行く。まるで崖側にじわじわと追い詰められているかのように死に少しずつ近づいていた。

「エイト……！」

キリトの心配そうな声が剣戟の合間に聞こえる。パーティーを組んでいるから、俺のHPバーが段々と削られているのが見えているのだろう。打開策はないか、思考を巡らせる。

……リズベット、すまん！

剣を逆手に持ち替え切っ先をあの死神へと向け、SAOで片手剣スキルと同じくらいお世話になったスキルを発動する。

「行けッ！」

投擲スキルの一つ、ポイント・シュート。筋力と敏捷力補正で威力が上がるのが特徴の上位スキルだ。それに加えてもう一つ、このスキルで放たれた武器が敵の弱点に当たると僅かな時間ではあるが相手を硬直させることが出来る。

とはいえ、投擲武器じゃ威力が足りない。だが幸い俺には反逆者な  
んて御大層な名前を持つ魔剣クラスの化け物剣がある。

弱点に当たるとかなんて確証はない。トレイターですら威力が足り  
なくて怯ませることが出来ないかもしれない。もし一つでも条件を  
満たせなければ俺の命は間違いなく刈り取られるだろう。

——だが俺は賭けに勝った。

後ろから死神の苦しげな声が迷宮に響いた。確かに怯んでいるの  
かまでは声では判断できなかったが、最高速を緩めないために振り返  
らずに走った。

前に見える部屋の明かりがどんどん近づいていき、キリト達の表情  
が段々とハッキリ見えてきた。それは、安堵の表情から、絶望の表情  
へと変わった。

「なん、で……う？」

確かに隙を作り出したはずの死神が、黒い霧から姿を現わす。思わ  
ず先程まで死神がいた場所を見てしまう。そこには闇が広がるだけ  
だった。……いや、よく見れば死神が現れたところにあるのと同じ黒  
い霧がある。

「空間転移……!?!」

じつにシンプルで強力な能力に思い至り、心中で呪詛を吐き捨て  
た。なんてクソゲー、今まで鍛え上げてきた敏捷力を全否定された気  
分だ。

そんな俺を嘲笑うかのように、死神はゆつくりと鎌を持ち上げた。  
まるで咎人を裁く処刑人かのように、ゆつくり、ゆつくりと。

——あ、こりや死んだな。

死神の動きが緩慢に見えるのに体は動いてくれない。或いは、死を  
間近にした人間の感覚が鋭敏化したことによる引き延ばしか何かか。  
今となつては詮無きことだ。

命を刈り取る形をした鎌は容赦なく振るわれ、黒鉄宮地下の迷宮が  
紅いエフェクトで彩られた。



やはり彼の嫌な予感によく当たる。

時間が引き延ばされたかのようにゆっくりと動いていた鎌は、俺が死を認識した途端に元の速さに戻った。愛用していた片手剣はこいつに投げてしまった。躲すどころか防ぐ手段もない。

——死んだ。

この二年で培われた予測と勘が満場一致でそう告げてくる。また、七十四層のように暗闇に引きずり込まれ、死へと向かう億劫さより自分で立てた誓いを果たせないことへの憤慨が勝る。

かくして、紅いライトエフェクトが辺りを照らす。

キリトやアスナ、本人である俺。果ては鎌を振るった死神ですら俺のダメージエフェクトによるものだと思っただろう。だが、現実とは違った。

鉄と鉄とがぶつかり合う際に生じる火花なんて生易しいものではない。文字通りに燃えている剣が、命を刈る必殺の鎌を受け止めていた。

「は……？」

誰も状況を理解することができない。必殺の一撃で俺が死ぬことなく助かったというだけならばまだありえる話だったかもしれないが、よりにもよって謎の炎の剣で鎌を受け止め、俺を救ったのは間違いない。この場で一番幼く、戦う力を持たないはずのユイだったのだから。

あれだけの暴威をふるっていた死神が、ただの少女の見た目をしたユイを恐れるような目で見た気がした。そして、さらに驚くべきことが起きる。

ユイが飛んだのだ。跳んだ、ではない。飛翔……とまでは言わないが、明らかに浮遊をしている。そのまま焰剣は振るわれ、炎に包まれた死神が苦悶の断末魔をあげてあっさりと消滅する。

ステータスも見れない、プレイヤーとしてあるべきシステムの反応もない。得体の知れない存在であるとは思っていたが、見た目相応の感情を持つユイが九十層相当のボスを屠るなんて誰が想像できた

だろうか。

チリも残すことなく消えた死神を見届けてからくるとこちらに振り向く。その時に俺はどんな顔をしていただろうか。こちらを見たユイの悲しげな顔を見る限り、きっと恐れるような顔をしていたのだと思う。

こちらに近寄ることを遠慮しているような様子をしたユイに良心の呵責を覚え、渋々ではあるが俺から近づいていく。ユイの正体がなのであるにせよ、助けてくれたのに変わりはない以上敵意はない……と思いたい。

「……ありがとうな、助けてくれて」

「……へ？」

年相応の呆けた表情に安心感を覚える。俺が落とした剣をしまっている最中も同じ表情でこちらを見つめているとは相当に意外だったのだろうか。

警戒しようとしなかりと、俺たちが手も足も出なかったあの死神をあつさり屠った時点でユイがその気になれば俺たちをあつさり殺せるだろう。ならば下手に敵視して不感を買わない方がいい。

「あ、あの。私なんなのとか、気にならないんですか……？」

「気にはなる。けど言いたくないことを無理矢理言わせてまで聞きたいとも思わないだよ」

確かにユイに関して知りたいことは数多くある。だがこんな異常事態で、踏み込まれたくない事を抱えていない奴の方が珍しい。それを気になるという理由だけでトラウマを抉るようなことをしていいはずがない。

「いえ、エイトさんには知る権利があります。……時間が、ないんです」

口調と雰囲気の変化。つい数十分前まであどけない表情をしていた少女に大人の精神が入り込んだかのような……いや、もっと言うならまるで別人が乗り憑ったかのようなのだ。

「……話したいなら話せばいい。話したくないなら話さなければいい。森で倒れていたお前を保護した時点である程度の面倒ごとくら

い覚悟してるから、俺を気遣う必要はないぞ」

俺としては気遣いのつもりで言ったことだが、ユイは明らかに苦しげに顔を歪めてスカート裾を小さな手でギュツと握りしめた。

「……何がしたいとかしたくないとか気遣いとかなんて感情、私にはないんです。私は……私は、メンタルヘルス・カウンセリングプログラム 試作1号 M H C P 001、コードネーム「ユイ」……人間じゃ、ないんです」

そんなバカなと思う自分と、それなら筋が通ると納得する自分がいた。しかし真贋なんていくら考えても分からない以上、ユイが言うことは事実なのだ。と前者の自分の思考が薄れていく。

「そうか……」

「私は作られた存在なんです。笑うのも泣くのもプログラムに規定された反応の一つでしかない。この涙も、プログラムが私に流させているんです」

笑いながら泣いて、ユイはそう言った。自分は創作物で、自分の意思で感情を表せることはないのだ。それらは全て、プログラミングされたものなのだ。

人の感情を持った機械を人として扱うべきか否か。その議論は十年近く前からされてきたが、明確な答えは出ていない。どこかの偉い学者が散々議論しても答えが見つからなかったことの答えなんて、俺がわかるはずもないのだ。だから、俺は俺の思ったことしか言えない。

「……正直、俺はお前がプログラミングされたシステムだと知って納得した点が多いし、安心した」

「ッ！……はい」

「お前は何かかもが謎だったからな。何者かもわからない未知が俺は一番怖い。だから、お前が何者でどういう存在なのか知るだけで俺は安心した」

この少女に、俺はどんな言葉を送れるだろうか？ どんな言葉を送りたいのだろうか？ 考える必要などない。思ったことはきつと口から勝手に出てくれる。

「……なあユイ。お前は人間の定義を知ってるか？ 人間ってのは、

直立二足歩行ができる動物のことを言うらしいぜ」

こてんと首を傾げるユイ。これもまたプログラミングされた反応の一つなのだろうか。だが、茅場が凄まじいのか俺が勝手に思っているだけなのか、その行動が誰かに規定されたものだとはい底感じなかった。

「世界には戦争の爪痕として残った地雷を踏んで足を失った人がいる。何らかの事故で下半身不随になり、満足に動かせなくなった人や、先天的な障害で動かせない人もいるだろう。理由は数あれ、その人たちは一様に直立二足歩行ができない人達だ」

普段こんなベラベラ語ることがないせいか、はたまた別の要因か……。精神的な気分であろうが、汗がベタついてきたような気がして不快だ。

「じゃあ、その人たちには人権はなく、人として扱われないかと言えばそうでもない。例え直立二足歩行ができなろうと、一人の人間として扱われる。……人間の定義なんて曖昧なものだ。自分はプログラミングされた存在で人間じゃないから偽物だなんて考えは、やめろ」

「でも私は、作られた存在で……」

「俺だって親父と母ちゃんから作られた存在だぞ？　誰からも生み出されることなく誕生した人間なんていないだろ」

「私の言葉だって、そう言うように打ち込まれただけなんですよ？」

「お前は悲しい時には悲しい、嬉しい時には嬉しいとしか言えないわけじゃないだろ？　感情を表すのは言葉だけじゃない。人間だって悲しい時には泣くし、嬉しい時は笑う。お前との違いはないぞ？」

「……そんなの全部詭弁です」

「ああ、詭弁かもな。でも間違いでもない」

俺は自分で正解を言っているなんて思うつもりは微塵もない。だが、自分が間違ったことを言っているつもりもないのだ。答えがない問題に解を出そうとしても無意味だ。そこに正解はなく、間違いもない。ならば自分がどう思うか、それを他人にどう思わせるかである。

数は力だ。大衆が共通で認識していることは正しいか正しくないかは別として、それが普遍となり常識となる。そしてその常識に当て

はまらない存在を例外と名付け、さもその括りに含まないかのよう  
扱うのだ。

「……現実世界での暮らしは誰かと何かをすることが良いこととさ  
れ、一人でいることは悪とまではされなくともぼつちや陰キャだとか  
言われて馬鹿にされることも多い。だが俺はぼつちであることに誇  
りすら持つてる。他のやつがなんと言おうが、自分がどうなのか、ど  
うありたいのかを決めんのは自分だけだ。茅場じゃない、カーディナ  
ルでもない。お前が、ユイがどうありたいのか……必要なのはそれだ  
けだろ」

「……もう一つ、告白させてください。私、エイトさんをずっと見てた  
んです。なぜだか貴方と関わった人は笑うんです。辛いことがあつ  
ても、立ち直つて前を向いて、また歩き出していくんです。キリトさ  
んやアスナさんが辛い時、立ち直つた時にはいつも貴方がいました」  
そうなのだろうか。俺は彼女たちにそんなことをした覚えはない。  
ただ、俺が嫌だった。純粹でお人好しな彼女たちが傷ついたままでい  
ることが、笑えなくなることが嫌だった。だからこそ、人殺しの俺が  
関わるべきではないと思つていたというのに。

「でもそれは、メンタルカウンセリングするためだけに作られたプロ  
グラムであるはずの私には到底思いつきませんでした。キリトさん  
やアスナさんだけじゃない。他の人たちの死への恐怖や不安を無く  
すことはできなかった……。私は解消できなかった分の感情を蓄積  
して、エラーを起こし……。貴方に助けを求めてしまいました。キリト  
さんやアスナさんのように助けてもらえないかと、自分が助けるはず  
のプログラムでありながら、浅ましくも」

告白を始めてからユイはずっと泣いていた。出会ったばかりのユ  
イが無感情だった理由が分かつてしまう。それは、人と同じで害意か  
ら自分の意識を守るため……。凶らずも、ユイの心がどこか壊れてし  
まっているのではという俺の予想は当たってしまった。

「ありがとうございます、エイトさん。分かったんです。人の心は相  
互に干渉し合い、動かされるもの……。初めからモニター越しでカウ  
ンセリングしようとしていた私に理解できるものじゃなかった。で

も、貴方が教えてくれました。ありがとうございます」

なぜだろうか。笑っているはずのユイの顔が悲しそうに見える。嬉しそうに言っているはずの言葉が、別れのものに聞こえてしまう。

「迷惑をいっぱいかけてしまっすすみません。でも安心してください。私はきつと、もうすぐ消えます」

ああ、やっぱり俺の嫌な予感は的中してしまうのかとつくづく思う。